

大師山

河內長寧

河内長野 大師山 正誤表

頁	行(個所)	誤	正
110	挿図説明	焼74図	第74図
143	挿図説明	第104図	第103図
300	2	RELAINS	REMAINS
300	9	excavated	excavated
300	10	remais	remains
300	13	attention	attention
300	20	lafer	later
300	27	suc has	such as
301	1	obtained	be obtained
301	10	notable	notable
302	32	whch	which
302	36	dbefore	before
303	32	carthen	earthen
305	11	charaters	characters
305	13	remaing	remaining
305	17	their characters might	they might simply
305	29	froma mong	from among
307	7	were scattered	were found scattered
図版第18		出土石製器	出土石製品
図版第30	写真説明(下)	完壊された	完掘された

河内長野
大師山

——大師山古墳・大師山遺跡発掘調査報告——



昭和52年3月

関西大学文学部考古学研究 第5冊

関 西 大 学

はじめに

昭和5年12月、大師堂建立のための整地作業によって、鑑鏡1面をはじめ銀形石・車輪石・石鉗・紡錘車・管玉など多数の遺物が出土し、わが国における古墳研究上の重要な資料を展示了した大阪府河内長野市三日市町大師山古墳が、日本経済の高度成長の影響による宅地造成工事によって消滅する運命にあった。すでに大師山古墳周辺において事前調査が行われていたが、なお検討を要する諸問題があった。

当時、大学は激しい学園競争の最中にあった。しかし、関西大学文学部考古学研究室の学生諸君は、大師山古墳の重要性に鑑み、現地に設けられた造成工事現場の作業場に泊り、昼夜、発掘調査とその検討・整理に専念した。

その結果、大師山古墳のみならず、その周辺一帯に弥生時代の高地性遺跡などを検出し、さらに総力を結集して、その発掘調査に取り組むと共に、遺跡保存のために尽力した。しかし当時の政治的・社会的動向と、すでに造成工事が着工されている情況にあって、これと対決するにはあまりにも微力であった。

かくして、調査には可能な限りの最善の努力を払ったものの、大師山古墳とその弥生式遺跡は遂に破壊消滅し、調査の記録のみを残さねばならなくなってしまった。

しかしながら、今回の調査によって、従来、円墳として取扱われていた大師山古墳が前方後円墳であったこと、また、かっての報告書に記載されていた以外に新しく遺物の検出があり、さらに弥生時代の高地性遺跡の新資料と知見を得たこと、加えて発掘調査によって検出した焼土壙の機能について大学内の一隅に同一構造の窯を築き、土器焼成の実験観察を行ない、その記録を得るなどの成果をおさめた。この実験作業には、工学部教授亀井 清・谷口敬一郎先生のご指導と工学部非鉄金属材料研究室の学生諸君の協力を得た。

ここに報告書を作成するにあたり、現在東京国立博物館で所蔵されている昭和5年・6年出土の遺物についても収録することとし、その実測、写真撮影などを行うにあたり、東京国立博物館前考古課長三本文雄、現課長三宅敏之氏及び、亀井正道、西田守夫、村井嘉雄の諸氏のご配慮をうけた。

本報告書を関西大学考古学研究室で編集し、「関西大学文学部考古学研究第5回」として出版することになった。この間、末永雅雄先生にご指導、ご助言を受け、また関西大学理學部教授横田健一先生、文学部教授齋藤香融先生をはじめ出版委員の諸先生の格別の配慮をうけた。また大阪府教育委員会、河内長野市教育委員会に対しても謝意を表したい。

就而報告書の作成時、當時発掘調査に参加した学生諸君の大部分は学業を卒え、それぞれの本務に励んでいる。その多忙な日程をさいて、たびたびの研究会・検討会・打合せ会を開き、出版に必要な作業に従事し、後輩の在学生諸君はその作業の分担や連絡について尽力した。と

りわけ井藤徹，笠井保夫，中井一夫，峯正明，直宮憲一，灰掛薫，藤原学，秋枝芳，石田修，前田義人，森岡秀人，中上京子君らの献身的な努力によって完成することができた。また、文学部学生亀島重則，吉川久雄，大岡まゆみ，米田文孝，南前千尋，岩崎菜穂子，内田裕理子，中川真理子，横藤田品子，越原良忠の諸君が、深夜に及ぶまで、研究室において、図版や浄書などの仕事に協力した。これら学生諸君にとって、貴重な体験であり、終世の思い出となるであろう。こうして多くの卒業生，在学生の努力によって完成した。

本報告書が考古学研究のためにいささかなりとも益するところがあれば、発掘調査に参加し、資料の整理、出版に専念した諸君と共に望外の欣とするものである。

昭和52年3月

網干善教

例　　言

1. 本書は大阪府河内長野市の委嘱により、関西大学文学部考古学研究室が発掘調査を実施した、大師山古墳及び大師山遺跡の調査報告である。

すでに両遺跡については、調査概要を刊行したが、本書をもって正報告とする。

2. 本書の題簽は関西大学名誉教授末永雅雄先生の揮毫をいただいた。篤く感謝の意を表します。

3. 大師山古墳、大師山遺跡の調査期日は次のとおりである。

大師山古墳 昭和44年10月13日～12月14日

大師山遺跡 昭和45年3月2日～3月31日

4. 資料整理及び本書の作成は主にして関西大学文学部考古学研究室にて行ない、一部については河内長野市立資料館にて行なった。

5. 執筆及び編集は網干善教以下、調査参加者が分担して行なったが、編集段階においては、在学生に負うところが大きい。

6. 出土遺物の縮尺は、石製品については1：2または1：3、土器については1：4にて統一した。

7. 文中の遺物番号は挿図、図版中の番号と全て統一した。

8. 英文要旨は文学部安川豊教授に依頼した。

9. 調査組織については別に記した。

10. 本文執筆者は下記のとおりである。

網干 善教 2-7, 3-6, 考察Ⅳ 直宮 憲一 1-2, 2-3, 2-4

亀井 清 考察Ⅱ 灰掛 薫 2-1, 3-1, 付載Ⅰ

井藤 徹 1-2 藤原 学 1-2, 3-3, 3-4

笠井 保夫 2-6, 3-5 考察Ⅳ・V

田中 達夫 2-5 秋枝 芳 1-2, 3-3, 付載Ⅰ

峯 正明 1-1, 2-1, 2-2, 石田 修 3-3

3-1, 3-2, 3-3, 前田 義人 3-3

付載Ⅰ・Ⅱ 森岡 秀人 1-2, 考察Ⅲ・Ⅳ

中井 一夫 3-3 中上 京子 考察Ⅰ

村越 直嗣 3-3

11. 本書に掲載した周辺遺跡分布図(1)・(2)は、建設省国土地理院長の承認を得て、同院発行の5万分の1地形図を複製したものである。(承認番号)昭52近復、第76号

12. 本書は関西大学研究成果出版補助金規定による刊行である。

調査関係者名簿

(昭和44・45年発掘調査時)

▶ 1次調査(大師山古墳)

顧問 末永雅雄(関西大学名誉教授)

調査団長 井藤徹(大阪府教育委員会文化財保護課技師)

調査員

笠井保夫(関西大学大学院文学研究科)	灰掛薰(関西大学文学部史学科2回生)
田中達夫(〃文学部史学科4回生)	藤原学(〃〃〃〃)
津島彰夫(佛教大学〃〃〃〃)	松本信夫(〃〃〃〃〃)
中井一夫(関西大学〃〃〃〃)	秋枝芳(〃〃〃〃1回生)
峯正明(〃〃〃〃)	東永津子(〃〃〃〃〃)
村越直嗣(〃経済学部3回生)	石田修(〃法学部〃)
片岡妙子(〃文学部史学科2回生)	岩田武志(〃文学部史学科〃)
琴塚啓子(〃〃国文科〃)	小沢正和(〃〃〃〃)
田中堅一(〃〃史学科〃)	吉田妙子(〃〃〃〃)
直宮憲一(〃〃〃〃)	前田義人(〃〃〃〃〃)
中村晃(〃〃〃〃)	島田隆昌(竜谷大学〃〃〃〃)

調査協力者

石部正志(大阪府立泉大津高校教諭)

大阪府立泉大津高校地歴部

堺市立工業高校地歴部

▶ 2次調査(大師山遺跡)

顧問 末永雅雄(関西大学名誉教授)

調査団長 綱平善教(〃助教授)

調査員

田中達夫(関西大学文学部史学科4回生)	松本信夫(関西大学文学部史学科2回生)
中井一夫(〃〃〃〃)	秋枝芳(〃〃〃1回生)
峯正明(〃〃〃〃)	東永津子(〃〃〃〃〃)
村越直嗣(〃経済学部3回生)	岩田武志(〃〃〃〃〃)
片岡妙子(関西大学文学部史学科2回生)	石田修(〃法学部1回生)
直宮憲一(〃〃〃〃)	小沢正和(〃文学部史学科1回生)
灰掛薰(〃〃〃〃)	前田義人(〃〃〃〃〃)
藤原学(〃〃〃〃)	

▶ 室内作業参加者(発掘調査参加者を除く)

亀島重則、古川久雄、大岡まゆみ、米田文孝、南前千尋、岩崎菜穂子、内田裕理子、中川真理子、横藤田晶子、越原良忠(いずれも関西大学文学部学生)

目 次

報 告 編

第1章 序 説

第1節 位 置	1
第2節 石川上流域の考古学的環境	3

第2章 大師山古墳

第1節 昭和初期の調査	13
第2節 調査の契機	15
第3節 大師山古墳の外形	19
第4節 大師山古墳の内部構造	24
第5節 遺物の出土状態	24
第6節 出土遺物	26
第7節 結語	41

第3章 大師山遺跡

第1節 調査の契機と経過	47
第2節 大師山遺跡の概要	49
第3節 弥生時代の遺構	53
第4節 古墳時代以後の遺構	68
第5節 出土遺物	71
第6節 結語	116
付載I 大師山古墳周辺地域分布調査によって新たに確認した遺跡	121
付載II 焼上塙移築報告	129

考 察 編

考察I 石製腕飾類出土地とその集成	133
考察II 大師山古墳出土石釧の材質とその製法	171
考察III 縄内第V様式の編年細分と大師山遺跡出土土器の占める位置	175
考察IV 弥生遺跡に伴う焼上塙について ——大師山遺跡第1～4号焼土塙のもつ意義——	212
考察V 木炭窯をめぐって ——大師山遺跡第5・6号焼土塙に関する二、三の問題——	266
考察VI 高地性遺跡に関する二、三の問題	289
英文抄訳	300

挿 図 目 次

第1図 周辺地域の地質図	2
第2図 錦織遺跡出土縄文土器	3
第3図 喜志遺跡出土石器	3
第4図 喜志遺跡出土石器	3
第5図 周辺遺跡分布図 (1) (先土器～弥生時代遺跡)	4
第6図 東山遺跡住居址群の分布	5
第7図 東山遺跡B地区住居址群	6
第8図 お龟石古墳	7
第9図 周辺遺跡分布図 (2) (古墳～歴史時代)	8
第10図 金剛寺	11
第11図 観心寺	11
第12図 古墳墳丘及び木棺	14
第13図 後円部調査風景	17
第14図 調査風景	1
第15図 墳丘測量図 (1) (主要トレンチ配置図)	20
第16図 土層断面図 (1)	21
第17図 墳丘測量図 (2) (外形復元図)	22
第18図 土層断面図 (2)	23
第19図 石製品実測図 (1)	27
第20図 石製品実測図 (2)	28
第21図 鉄器残片実測図	29
第22図 墳輪実測図	30
第23図 木棺片実測図	30
第24図 墳丘出土石器実測図	31
第25図 内行花文鏡拓影 (東京国立博物館蔵)	32
第26図 石製品実測図 (3) ()	34
第27図 石製品実測図 (4) ()	35
第28図 石製品実測図 (5) ()	36
第29図 石製品実測図 (6) ()	37
第30図 石製品実測図 (7) ()	38
第31図 D地区の調査風景	47
第32図 2号住居址検出状況	48

第33図	4号焼土壙の移築状況	48
第34図	大師山遺跡と大師山古墳の立地	50
第35図	大師山遺跡の地形と地区・遺構配置図	52
第36図	第1号住居址床面出土の甕・鉢	53
第37図	第1号住居址実測図	54
第38図	第1号住居址溝状遺構断面図	55
第39図	第2号住居址実測図	55
第40図	第1号焼土壙実測図	56
第41図	第2号焼土壙周辺地形実測図	57
第42図	第2号焼土壙実測図	58
第43図	第3号焼土壙実測図	59
第44図	第3・4号焼土壙周辺地形実測図	59
第45図	第4号焼土壙実測図	60
第46図	C・D・F地区土層断面図	62
第47図	弥生式土器出土状態	63
第48図	E地区平面実測図	64
第49図	E地区土層断面図	64
第50図	J地区地形実測図	65
第51図	第5号焼土壙実測図	68
第52図	第6号焼土壙実測図	69
第53図	第6号焼土壙の石組み	70
第54図	1号住居址出土壺形土器	71
第55図	C地区出土土器実測図(1)	77
第56図	〃(2)	78
第57図	〃(3)	79
第58図	〃(4)	80
第59図	〃(5)	81
第60図	D地区出土土器実測図(1)	87
第61図	〃(2)	88
第62図	〃(3)	89
第63図	〃(4)	90
第64図	〃(5)	91
第65図	〃(6)	92
第66図	〃(7)	93

第67図	D地区出土土器実測図 (8).....	94
第68図	F地区出土土器実測図 (1).....	101
第69図	〃 (2).....	102
第70図	〃 (3).....	103
第71図	〃 (4).....	104
第72図	A地区出土瓶形土器実測図及び拓影.....	109
第73図	焼土壙出土土器実測図.....	109
第74図	第3号焼土壙肩部に密着した弥生式土器.....	110
第75図	J地区出土土器.....	110
第76図	第1号住居址出土石塚実測図.....	111
第77図	石皿・砥石実測図.....	111
第78図	小型砥石実測図.....	112
第79図	第2号住居址出土鐵礫実測図.....	112
第80図	A地区出土の第1期の弥生式土器.....	113
第81図	手焙形土器 (F-78)	115
第82図	伏見堂遺跡の景観.....	122
第83図	伏見堂遺跡・腰神古墳群周辺航空写真.....	122
第84図	伏見堂遺跡の石器・剝片の散布状況.....	123
第85図	伏見堂遺跡採集石器.....	124
第86図	塩谷遺跡出土弥生式土器.....	125
第87図	塩谷遺跡出土石器.....	125
第88図	腰神古墳群の分布状況.....	127
第89図	鉄板の挿入法 (模式図)	130
第90図	焼土壙移築状況.....	131
第91図	〃	131
第92図	〃	131
第93図	〃	132
第94図	〃	132
第95図	〃	132
第96図	碧玉製腕飾出土遺跡の分布.....	136
第97図	近畿地方における碧玉製腕飾出土遺跡の分布.....	137
第98図	石劍出土遺跡の分布.....	138
第99図	近畿地方における石劍出土遺跡の分布.....	139
第100図	車輪石出土遺跡の分布.....	140

第101図	近畿地方における車輪石出土遺跡の分布	140
第102図	鍾形石出土遺跡の分布	142
第103図	近畿地方における錐形石出土遺跡の分布	143
第104図	合子出土遺跡	145
第105図	琴柱形石製品出土遺跡	147
第106図	筒形銅器及び筒形石製品出土遺跡	149
第107図	穿孔試験による試料寸法模式図	174
第108図	畿内後期弥生式土器縦年紀分の歩み	178
第109図	大師山遺跡出土土器の型式分類（1）	198
第110図	（2）	199
第111図	土器製作風景（兵庫県多紀郡今田町）	216
第112図	壺形土器の製作工程 I	220
第113図	II	220
第114図	III	220
第115図	IV	220
第116図	V	221
第117図	長頸壺形土器の製作工程	222
第118図	壺形土器の製作工程 I	222
第119図	II	223
第120図	土器焼成模式図	227
第121図	焼成温度の変化	228
第122図	第1次実験焼土塊	230
第123図	第1次焼成実験 I	233
第124図	II	234
第125図	III	234
第126図	IV	234
第127図	V	235
第128図	VI	235
第129図	VII	235
第130図	VIII	236
第131図	IX	236
第132図	X	236
第133図	第2次焼成実験温度変化表	239
第134図	第2次焼成実験窯（平窯）	240

第135図	第2次焼成実験窯（傾斜窯）	241
第136図	焼成された弥生式土器	243
第137図	彩色実験の壺	244
第138図	底部再成形模式図	246
第139図	底部再成形写真	247
第140図	内傾・外傾・擬口縁の成立過程模式図	249
第141図	高杯々部底部外面の粘土瘤	250
第142図	高杯成形過程模式図	251
第143図	実験における黒斑の状況	253
第144図	東満遺跡焼土壙	256
第145図	会下山遺跡1号焼土壙	257
第146図	会下山遺跡2号焼土壙	257
第147図	重水遺跡検出焼土壙	258
第148図	宗像高等女学校校庭発見の土器窯	258
第149図	羽田遺跡検出焼土壙	259
第150図	炭焼の景観	269
第151図	木炭焼成過程Ⅰ	269
第152図	Ⅱ	270
第153図	Ⅲ	270
第154図	Ⅳ	270
第155図	近・現代における木炭窯平面形態	271
第156図	木炭窯構築の基本構造模式図	272
第157図	木炭窯（白炭）	272
第158図	焼成温度および焼成時間	273
第159図	光流寺	277
第160図	大師山遺跡周辺で露出した黒色炭層	277
第161図	長池第3地点検出の小型平窯	279
第162図	陶器山地区窯状遺構	280
第163図	窯体に石を混えた小型平窯	282
第164図	大師山遺跡と周辺の炭窯群と中・近世の木炭生産地の位置	284

付 表 目 次

第1表 管 玉 一 覧 表.....	33
第2表 紡 錘 車 一 覧 表.....	33
第3表 車 輪 石 一 覧 表.....	36
第4表 石 鋸 一 覧 表.....	38
第5表 石 製 鞍 鈕 類 対 照 表.....	40
第6表 大師山遺跡出土弥生式土器形態及出土地別一覧表.....	76
第7表 大師山遺跡出土弥生式土器と 中・南河内地方の土器編年の対比.....	115
第8表 古墳出土石鋸の比重測定結果.....	173
第9表 凝灰岩の比重測定値.....	173
第10表 穿孔試験による試料の寸法.....	174
第11表 燃 土 壤 の 形 状 一 覧 表.....	213
第12表 河内・和泉における木炭生産の記録.....	276
第13表 小山田丘陵長池原検出の小型平窯群一覧表.....	278
第14表 高藏地区・陶器地区における窯状遺構一覧表.....	281

図 版 目 次

- 図版1 大師山古墳・大師山遺跡 景観（航空写真） 上空からみた河内長野市三日市町付近
同 上（拡大）
- 図版2 大師山古墳・大師山遺跡景観 西方よりみた大師山古墳・大師山遺跡
- 図版3 大師山古墳 調査前の状態 東方よりみた古墳
墳頂の古墳表示
- 図版4 大師山古墳 古墳表示の木棺 木棺片の保存状況
同 上
- 図版5 大師山古墳 景観（航空写真） 上空よりみた調査中の古墳（上が東）
- 図版6 大師山古墳 J地区よりみた調査中の古墳
東よりみた前方部調査状況
- 図版7 大師山古墳 左くびれ部の調査状況
後円部に設定したトレンチNo5
- 図版8 大師山古墳 墳丘土層断面 墳丘土の土砂堆積状況
- 図版9 大師山古墳 遺物出土状態 墓輪出土状態
石剣出土状態
- 図版10 大師山遺跡 J地区 東よりみたJ地区
調査中のJ地区
- 図版11 大師山古墳 出土木棺 出土木棺 上が凹面、下が凸面
同 上 細部
- 図版12 大師山古墳 出土木棺顕微鏡写真 横断切片 ×240 痒目切片 ×240
板目切片 ×240 痒目切片 ×240
- 図版13 大師山古墳 出土石製品
- 図版14 大師山古墳 出土石製品
- 図版15 大師山古墳 出土石製品・埴輪
- 図版16 大師山古墳 出土鏡・石製品 (東京国立博物館藏) 内行花文鏡
鏡形石
- 図版17 大師山古墳 出土石製品 (東京国立博物館藏)
- 図版18 大師山古墳 出土石製品 (東京国立博物館藏)
- 図版19 大師山古墳 出土石製品 (東京国立博物館藏)
- 図版20 大師山古墳 出土石製品 (東京国立博物館藏)
- 図版21 大師山古墳 出土石製品 (東京国立博物館藏)
- 図版22 大師山古墳 出土石製品 (東京国立博物館藏)

図版23	大師山古墳	出土石製品	(東京国立博物館藏)
図版24	大師山古墳	出土石製品	(東京国立博物館藏)
図版25	大師山古墳	出土石製品	(東京国立博物館藏)
図版26	大師山古墳	出土石製品 J 地点出土土器	(東京国立博物館藏) 瓦器・土師器皿・弥生式土器
図版27	大師山遺跡	1号住居址	1号住居址断面(調査前) 東よりみた1号住居址
図版28	大師山遺跡	1号住居址	1号住居址と溝状遺構 西よりみた1号住居址
図版29	大師山遺跡	1号住居址	壺形土器出土状態 壺形土器出土状態
図版30	大師山遺跡	溝状遺構	溝内堆積土の状況 南よりみた完掘された溝状遺構
図版31	大師山遺跡	2号住居址	西よりみた2号住居址 床面と柱穴群
図版32	大師山遺跡	2号住居址	住居址のコーナー 遺構の重複状況
図版33	大師山遺跡	2号住居址	柱穴 柱穴
図版34	大師山遺跡	1号焼土壙	露出した1号焼土壙
図版35	大師山遺跡	2号焼土壙	上からみた1号焼土壙 西よりみた2号焼土壙
図版36	大師山遺跡	3号焼土壙	東よりみた2号焼土壙 東よりみた3号焼土壙 南よりみた3号焼土壙
図版37	大師山遺跡	4号焼土壙	検出中の4号焼土壙　　土壤内に灰層がみえる 完掘された4号焼土壙
図版38	大師山遺跡	5号焼土壙	西よりみた5号焼土壙 検出中の5号焼土壙
図版39	大師山遺跡	5号焼土壙	検出された焼土壙北半分 同　　上
図版40	大師山遺跡	5号焼土壙	土壤内における焼土の堆積状況 天井部の遺存状況
図版41	大師山遺跡	6号焼土壙	北よりみた6号焼土壙

図版42 大師山遺跡 E 地区	東よりみた 6 号焼土壙 東よりみた E 地区
図版43 大師山遺跡 D 地区	小溝状遺構の検出状況 下からみた遺物出土状況 上からみた遺物出土状況
図版44 大師山遺跡 D 地区	遺物出土状態 東よりみたD地区 中央右よりの方形土壙は 3 号 焼土壙
図版45 大師山遺跡 D 地区	土器出土状態 土器出土状態
図版46 大師山遺跡 D 地区	土器出土状態 土器出土状態
図版47 大師山遺跡 出土土器・石器・鉄器 1 号住居址・表面探集・2 号住居址	
図版48 大師山遺跡 出土土器	C 地区
図版49 大師山遺跡 出土土器	C 地区
図版50 大師山遺跡 出土土器	C 地区・D 地区
図版51 大師山遺跡 出土土器	D 地区
図版52 大師山遺跡 出土土器	D 地区・F 地区
図版53 大師山遺跡 出土土器	F 地区
図版54 大師山遺跡 出土土器	F 地区・線刻記号文
図版55 大師山遺跡 出土土器	文様細部
図版56 大師山遺跡 出土土器	叩き目調整
図版57 大師山遺跡 出土土器	刷毛目調整
図版58 西野々古墳群	東よりみた古墳群 古墳の分布状況（南より）
図版59 腰神古墳群	2 号 墓 1 号 墓
図版60 腰神古墳群	1 号 墓 奥壁をみる 同 上 横道をみる

第1章 序 説

第1節 位 置

大師山古墳をはじめ、今回新たに検出した大師山遺跡が所在する河内長野市は、わが国における歴史的発展経過の中で、とくに「南北朝時代」にその脚光をあびた南河内の一角にあり、大阪府の東南部山手に位置し、面積109.57.7km²、人口約67,000人を擁する衛星都市の一つである。

現在の行政区画では東は南河内郡千早赤阪村、西は守口市・和泉市、南は和歌山県、そして北は富田林市、南河内郡狹山町と接している。

当市に市制のしかれたのは、昭和29年4月1日、町村合併促進法施行後、大阪府下第1号として、「旧南河内郡長野町」を中心に「三日市」「高向」「天見」「加賀田」「川上」の6ヶ町村が合併し、現在の河内長野市域が発足した。

当市の地形は、南は岩湧山を最高峯とする和泉山脈により、また西は和泉山脈より北東に派生する河泉丘陵により、そして東は金剛葛城山脈南端より北西に派生する丘陵により画された扇状を呈している。地勢は、一般的にいえば、南高北低になり、最高地点は岩湧山の海拔898m、最低地点は石川流域の沙の宮で、94mである。平坦地は総面積の10%で、市北部の扇の要にあたるところは小盆地状地形を形成している。市内を流れる河川は、東より石見川・天見川・加賀田川・石川・西除川の5河川を数え、それらはいずれも和泉山脈中に源を発し、南部高地より北部低地に向って北流している。これら5河川のうち、石見川・天見川・加賀田川の3河川は三日市町で合流し、その下流約2kmの長野町において石川と合流する。また西除川は、市西部地区を北東に派生する赤峯丘陵西側を流れ、狭山池へと注ぐ。

集落は、北部の平坦地を中心としてこれら各河川により形成された放射状の谷状地形に多く分布している。しかしながら、近年大阪のベッドタウンとしての宅地造成工事が盛んに行われ、その結果盆地周辺の自然環境はもちろんのこと、生活環境・社会環境にいたるまで変化し、さらには歴史的環境にいたるまで変化しつつあると言っても過言ではない。

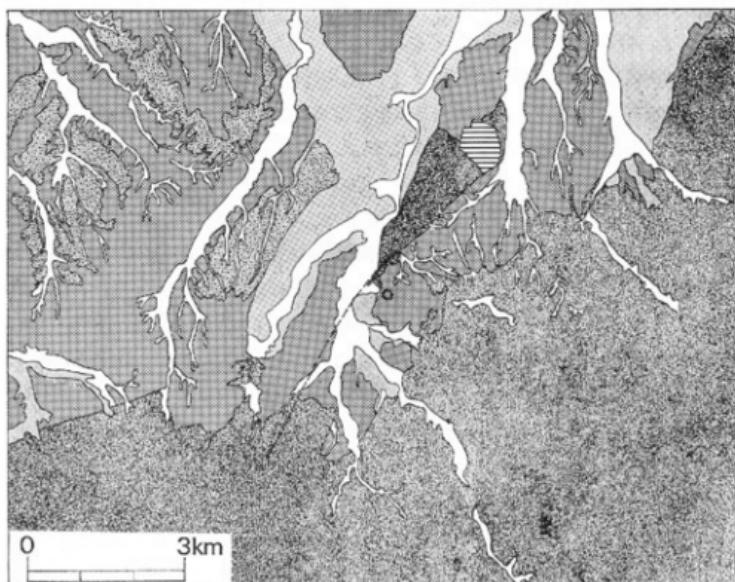
地質状況は、東部金剛山地においてはその大部分が花崗岩層よりなり、和泉山脈は和泉砂岩層が分布し、西へ行くにしたがい砂質となっている。そのため和泉山脈の端部にあたる当市は砂岩地帯が多く、表面の風化したところでは砂壟土をなしている。

遺跡は、前述した石見川・天見川・加賀田川の3河川が合流し、さらに北流するところで大きく蛇行するが、この東側の「大師山」と呼ばれる丘陵上に位置する。すなわち、金剛葛城山脈と和泉山脈の合する地点より北西に派生する支尾根の一つにあり、その先端部の丘陵西端か

ら東へ約350m、南北200mの範囲にかけて、古墳（大師山古墳）1基、住居址2ヶ所3基、溝状遺構1条、焼土壙6基、弥生式土器および土師器・須恵器・瓦器等の散布地を確認した。

大師山古墳は、河内長野市三日市町503番地（宅地造成により削平され、当該地は現在日東町となっている。）にある。金剛葛城山脈と和泉山脈の支点より北西に派生する1支尾根の主稜線の西端部がそれに直行する形でさらに南北に小支尾根を形成しているが、古墳は小支尾根との交点、標高191.3mに後円部を置きその東側に前方部を有する全長約52mの前方後円墳である。占地にあたっては丘陵分岐点に後円部を置き、また前方部（とくに南隅）においては小さく派生する尾根を有効に生かして前方部稜線としていることから考えて、自然地形を極めて巧妙に利用して築造されたとみられる。

古墳の位置する丘陵西側は、眼下の河川の蛇行により蝕くえぐり取られ、高さ約70mの急峻



第1図 周辺地域の地質図
経済企画庁「地形・资源地質・土壤五条（5万分の1）」1971より作図
(○印大師山古墳)

花崗岩類	高位段丘塊層 (中頃洪積層) 赤色土化をうけた砂礫	第1図
二上層群(新第三紀層) 安山岩及びその特異岩	低位段丘塊層 (後期洪積層) 砂礫及び粘土	周辺地域の地質図
大阪層群(前期洪積層) 砂礫及び粘土	沖積層 軟弱な粘土、砂礫	経済企画庁「地形・资源地質・土壤五条（5万分の1）」1971より作図 (○印大師山古墳)

な断崖地形を呈している。墳頂からは、河内長野市内の平坦部を一望できるのはもちろんのこと、北側は狭山町から堺市にかけて眺望しうる景勝の位置を占めている。

大師山遺跡は、大師山古墳より東方へ派生する尾根に営まれたもので、尾根上に住居址・焼土壌・溝状遺構が、北斜面に焼土壌・土器包含層等が、そして南斜面にも土器包含層が検出された。尾根の標高は約190m～210mで、谷部からの比高は約50m、岐嶺に営まれた遺跡である。

第2節 石川上流域の考古学的環境

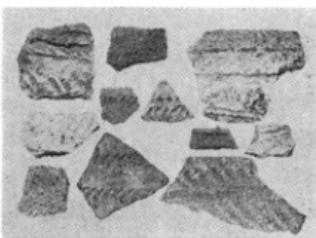
石川は紀伊山脈中心より発し、河内長野・富田林・羽曳野・藤井寺各市を通過し、奈良盆地よりの大和川と合流するが、本節では主に上流に所在する遺跡について述べることとする。

石川下流の先土器時代遺跡としては、大師山古墳より北方約15kmのところに所在する国府遺跡⁽²⁾が知られる。昭和32年、縄文人骨出土層位を再検討することと、先土器時代遺物の確認を主要目的として発掘調査が実施された。その結果、縄文人骨出土層の下層より、翼状剣片・国府型ナイフ形石器・刀器などが出土した。

さて、大師山古墳の所在する上流域では、現在までのところ明確な遺跡は確認されていない。これは考古学調査の不十分なためと推定されるが、周辺の地質の発達状況からみても、将来遺跡の発見されることは十分に考えられる。

縄文遺跡としては前述した国府遺跡が著名である。大正6～10年にかけて発掘調査され、主として前期と推定される埋葬人骨が73体出土した。国府遺跡に近接する船橋遺跡⁽³⁾では晚期後半に相当する粗製あるいは半精製土器が出土している。富田林市鷲崎遺跡⁽⁴⁾では前期の土器とともに石器・石錐が採集されるが、河内長野市では今までのところ縄文遺跡は確認されていない。

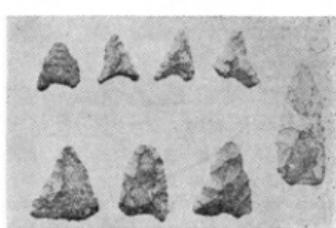
弥生時代に入ると、ようやく本地域に遺跡が営まれる。まず弥生前期には、石川中流左岸



第2図 鈴置遺跡出土縄文土器(富田林市史より)



第3図 喜志遺跡出土石器(富田林市史より)



第4図 喜志遺跡出土石器(富田林市史より)



- | | | |
|---------|-----------------|----------|
| 1. 鎧織遺跡 | 4. 富田林第2中学校々庭遺跡 | 7. 間谷A遺跡 |
| 2. 喜志遺跡 | 5. 萩原木遺跡 | 8. 間谷B遺跡 |
| 3. 堀谷遺跡 | 6. 彼方遺跡 | 9. 大師山遺跡 |

第5図 周辺遺跡分布図(1) 先土器~弥生時代遺跡

の沖積段丘面に喜志遺跡⁽⁴⁾（富田林市）が成立し、中・後期と歴代繼續して当地域の拠点的集落としての位置を占める。石川流域ではこの遺跡より上流に前期遺跡の存在を確認しておらず、下って大和川との合流点以北に国府⁽²⁾・船橋⁽³⁾の両遺跡をみるとにすぎない。喜志遺跡では少數ながら歳内第I様式の比較的古い土器を出土しており、他に石鏃・石庖丁・石斧・石槍・石錐・石小刀・鉄劍形石劍など豊富な遺物を出土している。

中期初頭の第II様式期となると、若干数ながら遺跡が増える。前述した喜志遺跡の対岸側に所在する並井遺跡（羽曳野市）や、上流の塙谷遺跡⁽⁵⁾（河内長野市）などはこの時期のみに営まれた単純遺跡であり、いずれも丘陵地形に立地している。後者は河内長野市域の北部、南海電鉄高野線近くの國立大阪南病院の北西方で近年発見されたもので、壺形土器や石鏃・石庖丁・石斧・石槍などが出土している。これらの遺跡は長くは続かなかったが、石川流域における生活圈拡大の一端を示したものといえよう。

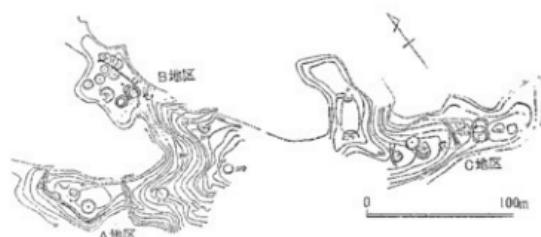
続く第III・第IV様式の時期に至っては、現在のところ、出現する遺跡は未確認である。この時期は多言を要するまでもなく、畿内の他地域においては生活領域の進展、可耕地の増大に伴って集落数がかなり増えており、これは畿内ののみならず、西日本の先進地域全体に通じてみられる一般的現象である。

これに反して、当石川流域ではその傾向が認められず、ひとり喜志遺跡だけが存続を保っている。本地域全体に生活領域が拡大されるのは次の後期を迎えねばならなかつたらしく、それがこの地域の特色でもあり、畿内南部の中での後進性を如実に物語っている。

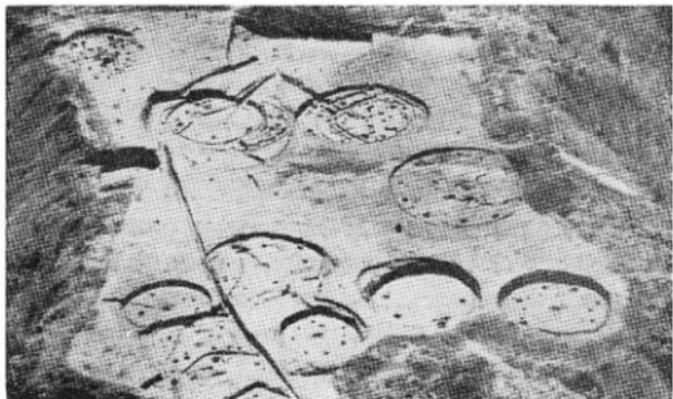
畿内第V様式の段階に入ると、石川流域一帯での遺跡数は飛躍的に増大する。下流域より順次あげると、羽曳野市に所在する上草遺跡⁽⁶⁾・チンチン山遺跡⁽⁶⁾・高屋ヶ丘遺跡⁽⁶⁾・歳の内遺跡⁽⁶⁾・八土遺跡⁽⁶⁾・東阪田遺跡⁽⁷⁾など、すべて左岸の洪積段丘中位面に集中しており、右岸側の玉手山遺跡⁽⁸⁾は大和川ルートの河内側の要所に位置する高地性集落で、前者の諸遺跡の存在とは同列視し難い。

遡って中流域では、逆に石川の東岸側に多くの遺跡が出現する。羽曳野市御嶽山遺跡⁽⁶⁾・南河内郡チネの森遺跡⁽⁶⁾・同葉室西峰遺跡⁽⁶⁾などが点在し、石川からもっとも隔たった最奥部の丘陵上には昭和43~44年、阪南ネオポリス宅地造成に伴って全掘された東山遺跡（南河内郡河南町）が存在している。

東山遺跡は標高90~160mを測る丘陵周囲に大溝をめぐらした高地性の集落で、おむね3群の住居址群からなり、複数の単位集団（世帯共同体）が緊密に結合した姿を反映している。石竈・石庖



第6図 東山遺跡住居址群の分布（大阪府教育委員会提供）



第7図 東山遺跡Ⅰ地区住居址群（大阪府教育委員会提供）

丁・石錐・石槍・石匙・石皿・砥石・鏡・刀子・ガラス小玉など多量の遺物が検出されており
土器は後期のものが主体であるが、最近の資料整理で中期に遡る資料も見出されている⁽¹⁾。

これらの諸遺跡はそのほとんどが丘陵や山頂尾根部などの高所に位置しており、御嶽山遺跡
と東山遺跡は、竹之内街道の河内側に現われる拠点的な高地性集落として注目されよう。

さらに遡って石川の上流域に至ると、遺跡は両岸に散在し、河岸から離れて丘陵のかなり奥地へも集落が移行してゆく。富田林第2中学校々庭遺跡や菜萸木遺跡など時期を明確にし難い
遺跡も存在するが、富田林市波方（オチカタ）遺跡のごとく土師器を出土する遺跡は重視しな
ければならない。流谷A・B両遺跡（富田林市）もこの時期に現われた遺跡である。
⁽²⁾

本書で報告する大師山遺跡は、こうした歴史的環境の下に、大和川より南へ分流する石川の
最上流域に占地したもっとも時期の新しい高地性集落として出現する。本遺跡は言うまでもなく、
南河内を延々25km流れる石川水系上の諸遺跡分布の南限を画し、石川の水源をあたかも支配
したかのように立地しており、次代に築かれた前II期の大師山古墳の存在を示唆している。

本地域における青銅利器の出土例は畿内の他地域に比べ乏しく、富田林市金胎寺山頂上付近
より出土した銅鉢をあげるにすぎない。南海電鉄高野線河内長野駅より北東方に位置するこの
山は、標高296.4mと高くそびえ、信仰・祭祀の対象としては恰好な条件を具备しており、弥
生後期の段階で生成・定着をみた石川水系の農業共同体の共有祭器としての性格を担ったもの
と思われる。

このように、大師山遺跡を南限とする石川流域の弥生時代遺跡は、南河内という地域性を表
象しつつ、畿内南部（畿内中央部）における「辺境地」としての独自性を時期の下降にしたが
い顕在化していくのである。それはとりもなおさず、弥生時代の政治動乱を余波的にもっと
も遅れて受け、高地性集落を最後まで残した事実が端的に物語っている。

古墳時代になると、石川の流域においては、大師山古墳より北方では多数の古墳が所在する。以下周辺の古墳について概略を記す。

大師山古墳より北へ約1kmほどの丘陵上に1基の円墳が所在する。地名では烏帽子山古墳と呼ばれ、墳丘直径約18m、高さ約2.5mであるが、詳細は知られていない。

前記古墳より西へ約1.3kmの石川の西岸近く、河内長野一泉大津線の道路横に、封土の大半を失った横穴式石室を有する塚穴古墳（塚本古墳）がある。河岸段丘上に位置しているが、近接して他に古墳はみられない。

また市内古野町の丘陵東裾にかつては横穴式石室を有した五の木古墳があったが、現存していない。

石川の東側の富田林市横山から嬉（ウレシ）にかけて嶽山の西斜面に10数基の嶽山古墳群が所在する。この古墳群についても詳しい状況は判明していない。

さらにこの古墳群の北500mの付近に、横穴式石室を有する田中古墳群4基がある。これらの古墳群のうち、3基が昭和38年に造成工事のため調査され、とくに2号墳は横穴式石室内に、凝灰岩製の家形石棺を安置したものであった。

田中古墳群の西、石川の河岸段丘上に4基の円墳で構成される西野々古墳群がある。半数以上の墳丘が破壊され詳細は不明であるが横穴式石室墳であろう。古墳群の西北約1kmほどのところに、錦織古墳がある。前方後円墳で、前方部を東北に向いているが、本古墳も主体部は明らかでない。

さらに石川西岸を南下した甘山（ツツヤマ）地区に、円墳・方墳が数基所在しており、なかでも川西古墳は、二度の発掘を受け、封土は全くみられないが、主体部に小竪穴式石室様のものを持つ。

また富田林市中心部より南側、石川の東岸の丘陵上には、彼方（オチカタ）丸山古墳・板持古墳群・寛弘寺古墳群などが所在する。彼方古墳は丘陵突端部に位置し、直径約35~40m、高さ3mの円墳で幅約10m以上の周濠をめぐらしており、葺石・埴輪も出土している。竪穴式石室の可能性が強い。板持古墳群は円墳と前方後方墳から成る。前方後方墳は板持3号墳と呼ばれ、全長40m、後方部1辺25m、前方部幅15m、後方部高さ4m、前方部高さ2.5mの埴丘で

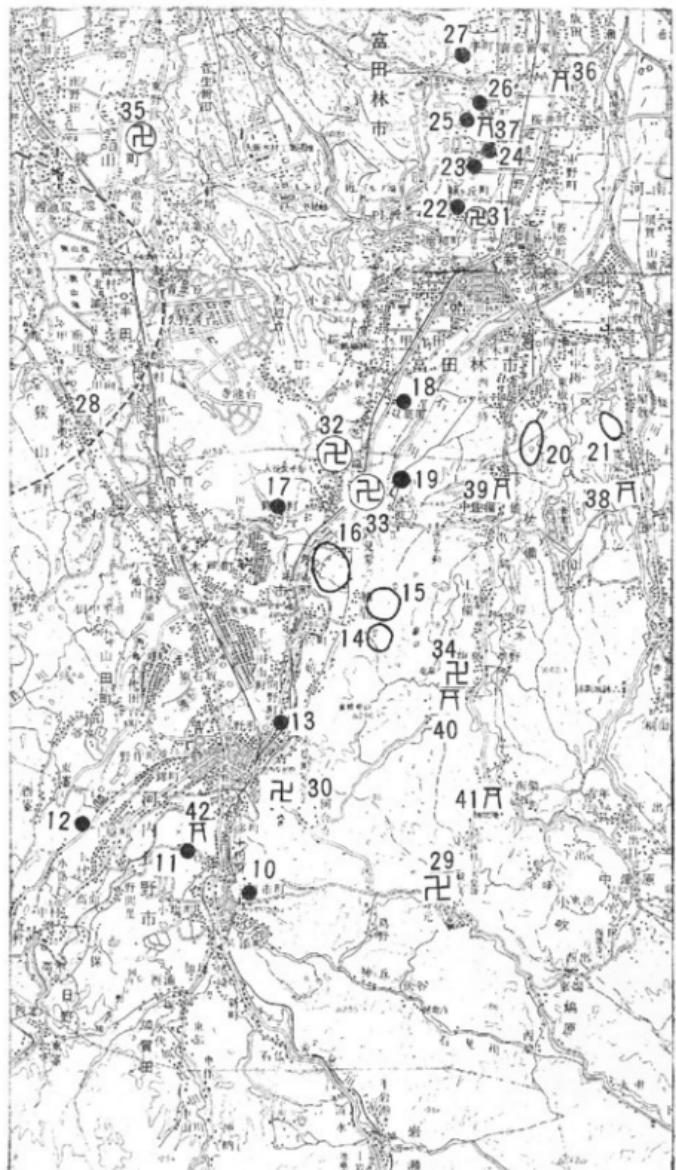


第8図 お龜石古墳

ある。内部主体は後方部中央に木棺直葬が主軸と並行して検出された。

寛弘寺古墳群も、円墳と前方後方墳からなり、前方後方墳は全長30m以上である。円墳は横穴式石室の外、箱式石棺もある。

さらに石川を南に下り、西岸丘陵頂上付近に至ると、横口式石棺を有し、径約15mの円墳であるお龜石古墳が所在する。石棺の外側に平瓦



10. 大師山古墳
11. 烏帽子山古墳
12. 塚穴古墳
13. 五の木古墳
14. 雄山古墳群
15. 田中古墳群
16. 西野々古墳群
17. 錦織古墳
18. 川西古墳
19. 彼方丸山古墳
20. 板持古墳群
21. 寛弘寺古墳群
22. 彼方古墳
23. 右龜石古墳
24. 宮前山古墳群
25. 真名井古墳
26. 宮神社裏山古墳
27. 鍋塚古墳
28. 陶邑古窯址群
29. 鰐心寺
30. 河合寺
31. 新豊南寺
32. 細井寺址
33. 錦織寺址
34. 龍泉寺
35. 東野寺址
36. 善志神社
37. 美具久留御玉神社
38. 鴨脣太神社
39. 佐備神社
40. 成吉神社
41. 咸吉佐備神社
42. 鳥帽子形八幡神社

第9図 周辺遺跡分布図 古墳～歴史時代

の配列が認められる特異な古墳である。

その北側近くには、宮前山古墳群があり、うち⁽¹⁵⁾1基は整穴式石室に、砂岩製の組合式横口式石棺を有している。

さらに丘陵南に真名井古墳・宮神社裏山古墳・鶴塚古墳・平古墳等が点在分布する。真名井古墳は全長60m、後円部径40m、前方部幅20m、後円部高さ5m、前方部高さ1mの前方後円墳で、墳丘には葺石・埴輪列を持ち、後円部主体部は粘土築である。⁽¹⁶⁾宮神社裏山古墳は円墳で陶棺片・須恵器・方形壺等が出土している。また鶴塚古墳は直径約30mの2段築成の円墳で木棺直葬の土壤より、長方形板革縞短甲や鐵鏃等が出土し、本山考古資料に収められている。⁽¹⁷⁾平古墳は全長50m、後円部径30m、前方部幅20mの前方後円墳で、木棺直葬墓である。⁽¹⁸⁾鶴塚古墳・平古墳の東側丘陵の壺井には御旅山古墳が所在する。前方後円墳で全長45m、後円部径27m、前方部幅17mで、壺丘基底線に蔽形土器が、埴輪と同時に使用されている。内部主体は元文年間に掘り出された。木棺を内蔵する粘土築であったらしい。⁽¹⁹⁾

以上石川流域の古墳の分布を見てきたが、全体にいえることは大形の古墳は少なく、30~60mの前方後円墳および円墳が主体となった古墳群が多数認められ、なかには前方後方墳を伴なう古墳群も存在する。

これらのうち前期古墳に属するものは御旅山古墳・真名井古墳であるが、いずれも同型鏡を出土鏡の中に有することは注目しなければならない。お旅山の唐草文帶三神三獸鏡は大阪府紫金山古墳・京都府百々が池古墳出土のものと、また真名井古墳の三角縁三神三獸鏡は、奈良県新山古墳・群馬県柴崎古墳出土のものと同型関係にある。⁽²⁰⁾さらに、次の時期には、鶴塚古墳・川西古墳にみられるように冠印を有する古墳が続き、後期群集墳の築造に至る。

しかしこの地域における群集墳の形式は、中に前方後円（後方）墳を有するものが若干みられるが、いずれも群構成の規模が小さいのが特色といえよう。近接する地域に一須賀古墳群⁽²¹⁾の大群集墳が存在するにもかかわらず、一地域に小群集墳や単独の横穴式石室墳が築造されるのは特異な傾向にあるといえよう。

しかしながら、お亀石古墳等終末期古墳と呼ばれるものが存在する点から、前期から終末期に至るまで石川流域の古墳は大きな変動をみるとなく比較的安定した形でその形成が行なわれているようで、政治的関係においても平穡な動きをしていたと考えられる。

古墳墓以外で、民衆の活動の一端を知りうるものとして、生産遺跡があるが、古墳時代に活発に行なわれた生産活動の一つとして須恵器の生産があげられる。

大師山古墳から西方、槇尾山塊をこえ、あるいは東北方、狹山町へぬけると、古墳時代において最古であり、また最大規模の生産を行なった駒込古墳群⁽²²⁾が泉北丘陵に展開している。本古墳群の東限は、狹山池の東方一帯であり、臨接する河内長野市に至っては、現在のところ確認された須恵器窯跡はない。

一方、石川流域に目を転ずると、南河内郡において少数例が知られている。これは古くは、

二上山麓窯跡群として注意されたものの一つで、先述した一須賀古墳群中に分布しているものである。⁽²²⁾近年、このうちの1基の一須賀2号窯跡を調査したところ、我が国でも最古様式としての範囲に含まれているものであることがわかった。注目をあびた。本窯の厳密な位置づけは、今後の調査研究にまたれるが、明らかにいえることは、我が國の須恵器生産開始の最古段階における一窯という重要な位置を占めながらも、陶邑窯址群のような生産の拡大・発展の方向はとられず、単独の一支脈としての意義づけしかできないということである。そして石川流域をこれ以上遡ってみても、現在の時点では古墳時代の須恵器窯跡は確認されていない。

農業生産の方では、古墳時代に至って、農耕具の鉄器化等による生産の比縦的増加は、既に多面にわたる調査研究によって証明せられていることであるが、ちょうど文献にもあらわれる大規模な土木、灌漑事業の記載がその一端を物語っている。

日本書紀、仁德14年冬11月条には、「又越大溝於感攻。乃石河水而潤上鈴鹿。下鈴鹿。上豊浦。下豊浦。四處郊原。」とある。感攻は和名抄にみえる「石川郡掛口郷」で、現在の河南町から千早赤阪村の地域と考えられている。この記載については鈴鹿・豊浦などの地名上、疑問な点が残されているものの、これからも河内平野の開拓に際する石川の重要性がうかがえる。⁽²³⁾

これをさらに上流域、大師山古墳周辺の水田開発の諸条件にてらしあわせてみると、当地は大阪層群下部からなる小山田丘陵が突入するが、長野町の東北方一帯は中位段丘がみられる。⁽²⁴⁾この段丘面の発達が不安定なためか、あるいは天野川・西除川等の開削がこれらの段丘を大きく削って北流するためか、古代にあっては、決して開墾の条件として恵まれたものでなかったらしく、狭山町・富田林市において明白にみられる古代の条里制の痕跡も、当盆地においては明確には認めることができない。このようなことからしても、当地における水田開発の条件も決してよくなかったのではないか。

次に大師山古墳周辺の寺院をみると、觀心寺と金剛寺・河合寺が古刹として知られ、重要な文化財を今日に伝えている。とくに觀心寺は、大師山古墳東方2.2kmにあり、空海の弟子実惠によって、天長4年(827)に創立されたと伝えられ、平安初期には伽藍がととのえられていたといわれる。⁽²⁵⁾

天野山金剛寺は石川を隔てた横尾山の東麓にあり、平安末期にすでに金堂、塔を中心とする伽藍が整備されていたといわれる。⁽²⁶⁾

施寺址をみると、石川上流域では新堂施寺(富田林市新堂)がお龜石古墳との関係をもって出現するほか、細井寺址(富田林市細井・奈良前)、錦織寺址(富田林市錦織・平安)、さらに近接したところでは、大師山より金胎寺山を越え、佐倅川流域にある竜泉寺(富田林市竜泉・奈良前)がある。狭山町では、東野寺址(狭山町東野・奈良前)が羽曳野丘陵の西麓端に位置する。⁽²⁷⁾

次に、石川流域の式内社の分布をみると、本流域の喜志神社(富田林市喜志)、一須賀神社



第10図 金剛寺



第11図 鏡心寺

(同一須賀)，美具久留御玉神社（同宮町）があり，支流域には鷦鷯太神社（富田林市），建水分神社（干早赤阪村），佐備神社，成吉神社（富田林市），成吉佐備神社（富田林市）がある。このうち，成吉神社は緑口県主を奉祀する神社として特筆されるが，他は，建水分神社，そして下水分神社と呼ばれる美具久留御玉神社が，石川の水利に関与するものとして特色づけられる。流域のこのような式内社の分布は、「本地域が大和と河内を結ぶ線から遠く離れた山間地帯で，発達が遅れていたという自然的・政治的条件によるもの」とされている。⁽¹⁵⁾これよりさらに河内長野市内，大師山古墳へと流域をさかのぼると，式内社は一座もみとめられず，中世までくだると，文明12年（1480）に建立された本殿（重要文化財）を残す鳥帽子形八幡神社があるにすぎない。⁽²⁷⁾

このようにしてみると，大師山古墳の眼下，長野周辺の盆地一帯は，京師と高野山を結ぶ東・西高野街道，金剛寺を経て和泉へ抜ける楨尾街道などが交差し，交通の要路となって発展した町といえる。

それに比して，原始・古代における当地の発展段階は，遺跡・古墳・社寺のいずれのあり方をみても，河内平野各地でみられるような，生産力のエネルギー性な発展の結果とは様相を異にしているといえよう。同時にそれらは弥生遺跡の後進性，古墳墓の動向にみられるような政治的緊張関係の欠如をもたらしたといえ，社寺（址）を含め，古代において当地にその痕跡をのこすものは，平野から隔たった山間にみとめられる古刹であった，という点にも帰することができよう。

このような考古学的・史的環境をふまえて，大師山古墳・大師山遺跡の史的意義がはじめて解明されるのであるまいか。

〔註〕

- 『河内長野市総合計画』河内長野市役所
1970年

- 浜田耕作「河内國府石器時代遺跡発掘報告」
他『京都帝國大學文科大學考古學研究報告』

第2冊 1918年

浜田耕作「河内國府石器時代遺跡第2回発

- 掘報告」他『京都帝國大學文學部考古學研究報告』第4冊 1920年
- 鳥立郎・山内清男・鍵木義昌「河内国府遺跡略報」『日本考古學協会第20回研究発表要旨』 1957年
- 大阪府教育委員会『国府遺跡発掘調査概要』 I・II・III 1970年・1971年・1972年
3. 原口正三仙『船橋遺跡の遺物の研究』I・II 平安学園考古学クラブ 1958年・1962年
4. 北野耕平『富田林市史』富田林市史編纂室 1955年
5. 稲正明「塩谷遺跡」『日本考古學年報』24(昭和46年版) 1973年
- 堀田啓一『河内考古学散歩』 1975年
6. 大阪府教育委員会『大阪府文化財地図』 1970年
7. 中村浩「東駁田遺跡」『日本考古學年報』24(昭和46年版) 1973年
8. 国西大学考古学研究室が調査したことがある。
9. 大阪府教育委員会『河南町東山所在遺跡発掘調査概報』 1969年
- 大阪府教育委員会『河南町東山弥生朱落窯発掘調査概報』 1970年
10. 堀田啓一『河内考古学散歩』 1975年
11. 梅原末治「南河内郡三日市村大鄭山古墳」『大阪府史蹟名勝天然記念物調査報告』第三輯 1932年
12. 鹿部明生『中山古墳群』『大阪市立博物館報』No.3 1964年
13. 大阪府教育委員会の発掘調査による。
14. 指江門也『富田林市板持古墳群調査概報』 富田林市教育委員会 1967年
15. 藤直幹・井上薰・北野耕平「河内における古墳の調査」『大阪大学文学部国史研究報告第一冊』 1964年
16. 井藤徹『鍋塚古墳発掘調査概要』大阪府教育委員会 1966年
17. 田代克己「平古墳発掘調査概要」「鶴・香・仙」第15号 大阪府教育委員会 1972年
18. 田代克己『羽曳野市塙井御旅山前方後円墳発掘調査概報』大阪府教育委員会 1968年
19. 小林行雄『古墳時代の研究』 1961年
20. 上野勝己「一須賀古墳群分布調査」『古代学研究』46 1961年
21. 出辺昭三『陶邑古窯址群』平安学園考古学クラブ 1966年
22. 森浩一「和泉河内窯址出土の須恵器編年」『世界陶磁全集』第1巻 1958年
23. 大阪府教育委員会『河南町東山所在遺跡発掘調査概報』 1969年
24. 『新訂増補国史大系』第1巻上
25. 『日本古典文学大系』第67巻『日本書紀』上396頁頭註。『大日本地名事典』にも同様な記述がある。
26. 経済企画庁「地形・表面地質・土壤・五条(5万分の1)」 1971年
27. 河内長野市史編纂委員会『河内長野市史』第10番別編2 1973年
28. 斎上太助『河内の古墳(2)』 1968年。

第2章 大師山古墳

第1節 昭和初期の調査

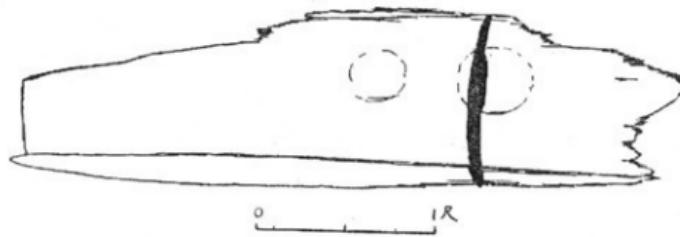
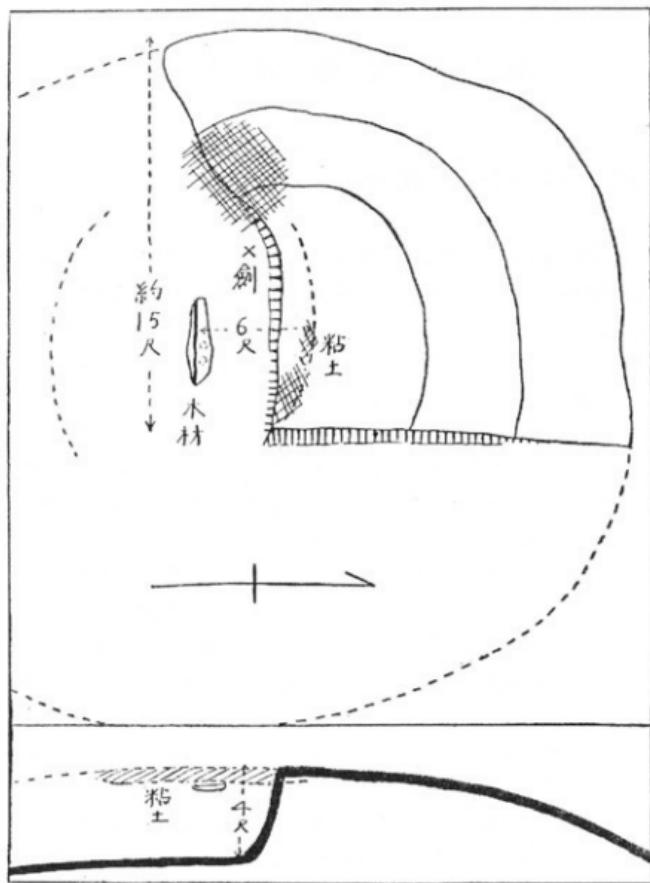
今回の宅地造成工事に伴い、発掘調査を実施した大師山古墳は、昭和5年、地元において同地に大師堂再建の議がまとまり、地ならし工事に着手、隆起部の土砂を採掘移動した。この工事の結果、遺物の出土があり、その届け出にもとづき大阪府が調査をしている。以下、その時の調査成果を『大阪府史蹟名勝天然記念物調査報告第3輯』(昭和7年刊)より抽出して記す。

立 地：古道の所在地通称大師山は三日市町の「東方石川の流れに近く起伏する山丘の一部のうち、川に沿ふて南北にながい高峻な山丘の北部に偏した処で、兼て東に分派する丘の分れ目に当つている。此の山丘は、東南は傾斜やや緩であるが、西側は頗る急な斜面を以て石川の岸に近く下降して、西北に同川の流域を望むの地域に属し」としている。

外 形：「地方人士の談に聽くに、本大師山古墳は上述の諸墳丘と同じく、今より六十余年前までは円形の封土を完存して、上部に名の彼つて起る大師を祀つた小堂のあつたものであるが、」その後相模場を作ることになり、頂部約五尺を切り下げ、さらに十年を経て踊り場に改めた際、再び外形を改めたが、なお隆起のあとをとどめていた。しかるに前述のとおり、昭和5年大師堂再建に伴うじならし工事の着手により遺物が出土し、大阪府の調査するところとなった。

「調査の際には、既に隆起部の過半が削り去られた後であり、また届出に依つて所轄署から採掘の中止を命じた残部に就いても、如何なる故にや福井師が一月三日に単独にて採掘を行ひ、為に著しく擾乱の度を加へて外觀を微するに困難を感じたことではあつたが、而も北西部には上部著しく削平せられながら、封土の一部と覺しき隆起を残存して、採掘した部分の間に高さ四尺内外の断面を露はし、該面の上辺に近く朱に塗んだ粘土層の一部を遺存するあり、右の封土は奥行二十尺に近く、本来大形の丸塚なのを推し得た。」と報告されている。

内 部 構 造：「遺物の埋没してあつた部位は、上記残存部の南側にある東西の断面から四尺内外離れた東寄りの場所で、上辺に近く東西にながい木片が見いだされ、片上に遺物を藏して、覆ふに粘土を以したものであつたと云い、



第12図 古墳 墳丘及び木棺 (大阪府報告第三編より)

なほ右の木片の下部には砂を敷いた状(態)を認められ、また遺物の存した部位には朱があつて、これが広い範囲に亘り、ほゝ上部を覆ふた粘土の拡りに近く、粘土は木片上で厚さ六七寸あり、其の上面は地表面に達してゐた」という福井師から曉いた内容より、「残存隆起部に於ける上辺の粘土は師の謂ふ上部を覆ふたそれの一端」と見、この推測を朱の遺存することより確め、また「西辺の粘土には朱の外に礫石を伴ふ」ことに注意し、「是等からすると本墳の中核は一種の木部から成つて、覆ふに半径約六尺の粘土を以したものと解せられる。」と報告されている。

遺物出土状態：「発見が偶発事に属している等の為に頗る明瞭を欠く。しかし、採掘した福井師に従うに「長い木材の中央より東に面を上にした鏡があり、西辺に大形の車輪石、石劍の類があつたものと見る可く、また管玉、紡錘車等は石訓の或物と共に存してゐたこと、(略)なお剣身等は掘り崩した土砂の中から発見したとの事であるが、これを原物に微するに石訓、車輪石等に鉄鏽が夥しく付着する處から、また相伴つて出土したものあることが知られる。現存二片となつてある其の木片は、周縁腐朽して長さ三尺七寸、幅中央にて一尺を超えないものであるが、もとは更に長大であつたと解せられ…」と報告されている。その際における出土遺物の種類およびその数量は次のとおりである。

内行花文鏡	1	面	破片残欠
管 玉	8	個	
鏡 形 石	1	個	
紡 锤 車	4	個	
車 輪 石	16	個	2種 破片共
石 剣	13	個	破 片 共
剣 身 等	10数個		断 片

第2節 調査の契機

河内長野市三日市町の東側丘陵、通称「大師山」にある大師山古墳は、昭和5年12月の大師堂再建に伴う地ならし工事を実施した際、木棺と共に多量の副葬品(鏡・鏡形石・車輪石・石劍・管玉・紡錘車・刀剣類等)の出土を見たことから、石川流域における古式古墳を代表するものとして知られ、学術的にもその価値は非常に高いものであることが判明した。

ところが、昭和43年12月11日、日生住宅株式会社(本社 大阪市東区高麗橋1丁目4番地)が、大師山古墳の存在する通称「大師山」を含む三日市町・末広町・河合寺にまたがる丘陵約

327,920m²を買収し、この開発を行うにあたり、河内長野市教育委員会にて「埋蔵文化財の有無およびその存在する場合の措置」について行政指導を求めてきた。市教育委員会は、当該丘陵地において、昭和5年の大師堂再建の際、梅原末治氏により大師山古墳が調査され、その付近の丘陵上にも墳丘と思われる隆起が認められることを報告されていることから、今回の開発行為に苦慮し、善後策を求めるべく直ちに府教育委員会に報告した。

府教育委員会と市教育委員会は、協議に基づいて、大師山古墳およびその周辺の遺跡についてより詳細なデータを得るために現地踏査を実施した。そして、大師山古墳およびその他数ヶ所の古墳と思われる部分について、遺跡確認のため試掘調査の必要があり、遺跡と確認された場合は、公園緑地等にしてこれの保存活用できるよう配慮願いたい旨、昭和44年1月10日付、府教委教育長名で日生住宅株式会社あて回答するとともに、さらに協議を重ね、昭和44年2月25日から同月26日まで試掘調査を実施した。

この調査は、大阪府教育委員会文化財保護課技師堀江門也氏が担当した。試掘調査は、西端から順次東奥へとトレンチを設定し調査した結果、大師山古墳の東約200mの2地点において土器（弥生式土器・土師器・須恵器）の細片や炭を包含することを確認したのみで他の数ヶ所については、墳頂と思われる部分にトレンチを設定して掘り下げてみたものの、すぐ堆山に達して遺構・遺物の存在等は確認されなかった。また、昭和5年の調査の際、墳丘と覺しき隆起として指摘のあった部分についてトレンチを設定したが、遺跡と確認することはできなかった。

ただ大師山古墳については、トレンチを数本設定したところ、埴輪部と埴輪片の存在とを確認した。しかしトレンチ調査のみで、これら調査地点についての結論を下すには至らなかつたため、次回改めて本格的な調査を実施することとし、その結果を待って遺跡の保存活用について関係者が協議検討することとなった。

以上の経過から、大師山古墳の発掘調査は、関西大学名誉教授末永雅雄先生を調査顧問とし、大阪府教育委員会文化財保護課技師井藤義氏を調査担当者とし、関西大学文学部助教授（当時）網干普教指導のもとに同考古学研究室学生が参加して大師山古墳発掘調査団を編成し、昭和44年10月13日より本格調査を実施した。以下調査日誌を抄録する。

大師山古墳発掘調査日誌（抄）

10月13日 本日より調査を開始。午前9時、南湘南野線三日市町駅集合後、現地にて慰靈祭を執行する。写真撮影後、草刈り作業と併行して大師山古墳外形実測を開始する。

10月14日 草刈り作業と外形実測を続行する。

10月15日 大師山古墳草刈り作業についてはほぼ完了。外形実測を続行する。

10月16日 墳丘北寄りに構築されている古墳表示を中心にして、南側および東南方向にトレンチを

設定する。過去の削平時に堆積した土層を除去し、旧表土層の検出を行なう。埴輪片・赤色顔料が出土。

10月17日 トレンチ間の削平時堆積層の除去および旧表土層の検出作業を続行。埴輪片が出土。

10月18日 古墳南斜面における旧表土層の検出を進めた結果、南側斜面中央部付近でくびれ、その後東方へ直線的に延びていることが判明する。この結果、大師山古墳は從来言られてきたような

円墳ではなく、前方後円墳である可能性が強まつた。南側斜面中央部や東寄りの堆積土層中より不明鉄器片が出土。古墳表示南側の斜面は、過去における削平のもっとも著しい箇所と推察され、高さ約1mの崖状を呈している。またその裾部は平坦であるが、ここに主体部周辺の土砂が削り捨てられたものと思われ、赤色顔料を含む多量の粘土塊が散乱している。

10月19日 大師山古墳外形実測を完了。その成果からも前方後円墳の可能性が強まる。墳丘西側にトレンチを設定する。また、J地区の草刈り作業を開始する。

10月20日 各トレンチの発掘を続行する。

10月21日 古墳前方部中央に継断トレンチを設定し発掘にかかる。上面は地山と考えられる砂層であり、前方部頂部は地山面にいたるまで削平されていることが判明。

10月22日 前方部設定トレンチの発掘作業続行。
10月23日 J地区の草刈り作業完了。

10月24日 後円部西斜面を除いて、前半時の土砂がかなり斜面に堆積していることが判明したため、全面にわたり堆積層を除去することに決定。これに併行し、旧表土面での外形実測を行なう。

10月25日 堆積層の除去作業を続行。午後よりの降雨のため、作業を中止し下山する。

10月26日 垢痕層の除去作業を続行。なお、北側くびれ部より赤色顔料検出。

10月27日 引き続き、堆積層の除去を行なう。北側くびれ部より円筒埴輪片、後円部南斜面より鉄製品を検出。

10月28日 北側くびれ部の旧表土層検出作業完了。ここにいたり、前方後円墳であることを確認。円筒埴輪片多数検出。墳丘北側では、堆積層は2層になっており、二度にわたり削平されたことが判明。

10月29日 堆積層除去作業を続行。

10月30日 除去作業を続行。J地区は、草刈り作業後の写真撮影を行なう。

10月31日 除去作業を続行。

11月1日 本日の作業により、堆積土は後円部西斜面を除く全斜面におよんでいることが判明。

11月2日 堆積土を除去した部分の旧表土面外形実測を行なう。

11月3日 堆積土の除去作業を続行。

11月4日 後円部南斜面堆積土層中より、石剣・車輪石・管玉等石製品を検出。後円部古墳表示

の撤去を開始する。

11月5日 古墳表示の撤去を続行。旧表土面の



第13図 後円部調査風景

外形実測を続行。

11月6日 古墳模型・堆積土の除去作業を続行。

11月7日 古墳旧表土面外形実測を続行。古墳表示の撤去を完了する。コンクリート製の箱を検出。内部より木棺片・布袋に入った石剣・車輪石片22個検出。

11月8日 旧表土面の外形実測を終了する。古墳各土層を実測する。

11月9日 堆積土除去を続行。墳丘土層を実測。府立泉大津高校教諭石部正志氏の引率により同校地歴部員調査に参加。また、市立工業高校地歴部員も調査に参加。

11月10日 調査参加者の疲労が目立ちはじめ、このため、本日は現地作業を休み、全員遺物および図面の整理にあたる。

11月11日 大師山古墳各土層を実測。

11月12日 引き続き墳丘土層を実測。

11月13日 後円部北側堆積土除去作業中に旧表土面上より円筒埴輪片を検出するが、原位置を移動している。墳丘土層を実測。

11月14日 墳丘土層の実測を続行。

11月15日 墳丘土層の実測を続行。本日よりJ地区の地形実測を開始。

11月16日 雨のため現地作業を中止。全員宿舎で遺物、図面の整理にあたる。

11月17日 現地作業を中止し、説明会用資料の作成にかかる。

11月18日 大師山古墳各土層の実測を行なう。J地区地形実測を続行。

11月19日 市立三日市小学校3・4年生社会科授業として現地見学にきたためこれの説明にあた

る。J地区地形実測を続行。

11月20日 J地区地形実測を続行。

11月21日 大師山古墳後円部南側より車輪石片出土。なお、市立三日市中学校生徒現地見学のため、説明にあたる。



第14図 調査風景

11月22日 大師山古墳堆積土層の除去を続行。午後より降雨激しく作業中止。

11月23日 大師山古墳堆積土層の除去作業とトレンチ断面の土層実測を併行して進める。J地区地形実測を行う。

11月24日 前日に引き続き各作業を進める。

11月25日 大師山古墳後円部南側斜面より、主に土質のものと考えられる赤色顔料混入粘土塊多量と共に車輪石片1が出土する。

11月26日 大師山古墳堆積土層の除去を続行。J地区地形実測を続行。市立三日市小学校1・2・5・6年生現地見学のため説明にあたる。調査終了を市庁報紙に公表のため、資料を提供する。

11月27日 大師山古墳発掘作業を終了する。J地区地形測量も終了し、発掘を開始する。その他の地点についてもトレンチを設定し発掘する。なお、地元市民から、J地区付近採集弥生式土器破

片の届け出を受ける。

11月28日 J地区頂上部を発掘するも遺構・遺物は確認されず。

11月29日 現地説明会を開催する。地元市民をはじめとする約100名の見学者がある。J地区北端部より弥生式土器片を検出する。

11月30日 降雨のため、作業を中止し、上原町所在駒穴古墳を見学する。駒途、市教委社会教育課長と面会し、大師山古墳の現状保存を要望する。

12月1日 作業を中止し、遺物および画面の整理を行う。

12月2日 J地区南側の発掘を行う。

12月3日 昨日に引き続きJ地区的発掘を行う。なお、市立小山田小学校4・5・6年生現地見学のため調査経過を説明する。

12月4日 作業中止。

12月5日 J地区発掘続行。

12月6日 昨日の作業続行。

12月7日 J地区引き続き発掘。

12月8日 作業中止。全員で調査経過を総括する。

12月9日 大師山古墳発掘完了。各トレンチの土層を実測する。J地区発掘続行。

12月10日 前日の作業を続行する。

12月11日 J地区東縁平坦部にトレンチを設定し、これを発掘する。

12月12日 J地区東縁平坦部若干の弥生式土器出土するも遺構確認できず。地山に達し、発掘作業終了する。

12月13日 J地区各トレンチの土層を実測する。

12月14日 補足調査を行い、第1次調査本日をもって終了する。

第3節 大師山古墳の外形

大師山古墳は、昭和5年、同地に於て大師堂再建のための地ならし工事が行なわれた際、遺物の出土を見た。このことから翌6年1月より、大阪府の調査するところとなり、「……奥行20尺に近く、本来大形の丸塚なのを推し得た。」と報告され、このため今日に至るまで径約60mの円墳として周知されてきた。

今回、調査が着手されるにおいて現地を訪れた際、当該地は隆起を残さないまでに削平されており、古墳の所在する丘陵西端部より南北に派生する小支尾根の中間部に、セメントを古墳様に丸く隆起させ、礫石を混じえた施設および記念碑が建立されていた。

ところが調査にあたって、当該丘陵のある50m×80mの地域の地形測量をした結果、第15図に示したように、前方後円形を呈したため、前方後円墳の可能性が強く考えられるようになった。このため西端後円部にあたる部分に放射状に、またその東側前方部にあたる部分は等高線に直交する形で各所にトレンチを設定し、先に府教育委員会の遺跡確認調査において確認され、旧地表面と考えられている黒色土層を追求した。この結果、後円部南側および前方部において、過去に墳丘を削平した際、排除された多量の封土、主に（黄褐色土）が堆積していることが判明した。また墳丘頂部においては現地表下約10cmで地山の検出を見た。しかもこのことから確認された黒色土層面を追求するため、さらに20本以上のトレンチを掘り、確認した旧地表面の測量を行った結果、第17図に示したように、両側くびれ部、後円部南側および前方部東面において、さらに整然とした前方後円形を呈していることが判明した。

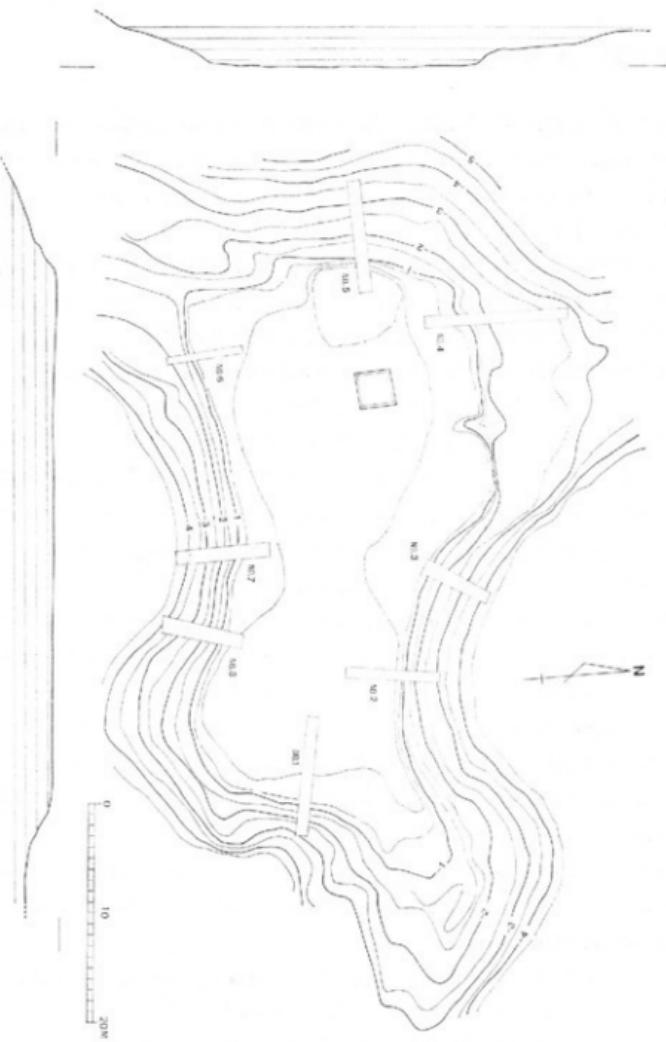
トレンチの概況を示すと、トレンチNo.1にみられるように地山上約10~15cmにわたって現地表面が続き、西端部で傾斜しているが、約1mの厚みで、旧封土と考えられる黄褐色土が堆積し、その下にさらに約10cmの厚みで旧表土の黒色土層が確認された。したがってこの傾斜面で封土の残存はみられない。

No.2 トレンチは北方にのびる前方部に入れたトレンチで、ここでも若干厚みのある現表土を除去すると、約1mの厚みで、黄褐色土の堆積を見る。さらにこの下で部分的に灰褐色の土が残存するが、地山に達する。

No.3 トレンチは北側くびれ部に設定したが、ここでは明確に旧地表（地山）と現地表の腐蝕土間に、この黄褐色土が0.8~1mにわたって残存している。

No.4 トレンチは、北側にのびる後円部に設定したものであるが、このトレンチでは、北側に尾根が分岐する地点にあたるため、旧表土と現表土の分離がむずかしく、図に示したことと、右側墳丘に近い部分で、若干黄褐色の封土が残存しているのが看取される。

次に、No.5 トレンチは西にのびる後円部のほぼ中央に主軸に平行して入れたトレンチであるが、ここでも、前方部に比べると少ないが約40~50cmの厚みで地山（旧表土）に封土（黄褐色

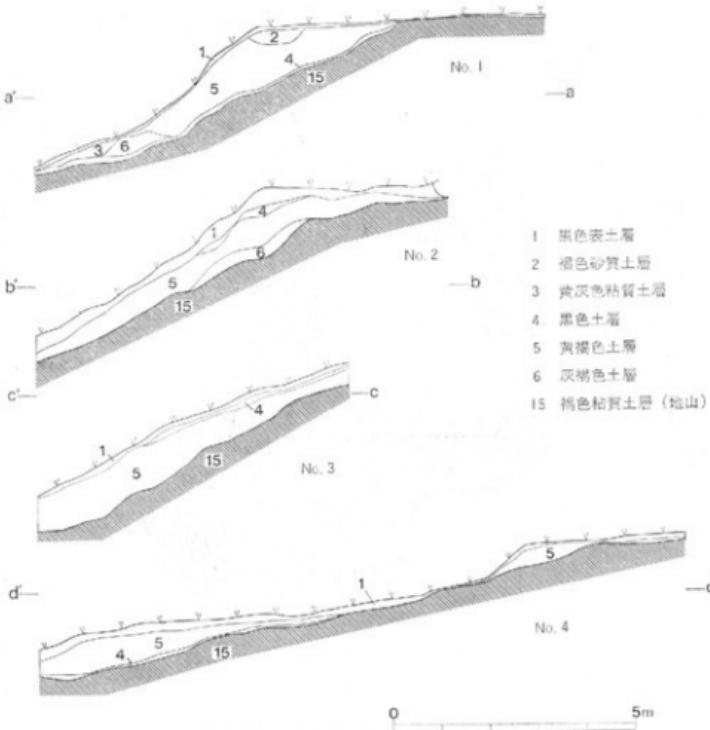


第 15 圖 填 丘 測 量 圖 (1) (主要トレンチ配置図)

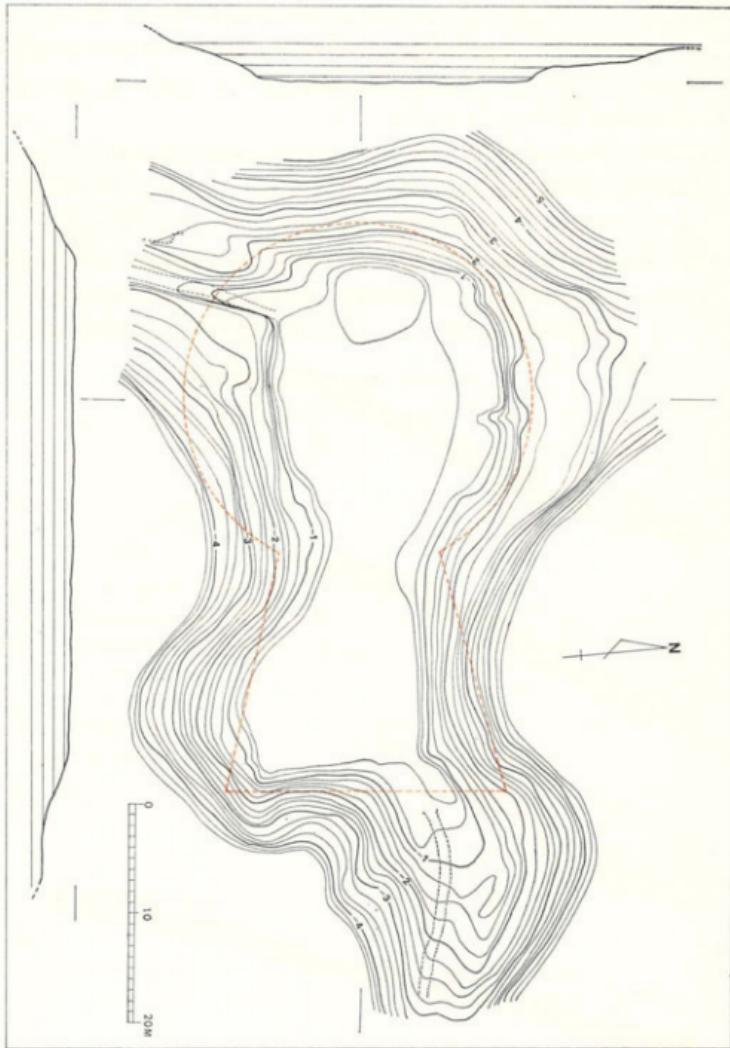
土) がおされ堆積している。

さらに後円部、南側のNo.6 トレンチ断面では、北側に入れたトレンチに比較すると、やや複雑な断面を呈している。雖然としているが地山上には20~30cmの厚みで黄褐色土層(封土の残存か?)が残っており、その上部には約0.8~1mの厚みで、削平された封土の一部が堆積している。しかし、このトレンチでは顯著に旧地表が表われていることが判明する。削平された封土は何回かの堆積を受けているようである。

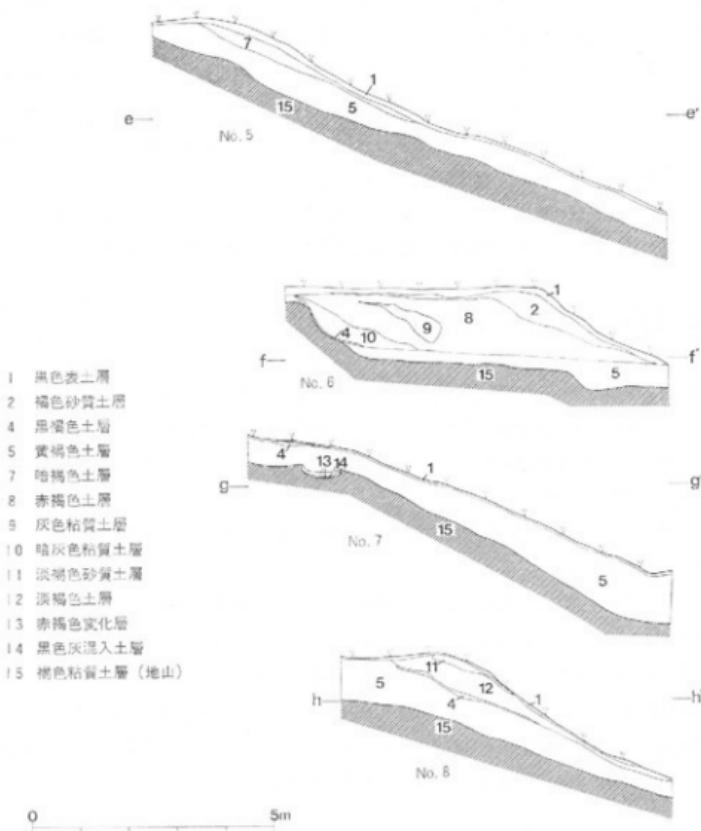
さらに南側くびれ部ではNo.7 トレンチを入れたが、ここでの堆積の仕方は前述しているごとく、單調に、地山上に黄褐色土が残存している。ただ、このトレンチで注意しなければならないことは、壇丘頂部に近い所で、赤褐色の燒土を伴う遺構と、炭化した炭の残存する黒色土層が地上直上に約40cmの幅で確認されたことである。これが、いかなる施設であるのかは明らかにしがたい。また時期に関しては、明確ではないが、古墳築造当時もしくはそれ以前のものであることは、土層断面の層位から確認される。同様な遺構が大師山遺跡の調査で明らかにされ



第16図 土層断面図(1)



第17図 填丘測量図(2) (外形復元図)



第18図 土 壴 断 面 図 (2)

ており、参照願いたい。当該施設に関しては、今後の課題となろう。

前方部にはNo.8トレンチを設定したが、ここでは、他のトレンチと異なることは、表土下に褐色の封土を削平した土層がみられるが、さらに明確に約10cmの厚さで旧表土が確認でき、地山上にさらに約50~70cmの厚さで封土の堆積がみられる。このことから前方部南側斜面では封土の削減は少なかったようである。

上記したように各トレンチの所見からみられるように、古墳全域にわたって、地山直上もしくは部分的に残存している封土上に旧表土が堆積しており、これが後円部のみでないことが判明する。以上のことから、大師山古墳の墳形は、墳丘の大半が削平工事によって損なわれてい

るもの、主軸をN-86°-Eにむけた、ほぼ東西に主軸をもつ前方後円墳であることが確認された。古墳は、丘陵上に築造されていることや後円部北側に小堂建立時の石垣構築によって、地形の変化を受けていること、そして若干の円筒埴輪が出土しているもののいずれも原位置を保っているものはないことなどにより、墳丘基底部を明確には指摘しえない。しかし、第17図に示したように、旧地表の測量からみると、全長約52m、後円部径約30m、前方部幅約25mを測ることができよう。高さは基底部と考えられるところから現状削平面上端まで約2.5mである。このようにトレンチ調査の結果から、丘陵上に地山を整形して築かれた前方後円墳であることが確認された。また墳丘上には苔石・周濠の存在は確認できなかった。

第4節 大師山古墳の内部構造

大師山古墳の内部構造に関しては、今回の調査において、後円部中央の周辺の表土を排したことろ、青灰色の粘土塊を若干確認しただけで、明確な遺構を検出することはできなかった。とくに後円部の封土の削平が著しく、地山が現地表面の直下にみられるため、既に主体部は被壊されたと考えるべきであろう。

このような観で、主体部の構造に関しては、昭和16年1月の梅原末治博士による調査によつて推せざるを得ない。⁽¹⁾

上記の報告には古墳の外形略図および遺物の出土図がみられるが、(第12図)これによると棺材と考えられるやや彎曲した木材(今回調査の際コンクリート箱内より出土したものと考えられる。)を中心にして、それを取り巻くような形で粘土が被覆されている。これらのことから、棺材の彎曲状態によって、棺は割竹形の木棺を推測できる。また粘土の被覆状況から考えられる強い可能性としては粘土牆が推せられるが、断定することはできない。また棺の方向としては、これも前記報告によると、東西に(主軸に平行に)位置していたようである。

第5節 遺物の出土状態

昭和5年の大師堂再建に伴う工事を含め、数回の地ならし工事によって削平されたため、当初その外形すら明確でなく、かろうじて残存していた墳丘裾部の形状より、前述のごとく前方後円墳と判定するにいたった。

埋葬主体においては、おびただしい削平を受けていたため、精査したにもかかわらず、ついに何らの遺構すら確認し得なかった。しかしながら、今回調査を実施するにあたり、墳丘を中心として設定したトレンチを発掘した結果、削平排除された土砂は後円部南側より同じくくびれ部にかけての堆積がもっとも多く、ついで北側くびれ部、そして前方部先端に多く堆積していた。

今回出土の遺物は後円部南側の排除された堆積土砂中より出土した遺物群と、昭和5年の工事により出土した遺物のうち、後円部中央や北寄りにしつらえられた古墳模型（円形）の中再埋納されていた遺物群に分けられる。以下各遺物群の出土状態について述べてみよう。

排除した堆積土層より出土の遺物群、即ち、墳丘裾部出土遺物として、埴輪・石製品・管玉・赤色顔料付着粘土塊があげられる。これらはいずれも原位置を保つことなく出土している。このうち埴輪は、地ならしにより削平を受けた墳丘平坦部表土直下および、墳丘斜面堆積土層より破片となり散乱状態を呈して出土している。なお、削平を受け、封土が全般的に斜面へと排除されているにもかかわらず墳丘平坦部より出土する埴輪については、原位置を移動している距離は比較的短いものと考へてよからう。

いまひとつ、埴輪片が、排除堆積土のほとんど認められない後円部西側を含め、後円部をめぐるような形で出土し、さらに同部墳頂平坦部より出土していることをあわせ考へるならば、埴輪は後円部の埋葬主体部を中心として並べていたことも充分推察される。なお、斜面出土の埴輪は、堆積土中の下部、即ち、旧地表面直上付近に多いことから後円部墳頂全面にわたる規模で段階的に削平したものと考へた方が妥当であろう。石製品においては、後円部の南側にトレンチを設定したところ、現墳頂部より下った、傾斜のやや陥しくなった付近の旧地表面上、排除堆積された黄褐色土層下部より石鉗・車輪石片と管玉1個を検出した。

これをその出土の位置関係でみると2群になって出土し、そのうちの1群は石鉗・車輪石・管玉、他の1群は石鉗・車輪石となる。また、これら遺物の出土する地点に赤色顔料の付着した粘土塊も検出し、後述する古墳模型から検出したものと同質である。

以上の出土状態から、当初副葬品として埋葬主体施設中にあるはずのこれら遺物が、過去における何回かの地ならし工事、とくに昭和5年の大師堂再建の地ならし工事によって、埋葬施設とともに後円部南側斜面裾部に廻棄されたものと考へられる。

次に、いまひとつの遺物群が検出された、後円部中央や北寄りにつくられていた円形の大師山古墳模型内の遺物出土状況について述べてみよう。昭和5年の大師堂再建に伴う地ならし工事により大師山古墳の削平が行われ、それに伴い遺物が出土したことは大阪府史跡調査報告3および本章第1節で述べられているとおりである。この時出土した遺物については、その大半が現在、東京国立博物館において保管所蔵されていることは第6節で述べるとおりである。しかしながら、後円部南側より石鉗・車輪石・管玉が今回の調査で検出されており、また削平はされてはいるものの、残存墳丘の全面調査を実施するにあたり、後円部南側以外にも遺物が散乱していることも考えられたため、後円部中央や北寄りの大師山古墳模型を撤去することになった。古墳模型は径約2.5m、高さ1mの円墳状になっており、その表面には平坦な河原石を全面に貼りつめていた。その周囲には、石囲いをめぐらせ2基の石碑を建立していた。

古墳模型を撤去するにあたり、貼石および表面のコンクリートを取り除くと、内部より湿

氣を帯びた封土、地山土および赤色顔料の付着した粘土塊が出土した。さらにこれらの土砂等を排除するとコンクリート塊が出土した。外部から打撃を加えることによりその内部が空洞であることが判明したため、蓋部をはずすと水の張られた内部より長さ0.95mの木棺片および、木綿の布袋をくるんだ石製品を検出した。これらはいずれも昭和5年の地ならし工事中に出土したもの一部であり、調査終了後再埋納されたものであることを確認した。

第6節 出 土 遺 物

第1項 発掘調査による出土遺物

今次の発掘調査で出土した遺物は次のとおりで、木棺残片を除いて、副葬品とみられる石製腕飾類にいたるまで、墳丘裾、とくに南裾の堆積土より多く出土した。なお、古墳々丘土中より弥生遺跡に関係するとみられる石器が1点出土した。

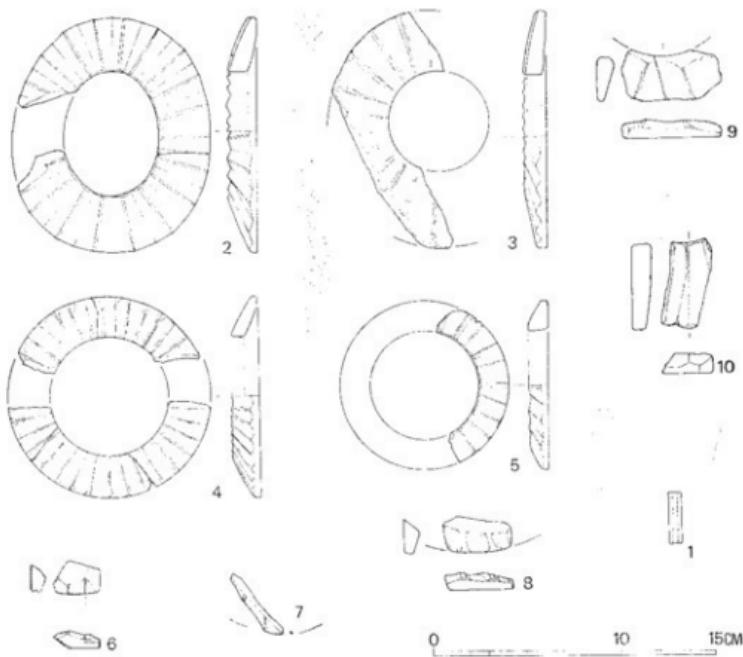
管 玉	1 点	車 輪 石	9 点
石 銅	9 点	鉄 器 片	2 点
埴 輪 片	多 数	木 棺 片	1 点

管 玉 (第19図一1, 図版第13)

1. うすい緑色を呈する碧玉製品である。長さ2.7cm, 直径6.9mmで、両小口には、直径2.8mm, および、2.0mmを計測する穿孔がみられる。

車 輪 石 (第19図2~10, 図版第13)

2. 淡青灰色を呈する緑色凝灰岩 (グリーンタフ) 製品で、長径12.6cm, 短径10.6cm (推定) の楕円形を示し、内径は6.8×5.0cm, 高さは1.6cmである。復原すると、「V」状に20条の凹部を放射状に刻み、稜および谷には幅約1.5mmの線刻を施す。
3. 灰色を呈する風化の著しい緑色凝灰岩製で、復原長径約12.6cm, 同短径約10.6cmの楕円形を呈するものとみられ、内径は5.1×4.5cm (推定), 高さは1.3cmである。復原すると、「U」状に21~22条の凹部を放射状に刻み、するどい稜線をつくり出しているが、稜・谷には線刻はみられない。
4. 青灰色を呈する緑色凝灰岩製で、外径11.0cm, 内径6.4cm (いずれも推定値) のほぼ正円形のもので、高さは1.5cmを計測する。復元すると、「U」状に約36条の凹部を刻み、するどい稜線をつくり出している。
5. 灰色を呈し、(車輪石4) の石質に極似する緑色凝灰岩製で、外径8.8cm, 内径5.6cm (いずれも推定値) 高さ1.0cmを測る正円形のものとみられる。「U」状に凹部を刻み、稜と谷には幅約1mmの線刻を施しているが、本品は平坦である。
6. 青灰色を呈する珪板岩製の細片である。上斜面は(車輪石2) の手法と同じであるが、



第19図 石製品実測図(1)

幅の狭い側面には1条の沈線をめぐらす。

7・8. 灰褐色を呈する緑色凝灰岩製の細片で、上斜面の手法は(車輪石3)に似る。

9. 灰褐色を呈する緑色凝灰岩製の細片で磨耗がいちじるしい。上斜面に幅の広い「U」状の凹部を刻み、その稜には幅約1mmの線刻を施す。

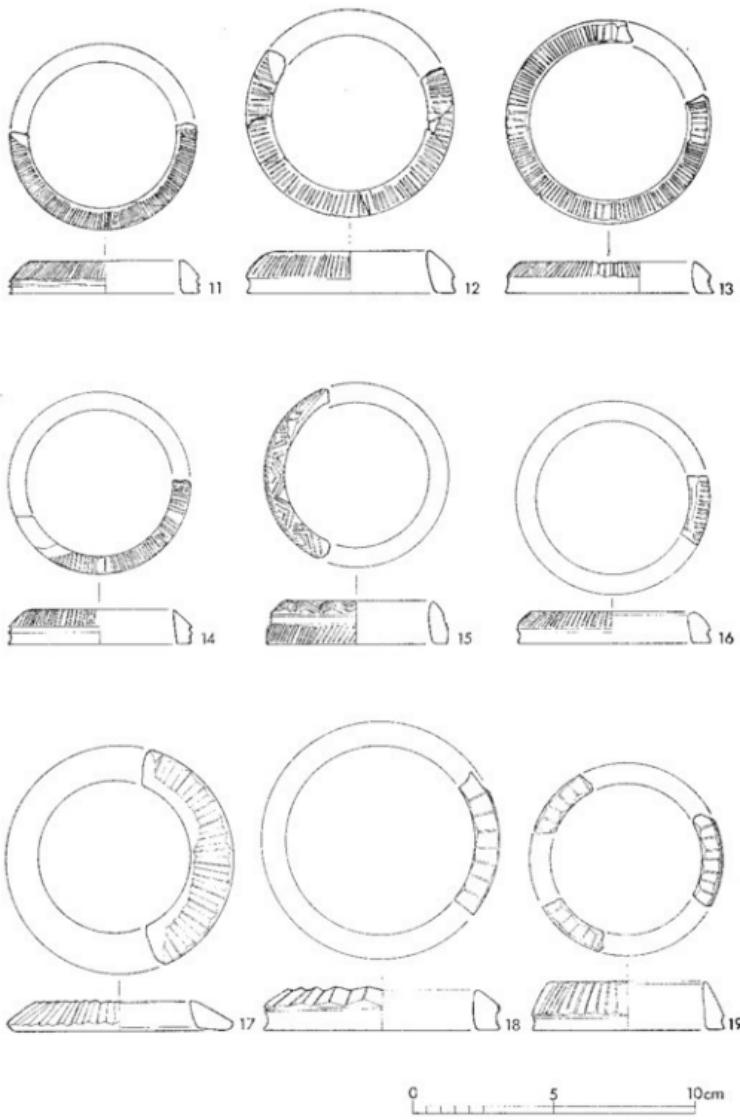
10. 灰褐色を呈する緑色凝灰岩製の細片で(車輪石2)と同様、梢円形状を示すものとみられる。上斜面に「U」状の凹部を刻み、するどい稜をつくり出している。

石鉄 (第20図11~19, 図版第14~15)

11. 灰色を呈する緑色凝灰岩製で、外径6.8cm、内径5.3cm、高さ1.2cmを測る。上斜面は、放射状に細かな刻目を施し側面には2条の匙面取りをめぐらしている。

12. 灰色を呈する緑色凝灰岩製で、(石鉄11)の石材に同質であるが、とくに風化がいちじるしい。外径7.5cm、内径5.6cm、高さ1.45cmを測る。上斜面は、(石鉄11)と同じく放射状に細かい線刻を施すが、側面の匙面取りは1条である。

13. 青灰色を呈する珪板岩製で(車輪石6)の石材と同質で、外形7.1~7.35cm、内径5.6~5.7cmのやや梢円形を示し、高さ1.2cmを計測する。上斜面には、放射状に細かい刻目を



第20図 石製品実測図(2)

施すが、円周を四等分する位置の4ヶ所に「V」状の凹部を2単位ずつ配す。上斜面と側面との頂部には細かい線刻を施し、広い側面には大きな匙面取りを1条めぐらす。

14. 灰色を呈する緑色凝灰岩製で、復原外径6.5cm、同内径約5.2cm、高さ1.2cmを計測する。上斜面には、放射状に細かい刻目を施すが、復原すると円周を六等分する位置の6ヶ所に「V」状の凹部を1単位ずつ配し、側面には2条の匙面取りをめぐらす。
15. 灰色を呈する緑色凝灰岩製で、復原外径6.7cm、同内径約5.3cm、高さ1.55cmを計測する。上斜面に、4~6本で構成される、波長約1.3cmの線刻鋸齒文を施し、側面の下半に斜行する刻目を施している。側面の上半には1条の匙面取りをめぐらし、上下の刻文帯との間にそれぞれ1条の線刻をめぐらす。
16. 灰褐色を呈する緑色凝灰岩製の細片で、高さ1.1cmを測る。上斜面には、放射状に細かな刻目が施され、側面には1条の匙面取りがめぐらされている。
17. 灰色を呈する緑色凝灰岩製で、復原外径8.2cm、同内径約5.2cm、高さ1.05cmを計測する。広い上斜面には、復原して、約41条の「V」状凹部を放射状に施すもので、底面は内傾し、顯著な側面をもたない。正円形の車輪石に近い形状を呈す。
18. 灰褐色を呈する緑色凝灰岩製で、復原外径約8.3cm、同内径約6.5cm、高さ1.45cmを計測する。上斜面には、幅の広い「V」状凹部を施し、棱および谷には、さらに、幅1mm前後の線刻を施している。側面には、幅の広い匙面取りを、肩部に線刻をそれぞれ1条めぐらす。⁽⁶⁾

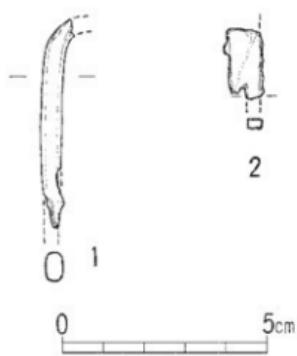
19. 青灰色ないし灰色を呈する緑色凝灰岩製で、復原外径約6.8cm、同内径5.3cm、高さ1.7cmを計測する。傾斜のつよい上斜面には、石剣18と同様の手法を用い、肩部に1条の線刻と、側面に1条の匙面取りをめぐらす手法も石剣18に同じであるが、薄身で高く、精巧に作成されている。

鉄器残片（第21図1・2）

- 断面梢円形を呈する棒状鉄器細片で、両端を欠失しているが、一方は、直角に近く曲折させている。
- 長方形の断面を呈する棒状鉄器細片で、両端を欠失している。錆化により、大きな錆泡が生じておらず、原形を観察しがたい。

埴輪片（第22図1~5 図版第15）

概して、明るい黄褐色粘土に、ゴマ粒大の砂を混入した円筒埴輪類で、まれに、小石を含むものもある。封土とともに流れ落ちてゐるため、器面の剥落、磨耗が著しいが、器表



第21図 鉄器残片実測図

のハケ目を観察できるものもある。

1. 朝顔形埴輪 2 点のうちの一つで、口縁部および円筒部との接合部（頸部）を欠失しているが、頸部より外方へ大きくひろがる口縁部は、粘土帯の積み上げ部で曲折してさらに外方へひろがり、曲折部外面にはタガを施している。

2. 細かい砂を多く含む円筒埴輪で、朝顔形埴輪の肩部に近いものとみられる。

3. 器表に赤色顔料がみられる。円筒埴輪などを代表するとみられる 4・5 に比べ、極めて細い円筒部をもつことから、特殊な埴輪の可能性がある。

なお、ハケ目を横方向に使用したものがある（図版第15—6・7・10）。

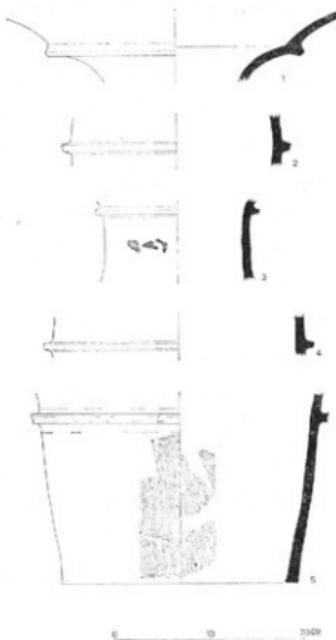
木棺片（第23図 図版第4・12・13）

墳頂上に保存されていた木棺片は、長さ 95cm、幅 18cm、厚さ 4cm を計測し、高野模を材質とする。

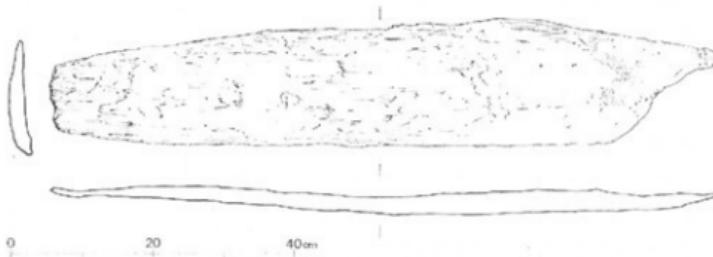
すでに、一度洗浄されたり、また、保存状態も必ずしも良くはなく、現状からは、原形その他については計り知れない。ただ、下図でも明らかなように、棺材自体にゆるやかな彎曲があり、これが棺の性格を考える上で参考になるであろうことは、先に述べたとおりである。

石鎌（第24図）

後円部南側の堆積土中より出土したもので、平面が二等辺三角形を呈する平基無茎式の



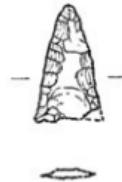
第22図 墓輪実測図



第23図 木棺片実測図

もので、長さ2.1cm、基底部幅1.25cm（復原値）を計測する。

両面に広い大斜面をもち、刃部はおもにステップ・フレーリングにより仕上げている。尖頭部の欠損が著しい。弥生時代中期に属するものとみられる。



第2項 既発見の出土遺物

1. 大阪府史蹟名勝天然記念物調査報告第三輯「別載・南河内 郡三日市村大師山古墳」に記載された遺物。

第24図 墳丘出土石鎌実測図（奥寸大）

昭和5年12月17日に発見された大師山古墳出土遺物について、梅原末治氏の報告内容を整理すれば、およそのとおりである。

- 1 内行花文鏡 破碎残欠1面。面径5寸3分。仿製鏡
- 2 管 玉 8個のうち1個は紛失。7個のうち1個は表面風化、他は光沢ある碧玉製。短い1個を除いて、他は9分6厘～7分3厘。
- 3 鍔 形 石 1個。長さ4寸。碧玉製完形品。
- 4 紡 鏡 車 4個。碧玉製。
- 5 車 輪 石 10個（うち破片1個）と石鉗との中間型を示すもの6個。
- 6 石 鉗 破片を加えて13個。そのうち8個は完形。
- 7 剣 身 類 短剣が少なくとも3口。小刀1口。

上記遺物のほとんどが、東京国立博物館に保管されているので、重複をさけるため個々の説明は次項にゆずる。

2. 東京国立博物館所蔵の大師山古墳出土遺物

上記の出土遺物のうち東京国立博物館に保管されている遺物は下記のとおりである。

内行花文鏡	1面	鍔 形 石	1個
管 玉	7個	紡 鏡 車	4個
車 輪 石	13個	石 鉗	8個

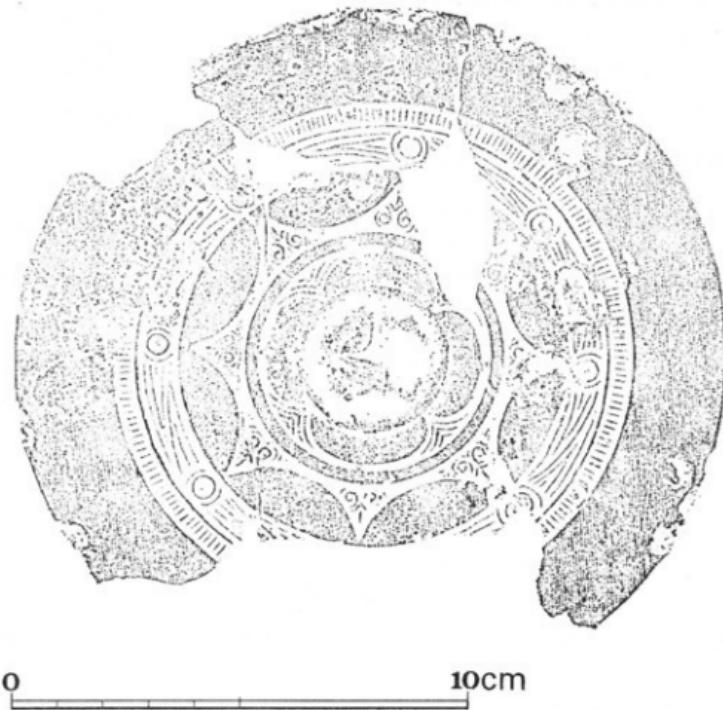
次に上記遺物について簡単な観察を加える。

内行花文鏡（第25図、図版第16）

面径約16cmを計り、漆黒色に近い滑沢を残す部分もあるが、全体に錫化が著しく、破碎し、損傷もはなはだしい。広い素縁から内区にかけては、柳歯文帯・有節松葉文帯がめぐり、内行花文帯・平頂突圓帯を経て、四葉座にいたる文様構成をもつ（東京国立博物館遺物番号23856）。

鍔 形 石（第26図-1、図版第16）

長さ12.3cm、最大幅8.1cmを計測する。裏側に嵌の太い溝を削込んだ小さな頭部に比べ、環体部は6.8×5.4cmの卵形の環孔をもうけ、細い環体をつくり出し、右環体は大きく外方



第25図 内行花文鏡 拓影

(東京国立博物館蔵)

へ張り出している。板状部は 79.5×6.0 cmで、左側はほぼ直線状に下端にいたる。右側は、環体下部の突起部下端をするとく刺り込み、彎曲しながら外方へ張り出す。

なお、突起部は上下端を含めて、上下にそれぞれ2本の凸帯を飾りつけている。石材は不純物の多い碧玉とみられ、入念な作成で、緑色の滑沢をみる(東京国立博物館遺物番号23852)。

管 玉 (第26図2~8・図版第17)

今次の発掘調査において出土したものに大きな差異はなく、下表のとおりである(東京国立博物館遺物番号・一括23857)。

第1表 管玉一覧表

図版番号	挿図番号	長さ	直径	石質	色調	備考
17	26-2	2.9	0.75	碧玉	暗緑色	
17	26-3	2.9	0.8	"		
17	26-4	2.5	0.7	"	"	
17	26-5	(1.1)	0.65	"	"	破片
17	26-6	1.95	0.59	不明	淡暗緑色	風化が著しい
17	26-7	2.25	0.7	碧玉	暗緑色	
17	26-8	2.21	0.68	"	"	

4. 紡錘車 (第26図9~12・図版第17)

扁平に近い下底部をもち、上面には同心円的に施した削りかたによって、4~5段に成形したもので、中央には、径3~4mmの円孔を穿つ。それぞれの計測値などは下表のとおりである。

第2表 紡錘車一覧表

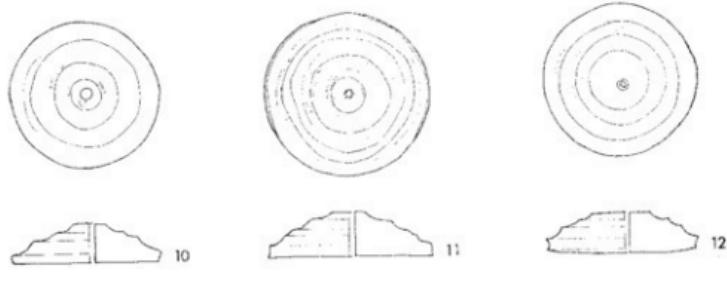
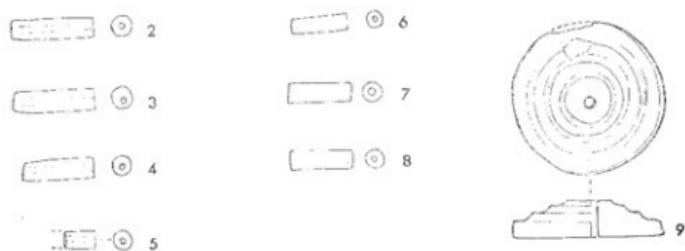
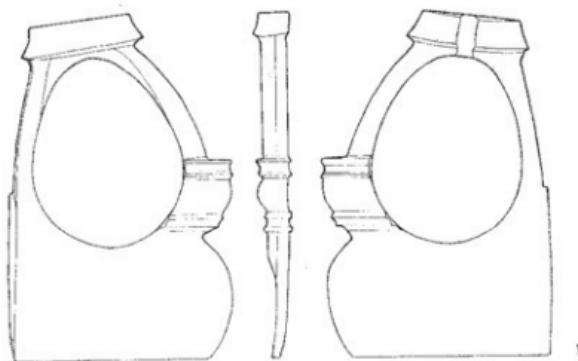
図版番号	挿図番号	直径	高さ	石質	色調	東京国立博物館蔵物番号	備考
17-9	26-9	5.4	1.3	綠色凝灰岩?	青灰色	23861	4段・小欠
17-10	26-10	5.25	1.4	"	黄淡褐色	23860	4段
17-11	26-11	5.9	1.6	"	綠色	23858	5段
17-12	26-12	5.45	1.5	碧玉	淡緑色	23859	4段 鉄錆付石

5. 車輪石 (第27・28図1~10 図版第18~22)

椭円形を呈するものと、正円形のものとがあり、後者に属するものの中には、形態上、石劍に近いものまで含まれている。計測値などは第3表のとおりである。

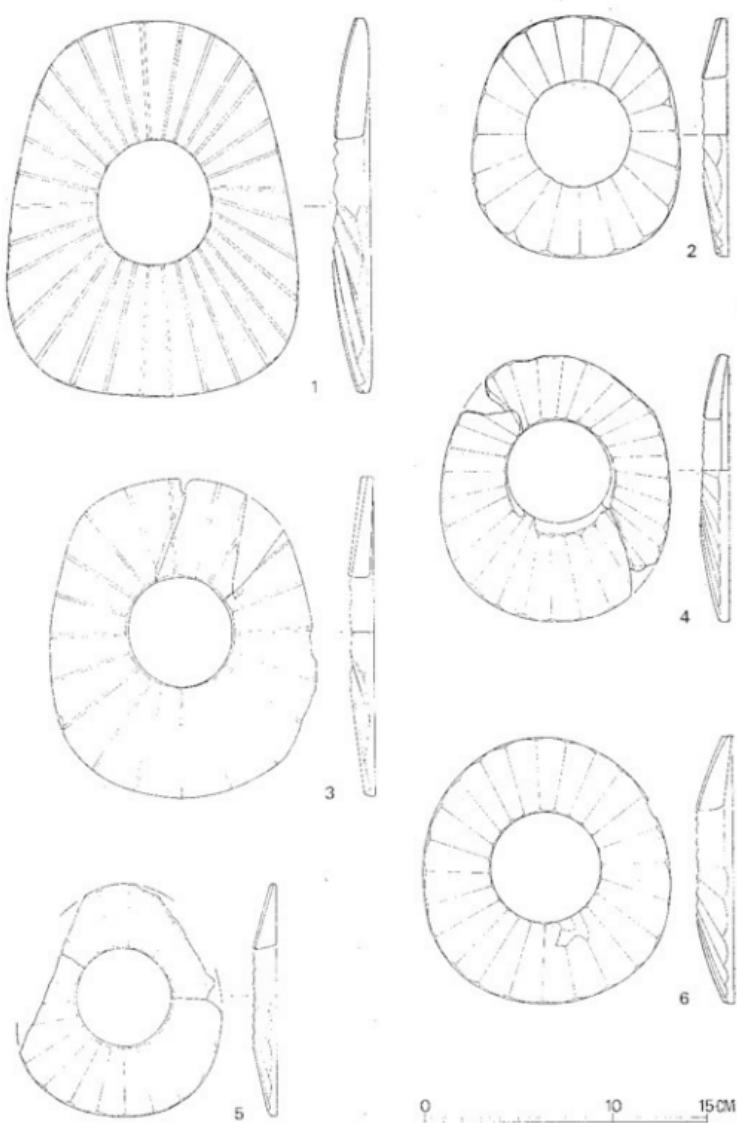
6. 石劍 (第29・30図 図版第23~26)

円形の車輪石に近い形状のもの、両面に刻目をもつもの、素文で巻貝を切断した形状を示すものなど、種類が豊富である。第4表により、形状・大きさなど示す。



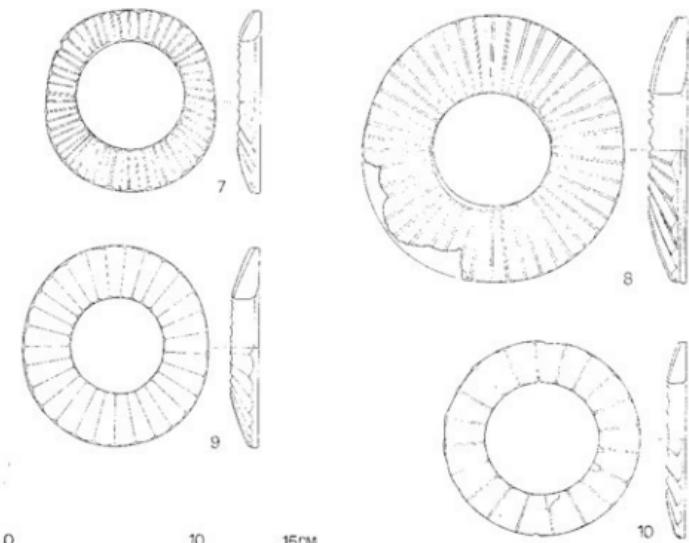
0 5 10cm

第26図 石製品実測図(3) (東京国立博物館蔵)

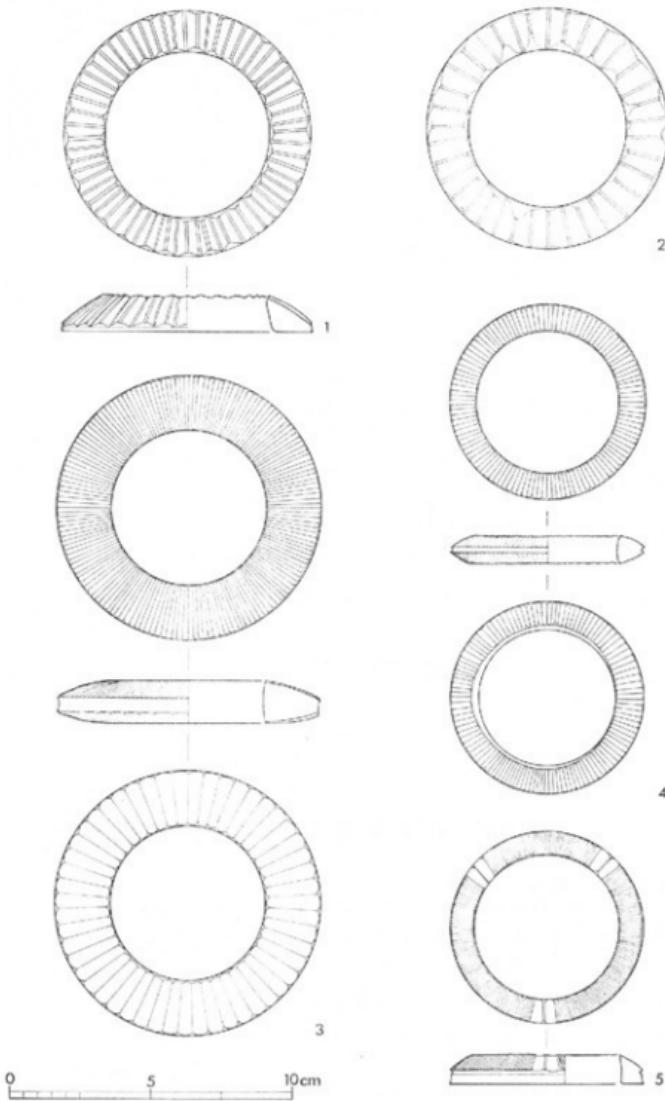


第27図 石製品実測図(4) (東京国立博物館蔵)

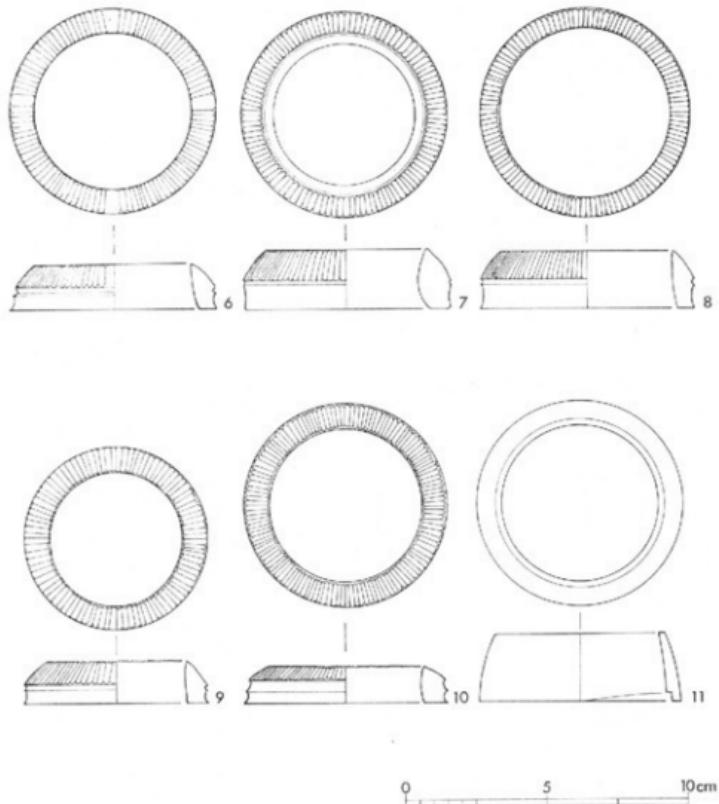
第 3 表 車輪石一覽表



第28圖 石製品實測圖(5) (東京國立博物館藏)



第29図 石製品実測図(6) (東京国立博物館蔵)



第30図 石製品実測図(7) (東京国立博物館蔵)

第4表 石剣一覧表

図版番号	捕獲番号	外径(cm)	内径(cm)	高さ(cm)	石質	切り方	東京国立博物館 遺物番号	備考
23-1	29-1	8.75~8.8	5.9	1.3	緑 凝灰岩?	↑↓↑↓↑↓↑↓	23880	
23-2	29-2	8.6~8.65	5.65		"	"	23883	
23-3	29-3	9.4	5.5	1.5	"	~~~~~	23879	両面に刻目 側面は1条の匙面取り をめぐらす。
24-4	29-4	6.85	4.9	1.0	"	~~~~~	23865	両面に刻目 狭い側面は1条の縦刻 をめぐらす。

24-5	29-5	6.8~6.85	5.15~5.2	1.0	様 色 凝灰岩?		23868	円周を三分する位置に各々2条の広い削り方を配す。
24-6	29-6	7.3	5.5	1.6	"		23870	円周を四分する位置に各々1条の広い削り方を配す。
25-7	30-7	7.35	5.05	2.15	"		23863	
25-8	30-8	7.55	6.05	2.07	"	"	23867	
25-9	30-9	6.5	4.75	1.5	"	"	23869	
26-10	30-10	7.15	5.45	1.3	"	"	23864	側面には2条の匙面取りをめぐらす。
26-11	30-11	7.15	5.6	2.4	"	なし	23866	下端内面にえぐりを入れる。

第3項 大師山古墳副葬品の内容復原

先節1に示した出土遺物は、その出土状態から埋葬部より出土したことは明白で、そのうち、鏡・車輪石・石劍・管玉・紡錘車などは木棺片に接して出土したという状況から、石製腕飾類など多くの遺物は棺内副葬品とみられる。⁽¹³⁾ まだ、このほかに、剣・刀子の鉄器類が木棺片とは離れて出土している状況から、棺外壇内副葬品かもしれない。

このような出土状況の遺物に、今次の発掘調査によって得た出土遺物を加えると大師山古墳に埋納された副葬品の確実な数量は、次のようにまとめることができる。⁽¹⁴⁾

内行花文鏡	1 面	鏡 形 石	1 個
管 玉	8~9個	紡 锤 車	4 個
車 輪 石	15~16個	石 剣	16~17個
剣	3口以上	刀 子	1 口

剣・刀子を棺外壇内遺物とみた場合、棺内副葬品の紡錘車に鉄錆の付着がみられるところから、このほかに鉄器が副葬されていたことになる。

なお、地区民によれば、勾玉が出土したという話もあって、観玉としての勾玉の存在も予想することが可能である。

以上、大師山古墳の副葬品の種類・数量などの復原を試みたが、石製腕飾類は、数量では岐阜県・長野古墳、三重県・石山古墳に次ぐおびただしい出土をみ、古墳時代前期におけるこれらの分布状態を考えるととき、きわめて重要な位置を占める副葬内容といえよう。⁽¹⁵⁾

第5表 石製腕飾類対照表

梅原末治氏報告			本報告		
	東京国立博物館 遺物番号	図版番号	災禍図	発掘資料	
車輪石として 特徴の明らかなもの	23871	図版第三六の口	第27図1		
	23872	" 第三七の1	" 3		
	23874	" 第三七の3	" 6		
	23878	" 第三八	第28図9		
	23881	" 第三七の2	" 8 第19図6	車輪石6	
	23873		第27図2		
	23877		" 5 第19図7-8	" 7-8	輪
	23882		第27図4		
	破片(不明)		第19図10	" 10?	
			" 2	" 2	
石			" 3	" 3	
			" 4	" 4	石
小計	10		" 5	" 5	
			" 6	" 6	
石劍との中間型	23875	図版第三七の5	第28図10		
	23876	" 第三七の4	" 7		
	23879	" 第三七の6	第29図3		
	23880	" 第三七の7	" 1		
	(23883)		" 2		
	破片(不明)			石劍 17?	
計	16				
石	23863	十五図中列上より2	第30図7		
	23864	" " 3	" 10		
	23865	" 左列上より1	第29図4		
	23866	" " 3	第30図11		
	23867	" " 4	" 8		
	23868	" " 2	第29図5		
	23869	" 中列上より4	第30図9		
	23870	" " 1	" 6		
	破片	" 右列上より1	第20図15	" 15	
	"	" " 2	" 11	" 11	
劍	"	" " 3	" 16	" 18	
	"	" " 4	" 19	" 19	劍
	破片(不明)			" 12	
				" 13	
計	13			" 14	
				" 16	
計	9			総計 16~17	

第7節 結語

河内長野市三日市町萩ノ前に所在する大師山古墳付近一帯で宅地造成工事が行なわれることになった。それにともなう事前調査は、大阪府教育委員会によって実施され、以後同委員会と河内長野市教育委員会および開発業者の間で行政的な手続きがすすめられていた。しかし大師山古墳については、昭和5年の工事によって墳頂部が削平されているが、墳丘の原形の確認とその復原考察等の諸問題についての調査がなお十分でなかったため、改めて大阪府教育委員会と河内長野市教育委員会が調査を実施することになった。今回の調査は諸般の事情によって、「大師山古墳発掘調査団」が編成されることになり、調査の実施や調査後の報告書の刊行等にも関係することになった。

調査の経過、古墳の構造、出土遺物については前節において記述したが、ここでは調査の成果について総括しておきたい。

すでに記した如く、大師山古墳は昭和5年12月の大師堂建立のための工事によって、内行花文鏡¹面をはじめ、鎌形石・車輪石・石飼・紡錘車・管玉および鉄劍等、多量の遺物が出土した。この調査報告書（以下『梅原報告』と略記する）によって、大師山古墳が日本における古式古墳（前期古墳）の代表例として多くの文献に引用されてきた。

一例を挙げると斎藤忠氏は『日本古墳の研究』のなかで、付録Iとして「古墳編年表」を挙げているが、それをみると「畿内古墳」の項ではこの大師山古墳がもっとも古く編年されている。また同書本文中においても木棺の1示例として「大阪府大師山古墳ではや内削のある長大な杉材とみなされる木片が存し」とし、古墳の「初現的なすがた」として立地、外形、主体部構造、副葬品について四つのかたを挙げ、「古墳としての古い系列、いわばその初現的なすがたの例に入れてよいものである」と述べ、大師山古墳が万葉山古墳や得能山古墳と共に挙げられている。

斎藤氏が古墳の編年上の初現として挙げることについてはなお問題があろうが、この大師山古墳は、わが国における古墳研究の上で重要な意味を示すものであるといえる。

先ず大師山古墳の立地をみると、丘陵尾根上の地形を利用して築造されている。かつて末永雅雄先生が古墳の立地について第1分類から第5分類にわけられ観察されているが、この分類に準拠するならば、大師山古墳は第1分類（丘陵利用の築造）に該当するといえる。さらにまたこの第1分類のうち高い山頂を利用したものと、あまり高くない丘陵利用とに細分されているが、大師山古墳は比較的前者の範疇に含まれるものと理解することができる。すなわち金剛山系と和泉山系から延々と続く丘陵尾根の標高約190mの丘陵頂部を極めて有効に利用して築造されたものと考えてよい。

次に外形についての問題である。昭和5年の遺物出土に統いて、昭和6年の梅原末治氏らの

調査に際して、墳形についての所見は『梅原報告』に大形の丸塚と推定され、以後この大師山古墳は円墳として取扱われてきた。このことは近時に至るまで踏襲され、大阪府教育委員会編『大阪府文化財総合分布地図』にも「円墳・粘土塚」として挙げられている。⁽¹³⁾

また北野耕平氏はこの所見をもとに『河内長野市の大師山古墳のような優秀な副葬品を多量に埋納していた例も存在するが、その場合にも壇丘の形状が円墳で直径10mにも満たぬものであったといえど、この地域には古墳文化の時代の動向に応じるような有力な豪族が在地していたとは考えがたいことであろう』と論述されたこともあった。⁽¹⁴⁾

今回の調査目的の一つはこれを確かめることとし、より精密な外形実測図を作成し、また壇丘と思われる範囲の斜面に多くの試掘溝を設定し、削平前の旧地表面と壇丘の確認を行なった。その結果、大師山古墳は主軸をN-86°-Eにする全長約52m、後円部径約30m、前方部幅約25m、壇丘の高さは基底部と推定する位置から現状の削平面まで約2.5mあり、築造当初の外形は前方後円墳であったことの確証を得た。これは今回の調査成果の一つとして挙げができる。したがって昭和15~6年の調査の際に検出された主体部に関する『梅原報告』と照合すると、主体部は後円部のほぼ中央、主軸にそって施設されていたことが判明した。

また外部施設として、埴輪片の検出によって、壇丘に埴輪列がめぐっていたことも認めることができた。『梅原報告』には埴輪の有無については全く述べられていないが、大師山古墳に埴輪が存在していた新しい知見が得られたことは、多量の石製品を含む副葬品が出土した古墳の年代や特徴を考える問題とも関連するであろう。

次に主体部についてみると『梅原報告』によるとその時点ですでに削平のため確かめることができなかった。今回の調査にあたっても、主体部の検出、もしくは痕跡の把握につとめたが、結果として何らの実証も得られなかった。したがって主体部の構造は『梅原報告』より観察を深めることはできなかつたが、収納されたコンクリート箱内より再検出した木材片は『梅原報告』では杉材と推定されていたが、高野楓であり、その形態からみて割竹形の木棺ではないかと想定することができる。なお『梅原報告』の調査所見によると6尺ほどの範囲を粘土をもって覆っていたと記しているから、主体部の構造は粘土塚とみることが妥当であろう。

以上のように推定するならば、この大師山古墳に近接する地域での粘土塚を主体部施設とする古墳の事例は若干ある。

昭和42年10月の確認調査によって全長50mの前方後円墳であり、主体部構造が壇丘主軸と平行であったと推定される羽曳野市壺井御旅山古墳⁽¹⁵⁾、昭和37年5月発掘調査された全長約65mの前方後円墳であり、後円部に主軸と直交する位置に、粘土棺床の上に竪穴式石室を構築し、硬玉製勾玉・碧玉製管玉・武器などを副葬した主体部と、前方部に主軸と平行に2基の粘土塚を設け、そのうち第1号塚には高野楓の棺材と共に内行花文鏡1面のほか鉄製武器、工具があり第2号塚には三角縁神獣鏡1面および武器類の副葬品が検出された羽曳野市駒ヶ谷護摩堂の駒ヶ谷宮山古墳⁽¹⁶⁾、昭和36年8月発掘調査された全長約60mの前方後円墳で、壇丘主軸と平行の粘

土塚があり、三角縁神獸鏡1面・平縁鏡（推定1面）、碧玉製管玉・筋鉢車および鉄製武器・工具が検出された富田林市新堂の富田林真名井古墳⁽¹⁷⁾。玉手山古墳群中にあって後円部に堅穴式石室と粘土塚、前方部にも2基の粘土塚があり、堅穴式石室内から鏡形石をはじめ、管玉・巴形銅器・銅鏡・鉄鏡・鉄製工具など、後円部粘土塚では斧・鎌・鎌など鉄製工具、前方部北塚から碧玉製筋鉢車・直刀・工具、南塚から石鏡・鏡などが出土した柏原市国分の玉手山5号墳⁽¹⁸⁾。後円部に2基の堅穴式石室があり、東石室からは内行花文鏡・勾玉・管玉・直刀・鉄鏡・鉄斧などが出土し、西石室から神獸鏡・管玉・刀劍・銅鏡・小札などが出土した6号墳がある。あるいは、宅地造成のため削平されて外形は明確でないが、僅かに残存した粘土塚内から三角縁三神三獸鏡帶鏡2面、二神二獸鏡1面、硬玉製勾玉110個、多量の碧玉製管玉、7片の石鏡や石製品・鉄製武器・工具などが出土した柏原市国分ヌク谷の国分ヌク谷北塚古墳⁽¹⁹⁾。昭和27年後円部の発掘調査によって堅穴式石室が判明し、昭和41年7月その前方部の発掘調査によって粘土塚内に振文鏡1面、鉄劍等が出土した柏原市円明北玉山古墳⁽²⁰⁾。また古市古墳群の地域では、方墳で鏡・玉・短甲の出土した珠金塚古墳、円墳で鏡・玉・短甲・馬具の出土した板塚古墳⁽²¹⁾、帆立貝式の前方後円墳で後円部粘土塚より鏡・玉・短甲・衝角付冑・銅鏡・盾等が副葬されていた后塚古墳⁽²²⁾。さらに地域を拡大すれば、景初三年銘の鏡をはじめ多くの遺物が出土した和泉市上代所在の和泉黄金塚古墳があり、百舌鳥古墳群中において大塚山古墳などをその一例として挙げることができる。

粘土塚を埋葬主体とする古墳は必ずしもこの河内・和泉地域に限らないことはいうまでもないが、大師山古墳の近接する地域にあるヌク谷北塚古墳・駒谷宮山古墳・玉手山4号墳等では、いずれも墓塚の底部の棺床部付近に礫石を充填した構造を示すもので、京都府寺戸大塚古墳の堅穴式石室と同様の基礎構造を示すものとして、これを類型化・系譜化する動向もあるが、果してそれらに有機的関連性があるかどうかは今のところ明確にすることはできないであろう。

大師山古墳の主体部構造が、すでに昭和5年の時点で破壊され、削平されてしまったという事情があって、これらの古墳と同様な系列と考えることが明らかにすることはできなかった。今回の調査でもこの点特に注意して作業をすすめたが、それとおぼしき礫石等の敷布は認められなかった。しかし先きに挙げた古墳の主体部構造に粘土塚を有するものが散見し、『梅原報告』に福井瑞法氏からの見聞として粘土を用いたことが明らかであることから、これらの古墳と構造的に全く無関係であるとは思われない。調査の結果、それ以上言及することはできないが、可能性のみを付言しておくことにとどめる。

次に出土遺物についてみると「第2章第6節 出土遺物」の項で記したとおり、『梅原報告』に挙げられ現東京国立博物館が所蔵する点数のほか、再埋納のコンクリート箱に残留していたもの、および、今回の調査によって検出した遺物を併せると、従来の知見より増加する結果となつた。

このように多量の石製品を副葬する古墳の事例は、岐阜県不破郡赤坂町矢道の長塚古墳⁽²⁵⁾、三重県上野市才良の石山古墳⁽²⁶⁾、奈良県天理市櫻木町の東大寺山古墳⁽²⁷⁾などを代表的なものとして挙げることができる。しかしながら、これらの古墳を通観してもわかるように、石製品のうち銀形石・石劍・車輪石の比率に必ずしも共通した点を見出すことはできない。たとえば長塚古墳では木棺を主体とした一つの主体部から神獸鏡3面、銅鏡・翡翠勾玉・管玉・環頭大刀と共に銀形石3個が出土し、後出の他の一つの主体部からは神獸鏡2面、内行花文鏡1面、四脚付合子1個、硬玉製勾玉2個、管玉145個、鉄製武器などと共に、石鏡70個（第2回39個、第3回31個）の多量の遺物が出土している。このうち第3回出土の石劍のうち車輪石と思われるものが1個ある以外は車輪石はみられない。これに比して石山古墳では3基の粘土樺中、最も小規模な西箱内から鏡2面、銀形石10個、石劍13個、車輪石44個のほか紡錘車・異形石製品・勾玉・管玉・武器類が併出したといわれる。やはり粘土樺を主体とする東大寺山古墳では、銀形石27個、車輪石26個、石劍2個のほか、勾玉・管玉・東玉・銀形石製品・異形石製品・筒形石製品など多量の石製品と共に、中平□年銘のある铁刀をはじめ銅製環頭4個、巴形銅器7個、銅鏡・鐵鏡・直刀・劍・槍身・革印・革摺などが出土した。しかし、鏡の副葬はみられなかったといわれる。このようにみると、鏡との共存関係、あるいは銀形石・車輪石・石劍の組合せ乃至はその数量自体にもかなりの相違があるといえる。

大師山古墳における遺物の出土状態は「梅原報告」によると、学術的に正確に遺物の副葬状態乃至は出土位置が確められたものでもなく、その数量にも信憑性が疑われる。したがってすでに判明している資料からだけで判断はできないと思われる点もある。それはともかくとして、現に判明している量のみをみても従来の所例に比較すると多量であることは誤りない。こうした遺物を副葬する古墳の性格やその組合せ、数量がどのようなことを示しているかという問題は早急な結論を引出すことはできないが、将来検討を要する重要な課題であるといえる。

次に遺物の個々の研究課題がある。すでに高橋健自氏によってその先鞭はつけられ、さらに小林行雄氏によってその分析が試みられたことがあったが概してこれらに関する研究はあまりすんでいないともいえる。また小林氏は古墳に副葬されている鏡群のなかに新古の二相のあることに着目し、これに銀形石・石劍・車輪石などの碧玉製腕飾類との関係を考察されたことがあった。しかし、この目的は鏡の新古両様式の性格を論じるために用いられた資料であって、鏡を伴出した資料のみを取扱われたものであった。したがって、鏡を伴出しない古墳については深く追求されていない。ここにも将来に課せられた問題があると考える。

大師山古墳における鏡は岐阜長塚古墳の場合と同様1面にしかすぎない。この点は共通するが、これのみをもって立論の根拠とすることは危惧な点がある。

次に大師山古墳の所在する近隣の地域での銀形石・車輪石・石劍の出土した古墳を挙げておくこととする。

すなわち富田林市真名井古墳では紡錘車3個、同市鍋塚古墳では石鏡8個（または10個）、羽

曳野市駒ヶ谷宮山古墳では石剣片6片、柏原市国分ヌク谷北塚古墳では石剣片5個体分、同市松岳山古墳では銀形石1個、石剣27個以上、同市勝負山南方5号墳では銀形石1個、藤井寺市城山古墳では車輪石2個、同市唐塚古墳では石剣1個などの出土例が知られている。これみると大師山古墳の隣接地域ではこの種の石製品の副葬例が多いことが知られよう。

なお從來碧玉製として総称されてきた石製品のなかに綠色凝灰岩（グリーンタフ）と呼ぶべき石材が混同されているというご教示を、関西大学工学部教授亀井清・谷口敬一郎両先生から受けた。このことはすでに先年刊行した『谷畠古墳』に記述しておいたが、本古墳の石製品にもこのグリーンタフを材料としたものが多く含まれており、本書考察篇において再録した。

最後に大師山古墳の築造年代の問題がある。古墳の立地、前方後円墳の形態、埴輪の存在、粘土構を埋葬主体部とする構造、さらには内行花文鏡や銀形石・車輪石・石剣・紡錘車等の石製品の副葬等の資料からみて、斎藤氏が編年表に位置づけられた前期古墳の条件をもつものであるが、畿内最古一わが國におけるもっとも古式の古墳であるとは考え難い。また、すでに指摘される如く大師山古墳および隣接地域における前期古墳としては、富田林市真名井古墳、柏原市国分ヌク谷北塚古墳、羽曳野市駒ヶ谷宮山古墳についてはその築造時期を4世紀後半に比定されている。また柏原市玉手山古墳群、柏原市松岳山古墳群については凡そ4世紀の築造年代を与えられている。こうした古墳および古墳群との比較において、大師山古墳は前Ⅲ期に編年される古墳、強いて実年代で示せば4世紀後半に位置づけることの方がより正確ではなかろうかと考えるものである。

〔註〕

1. 柏原米治「南河内郡三日市村大師山古墳」『大阪府史稿名勝天然記念物調査報告』第3輯 1932年
2. 大師山古墳出土遺物として、東京国立博物館に保管されている車輪石 №23881に同一個体。
3. 大師山古墳出土遺物として、東京国立博物館に保管されている車輪石 №23877に同一個体。
4. 註1報告書第十五回大師山古墳発見石剣形式図中の右列（破片）上より2個目に同一個体。
5. 同上・右列（破片）上より1個目に同一個体。
6. 同上・右列（破片）上より3個目に同一個体。
7. 同上・右列（破片）上より4個目に同一個体。
8. 註1報告書に換れば、昭和15年発見当時に
は、もとは長大なものが腐朽したとみられる
木棺片2片は、やや内側を呈し、鏡の置か
れていたとみられる盛り上りや、その他の遺
物がおかれていたとみられる盛り上りには布
目の跡が遺存していたことが観察されてい
る。
9. このほかに若干数の散逸資料が予想される
が、昭和5年の遺物発見時における処置や、
今次の発掘調査の方法からみて、大きくは変
らないものとみられる。
10. 小林行雄「前略古墳の副葬品にあらわれた
文化の二相」『古墳時代の研究』 1961年
11. 斎藤忠『日本古墳の研究』 1961年
12. 末永雅雄『日本の古墳』 1961年
13. 大阪府教育委員会編『大阪府文化財総合分
布図』 1969年
14. 藤直幹・井上薫・北野耕平『河内における
古墳の調査』『第6章』 1964年
15. 大阪府教育委員会『羽曳野市真名井御旅山前

- 方後円墳発掘調査概報』 1968年
16. 北野耕平『河内における古墳の調査』「第4章 駒ヶ谷宮山古墳」 1964年
 17. 北野耕平『第3章富田林真名井古墳』『河内における古墳の調査』 1964年
 18. 北野耕平『玉手山古墳の調査』『大阪府の文化財』 1963年
北野耕平『玉手山古墳における二古墳の調査』 稲原考古学研究所編『青波』第9号 1959年
 19. 北野耕平『河内における古墳の調査』「第2章 因分メク谷北蒙古墳」 1964年
 20. 宮永雅雄・富田好久『北飞山古墳』関西大学考古学研究室紀要第1冊 1963年
大阪府教育委員会『北玉山前方後円墳発掘調査報告—第2次調査』 1965年
 21. 前出『河内における古墳の調査』「第1章 序説」13~14頁 1964年
 22. 宮永雅雄・鷲田曉・森浩一『和泉黄金塚』 1954年
 23. 京都大学考古学研究室向日町丘陵古墳調査
EJ「京都向日町丘陵の前期古墳群の調査」「史林」第54巻6号 1971年
 24. 田中勝弘「前期古墳の堅穴式石室構造について」『史想』第16号 1973年
 25. 藤井治左衛門「岐阜県不破郡青森村矢道長塚古墳」『考古学雑誌』第19巻第6号、「同第2回発掘品報告」同誌同巻第7号、「同第3回発掘品報告」同誌同巻第9号 1929年
 26. 小林行雄「三重県名賀郡石山古墳」『日本考古学年報』1(1951年) 3(1955年)
 27. 金閥鉄「東大寺山古墳の調査」『大和文化研究』7巻11号 1962年
東京天理教館『大和東大寺山古墳』天理ギャラリー第43回展目録 1975年
 28. 青橋健白「車輪石・鏡形石・及び石鏡の研究—付貝器の青銅化」『考古学雑誌』15巻6号 1920年
 29. 大阪府教育委員会『鎌塚古墳発掘調査概要』 1966年
 30. 小林行雄『松柄山古墳の調査』 1957年
 31. 棚原町教育委員会『谷畠古墳』 1974年

第3章 大師山遺跡

第1節 調査の契機と経過

大師山古墳の発掘調査を進行させるうち、昭和44年11月27日に、地元三日市町の一市民より当該丘陵地の散歩中に採集した弥生式土器片(高杯脚部)数個体分が調査団に提供された。また、河内長野市教育委員会より提示のあった地図にも、弥生式土器片の採集地点が2ヶ所記されており、これを契機に本地域における弥生式遺跡の精密な分布調査を実施する必要性のあることを確認し、同年の調査は12月14日をもって一時中断された。

明けて翌45年2月23・24の両日にかけて分布調査を実施した結果、5ヶ所において、弥生式土器包含層および焼土断面を確認した。そして、これら資料をもとに、河内長野市教委に対し弥生時代の遺跡の存在することを報告し、併せて遺跡保存について善処するよう要望した。これにより、2月25日、市教委および日生住宅、ならびに調査団の間で最終協議を行い、3月2日より大師山遺跡の調査を実施することとなった。調査の経過は、以下の調査日誌により抄述する。

大師山遺跡発掘調査日誌（抄）

3月2日 本日より大師山遺跡の調査を開始する。午前中現地の下見を行い、午後より発掘開始。E地区にグリッド設定。土器および炭化土層が地表面に露出しているのが認められる。

3月3日 E地区、グリッド拡大。また、古墳調査時のJ地区の西方において、ピットとともに住居址状遺構を検出。（第1号住居址）

3月4日 昨夜からの雪のため、本日の作業は中止。

3月5日 1号住居址は円形住居の南半分が残存している模様。床面より裏形土器2個体出土。E地区、グリッド写真撮影、断面実測。C地区、トレンチを設定。

3月6日 E地区、グリッドを増加。1号住居址の床面検出作業を続行。E地区の東方にトレンチ設定。C地区は発掘続行。E地区の東方北斜面にトレンチ設定するも、造構等何ら認められず。（I地区）



第31図 D地区的調査風景

3月7日 I地区、トレンチ断面実測。1号住居址、周辺部地山検出作業。C地区、さらにトレンチを増加し、発掘を続行する。

3月8日 E地区東方にトレンチ拡大、窓跡らしき焼土層を確認（第5号焼土層）。C地区、発掘続行、弥生式土器多量に出土。大師山古墳前方部北側より、焼土層断面が露出しているのを発

見。断面実測後発掘にかかる（第1号焼土壙）。古墳北方の斜面にて性格不明の石組みを検出する。工事区域北端より焼土壙2基確認。発掘にかかるも、土砂崩れの危険があるため実測できず、写真撮影のみで打ち切る。

3月9日 E地区周辺の調査を続行する。

3月10日 E地区東方にて設けた第1・第2トレンチの北壁断面実測。第1・第2トレンチ間に新たに第3トレンチを設定。D地区、トレンチを設定。

3月11日 大師山古墳前方部北縁焼土壙を発掘する（第1号焼土壙）。D地区、トレンチより弥生式土器多量に出土。

3月12日 1号住居址東側より溝状遺構検出。住居址は溝により東半分を欠損していることが判明した。第5号焼土壙は発掘を続行。C地区、Bトレンチ西壁断面実測を行う。

3月13日 1号住居址東側溝状遺構の発掘。E地区、グリッド断面の実測作業。

3月14日 第5号焼土壙は地山を掘りくぼめた半地下式平窓様の遺構であることを確認。C地区、A・Bトレンチ西壁断面実測。

3月15日 D地区、発掘続行。各トレンチとも全面にわたって、多量に弥生式土器の出土が見られる。C地区、トレンチ断面の実測作業。午後、雨のため作業を中止する。

3月16日 午前中雨のため作業中止。午後から第5号焼土壙の発掘を続行する。E地区東方の南斜面にトレンチ設定（H地区）。E地区、写真撮影のため清掃を行う。

3月17日 第5号焼土壙平面プラン実測。1号住居址東方約120mの尾根上において、堅穴式住居址検出、第2号住居址と称する。H・G・F地区的斜面に計3本のトレンチを設定。H・G地区は遺構・遺物とも何ら認められないが、F地区より弥生式土器が多量に出土。D地区、写真撮影のためトレンチ内を清掃する。

3月18日 第5号焼土壙発掘。床面および焚き口状の部分を追及する。E地区、B-1グリッドより焼土壙を検出（第4焼土壙）。D地区、Bトレンチより焼土壙を検出（第3号焼土壙）。2号住居址の発掘続行。北および東部は造成工事によって削平され、断崖となっている。

3月19日 第5号焼土壙の発掘を続行。東壁は一部地山を掘りくぼめてあるが、西壁は床面より壁を構築しており、斜面をL字状に掘削して構



第33図 2号住居址検出状況

築した平窓状の構造であることが判明した。E地区、B-1グリッドで第4号焼土壙を精査。精円形のプランを呈し、内部には炭灰り灰層の堆積が認められる。

3月20日 第5号焼土壙・D地区的発掘を続行する。

3月21日 D地区、第3号焼土壙の実測および断面観察。その結果、土器包含層を掘り込んで構築していることが判明。

3月22日 E地区、グリッド南側であらたにピットを検出。グリッド断面の実測。D・F地区、発掘続行。第5号焼土壙の平面プラン実測。

3月23日 第5号焼土壙平面・断面の実測作業を行う。東側よりあらたに焼土壙を検出、発掘調査を始める。

3月24日 第5号焼土壙の東南隅より昨日、検出した焼土壙を発掘、および実測を行う（第6号焼土壙）。F地区、発掘続行。斜面上方で地表面より地山まで約150cm、下方で約120cmの遺物を含む土層の堆積が見られる。

3月25日 F地区、発掘続行。

3月26日 C地区、Bトレンチの第2号焼土壙の発掘にかかる。2号住居址より鉄棒出土。



第34図 4号焼土壙の移築状況

3月27日 C地区、第2号焼土壙の発掘を行う。2号住居址の発掘を続行する。

3月28日 昨日の作業を続行し、発掘を完了する。2号住居址については、写真撮影を行う。

3月29日 C地区、第2号焼土壙写真撮影。第2号住居址の平面実測を行う。

3月30日 昨日に引き続き、2号住居址の実測を行う。

3月31日 第2号住居址の実測を完了し、本日

をもって大師山遺跡の発掘調査を終了する。しかし、窓跡移築作業が4月8日に予定されているため、また、工事の進行により、あらたに遺構が発見された場合の事態に対応するため、2名を現地にとどめ、万全を期することとした。

4月8日 E地区4号焼土壙・5号焼土壙の移築作業。市内天野山金剛寺境内へ運搬・移築する。

第2節 大師山遺跡の概要

大師山遺跡の発掘調査は、宅地造成工事に先がけて実施した大師山古墳の発掘調査を進めたなかで、地元市民からの弥生式土器片の提供や、工事用進入路断面に露呈した弥生式土器の埋蔵状況を確認したことを契機とする。こうしたことから、本造成地域全般にわたり遺跡の存在している可能性があり、したがって調査の必要性を痛感し実施したものである。ただ、遺構等の存在予想地点については、従来考えられがちであった丘陵稜線上の調査のみにとどめず、前述の土器出土地点の地形をも参考にし、稜線上・丘陵斜面の両面にトレンチを設定したことである。この調査方式により、以下に述べる成果を得た。

当丘陵は、金剛葛城山脈と和泉山脈との交点付近より北西に派生する一支尾根の端部に位置する。そこにおいて、主稜線はほぼ東西に走行しており、その南北それぞれに更に支尾根が派生するが、概して南側に派生する尾根が北側のそれに比して短く、したがって一層急峻な地形を呈している。本丘陵の全域をみると、西側は眼下河川の蛇行により大きく抉り取られて80mにおよぶ崖を形成し、東側は山深く、北側は主稜線より支尾根が複雑に入り組んでいる。

このため本遺跡は、北から西側にかけての展望はよいが、逆に眼下の平坦部から本遺跡に対する接近は、その地形から容易ではなく、要害の地であるかのように見える。

以下、各遺構等の分布について西から順に記述する。

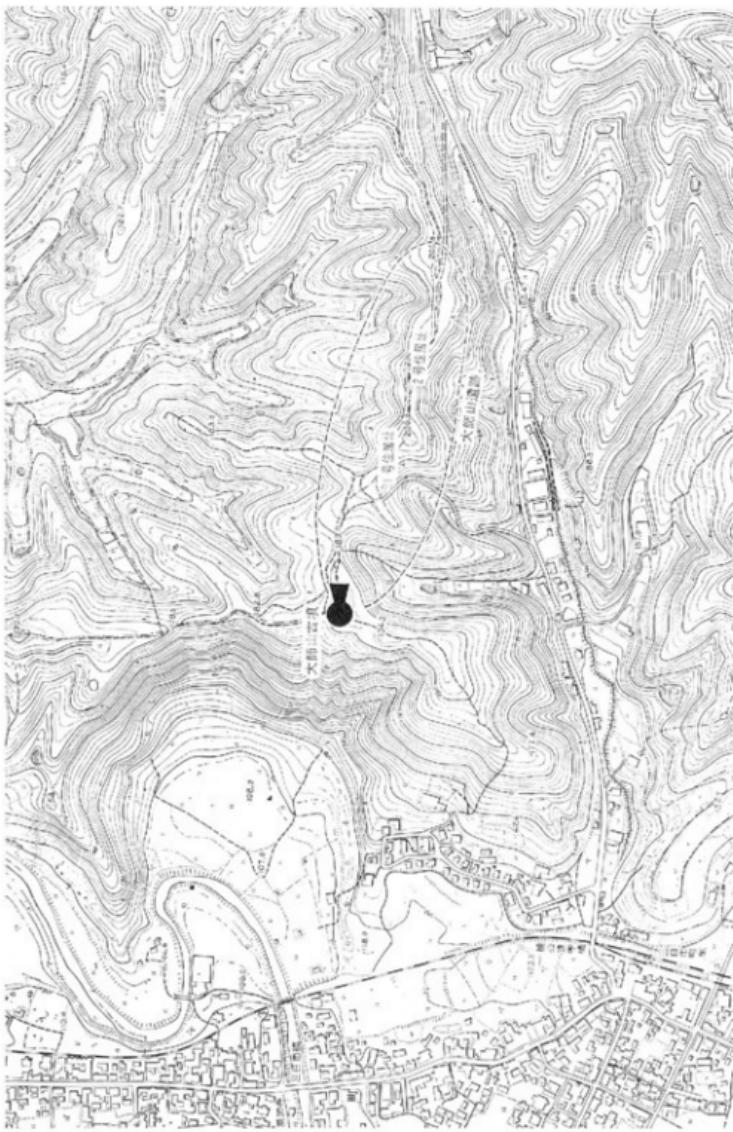
第1号焼土壙 西端部にある大師山古墳の前方部北側斜面において、工事用進入路工事の際、半壊し、露出したものである。焼土壙1基が単独で存在した。

第1号住居址 工事用進入路により北側半分は削り取られていたが、丘陵主稜線上（大師山古墳の東方約150m地点）に溝状遺構を作って検出されたものである。

A地区 丘陵主稜線の北側にあり、1号住居址の存在する地点より北に長く派生する支尾根の東側斜面に遺跡範囲確認のため、トレンチを設定した。

B地区 丘陵主稜線の南側にあり、1号住居址の両側、またJ地区の西側に位置するところから遺構および遺物の確認を行うため、設定したトレンチである。

J地区 丘陵主稜線上にあり、大師山古墳発掘調査の際、第2号墳にあたるものと推定



第34図 大師山遺跡と大師山古墳の立地（左が北）

0

300m

し、調査を進めた。弥生式土器・須恵器・土師器・瓦器等が検出されたが、遺構として確認されるものはなかった。

C 地区 J地区の北側近くまで入り組んだ谷の斜面にあり、J地区に推定された遺構に伴う遺物確認のため、トレントを設定し、第2号焼土壙をも検出した。多くの弥生式土器を検出。

第2号住居址 J地区より更に東方約90mの主稜線上にあり、遺構確認のため、トレントを設定し検出した。

E 地区 2号住居址のすぐ東側鞍部になった地点で、弥生式土器片を工事用進入路面上に確認したことから調査を実施し、小溝状遺構、ビット、さらに下層より4号焼土壙を検出した。

第6号焼土壙 E地区の東側にマウンド状地形があり、その東南裾において、ブルトーザーが工事用進入路を造成し、断面が露呈したことから調査を実施、本焼土壙を検出した。

D 地区 2号住居址の東北裾にあり、工事用進入路断面に弥生式土器片を確認したことから設定したトレントである。トレント内で、第3号焼土壙を検出した。

G 地区 E地区東のマウンド状地形付近に推定した遺構より流出していると予想される遺物の確認を得るために、主稜線南側斜面に設定したトレントである。遺物の出土はみとめられなかった。

I 地区 マウンド状地形の東北裾部の斜面にあたり、遺物確認のため設定したトレントである。遺物の出土はみとめられなかった。

H 地区 I地区・G地区に設定したトレントと同様に、遺物の流入状況を確認するため、主稜線南側斜面に設定したトレントである。遺物はみとめられなかった。

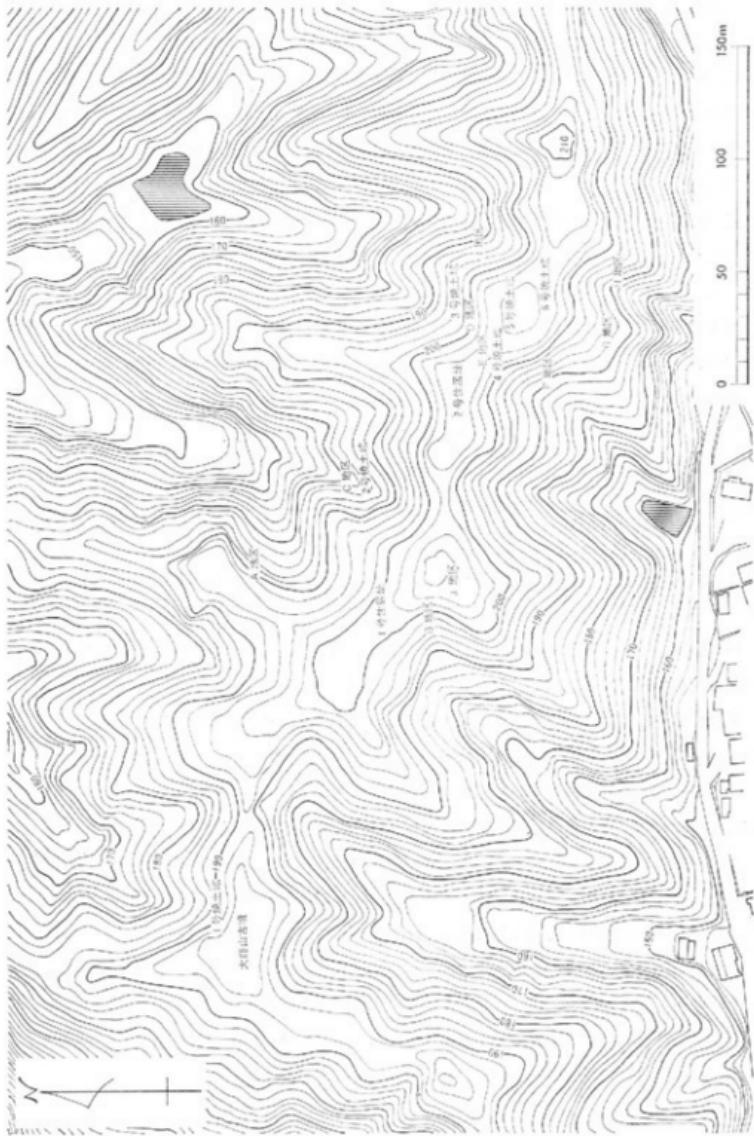
F 地区 E地区の南側斜面に、C・D地区に相当する土器包含層の存在を予想し、トレントを設定した結果、多量の弥生式土器を検出した。

このように、丘陵尾根および、斜面に対する調査の結果、大師山弥生遺跡は、少なくとも2基の住居址と溝1条を尾根上に配する高地性集落であることが判明した。

住居址以外では、斜面に検出された4基の焼土壙が特筆すべき点とされるほか、尾根から斜面に向って投棄されたと思われる弥生式土器が、とくに北斜面2ヶ所、南斜面1ヶ所からの計3ヶ所から多量に集中して検出した。

弥生期以降では、J地区より検出された須恵器・土師器・瓦器片があり、全く時期的な確証のないものとして、遺跡東端の2基の焼土壙（第5・6号焼土壙）がある。

各地点の遺構の詳細については、次節で述べるとおりである。



第35図 大師山遺跡の地形と地区・構造配置図

第3節 弥生時代の遺構

第1項 住居址

住居址は、J地区の北西裾部とこれより東へ約110mの地点の2ヶ所において検出された。

以下検出した住居址についての事実報告を行い、若干の考察を加えてみたい。

第1号住居址

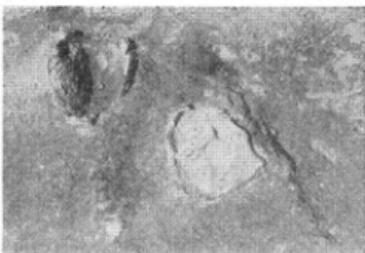
J地区丘陵頂部北西裾部で検出された径9.4mのほぼ正円形のプランをもつ堅穴式住居である。この地点は、昭和20年代に畑として開墾されたため、尾根上面が削平されており、幅約10mの平坦面となっていた。これは第36図の200mの等高線が示す地形にほぼ表わされている。南北両斜面は急傾斜で、この住居址は尾根上面の空間を、その幅においてほとんど占有してしまう形となっている。このことは、調査時において住居址の北側方が工事用進入路により破壊されてしまっていたため、充分な検討がなされたわけではないが、斜面角度から考えて、この推測はほぼまちがいないであろう。

住居址の遺存状態は、東側においてこれとさほど時間差の考えられない溝状遺構によって破壊されている他に、既述のごとく北側も工事用進入路によって破壊されており、また上部も相当の削平がなされている。このため、壁は床面より約10cm程度しか遺存していないかった。

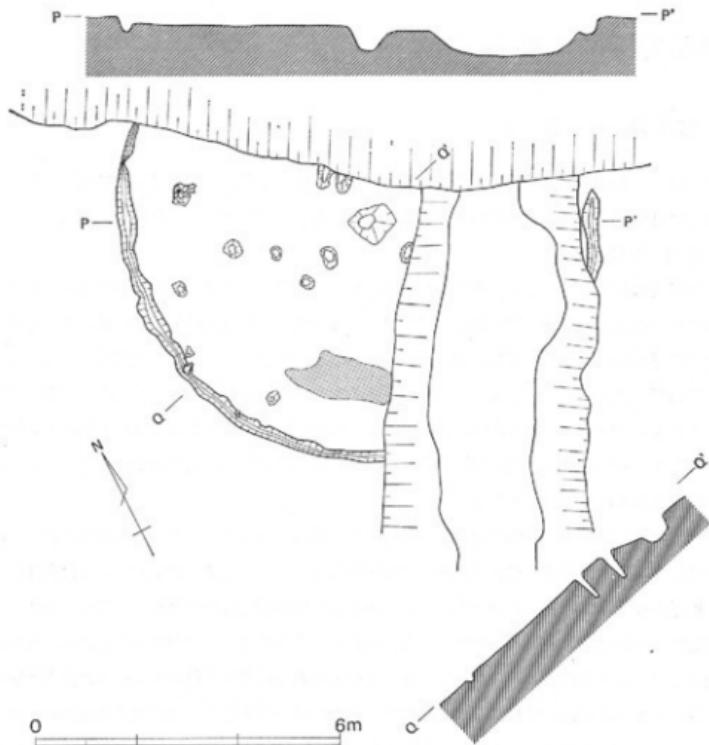
床面にはほぼ南北半分の全面にわたって火災のあったことを示す炭の層がみられたが、周壁溝上面にはほとんどこの層はみられなかった。この炭の層の範囲及び後述する土器の出土状態等からみて、この住居は全焼したものではなく、また住居のはば中央部に位置する径45cm、深さ25cmの炉址と思われるピット内にぎっしり堆積していた炭層と床面の炭層とが完全に連続することから、この火災は外的な要因による出火ではなく、住居内部からの失火と考えた方がよいようである。

出土遺物には、壺1、鉢1、壺2、砥石1、石皿1がある。その出土位置は壺・鉢は周壁溝に接してほぼ同位置に存在し、炭層の下よりもろくなってしまっており、取り上げることも不可能な状態であった。砥石はこれらからややはなれた地点でやはり周壁溝に接して出土した。壺2点は炭層のまったく存在しない地点で出土した。

上部構造に関しては、柱穴と認められるようなピットが存在しないため調査中より問題となっていた。検出されたピットは10ヶ所あ



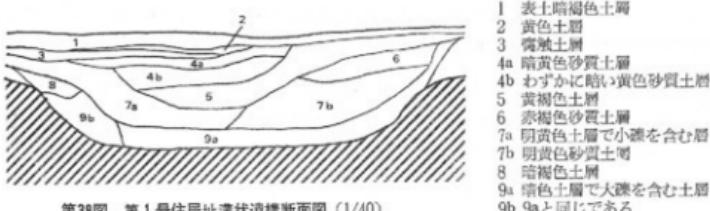
第36図 第1号住居址床面出土の壺・鉢



第37図 第1号住居址実測図

り、このうち中央の大形のもの、これの北側の2ヶ所には内部に炭が充満しており、炉址的なものを想定した方がよいであろう。他のピットでは第37図の断面Q—Q'に示した二つが深さ約30cmを計る他はそれほど深くなく(約10cm)、その配置からも疑問点が多い。2個の壺と甕・鉢の間に存在するピット4個はあるいは住居内部における間仕切り的な構造物のためのものである可能性も考えられる。

この1号住居址を破壊して溝がつくられていた。これは幅約4.0m、深さ約0.5mの規模で尾根を切断しており、その長さは尾根の幅と同様の約10mであった。断面は浅いU字状を呈し、この中に大きく3層にわけることのできる土層が堆積していた。(第38図) この3層は、ともに基盤層の礫が主体でなかったことよりこれらを時間的な関係でとらえることはできなかつた。しかし、土層の堆積状態からみて一時に埋められたとは考えられない。出土遺物には石錐1(第76図)の他に若干の弥生式土器片がある。

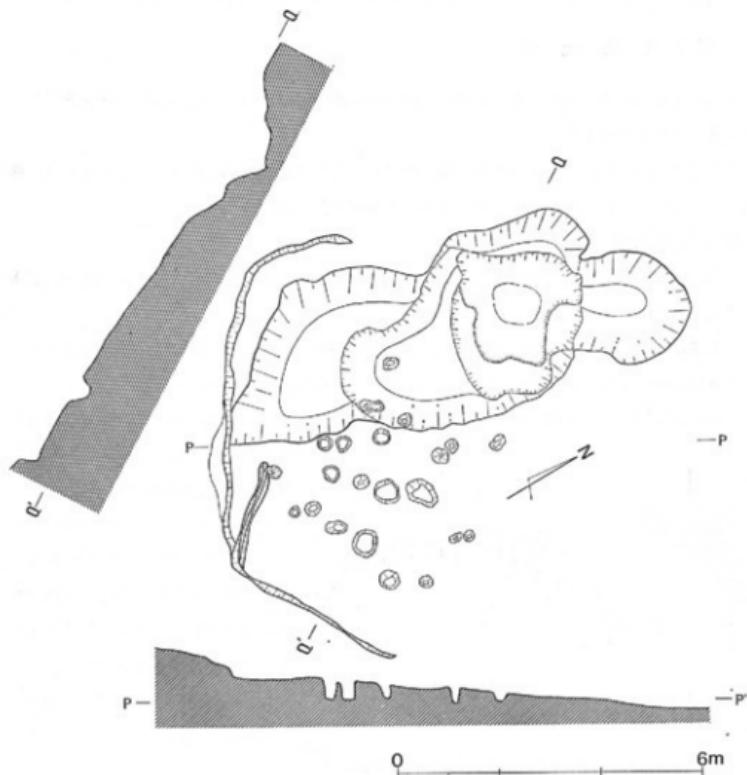


第38図 第1号住居址溝状遺構断面図 (1/40)

- 1 表土暗褐色土層
- 2 黄色土層
- 3 赤褐色土層
- 4a 暗黄色砂質土層
- 4b わずかに暗い黄色砂質土層
- 5 黄褐色土層
- 6 赤褐色砂質土層
- 7a 明黄色土層で小礫を含む層
- 7b 明黄色砂質土層
- 8 細褐色土層
- 9a 塗褐色土層で大礫を含む土層
- 9b 9aと同じである

第2号住居址

1号住居址より約120m東方で検出した方形プランをもつ竪穴式住居である。その位置は、ほぼ東西に伸びる主尾根から北へ派生する支尾根の付け根にあたる部分の上部平坦面である。



第39図 第2号住居址実測図

この地点でも上部に近代の削平を受けており、また中世においても大規模な擾乱がなされていた。住居の西半は長径約5m、短径約2m、深さ約1mの規模をもつおそらく中世の不整形な土壤により破壊され、北半分は近世の削平および耕作による地山面におよぶ擾乱があったため、住居址は方形プランを示す南東隅で周壁溝を検出できたのみである。また第39図で示したごとく、あるいは2軒の住居の切り合いがなされているようにもみられるがこれをはっきり示す資料には恵まれなかった。

検出されたピットは22個あるが、その組み合わせは不明である。遺物としては、石皿1、砥石1、鐵鎌1の出土をみたが、上層よりの擾乱が激しかったためすべて原位置を保ってはいなかった。

E 地 区

この他、E地区においても、住居址の一部と思われる、叩きしめられた平坦面、小溝、ピット等を検出したが、大半が破壊されており、したがって、本項では記述を省くこととする。

第2項 焼 土 塚

大師山遺跡の調査で検出された遺構は、住居址、溝状遺構の他、遺構内に黒色灰を充満した焼土壤を6個所検出した。

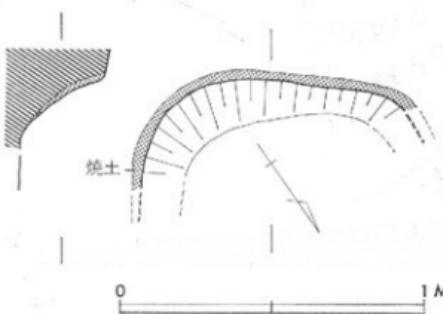
これらは西から順番に1～6号焼土壤と呼称し、各々の調査所見を述べる。5・6号焼土壤については構造上、後世のものと考えられ、本章第4節で述べる。

第1号焼土壤(図版34)

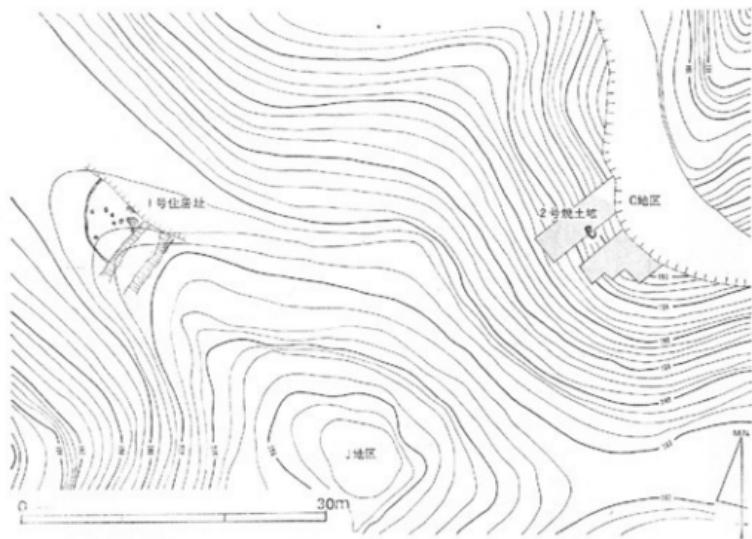
大師山古墳前方部下方に工事用進入路を造成した際、その南側崖面に灰を充満した焼土壤構を検出し、調査を行った。

本遺構は北面して傾斜する凹部にあり、標高は190mである。大師山古墳頂部(現在高)との比高は4mしかなく、したがってすぐ見上げたところに前方部が存在する。

遺構は、斜面を流れ堆積した弥生後期包含層を切り込んで造られており、進入路工事のため大半が破壊され、調査時には幅0.9m、奥行き0.27mを残すのみであった。したがって、正確な形状は不明である。深さ0.3mを測る。方向はN—145°—Wぐらいであろう。土壌は幅3～4cmにわたって赤色焼土がみられるが、この焼土は底面までは達していない。遺構内には炭、赤色焼土層が堆積しているが、遺物は全く含まれていない。



第40図 第1号焼土壤実測図



第41図 第2号焼土壙周辺地形実測図

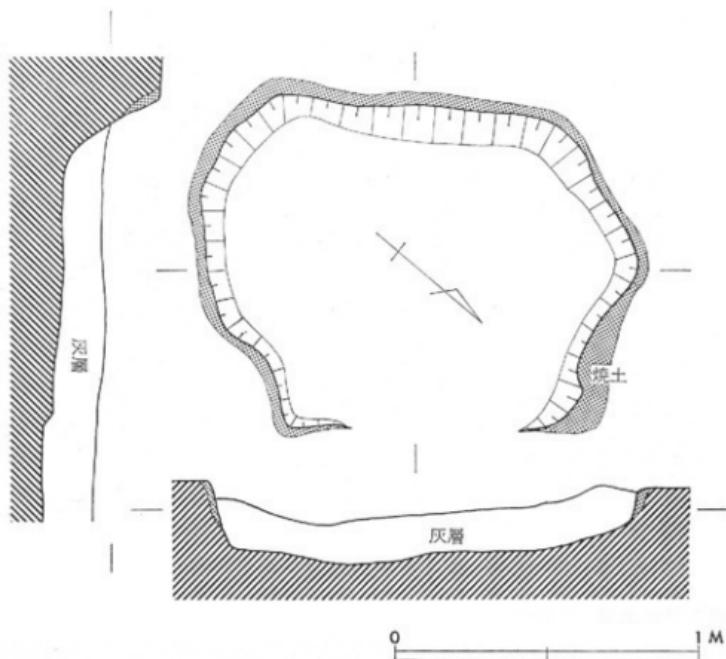
第2号焼土壙(図版35)

C地区Bトレンチにおいて、弥生後期包含層を調査中、黒色灰層を検出し、この灰層を追求した結果、本焼土壙を検出した。

位置はJ地区として調査対象となった丘陵頂部の北東傾斜面で、標高は192mである。丘陵頂部が207mであるから、屋根より15m下った谷間に掘り込まれていることになる。形状は不定形としか言いようがないが、上・下辺をみると本来圓丸の長方形を意図して掘り込まれているようである。長辺1.42m、短辺1.05mを測る。遺構内には、厚さ約15cmの黒色灰層が均一に堆積している。この黒色灰層からは後期弥生式土器の細片を検出している。焼土壙各辺は火熱によって、幅約5cmの赤色燒化層がみられるが、下辺(東側)では約60cmにわたってこの焼土を欠失しており、遺構内の黒色灰層が外へ流出している。

第3号焼土壙(図版36)

D地区Bトレンチの後期弥生式土器包含層を調査中、黒色灰を伴う赤色焼土壙を検出した。斜面の土器包含層を調査中検出している点、第2号焼土壙と状況は全く一致している。位置は第2号住居址の東斜面で、この住居址から北へ、及び南東へ分枝する尾根にはさまれた凹部斜面である。標高は193.5mで、屋根上からの比高はマイナス13.5mである。形状は明確な長方形を示し、長辺1.16m、短辺0.8mを測定する。土壙の深さは上辺で0.3m、下辺で0.15mを測る。焼土は土壙の側壁上端が最も厚く、3~5cmを測るが、序々に薄くなり、床面に至ってこ



第42図 第2号焼土窯実測図

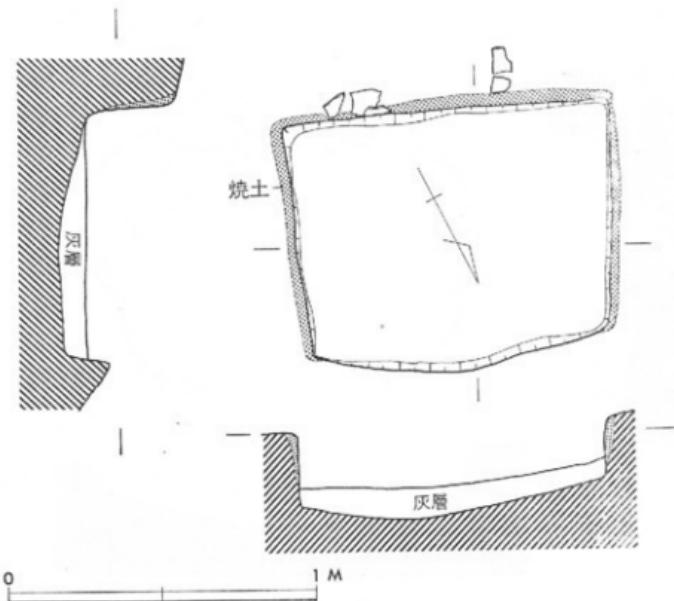
の赤色焼土はなくなる。また下辺では焼土を欠失しており、この点、2号焼土壇とも一致する。床面はやや凹面をなすもののきれいに成形されており、縦断面でも明らかなように、北半分はほとんど水平につくられている。

遺構内には厚さ5~10cmで黒色灰層が堆積している。遺物は少量ではあるが、本遺構検出面に密着して、甕形土器破片が検出されている。第73図-1は口径13.6cm、頂部高1.7cmを測る。腹部外面は叩き目を用い、内面はナデにより仕上げている。色調は赤褐色である。

第4号焼土窯(図版37)

E地区において、工事用設道によって平削されたため後期弥生式土器包含層が露出し、グリッドを設定して調査した結果、小溝及び硬質粘土面を検出し、ここが住居址の床面残存部であろうと推定した。

この弥生式土器包含層をさらに下げるに、B-1グリッド、及びC-1グリッド、にかけて遺構内に灰を充満する焼土壇を検出した。位置はE地区Cグリッドでも最も南にあたり、主尾根がちょうど南西に向って傾斜しようとするところである。工事のため調査時で既に削平されていることを考えると、尾根より若干下った南西傾面に築かれていたのであろう。標高は205m



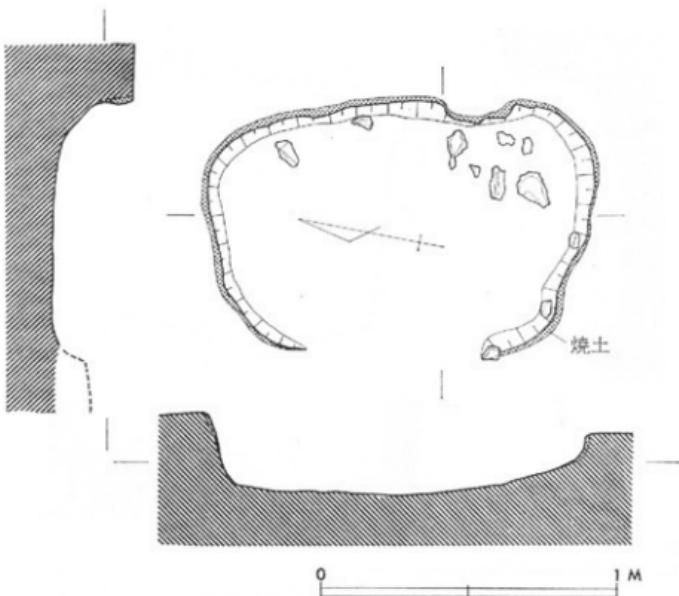
第43図 第3号焼土塗実測図



第44図 第3・4焼土塗周辺地形実測図

であるが、先に述べた住居址の残痕であろうと考えられる硬質粘土面より下位であり、層位的にも時期がさか上がるものである。

造構は暗黄褐色土(地山)を掘り込んでいる。形状は若干の凹凸状を呈するが、楕円形を示す。長径は1.27m, 短径は0.9m, 深さ0.15~0.25mを測る。焼土は厚さ3~4cmで、やはり側壁上端が最も厚く、下へ向って序々に薄くなり、床面までは達していない。また、



第45図 第4号焼土窯実測図

四辺の焼土のうち、西辺（谷側）は幅0.6mにわたって焼土を欠失している。遺構内には10~15cmの厚さで黒色灰層が堆積し、また火熱を受けて数個の小角礫を含んでいる。この灰層からは弥生式土器の細片を1点出土した。

なお、本遺構は調査終了後、移築工事を施し、現在河内長野市日東町、市立資料館の西方にて保管されている。（付載II）

第3項 A~J地区の調査（弥生式土器包含層の調査）

明確な遺構の検出はなかったが、弥生式土器の散布地点に対して、トレンチ、あるいは平面調査を実施した結果、次のような所見を得た。

特に、C,D,F地区からは多量の弥生式土器を検出し、本遺跡を把握するうえで不可欠な資料を提供した。以下、A地区から順次のべるが、J地区は、当初は古墳推定地として第1次調査において発掘を実施したのであるが、主として弥生式土器を検出したため、本項に収録した。

A 地区

1号住居址の西において、支尾根が北・西・南の三方向に展開するが、北へ派生する尾根の

斜面上端に試掘場を設定したところ、少量の弥生式土器が出土し、その中に、獅子の直線文・波状文を配する中期前半の壺形土器の体部、口縁部の破片が4点出土した。これらは、他の土器から時期的にも隔離したものである。遺構にともなったものでもなく、少量であるのでその性格は不詳である。

B 地 区

I号住居址の南斜面にトレンチを設定したが、遺物は全く検出されなかった。尾根をこした北斜面にA地区、その東方にC地区があり、共に遺物が出土しているにもかかわらず、反対斜面の本地区に全く遺物が出せない、その理由は判然としない。

C 地 区

C地区は東西に伸びる主尾根から北に派生する数条の支尾根のうち、J地区（標高207m）から北へ派生する支尾根の東斜面に位置し、J地区の北東斜面となり、標高190m～200mの地点をさす。

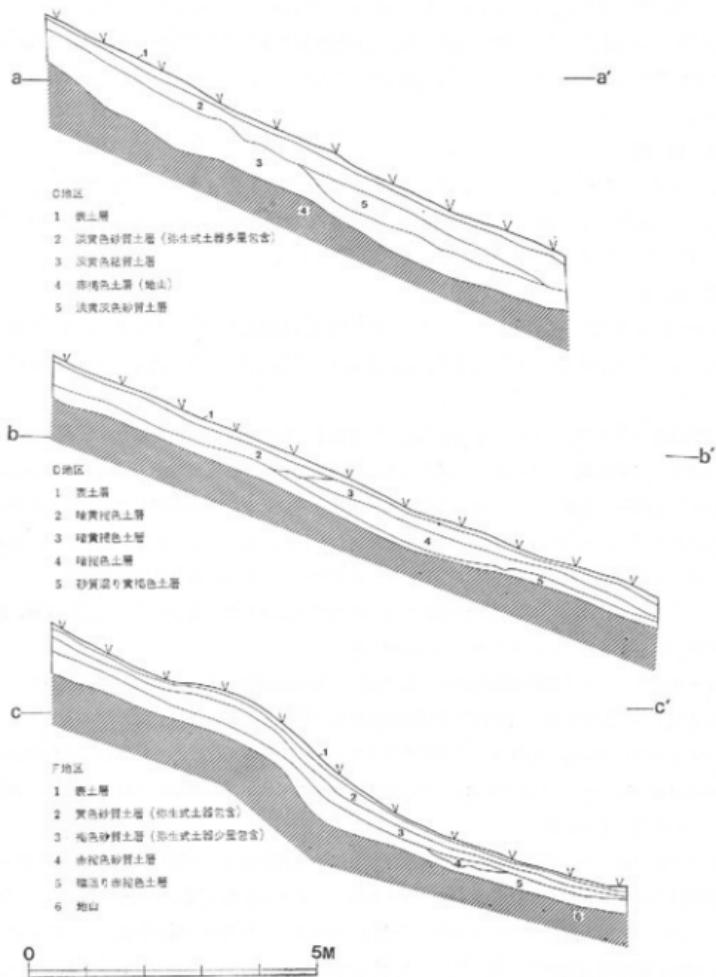
弥生遺跡の調査に先立ち、工事用進入路として削平された丘陵北斜面を踏査したところ、本地区において多数の弥生式土器片を採集した。斜面遺構の存在と尾根頂部J地区の遺構からの遺物の流れ落ちを考慮して、北斜面にそってA・B2本のトレンチを設定した。両トレンチより多数の遺物と、黒色灰層を伴なう焼土壙を検出したため、Bトレンチを東へ拡張した。この焼土壙（第2号焼土壙）に関しては、本節第2項で報告しているためここでは省略する。

トレンチA・Bは走行する主尾根に対しほぼ直角に設定された。Aトレンチは南北9m、東西3m、Bトレンチは、南北6m、東西5mを測る。

A・B両トレンチ土層の断面観察によれば地山（赤褐色礫混り層）から表土（黒褐色腐蝕土）まで4層を形成している。遺物は第2層淡黄色砂質土層中に含まれ、包含層の幅は上方で薄く下方で厚くなっている。約10cmの表土を剥ぐとすぐ下に土器が細片で混入している包含層が約20～30cm続いている。出土土器片は大部分が細片の状態で検出されたが、ほぼ完形に近い壺形土器（C-54）もみられた。

拡張されたBトレンチ東において土器片はほとんど検出されず、土器片の層となって群在する範囲は8m×5mの小地域であった。A・B両トレンチの下端は工事車輌進入路により切断され、道下方は工事進行中であり調査の不可能な地点であったため、尾根北側（下方）における土器片の正確な埋蔵範囲は不明である。包含層より出土した土器片はすべて遺構を伴わない。焼土壙は、この土器包含層の下層より検出されている。

出土遺物は、すべて弥生式土器片でありその他の遺物をまったくみない。弥生式土器は壺形土器・壺形土器・高杯形土器等の一般的な器種から、手焙形土器等の特殊なものも若干含むが、この時期の他の集落より出土する土器の器種組合せの割り合いを大きく逸脱することはない。



第46図 C・D・F地区土層断面図

D 地 区

弥生遺跡分布調査の時、北斜面の断面から暗黄褐色砂質土の遺物包含層が確認され、周囲から多量の弥生式土器片が採集された。2号住居址、およびE地区からの遺物の流出を考慮して、西からA、B、C、D、Eの5本のトレンチを主尾根に対して直角に設定した。

遺物は表土直下の暗黄褐色砂質土層中より出土し、各トレンチ内に認められた。A、Eトレンチではこの包含層の堆積は薄く、B、C、Dトレンチ内では厚く20~40cm程度堆積していた。とくにC、Dトレンチ内より多量の土器が出土した。遺物は細片が多く、完形品はほとんど出土せず、磨滅が著しく、造存状況は悪い。これらの遺物はいずれも遺構に伴って出土したものではなく、流出・堆積したものと推定される。遺物の流出状況を確認するためBトレンチ北端を幅80cm、全長3.0m北へ拡張した。その結果、Bトレンチと同様に表土直下に暗黄褐色砂質土の遺物包含が確認でき、少量の弥生式土器の細片を検出した。

出土遺物はいずれも後期弥生式土器のみであり、他の時期の遺物は出土しておらず、器種には壺・細頸壺・甕・高杯などがある。これらの土器はいずれも2号住居址、あるいはE地区から投棄されたものと推定する。

なお、Cトレンチ内より第3号焼土壙が検出された。詳細は本節第2項を参照されたい。



第47図 弥生式土器出土状態（D地区）

E 地 区

第2号住居址と第5号焼土壙の所在する尾根頂部とにはさまれた、標高204mの鞍部を通過している工事車輌の進入路において、弥生式土器が散布しているのを認め、発掘調査を行った。

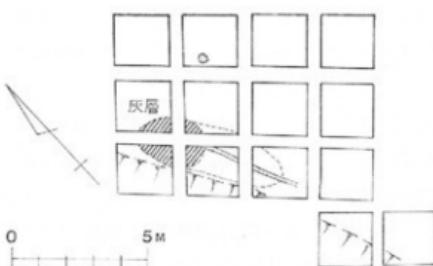
発掘調査は、尾根の走行にそって、2m×2mのグリッドを14個所設定し、ほぼその全域において弥生式土器細片の出土をみたが、工事用車輌が包含層を削るようにして通過していたらしく、遺物の出土状況はもはや精査できるような状況ではなかった。

遺構としては、調査地域の南西は尾根斜面にあたるため、土器包含層は流れており、また、尾根中央付近は既に破壊されていたため、ピット・小溝・炭層をもつ人為的な平坦面が局部的にしか遺存していないかった。調査地域中央部において、3m×2mの範囲で人為的に叩きしめたと思われる硬い粘土質の平坦面が明らかに検出し、この平坦面の中央はちょうど尾根の走行に平行するように、幅約10cm、長さ3mにわたって小溝が切られており、また溝の北西側においては、うすい炭層がみとめられた。小溝より北東約3mのところに、直径30cm、深さ18cmのピット1個所を検出した。

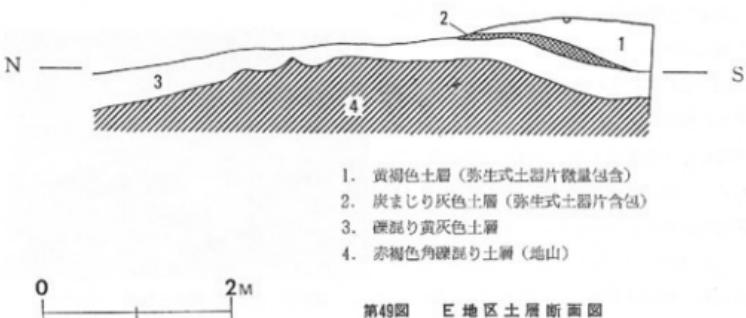
このように、きわめて狭い範囲であるが、平坦面・小溝・ピット・炭層を検出したことにより、この地点に、弥生期のまとまった遺構が存在していたらしく、その性格としては、住居址

の可能性がもっとも高い。

本調査区の中央において、地山確認のため、深掘したところ、さらに下層にも、弥生式土器細片が少量であるが含まれており、検出した粘土質平坦面のさらに約60cm下位において、地山に掘り込まれた焼土壙を1基検出した。これが第4号焼土壙である。この焼土壙については、既に先述したとおりである。



第48図 E地区平面実測図



第49図 E地区土層断面図

F地区

D地区、C地区の調査終了後、各斜面に遺物の流入が認められたため、F地区でもD地区同様に2号住居址、およびE地区からの遺物の流入が考えられるので、トレンチ（全長25m、幅2.5m）を主尾根に対して直角に1本設定した。

遺物は表土直下の黄色砂質土層から多量に出土し、褐色砂質土層からも少量の弥生式土器の細片が出土した。黄褐色砂質土層はトレンチ南端では多量の小礫を含み、遺物もあまり包含していないが、トレンチ中央部では厚く堆積し、多量の弥生式土器を包含していた。遺物はいずれも他の地区同様に磨滅が著しい。

出土遺物は後期弥生式土器のみであり、器種には壺・細頸壺・甕・高杯・鉢などがある。

G・H・I地区

大師山弥生遺跡の東端を把握するため、E地区の東方において北斜面にI地区、南斜面にH・G地区を設定し、トレンチ調査を行ったが、全く遺物は検出されず、また調査中に行った踏査でもこれ以東に遺物の採集をみていない。

これにより、本遺跡の東端はE地区であることが確認された。



第50図 J地区地形実測図

J地区（古墳推定地点の調査）

大師山古墳の東南東約200m、標高200mの地点に径19m、高さ2.5mのピークが認められ、しかも南方に方形部を有するところから、全長約30mの小形前方後円墳を思わせた。このため、同地において地形測量を実施し、第50図の成果を得た。しかし、方形部西側面は工事進入路の設定により原形は損われており、その部分を復元考慮してみても、なお東側面に比較して大きく外（西）側へ流れ、いわゆる西側くびれにあたる部分が不明瞭である。また、円丘部と方形部の結合状態をみると、円丘最高所の中心点が方形主軸の延長線上に位置せず、やや西側にずれた形で結合されていることから、前方後円墳と想定することに疑問を残した。一方、当該地域造成計画に対し、遺跡の確認調査を事前に実施した大阪府教育委員会は、本地点においても試掘を実施し、表土下約30cmの地山にいたるまで掘削がなされていたが、遺構および遺物の検出をみるといたらなかった。したがって、本地点における調査は、円丘部については、府教委による試掘縫を拡大・深化し、地山確認の徹底を期するため、表土下約1.5mにいたるまで掘削するも黄褐色粘土層が続き、遺構および遺物の検出にはいたらなかった。また、南方に

おける方形部についても調査を実施した。当部分は、戦時の食糧確保のため開墾を行ったところである旨、地元市民より教示を受けていたものである。調査の結果、方形部ほぼ全域にわたり、弥生式土器片の出土をみたが、地層は極めて複雑な状況を呈しており、表土下約1mの地山に達するも弥生時代・古墳時代のいずれの時代にも該当する遺構の検出は認められず、前記開墾の結果によるものであることが裏付けられた。当該地は、円丘部の東方に約5m張り出すテラス状地形を有しており、このため、東西にトレチを設定し発掘調査を実施した。その結果、表土直下に炭を混入する黄灰色の弥生包含層が確認され、弥生式土器片若干を検出したが、遺構として確認できるものはなかった。また、円丘部西側は工事進入路の設定により掘削されており、路面に須恵器（第75図-8）の散布が認められた。以上が、J地区における調査結果である。当初墳丘とみられた円形マウンドは、その頂部においては、表土直下に地山が認められ、その大部分を発掘調査し、表土下約1.5mにいたるまで掘り下げたが、古墳と断定し得る資料は得られなかった。ただ、円丘部西側路面で採集した須恵器は、古墳時代後期以降に属するものであり、また、出土した瓦器・土師器皿なども原位置が判明しないが一応留意する必要があろう。

第4項 小 結

大師山遺跡で検出された住居址より、その問題点について若干の考察を加えてみたい。

今回の調査は遺跡の全面発掘は行なえなかつたが、遺構の存在が考えられる地点はすべてトレチ調査を行なつたので、遺構と確認できるものはこれ以上遺存していないと断言できる。しかし、このことで住居がこれ以上なかつたとはいえない。それは、1号住居址（円形）と2号住居址（方形）の平面状態の差異からみて両者は同一の時期のものではなく若干の時間差が考えられることと、住居址の所在する尾根の南北両斜面で検出されたおびただしい土器がそれを物語っている。その集落の範囲については、他項でも同様の考察が行われているので要點のみを記すことにする。既述のごとく2軒の、それも時期的に差のある住居址のみで集落の範囲を述べることは非常に問題があると思われるが、南北両斜面における土器の散布範囲がこれを明確に示している。これらの土器は尾根上方より投棄された状態で、各支尾根間の谷間に堆積しており、その分布は、ほぼ1・2号住居址間のみにみられ（C地区～E地区），これより東および西には密なる土器の出土はみていない。この間には、J地区より南へ伸びる大きな支尾根がありここからも若干の遺物が出土していることから、これも含めたほぼ1・2号住居址間としてまちがいないとと思われる。この範囲を地形的に検討してみると、急傾斜面である南北両斜面は高地性集落として防禦のためには充分その期待にこたえ得る傾斜である。西側では大師山古墳との間に幅約50mにわたって1号住居址所在地点との比高差約9mの鞍部があり、この地点も前述の南北両斜面と同様の機能を持っていたであろう。東部については何らこのような機能を示すような地形はみられず、問題として残るところである。

また、我々が調査中に感取したこと少し書き加えてみたい。今回の調査は、2月から3月にかけての北風の非常にきつい季節で、尾根上の調査は特にこの風に悩まされ、体が吹き飛ばされるのではないかと思うほどの突風にもしばしば見舞われた。このようなことより、1号住居の火災がほぼ南半分で終っているのは、おそらく消火活動もあったであろうが、このような北からの強風のために要因も考えられないであろうか。もしこのような推論が許されれば、当地域にこのような強風が吹き荒れるのは台風以外ではこの2～3月頃のみであると考えられないであろうか。焼土壙は、弥生期のものが4基（1～4号焼土壙）確認された。このうち、第1・2・3号焼土壙が、いずれも斜面に流れた弥生式土器包含層内から検出されており、第4号焼土壙は、弥生式土器包含層下の地山面を掘り込んで構築されていた。焼土壙内より、弥生土器を検出したのは第2号焼土壙・第3号焼土壙のみであるが、遺構の類似性やこのような検出状況からみて、4基の焼土壙が弥生期のものであることは明らかである。

次に、これら焼土壙の立地をみると、第1・2・3号焼土壙が傾斜面に構築されており、4号焼土壙は丘陵尾根上であるが、南斜面に偏してつくられている。

そして、斜面の下方側の側壁が欠失して、灰が流出していること（2・3・4号焼土壙）からしても、これらの焼土壙をあえて平坦面につくらず、斜面、あるいは斜面に偏する尾根に構築したのは、焼成中の灰の撒き出し等の作業を考慮したことであろう。

また、第3号焼土壙では、下方の側壁焼土が欠失しているのにかかわらず、灰が方形プラン内に充満しており、これより、この焼土壙が再度にわたって使用されたか、あるいは、焼成中に、何回か灰の撒き出しを行なったため、側壁が欠失したと考えられ、これらの焼土壙の用法について、一つの理解ができた。これら焼土壙の性格については、考察IVにおいて、あらためて述べるが、住居址や多量の土器包含層のある遺跡中枢部に存在することから、本集落をめぐる生産活動の一分野をなしていたことは間違いないさうである。

次に、各斜面で検出された弥生式土器の包含層についてであるが、この土器包含層が、集落の存在した弥生期に形成されたものか、それとも、後世にあって、流出したのかという点については、調査時からたえず問題にされていた。しかし、これら斜面の弥生式土器包含層に、後世の遺物を1点も混入しないこと、あるいは、C・D・F地区の検出状況からみても、比較的まとまった範囲で遺物が検出されていること、そして各焼土壙の存在などの諸点からみて、尾根上にあった土器が後世に斜面に転落したとは考えられない。したがって、急斜面であるから遺物の若干の二次的な流れ落ちを考慮するにしても、この斜面の土器包含層は、住居址の項で述べたように、尾根の住居区から使用に絶えない土器を投棄したものであると判断した。

このように考えると、南斜面に1個所、北斜面に2個所のきわめて限られた個所に使用後の土器を投棄したことになり、このような狭長な尾根に立地する高地性集落の実体についても、一つの理解を得たことになろう。

第4節 古墳時代以後の遺構

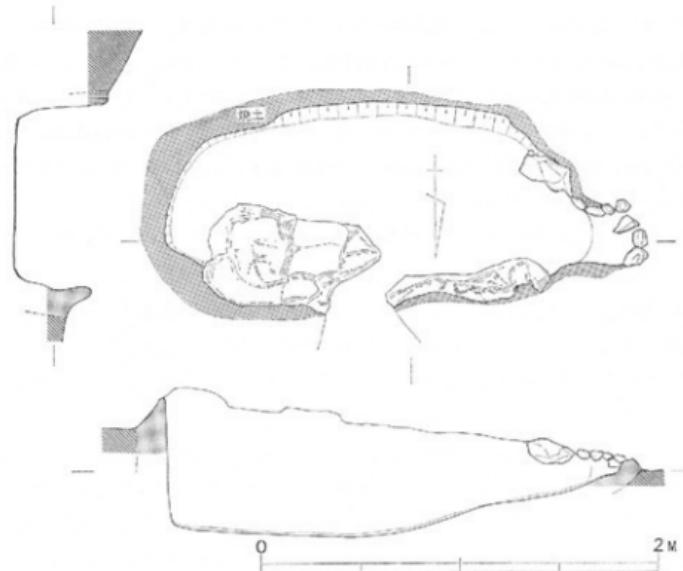
弥生時代より後世にいたる遺構としては、E地区の東側で検出された第5・6号焼土壙がある。その他J地点でも後世の遺物を検出したが、明確な遺構を伴っておらず、性格は不明である。したがって、ここでは第5・6号焼土壙についてのみ述べる。

第5号焼土壙

E地区において検出した第4号焼土壙の南東部にて工事用進入路を造成した際、後期弥生式土器の包含層、及び黒色灰層が露出し、調査を行った。このうち、薄い土器包含層のすぐ東において露出していた黒色灰層を南に向って追求したところ、この灰層幅が狭くなり、さらに紅色に変化した $2.5m \times 1.1m$ の窓体状の遺構を検出した。

本遺構の立地は、周辺が工事によって造成されているため旧来の地形が失われ、正確なことはわからないが、E地区の東南部の高所から北西へ向って下る傾斜面にあり、現状で比高約 $-1m$ をはかる。旧地形を考慮すると、尾根頂部より約 $2 \sim 3m$ 北に下った傾斜面に築かれていたようである。

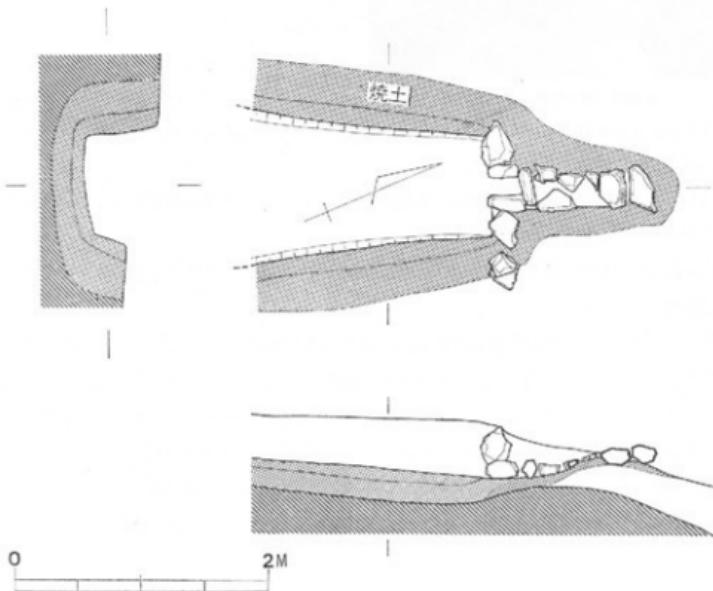
本遺構は地山を掘り込んでつくられており、長さ $2.5m$ 、幅 $1.1m$ の梢円形をなし、側壁はや



第51図 第5号焼土壙実測図

や直立して成形されている。

奥壁に対応する個所は、一部片側壁部に小角窓を使用した焚口状の施設をなし、幅約25cm(内径)で外部へ開口されている。主軸方向はN-90°-Eである。側壁は各壁ともほとんど直立し、強熱のため硬質酸化層となっている。本遺構は調査終了後に移築する計画があったため、奥壁側半分は内部堆積土の排土を行なわなかったので、床面の全面は検出してないが、焚口から奥壁に向ってゆるやかに下降してゆき、奥壁部分が最も低くなるものと思われる。奥壁も直立するものであろう。側壁は10~20cmの厚さで地山が赤色に変化し、かなり高火度で焼成されていたことが予想される。焚口付近はやや低火度であったためか、焼土幅約5cmとなる。さらに、本遺構の特徴として、天井部と思われる被熱硬化した赤色焼土塊が遺存していたことがあげられる。これは特に、主軸左側の側壁に接する一部分が残っていたにすぎないが、厚さ10cmで部分的にドーム状を呈し、明らかに天井の遺存部と思われるものである。遺構内に黒色灰層(焼土混り)が充満していたが、左側壁の一部が約40cmほど穿たれ、この部分より黒色灰層が外部へ流出していた。この灰層が本遺構検出の発端となったものである。遺構内より土師質上器微細片が検出されたにすぎず、また後期弥生土器包含層を切って構築されており、弥生期以降のものではあるが、細詳な時期設定は不可能である。



第52図 第6号焼土塙実測図

第6号焼土壙（第52図）

第5号窯状遺構背後の丘陵高所の反対側、ちょうど東南に向って下りかけるゆるやかな傾斜面にて、ブルドーザーによる成地作業中に石組みを検出し、緊急に調査したのが、この第6号焼土壙である。5号焼土壙と同様なレベルである。一部分は既に破壊され、全体の形状、規模等は不明であるが、第5号焼土壙と同様に、一種の窯状遺構といえる。現存部の平面形はちょうど両袖式横穴式石室と同様な形態を示している。したがって、玄室に相当するところは焼成部に、羨道に相当する個所は焚口といえる。一応、焼成部・焚口という名称を使用すると、焼成部は現存長（主軸上）1.8m、幅0.6~0.8mで、奥へ向うほど広く、焚口に近づくにつれ狭小となる。焚口は大小の自然石を壁面基底にえき置き、土を塗って構築している。側壁は床面から45cmまで遺存しているのみで、焼成部高は不明であり、当然、天井部の構造も知ること

はできない。側壁は天井に向ってやや広がるが、それも急なものではなく直立に近い。側壁をとりまく黒灰色を呈する施土が特色である。また焚口周辺でも10cm近い赤色焼土がみとめられる。このことは、5号焼土壙と同様、かなりの高火度で焼成されていることを示すものである。

床面はほとんど平坦であるが、焚口に至って

第53図 第6号焼土壙の石組み



ゆるやかに上り、焚口開口部分にみとめられるやや大きな2個の自然石は明らかに敷石として使用されていることがわかる。壇内堆積土中には、何ら遺物は検出されなかった。

以上、5・6号焼土壙（窯状遺構）を概観したが、規模・形状等を考慮すると、前節第2項で紹介した1~4号焼土壙と、明らかに異なっている。

5~6号焼土壙は、一部に石を用いた明確な焚口としての施設を持ち、5号焼土壙では、天井部の残存を検出した。

6号焼土壙は、天井部は未確認であるが、遺構の構造からみて天井を有していたことは明らかである。また焼土層も内壁より20cmの厚さで遺構をとりまき、1~4号焼土壙に比較にならぬほど高火度で加熱されている。つまり5~6号焼土壙は、1~4号焼土壙に比べ構造的に著しく進歩したもので、かつ焚口の存在を考えると、窯としての性格を有するものであることは明白である。ただ、土器が少量の微細片しか検出されておらず、土器焼成窯でないことが予想される。なお、当該遺構の性格については、考察Vにおいて改めて考えることとした。

第5節 出土遺物

第1項 弥生式土器

弥生式土器は1号住居址、2基の焼土壙、A・C・D・F・Jの各地点において検出したが、ここでは主として住居址、C・D・F地区出土の土器を総括して、器種別に説明を加えることとした。また、以下のとおり各器種の分類を試みたが、各地点別における分類は第11表のとおりである。

1 壺形土器

壺形土器は、その他の土器と同様に、出土時の遺存状態がきわめて悪く、個々の資料について全体的なプロポーションを把握できるものが皆無に等しかった。そのため、この分類は、下記に示すように、口頸部の変化、比較に拘らざるを得ず、広口短頸壺の1群を口頸部の形状からA～Dの4タイプに分け、さらにこれを用いた技法によって細分した。

壺形土器A 粘土帯を貼加することにより、口縁部端を垂下させたもので、幅の広い口縁部の端面は横ナデによって、擬凹線文、またはこれの痕跡をとどめる(C-1・2)。以下各地区出土土器番号は(C-1・2)等とする。

壺形土器B 口縁部端を肥厚させ、装飾を加えるものとするが、これらのうち擬凹線文をもつものを壺B-Iとし、擬凹線文をもたないものを壺B-IIと細分する。なお、梯階波状文・円形浮文・竹管文などで体部をかざることもある。(図版55)

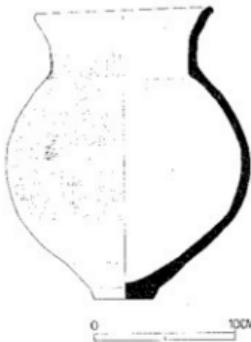
壺B-Iは、擬凹線文を施したのち、竹管文・円形浮文を加えたものを含む。

壺B-IIは、大型の円形浮文を貼付する点に共通性がみられる(D-2・3)。

壺形土器C いわゆる受け口状の口縁部をもつ壺形土器で、外反する口縁部がその上端で内湾しながら立ち上がる(C-24～26)のタイプと、頸部から大きく内湾して立ち上がる(C-27)のタイプがある。遺存状態が良好なC地区出土のこれらは、器表に丁寧な上下方向のヘラ磨きが施されたものである。

壺形土器D 口縁部端を肥厚させず、装飾に乏しい傾向のもので、これらを比較的長い直立した筒状の明確な頸部をもつものを壺D-Iとし、頸部が不明瞭なものを壺D-IIとする。

壺D-Iのなかには、壺D-II的な、つまり頸筒部がやや不明瞭なものが含まれるが、製作技法のうえで、頸部外面



第54図 1号住居址出土壺形土器
(壺D-I)

に、紙方向のヘラ磨き、または刷毛目を施す点では、壺D—Iとして、頗著にとらえられるものと同様である。なお、F地区出土のものは、口縁部や、その内面、または、頸部と体部の境目に、竹管文・刺突文を施すものが多い。なお、体部は、ヘラ磨きまたは刷毛目を施すものが多いが、叩き目の痕跡を残すものもある。

壺D—IIは、頸部の不明瞭なものとしたが、つまり、短かい頸部が大きく外反し口縁部にいたるもので、その口縁部全体が低くなることから、製作上、壺D—Iでみられた頸部相当箇所縱方向のヘラ磨き、もしくは刷毛目が、おもに横ナデ技法におきかえられたものである。

壺形土器E 直立もしくは、外傾する頸筒部につづく口縁部は、水平にちかく外方へひらいたあと、再び屈折して立ち上る、いわゆる二重口縁をもつ型とする。

屈折部が緩やかで、稜をなす部分にヘラによる刺突文をもつ(D—18)や、屈折部外面に明白な稜をもって、口縁部端は外湾して立ちあがるものなどがある。

2. 長頸壺形土器

やや腰高の体部に突出した底部をもち、体部径の約3%の太さの頸筒部をもった、直口する長頸壺とみられる。(C—45)

3. 細頸壺形土器

頸筒部のはば中央に最も細い部分をもつ形態のものと、体部との接合部に最小径をもつものがある。体部は(F—18)にみられるように球体のものがあり、また、脚台のつく(C—35)では扁平な球形を示す体部をもつ。

底部は、体部のプロポーションによって形状が変えられることが多いと考えられるが、中期的形状を残すものとして(C—36, D—21)に代表されるものや、2cm前後の高さをもつ(C—43, D—25・27)に代表されるもの、その他、粘土紐の輪をとりつけたもの、底部中央がやや上げ度ぎみのものなどがある。きわめて小さな(D—32)等は細頸壺形土器に伴うものであろう。

4. 壺形土器

壺形土器の分類は、その器体の大きさ等がほぼ画一的であるため、機能的な分類を期するには限度があるので、ここでは、口縁部というきわめて限定された小部分を分類の拠りどころとした。つまり、口縁部に屈曲部のみられるものと、口縁部が体部に対し直線的に開いて「く」の字状の口縁をもつものとに分け、前者を壺形土器A、後者を壺形土器Bとし、また、口縁部端が外方へ曲折するものを壺形土器Cとした。

壺形土器A 壺形土器Dに通じる、受け口状口縁をもつ土器である。つよく外反する口縁部は先端部で内湾しながら立ち上る。体部に刷毛目を施した(D—75)を代表器形とするが、外反する口縁部が屈曲して立ち上がる(C—70)などがある。なお、(D—76)の体部は叩き目を残す。

壺形土器B 完形品に乏しいが、(C—54, D—113)に代表されるように、いちじく形の体部に、強く外方へひらく短い口縁部をもつ。これらは土器成形では、器表を3段階の叩き目、

内面は刷毛目で器肉厚を調整するもので、その技法には大きな相違が認められないが、(C—54)の直線的な口縁部と(D—113)のやや外反的な口縁部とのように、口縁部の形状にやや違いがみられる。この口縁部の形状には端部において面をもつものと、そうでないもの(口縁部の厚みが徐々に減少するもの)とがある。なお、前者においては、口縁部のひろがる方向に對し直角方向の端面をもつものと、口縁部のひろがる方向には関係なく、丁寧な横ナデにより垂直方向の端面をもつものとがあり、これには1～2条の沈線・擬四線を施すことがある。

なお、壺形上器Bに特徴的な「く」の字状の口縁をもつものの中には器表外面の一部に刷毛目を用いたものがあり、(D—55)は叩き目を施した後、刷毛目を施すもので、また(C—53)は口縁部から体部内面に刷毛目を施すとともに、器表にも叩き目にかわり刷毛目を施している。(F—50)は口縁部に2条の沈線を施すもので、片口状の口縁部をもつ。

壺形土器C 口縁端が外方へ曲折するものとしたが、これらには、壺形土器C—Iとして、口縁部の立ち上がりがつよく、外方への張り出しの少いもの(D—77～81)と、口縁部が極度に低く、また、外方への張り出しが著しい壺形土器C—IIの2群にわかれる。

壺形土器C—Iは、口縁部に施された丁寧な横ナデによってもたらされたものとみられる。また、横ナデ手法によって、口縁部端を折り曲げぎみにつまみ上げたとみられる(C—71, F—25・31・32)がある。

壺形土器C—Iは外湾ぎみに大きくひらいた口縁が屈曲して再びやや外湾ぎみに、もしくは1条の沈線を施されてひろがる口縁部をもつもので、(D—82・83)の2個体のみである。

底部は、壺形土器Bとしての(C—54)に代表される底中央に凹部をもつものと、(C—73)のように、底部周縁を接地面として、中央へ向かうにつれて、やや上げ底となるものや、(D—112)に代表されるように、底部が高さ2cm前後の円柱形状をとるものがある。

また、粘土紐を貼り付け、これを指頭で整形した(C—84)や、ほとんど平底底部の形状を示さない(C—87)や、台をもつ(D—111)などがある。

なお、製壺上器かとみられる(D—109)は粘土円柱の下端がさらにひろがる形状を示している。

5. 高杯形土器

杯部の形状によって、2群に大別する。高杯形土器Aは碗状の杯部をもつものとする。

高杯形土器Bは、比較的広く、直径の大きい円盤状の杯底部周縁に、直立ぎみに外反する口縁をつなぎ合わせた杯部をもつものとする。これらをさらに、杯部と脚台部の接合技法(第I～III技法)により、高杯A—I・高杯B—IⅢなどに細分する。

細分の基準とした杯部と脚台部の接合技法は次のとおりである。

第I技法は杯部の底部を欠いたまま、中空の脚台部を連続して作成したのち、杯底部に粘土円板をはめ込む技法(連続成形技法)とする。

第II技法は円孔状に底部を欠いた杯部と、中空、または中実にちかい粘土円柱をもった脚台部とを別々に作成したのち、これらを接合する方法。

第Ⅲ技法はそれぞれ、完成した杯部と脚台部を接合する技法とする。この第Ⅲ技法は、さらに、平らな杯底部に中実、または中実に近い粘土柱をもつ脚台部を接合する方法を第Ⅲ—1技法とし、同じく、中空の脚台部を接合する方法を第Ⅲ—2技法と、また、杯底部に突出部をもった杯部と中空の脚台部を接合する方法を第Ⅲ—3技法と細分する。

高杯A—I D地区にのみ確認できたもので、比較的浅い椀状の杯部をもち、脚柱を複数がりの少い中空の粘土円筒で、脚部の台とは明確に区別することができる。

高杯A—II (D—117) は杯底部の角度から、杯Aをもつものであろう。脚台部の円孔が3個である点から、杯部と脚台部の接合技法が明らかでない (D—116・118) もこの類に含まれるものとみられる。

高杯A—III (C—89) は浅い椀形の杯部をもっており、杯底部の一部と脚台部を欠失しているが、粘土の合せ目の状態や、接合時に補強のため加えた粘土が、第3技法を用いていることを示している。

高杯B 多数出土している高杯Bには、第T技法を用いた確実なものがなく、おもに、第II・第Ⅲ技法を用いたものとみられる。

高杯B—I (C—92) に代表される高杯で、いずれも、杯底部の傾斜がつよく、立ち上がる口縁の外湾の度合は小さい。(C—92) は暗茶褐色を呈し、焼成の極めて良好なものである。

高杯B—III 完形品が少ないとから、杯部と脚台部を第Ⅲ技法で接合したという明確な資料に乏しいが、第Ⅲ—1技法によるものは (D—149)、また、第Ⅲ—2技法によるものは (C—95) が考えられ、第Ⅲ—3技法は (C—91) に如実に示されている。(C—91) は比較的平らな皿状の杯底部をもち、底部に接合された口縁の立ち上がりがつよく、また、口縁部が大きく外湾するものである。

こうした杯の形状から、杯Bの破片の多くが、第Ⅲ—3技法、またはこれにちかいものと推定できる。

6. 鉢 形 土 器

壺・甕・高杯形土器の個体数に比べて、著しく少く、F地点において3点を検出しただけである。なお、甕の底部などには、鉢形土器になるものが含まれる可能性がある。

3点の鉢形土器のうち、2点 (F—75・76) は大型品で、残る1点 (F—77) は小型品である。いずれも口縁部を外反させるものであるが、口縁部端の調整に技法の違いがみられる。

そこで、外反させた口縁部端に横ナデ等による調整を加えないものを鉢形土器A、調整を加えたものを鉢形土器Bとした時、小型鉢形土器は鉢形土器Aに、大型鉢形土器は鉢形土器Bとすることができます。

鉢形土器A 体部外面には叩き目を施し、内面は刷毛目で器肉の厚みを調整している。(ここでは小型品である。)

鉢形土器B いずれも口縁部径25cmをこえるもので、口縁部端を上方に屈曲させて、丁寧な

横ナデを施している。また、体部外面はヘラ磨きを施すが、内面に刷毛目を残す（F-76）は外面にもわずかであるが刷毛目の調整痕を残している。（ここでは大型品である。）

7. 瓢

鉢形土器と同様に、F地区で2点を認めたにすぎない。双方とも壺形七器と同様の成形で、外面は叩き目を残している。（F-73）は砲弾形の底部に焼成前に穿孔を加えたもので、（F-74）は壺形上器Aを代表した（D-113）と同形の底部に、やはり焼成前に底部外側から穿孔したものである。

8. 手 烧 形 土 器

手焼形土器とみられるものは、C・D・Fの3地点から各1点の出土をみたが、これらはいずれも体部の中央よりやや下部に、凸帯、または刻目をもった凸帯をめぐらす。

（C-99）は体部に刻目凸帯をもち、肥厚させた口縁部に直接、上部を欠失した蔽部が連なる。

（D-152）は体部に凸帯をめぐらし、これより頸部にいたる間は、刷毛目を施している。口縁部は強く外方へひらいたあと、屈曲して立ち上がり、蔽部は口縁部のつけねから立ち上がるようであるが、底部とともに欠落している。

（F-78）は蔽部の痕跡がみられない断片であるが、体部に刻目凸帯をもつことなどから手焼形七器とすることができる。やはり凸帯から頸部にいたる体部上半には刷毛目を施し、体部内面は全体に刷毛による削り調整がみられる。口縁部は、その端部を上方へ屈曲させ、横ナデによる丁寧な調整を施し、その端面には1条の浅い凹部をつくり出している。

9. そ の 他 の 器 種

（D-153）は黄褐色を呈し、粗い粘土を胎土とする土器細片で、器面の剥落が著しい。土器片のほぼ中央がしほんでいて、上方（口縁部）とみられる側は、内湾しながら外反し、下部は球形をなすものとみられ、小型丸底壺に似た形状を示す。

（F-80）は、球形の体部に脚台をそなえたもので、体部器表に刷毛目がみられる。口縁部および脚台部裾を欠失している。

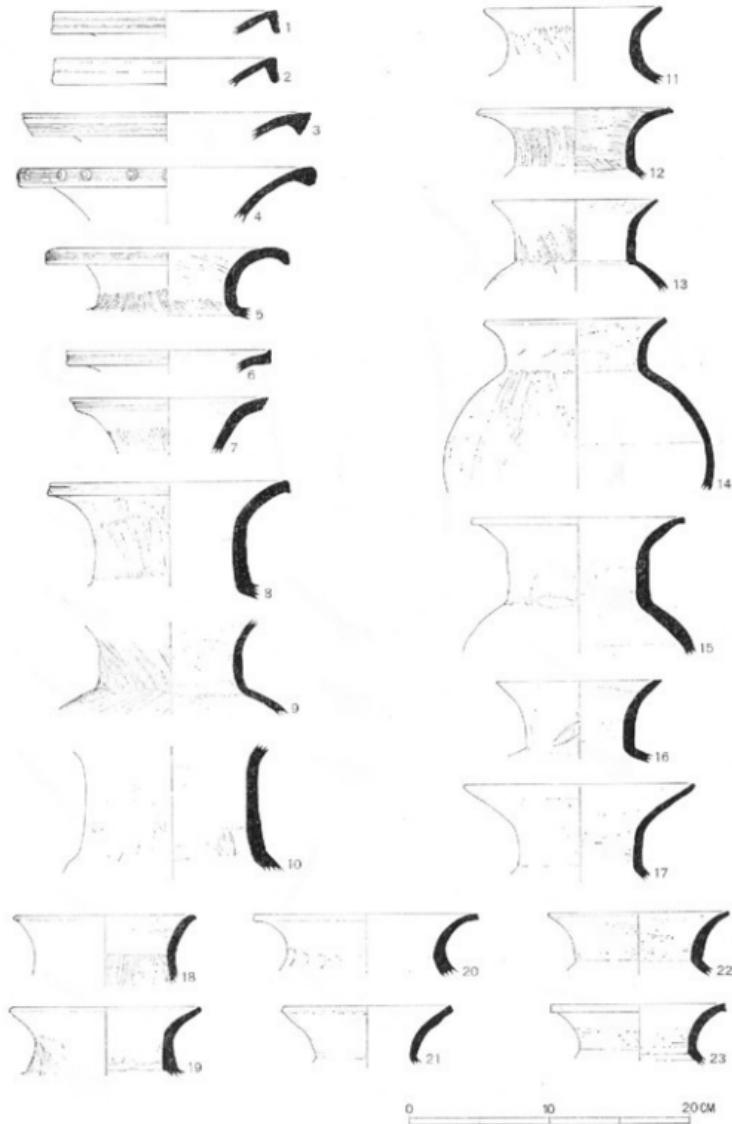
次に、実測図及び一覧表によって各土器についての詳細を記す。

第6表 大師山遺跡出土弥生式土器形態及出土地別一覧表

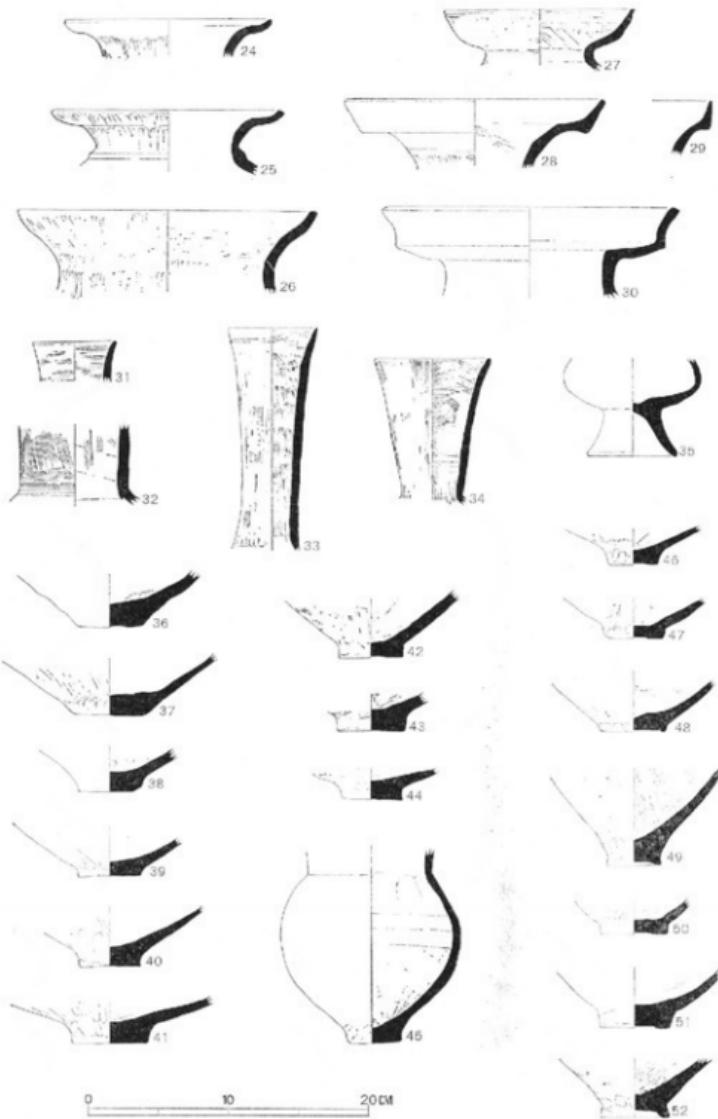
器種・形態 出土地地区	C 地区	D 地区	F 地区	1号住居址	J 地区	第3号住居址	第2号焼上塙
	A	B	C	D	E	F	G
壺	A I	3~7	1				
	B II		2, 3				
	C III		19	14, 15			
	D IV	8~19	4~7, 13, 15	1~13, 16			
	E V	20~23	8~12, 14		完形品	3	
長颈壺		28~30	16, 17, 18				
		32, 45					
細頸壺		31, 33, 34, 35	20	17, 18, 19			
	A	68, 69, 70	75, 76				
甌	B	53~67, 72	33~74, 113	26~30, 33~38	1, 2		
	C I	71	77~81, 84	25, 31, 22 39~41, 50			
甌	C II		82, 83				
	A I		114, 115				
	A II		116, 117, 118				
高杯	B III	89					
	C I						
	C II	92	140, 134				
鉢	B III	91, 95	149				
	A			77			
鉢	B			75, 76			

底部片

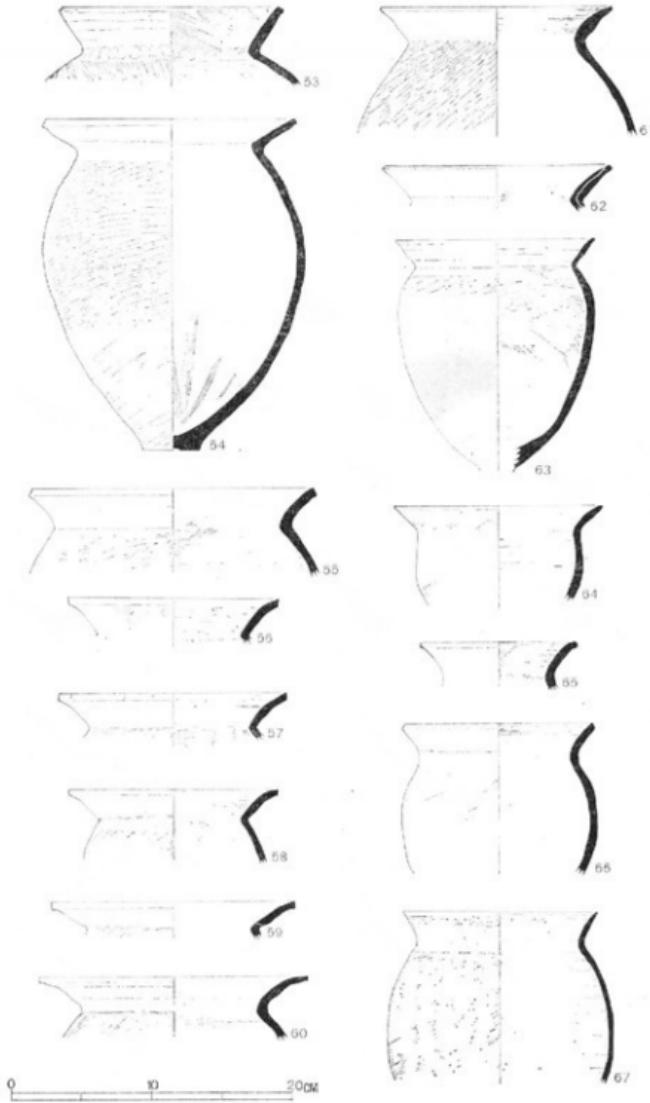
* 試机については開口部は分類され可動なものが多いので、指標としていたものに限った。



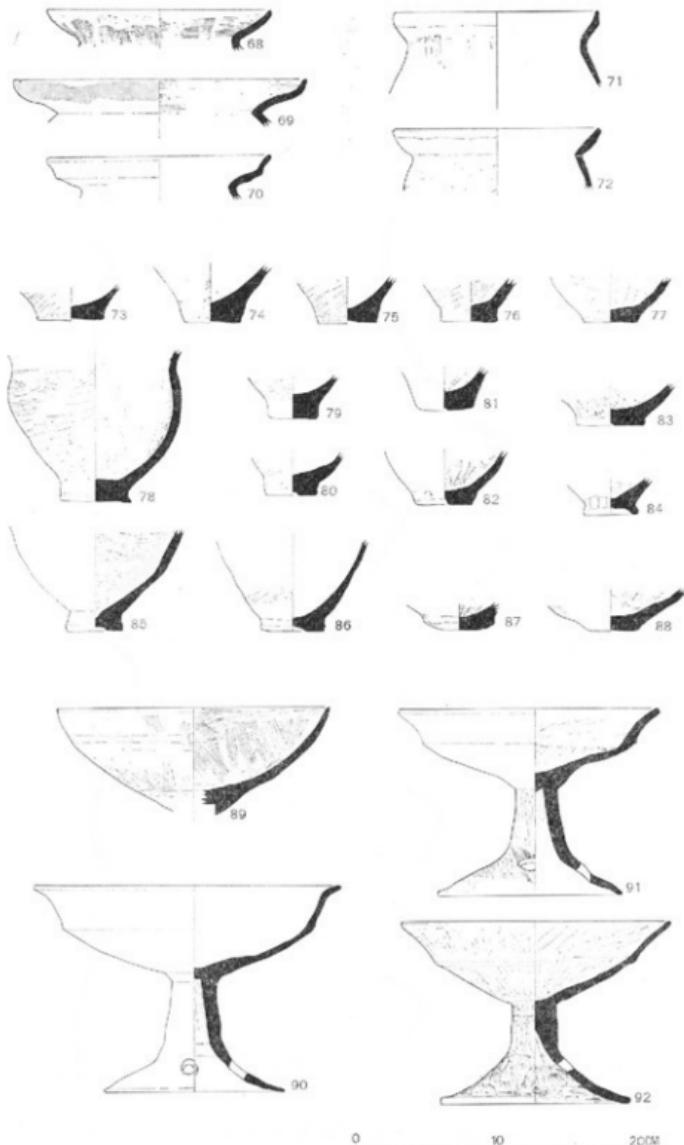
第55図 C地区出土土器実測図(1)



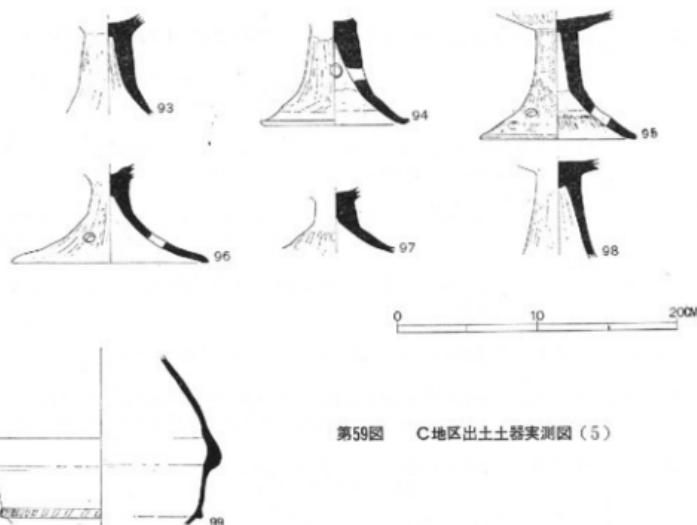
第 56 図 C 地区出土土器実測図 (2)



第 57 図 C 地区土土器実測図 (3)



第 58 図 C 地区出土土器実測図 (4)



第59図 C地区出土土器実測図(5)

1号住居址出土土器

番号	器種	法量(cm)	所見
	壺 C	口径 12.2 腹径 17.4 底径 4.2 器高 20.7	やや長胴の体部に、短な口頭部を接続したもの。口縁部はヨコナデ調整が行なわれ、端部を丸く止める。頸部部界外面ハケ目調整(タテ)。胴部外面タタキ目、のち中位は粗いハケ目(ヨコ)下位はヘラミガキ調整。上位のみタタキ目残る(左下)。

C地区出土土器一覧表

番号	器種	法量(cm)	所見
1	壺 A	口径 15.9	口頭部が直線的に外反し、先端で垂下する。その拡張した外面に擬凹線文を2条もつ。内外面とも平滑に仕上げる。
2	壺 A	口径 15.8	1と同様の形態をもつ。裏面はヨコナデにより中央がゆるくくぼむ。内外面とも平滑に仕上げる。
3	壺B-I	口径 20.6	口縁部がゆるく外反し、末端で広がる。端面に3条の擬凹線文をもつ。
4	壺B-I	口径 20.8	口縁部がゆるく外反し、厚ぼったい端部とその端面に2条の凹線文、その上に竹管文を配する。
5	壺B-I	口径 14.6	頭部から丸く外反する口縁部をもつ。

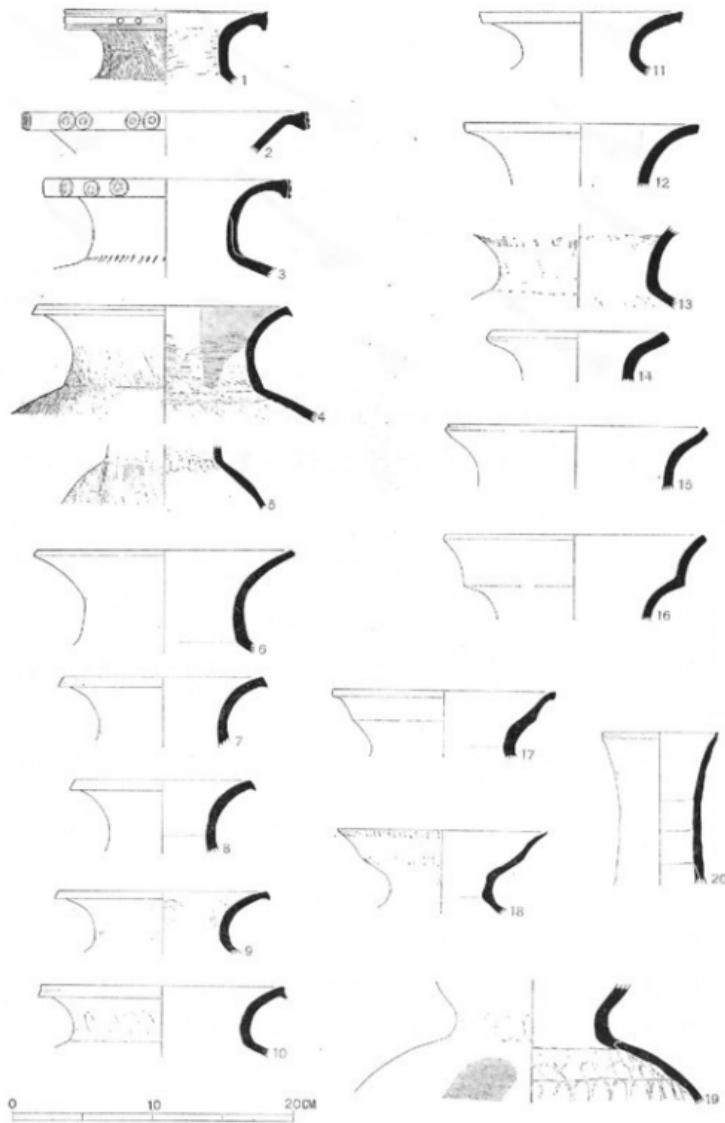
6	壺B-I	口 径 14.6	端部が上方にやや突出し、その披張した面に1条の擬凹線文をもつ。
7	壺B-II	口 径 14.2	口縁部が斜め上方に開き、端部近くできらん屈曲する。端面に2条の凹線文をもつ。内外面共にハケ目調整。
8	壺D-I	口 径 17.0	筒状の頸部をもち、外反する口縁部に接続する。頸部外面はヘラミガキ、内面はハケ目調整。
9	壺D-II		肩、頸部界内外面に接合痕。肩部は叩打により成形。頸部から連接部付近までハケ目調整。内面は頸部ヨコ方向、肩部ナメ方向のハケ目調整。
10	壺D-III		筒状頸部の内外面共ハケ目調整。頸部内面下方にヘラによる3本の並列縦線。
11	壺D-IV	II 径 12.4	頸部外面にタテ方向のヘラミガキ調整。全体的に磨滅基しい。
12	壺D-V	口 径 13.4	筒状頸部からゆるく外反する口縁部をもつ。頸部外面はタテ方向のハケ目、内面は下端にナメ方向のハケ目。頸胴部界内面に接合痕が残る。
13	壺D-VI	口 径 11.8	頸部から屈曲して斜め上方へ直線的にのびる口縁部をもつ。内外面共ハケ目調整。頸、肩連接部に継ぎ目。
14	壺D-VII	口 径 13.1 腹 径 19.3	外面は口頸部ヨコナデ、胴部ヘラミガキ(タテ方向)調整。内面口頸部はヘラミガキ(ヨコ方向)。頸部外面にヘラ状工具による短い斜線列が・巡する。胴部下半にスス付着。胴部内面中央近くに粘土紐の継ぎ目。
15	壺D-VIII	口 径 15.3	肩部と頸部の屈曲部に小さい粘土塊が部分的に残る。貼付文帯？頸部下半は粘土帶貼付前にタテ方向のハケ目調整。口頭部は外面共ヨコナデ調整。内面頸部に指圧痕、指ナデ、肩部に粘土帶の継ぎ目が残る。
16	壺D-IX	II 径 11.7	外反した口縁先端は、水平に平坦面をつくる。外面は頸部以下タテ方向にハケ目調整しヘラ記号文(上方がやや開いたナメ方向の平行線)を刻む。II縁部は端面までヨコナデ調整、内面は頸部下方の粘土紐の継ぎ目より上方にナメ方向のハケ目調整。
17	壺D-X	口 径 16.2	頸部径のほぼ2倍の大きさに開く口縁部径をもち端部は丸くねわる。外面II縁底部下と頸、肩部界に粘土の継ぎ目が残る。内外面共ヘラミガキ(タテ方向)調整。頸部内面にヨコ方向のハケ目調整。
18	壺D-XI	II 径 13.1	頸部から短く外反する口縁部に続く。頸部内面上端に粘土紐の継ぎ目。その下方はタテ方向のハケ目調整。
19	壺D-XII	口 径 13.7	頸部から器厚を減しながらII縁部に至る。先端は上方にふくらみをもつ、頸部内外面共部分的にハケ目調整底。頸部内面下端に接合痕。
20	壺D-XIII	口 径 15.9	口頸部がゆるやかに外反。内面はタテ方向のハケ目調整。内外面共ヨコナデで仕上げる。頸部下端に指圧痕？
21	壺D-XIV	口 径 12.2	比較的細い頸部から口縁部が大きく開く。内外面共粗いヨコナデ調整。
22	壺D-XV	口 径 12.8	器厚は先端へと次第にすばみ小さい端面をつくる。内面はヘラ調整。

23	壺D-II	口径 12.2	外反した口縁部の先端がヒ下に少し突出し、端面をつくる。外面はヘラミガキ後ヨコナデ。内面頸部下に粘土の巻ぎ目。外面頭部下に指圧痕。
24	壺 C	口径 14.6	斜め上方に開いた頸部が外へ屈曲し、再びゆるく立ち上がる受口状の口縁をもつ。外面はタテ方向のヘラミガキで仕上げる。
25	壺 C	口径 14.8	一度外反した口縁部が大きく屈曲して内湾ぎみに開き、先端は端面をつくる。頸部に小さなケズり出した凸部が一巡する。外面は幅約3mmのタテ方向のヘラミガキ。全体的に磨減著しい。
26	壺 C	口径 20.2	外反した口縁部が斜め上方に立上がる。全体にゆるやかなカーブで移行。水平な端面。内外共ヘラミガキ調整（粘土紐の巻ぎ目痕の外面は上・下半共タテ方向、内面は上半ヨコ、下半タテ方向）
27	壺 C	口径 13.6	頸部径は口径の約半分。頸部から「く」の字形に外反し、少し内湾して立ち上がる。外面は頸部下タテ方向のハケ目、口縁部はタテ方向のヘラミガキ、内面は口縁下半はナナメ方向のヘラミガキ、上半はヨコナデ。
28	壺 E	口径 18.4	頸部がゆるやかに外反したのち、外面に棱をもって直線的に立ち上がる。口縁部ヨコナデ調整。頸部内面ナデ、頸部外面上半ヨコ方向のハケ目。下半丸いハケ目（タテ）。
30	壺 E	口径 20.4	筒状の頸部上端から水平に近く外反し、その先に外湾ぎみの立ち上がりを連接した口縁部をもつ。外面は、全面にヘラミガキを施すが、不十分。
31	細 頸 壺	口径 5.6	筒状の口縁部で頸部は若干開く。外面は平滑だがハケ目が残る。内面はヨコ方向のハケ目調整。
32	長 頸 壺		頸部下半。外面はタテ方向のハケ目、肩部との境は粗いヨコ方向のハケ目調整。内面は筒状部に成形のための粘土紐巻き上げ痕、肩部との連接部にはヨコ方向の巻ぎ目。その上にタテ、ナナメ方向のハケ目。
33	細 頸 壺	口径 6.5	口縁端がやや開きぎみの筒状部をもつ。
34	細 頸 壺	口径 8.3	頸部から口縁端へ向って次第に開き先端は丸くおわる。外面はタテ方向のハケ目、内面はヨコ、ナナメ方向、下端附近はタテ方向のハケ目調整。
35	細 頸 壺	腹 径 10.0	器体上半部欠失。腰の張った胴部に丈高の脚部を付設する。
36	壺	底 径 4.6	全体に磨減著しい。外面は小さい起伏がある。底部内面に小さい粘土塊が付着。
37	壺	底 径 5.5	外面は胴部ヘラミガキ（タテ方向）、底部側面に指圧痕。黒斑がついている。内面は磨減著しい。
38	壺	底 径 4.5	外面はタテ方向のヘラミガキが底部側面にまで及ぶ。
40	壺	底 径 4.4	外面はタテ方向のヘラミガキ調整。内面は磨減著しい。底面中央やや凹。
41	壺	底 径 5.5	外面タテ方向のヘラミガキ、内面ハケ目調整。

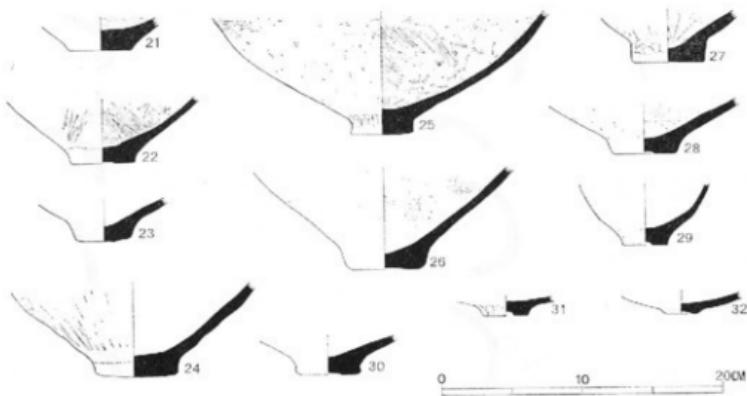
42	壺		内外面共ハケ目調整。底部側面に指圧痕。底面中央やや凹。
43	壺	底 径 4.8	外面底部上端にヨコ方向のハケ目。内面ハケ目調整。
44	壺		内外面共磨滅著しい。
45	長 頸 壺	腹 径 12.8 底 径 3.9	胴外面はタテ方向のヘラミガキで底部まで。底部側面にはナメ方向の指圧痕。内面は上半ヨコナデ（粘土の繊ぎ目残る）、下半は底部近くをクモノ巣状で上の方はヨコ方向のハケ目調整。胴部下半は部分的に底ちかくまでススが付着。
46	壺	底 径 3.5	外面胴部にタテ方向のヘラミガキ、底部側面に指圧痕。内面ハケ目調整。底面中央はゆるく凹。
47	壺	底 径 4.1	外面はタテ方向の粗いヘラミガキ。内面はハケ目調整。底面中央浅く凹。
48	壺	底 径 4.5	外面胴部にタテ方向のヘラミガキ、底部側面に指圧痕。黒斑が残る。内面は任意方向のハケ目調整、黒色の付着物がある。
49	壺	底 径 3.8	胴部外面から底部側面にかけてヨコ方向のハケ目、境界に指圧痕。内面は底部近くはクモノ巣状、その上はタテ、ヨコのハケ目調整。下の方がハケ目粗い。底面は端近くからゆるく凹。
50	壺	底 径 4.6	外面タテ方向のヘラミガキ、内面ヨコ方向のハケ目調整。
51	壺	底 径 5.1	外面胴部から底部にかけてヘラによって押えられる。内面ハケ目調整。
52	壺	底 径 4.9	底部が高台状になる。境界部に指圧痕。外側は上半ヨコ、下半タテ方向、内面は粗いナメ方向、細かいヨコ方向のハケ目調整。
53	壺 B	口 径 15.3	「ぐ」の字形に外反する口縁部をもつ。頸部に指圧痕。肩部はタテ方向の粗いハケ目調整。内面はより粗いハケ目調整。
54	壺 B	口 径 18.1 腹 径 18.7 底 径 4.1 器 高 23.7	胴部外面クタキ成形（上位は水平、中位左下り、下位も左下り）。外面下部ではクタキ目をナデ消すが不十分。頸部はヨコナデ。口縁部、胴部上位内面はヨコナデ。それより下位はタテ方向のハケ目調整。内・外面に煤付着。
55	壺 B	口 径 20.1	口縁部先端は面をつくっておわる。胴部外面はタタキ目、内面は主にヨコ方向のハケ目調整。口縁部は内外面共ヨコナデ。
56	壺 B	口 径 15.0	内面ヨコヘラミガキ。
57	壺 B	口 径 16.2	胴部外面をタタキ（左下り）により成形の後、ヘラミガキ調整、内面ハケ目（ヨコ方向）。口縁部外面は平滑にする。
58	壺 B	口 径 14.9	口縁部が胴部径を凌駕する。口縁部先端付近で若干開く。胴部外面はタタキによる成形の後表面を研磨。内面はナメ、口縁部はヨコ方向の粗いハケ目調整。口縁部外面はヨコナデで整える。
59	壺 B	口 径 17.5	胴部外面はタタキ（左下り）成形。頸部に粘土紐の繊ぎ目が残る。口縁部内外面はヨコナデ整形。

60	斐	B	口 径 19.2	口縁部が比較的大きく聞く。口縁部の内外に粘土の離ぎ目が残る。胴部外面はタタキ目（左下り）。内面はヨコ方向のハケ目、口縁部は内外をヨコナデ後ハラミガキで平滑にする。口縁部外面にスス付着。
61	斐	B	口 径 16.4	口縁部が胴部径より小さい。口縁部は先端へ器厚を減じてすぼまる。胴部外面はタタキ目（左下り）。口縁部内外面はヨコナデ。
62	斐	B	口 径 16.1	口縁部は先細りにわたり、先端の小さな面に割み目（器 1~3 mm）を細かく入れて巡する。粘土の離ぎ目が1枚の器内を走る。内外共ヨコナデ。頭部外面にスス付着。内面はヘラケズリ。
63	斐	B	口 径 14.2 腹 径 14.0	最大胴部径が口縁部径と等しく、しかも上位にある。全体的に磨滅著しく、左下りのタタキ目が胴部上位のみ残る。中位にスス付着。胴部内面は上位ヨコ、中位ナナメ方向のハケ目調整。
64	斐	B	口 径 14.9 腹 径 11.9	全体的に磨滅が進んでいる。外表面は胸部から頸部まで左下りのタタキ目。胴部内面はヨコ方向の粗・綿のハケ目。口縁部は内外共ヨコナデ。
65	斐	B	口 径 11.3	外表面ヨコナデ調整。内面中央ヨコナデ、下半タテ方向のハケ目、上半ヨコ方向のハケ目調整。
66	斐	B	口 径 13.8	左下りのタタキ目が後消される。口縁部ヨコナデ調整。
67	斐	B	口 径 13.8 腹 径 16.0	外表面は左下りのタタキ目、胴部内面はヨコ方向のハケ目、口縁部内外面はタテ方向のハケ目調整。端部近くは外表面共ヨコナデ。
68	斐	A	口 径 15.9	口縁部が内湾気味に立ち上がりながら外反する。外表面は主にタテ方向、内面はヨコ方向のハケ目調整。全体に磨滅著しい。
69	斐	A	口 径 21.0	内外面共ヨコナデ。外表面に帯状でスス付着。
70	斐	A	口 径 15.8	外表面はヨコナデ後研磨。内面は磨滅。
71	斐C-I	I	口 径 14.5	磨滅著しい。外表面肩部附近にタテ方向のヘラケズリ。内面不明。
72	斐	B	口 径 14.9	胴部外面は左下りのタタキ目。口縁部、頸部外面に粘土の離ぎ目が残り調整粗い。内面は丁寧に研磨。
77	斐		底 径 3.8	外表面は右下りのタタキ目。内面底部中央はヨコ方向にヘラケズリ。その上をヨコ方向にハケ目で仕上げる。底面は平坦。
78	斐		腹 径 12.5 底 径 5.1	口径、腹径、器高が共にほぼ等しい割合をもつ。口端部は欠失しているが、外反度はゆるい。外表面腹部に左下りのタタキ目。底部はヨコナデ整形し、その後丁寧に磨く。口縁部ヨコナデ。腹部内面タテ方向のハケ目。底部は粘土の円板を底に離ぎ足し形成。
79	斐		底 径 3.8	外表面左下りのタタキ目。磨滅が相当進む。
80	斐		底 径 3.7	外表面左下りのタタキ目。底面は平坦、中央でくぼむ。
81	斐		底 径 4.0	底部からまっすぐ腹部へと移行し、境界は不明確。外表面の製作痕は磨滅のため不明。底面は平坦、中央で小さくくぼむ。

82	甕	底 径 4.1	内面底近くにクモの巣状の粗いハケ目、その上をナナメ方向に細かいハケ目調整。底部外面指頭圧痕。底面は平坦、中央で小さくくぼむ。
83	甕	底 径 5.0	外面底部中位上半までタテ方向にヘラミガキ。内面はクモの巣状にハケ目調整。底面は平坦、中央で小さくくぼむ。
84	甕	底 径 3.8	底部は外へ小さく開いた高台状。外面指頭圧痕。内面ハケ目仕上げ。
85	甕	底 径	底部は腹部との境界でいたんくびれ。後端広がり氣味になる。腹部下半内面はヨコ、ナナメ方向でハケ目調整。内面には炭化物が付着。
86	甕	底 径 4.5	全体的に磨滅がひどく進行。外面には部分的に左下りのタタキ目成形痕。
87	甕	底 径 5.0	底部外面に粘土紐の繼ぎ目。内面クモの巣状にハケ目調整。
88	甕	底 径 3.5	腹部外面下端に擦付着。外面は平滑に研磨。内面は任意方向にハケ目。
89	高杯A一目	口 径 20.5	椀形杯部のみ遺存。外面は下半タテ方向のヘラミガキ、上半粗いハケ目、端部近くはヨコナデ。内面は上端近くヨコ方向のハケ目、下部ナナメ、ヨコのハケ目調整。脚部との接合付近に強化した粘土を足す。
90	高 杯	口 径 21.8 器 高 14.8	杯部が屈曲して立ち上り先端近くで短く外反。全体に脆弱で磨滅著しい。杯部外面へラミガキ。脚部内面にシボリ目。縦に円孔 4。
91	高杯B一三	口 径 18.6 器 高 13.3 脚 径 13.2	明確な棱線をつくって外反する杯部をもつ。杯部外面は端部ヨコナデ、以下ヨコ方向のヘラミガキ。内面は端部ヨコナデ、以下上半・下半に分れてヘラミガキ。脚外面は上半ヘラミガキ、下半ハケ目。端部はヨコナデ。内面上半にシボリ目。縦近くに 4 孔。杯部底に突出部。
92	高杯B一II	口 径 20.1 器 高 12.8 脚 径 13.5	杯部内外面共タテ方向のヘラミガキ。端部内外はヨコナデ。脚柱部外面は上三分の 1 ヨコ方向のハケ目、以下斜文を巡らしタテ方向のハケ目、後全体をタテ方向のヘラミガキ。内面にシボリ目。端部外面は上・下端ヨコ、中はナナメ方向のハケ目。内面もハケ目調整。円孔 3。
93	高 杯		脚柱部のみ遺存。外面タテ方向のヘラミガキ調整。内面にシボリ目。
94	高 杯	脚 径 10.7	縦端は少し上り氣味で丸くおわる。外面は上半タテ、下半ナナメ方向のヘラミガキ。内面シボリ目。縦部はヨコナデ。円孔 4。
95	高杯B一三	脚 径 11.2	杯部外面はタテ方向のヘラミガキ。脚部は上、下に分けてタテ方向のヘラミガキ。端部近くに先に調整したヨコ方向のハケ目が残る。内面は下半タテ方向のハケ目、端部近くはヨコナデ。端部に円孔。
96	高 杯	脚 径 14.0	大きく壺が広がり端部は丸くおわる。脚部外面はタテ方向のヘラミガキ。
97	高 杯		脚部上半のみ遺存。外面にタテ方向のヘラミガキ痕。
98	高 杯		杯部底に突出部。外面はヘラミガキで研磨。内面にシボリ目。
99	手 烧 形 土 器		手焼り形土器の瓶部の一部から胴部にかけて遺存。瓶部口縁は肥厚して外湾。胴部には 1 条の刻み目凸帯を貼付して巡る。全体に磨滅著しい。



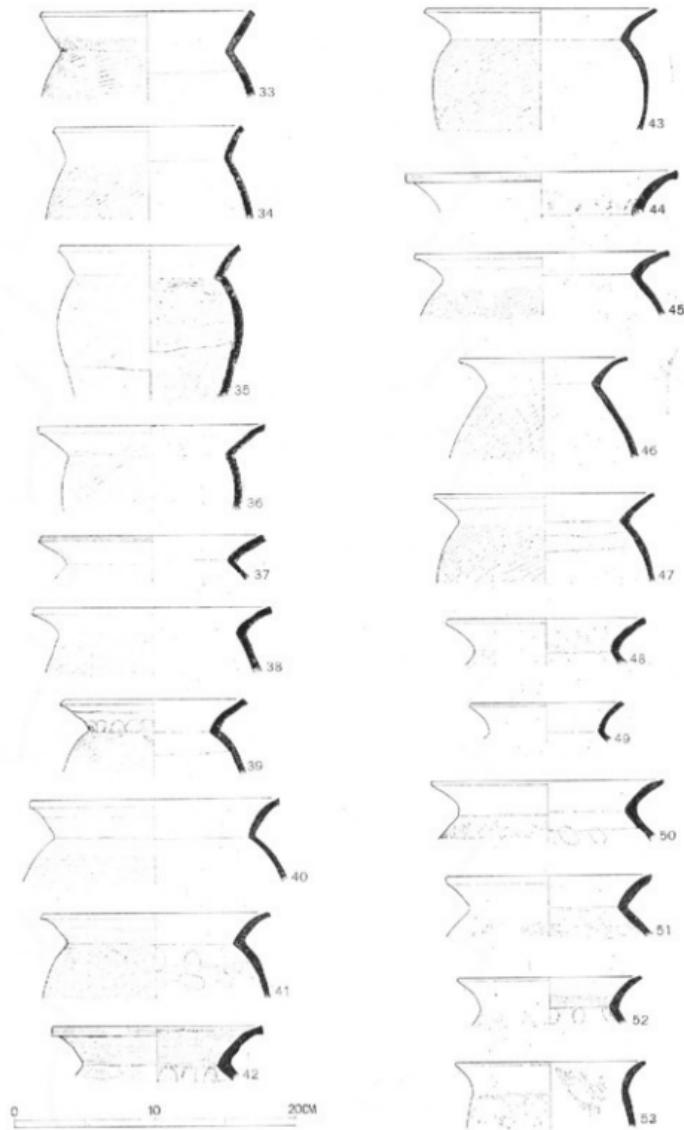
第60図 D地区出土土器実測図(1)



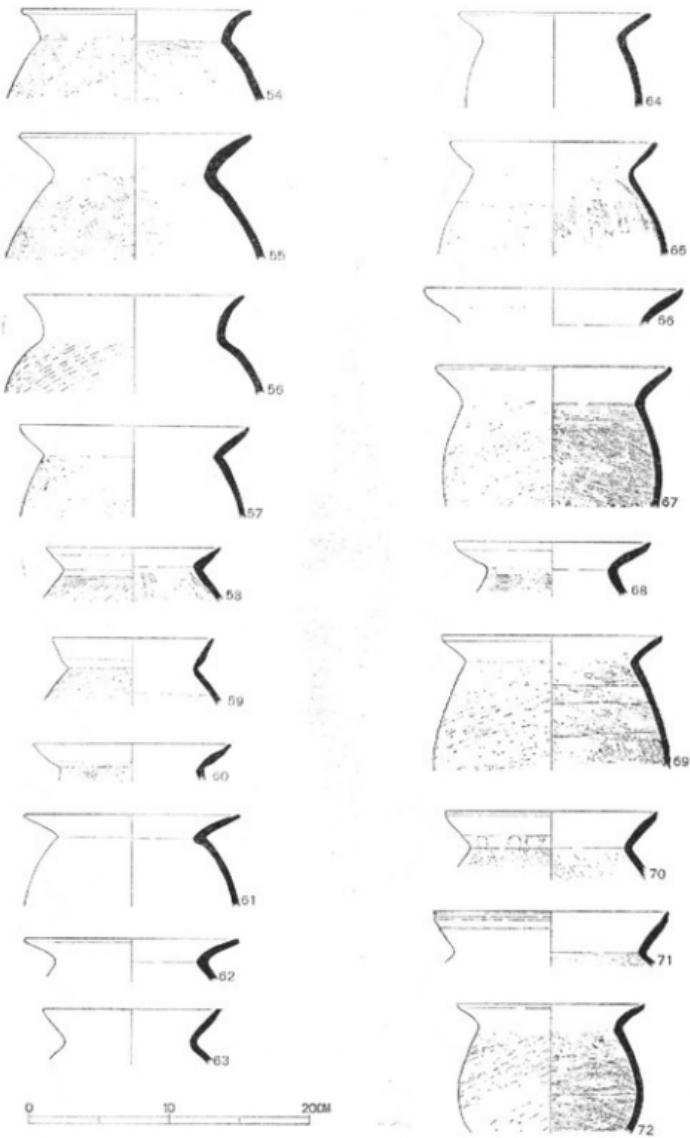
第61図 D地区出土土器実測図(2)

D地区出土土器一覧表

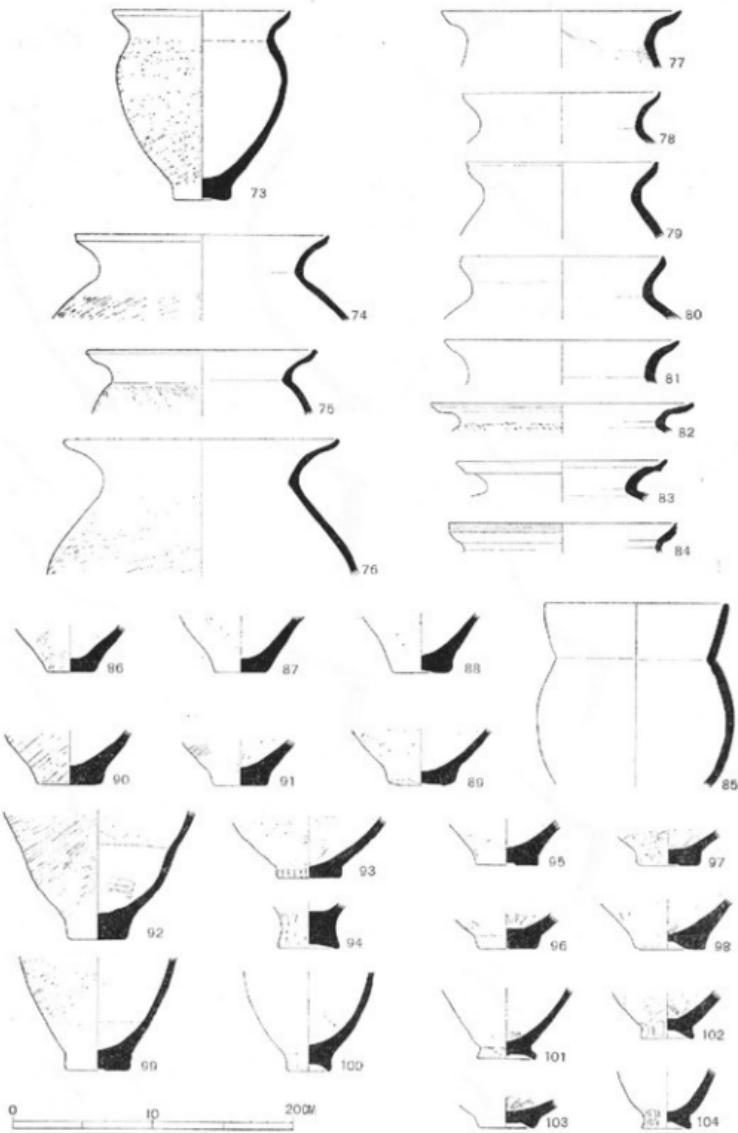
番号	器種	法量(cm)	所見
1	壺B-I	口径 14.5	口縁部を若干下に扯張し、2条の凹線の間に3個1単位の竹管文を配する。頸部は内外面ともヘラミガキ調整。
2	壺B-II	口径 19.6	口縁端面に竹管文付円形浮文貼付。
3	壺B-II	口径 17.0	口縁端部を下方に扯張し、3個1対の竹管文付円形浮文を配する。内外面共としてヨコナナデ調整。口縁下面のみハケ目。頸部下端にヘラ先刺突文がめぐる。
4	壺D-I	口径 18.2	口縁部は若干下方へ扯張し、端面をなす。内外面共ハケ口調整。内面頸部界に接合痕。黒斑あり。
5	壺D-I		口縁部欠。内面頸部界に指圧痕顯著。外面はハケ目調整。内面は頸部をハケ目、胴部はナナデ調整。
6	壺D-I	口径 18.1	外面はヨコナナデ調整。磨減著しい。
7	壺D-I	口径 14.1	口縁端部をななめ下方へ若干扯張。口端面および内外面共ヘラミガキ。
8	壺D-II	口径 12.4	口縁端部を下方へ若干扯張。口端面および内外面共細かなヘラミガキ。
9	壺D-II	口径 14.8	口縁端部をななめ下方へ若干扯張。頸部外面ハケ目、内面ヘラミガキ調整。磨減著しい。
10	壺D-II	口径 17.3	口縁部は下方へ若干扯張。頸部外面に弱い指圧痕。口縁部ヨコナナデ調整。
11	壺D-II	口径 14.5	磨減著しい。



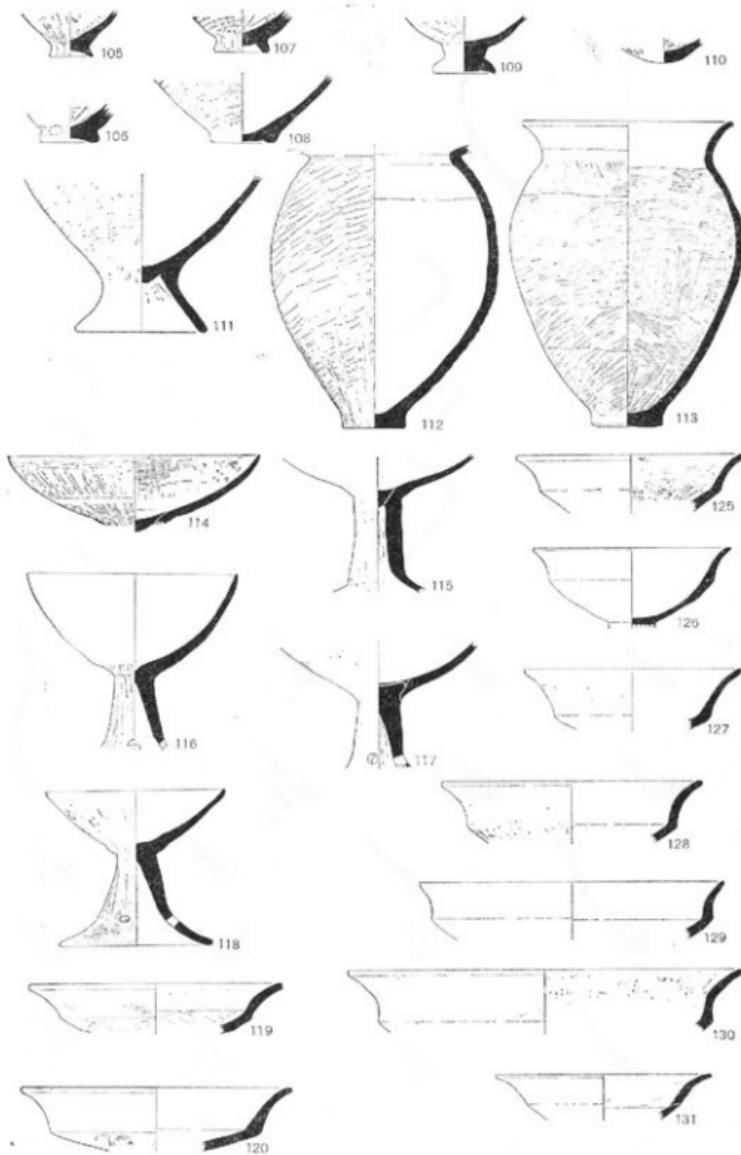
第 62 図 D 地区出土土器実測図(3)



第63図 D地区出土土器実測図(4)

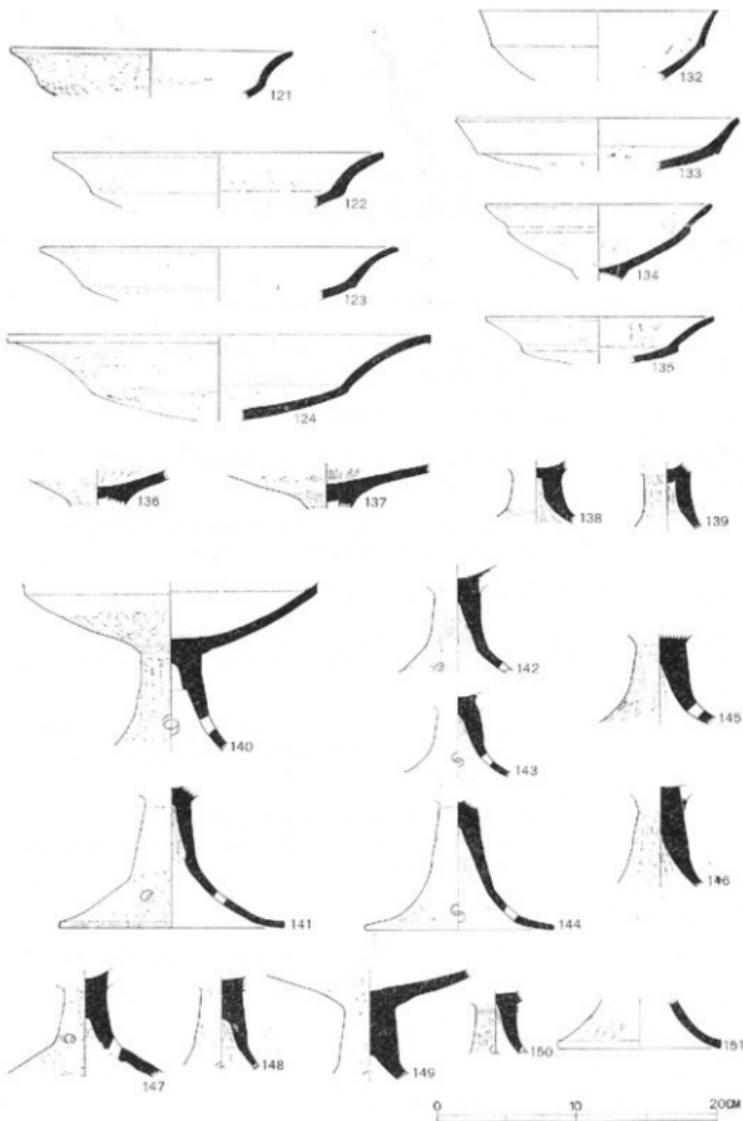


第64図 D地区出土土器実測図(5)

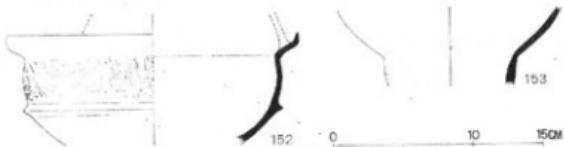


第 65 図 D 地区出土土器実測図 (6)

0 10 200M



第 66 図 D 地区出土土器実測図(7)



第67図 D地区出土土器実測図(8)

D地区出土土器一覧表

P88よりつづく

番号	器種	法量 (cm)	所見
12	壺D-II	口径 16.8	口縁部の外反度が大きい。磨滅著しく詳細不明。
13	壺D-I		頸部外面はヘラケズリのち一部ハケ目調整。内面はハケ目、および胴部上端に指圧痕。
14	壺D-II	口径 12.2	内、外面共ヘラミガキ調整。
15	壺D-I	口径 18.2	口縁部は外反したのち若干立ち上がる傾向をみせる。頸部外面はヘラミガキ。口縁は内外面ともヨコナデ調整。
16	壺 E	口径 18.3	明確な棱をもって二重に外反する複合口縁をなす。外面は全面ヘラミガキ調整し、部分的に指圧痕を残す。
17	壺 E	口径 15.8	複合口縁をなすが、外面の棱は弱い。磨滅著しく詳細不明。
18	壺 E	口径 14.9	きわめてゆるやかなカーブをもって二重に外反し、外面に棱をもたない。口縁部外面には二段にわけてヘラ先刺突文をめぐらす。頸部外面ヘラミガキ。
19	壺 C		口頸部は、外反したのちゆるやかに立ちあがる傾向を見せる。頸部外面には指圧痕がめぐり、胴部内面も粘土帯接合痕と指圧痕が全面に残る。頸胴部界付近の内面はハケ目調整。
20	細頸壺	口径 8.0	上方に向ってやや外反の傾向を示す。口縁部は丁寧なヨコナデ調整により、外面にわずかな凹部をめぐらす。外面ヘラミガキ。下端の破断面に胴部との接合面を残す。
21	壺	底径 4.3	内面ハケ目調整。
22	壺	底径 4.4	外面ヘラミガキ。内面細かなハケ目調整。内、外面とも底部周縁に接合痕あり。
24	壺	底径 4.9	外面ヘラケズリ。
25	壺	底径 4.5	外面は下半がタテ、中半がヨコのヘラミガキ。内面はハケ目調整でこれも下半と中半で方向がわかる。
26	壺	底径 5.0	外面ヘラミガキ、内面ハケ目調整。
27	壺	底径 5.2	外面ヘラミガキ、内面ハケ目調整。

28	壺	底 径 4.3	外面ヘラミガキ、内面ハケ目調整。底面中央がくぼむ。
29	壺	底 径 3.2	小型壺。外面底部周縁にヘラ整形痕あり。
30	壺	底 径 4.2	外面タタキ目、内面ハケ目。
33	甕	B 口 径 14.7	口縁部は「く」の字形に屈曲して端面をもち、直線的に立ち上がる傾向を示す。胴部外側タタキ目。
34	甕	B 口 径 13.3	口縁部ヨコナデ調整、「く」の字形に弱く屈曲して端面をもつ。外面タタキ目(左下り)。内面ハケ目調整。外面に螺付着。
35	甕	B 口 径 12.7 腹 径 13.3	外面タタキ目のも下半ハケ目、内面ハケ目。内外面共に胴部中位に接合痕があり、タタキ目、ハケ目はこの上下で方向をかえる。上半水平、下半左下り。
36	甕	B 口 径 16.2 腹 径 12.8	口径が腹径を凌駕する。内面ハケ目、外面タタキ目(左下り)。口縁外側にヘラ状工具成形痕あり。
37	甕	B 口 径 15.7	口端面に沈線を一本めぐらす。口縁部ヨコナデ調整。外面タタキ目(左下り)。
38	甕	B 口 径 16.6	胴部の張りが少ない。外面タタキ目(左下り)。
39	甕	B 口 径 12.5	口縁部ヨコナデ調整。胴外面タタキ目(左下り)。口縁部下端に粘土を貼付したのちハケ目調整。胴部との接合補強のためか?
40	甕	B 口 径 17.6	口縁部はやや外反の傾向をもち、端部をやや上方へつまみあげる。胴外面のタタキ目はほぼ水平ないし下り。
41	甕	B 口 径 16.0	口縁部ヨコナデ。胴部外面タタキ目(左下り)、内面は指圧痕がめだつ。口縁胴部界は外面にハケ目を施し、内面に頗るな棱を残す。
42	甕	B 口 径 14.8	口縁部はハケ状工具によるヨコナデ。口端面がやや広い。胴部外面タタキ目(左下り)。内面は指圧痕のちハケ目。口縁外下面端にハケ目。
43	甕	B 口 径 16.0 腹 径 15.3	胴部外面タタキ目(左下り)。肩の張りが強く、器壁はうすい。
44	甕	B 口 径 19.4	口端部に粗い沈線。口縁部内外面ともヨコナデ調整。内面は一部ハケ目。
45	甕	B 口 径 18.1	胴外面タタキ目(左下り)。
46	甕	B 口 径 11.8	口径が小さく肩の張りが少ない。外面タタキ目(左下り)。
47	甕	B 口 径 15.5	胴外面タタキ目(左下り)。胴内面に接合痕あり。
48	甕	B 口 径 14.0	口縁ヨコナデ調整。内面ハケ目調整。外面タタキ目?
49	甕	B 口 径 10.5	口縁ヨコナデ調整。胴内面ハケ目。
50	甕	B 口 径 16.5	口縁ヨコナデ調整、わずかにつまみあげる傾向をみせる。外面タタキ目(左下り)のちハケ目。内面に指圧痕。

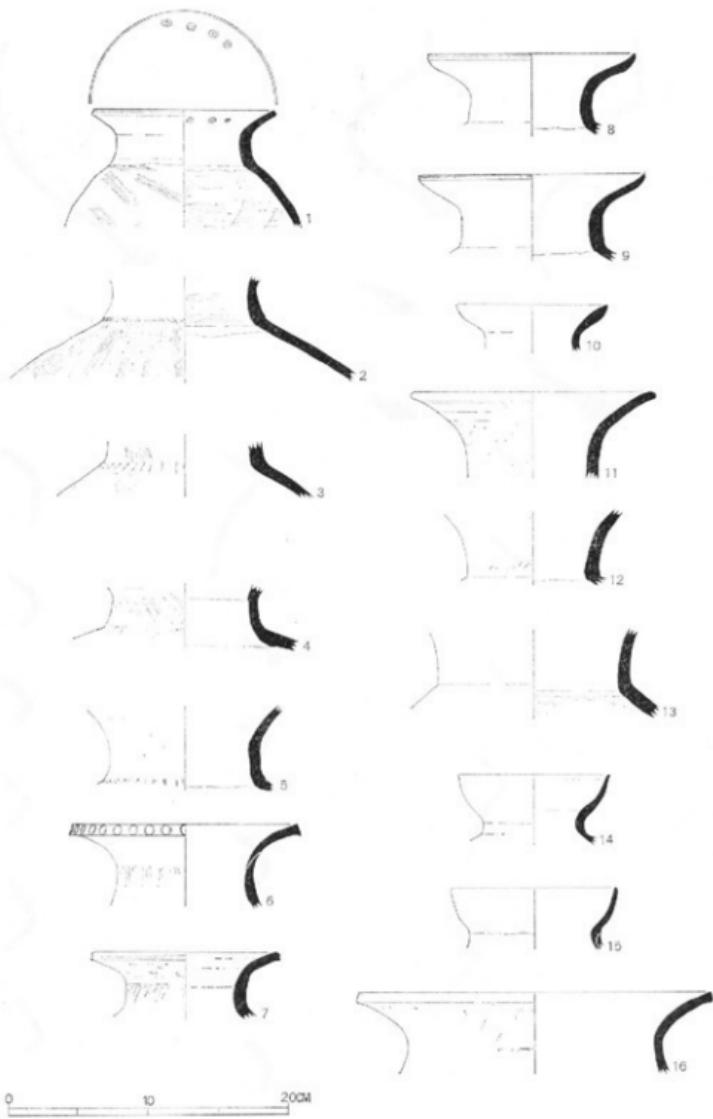
51	妻	B	口 径 14.5	口縁ヨコナデ調整。口端面をもたない。胴外面タタキのちヘラミガキ？
52	妻	B	口 径 13.8	口縁内面ハケ目のちヨコナデ。胴外面タタキ目（左下り）。内面指圧痕残る。
53	妻	B	口 径 13.3	口縁ヨコナデ調整。胴内面ハケ目。外側も粗いハケ目調整。
54	妻	B	口 径 16.3	口縁ヨコナデ調整、わずかな端面をもつ。胴外面はタタキ目。内面は細かなハケ目調整。口縁と胴の界部内面に接合痕。外側はハケ目。
55	妻	B	口 径 16.2	口縁はハケ目（タテ方向）のちヨコナデ。胴部は肩の張りが少なく、内面はハケ目調整。外側は、上半左下り中半水平のタタキ目を施し、のちタテ方向のハケ目を加える。煤が付着。
56	妻	B	口 径 15.5	口縁部立ち上がりぎみ。胴外面タタキ目（左下り）。口縁部に煤付着。
57	妻	B	口 径 16.2	胴肩の張りが少ない。外側タタキ目（左下り）。磨滅著しい。
58	妻	B	口 径 12.3	口縁ヨコナデ調整。端部はややとがりぎみ。胴内面ハケ目、外側タタキ目（左下り）。胴上端にヘラ描沈線がめぐる。
59	妻	B	口 径 11.2	口縁ヨコナデ調整。外側タタキ目（左下り）。
60	妻	B	口 径 13.3	口縁ヨコナデ調整。わずかな端面をもつ。胴外面タタキ目（左下り）。
61	妻	B	口 径 15.0	口縁部が急角度に屈曲する。磨滅著しい。
62	妻	B	口 径 15.0	わずかな口端面をもつ。磨滅著しい。
63	妻	B	口 径 12.0	やや内湾ぎみの口縁部をもつ。外側ハケ目調整。内面不詳。煤付着。
64	妻	B	口 径 13.4	口縁ヨコナデ調整。胴外面タタキ目（左下り）。内面ハケ目。
65	妻	B	口 径 14.3	口端部はまるくおさめる。胴外面タタキ目（水平）。内面ハケ目。口縁に煤付着。
66	妻	B	口 径 18.2	口縁ヨコナデ調整。端をややつまみ上げぎみ。外側に煤付着。
67	妻	B	口 径 16.5	口端部を若干つまみ上げる。胴外面タタキ目（左下り）。内面ハケ目。
68	妻	B	口 径 13.8	口縁および胴内面ヨコナデ調整。口端直下に棱をもつ。胴部ヨコ方向のハケ目。
69	妻	B	口 径 15.5 腹 径 16.8	口縁部ヨコナデ調整、端面をつくる。胴外面タタキ目（左下り）。胴内面ハケ目、中半で方向が変わる。内面に接合痕あり。外側煤付着。
70	妻	B	口 径 14.8	口縁ヨコナデ調整、端部に軽く凹部がめぐる。口縁下端に指圧痕あり。胴部のタタキ目は格子状に重なっており、左下りのち右下りのタタキ目。
71	妻	B	口 径 16.5	口縁部ヨコナデ調整。外側に凹部をめぐらす。胴内面ハケ目。
72	妻	B	口 径 13.3 腹 径 13.1	口縁部ヨコナデ調整、端部ややつまみ上げぎみ。胴外面粗いタタキ目（左下り）。内面細かいハケ目。外側に煤付着。

73	腰	B	口 径 12.5 腹 径 12.2 器 高 13.5	口縁端部をわずかにつまみあげる。胴外面はやや細かなタタキ目で、ほぼ最大振幅あたりを境に方向がわり、上半水平、下半左下り。内面はハケ目が残るが磨滅著しい。
74	腰	B	口 径 17.9	口縁部をわずかにつまみ上げる。胴外面タタキ目。磨滅著しい。
75	腰	A	口 径 16.0	口縁部はゆるやかにカーブして受け口状をなし、明瞭な端面をつくる。胴内面はタテ方向のハケ目。内面は磨滅のため不詳。
76	腰	A	口 径 19.3	胸部から口縁部にかけてはゆるやかなカーブで移行した後、口端部は受け口状にやや上を向く。胴外面はタタキ目（左下り）。磨滅著しい。
77	腰C—I		口 径 17.0	直立に近い胸部から口縁部へゆるやかに外反し、とがりぎみの端部はわずかに上を向く。口縁ヨコナデ調整。胴外面タタキ目（左下り）、内面ハケ目。
78	腰C—I		口 径 13.9	口縁端部がつまみ上げられる。磨滅著しく詳細不詳。
79	腰C—I		口 径 13.4	胸部から口縁部にかけてはゆるやかに移行し、口端部は上方につまみ上げられる。口縁ヨコナデ調整。
80	腰C—I		口 径 14.2	口端部がつまみあげられる。口縁部ヨコナデ調整。胴外面タタキ目（左下り）。
81	腰C—I		口 径 16.6	口縁部がゆるやかに外反したのち端部がやや上を向く。ヨコナデ調整。
82	腰C—II		口 径 18.7	口縁は胸部から急角度で折りまれた形になり、口端部がやや上を向いてその底下には四部がめぐる。胴外面細かなハケ目調整。
83	腰C—II		口 径 15.0	「く」の字形に外反する口縁部が外面に接をもって若干立ち上がり、端部は丸く終わる。ヨコナデ調整。
84	腰C—I		口 径 16.0	口端部が上を向き、その外側直下に二本の沈線をめぐらす。
91	腰		底 径 3.6	外面タタキ目成形（左下り）。内面ヘラ成形痕。黒斑あり。
92	腰		底 径 4.2	外面は粗いタタキ目（左下り）。内面ハケ目調整、一部ヘラケズリ痕も残る。内面の接合痕を境に胸部が若干屈曲。内面に難付着。
93	腰		底 径 4.2	外面タタキ目（左下り、ないし水平）。内面ハケ目調整。底部周縁には指圧痕と共にヘラ先刺突文があげぐる。
96	腰		底 径 4.0	内外面ともハケ目調整。
97	腰		底 径 4.2	外面タタキ目（左下り、ないし水平）。底部周辺に若干のしづり痕をみる。内面ヘラケズリ痕あり。内外面に難付着。
98	腰		底 径 5.0	外面ヘラ整形。内面ハケ目。底面が大きくなっている。磨滅著しい。
99	腰		底 径 4.6	外面タタキ目成形（下半左下り、のち中半水平）。底面中央くぼむ。
100	腰		底 径 3.0	内外面ともハケ目調整。底部周縁に指圧痕が残り、上げ底ふうになる。外面難付着。

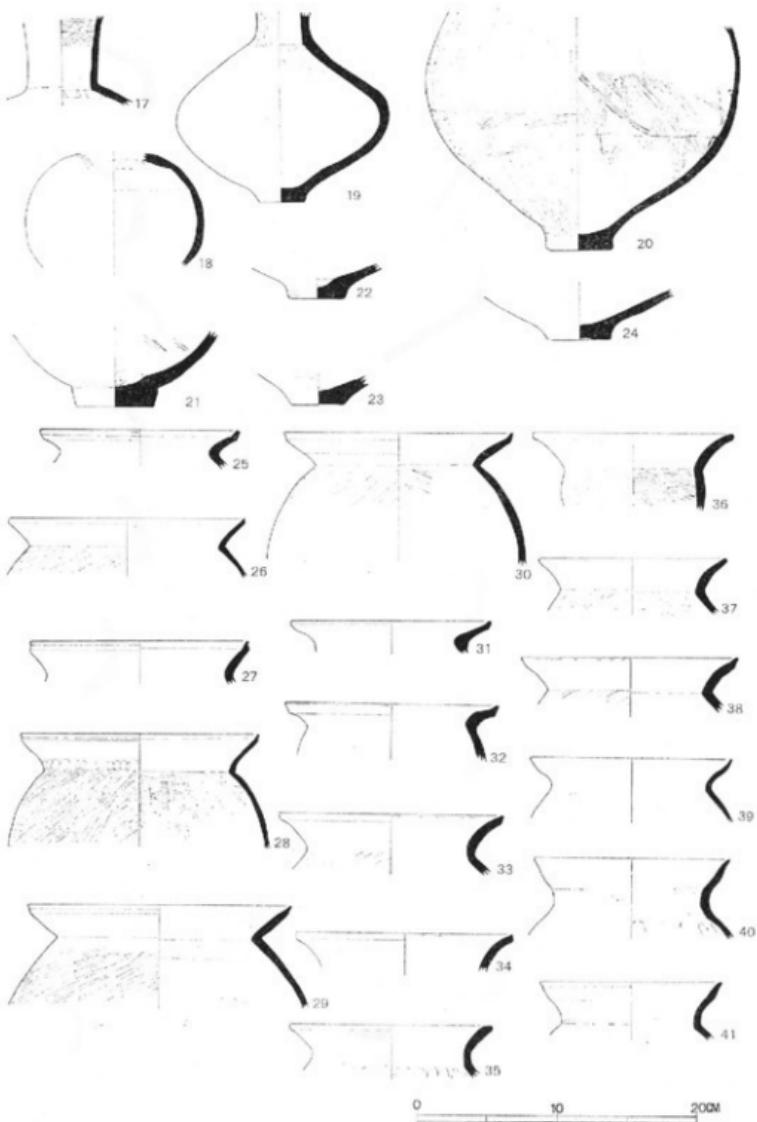
101	斐	底 径 4.2	内面ハケ調整。外面底部周縁に指圧痕が残り、上げ底ふうになる。
102	斐	底 径 3.8	外面タタキ目（左下り）、内面粗いハケ目。底部周縁に指圧痕が残り、上げ底ふうになる。
103	斐	底 径 4.0	内面ハケ目調整。底部は上げ底ふうになる。
104	斐	底 径 3.5	底部周縁に指圧痕が残り、上げ底状になる。磨滅著しい。
105	斐	底 径 3.1	外面ヘラミガキ、内面ハケ目調整。全体に器厚がうすく、底部周縁に頗著な指圧痕が残り、上げ底をなす。外面に煤付着。
106	斐	底 径 4.2	内面ハケ目調整。底部周縁に指圧痕。
107	斐	底 径 4.0	外面はタタキ目が格子状になる。内面ハケ目調整。底部は指圧痕成形によって高台状をなす。
108	斐	底 径 4.8	外面タタキ目成形（若干左下り）。底面ややくぼむ。外面に煤付着。
109	斐	底 径 4.5	胴部と底部の間に、長さ約1cmで中実の柱状部をもつ。外面はやや細かなタタキ目（左下り）。製塙土器か？
110	斐		丸底状をなす。内面ハケ目調整。
111	台付斐	脚 径 9.4	脚下端にラッパ状に聞く脚部を接続した台付斐。外面はやや細かなタタキ目。下端のみヘラ削り。脚部はヨコナデ調整。内面にシボリ目遺存。
112	斐	底 径 4.5 版 径 17.2	最大腹径が高の中央やや上にある長胴の斐で、口縁部欠。外面は左下りのタタキ目で明確な変化点をもたない。下半はハケ目調整を加える。口縁部ヨコナデ調整。内面はナヂ調整。底部にヘラ削りを加える。
113	斐 B	口 径 16.4 器 高 21.8 腹 径 16.5 底 径 5.0	最大腹径がやや上にある胴部と、ゆるやかに外反する口縁部をもつ。胴外面のタタキ目は、上・中・下の三段に分かれ。中半はほぼ水平、上・下は左下り。中半の付近に横方向のハケ目。内面は主として横方向（一側タテ方向）のハケ目調整。脚部・口縁部の外面に煤付着。
114	高杯A - I	口 径 17.6 杯 深 5.5	楕状の杯部の底に粘土円板をつめる。外面タテ・ヨコのヘラミガキ調整。下部のみ一部ハケ目。内面もハケのちヘラミガキ。ヘラミガキが一部暗文状になる。内面に煤付着。
115	高杯A - I		杯部底に粘土板をつめる。脚は中空。シボリ目あり。外面は杯部・脚部ともヘラミガキ調整。
116	高杯A - II	口 径 14.8 杯 深 6.8	杯部がさわめて深い。脚柱部ヘラミガキ（タテ方向）。円形三方スカシ。
117	高杯A - II		楕状の杯部。内・外面ともていねいなヘラミガキ（タテ方向）。脚内面にシボリ目。円形三方スカシ。
118	高杯A - II	口 径 12.7 杯 深 3.8 器 高 11.1	杯部は直線的に開いてそのまま止まり、特異な器形をなす。外面は、杯部・脚部ともに主としてタテ方向のハケ目調整がなされ、のち口縁部はヨコナデ。杯部下半ヘラミガキ（タテ方向）。脚部はヨコ方向のハケ目。

119	高 杯	口 径 17.8	杯底部から稜をもって外反し、口端面をもつ。内・外面ともハケ目のち ヘラミガキ (ヨコ方向)。
120	高 杯	口 径 19.1	口径にして口縁部の立ち上がりが大きい。杯底部ハケ目調整。
121	高 杯	口 径 20.0	口縁部はロコナデ。端面に沈線が入る。口縁部内・外面ともナナメ方向 のヘラミガキ。杯底部もヘラミガキ (ヨコ方向)。
122	高 杯	口 径 23.4	口縁部外面はハケ目 (タテ方向) のちヘラミガキ (タテ方向)。内面もヘ ラミガキ (ヨコ方向) のちタテ方向のヘラミガキが暗文状をなす。
123	高 杯	口 径 25.6	口縁部内面はハケ目のちヘラミガキ (ヨコ)。杯底部内面および外面もヘ ラミガキ (タテ)。
124	高 杯	口 径 30.2	底部から稜をもって口縁部が大きく外反し、明瞭な口端面をもつ。内・ 外面ともタテ・ヨコのハケ目調整のち、ヘラミガキ (タテ)。口縁上半 はヨコナデ調整。
125	高 杯	口 径 16.2	口径が小さく、口縁の反りも少ない。口縁および杯部外面ヨコナデ調整。 内面はハケ目 (ヨコ) のちヘラミガキ (タテ)。
126	高 杯	口 径 14.1	口径に比して杯部がかなり深い。内・外面ともヨコナデ調整。
127	高 杯	口 径 15.4	口径に比して口縁部の立ち上がりが大きく、端部は丸く終わる。口縁外 面はハケ目調整のちヘラミガキ (ナナメ方向)。
128	高 杯	口 径 18.4	口縁部の立ち上がりがやや大きい。口端部ヨコナデ調整。外面は細かな ハケ目 (タテ) のちヘラミガキ (タテ)。内面はやや粗いハケ目。
129	高 杯	口 径 21.4	杯部外面に稜をつくって、垂直に近く立ち上がったのち、わずかに外反 する。口縁部ヨコナデ調整。
130	高 杯	口 径 28.0	口径はかなり大きいが口縁部の反りは少ない。内・外面ともヨコ方向の ハケ目 (タテ) のちヘラミガキ (タテ)。内面下部のみヨコ方向のヘラミガキ。
131	高 杯	口 径 15.4	杯底部から、きわめて細い稜をもってたち上がったのち軽く外反する。 口縁部ヨコナデ。杯部内面ヘラミガキ (ヨコ)。内・外面とも煤付着。
132	高 杯	口 径 17.0	口縁の屈曲部が段状になり、口端面は水平面をなす。口縁部はハケ目 (ヨ コ) のちヘラミガキ (タテ)。口縁部内面のみヨコ方向のヘラミガキ。
133	高 杯	口 径 19.8	杯部が浅く、屈曲部が段をなす。口端部ヨコナデ調整。外面はハケ目の ちヘラミガキ (タテ)。内面はタテおよびナナメ方向のハケ目。
134	高杯B—I	口 径 15.6	杯底部から口縁部にかけて直線的に開き、屈曲部が段状をなす。外面ヘ ラミガキ。内面ハケ目 (ヨコ) のちヘラミガキ (タテ)。
135	高 杯	口 径 15.1	杯部が浅く、口縁の屈曲部が段状をなして大きく開く。内面ハケ目の ち、内・外面ともヘラミガキ (タテ)。
136	高 杯		内・外面ともヘラミガキ調整 (タテ)。

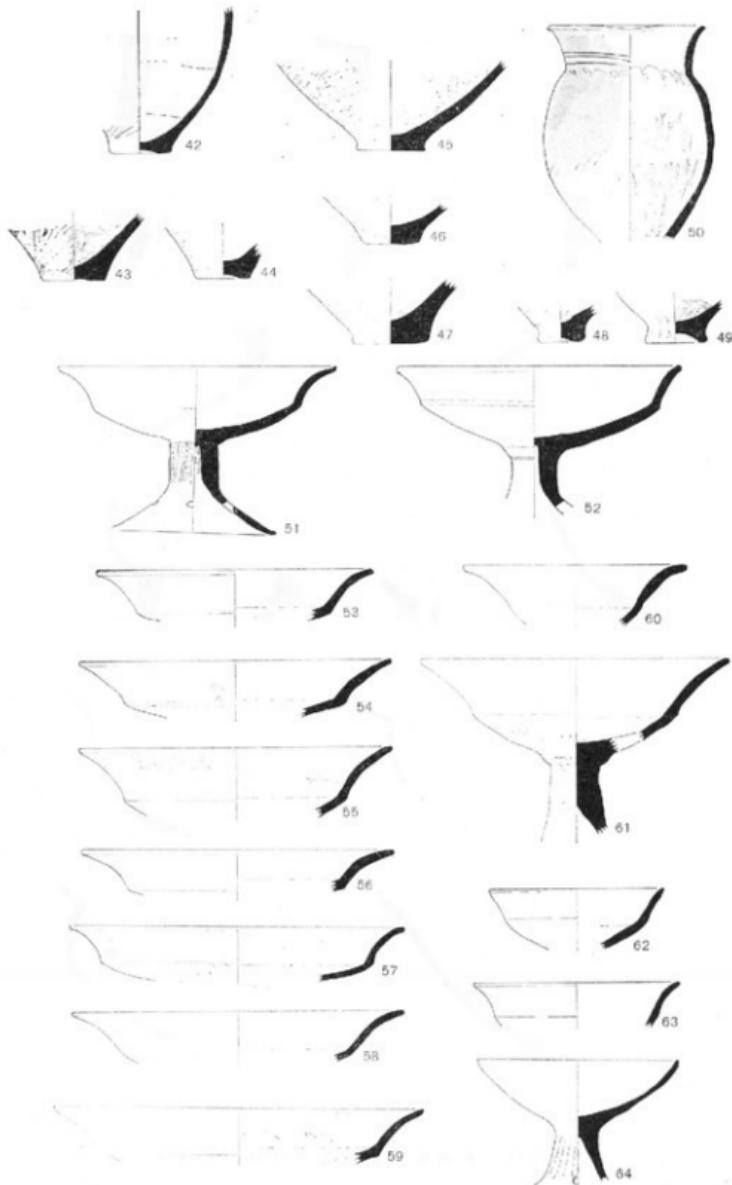
137	高 杯		杯底部に円板をつめた痕跡あり。外面ハケ目（ヨコ）、内面ヘラミガキ（タテ）。
138	高 杯		杯底部に円板をつめた痕跡あり。脚は中空、シボリ目あり。外面タテ、内面ヨコのハケ目調整。
139	高 杯		脚上端に指圧痕。外面ヘラミガキ（タテ）。円形四方スカシ。
140	高杯B-II		口縁部、および脚幅を欠く。底のない杯底部に脚上端を挿入して接続し粘土ひもを付加して補強する。杯部は外側に棱をもって立ち上がる。内外面共ヘラミガキ（タテ）。円形四方スカシ。
141	高 杯	脚 径 16.0	中空の柱状部から別い足曲部を境に幅部が大きく広がる。脚柱部は細かなハケ目調整（タテ）のちヘラミガキ。幅部も同じハケ目のちヨコナデとハケ目（ヨコ）を併用。内面は、上部にシボリ目が残り、掘までヨコナデ調整。端面にきざみ目。円形三方スカシ。
142	高 杯		底の無い杯底部に脚の上端を挿入したもの。脚の外側ヘラミガキ（タテ）。内面シボリ目、下部のみハケ目調整（ヨコ）。円形三方スカシ。
143	高 杯		底の無い杯底部に脚の上端を挿入したもの。外面ヘラミガキ、内面シボリ目。円形四方スカシ。
144	高 杯		脚部は細かなハケ目調整のち、柱部のみヘラミガキ（タテ）。幅部はヨコナデ調整。円形四方スカシ。
145	高 杯		外面ヘラミガキ、のち幅部のみハケ目（タテ）。内面も下部にハケ目が残る。円形三方スカシ。
146	高 杯		底のない杯底部に脚の上端を挿入して接続したものの脚外側ヘラミガキ内面シボリ目追存。
147	高 杯		底のない杯底部に脚の上端を挿入して接続したもの。脚柱部ヘラミガキ（タテ）、幅部ハケ目（タテ）。脚端部のみヘラミガキ（ヨコ）。円形三方スカシ。
148	高 杯		底のない杯底部に脚の上端を挿入して接続したもの。外面ヘラミガキ（タテ）。内面シボリ目追存。円形四方スカシ。
149	高 杯		それぞれ完成した杯部と脚部（中空）を接続したもの。杯部・脚部とも外側ヘラミガキ（タテ）。円形四方スカシ。杯内面のみ磨滅著しい。
150	高 杯		脚上端にクシ描直線文がめぐる。外面ヘラミガキ（タテ）。円形四方スカシ。
151	高 杯	脚 径 11.6	ラッパ状に聞く高杯脚幅部で、明瞭な端面をもつ。外面ハケ目調整（タテ）のち内・外面ではヨコナデ。
152	手 燬	口 径 20.6	口縁部はS字状に屈曲して受け口状をなす。脚部中央に凸部がめぐり、これを境に、上はハケ目（タテ）、下はヘラミガキ（タテ）。
153			やや大型で、小型丸底土器に近い形態を示す。磨滅著しい。



第68図 F地区出土土器実測図(1)

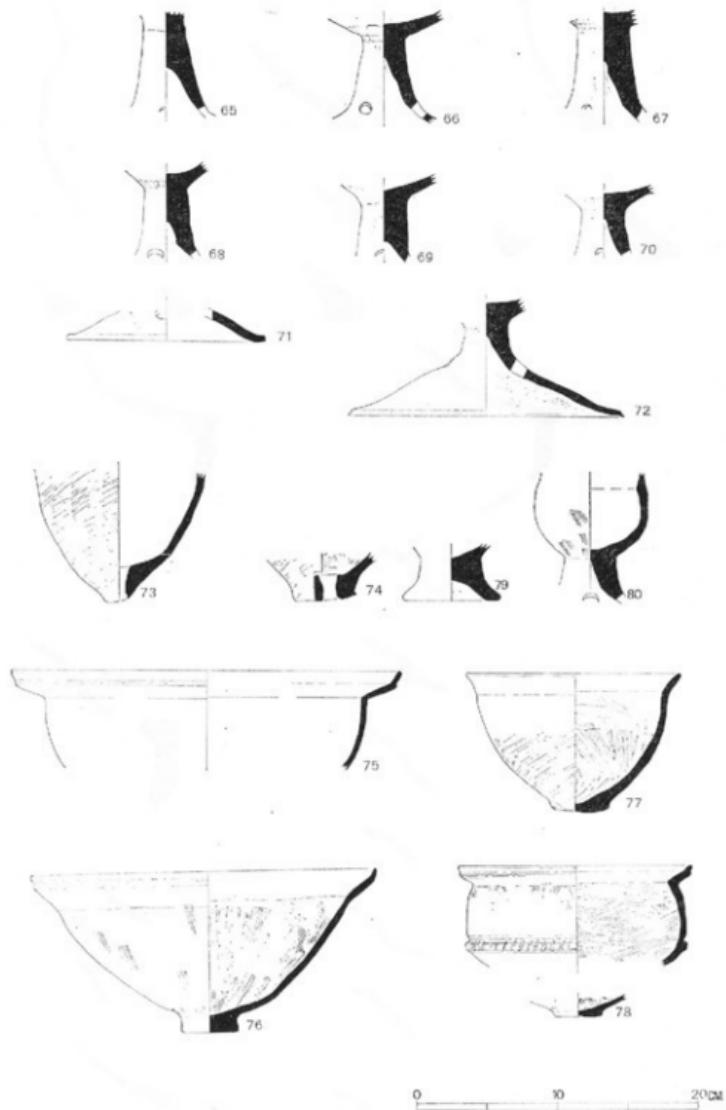


第69図 F地区出土土器実測図(2)



第70図 F地区出土土器実測図(3)

0 10 200M



第71図 F地区出土土器実測図(4)

F 地区出土土器一覧表

番号	器種	法 量 (cm)	所 見
1	壺D-I	口 径 12.8	短く直立する頸部から、外反した口縁端面に沈線をめぐらし、上面には4個の竹管文を単独で配する。口縁部ヨコナデ調整。胴外面ヘラミガキのち部分的にハケ目。内面は指頭成形のちナデ。
2	壺H-I		頸部部界に刺突文がめぐる。頸部内面ハケ目(ヨコ)のちヨコナデ。胴外面ハケ目(タテ)のちヘラミガキ(タテ)。内面指頭成形。
3	壺D-I		頸部部界に刺突文がめぐる。頸部外面ハケ目(タテ)、胴外面ヘラミガキ(タテ)。内面府減著しい。黒斑あり。
4	壺D-I		口縁部ヨコナデ、頸部ハケ目(タテ)。胴部ヘラミガキ(タテ)。
5	壺D-I		頸部部界に刺突文がめぐる。外面ヘラミガキ。府減著しい。
6	壺D-I	口 径 16.0	やや挽張ぎみの口縁端面に竹管文をめぐらす。頸部ヘラミガキ調整(タテ)。
7	壺D-I	口 径 12.8	口縁端面に凹線を1条めぐらす。頸部タテ方向のナデのち口縁部内・外面ヘラミガキ(ヨコ方向)。
8	壺D-I	口 径 14.6	直立する頸部から口縁部が大きく外反し、端部はやや上を向いて外側面に軽く凹線を1条めぐらす。口縁部ヨコナデ調整。頸部ヘラミガキ(タテ)。頸部内面下端に接合痕。
9	壺D-I	口 径 16.0	ほぼ直立する頸部から大きく外反した口縁の端部が若干上を向き、外側面に浅い凹線を1条めぐらす。口縁内・外面ともヨコナデ調整。頸部下端に接合痕。
10	壺D-I	口 径 10.6	一度成形したのち外面に枯土を付加し、再成形している。口縁内・外面ヨコナデ調整。頸部外面ハケ目(タテ)。
11	壺D-I	口 径 16.9	頸部から口縁部にかけて、ゆるやかなカーブをもって聞く。口縁内・外面ヨコナデ調整。頸部外面ヘラミガキ(タテ)。
12	壺D-I		頸部外面タテ方向のヘラミガキ。
13	壺D-I		頸部外面ヘラミガキ(タテ)内面ナデ。胴部外面ヘラミガキ(ヨコ)内面ハケ目調整。
14	壺 C	口 径 10.8	短い頸部から外反したのち、ゆるやかなカーブで立ち上がり、口縁端部は丸く止める。内・外面ともヨコナデ調整。
15	壺 C	口 径 11.6	14に比して頸部のしまりが少ないが、ほぼ同様にゆるやかなカーブで屈曲しながら立ちあがる。外面ヘラミガキ、内面ヨコナデ。
16	壺D-I	口 径 25.0	口縁部はゆるやかなカーブで外反し、明瞭な端面をもつ。口縁端部ヨコナデ調整。頸部外面ヘラミガキ(タテ)内面もヘラミガキ(ヨコ)。

17	細 頸 壺		頸部がやや外傾の傾向をもつ。頸部外面ヘラミガキ、内面ハケ目調整。胴上端に指圧痕残る。
18	細 頸 壺	腹 径 12.8	ほぼ球形の副部。内面上端にしづり目が残る。
19	細 頸 壺	腹 径 15.2 底 径 3.2	最大腹径がほぼ中央にある算盤玉状の副部をもつ。調整技法は内・外面ともていねいなナヂを主体とし、頸部外面と底部周縁(タテ)、胴中央部(ヨコ、弱い)はヘラミガキが施される。副内面上端にしづり目が残り、頸部のそれは完全にナヂ消されている。
20	壺	腹 径 22.5 底 径 4.8	副部を二段に分割成形したうちの上段以上を欠損し、中・下段の接合痕を残す。外面ヘラミガキ(タテ)、内面ナヂを主体とし、接合部のみ、ハケ目調整を施す。
21	壺	底 径 5.5	底、副部界に不整形な段をもつ。内面ハケ目調整、外面ヘラミガキ(タチ)。
22	壺	底 径 4.4	黒斑あり。磨滅著しい。
23	壺	底 径 3.7	外面ヘラミガキ。黒斑あり。
24	壺	底 径 4.4	底面やくぼむ。磨滅著しい。
25	斐C—I	口 径 14.1	「く」の字状に屈曲した口縁の端部が、外面に棱をもってわずかに立ち上がる。「」口縁外面、ヘラミガキの内・外面ともヨコナヂ調整。
26	斐 B	口 径 16.7	「く」の字状に屈曲した口縁の端部をわずかにつまみ上げる。外面タタキ目。磨滅著しい。
27	斐 B	口 径 15.4	口端部は外側面に棱をもってつまみ上げる。ヨコナヂ調整。
28	斐 B	口 径 16.8	「く」の字状に屈曲した口縁の端部をわずかにつまみ上げ、外側面に凹部をめぐらす。口縁外面ヘラミガキ、下端に指圧痕めぐる。胴外面タタキ目(左下り)。内面ハケ目、のちへラ彫形。
29	斐 B	口 径 18.7	口端部の外側面に棱をもって軽くつまみ上げる。口縁部ヨコナヂ調整。胴外面タタキ目(左下り)。
30	斐 B	口 径 16.4	口端部が外側面に棱をもってわずかに立ち上がり、上面に水平な端面をもつ。口縁ヨコナヂ調整。胴外面タタキ目(左下り)。内面ハケ目で、一部ヘラ削り。
31	斐C—I	口 径 14.2	口端部がわずかに上を向く。磨滅著しい。
32	斐C—I	口 径 15.0	口端部が外側面に棱をもってわずかに立ち上がる。口縁内面ヨコナヂ調整。
33	斐 B	口 径 15.8	口縁部が外側面に棱をもって若干つまみ上げられる。口縁はヨコナヂ調整。胴外面タタキ目(左下り)。
34	斐 B	口 径 15.4	口端部が端面をなし、かすかにつまみ上げられる。内面ヨコナヂ、外面ヘラミガキ。

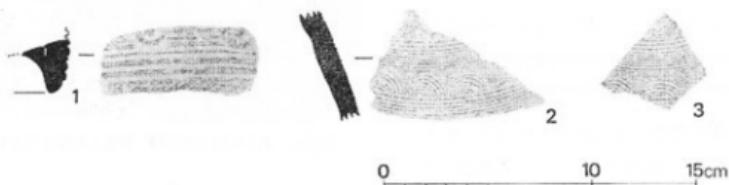
35	要 B	口 径 14.3	口縁部ヨコナゲ調整。胴内面の上端に指圧痕、外面タタキ目。口縁に煤付着。
36	要 B	口 径 14.1 底 径 10.2	小さな胴に比して口縁が大きく開く。口縁ヨコナゲ調整。胴外面タタキ目(ほぼ水平)内面ハケ目調整。
37	要 B	口 径 13.1	口縁内、外面ともヨコナゲ調整。胴外面は細かなタタキ目が格子状をなす。内面ヘラ削り。
38	要 B	口 径 15.3	口縁部がわずかに上向きぎみ。口縁部内・外ともヨコナゲ調整。胴外面タタキ目(左下り)。
39	要C—I	口 径 14.1	口径部が、ゆるやかなカーブで上を向く。口縁外面ヨコナゲ。胴外面タタキ目。磨減著しい。
40	要C—I	口 径 14.0	短い頸部からゆるやかに屈曲しながら口縁部が外方へ開く。口縁内・外ともヨコナゲ調整。胴内面指頭成形。頸部に煤付着。
41	要C—I	口 径 14.0	短い頸部とともにゆるやかに屈曲する口縁部をもつ。内・外面ともヨコナゲ調整。
46	要	底 径 4.0	外面底部周縁にタタキ目(左下り)。それより上はナゲ調整。内面ハケ目のちナゲ。外面煤付着。
47	要	底 径 5.5	外面タタキ目(左下り)。底部周縁のみ指圧痕残る。内面ハケ目。
48	要	底 径 3.4	外面タタキ目(左下り)。底部周縁に指圧痕めぐる。内面ヘラ整形。
49	要	底 径 4.5	底部周縁に指圧痕めぐり、上げ底状をなす。内面ハケ目調整。
50	要C—I	口 径 10.8 底 径 12.2	口縁部はほぼ直立したのち外反し、端面をもつ。口縁外面下端に3本の沈線。胴外面タタキ目(左下り)のちナゲ消す。内面ハケ目(タテ)。胴上端のみ外面ハケ目、内面指圧痕。胴上半から口縁部にかけて煤化。
51	高 杯	口 径 16.7 器 高 11.9 脚 径 11.4 杯 深 4.5	口縁部はかすかな棱をもって外反したのち端部をわずかにつまみ上げる。脚は中空で擦がラッパ状に開き丸く止める。杯部内・外面とも不鮮明なヘラミガキ。脚柱部ヘラミガキ(タテ)。据部外面ヘラミガキ(ヨコ)。内面ハケ目。シボリ目遺存。円形四方スカシ。
52	高 杯	口 径 19.8 杯 深 5.1	口縁部が軽く外反する。杯部内・外面および脚部外面ともヘラミガキ調整。円形四方スカシ。
53	高 杯	口 径 19.5	口縁部ヨコナゲ調整。内面ヘラミガキ。
54	高 杯	口 径 22.2	外面ハケ目のちヘラミガキ。磨減はげしい。
55	高 杯	口 径 22.2	口径に比してやや深い杯部。内・外面ともヘラミガキ(ヨコ)。
56	高 杯	口 径 22.2	やや浅めの杯部で口縁の外反度が大きい。外面ハケ目(タテ)のちヨコナゲ。
57	高 杯	口 径 23.8	口縁部が明瞭な棱をもって立ち上る。外面ヘラミガキ(タテ)。内面磨減はげしい。

58	高 杯	口 径 23.7	外面の棱が弱い。口縁外周ヨコナデのち弱いヘラミガキ。
59	高 杯	口 径 26.4	口縁外周ヨコナデ。内面ハケ目（タテ）のちナナメ方向のヘラミガキ。
60	高 杯	口 径 15.8	口径に比して深く、底のはっきりしない杯部。内・外面ともヘラミガキ。
61	高 杯	口 径 21.6	外面の棱がやや不明確。脚部上端は粘土ひもをそえて杯部との接合を補強。内・外面ともヘラミガキ。脚内面シボリ目。
62	高 杯	口 径 12.4	口縁が小さく、外面の棱はさわめて不明瞭。口縁部ヨコナデ調整。
63	高 杯	口 径 14.7	口縁が小さく、外面の棱が不明瞭。内・外面ともヨコナデ調整。
64	高 杯	口 径 14.3 杯 深 4.0	浅い椀状の杯部をもつ。杯部ヨコナデ調整。脚外周ヘラミガキ（タテ）。円孔4。
65	高 杯		脚外周上端に杯部の接合面あり。外面ヘラミガキ。内面シボリ目をナデ消す。円孔4。
66	高 杯		内・外面ともヘラミガキ（タテ）。脚部と杯部の接合部には指圧痕が残る。内面シボリ目。円孔3。
71	高 杯	脚 径 14.2	低く、大きく聞く脚部。外面ハケ目の中内・外面ともヘラミガキ。円孔4。
72	高 杯	脚 径 19.8	短い柱状部に、低く、大きく聞く脚部をもつ。端部はわずかにつまんで下方に突出。外面ヘラミガキ（タテないしナナメ）。内面粗いハケ目調整。スカシは円形で三方に聞く。
73	瓶	孔 径 1.0	底部は尖底状をなし。1個の円孔を内・外周面からあける（焼成前）。外面タタキ目あり。溶誠著しく詳細不明。外面一部に焼付着。
74	瓶	孔 径 1.0 底 径 4.3	平底の底部に内・外周面から穿孔。外面タタキ目（左下り）。底部周縁は一部ナデ消す。内面ハケ目調整。
75	鉢 B	口 径 27.4	口縁部は一度外反したのち外周面に棱をもって立ち上がる。外面ヘラミガキ。内面ハケ目調整。
76	鉢 B	口 径 23.8 底 径 4.1 器 高 11.4	口縁部は一端外反したのち端部がわずかに立ち上がる。ヨコナデ調整。体部外周はハケ目（タテ）のちヘラミガキ（タテ）。平底の底部周縁は顯著にハケ目残る。内面粗いハケ目調整（タテ）。
77	鉢 A	口 径 15.0 底 径 4.0	口縁部が外反する。口縁ヨコナデ調整。内・外面とも体部中央付近まで及ぶ。外面タタキ目（左下り）。内面ハケ目（ナナメ方向）。
78	手 燃	口 径 16.4 底 径 3.2	口縁部は一度外反したのち端部をわずかにつまみ上げ前面に擬凹線を配する。体部中央に刻み目凸帯がめぐる。口縁ヨコナデ調整、内・外面ともハケ目調整。外面底部周縁のみヘラミガキ（タテ）。
79		脚 径 7.0	上方底状になった低い脚台。外面ヘラミガキ（タテ）。
80	台付 壺	腹 径 8.1	小さな椀状の体部に脚台を附加したもの。体部外周にハケ目、のちヘラミガキ。脚内面にシボリ目。円孔4。

10. その他地区出土の弥生式土器

A地区出土の壺形土器口縁部・体部破片（第72図—1・2・3）は同一個体で赤褐色を呈し、本遺跡出土弥生式土器中ではもっとも古い様相を呈するものの一つである。

細片であるため、全容は知りえないが、口縁部は肥厚しながら外反し、口縁部端を大きく垂下させ、その端面に5条以上の擬凹線文をめぐらし、竹管文を有する円形浮文を貼付けたものである。さらに、垂下部下端に刻み目を加える。体部上半とみられる破片には、横描直線文が2帯みられ、この間には扁形を呈する重弧状の横描文様を施している。



第72図 A地区出土壺形土器実測図及び拓影

細片のため全体の文様構成が判然とせず、この壺形土器の時期を明確にできないが、先にふれたように、口縁部片と同一個体であるならば、横描文盛行期の様相をのこす壺形土器Aととらえざるをえない。また、土器の性格としては、本遺跡中では数少ない飾られた土器として特殊な性格を与えるかもしれない。

なお、出土の状況は次のとおりである。A地区は遺構の存在を確認するため、設置した小トレンチであるが、この土器片は、畿内第V様式期の少量の微細片を出土する層中にあって併出したものであり、遺構とともに出土したものではない。

焼土壙は、主として、各地区の弥生式土器包含層内に認められ、焼土壙出土土器も各地区出土土器の範疇においてとらえられるが、ここでは、各焼土壙のうち、明確に遺構内より出土したと認められる土器5点を図示した。

(1)は第3号焼土壙内より出土した壺形土器口頭部の破片で、口径13.6cm、口縁高1.7cmを測り、体部外面は叩き目を残す。

当遺跡出土の通有の壺形土器とかわらないが、頭部と体部の接合に際して、頭部外面に粘土を補填しており、接合部器厚が大きくなる点が特徴的である。

(2)～(5)は底部破片であるが、(2)～(4)は壺形土器、(5)は壺形土器の底部とみられる。

実測図からも明らかなように、これらの土器は、各地区包含層出土の土器と何ら差異はない。

第73図 焼土壙出土土器実測図

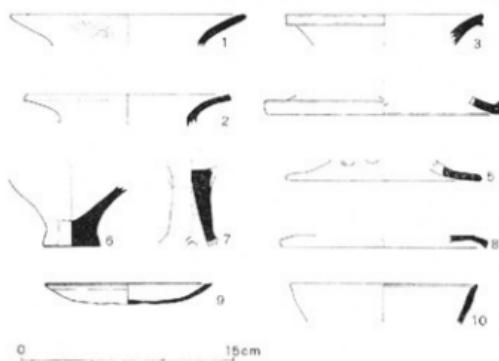


く、これら焼土壙は包含層が形成されてゆく過程で掘込まれたものであることを示している。ただ、第74図に示したように、焼土壙の肩部に密着して弥生式土器が出土している状況をみると、焼土壙と遺物の関連を想定できそうであるが、土壙内出土の土器自体は細片のみであって、出土位置はそれほどの意味をもっていると思えない。

J地区でも、須恵器・土師器・瓦器と共に数点の弥生式土器が出土している。ほとんどが細片であるが、おむねC・D・F地区出土の土器と大差ない。(1)・(2)は壺形土器、(3)は壺形土器の口縁部かとみられるが、細片のため詳細は不明である。(4)・(5)は共に裾近くに円孔をあけた高杯脚壺部で、(4)は端部を上方に拡張する点に古い様相を残す。(5)は裾端部を丸く止め、やや大きな円孔を多数もつようである。(7)は同じく高杯の脚柱部で、上端外側面に杯部との接合面を残す。(6)は、周縁に指圧痕が顕著に残る。



焼74図 第3号焼土壙肩部に密着した弥生式土器



第75図 J地区出土土器

- | | |
|-----------|-------|
| 1~7 弥生式土器 | 8 須恵器 |
| 9 土師器 | 10 瓦器 |

この他に細片のため図示できなかったが、ヘラ磨きを施した器表にツバ状の凸帯を貼り付け、内面を刷毛目調整した土器細片がある。石英の微粒子を少量含む堅固な土器で手捻形土器ともみられるが、器形については、速断しかねる。

これ以外の地区での弥生式土器の出土をみると、G

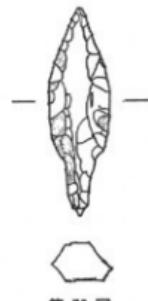
H.I.地区では遺物の検出は全くない。それ以西の地区では少量細片の弥生式土器の出土をしているが、実測にもたえないので記述を略する。

第2項 石器・鉄器

いずれも、第1・2号堅穴住居址より出土したもので、石鏃・石皿・砥石の類である。

石 鏃（第76図）

柳葉形を呈する、凸基有茎式・サヌカイト打製石鏃で、長さ3.7cm、刃部最大幅1.1cm、莖長0.9cmを計測する。両面に広い大削離面を残し、刃部はステップ・フレーキングによりつくり出している点では、大師山古墳の撥乱土中より出土した平基無茎式石鏃の製作方法に通じる。第1号住居址溝内出土

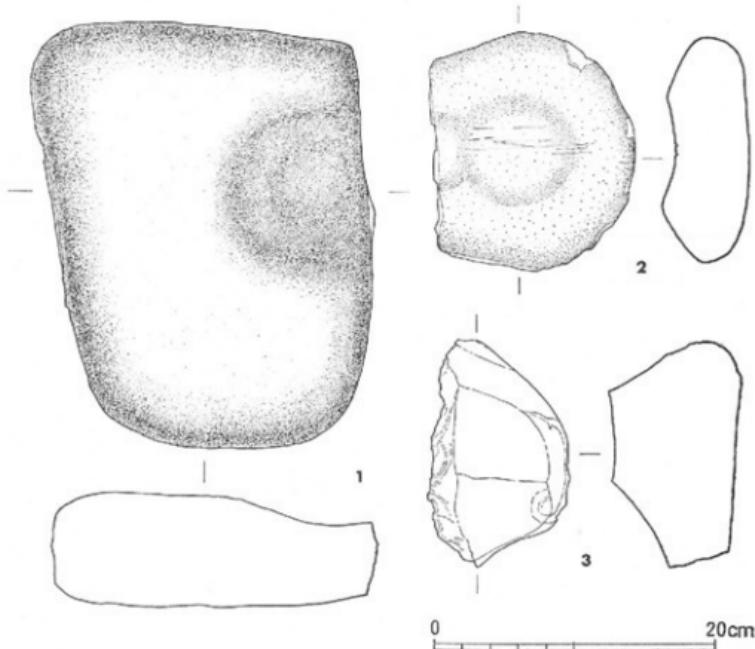


第76図
第1号住居址溝出土
石鏃実測図（現寸）

石 皿（第77図1・2）

扁平な大型の砂岩の河原石を利用したもので、第1号住居址出土の（2）は2ヶ所に重複して、大小の凹部がみられる。小さな凹部を使用中に一部を欠損したものとみられ、改めて中央部の大きな凹部を使用したもので、ここには、数条の細い擦り痕がみられる。

第2号住居址出土の（1）は片側に偏して凹部がみられるが、（2）と同様に欠損したもの



第77図 石皿・砥石実測図

かもしれない。

砥 石 (第77図3, 第78図4・5)

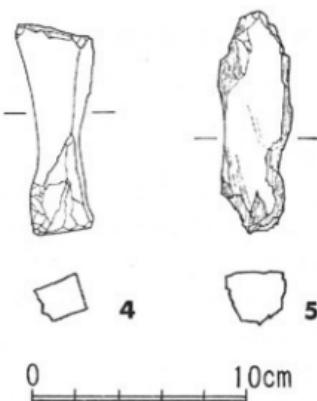
大小各1点の出土をみた。第1号住居址より出土の砥石(3)は、すえ置き用とみられる大型品で、扁平な面をもった砂岩の大型石を利用し、凸面部には4面の使用痕が認められる。

第2号住居址より出土の砥石(4)は、携帯用とみられ、長さ10cmを計る。角棒状の砂岩製品で、4面の使用痕が認められる。

また、表面探査資料であるが、綠泥片岩製の小型砥石(5)もある。

鉄 錐 (第79図・図版47)

錆化がいちじるしいが、三角形を呈する有茎の

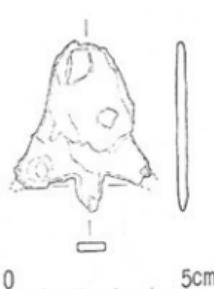


第78図 小型砥石実測図

鉄錐である。厚さ2mm前後の扁平な錐であるが、するどい、わたくりをもっていたものとみられる。先端および茎部の一部を欠失している。第2号住居址床面より出土した。

第3項 古墳時代以降の遺物

須 惠 器



第79図 第2号住居址出土
鉄錐実測図

J地区第5トレンチの表土下第1層より、須恵器杯蓋の口縁部片、および、別個体の杯蓋天井部細片を検出した(第75図8)ともに灰色を呈する、焼成堅固なもので、8は復原径14.6cm、天井部の高さ0.9cmを計測する低い杯蓋で、口縁部は横ナデ調整を、天井部はヘラ削りをおこなっている。つまみを貼付けたものとみられる。

瓦 器 (第75図10・9)

J地区および、大師山古墳南側くびれ部より挽・匁の細片を検出した。

碗(10)は微粒子土を用いた銀光する黒灰色を呈する焼成堅固なもので、復原径13.4cmを計測するが、底部を欠失している。器内外をヘラみがきしたあと、内側に1条の沈線をもつ口縁部を丁寧にヘラみがきを施している。器表には煤の付着をみると、内面の暗文は不明である。

皿(9)は上記の碗とともに出土した。細片のため詳細は不明である。

土 師 器 (第75図9)

J地区にて、土師器皿1点を検出した。

皿は1~2mm前後の石英その他の砂を多く含む明るい赤褐色を呈する約1/4の破片で、復原径12cm、高さ1.5cmを計測する。器体外面は手づくねのままで、内面を研磨したのち、口縁部を外

面にいたるまで横ナデで調整している。

第4項 小 結

弥生式土器

高地性集落として、石川流域の南限に出現した大師山遺跡の終焉については、「第1章第2節 石川上流域の考古学的環境」でもふれたが、本遺跡の出現、終焉については、検出された弥生式土器がこれをよく示している。

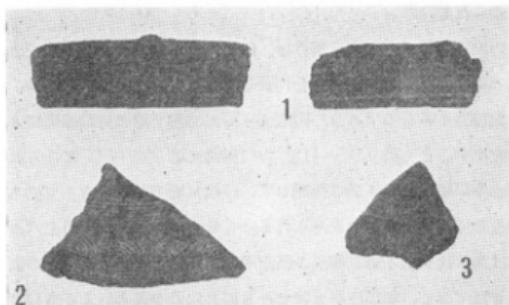
第I期の土器 本遺跡の出現期を示す最古の土器は、櫛描文をもち、中期的色彩を強く示す壺形土器の体部断片、ならびに口縁部の形状や施文から分類した。つまり、擬凹線文を施した垂下口縁をもつ、壺形土器A（広口短頸壺）、または壺形土器B—Iであり、壺形土器ではAとして受け口状口縁をもち、体部に刷毛目を残す（D—75）を検討する必要がある。また、高杯形土器では、楕状の杯部をもち、杯部と脚台部を連続成形法によって製作したA—Iである。これらの土器が出土点数の中で占める比率は極めて小さく、本遺跡の出現期の土器として持ち來たった土器ともいえるところから、これらの土器を第I期の土器と仮称しておこう。

第II期の土器 さて、遺跡の在立を考えたとき、出現の次には膨張あるいは発展期ともいえ、一定型式の文化遺産が最も多数を占める時期がもたらされる。これは、壺D、壺B、高杯B—I・IIにおいて爆發的に資料が多くなる。

壺Dは、その出土地点を壺A・Bのそれよりも拡大し、本遺跡の中心構造の一つである第1号堅穴住居址からも出土した。

同様に地點的にひろがりを示した細頸壺形土器もこの時期のものであろう。

壺Bは、壺形土器の殆んどを占めている。また、高杯形土器にあっては、B—I・II群の出土が目立ち、高杯形土器の分類では明確にタイピングできなかったが、杯底部周辺から立ち上がる口縁部が明確な稜線をもって屈曲して外反する形式の高杯が多量に出土するようになる。これらを第II期の土器とする。



第80図 A地区出土の第I期の弥生式土器

第III期の土器 次に、遺跡の縮小、もしくは終焉を示す土器は、いわゆる二重口縁をもつ壺E—I、そして壺形土器ではC—Iとして分類した、いわゆる「S」字状口縁に近い口縁部をもつもの、あるいはこれに属するとみられる脚台（D—I）があげられる。高杯形

土器はB—Iとした(C—92)が示すように、器体の成形は第II技法を用い、杯部は深く、底部の傾斜はつよい。また口縁部は、直線的で屈折が少なく、脚柱は中実に近いものが比較的少なくなる。これらを第III期の土器とする。

以上、壺形土器・菱形土器・高杯形土器を本遺跡の消長とともに第I～III期に大別したが、次にこれらが型式編年的に成立し得るかを検討しよう。

本遺跡出土七土器の検討は、遺跡の地理的条件として、おのずと南河内地方または和泉地方の弥生式土器との比較・検討を迫られるが、本遺跡出土菱形土器の胎土を科学分析した結果、中河内地方の弥生式土器胎土と大きなへだたりがないことが知られている。⁽¹⁾幸いにも、中河内地方の弥生式土器の型式編年については、昨今、精力的な研究成果をみているので、これらとの比較・検討を通して、本遺跡出土の弥生式土器を分析することとしたい。

畿内第IV様式期に盛行した凹線文技法が第V様式期、つまり弥生時代後期にはすたれてしまうことは、先学の研究によって明らかにされているところである。本遺跡第I期において壺形土器A・Bには擬凹線文はみられるが、凹線文を施したもののがなく、おのずと、凹線文盛行期より後出のものである。

畿内第IV様式から第V様式にかけての型式編年の細分は、東大阪市(旧枚岡市)西ノ辻遺跡の調査によって第IV様式と第V様式の間隙をうめるものとして、小林行雄氏が、西ノ辻N地点式・西ノ辻I地点式を設定されて久しい。⁽²⁾また、最近では小林氏の成果を発展させ、土器成形技法のこまかなる観察を通して、西ノ辻遺跡I地点出土の土器を第V様式の占段階とし、同じくE(D)地点出土の土器を西ノ辻E(D)式として第V様式の中段階とする研究が都出比呂志氏により発表されている。⁽³⁾

さて、出土数の少ない第I期の壺形土器C・菱形土器Aにみえる受け口状口縁は、西ノ辻I地点出土土器に認められ、西ノ辻N地点まで残る高杯の連続成形法(第I技法)が高杯形土器A—Iにみられる。先に挙げた壺形土器A・Bとともに、本遺跡の第I期の弥生式土器は弥生時代中期の特色を残す西ノ辻N地点、または西ノ辻I地点出土土器に類似性が認められることから、これに近い時期のものとみられる。

第II期になって爆発的に多くの出土数をみる壺形土器Dは、同じように出現をみる菱形土器Bに伴うことが、第I号住居址で認められている。壺Bを代表した(C—54, D—113)は、都出氏の示す西ノ辻E式壺の分割成形そのものである。図版56・57に菱形土器の分割成形による器表の叩き目、内面の刷毛目を示す。とくに(D—113)の口縁部には(C—54)にみられない横ナデが現れる。この菱形土器口縁部の横ナデは発達して、口縁部端で角度を変えて立ち上がり、垂直方向の端面をもつものに変化するものとみられる。これらは、東大阪市の上六万寺遺跡にみえるもので、都出氏は西ノ辻E式と第V様式の新段階の北島池下層出土土器との間隙をうめるものという見解を出されており、細頸菱形土器とともに上六万寺式といえるものであろう。菱形土器口縁部のこうした変化は、鉢A・Bについても第II期のものとすることがで

き、ここでは小型鉢形土器→大型鉢形土器の時間差が考えられよう。

高杯形土器の成形方法からA—I・IIIを含めて、B—I・IIIが第II期の中心になるものとみられるが、B—Iとした(C—92)が示す特徴は、第II期の中でも上六万寺式として、やや後出のものであろう。

第III期の特徴的な土器は、二重口縁をもつ壺形土器Eと、「S」字状口縁に類似した口縁部をもつ壺形土器C—Iである。

河内地方における「S」字状口縁台付壺の編年は、都出氏によると、上田町I・II式から布留式の古い段階に比定できるとしているが、二重口縁をもつ壺形土器Eとともに、「S」字状口縁台付壺が同一土層内で出土した天理市布留遺跡第3層の土器群に注目した場合⁽⁶⁾、報告者の示す如く、第V様式の新しい時期と布留式との間に河内地方の「S」字状口縁台付壺の年代観と同様に第V様式以降とできよう。

なお、手焙形土器については、鉢部の口縁部の形状から、本遺跡では第II期のうち上六万寺式の時期としてとらえられるのではないか。

以上、型式分類した大師山遺跡出土の弥生式



第81図 手焙形土器 (F-78)

土器を、遺跡の消長とともに第I～IIIに分類し、またこれらをおもに中河内地方の弥生式土器と比較してきた。それらを整理すれば下表のようになり、本遺跡の中心が第II期におかれていたことが明らかになったが、さらには、今後第II期に含めた1群の土器の緻密な分析を行う必要がある。

なお、おもに都出氏の成果によりながらも、氏の示す北鳥池遺跡下層式を本遺跡出土資料で明確に設定しえなかった点も、今後の問題としたい。

第7表 大師山遺跡出土弥生式土器と中・南河内地方の土器編年の対比(実測図による試算)

大師山遺跡の消長	I期	II期	III期
弥生式土器の型式および器種	壺A・B・C 壺A 高杯A—I	壺D・細縁壺 壺B・手焙型土器 鉢A・B 高杯A—I・II・III, B—I・II・III	壺E 壺C—I
出土点数の比率	23.1%	72.7%	4.2%
中・南河内地方の弥生式土器編年	西ノ辻N～I式	西ノ辻E式	上六万寺式 上田町I・II式前後

石 器・鐵 器

本遺跡で石皿とした石器については、縄文時代の石皿や、前期古墳より出土する石製品と比

較した場合、精巧度や形状を異にするが、粒状の物質を粉末にするのに使用したものと考えられるので、機能的には石皿とことができよう。ただし、これに使用した磨石が検出されなかつたので、やや疑念が残る。また、出土の条件が、第3節の住居址の項でのべたように良好な出土状態と言えないが、住居址内にあって、敲き台となる石塊の出土と同じように、敲き台としての機能を兼ねた可能性のある道具として必要なもの一つかと考えられよう。

砥石は挽用のものと据置き用の2種がみられたが、鉄歯の出土が示すように、(打製)石器から鉄器への移行期を如実に示している。

なお、調査対象地内で表面採集した綠泥片岩を利用した砥石がある(第78図-5)。これについては、単純に弥生時代に属するものと断定しかねるが、そのように仮定した場合、中河内地方・和泉地方との交流の外、紀伊見附を越えて、紀ノ川筋との文化の交流を考えさせる。

須恵器

須恵器杯蓋小片で、全容を計り知れないが、口縁部の形状、つまり口縁部端は、口縁部外側にあたるするといい稜線より内側に入ることから、藤原宮で分類された須恵器杯蓋Ⅱ形式にあたり、その使用年代は平城新宮の時期とされている。一方、平城宮では、SD485出土上器は、⁽⁷⁾西暦724年前後とされている。これらの点から少量の杯蓋細片なので、詳細は知りえないが、平城宮期の比較的早い時期のものであろう。

瓦器・土師器

中世の土器としては、瓦器碗および土師器・小皿、各1点の出土をみた。瓦器碗は、細片で判然としないが、おむね鎌倉期のものと考えられよう。土師器小皿についても、同様な時期を設定するのが妥当と思われるが、一点のみであり確証はない。第1章第2節「石川上流域の考古学的環境」に示したように、平安時代の山岳寺院の出現と関連した遺物かともみられる。遺構にともなったものではなく、不明な点が多い。

第6節 結語

大師山遺跡の検出は先章でも述べたとおり大師山古墳の発掘調査中一片の弥生式土器である高杯の破片の呈示を受けたことにはじまる。すでに宅地造成の工事が着手され、巨大なブルトーラーがうなり立てて土を削り、運ぶなかでの緊急の調査であった。しかし結果として、丘陵尾根上に遺存した2棟の住居址と溝状遺構、丘陵北斜面に投棄されたと思われる2か所の土器堆積地点及び南斜面で1か所の同様な状態、並びに4基の焼土壙と、時期不明の2基の焼土壙(窯状遺構)を確認し調査することができた。

住居址はすでに表面が後世の削平や擾乱によって僅かに痕跡をとどめたにすぎなかつたが、第1号住居址が円形プラン、第2号住居址は東南隅の部分の残存でしかなかつたが方形プランと、異なつた平面構成をもつていたことは、この弥生後期の住居址を考える上で一つの資料とな

った。また1号住居址が時期的差異の少くないと思われる断面U字形の溝によって切断されているという事実も確認できた。

ことに第1号住居址が、住居内での灰層の遺存状態から失火による内部よりの焼失であろうという意見があったので、一応の所見としたが、確定的でないことを付記しておく。またこの住居址から時期決定に有効な資料となった甕・鉢・壺などの弥生後期の土器が原位置と思われる床面に接して出土したこと、またサスカイト製の柳葉形凸基有茎式の石鎌、砥石等が出土し、第2号住居址からも鉄鎌の他、石皿が出土したことはこの遺跡を考える上での重要なよりどころとなるであろう。さらに幅2.5m、深さ約1mの溝が第1号住居址を半切して構築されていたことは、この聚落においても短期間に若干の形態や性格の変化があったことを示していると考える。

遺跡の立地が葛城・和泉山脈から派生し、延々と続く丘陵尾根上にあり、しかも展望できる平坦地との比高差が約100mもあり、地形的に平野部に面する北側の斜面が急峻であることは、この遺跡が高地性集落としての特徴を示すものと判断できる。なお尾根上に住居址群があり、斜面に投棄した土器片の堆積がみられることも高地性集落のもつ通性であろう。

発掘調査によるこうした事実確認によってこの遺跡のもついくつかの課題が考えられる。

先ず、出土土器からみて、第I期の土器として設定した文様構成等からして中期様式を有する七器が少量検出されてはいるものの、出土した土器の数量からみて幾棟かの家屋及び仮設的な施設が集落ないし集落状に形成されるのは弥生後期になってからであろうと想定する。また発掘調査の結果からみて、その集落構成は大規模なものではなかったとは考えられない。それは住居址検出地付近の地形をみると決して平坦な幅員のある尾根ではなく、むしろ南北両側が侵蝕されて狭い尾根上の地形を呈していることによっても知ることができる。このようにこうした生活を営むためにはむしろ不適な立地と考えられる地形に故て住居を営んだとするならば、高地性集落の性格という面とを合せて、その必要性を考えてみる必要があると思う。

次にこの景観的、防禦的には適した立地であったとしても、さほど大規模な集落が形成されるほどの余裕をもたない地形に、小規模な単位の集落が営まれたとするならば、これもやはり高地性集落の目的、性格との関りに立って考察する必要があろう。

次に住居址と共に溝遺構をもつ遺跡の状態についての問題がある。この種の高地性集落にはその殆んどがU字、若しくはV字状の溝状遺構をもつ所例が多い。大師山遺跡も尾根と直交するような状態、すなわち東西方向に走る尾根を恰も切断するような位置関係でかなり幅員と深さのある溝が穿たれていたことは、さきの課題と同様高地性集落の形態と機能の問題にもふれることである。

こうしたことからやはりこの遺跡を考える場合、高地性集落の基本的な問題から観察する必要があろう。

戰後、考古学研究の上で画期的な課題として取上げられ、考察を試みられている問題の一つ

にこの高地性集落の問題がある。一般的概念からいえば、弥生時代中期以後に、水田稻作耕作を営んだ生産地・居住地の立地に対し、比高差の大きい丘陵（山頂・山腹・山腰）上のいわば生産性の低い地形に営まれた住居群が存在する。この場合、それらの住居群の成立事情・性格・機能・生産等の問題がからんでくる。

昭和8年、森本六爾氏が「低地性遺跡と農業」のなかで、主として奈良県下における標高の高位に弥生式遺跡のあることを挙げて、低地性遺跡に対してはじめて「高地性遺跡」という用語を用い、低地性遺跡の出土品に比較して武器類の出土が多いことに着目したが、この時点においては学界を喚起することができなかった。敗戦後の混乱から漸く立直りはじめた頃、山口県の島田川流域に所在する天王山、岡ノ山遺跡を発掘された小野忠照氏によって、濠をめぐらした弥生中期の遺跡が、後期において埋められたという事実確認から出発して、高地性遺跡について、新しい問題意識がもたれるようになった。⁽¹⁵⁾

それ以後、西日本各地の弥生遺跡の発掘調査の進歩によって、高地性遺跡に対する考察が深められ、さらにつこうした類型の遺跡が関東地方にまで及んでいる事実も明らかになり、その発生や機能等について多くの見解が述べられてきた。

なかでも、昭和30年12月以来、3年間にわたって発掘調査を実施された標高344mの高位にある弥生時代中期の遺跡である香川県三豊郡蛇間町紫雲出遺跡⁽¹⁶⁾、これとほぼ同じ時期の昭和31年から6年間の長期にわたって発掘調査を実施し、標高約200mの山頂部から尾根上に営まれた弥生中期末から後期にわたる集落址を検出した兵庫県芦屋市会下山遺跡⁽¹⁷⁾の成果によって、高地性遺跡の解明が一段と深化した。こうした小野忠照⁽¹⁸⁾、村川行弘⁽¹⁹⁾、佐原真・田辺昭三氏らによって、高地性遺跡の弥生中期という時期と軍事的性格、あるいは山畠的性格にたどりついて論考をみた。その後、近畿各地における遺跡の発掘調査によって、弥生時代後期の高地性遺跡も確認され、さらに森浩一・石部正志・瀬川芳則、都出比呂志、石野博信氏らによって、新しい見解がなされた。

河内長野市大師山遺跡は、その環境、立地からみて、いわゆる畿内、とくに大阪平野東南の一隅にある主として弥生時代後期の高地性遺跡の一つである。

本論において記述したごとく、この遺跡は、標高約200mの位置にあって比高差の大きい丘陵尾根上に営まれた住居址であること、確認された住居址の棟数は小規模のものであること、丘陵尾根に直交するような方向にU字形の溝が掘られていること、住居の形式は円形及び方形であること、住居址に僅かに残存した土器及び周辺斜面から出土した遺物からみると後期後半に編年されること、そして住居址からの眺観はかなり遠望できるが平野部はほとんど不可視であることなどを挙げることができる。

ただ現時点における高地性遺跡に対する見解は時期の問題においても、その性格についても多様な解釈がある。たとえば、最近石野博信氏が総括されたごとく、弥生中期中葉にはじまり

中期末に終るもので西日本から関東に拡がるもの(第1段階)，後期中葉を中心として近畿地方に限られるもの(第2段階)，古墳時代前期に西日本から関東に分布するもの(第3段階)に整理されている。

また高地性集落のもつ意義・性格についても，森本六爾氏の武器類の出土率が移しとする指摘からはじまって，小野忠熙氏の初期の見解である軍事的性格，また後の山畠的性格，紫雲出山遺跡においては「高地性遺跡のすべてについて防衛的性格をおしつけるのではないが，大阪湾沿岸・岡周辺，中部瀬戸内海域における高地性遺跡には，防塞としての役割をはたしたものがあるとしてよいであろう」とし⁽¹¹⁾，紫雲山出遺跡の場合「畿内を中心としてすすめられた政治的統合の影響」と理解されたことや，金下山遺跡において村川弘行氏の「山の民に非ず，農耕の民に非ず，沿岸漁民に非ず，避災の民に非ず，しかも倭政権誕生の胎動期における大阪湾沿岸の海上支配権と何等かの関係のある首長風」との推定，3世紀の大乱に關係するものとの見解に立った森浩一氏の意見⁽¹²⁾，さらにこれを發展させて集落の性格を弥生時代における大乱を前後に2期に分類する所見⁽¹³⁾を述べられた石部正志氏の所見，これに対して淀川水系で確認された高地性集落の実態から，その性格を論じられた都出比呂志氏は，高地性集落の盛行の時期を2段階に明確に分類することはむずかしいとして，高地性集落の通信施設としての機能を考え，もしそこで烽が擧げられたらと仮定して，互いに見通せる関係にある遺跡を図示されるなど新しい解釈が試みられた⁽¹⁴⁾。

また，高地性遺跡を単に軍事的・防禦的な一つの理由によるものではなく，畑作集落という生産的性格と防禦的機能の両面をもったとする齋川芳則氏の解釈⁽¹⁵⁾，さらには，石野博信氏による3段階の分類，すなわち第1段階を倭國大乱，第2段階を卑弥呼以後壹与の登場までの動乱，第3段階を近畿地方の政権確立以後の各地の動乱に対応させようとする見解などがある。

その他，ある時期，ある遺跡に限っての一例，たとえば第3様式期の東大阪市山畠遺跡の性格の一見解として，土地や水争いを契機とする共同体内の小規模な争いの反映といった解釈も行なわれている。

現在における高地性遺跡の性格に対する見解は，内容に若干の変化はあるが，森本六爾氏以来の軍事的性格がやはり主流的な考え方である。

こうした観点に立って大師山遺跡を考えてみると，平野部に面する丘陵端よりかなり奥地に位置すること，平野部に対する眺望はあまり良好であるとはいえないこと，そして非常に小規模な集落跡と考えられることなど，従来の見解に全面的に合致するとは限らない状況を多分にもっていると思われる。したがって，大師山遺跡を中心とした高地性遺跡に対する積極的な論証は早計といわざるを得ない。

私自身，この時点において高地性遺跡の性格について，従来の所説に対して賛否を明確にすることを差しひかえたいが，考え方の一端を考察⁽¹⁶⁾において明らかにした。また，すでに述べられている各地の高地性遺跡と奈良県橿原市忌部山遺跡，大阪府吹田市垂水遺跡等の発掘調査

の内容を検討した上で、いずれかの報告書においてあらためて論を進めてみたい。

〔註〕

1. 吹田市史編纂室・関西大学考古学研究室「垂水遺跡第Ⅰ次発掘調査概報」1975年
2. 小林行雄「大阪府枚岡市鶴田町西ノ辻遺跡 I・N・D・E・F・H地点の土器」『弥生式土器集成資料編』1958年
3. 都出比呂志「古墳出現前夜の集団関係」『考古学研究』第20巻4号 1974年
4. 福永信雄「上六万寺遺跡」『東大阪市遺跡保護調査年報Ⅰ』 1975年
5. 萩本隆裕「鬼塚遺跡」『東大阪市遺跡保護調査会年報Ⅰ』 1975年
6. 蓼田雅昭「大和における古式土師器の実態 一天理市布留遺跡出土資料」『古代文化』VOL.26 1974年
7. 奈良県教育委員会「藤原宮」奈良県史跡名勝天然記念物調査会報告第25冊 1969年
8. 奈良国立文化財研究所「平城宮発掘調査報告Ⅵ」奈良国立文化財研究所学報第23冊 1975年
9. 森本六爾「低地性遺跡と農業」『日本原始農業』 1933年
10. 小野忠熙「島田川」山口大学島田川遺跡学術調査刊 1953年
11. 小林行雄・佐原真『紫雲山一番川原三豊郡詫問町紫雲山山弥生式遺跡の研究』詫問町文化財保護委員会 1964年
12. 村川弘行, 石野博信「会下山遺跡」芦屋市文化財調査報告第3集 1964年
13. 佐原真・田辺昭三「弥生文化の発展と地域性—近畿」『日本の考古学』Ⅴ弥生時代 1966年
14. 森浩一・鈴木博司「觀音寺山遺跡調査概報」觀音寺山遺跡調査刊 1968年
15. 石部正志「近畿弥生文化の成立と発展に関する若干の問題提起」『考古学研究』第15巻第1号 1969年
16. 濱川芳則「高地性集落をめぐる二・三の考察」『古代学研究』58 1970年
17. 都出比呂志「古墳出現前夜の集団関係—淀川水系を中心に」『考古学研究』第20巻第4号 1974年
18. 石野博信「3世紀の高城と水城」『古代学研究』68 1973年
19. 石野博信「高地性集落のもつ意味」『歴史公論』2 1976年
〔その他参考文献〕
小野忠熙「瀬戸内地方における弥生式高地性集落とその機能」『考古学研究』第6巻第2号 1959年
小野忠熙「集落と住民」『新版考古学講座』4 史前文化上 1969年
江東善道「住居と集落」『稍作のはじまり』古代史発掘4 弥生時代 1 1975年

付載Ⅰ 大師山古墳周辺地域分布調査によって新たに確認した遺跡

1. はじめに

河内長野市教育委員会は、昭和44年秋から翌45年春にかけて、河内長野市三日市町に所在する、大師山古墳（昭和44年10月～12月）、同弥生遺跡（昭和45年3月～4月）の発掘調査を、関西大学文学部考古学研究室の協力のもとに行った。その結果、大師山古墳に関しては、従来円墳とされていたものが、前方後円墳であることが判明し、また弥生遺跡についても、堅穴式住居址2か所、溝状遺構1か所、焼土壙6か所、及び多量の弥生式土器が検出されるに至った。大師山古墳及び大師山遺跡は石川の最上流部の山頂上に位置する古墳及び遺跡であり、その性格、歴史的位置付け等を検討する上においては、当然他の石川流域の古墳及び遺跡との有機的関連性を検討することが重要な問題となるものである。

しかしながら、石川上流地域については、古墳及び遺跡の分布状態は十分には知られておらず、大師山古墳、及び遺跡の性格を検討する上において、周辺地域の緻密なる遺跡分布状態を把握することが必要であるとの結論に達した。以上のような点から、関西大学考古学研究室より、河内長野市教育委員会に対し、大師山周辺の分布調査の必要がある旨を提案された。これを受けた河内長野市教育委員会では、今後の同市の文化財保護行政の上からも、その必要性を感じ、提案を受け入れ、関西大学考古学研究室に分布調査を依頼した。その結果、実施するに至り、昭和45年11月22日～12月25日まで、大師山古墳を中心とする、石川上流地域の遺跡分布調査を行った。

調査は、大師山古墳周辺を中心に、石川流域について行なうという前提のもとに、北は大師山から石川流域に沿って、富田林市伏見堂まで、東は同じく觀心寺まで、西は府道堺河内長野線までの間にについて行なった。

調査の結果、石川西岸の河内長野市千代田にある国立南大阪病院周辺の河岸段丘上に、石礫及びサスカイト剝片が多量に散布することが判明し（塩谷遺跡）、また東岸でも、富田林市伏見堂の河岸段丘上に同じく石礫及びサスカイト剝片が多量に散布することが判明した（伏見堂遺跡）。また伏見堂遺跡東側の山腹に15基の小型円墳より形成される群集墳の存在も判明した（腰神古墳群）。分布調査という性格上、塩谷・伏見堂両遺跡、及び腰神古墳群等の正確なる規模、及び性格は明確にすることはできなかったが、石川流域の古代文化を究明する上で、新たな資料を提供しうるものであると思われる。

2. 各遺跡の概要

〔伏見堂遺跡〕



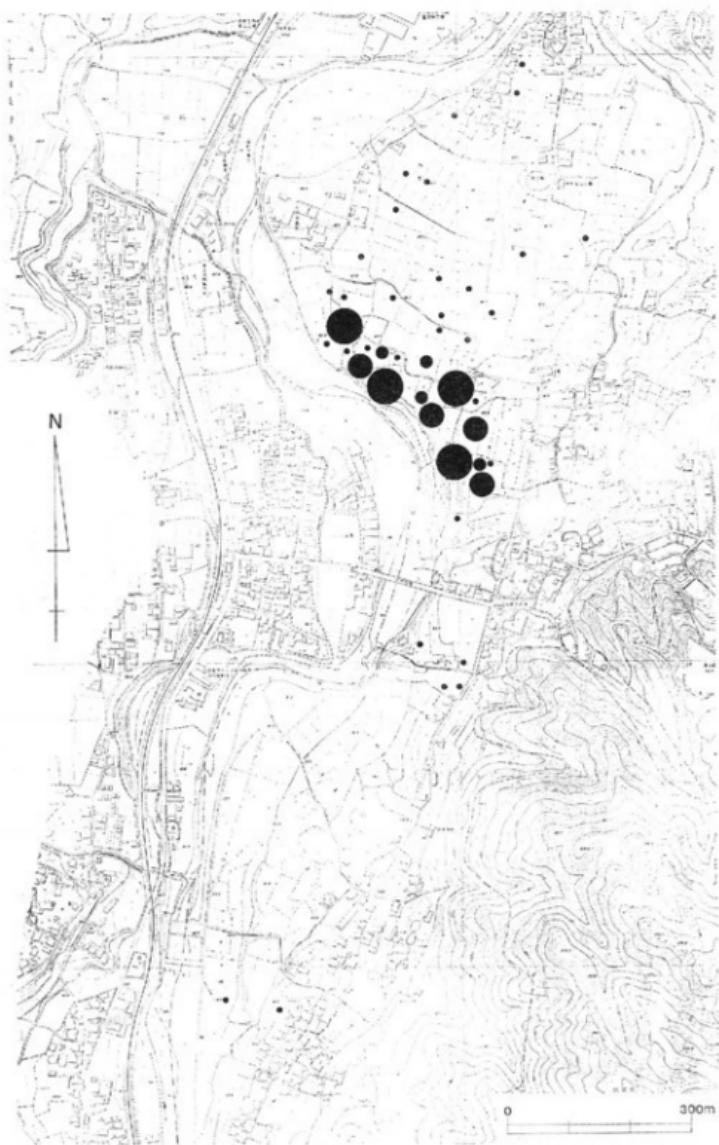
第 82 図 伏見堂遺跡の景観

嵐山山塊西麓を北へと流れる石川は、富田林市伏見堂付近で大きく蛇行し、西側に舌状に張り出す河岸段丘を形成している。この河岸段丘は、幅約450m、長さ約600mで、台地状をなし、北端と西端に集落がある。台地上には4基の古墳からなる西野々古墳群がもつ小隆起以外はほぼ平坦で、水田・畑が畠まれており、石礫を含む多量のサスカイト剝片を中心とする遺物の散布が認められた。

遺物の散布は、南北に走る府道彼方長野線を東限として、台地上全面に見られるが、台地西端の集落を基点として、台地南端沿いに幅約100mの帯状に、とくに濃密に見受けられた。(第82図) 遺物について、土器は採集できなかったが、多量の石器が表面採集された(第85図)。器種には石鎚(1~9)・石槍(10)・石錐(11)・不定形刃器(12・13)、使用痕の認められる剝片などがあり、いずれもサスカイトを素材とする石器である。サスカイトは、ほとんど風化して



第 83 図 伏見堂遺跡・屢神古墳群周辺航空写真



第 84 図 伏見堂遺跡の石器・剣片の散布状況
(点の大きさは順次 1~5 点、6~10 点、11~30 点、31 点以上の採集をあらわす。)



第 85 図 伏見堂遺跡採集石器

おらず欠損部から観察すれば、元来漆黒色を呈していたものと思われる。

(1) は凸基有茎式、(2)・(3)・(4)・(5)・(6)・(9) は凹基無茎式、(7)・(8) は平基無茎式石器である。(4)・(8) は両面に大剥離面が、(2)・(5)・(6) には片面に認められる。(10) は横長剝片を素材とした石槍の基部である。薄手のつくりで、両側縁は並行にちかく、断面は菱形を呈する。(11) は石錐で、頭部をつくらない棒状の形態を呈する。自然面が残っており、先端部には過度の使用により、磨滅と条痕が認められる。(12)・(13) は不定形刀器である。刃部は両面から打調を加えて作り出している。(14) は使用痕の認められる横長剝片である。先端部には刃こぼれが認められ、不定形刀器として使用されたものと推定される。自然面には一部研磨痕が認められる。

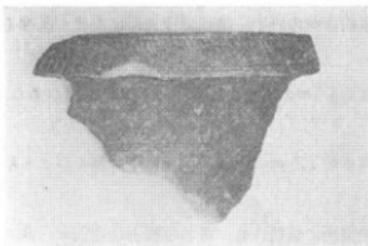
土器が採集されていないので、時期は明確でないが、採集石器・石槍・石錐から、繩文時代と弥生時代の両時代にわたる所産と考えられる。また、石核・剝片・石屑・未製品が多量に採集され、完成品は量的にあまり出土しておらず、石器製造址の存在する可能性も考えられるが、詳細は今後の調査研究を待たねばならない。

〔塩谷遺跡〕

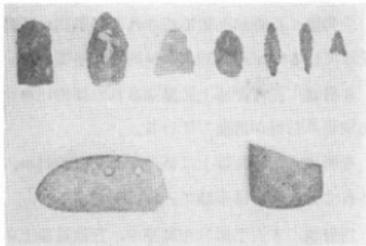
三角形状を呈する河内長野市域の北部頂点にあたるところは、南方より派生する各丘陵がとだえ小平坦地を形成しており、塩谷遺跡はこの石川左岸段丘面に位置し、河内長野市木戸町・市町に属している。

遺物は弥生式土器片、石器 3 点を含むサヌカイト剝片を主とした弥生時代のもので、散布の範囲は東西約 500m、南北約 500m の広範な地域にわたって認められ、その中央部をほぼ東西に両断する形で塩谷川が流れ、やがて石川に注ぐ。

この地に遺跡が存在することについては、地元三浦宏之氏および放植田肇氏により教示を受け、また河内長野市教委が昭和 46 年度から翌年度にかけて実施した塩谷川埋立工事に伴う緊急発掘調査により、さらに資料の増加をみた。すなわち、当遺跡より畿内第Ⅲ 様式を主とした多量の弥生式土器（壺・甕・高杯）、石器（石庖丁・石器 4・石槍 5・磨製蛤刃石斧 1）、その他瓦器ならびに中世瓦片が検出されている。（第 86・87 図）しかしこの調査は谷斜面における



第 86 図 塩谷遺跡出土弥生式土器



第 87 図 塩谷遺跡出土石器

第二次堆積層調査であるため、遺構の検出は認められず、したがって遺跡の性格等具体的なことについては確認できていない。⁽¹⁾

〔腰神古墳群〕

河内長野市の北部と富田林市の南部は、石川によって一部区分されているが、本古墳群は、石川の当該部分の東側にある標高 296.5 m の金胎寺山より北西に派生する支尾根の 190~210 m 付近にかけて所在する丘陵上に築造された古墳で、地図はいずれも山林である。この丘陵はその上端部において比較的緩傾斜であるが、突端部へ向うにしたがい傾斜が大きくなり、下端腰神神社裏はもっともそれが著しい。また本古墳群は、この腰神神社の背面に位置することから、腰神古墳群と呼称するものである。古墳群は 12 基の円墳より構成されているが、立地上 2 塚に分類できる。すなわち 1 群は、190 m ~ 200 m の丘陵斜面に築造された 7 基（1 ~ 7 号墳）であり、他の 1 群は、200 ~ 210 m の丘陵稜線上に築造された 5 基（8 ~ 12 号墳）である。次に、各古墳について記述してみよう。

1 号墳：丘陵斜面に築造された径約 15 m、高さ約 3.5 m の円墳。墳丘は中央頂部に乱掘による凹部が認められる。内部構造は横穴式石室で、墳丘南裾部に見上げ石と思われる花崗岩系の自然石が露出している。内部は空間になっているが土砂の流入がある。

2 号墳：丘陵斜面に築造された径約 15 m、高さ約 3.0 m の円墳。墳丘中央部に乱掘時の凹部が認められるが、内部構造は不明。

3 号墳：丘陵斜面に築造された径約 10 m、高さ約 1.5 m の円墳。墳丘中央部に乱掘時の凹部があるも内部構造は不明。

4 号墳：丘陵斜面に築造された径約 15 m、高さ約 2.5 m の円墳。墳丘中央部に乱掘時の凹部が認められ、やや南寄りのところに横穴

式石室の一部と思われる花崗岩系の削石数個がほぼ南北に並んでいる。

5 号墳：丘陵斜面に築造された径約 12 m、高さ約 1.5 m の円墳。墳丘は乱掘による凹部を有している。内部構造については不明。

6 号墳：丘陵斜面に築造された径約 14 m、高さ約 2.5 m の円墳。墳丘中央部に乱掘を受けた際の凹部があり、花崗岩系の石材 1 枚が露出している。

7 号墳：丘陵斜面に築造された径約 10 m、高さ約 3 m の円墳。墳丘の中央部に小さく乱掘を受けているが、比較的よく原形を保っている。

8 号墳：丘陵稜線上に築造された径約 15 m 高さ約 3.5 m の円墳。墳丘中央部に乱掘痕があり、花崗岩系石材が散乱している。

9 号墳：丘陵稜線上に築造された径約 11 m、高さ約 2.5 m の円墳。墳丘は中央部をひどく乱されており、ほぼ半壊に近い状態である。

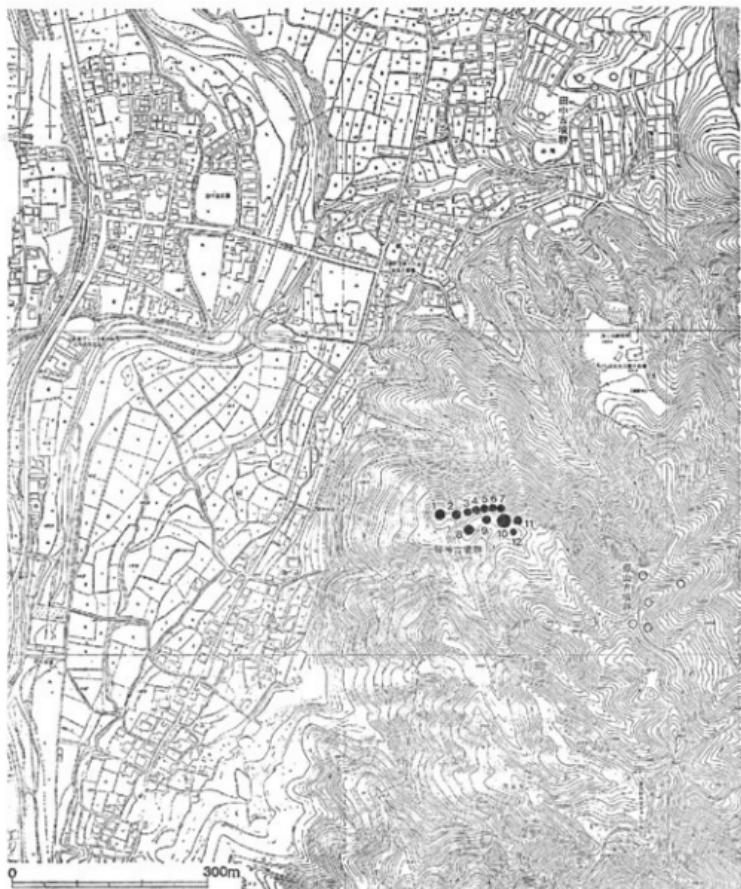
10 号墳：本古墳群分布範囲中、丘陵稜線上の最高所に築造され、その規模も径約 28 m、高さ約 4.5 m と最大の規模を有する。本古墳群の中心的存在と考えられる。墳丘は、約 3 m 幅で乱

掘分断されており、原形をひどく損なっている。中央部に約 $1.5 \times 1 \times 0.3m$ の天井石と思われる花崗岩系石材1枚が遺存している。

11号墳：丘陵稜線上に築造された径約 $12m$ 、高さ約 $1.5m$ の円墳。墳丘中央部に、乱掘を受けた際の凹部を有している。

12号墳：丘陵稜線をややはずれたゆるやかな斜面上部に築造された径約 $8.0m$ 、高さ約 $1.5m$ の円墳。墳丘中央部に乱掘による凹部を有している。

以上、各古墳について述べたが、次に本古墳群の概要について簡単に記してみたい。



第88図 稲荷山古墳群の分布状況

本古墳群は、金胎寺山より北西に派生する支尾根稜線および斜面に築造された12基の円墳により構成されていることは前記のとおりである。一方、内部構造については、1号墳において認められたように、花崗岩系割石・自然石を使用した古墳時代後期の横穴式石室をそれぞれ有するものと推測されるが、発掘調査を実施していない現段階では明確にはできない。

ただ、10号墳とその他の古墳を対比してみると、その規模において10号墳が抜きんでており、しかも稜線上に立地する8～12号墳があたかも中心的存在とし、取り巻く形で築造されていることは、本古墳群中における10号墳の位置づけをする上で注目する必要がある。

3. 結 語

以上、実施した埋蔵文化財の分布調査は、大師山古墳および大師山遺跡の占める位置づけをより鮮明に把握するため行なわれたものであり、既に周知された多くの遺跡の他に今回新たに「塩谷遺跡」・「伏見堂遺跡」・「腰神古墳群」が確認された。発掘調査は、一部を除き実施されておらず、したがってその詳細は明らかでないが、いずれも石川流域に存在する遺跡であり、また大師山古墳および大師山遺跡に近接していることからもこれらを含めた石川流域における縄文時代から古墳時代にわたる社会動態を考察してゆく上で看過し得ない資料を包蔵したものとして留意する必要があろう。

〔註〕

1. 峯 正明「塩谷遺跡」『日本考古学年報』24（昭和43年版） 1973年

分 布 調 査 參 加 者

関西大学文学部学生

田中 達夫	峯 正明	村越 直嗣	片岡 妙子	田中 堅一
貢宮 寧一	灰掛 薫	藤原 学	松本 信夫	赤松 秀貴
秋枝 芳	東 永津子	岩田 武志	小沢 正和	前田 義人
川島 晶子	橋高 和明	鶴川 尚功	寺尾 亜子	中上 京子
中川 梢子	龜島 重則			

付載II 焼土壙移築報告

今回移築の対象となった遺構は、大師山遺跡で検出された2基の焼土壙である。うち一基は第5号焼土壙で、遺跡東端部で検出されたものであり、当該遺構の構築年代についての統一見解は得られなかったが、本書において、木炭窯と判断されたものである。その概要は、全長 $2.5m$ 、幅 $1.1m$ 、深さ $0.7m$ で、小規模ながら天井部を有し、またその断面には暗赤褐色の還元層が認められる。しかも、遺構内部には灰層の堆積があり、さらに少量ではあるが土師質土器細片も検出された。しかも、大師山遺跡において検出された焼土壙の中でも構造的にも、規模の上からももっとも問題とされた遺構であり、記録保存のみにとどめることなしに、後日再検討できるよう、移築保存をする運びとなった。

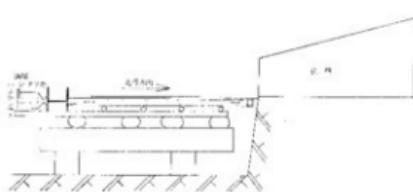
他の1基は第4号焼土壙で、長径 $1.27m$ 、短径 $0.9m$ 、深さ $0.15\sim0.25m$ で、単に丘陵斜面に浅く掘り込んで構築されただけの、構造的には極めて単純な梢円形状の弥生時代の土壙である。前者と同じく、その内部より灰層と焼成熱による赤変が土壙周壁部分に認められ、さらに少量ではあるが弥生式土器片も検出された。そのため、この種遺構についても、焼成用遺構と考えられるにいたり、性格が明確でない発掘調査の段階で記録保存のみにとどめることを危惧したため、移築保存し、後世の再検討に応え得るよう計ったものである。以下、2基の遺構の移築について述べてみよう。

—— 5号焼土壙の移築 ——

当該遺構は、ほぼ東西に走行する丘陵稜線上北側のやや下ったところにおいて検出された。前述の理由により移築する運びとなつたが、その方法については、工事関係者と協議の結果、次のように決定した。

- ① 遺構周囲の土砂を削平する。
- ② 遺構底部全面に鉄板を挿入する。
- ③ 側面に鉄板を配置し、底面の鉄板と溶接し、1個の容器として遺構を囲む。
- ④ クレーンにより容器を吊り上げ、トラックに積み込む。

しかし、遺構の移築にあたってとくに検討を要したこととは、③と④についてである。③では幅 $3.4m$ 、厚さ $1.5cm$ の鉄板だけでは遺構底部に容易に挿入することは不可能と考えられ、このため、先端を尖らせたレールを鉄板に溶接し、油圧ジャッキ2台によりゆるやかに挿入する方法をとった。④については、釣り上げ時の重量により、レールおよび鉄板がたわみ遺構が損われることが予想され、したがってレールの最大たわみを $0.2cm$ 、鉄板の最大たわみを $0.1cm$ を許容限度として重量計算を行ない、レールについては $30K$ レールを $70cm$ 間隔に配置し鉄板については $15mm$ 厚を使用することで移築に支障のないことを確認した。使用原材料および全吊上げ荷重については次のとおりである。



第89図 鉄板の挿入法(模式図)

使用原材料

a レール 30K 長さ2,400mm	5本
b 鉄板 1,800×3,400×15%	1枚
鉄板 500×3,400×15%	1枚
鉄板 950×3,400×15%	1枚
鉄板 (500+950)×1,800×15%	2枚

全吊上げ荷重

レール 0.36t	鉄板 1.55t	I型鋼 0.333t
遺構 8.2t	計 10.443t	

—4号焼土塗の移築—

当該遺構は、前者と同一丘陵上にあり、わずかに西側寄りの稜線やや南側に位置している。

移築に係る方法は、全く前者と同じ方法であり、検討を要した点も同じであったが、規模および重量が前者に比して小さいため、操作も比較的容易であった。使用原材料および全吊上げ荷重については下記のとおりである。

使用原材料

a レール 30K 長さ2,200mm	3本
b 鉄板 1,600×2,000×15%	1枚
鉄板 300×2,000×15%	1枚
鉄板 800×2,000×15%	1枚
鉄板 (300+800)×1,500×15%	2枚

全吊上げ荷重

レール 0.198t	鉄板 0.85t	I型鋼 1.833t
遺構 2,720t	計 4,101t	

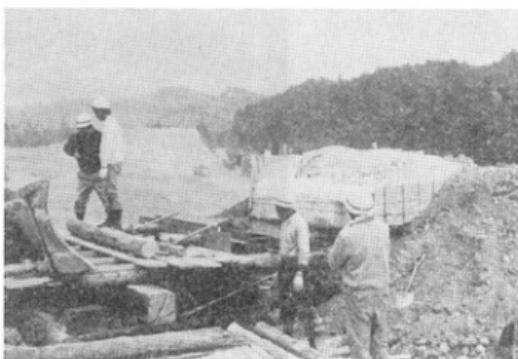
以上、慎重に実施した移築作業により、2基の遺構は、仮保存地である天野町所在金剛寺院内の一角に無事移築を終了した。のち、金剛寺境内より旧地大師山の楠台第1公園に再移転され、恒久保存された。



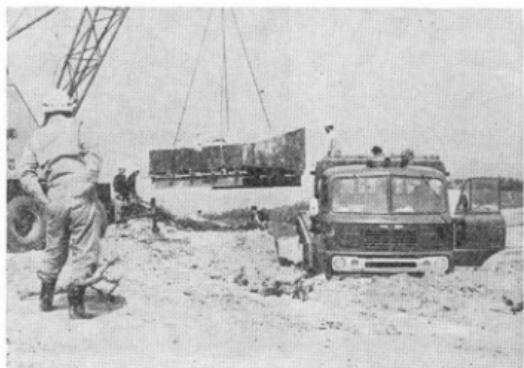
第90図 焼土拵移築状況
移築前の第5号焼土壙



第91図 焼土拵移築状況
焼土壙の周囲を削り取り、鉄板をかこむ。さらにそれを木の枠で保護する。



第92図 焼土拵移築状況
左側よりジャッキを作動させ、徐々に造構下にさし込む。



第93図 焼土拡移築状況
切り取った遺構をクレーンでつり上げ、トラックにのせる。



第94図 焼土拡移築状況
トラックに積込み完了。



第95図 焼土拡移築状況
金剛寺境内へ搬出する。

考察Ⅰ 石製腕飾類出土地とその集成

—特にその分布からの提案—

中上京子

- | | |
|-----------------------|---------------------|
| 1.はじめに | 4.前期古墳に副葬される他遺物との関連 |
| 2.集成表からみた碧玉製腕飾出土遺跡の傾向 | 5.碧玉製腕飾の製作配布について |
| 3.碧玉製腕飾の分布 | 6.碧玉製腕飾とその出土古墳の位置づけ |
| | 7.終わりにかえて |

1.はじめに

古墳の副葬品の種類は、多種多様であるが、呪術・祭祀的な非実用品と思われるものと、実用的なものとに大別できる。前者の代表的な例が、鏡や石製品であり、後者の例が鉄器や甲冑である。

ここで取り上げる碧玉製腕飾と総称される石剣・車輪石・鍔形石の3種の石製腕飾は、鏡などと同じように、呪術・祭祀的・宝器的な性質のものであって、いわゆる前期古墳に副葬されている遺物である。⁽¹⁾

この3種の碧玉製腕飾は、本来、弥生時代の貝輪を模したものと言われる。しかし、碧玉と一般に呼ばれてきた石で作られるようになると、すでに実用品としての域を離れ、呪術・宝器的、あるいは祭祀的なものとして、とらえるべきであると思う。このことは、福岡県沖の島祭祀遺跡において、鏡などとともに発見されたことよりも明らかである。

なお、碧玉製腕飾と称せられる石剣・車輪石・鍔形石の材質は、一般に碧玉であると言われている。しかし、今日では、碧玉といわれるものの他、滑石やグリーンタフと呼ばれる緑色凝灰岩などが含まれている。これらの材質の区別に関しては考察Ⅱで明らかにされているが、從来薄緑色を呈する石材を、碧玉と呼んできたので、一応本稿でも碧玉製という呼び名で統一して呼ぶことにする。

この碧玉製腕飾についての研究には、古くに、高橋健自氏によるものがあり、碧玉製腕飾の祖形・用途・分布などについて論究されているのが嚆矢である。⁽²⁾

この高橋氏以後、まとまった論説はみられなかったが、昭和42年小林行雄氏が新しい見解を論述された。

小林行雄氏は、「同危鏡論」を傍証するものとして、この碧玉製腕飾を取り扱われたもので、碧玉製腕飾は、仿製鏡の製作配布と共に、新しい文化活動の一環であって、鏡と同様に製作配布の対象物であったと言う。しかし、その配布状態は、仿製鏡のそれと一致するのではなく、分布範囲に関してはむしろ狭くなっていることから、配布時間あるいは配布中枢が異なっている

るのではないか、と述べられている。

この高橋・小林両氏の論文以外に碧玉製腕飾のみを取りあつかった論文はない。森藤忠・原田淑人氏などは、前略古墳に関する論考の中で若干触れているが、いずれも小林氏の研究に対する批判的側面が強い内容のものといえる。⁽⁶⁾

その他に、生産の側から研究されたものに、寺村光晴「古代玉作の研究」がある。⁽⁷⁾

寺村氏は、古墳時代第一期玉作遺跡が、碧玉製腕飾の分布図、すなわち勢力圏の周縁の地にのみ存在することに疑問を示している。すなわち、碧玉製腕飾は首長の宝的呪術的器物の集積であって、その分布密度は首長の宝的、呪術的器物に対する欲求度・必要度に比例して表示されたものであると言う。この論旨は、小林行雄氏の考察とは反対の立場を示す。

寺村氏の研究は、玉類の製作と関連して述べられたものである。碧玉製腕飾が、鏡ほど政治的性質を示しえず、また、鉄製品のように、即、現実の実用性を持ちえなかったという性質から、取り扱いが困難であったといえるのではないか。

このような経過をみると、碧玉製腕飾を対象にするのは大変困難な問題があるが、先ず、課題に対する基礎的作業として、ここでは碧玉製腕飾の集成を行ない、それに基づいて碧玉製腕飾のもつ意義について考えてみようとするのが本稿の目的である。

2. 集成表からみた碧玉製腕飾出土遺跡の傾向

まず、集成表から、出土遺跡数を概算する。出土遺跡の総数は170遺跡、うち古墳は156遺跡を数える。その他は祭祀遺跡・玉作遺跡を中心とする出土である。このほか資料不備のため、参考のみにとどめたもの、及び博物館や研究室の蔵品となっているものが若干ある。

次にこの古墳156基を、主体部ごとに、石釧・車輪石・鍼形石の3種各々の出土をみると、石釧129主体、車輪石61主体、鍼形石48主体を数える。なお、2種以上にわたって出土のみられるのは50主体である。また、石釧のみの出土は86主体、車輪石のみは12主体、鍼形石のみは12主体である。以上より石釧については単独での出土が多く、逆に車輪石・鍼形石については2種以上にわたっての共有副葬が多いという傾向が判明する。

3. 碧玉製腕飾の分布

はじめに碧玉製腕飾として三種の石製品を一括した場合の分布をみる。（第96・97図）

分布の東端・北端は、山形県衛守塚2号墳、西端は佐賀県谷口古墳、南端は熊本県大塚古墳である。この分布図によってまず知られることは分布密度の差が著しいことであろう。分布の密集地域は、大和盆地・淀川流域を中心とした大阪平野である。次いで群馬県南部・岐阜県南部・岡山平野・讃岐平野にやや集中してみられる。これと反対に分布が稀薄な地域は、東西南北の各端付近である。また集中的に分布のみられる地域の中間地域でも、その分布は散在的である。

次に各1種づつの分布をみる。（第98～103図）

石釧の分布は、3種の碧玉製腕飾の中で、もっとも広範囲に及ぶ。分布の北端・東端は山形

県衛守塚2号墳、西端は佐賀県谷口古墳、南端は大分県七ツ森B号墳である。分布密度などは先に一括してみた場合のそれとはほんの少しある。少し異なるのは広島県中部以西の中国地方と、これに瀬戸内海をはさんで相対する四国地方に、全く分布が見られないことであろう。

車輪石の分布は石劍よりずっと狭くなる。分布の東端・北端は、福島県大槻古墳群中の例であり、西端は福岡県飯田古墳、南端は熊本県大塚古墳である。しかし、分布図を見ると、これらの最端部の例はどれをとっても、隣接する遺跡から大きく離れていることがわかる。すなわち、連続的に分布が見られるのは、西は岡山平野、東は山梨県までとなる。分布の稀薄な地域は、阿山県中部以西の中国地方、瀬戸内海をはさんでこれに相対する四国・九州地方である。また、岐阜県での出土例を除いて、これ以東の地域での分布は、石劍にくらべて稀薄である。

鍔形石の分布は、3種の碧玉製腕飾の中でもっとも限られた狭い地域となる。分布の北端は石川県小田中親王塚、東端は岐阜県飛騨山古墳、西端は山口県長光寺山古墳、南端は大分県猫塚である。また、特殊例として福岡県沖の島祭祀遺跡がある。分布範囲からみた特色は、東日本での分布の伸びの後退である。また、分布の疎密は他の2種のそれと大差ないが、岡山平野での出土の減少、岐阜県での集中的出土が注目される。また、近畿中央部では兵庫県・京都府での出土の減少が特徴的である。

以上が、3種の碧玉製腕飾の個々の分布の概観である。これを互いに比較してみると次のとおりである。

最初にあげられるのは、それぞれの東端の出土地の相異である。すなわち、石劍・車輪石が関東地方にまで、明確な分布を見るのに対して、鍔形石は岐阜県・愛知県に届くのみである。石劍に比べれば出土遺跡数も3分の1程度であるから、分布に差のあるのも当然であるが、出土数において大差のない車輪石と比べてみても、その東日本での分布状態は異なる。

また、西日本への分布範囲は、3種いずれをとっても、東日本でみられるような顕著な差はみられない。しいてあげれば岡山平野における3種の出土遺跡数の変化くらいである。

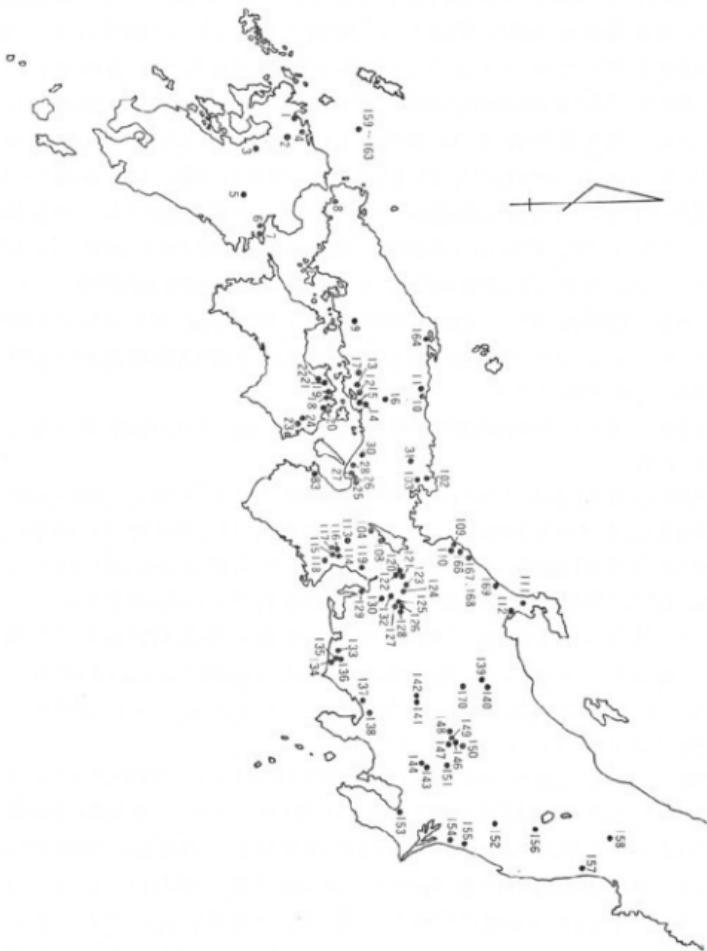
以上のことから東日本での分布端の相異は注目に値するといえる。しかし、この差をもって時間的な経過を推測するのは、やや無理と思われる。

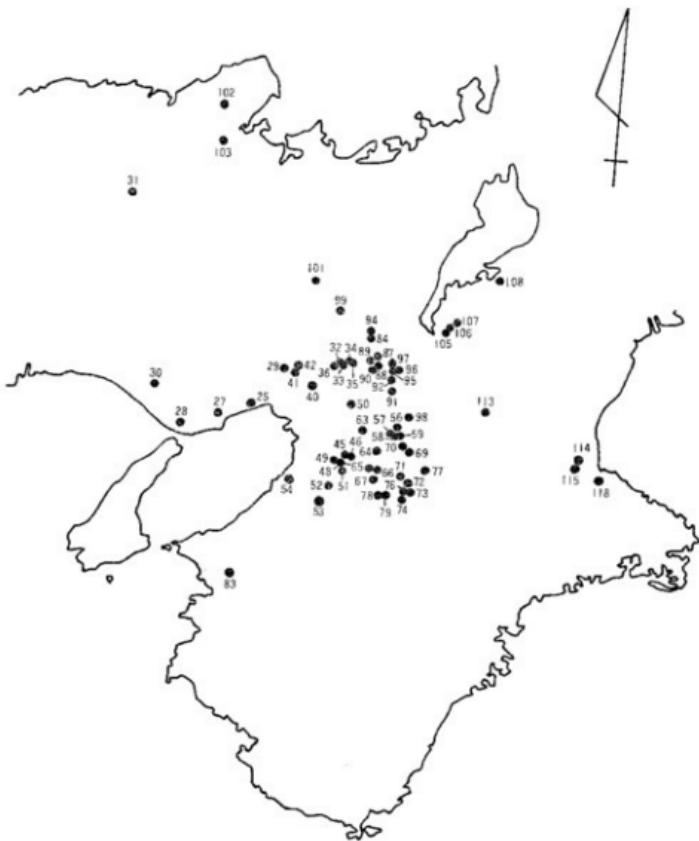
次に、分布状態をながめてみると、近畿地方中央部を拠点として、東日本・西日本ともに、その分布状態は古代における陸の主要交通路に沿っていると言える。当時の道路の重要性については推測の域を出ないが、いわゆる山陽・山陰・東海・東山・北陸道に沿った分布である。

また、分布の連続性については、東日本ではほぼ連続的な展開が見られる。しかし、西日本では広島県・島根県の二つの空白地帯があり、四国地方でも愛媛県・高知県には全く見られないという現象がある。そして、大分県・福岡県といった分布の西端部で、かえって密な分布を示している。

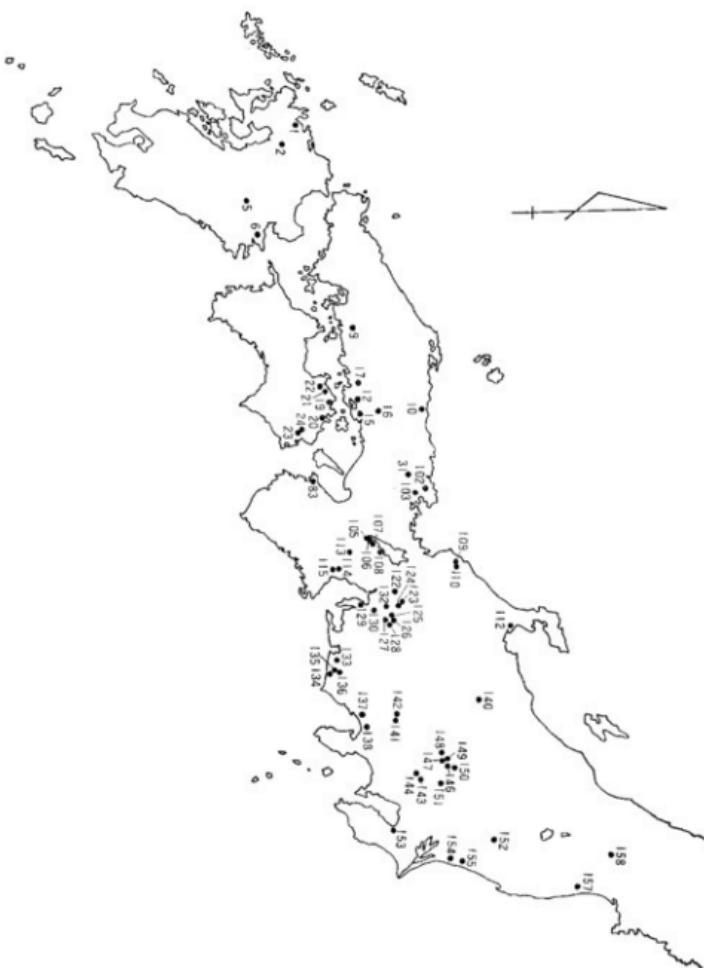
なお、東日本において、交通分岐の拠点と考えられる岐阜県南部・群馬県に集中的に分布することは興味深い。

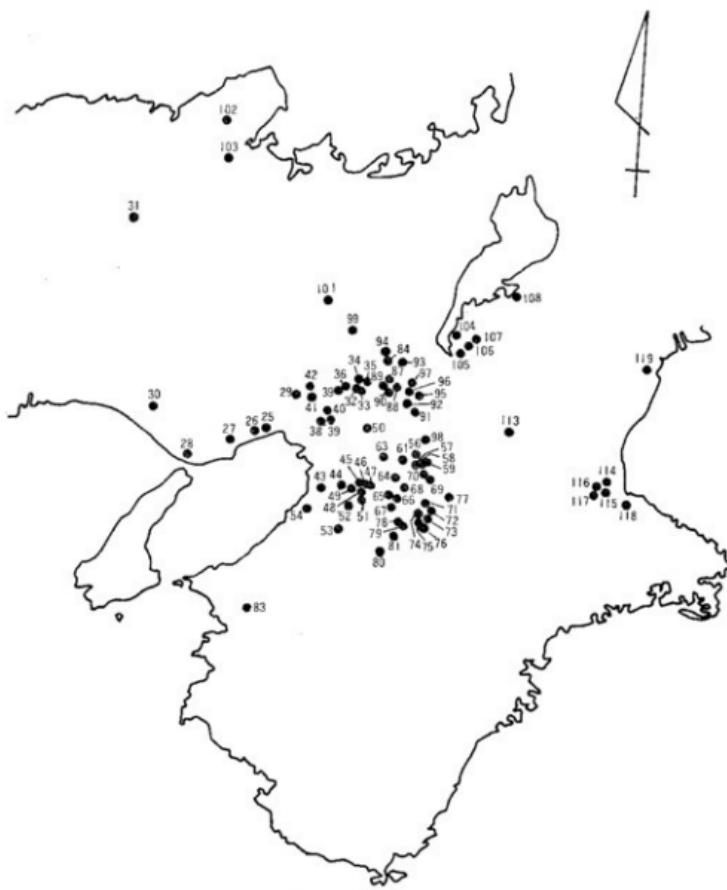
第九六圖 碧玉製胸節出土遺跡の分布





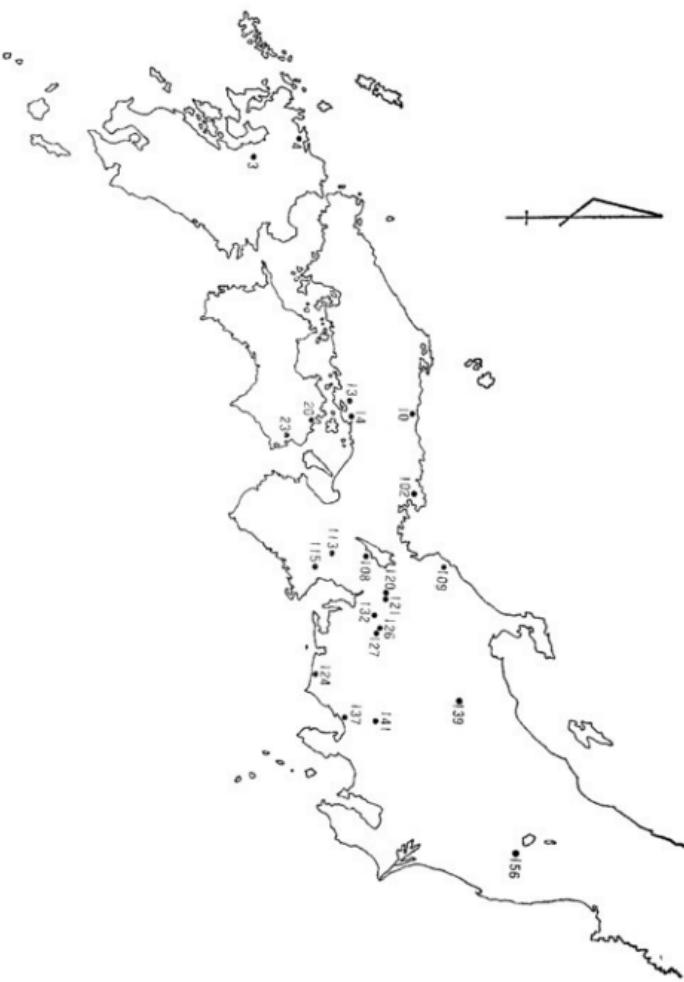
第九八圖 石綱出土遺物の分布





第99図 近畿地方における石剣出土遺跡の分布

第一〇〇圖 車輪石出土遺跡の分布





第 101 図 近畿地方における車輪石出土遺跡の分布

第一〇二四 磁形石出土遺跡の分布





第 104 図 近畿地方における縄形石出土遺跡の分布

さて、古墳については埴形や副葬遺物とともに、内部主体の構造が注目されるので、ここでも明確に判断できるものについて記述しておく。

前期古墳の内部構造として代表的なものは、堅穴式石室と粘土椁である。碧玉製腕飾出土古墳のうち、その主体部に堅穴式石室を持つものの50余例、粘土椁のもの40余例を数える。

この分布状態は次のとおりである。堅穴式石室の分布は、近畿地方を中心にして西日本に多く見られ、讃岐平野では集中して見られるようである。これに対して、粘土椁は近畿地方を中心にして、東日本各地で圧倒的な例を見、とくに三重県・岐阜県・群馬県で集中している。しかし、この分布の差をもって、その占墳の新古の差を考えるのは適当でないと思う。

また、このような内部主体の構造の変化がそのまま古墳の副葬品に表われるとは限らない。たとえば、奈良県東大寺山古墳、三重県石山古墳などでは、粘土椁を主体部としながらも、堅穴式石室を有するもの以上に副葬遺物が出土している。

この他に、地域的な特色として、北九州における箱式石棺がある。この箱式石棺を持つ古墳は、同じ北九州にある堅穴式石室を持つ古墳と比べると、埴形についても、副葬遺物についても、大きな差のあることが明らかである。たとえば、佐賀県谷口古墳と、大分県七ツ森B号墳を比べると理解できよう。

以上、碧玉製腕飾出土古墳の分布を観察してきたが、次に製作遺跡についても見ておこう。

末尾集成表に示したごとく、現時点において、碧玉製腕飾の製作の行われていたことが明らかな玉作遺跡は5遺跡である。いずれも、出雲・加賀の裏日本に偏在している。これら製作地から見ると、碧玉製腕飾は、當時すぐれた文化の発達を見せていた畿内より、はるか遠く離れた地域で作られていたことになる。

小林行雄氏によれば、当然の結果として大和政權が、これらの地域をその掌中におさめて、強い統治力を發揮していたことになる。また、寺村光晴氏によれば、この地域の掌握は、とくに強くなっているなくてもさしつかえはない。

4. 前期古墳に副葬される他遺物との関連

ここで碧玉製腕飾をはなれて、同じく前期古墳の副葬遺物として、代表的に取り上げられている他の遺物との比較の意味で観察してみたい。取り上げるのは、合子・琴柱形石製品・筒形石製品の3種の石製品と、筒形銅器の合計4種の遺物である。鏡との関係については、小林行雄氏の論考がある。

合子は、碧玉、または滑石を材料とした蓋付の容器で、主に前期古墳に副葬される遺物である。出土遺跡は、全国で32遺跡を数える（埴製合子も含む）。分布は、岡山県金蔵山古墳を西端に、愛知県瓢箪塚古墳を東端とする範囲にある。その中心は、大和盆地を中心とする近畿中央部であり、分布東端に近い岐阜県にやや集中的にみられる。この分布状態は、前期古墳の副葬遺物の中でも特徴的である。すなわち、分布範囲が非常に狭い地域にあること、出土例が少ないとことなどで、他の石製品とも異なった分布を示している。（第104図）



図104 合子出土遺物

また、時間的な経過を考えると、古墳の編年的成果から初期の例として、大阪府弁天山C1号墳や、京都府飯岡車塚があり、後出の例は京都府久津川車塚である。その年代は、4世紀後半ころから5世紀前半にかけてのごく短い間である。

碧玉製腕飾と共に存するには、32遺跡中18遺跡である。出土遺跡数については、同じ石製品として材質も似ていながら、碧玉製腕飾の約65%以下と少ない。また、分布範囲もごく狭い地域に限られてくる。年代的には碧玉製腕飾より遅れて始まり、その消滅の時期は碧玉製腕飾より長く残っているようである。

西谷真治氏⁽¹²⁾は、合子は碧玉製腕飾や鏡と同様、配布の対象物であって、分布状態は、鍬形石・車輪石A⁽¹³⁾のそれに似ていると考えられている。

琴柱形石製品は、碧玉または滑石で作られた琴柱に似た形をしている石製品で、主に前期古墳に副葬されるものである。その形態によって、人字形・I字形と呼ばれる2種のほか数種類にわたる。出土は、これらをあわせて全国で49遺跡を数える。分布の西端は佐賀県森の上古墳、東端は埼玉県木村遺跡であるが、古墳のみに限れば、その東端は群馬県高崎市茶臼山古墳である。このように分布範囲は合子などに比べると広く、分布の中心も、大和盆地にあるといえ、碧玉製腕飾のように、極端な集中化現象はみられない。（第105図）

時期的には、4世紀後半から5世紀中頃にわたって、初期の例には奈良県富雄丸山古墳・兵庫県万葉山古墳があり、終りの時期の例には滋賀県八重谷古墳がある。

碧玉製腕飾にくらべて、出土遺跡数は少なく、総遺跡のうち、碧玉製腕飾との共存をみると20遺跡である。また、琴柱形石製品については、古墳以外の平地遺跡での出土がめだつ。しかし、分布範囲は出土遺跡数のわりに、広地域に及んでいる。このことは逆に大和盆地等畿内中心部への集中を薄くし、京都府・大阪府でもわずかに1～2例のみなのである。これに対して東日本への分布は、広い地域にわたっている。年代的には共存遺物からみても、前期古墳としては新しい頃のようである。碧玉製腕飾よりは遅れて出現し、その末期も碧玉製腕飾より長く続いているらしい。

龜井正道氏によれば、琴柱形石製品は、碧玉製腕飾の中でも一番遅れて分布圏の東端を伸張した石鏡よりも、もう一時期遅れて次第に分布圏を東に拡大していったもので、一般的の石製模造品と時を同じくして、分布の範囲を拡大していったと考えられる。しかし、碧玉製腕飾のように、積極的な政治性を認めるのは困難であろう。

筒形石製品は主に碧玉で作られる用途不明の石製品である。出土遺跡数も少なく、全国でわずかに17遺跡を数えるのみである。数量的に資料不足であるが同様にみていく。分布は、近畿中央部を中心とするが、今まで取り上げてきた石製品と異なって、極めて東日本への偏在を示している。近畿中央部での分布を除くと、西日本では岡山県金蔵山古墳のみであるが、東日本では埼玉県熊野神社境内古墳に至るまで6例（三重県を含む）を数えるのである。このような分布状態は、碧玉製腕飾のそれとも形を異にする。なお、碧玉製腕飾との共存を示すのは17遺



第一〇五圖 石柱形石製品出土遺跡

跡中14例で、割合から見ると他の遺物にくらべ高率を示すといえる。（第106図）

筒形銅器についての研究は、現在までのところとくにないようである。

筒形銅器は鏡と同様に、前期的様相を示す青銅製遺物である。出土数は32遺跡と少なく、近畿中央部を中心とし、西日本に多く見られる。分布の東端は埼玉県熊野神社境内古墳、西端は佐賀県横田下古墳である。分布状態は、岐阜県以東の東日本でわずか6例のみであるが、兵庫県以西の地域には13例を数え、広島県の3例が注目される。年代的には初期の例に滋賀県瓢箪山古墳、中期的な例に広島県四ツ塚1号墳があつて、今まで取り扱った遺物の中ではもっとも年代の幅が広いと言えよう。すなわち、4世紀後半から5世紀後半にまで及ぶと思われる。

碧玉製腕飾との共存は13遺跡と少ない。また、分布状態では、三重県、岐阜県に分布の見られないことが、他の遺物の場合と異なる点である。この両県は前期古墳の発達も顕著で、副葬遺物もほぼ全般にわたって出土のみられる地域なのである。また、この両県とは逆の意味で、広島県の3例は特徴的である。年代的には碧玉製腕飾にくらべ、初現的例はほぼ一致するようであるが、前期半ばでは筒形銅器の方が長く続いているようである。（第106図）

なお、筒形石製品にくらべると、筒形銅器が主に西日本に分布するのに対して、筒形石製品はその空白を埋めるかのように、東日本に分布するようである。年代的には広島県・九州地方の筒形銅器出土古墳は、東日本のそれより新しいものが多くあり、筒形石製品出土古墳とくらべても、同様の傾向があると言える。

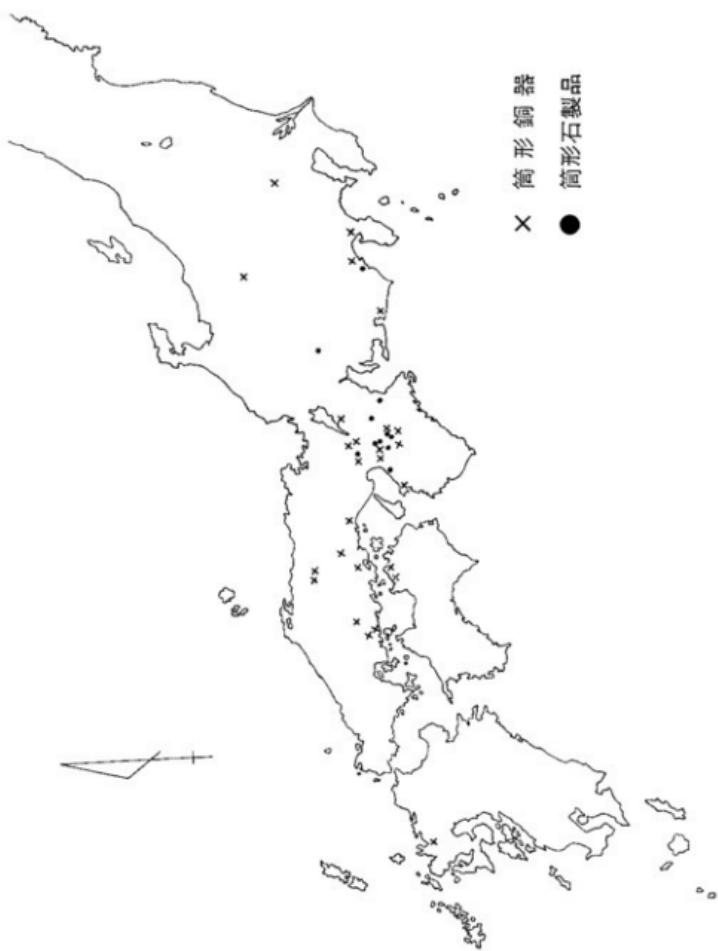
筒形銅器については、山田良三氏が形式細分、文化の発展条件などについて述べられている。この中で、筒形石製品と筒形銅器の変化は、編年的变化ではなく、所有者の支配関係の身分差によるものであること。また、その形態が一定であることは、管理者の存在が予想されること。そして、分布については畿内政権の強力に浸透した地域に見られると述べている。

以上記した4種の副葬品と碧玉製腕飾とを比較してみよう。

これらの副葬品は、いずれも主に前期古墳より出土のみられるものである。すなわち、これらの副葬品が出土することによって、その古墳は前期古墳としての位置を与えられるのである。また、各々の副葬品は前期古墳の中でも、ほぼ似た年代を示すと思われる。それは、各々の副葬遺物の出土の初期を示すと思われる古墳が、ほぼ同時期と比定されていること、また、それがもっとも流布した時期もほぼ似ていることよりも明らかである。このようにここで取り扱った遺物は、それがもっとも多く見られる時がほぼ同じだと思われる。

しかし、こと前中期の時期ということになると、必ずしも一致しているとは言えない。琴柱形石製品・合子・筒形石製品・筒形銅器の4種の中では、筒形石製品・合子が早くその終焉をむかえるようである。また、琴柱形石製品・筒形銅器は、前中期から後期初頭にまで残存するのである。

碧玉製腕飾については、ほぼ前中期の古墳をもって終末をむかえるようである。（静岡県藤上原古墳のように、須恵器をともなう例もあるが、あくまでも例外的なものである。）3種を個



第一〇六図 筒形銅器及び筒形石製品出土遺跡

個に見ると、鍔形石・車輪石に比べて石鉗がもっとも遅く、その終末をむかえるようである。これを先にあげた4種の副葬遺物と比べると、石鉗の終わりは、筒形石製品・合子よりも遅く琴柱形石製品・筒形銅器よりも早くいったといえよう。

さて、年代幅について、以上のように考えると、明らかとなるのは、出土遺跡数の相異である。出土遺跡数をここでもう一度確認しておく。もっとも多いのは石鉗で126遺跡、次いで車輪石の57遺跡、琴柱形石製品49遺跡、鍔形石46遺跡、合子・筒形銅器の各32遺跡、もっと少ないのは筒形石製品の17遺跡である。これを年代幅とあわせて考へると、琴柱形石製品・筒形銅器の数が少ないのが注目される。反対に、年代幅を無視すれば、琴柱形石製品の出土数はむしろ車輪石・鍔形石に近い値を示すのである。すなわち、年代幅の長短と、出土数とは全く関係のないことがわかる。

このことは、碧玉製腕飾の3種をとっても同じである。つまり、石鉗と車輪石・鍔形石の年代幅の差は出土例において、2~3倍の差を示すほど大きくではなく、むしろ相似た数値を示すのに十分であるといえる。

ここで取り上げた副葬遺物の持つ性格は、いずれも呪術・祭祀・宝器的なものである。そして、ほぼ同時期に流布したのに、何故このような出土例の差を示すのだろうか。

通常、物が流通するには需要者側の要求と、供給者側の力量とが大きく左右する。ことに古墳時代においては、前者の条件が大きな位置をしめていたと思う。たとえばこれらの物が呪術・宝器的性質の強い遺物であるゆえ、被弾者自らこれらの物を得ることによって、その性質を自負し、周囲の人々にこれを認めさせることも一つである。また、外見的美意識に合致するか否かもある。

供給者側の力量ということになると、まず第一に技術的な点である。先にあげた遺物の中では、鍔形石や合子は、かなり精密な技術を要したと思われる。また、その全般について、玉類の製作より高度の技術が必要であったと思う。先にあげた石製遺物の中では、合子・鍔形石の製作は、筒形石製品に比べて大そう手間がかかるだろう。また、材料の入手の難易も考えられる。これについては、製作地が材料入手の容易な地にあることで解消されることが多い。

なお、技術的な面についても製作者集団の立地も大きく左右する問題である。寺村光晴氏がいう、第1期玉作集団の存在が現状のように、山陰・北陸のみとなれば、製品の輸送ということが問題となってくる。

小林行雄氏が、碧玉製腕飾に製作配布という政治性を与えた場合⁽³⁾、需要者側の意図として、中央から地方への下駄、これによって生じる支配・被支配の関係の成立が見られるであろう。この場合、製作者集団の掌握ということがでてくる。とくに製作地が限られるとなおさらである。そして、中央の権力者はこれら製作地に対して、自らの意図するものを作らせるだけの、強力な権力の浸透をさせたことが必要な条件となるだろう。

いずれにせよ、その物が流布したか否かは主に需要者の側から決まると思う。たとえば筒形

石製品は技術的に容易であったが、需要が少なかった例、合子は製作技術の困難からの例として、挙げることもできるのではないか。

5. 碧玉製腕飾の製作配布について

ここで、石釧・車輪石・鍔形石の3種の碧玉製腕飾が、小林氏の言うように、製作配布の対象であったか否かという点について少し考えてみたい。⁽⁸⁾

碧玉製腕飾と呼ばれる石釧・車輪石・鍔形石の3種の腕飾が、それぞれ若干の変化はあるものの、ほぼ一定の形態を踏襲していることは周知の事実である。このことは、この3種の腕飾に製作の段階で何らかの形態的な共通性が意識されていたことを推測させる。また、これらの製作に関する管理者のような者の存在も暗示していると思われる。しかし、これのみで製作配布が行われたと断言するのは早急であろう。

製作配布という行為が行われるには、その製作を行わせる者の存在が必要である。そしてこの行為者は、製作者集団に対して、自分たちの意図する物を作らせるに足る強い力で、彼らを掌握しておく必要がある。つまり、配布という行為をなす者と、配布の対象物を作る集団との間には、支配・被支配という重要な関係の成立が必要となる。この点について現在判明している資料で、何か考えられるであろうか。

碧玉製腕飾の製作地は前述の如く出雲と加賀である。大和政権が製作配布という行為をなすには、この地域をすでにその掌中に治めていることが必要である。

小林氏の同範鏡論を勘案するならば、ここに当然、鏡の存在が予測される。ところが碧玉製腕飾製作遺跡付近における鏡の分布には見るべきものがない。畿内大和政権の勢力圏を示すとした三角縁神獸鏡のこの地域での分布は、早い例で福井県山頂古墳付近と石川県小田中親王塚である。山頂古墳は、隣接の碧玉製腕飾出土古墳である小山谷古墳と同時期の築造といわれ、小田中親王塚はすでに鍔形石を有する古墳である。すなわち、いずれも前二期を遡る古墳ではない以上、北陸のこの地域に、大和からの勢力圏の伸張の証として、畿内的な古墳の副葬遺物が現れるのは、碧玉製腕飾の製作以前に明確だったのでなく、製作と同期、あるいは製作が行われて後のことなのである。⁽¹⁷⁾

一方、山陰においても、三角縁神獸鏡の分布は鳥取県上神大将塚古墳にみられ、これ以外に早い例はない、この大将塚古墳もすでに鍔形石を有しているのである。

このように製作地を有する二つの地域には、早い時期とわかる鏡の明確な分布はない。ところがこの地域で碧玉製腕飾を作らせているのである。それにはこの地域を独力に掌握し、大和の勢力下にあることを、この地域の人々に十分知らせる必要があると思う。つまり、鏡をもって各地の首長を服属させた証拠としたように、この地域にも支配・被支配の関係を認識させうるような物の必要性を感じるのである。

小林氏が同範鏡論を展開された。そして、これを傍証するための碧玉製腕飾であった。それならば、ここに鏡の存在があって当然といえるだろう。

また、鏡という「副葬品でなくても、畿内のといわれる墳形や内部主体であってもよい。しかし、この調査においてはそのいずれをとっても、むしろ地域的な特色を長く残している地域なのであった。言いかえれば、大和政権の影響が古墳時代初期の段階では、十分およばなかつた地域とも言えるのである。このような地域にある玉作集団を大和の権力者たちは、自らの目的を遂げるためにはたして利用したであろうか。それも大和政権の勢力圏を示す碧玉製腕飾の製作のために。

また、かりに碧玉製腕飾の製作配布という行為がなされたとして考えてみよう。

鏡の配布と全く同様に考えることは多少無理があると思う。しかし、碧玉製腕飾の製作配布という行為が小林氏のいうように、大和政権の勢力圏を示すために行われたならば、その所有形態において、ある程度の集中化が見られるのではないだろうか。たとえば鏡における京都府椿井大塚山古墳のような例がこれにあたる。ところが、実際にはこの碧玉製腕飾を集中的に所有する古墳は稀である。もっとも多数の碧玉製腕飾を有するのは岐阜県長塚古墳であるが車輪石を有せず、銀形石も石劍とは別の主体部にある。また主体部は木棺直葬であると言う。さらに畿内より離れた岐阜県という地にあることを考えると、大和政権の中心的人物ではない。

次いで三重県石山古墳の総数67個がある。石山古墳は木津川のはるか上流にあり、全長120mを測る前方後円墳で、粘土構造を主体部にもつ。しかし、碧玉製腕飾の出土をみたのは3棺中もっとも小規模な西棺であって、鏡1面、玉・石製模造品・武器・武具を共存していたという。ここでは碧玉製腕飾の集中的所有が見られ、木津川上流に位置する点も興味深いが、3棺埋葬のうち東棺に1面の内行花文鏡、西棺の仿製神獸鏡があるだけで質的にも、数量的にも少ない点に問題があろう。

畿内では、奈良県東大寺山古墳の総数55個以上がある。(正確な報告がないため概数である) 東大寺山古墳は、全長120mを測る前方後円墳で、粘土構造を主体部にもつ。碧玉製腕飾の他には鉄製武器・武具を多数有しているが鏡はない。

石山古墳・東大寺山古墳に共通することは碧玉製腕飾の集中が認められるが、鏡の所有になると皆無となる。小林氏も鏡の配布と碧玉製腕飾の配布とは、必ずしも同じ配布中枢によってなされたとはいっていない。^(a) しかし、かりにも政治的性格を強くおしだし、大和政権の勢力圏を示すものであるなら、両者の間には密接な関係があったはずである。つまり、両遺物の共存という形が、とくにその配布中枢と考えられる古墳にはみられると思うのである。結局、この両古墳もまた、その配布中枢にある古墳とは言いにくいのである。

このように考えてみると、小林氏のいう碧玉製腕飾の製作配布ということには、疑問を示す立場をとらざるを得ない。

6. 碧玉製腕飾とその出土古墳の位置づけ

碧玉製腕飾が、大和政権の勢力圏を示すという政治的性格を持たないとすれば、碧玉製腕飾及びその出土古墳は、どのような位置を与えられるのだろうか。

碧玉製腕飾は、はじめに述べたように、本来、実用品であった貝釧を模したものといわれている。しかし、明らかに呪術・祭祀的な遺物である。また、鏡などとともに祭祀遺跡に残されている例から、かなり重要な位置を占めていたことがうかがえる。

しかし、一方で貝釧を模したという点を重視すれば、いわゆる石製模造品と称される物と、同じ範囲内でとらえられるものである。そして、石製模造品もまた実用を離れた祭祀・呪術的なものであった。従来、碧玉製腕飾を「石製品」として、特別に取り扱ってきたのは、単にその材質の相異からであった。そのため、茨城県常陸鏡塚から出土した滑石製釧を、形の上では何ら碧玉製のそれと相違をみないが、一時除外して考えるということにもなったと思う。ここでは「石製品」という範囲ではなく、一步広げて「石製模造品」としての範囲で、碧玉製腕飾を取り扱うことを提案する。このように考へると、形態的に何ら変らない滑石製品があっても、あるいは材質の不統一があったとしても、無関係に「石製腕飾」と総称できるのである。

この点小林氏が同じ「新しい相の文化活動」⁽¹⁸⁾と述べた鏡、すなわち「仿製鏡」との違いがあると思う。「仿製鏡」は「舶載鏡」と、その持つ意味あいが異なるといわれるが、それはあくまでも「舶載鏡」のもつ意味を踏襲した「鏡」なのであった。

碧玉製胸飾出土古墳を、碧玉製腕飾を持つということのみで、特別視する必要はないと思う。すなわち、広義での石製模造品の初現的な例を碧玉製腕飾とすれば、それは石製模造品として、一貫した呪術・祭祀的な遺物の一つなのである。出土古墳についても鏡をはじめ、非実用的で呪術・祭祀的な遺物を持つことを通有とする前期古墳の中にあって、その同じ性質を持つ石製模造品としての碧玉製腕飾を有することは、何ら不思議なことではない。

なお、碧玉製腕飾を、石製模造品として一括して取り扱った場合、碧玉製腕飾は、その中でも、もっとも早い時期に出現したもので、かつ、比較的広い範囲に流布し、同時期に生産されたと思われる合子や筒形石製品よりも、長期にわたって需要されたといえよう。

もし、碧玉製腕飾出土古墳に、政治的な性格を与えるとすれば、それは碧玉製腕飾を持つから与えられるのではない。碧玉製腕飾は據返して述べると、呪術・祭祀的・宝器的な性質の遺物である。しかし、この性質が即、政治的意図に利用されるものでもない。ことに石製模造品の一つとして考えれば、碧玉製腕飾のみにその性質を付与することは、なおさら疑問である。政治的な性格を与えるとすれば、これ以上にこの性質を示す物との共存によって、与えられるべきと思う。

たとえば墳形とか、内部主体の構造といったものであり、副葬遺物であれば鏡によってである。（同じ副葬遺物でありながら、鏡については政治的性質を認めるのは次の点からである。すなわち、鏡は中国より伝來した時、すでに政治的に用いられてきたものであって、仿製鏡として我国で製作されるようになっても、その本来の性質は継続したと考えるのである。）

これに対し、碧玉製腕飾は、本来、実用品である貝釧の模造品である。これは呪術・祭祀的な遺物として、古墳時代前期という時期を決定する一つの材料にはなると思う。しかし、これ

が製作配布の対象であったという点については断言できる資料はない。前期古墳を位置づける一つのメルクマールとしての碧玉製腕飾であり、その出土古墳であろう。

古墳時代前期は、まだまだ呪術的な要素を強く残した時期であった。これを如実に反映しているのが、古墳の副葬品であっただろう。権力の表象として、あるいは呪術・祭祀的性格を強く表にあらわした鏡の存在価値もここに存する。また、実用品から離れた各種の模造品の位置もこの中にあった。

次の段階で呪術・祭祀的な遺物は徐々に消滅していく。この時、その権力者はもう呪術的な物によりかかることなく、自己の姿のみで十分彼の地位と権力を保持できたのであった。

7. 終わりにかえて

古墳時代において、一つの文化現象を示す碧玉製腕飾について述べてきたが、最後にこのような文化の伝播・普及ということを考えてみたい。

どのような文化現象にも伝播・普及が見られる。このことは文化を送り出す地域と、受け入れる地域のあることを示している。それは一種の文化的先進地と後進地でもある。現代ほどに交通や通信の発達していないこの時代において、文化が伝播・普及するということは、今日のように容易なことではなかったと思う。しかし、かといってこの現象が、政治的道具として利用されたとも限らないのである。

文化の発生・発達ということは、必ずしも一地域においてのみ生ずるものではない。ある種の文化については一地域で発達をみたというものもある。しかし、自然発的に各地で同様の発達を見る場合も多くあったと思う。後者の場合、その文化現象の伝播・普及は、互いに影響を及ぼしながら、各種の価値基準に従って取捨選択され、一つの整理された文化として成立する場合が多い。

前者の場合の伝播・普及には、(I)人の往来によって、自然に徐々にまわりの地域へ広まる場合。(II)文化的先進地からそのまますんだ文化を、後進地へ強制的におしつける場合。(III)文化的後進地が自らの意志ですぐんでその文化を受容するという場合。などが考えられる。

(I)の場合、文化現象は受け入れる側の事情に合ったものが選択して取り入れられることになるが、伝播過程で各地の他の文化と融合して多少の変化を生じるかもしれない。(II)の場合、その文化現象は受容者側の条件とは無関係に、取捨選択されることなく、おしつけられるという形をとるであろう。この場合、文化的先進地はその意のままに、後進地を利用できることもある。(III)の場合、受容者は自分の意にあったものだけを事情に応じて取り入れることができる。この場合、受容者はその文化現象に対して、新たに特定の意味づけを加えることも可能となってくる。

それでは、古墳時代における諸文化の発達・伝播というものは、どういった過程をへて形成されたのだろうか。

先にあげた伝播・普及という方法が、すべて何かにそのままあてはまるような例は考えられ

ないようである。

鏡の場合は、一地域での文化現象が、文化的先進地の意によって後進地に与えられた例であろう。しかし、鏡について言えば、後進地へ与えられる段階で、より強く、先進地の意図する性格を加えられたものであろう。

鉄製品、とくに鉄器などの場合は自然発生的とは言えないが、各地域の文化的な発展にともなって、生じてきた文化的事象としてとらえることが可能であると思う。すなわち、各地で必要に応じて発生・発展を見、価値判断の結果、利用しやすい物が残り、互いに影響されたと思われる。

では、碧玉製腕飾はどうであろうか。先にあげた中では「地域で発達したものが、各地域ですぐんで受け入れた文化現象としてとらえたい。しかし、こうした場合、製作地との関係が問題として残る。碧玉製腕飾は今、明らかにされている製作遺跡の付近ではあまり流布していないのである。

小林氏のいうように、製作配布という立場をとるなら、鏡と同じ伝播・普及の方法が与えられる。この場合、文化的先進地は、製作遺跡をその掌中に入れていたことになる。

碧玉製腕飾のもつ呪術・祭祀的性格はどちらの方法であっても付与できる。そこで考えられるのは両者の中間型のような方法である。すなわち、この時代において大和政権と後によばれるような、ある程度の文化的先進地としての畿内中央部の地域が存した。これらの地域でいち早く碧玉製腕飾というものを接取した。そして、これに呪術・祭祀的な性質を与えた。これをまねたのが、各地域の首長たちであったとするのである。

文化的な現象は、政治的な現象に比べて、取り扱いにくいものであると思う。

(1974・1・16)

(付 記)

碧玉製腕飾出土以外の古墳については、とくに必要でないかぎり、その参考文献・報告書等についてあげていない。

第96図～第103図に示した番号は、末尾集成表の番号に一致する。

第104図～第106図において、所在地の明確でない遺跡については、一部もれていますが、それを断っておく。

〔註〕

1. ここでいう「前期古墳」とは、「日本の考古学」IV古墳時代上の大冢初重氏による「古墳の変遷」に基づいた。
古墳時代を前・後の2期に大別し、さらに前期を4区分、後期を3区分する。以下すべて、この時期区分による。

2. 高橋健自「車輪石・鏡形石及び石劍の研究
付貝器の青銅化」『考古学雑誌』15巻6号
(大正14年)
他に、同じく高橋健自「劍の研究」「考古学雑誌」3巻7号(大正2年)がある。
3. 小林行雄「前期古墳の副葬品にあらわれた文化の2相」『古墳時代の研究』(昭和36年)

- なお、この論文は、はじめ京都大学文学部50周年記念論集（昭和31年）に掲載されたものである。他に小林行雄「大和政権の勢力圏」『古墳時代の研究』（昭和36年）、「鍾形石の研究」『日本考古学協会報』別巻2（昭和29年）がある。
4. 斎藤忠「古墳文化と古代国家」（昭和41年）
 5. 原田敏人「車輪石と鍾形石」『駿心女子大學論叢』第7集
 6. 以上の他にも、次のようなものがある。
甘粕健「古墳時代の展開とその終末」『日本の考古学』V古墳時代（昭和41年）
大脇努雄「石製鏡造祭器について」『国学院雑誌』56巻2号
 7. 寺村光晴「古代玉作の研究」（昭和41年）
寺村光晴「玉作集団の形成」『古代の日本』6中部（昭和45年）
 8. 第1期玉作遺跡とは、古墳時代の玉作遺跡のうち、碧玉質石製品の製作が、共に行われているもので、滑石製造物の併存が未だ見られないもので、片山津玉作遺跡などがある。

これに対し、第2期玉作遺跡とは、滑石製造物の製作をともなうもので、千葉県八代玉作遺跡・大和田玉作遺跡などがある。（前掲書「玉作集団の形成」による。）

 9. 末尾集成表を参照のこと。各古墳の報告書等についても同様、末尾集成表、参考文献を参照。
 10. 最近、愛知県犬山市篠塚家において、鍾形石の出土が報告されたが、地図上では、岐阜県可児郡所在古墳の方が東にある。
 11. 大和政権という言葉には問題もあるが、当時、強い勢力を持ち、文化も進んでいたと思われている人を中心とした勢力を便宜上、
- 大和政権という言葉であらわすこととする。
12. 西谷真治「古墳出土の盒」『考古学雑誌』55巻4号（昭和44年）
 13. 車輪石Aとは、車輪石をその輪郭によって2分類した時、輪郭が卵形のものを車輪石Aと呼ぶ。なお、輪郭が円形のものは車輪石Bと呼んだ。分布は車輪石Aがもっとも狭く、鍾形石・車輪石B・石鏡の順に広くなるといふ。（小林行雄「女王国の出現」による。）
 14. 万葉山古墳の琴柱形石製品とは、今まで十字形石製品と呼ばれているものである。亀井正道「琴柱形石製品考」により、琴柱形石製品の中に入れた。
 15. 亀井正道「琴柱形石製品考」『東京国立博物館紀要』第8号（昭和47年度）
 16. 山田良三「尚形銅器考」『古代学研究』55
なお、この論文では、簡形石製品についても若干述べておられる。
 17. 小林行雄「同范鏡考」『古墳時代の研究』（昭和36年）
 18. 斎藤優「足羽山の古墳」昭和35年
 19. 小林行雄は、文化活動を古い様相と新しい様相の二つに分けている。古墳の副葬品に反映している範囲でいえば、古い様相とは、文化の高い中国から与えられたものを、そのまま受けとっている型であり、新しい様相とは、仮製鏡や碧玉製碗鏡のように、自分の力で作りだしたものを受けとった型をいいう。

文中で用いた「新しい様相の文化活動」はこれによったものである。

小林行雄「前期古墳の副葬品にあらわれた文化の2相」『古墳時代の研究』（昭和36年）による。

〔註記〕 本稿は、中上京子氏が在学中、河内大師山古墳・和泉乳岡古墳・大和谷畠古墳等の石製腕飾類の出土をみた発掘調査に参加し、卒業論文として提出したものであるが、若干文章に修正し、本人の了解を得て、ここに掲録した。一つの誤謬提起としてご批判いただきたい。

（網干善教）

石製腕飾類出土地名表(1974.1.16現在)

石製品の○は数値が不明であることを示す。

番号	附照名	出土地名	古 所 在 地	概要(塊形・規模等)	主 体 部	石 制 腕 飾	品 物	文獻
					前方後円 円筒埴輪列, 套石 円	東側 整穴式石室 箱式石棺 其時形石棺	11	鏡5 (うち鉢鏡1)
1	佐賀県	口 谷	古 墳	栗松郡御井町玉島町 神崎郡山比山	87m			1
2	"	日 大	古 填	肥本郡延本町津波 福岡市尾崎町野原氏			鏡1 (劣製)	2
3	熊本県	堺 大	古 填	竹田市戸上七ツ森			鏡片 1	3
4	福岡県	堺 七ツ森 氏	古 填	大分市布の印野間 北海道郡北陽町神崎	47m	箱式石棺	鏡1 (彷製)	2, 9
5	大分県	堺 野 四	古 填	竹田市戸上七ツ森	48m	箱式石棺	鏡片 1	7
6	"	堺 3 号	古 填	大分市布の印野間 北海道郡北陽町神崎	60m	箱式石棺	鏡3 (彷製) 紗纏事	8
7	山口県	堺 長 光	古 填	厚狭郡山陽町下津井 智媛郡高崎町下津井			鏡5 (うち鉢鏡3)	10
8	広島県	堺 仙 人 家 1 号	古 填	東伯郡若狭町上陽井	110m	整穴式石室	鏡5 (うち鉢鏡3)	11
9	鳥取県	堺 山 4 号	古 填	倉吉市七郎 岡山市久田	27m	箱式石棺	鏡1 (劣製) 零注形石製品4	12
10	"	上神 大 将 冢 古 墓	古 墓	前方後円 円筒埴輪, 套石 造り出し	165m	中央 整穴式石室	鏡形石製品1, 向形鏡器2 石製模造品, 土製合子 (石劍は副室より出土)	13
11	岡山県	金 肌 山 古 墓	古 墓	岡山市浮山 和気郡備前町高田丸山	50m	整穴式石室 (象形石棺)	鏡3 (うち鉢鏡1)	14
12	"	き ょ う ぐ る 古 墓	古 墓	岡山市浮山 和気郡備前町高田丸山	127m	整穴式石室 (喇叭式石棺)	石製模造品, 合子 貝剣 1	15
13	"	鶴 山 丸 山 古 墓	古 墓	色久部長姫町脇部	60m	前側 埋土部 円筒, 形象埴輪, 套石	鏡1 (彷製)	16
14	"	新 庄 天 神 山 古 墓	古 墓	久米郡輪島町新岡倉見 青松市東山崎町			鏡3 (うち鉢鏡1)	17・18
15	"	月 の 輪 古 墓	古 墓				石製模造品, 合子 貝剣 1	17・19
16	"	伊 与 部 山 古 墓	古 墓				鏡1 (彷製)	15
17	"	香 川 原 茶 白 山 古 墓	古 墓				2 鏡 1	19

番号	前県名	出土場所	在地	墓要(墳形・標榜等)	主体	部石	石刻・車輪形石	主要遺物	文献
19	香川県	蠶冢古墳	高松市石清水尾山	双方中円 横石櫛、円筒埴輪列 前方後円 円筒埴輪列	96m 略穴式石室 (舟彫石棺)	1	1	鏡5(うち鉄鏡1) 筒形鏡2、具鏡4	20
20	"	岩崎山4号墳	大川原津岬町相地	前方後円 円筒埴輪列	51m 略穴式石室 (舟彫石棺)	4	1	鏡2、具鏡4	21
21	"	快天山古墳	綾歌郡綾歌町	前方後円 円筒・形象埴輪、葺石	100m 第1号 箱竹形石棺	2	1	鏡1(船歯)	22
22	"	山根古墳	帕多摩那郡北村西村山根	前方後円 円筒・形象埴輪、葺石	積石塚 葺石	1	4	鏡3(偽製)	23・24
23	徳島県	星前内丸山古墳	徳島市星河内置山	前方後円 円筒・形象埴輪、葺石	60m 略穴式石室	1	8	鏡	25
24	"	内谷組合式石棺	鳴門市石井町内谷	前方後円 円筒・形象埴輪、葺石	65m 略穴式石室	2	1	鏡6(船鏡)	26
25	兵庫県	ヘボソツ原古墳	神戸市東灘区本山町西木	前方後円 円筒・形象埴輪、葺石	20m 略穴式石室	1	1	鏡7(船拔)	27
26	"	吳田家女古墳	神戸市東灘区住吉町吳田	前方後円 円筒・形象埴輪、葺石	65m 略穴式石室	1	1	鏡8(舟彫石製品)	28
27	"	会下山二木松古墳	神戸市垂水区垂水町会下山町	前方後円 円筒・形象埴輪、葺石	65m 略穴式石室	4	1	鏡	29
28	"	大麓山古墳	山	前方後円 円筒・形象埴輪、葺石	65m 略穴式石室	4	1	鏡2、琴柱形石製品	30
29	"	万葉山古墳	宝冢市長尾山	前方後円 円筒・形象埴輪、葺石	粘土甃?	2	2	鏡2	31
30	"	東草冢古墳	加古川市	前方後円 円筒・形象埴輪、葺石	35m 木棺	4	4	鏡6、合子1	32
31	"	緑の山古墳	朝来郡和田山町平野	前方後円 円筒・形象埴輪、葺石	71m 略穴式石室	5	4	琴柱形石製品1	33
32	大阪府	弁天山C1号墳	高槻市服部	前方後円 円筒・形象埴輪、葺石	20m 略穴式石室	1	○	鏡3(うち鉄鏡1)、合子	34
33	"	弁天山B2号墳	高槻市関本	前方後円 円筒・形象埴輪、葺石	20m 略穴式石室	○	○	筒形石製品1	35
34	"	森之庄1号墳	高槻市森庄	前方後円 円筒・形象埴輪、葺石	18m 第1木棺	○	○	鏡2(うち鉄鏡1)	36
35	"	紅葦山C3号墳	高槻市安溝	前方後円 円筒・形象埴輪、葺石	30m 粘土甃	○	○	鏡2	37
36	"	安祇1号墳	茨木市安祇	土師器人形埴輪列、葺石	102m 略穴式石室	○	○	鏡	38
37	"	聚金山古墳	茨木市猪久庄	前方後円 円筒・形象埴輪、葺石	1	6	鏡12、防護席3	39	
38	"	御神山古墳	豊中市御ヶ池南町	前方後円 円筒・形象埴輪、葺石	2	2	能形鏡1、具鏡	40	
39	"	新免上御古墳	豊中市新免	前方後円 円筒・形象埴輪、葺石	1	1	鏡1(偽製)	41	

番号	査定名	出土地名	所 在 地	概要(範形・規模等)	主 体 部	石 墓輪石取形石	主 要 遺 物	文 献
40	大坂古墳	待峯山 古 墳	豊中市柴原 池田市上池田町	前方後円 円筒埴輪列, 塵石	62m 前方後円	62m 堅穴式石室	2 輪1	35 33
41	"	池田茶臼山古墳		円筒埴輪列, 塘石	30m 前方後円	堅穴式石室 長持形石棺	1 18 2	32, 35 40
42	"	頬三堂 古 墳	池田市北新町2丁目 堺市石井町	前方後円 円筒埴輪列, 塘石	150m 前方後円	堅穴式石室 (長持形石棺)	1 27以上	40
43	"	乳の園 古 墳	南河内郡美波町津堂	円筒埴輪列, 塘石	200m 前方後円	堅穴式石室 (長持形石棺)	1 7	44
44	"	律堂城山 古 墳		円筒埴輪列, 塘石	120m 前方後円	堅穴式石室 (長持形石棺)	5 ○	37
45	"	松島山 古 墳	柏原市分町美山	円筒埴輪列, 塘石	75m 前方後円	堅穴式石室 粘土層	5 ○	42
46	"	スカ谷北塚古墳	柏原市西分町スカ谷	円筒埴輪列 前方後円	75m 円筒埴輪, 塘石	堅穴式石室 粘土層	5 ○	42
—	47	東の大冢古墳	柏原市国分町	円筒埴輪列 前方後円	75m 円筒埴輪, 塘石	堅穴式石室 粘土層	○	37
—	48	玉手山5号古墳	柏原市国分玉手山	帆立貝 前方後円	63m 87m	前万字彫刻粘土層 粘土層	○ ○ 1 1	37 28
—	—	—	—	円筒埴輪列, 塘石	63m 87m	堅穴式石室	3	37
49	"	盾冢 古 墳	南河内郡美波町道明寺 四条郷市岡山	円筒埴輪列, 塘石	63m 前方後円	堅穴式石室	○	37
50	"	盾冢 古 墳		円筒埴輪列, 塘石	63m 前方後円	堅穴式石室	○ ○ 1 1	28
51	"	南ヶ谷宮山古墳	羽曳野市鶴ヶ谷	円筒埴輪列, 塘石	63m 30m 前方後円	堅穴式石室	2 2 6	37
52	"	鍋塚 古 墳	富田林市高志	円筒埴輪列 前方後円	63m 30m	粘土層	18 18 18	41
53	"	大師山 古 墳	河内長野市三日市町萩の前	円筒埴輪 前方後円 円筒埴輪 前方後円	85m 85m	中空粘土層	1 1 1	39
54	"	和泉賀金冢古墳	和泉市上代町	円筒・形象埴輪	85m	車軸 粘土層	1	34

番号	所在地名	所 在 地	概要(焼成・焼成等)	主 体 部	石製輪石器形石	主要遺物		文献	
						石	石		
55	大飯村	摩耶山付近	岸和田市久米田 奈良市山陵町舞陵前	円 前方後凹 円筒・形象埴輪列	207m 30m 48m	堅穴式石室 堅穴式石室 粘土桶	○ 1 21 10	3 3 6(うち劍威1) 6(伝・仮製)・石製品 6(傳)・合子2, 石製品	56・57
56	奈良県 奈良市	日葉餅塚古墳	奈良市山陵町舞陵前	円 前方後凹 円筒・形象埴輪列	30m 48m	堅穴式石室 粘土桶	○	6(うち形石製品2, 合子 6(傳)・石製品 6(傳)・合子2, 石製品	56 58
57	"	躑躅冢古墳	奈良市山陵町舞陵前	円 前方後凹 円筒・形象埴輪列	長77m	粘土桶	○	6(うち形石製品 6(傳)・石製品 6(傳)・合子2, 石製品	56
58	"	躑躅冢古墳	奈良市山陵町舞陵前	円 前方後凹 円筒・形象埴輪列	86m	粘土桶	○	6(うち形石製品 6(傳)・石製品 6(傳)・合子2, 石製品	56
59	"	躑躅山古墳	奈良市佐紀町字衛門門戸 奈良市佐紀町	円 前方後凹 円筒・形象埴輪列	95m 35m 103m	堅穴式石室 粘土桶 粘土桶	○ 1 1	6(うち形石製品1 6(傳)・石製品 6(傳)・合子1 6(傳)・石製品	51 47
60	"	佐紀古墳群中	奈良市佐紀町	円 前方後凹 円筒・形象埴輪列	204m	堅穴式石室	○	6(うち形石製品1 6(傳)・石製品 6(傳)・合子1 6(傳)・石製品	49
61	"	富雄丸山古墳	奈良市大和田町	円 前方後凹 円筒・形象埴輪列, 壱石	127m	堅穴式石室	○	6(うち形石製品1 6(傳)・石製品 6(傳)・合子1 6(傳)・石製品	51・54
62	"	富雄丸山付近	奈良市人和町中曾谷村近 生駒市有里 生駒郡安堵町五百井大冢	円 前方後凹 円筒・形象埴輪列	127m	堅穴式石室	○	6(うち形石製品1 6(傳)・石製品 6(傳)・合子1 6(傳)・石製品	49
63	"	竹林寺古墳	奈良市人和町五百井大冢	円 前方後凹 円筒・形象埴輪列	140m	堅穴式石室	○	6(うち形石製品1 6(傳)・石製品 6(傳)・合子1 6(傳)・石製品	50・51
64	"	佐味田宝冢古墳	北葛城郡河合町佐味田 北葛城郡河合町佐味田	円 前方後凹 円筒・形象埴輪列	140m	堅穴式石室	○	6(うち形石製品1 6(傳)・石製品 6(傳)・合子1 6(傳)・石製品	55
65	"	果山古墳	北葛城郡立綱町三吉	円 前方後凹 円筒・形象埴輪列, 壱石	140m	堅穴式石室	○	6(うち形石製品1 6(傳)・石製品 6(傳)・合子1 6(傳)・石製品	46
66	"	新山古墳	北葛城郡立綱町大冢	円 前方後凹 円筒・形象埴輪列	140m	堅穴式石室	○	6(うち形石製品1 6(傳)・石製品 6(傳)・合子1 6(傳)・石製品	48
67	"	鳥ノ山古墳	葛城郡川西村野院	円 前方後凹 円筒・形象埴輪列	140m	堅穴式石室	○	6(うち形石製品1 6(傳)・石製品 6(傳)・合子1 6(傳)・石製品	49
68	"	東大寺山古墳	天理市櫻本町高槻 天理市櫻本町高槻	円 前方後凹 円筒・形象埴輪列, 壱石	140m	堅穴式石室	○	6(うち形石製品1 6(傳)・石製品 6(傳)・合子1 6(傳)・石製品	46
69	"	天上巖古墳	天理市櫻本町高槻	円 前方後凹 円筒・形象埴輪列, 壱石	140m	堅穴式石室	○	6(うち形石製品1 6(傳)・石製品 6(傳)・合子1 6(傳)・石製品	48
70	"	藤山古墳	天理市櫻本町櫻山	円 前方後凹 円筒・形象埴輪列	152m	堅穴式石室 (堅持形石室) 後円部特殊遺構 壹石	○ ○	6(うち形石製品1 6(傳)・石製品 6(傳)・合子1 6(傳)・石製品	46
71	"						○ ○	6(うち形石製品1 6(傳)・石製品 6(傳)・合子1 6(傳)・石製品	48

番号	府県名	出土場所	在地	概要(形状・規模等)	主體部	石製甲輪石軸形石	主要遺物		文献
							石	石製甲輪石軸形石	
72	奈良県	桜井茶臼山古墳	桜井市外山	前方後円 207m 土器並列、葺石	竪穴式石室	1	2	1	鏡20以上、玉杖、琴形石製品
73	"	メスリ山古墳	桜井市高田メスリ	前方後円 230m 円筒埴輪列、葺石	竪穴式石室	○	○	51	鏡、玉杖、琴形石製品
74	"	池の内5号	桜井市池の内長堀	円筒埴輪列、葺石	第1木棺	1	1	51	簡形石製品
75	"	池の内3号	桜井市池の内長堀	円筒埴輪列、葺石	粘土壁	10m	1	45・120	鏡1
76	"	池の内1号	桜井市池の内大福山	円筒埴輪列、葺石	東側木棺直葬	13m	1	45・120	鏡1
77	"	谷 煙 古 墳	宇陀郡御厨町森原	円筒埴輪列、葺石	木棺直葬	25m	2	124	鏡1(偽鑄)、筒形副器1
78	"	新沢213号	橿原市一町坂宿前	円筒埴輪列、葺石	粘土壁	27m	2	52	鏡1
79	"	新沢500号	橿原市一町東常門茶ヶ谷	前方後円 62m 前方後円	後円部 粘土壁	62m	1	51・52	筒形副器5、琴形石製品、石製品
80	"	二見古墳	五条市二見	前方後円	前方部	○	○	107	筒形石製品、舍子
81	"	オサカケ古墳	后奈城郡正城町三吉	円筒埴輪列、葺石	後円部 穹穴式石室	98m	1	123	鏡1以上、鏡製合子2
82	"	伝大和古墳群中	奈良市大和町中嘗合付近	円筒埴輪列、葺石	3以上	1	2	68	筒形石製品
83	和歌山県	伝大和古墳群中	和歌山市	円筒埴輪列、葺石	粘土壁	15m	1	72	鏡3
84	京都府	寺戸大冢古墳	向日市寺戸	前方後円	前方部 粘土壁	98m	1	107・109	鏡1(偽鑄)、鉢輪2
85	"	物集恵美須山古墳	向日市	円筒埴輪列、葺石	3以上	1	2	62	石製禮造品
86	"	林の平古墳	乙訓郡	前方後円	南側 粘土壁	75m	3	108	鏡1
87	"	石不動古墳	橿原郡八幡町八幡	円筒埴輪列、葺石	4	1	66	筒形石棺	
88	"	太古山古墳	橿原郡八幡町男山	円筒埴輪列	85m	4	3	70	筒形石室
89	"	八幡茶臼山古墳	橿原郡八幡町男山	前方後円	85m	3	10	2	鏡5
90	"	西車冢古墳	橿原郡八幡町八幡	円筒埴輪列	85m	3	10	2	鏡5

番号	研究名	出土地名	所 在 地	概要(場形・状態等)	主 体 部	石 刀 剑輪石軸形石	主 要 漢 物	文 献
91	京都府 滋の岡車家古墳	大河内町草内	滋賀郡大河内町草内	前方後円 円筒埴輪列、葺石 円筒形埴輪、葺石	堅穴式石室 粘土櫛	65m 27m	鏡3、合子 鏡2以上 1	17・60 61
92	〃	奥戸古墳	滋賀郡高島町奥戸	前方後円 円筒埴輪列、葺石 円筒形埴輪、葺石	堅穴式石室 粘土櫛	95m 27m	鏡2以上 1	64 69
93	〃	ケンシカ古墳	京都市伏見区深草谷町 京都市右京区屋原百ヶ池	円 円筒埴輪列、葺石 円筒埴輪列	堅穴式石室 粘土櫛	64m 6	鏡8(うち鏡3) 馬頭原1 馬形劍器2	59
94	〃	百々ヶ池古墳	城陽市寺田	円 円筒埴輪列、葺石 円筒埴輪列	木棺直葬 西腰粘土櫛	40×37m 27×23m	鏡1 鏡1(偽製)	64 69
95	〃	尼家古墳	尼家7号 尼家2号 尼山古墳 尼山古墳 尼山古墳 尼山古墳	円 円筒埴輪列、葺石 円筒埴輪列	堅穴式石室 粘土櫛	80m	鏡1 鏡1(偽製)	71 65
96	〃	城陽市寺田	城陽市寺田	前方後円 円筒埴輪列、葺石 円筒埴輪列	堅穴式石室 粘土櫛	60m	鏡1 鏡6(うち鏡3) 馬頭原品	109 107
97	〃	堺	堺	前方後円 円筒埴輪列、葺石 円筒埴輪列	木棺直葬 第4主体	21m	鏡1(偽製),簡形鏡器1 鏡2(偽製)	63 67
98	〃	相来郡山城町平尾	相来郡山城町平尾	円筒埴輪列、葺石 円筒埴輪列	箱形石棺	25m	鏡1(偽製)	73
99	〃	龜山市	龜山市	円筒埴輪列、葺石 円筒埴輪列	粘土櫛	35m	鏡1(偽製)	74
100	〃	船井郡福部町内林	船井郡福部町内林	円筒埴輪列、葺石 円筒埴輪列	粘土櫛 第1主体	35m	鏡1 鏡2	74 75
101	〃	中南峰山町杉谷カツヤ	中南峰山町杉谷カツヤ	円筒埴輪列、葺石 円筒埴輪列	粘土櫛 第2主体	35m	鏡1 鏡2	74 75
102	〃	作り山古墳	作り山古墳	与謝郡加悦町明石 草津市山寺町	木棺直葬 第4主体	21m	鏡1(偽製)	74
103	〃	北谷古墳群11号墳	北谷古墳群11号墳	円筒埴輪列、葺石 円筒埴輪列、葺石	箱形石棺	25m	鏡1(偽製)	74
104	滋賀県 毛刈上古墳	下味古墳	栗太郡栗東町川辺下味	円筒埴輪列、葺石 円筒埴輪列、葺石	粘土櫛	162m	鏡1 鏡2(鉛板) 簡形鏡器2	74 74
105	〃	毛刈上古墳	栗太郡栗東町安養寺の上 栗太郡栗東町安養寺の上 栗太郡栗東町官津 栗太郡栗東町官津	円筒埴輪列、葺石 円筒埴輪列、葺石	粘土櫛 第2主体	162m	鏡1 鏡1 鏡1 鏡1	74 74 74 74
106	〃	毛刈上古墳	毛刈上古墳	前方後円 円筒埴輪列、葺石 円筒埴輪列、葺石	後円部中央堅穴式石室 前方部第1室式石室	162m	鏡1 鏡2(鉛板) 簡形鏡器2	74 74
107	〃	毛刈上古墳	毛刈上古墳	前方後円 円筒埴輪列、葺石 円筒埴輪列、葺石	後円部中央堅穴式石室 前方部第1室式石室	162m	鏡1 鏡2(鉛板) 簡形鏡器2	74 74
108	〃	毛刈上古墳	毛刈上古墳	前方後円 円筒埴輪列、葺石 円筒埴輪列、葺石	前方部第1室式石室	162m	鏡1 鏡2(鉛板) 簡形鏡器2	74 74

番号	府県名	出土場所	在地	概要(城形・規模等)	主體部	石製品	主要遺物		文献
							石棺	劍函等	
109	福井県	小山谷古墳	福井市足羽山	円	舟形石棺	2	1	1	79-110
110	"	越ヶ岡古墳	福井市足羽山	円	30m 冢形石棺	6	1	6, (うち船型1) 木製合子1	79
111	石川県	小田中綱王家古墳	鹿島郡島田町小田中	円	67m 竪穴式石室	5	1	6, (うち船型1) 木製合子1	103
112	富山県	小田谷2号	糸魚川市太田上野町才良	前方後円 前方後円	50m 120m 西側粘土壁	13	44	10 鏡2, 鋒頭車 鏡2, 鋒頭車	82-103
113	三重県	石山古墳						76 琴形石製品, 石製鏡面品	76
114	"	筒野古墳	一志郡朝日町下之庄丸山	前方後円 前方後円	40m 船輪列	2	4	4 鏡4 鏡3 (傳) 舟形石製品2	77-78
115	"	筒野古墳	一志郡朝日町下之庄丸山	円	粘土壁	11	○	鏡3 (傳) 鏡2	77
116	"	タカトリ古墳	一志郡朝日町下之庄丸山	粘土壁	2	2	2 合子2	77 77	
117	"	桑地村所在古墳	一志郡朝日町下之庄丸山	円	粘土壁	2	○	鏡3 合子2	77
118	"	茶臼山古墳	松原市南生町	円	11m 78m 丹波埴輪列, 芦石	70	○	鏡3, 合子1, 石製品2	109
119	"	茶臼山古墳	四日市市	円	82m 丹波埴輪列, 芦石	70	○	鏡3, 合子1, 石製品2	106
120	岐阜県	恵美須古谷	不破郡赤坂町墨ヶ谷	円	木棺	1	3	鏡3 合子1, 球形石製品6	83
121	"	遠舉古谷	不破郡赤坂町矢道	木棺	30m 粘土壁	1	1	鏡2 (うち船型1), 合子1, 球形石製品6	115
122	"	長冢古墳	岐阜市下城田寺板房	木棺	17m 磚	1	1	鏡3 (うち船型2)	84
123	"	飯尾古墳	岐阜市下城田寺板房	円筒-形象埴輪, 芦石	粘土壁	3	○	鏡2, 球形石製品6	104
124	"	長良鬼門寺古墳	岐阜市長良鬼門寺	円筒-形象埴輪, 芦石	前方後円 前方後円	○	1	4 巴形劍匣2, 石製鏡面品	104
125	"	身懸御櫛社古墳	可児郡可児町近見	粘土壁	3	○	鏡2, 球形石製品6	107	
126	"	身懸御櫛社古墳	可児郡可児町近見	粘土壁	1	1	鏡2, 球形石製品6	85	
127	"	身懸御櫛社古墳	可児郡可児町近見	粘土壁	○	○	鏡2, 球形石製品6	85	
128	"	中切古墳	東海市上野町名和	円	46m 粘土壁	○	○	鏡4, 合子, 石製品	107
129	愛知県	蛇山古墳	東海市上野町名和	円					85

番号	府県名	出土地名		所		在地		要標(彌形・規候等)		主體部	石製輪石製品	主要遺物	文獻	
		川	山	大	塚	春日井市出川	円	苔石	45m	粘土櫛	6	鏡4(彷彿)合子	86	
130	愛知県	鳥居	山	松	古	塚	前方後方	78m	竪穴式石室	1	鏡1(彷彿)	石製輪石製品	117	
131	"	鶴	山	塚	古	塚	前方後方	25m	箱形木棺	3	鏡1(彷彿)	鏡2(うち鉄劍2)	117	
132	"	神明社	1号	塚	古	塚	前方後方	83m	粘土櫛	○	鏡1(うち鉄劍2)	鏡2(うち鉄劍1)	87	
133	静岡県	神明社	1号	塚	古	塚	前方後方	116m	竪穴式石室	2	鏡4(うち鉄劍2)	鏡4(うち鉄劍2)	88	
134	"	筑	山	塚	古	塚	前方後方	116m	粘土櫛		鏡1(2, 長持形石製品1)	巴形器3	1	
135	"	松	山	塚	古	塚	円筒埴輪列	葺石					97	
136	"	上原	山	古	塚	塚	前方後方	10m	竪穴式石室	1	鏡2, 防護車2,	鏡2, 防護車2, 不製品	90	
137	"	三池	山	古	塚	塚	前方後方	65m	竪穴式石室	1	鏡2(うち鉄劍1)	鏡2(うち鉄劍1)	91	
138	"	東	山	坂	古	塚	前方後方	58m	粘土床	1	零形石製品3	零形石製品3	89	
139	長野県	川柳	山	将軍	古	塚	前方後方	91m	竪穴式石室	1	鏡2(彷彿)	鏡2(彷彿)	92	
140	"	御塚	山	塚	古	塚	前方後方	23m	箱式石棺	2	鏡2(彷彿)	鏡2(彷彿)	93	
141	山梨県	越子	山	塚	古	塚	前方後方	170m	竪穴式石室	6	鏡5(うち鉄劍2)	鏡5(うち鉄劍2)	95	
142	"	丸山	山	塚	古	塚	円筒埴輪列	葺石	粘土床	1	石製品	石製品	96	
143	埼玉県	鶴野神社境内	山	古	塚	東八代郡中道町下曾根山本 北足立郡福川町田谷裏野堂	円筒埴輪列	67cm	竪穴式石室	6	鏡1	鏡1, 防護車5	1, 巴形石製品2	111
144	"	三平稻荷	山	1号	古	塚	円筒埴輪列	葺石	粘土床	○			114	
145	"	群馬県	青木	山	古	塚	円筒埴輪列	22m	粘土床	1			97	
146	群馬県	青木	山	1号	古	塚	円筒埴輪列	25m	粘土櫛	1			97	

番号	治県名	出土地名	所	在	地	概要(鏡形・模様等)	主	要	瀬	物	文 獻	石製輪石器形石
							石	製輪石器形石	石	製輪石器形石	石	製輪石器形石
147	群馬県	白石郡荷山古墳	藤岡市白石			前方後円	93m 巴爾(港)形墓輪, 嵌石	2				98
148	"	茶臼山古墳	富岡市南後籠北山			前方後円	35m 木炭標 (?)					99
149	"	長野県天王山古墳 (北山)	高崎市下生野町後畠數敷			前方後円	66m 粘土標	2				107
150	"	新田郡荷山古墳	前橋市上郷井岸新田			前方後円	粘土標	1				
151	"	矢場塗飾山古墳	山田郡矢場川村矢場			前方後円	粘土標	2				
152	枥木県	上待塚古墳	那須郡鳩原上村鶴神上待塚			前方後円	114m 凹面形墓輪, 嵌石	1				121
153	千葉県	七福古墳	千葉市生糸町北生糸神ノ台			前方後円	60m 木板	1				118
154	茨城県	常陸飯塚古墳	東茨城郡猿島町日下口ケ原			前方後円	105m 粘土標	6				100
155	"	真崎古墳群	那珂郡東海村松貞崎 中: 那珂郡東海村松貞崎 伊賀郡大槻町堂山東			前方後円	○	○				111
156	福島県	大根古墳群	伊賀郡大槻町堂山東			前方後円	○	2				101
157	宮城県	合町古墳群	伊賀郡大槻町金山町			前方後円	106号墳	1				102
158	山形県	守塁2号墳	山形市榛山道下			前方後円	巴, 木柱列					

古墳以外出土地

番号	府県名	出土地名	所 在 地	概 輦	主 要 遺 物	文 献	石 刻 事 務 石 彫 形 石	
							石 刻 事 勿 石 彫 形 石	主 要 遺 物
159	福岡県	神の島 5号遺跡	宗像郡玄海町	祭社遺跡	"	4	○	1
160	"	16号	"	"	"	5	鏡4(仿製) 石製鏡造品	
161	"	17号	"	"	"	6	鏡2(仿製)	
162	"	18号	"	"	"	6	鏡4(仿製)	
163	"	19号	"	"	"	6	鏡4(仿製)	
164	島根県	後原	京都市東山陽御町	玉作遺跡	"	11		
165	奈良県	平城	京都市内	奈良市佐佐記君田	"			
166	滋賀県	守山	守山市玉作遺跡	坂井郡坂井町河和田	"	80	玉作遺跡	
167	石川県	片山	片山津玉作遺跡	加賀郡片山津本町	"	81	玉作遺跡	
168	"	或	山	加賀郡片山津町	"	116	玉作遺跡	
169	長野県	鳥羽山	鳥羽山洞穴遺跡	金沢市高島町	"	115	祭祀遺跡	
170	"	一	六	小県郡丸子町櫛越	"	94	鹿角製坊領事, 球柱形石	

番号	府県名	出土地名	所 在 地	概 輦	主 要 遺 物	文 献	石 刻 事 勉 石 彫 形 石	
							石 刻 事 勉 石 彫 形 石	主 要 遺 物
奈良県	諸岐神社境内古墳	北葛城郡五條町三吉	前方後円	70m	堅穴式石室	○	孝住形石製品	
京都府	烏屋居	乙訓郡人山町日明寺烏屋町	墓輪列			6	鏡3, 巴形銅器	
山梨県	大丸山古墳	大丸山	前方後円	70m	堅穴式石室	1	鏡1(鉄鏡)	

文 献

1. 「佐賀県文化財調査報告」第2輯『肥前玉島村谷口の古墳』梅原宋治（昭和28年）
2. 「古代の日本」3 九州編（昭和45年）
3. 「熊本県大塚古墳調査概要」原口長之
4. 「神ノ島I 宗像大社神宮祭祀遺跡 昭和44年度調査概報」宗像大社復興期成会（昭和45年）
5. 「神ノ島」宗像神社復興期成会編（昭和33年）
6. 「続沖ノ島」（昭和36年）
7. 「大分県文化財調査報告書」第4輯「七ツ森古墳」賀川光夫（昭和31年）
8. 「大分県文化財調査報告書」第13輯「野間古墳群調査報告」賀川光夫・小田富士雄（昭和42年）
9. 「大分県の考古学」賀川光夫（昭和46年）
10. 山高郷土史研究会考古学研究報告書 台覽記念号 『長門国厚狭郡厚狭町西下津古墳調査報告』小川五郎（昭和2年）
11. 「京都帝国大学文学部考古学研究報告」第10冊「出雲上代玉作遺物の研究」（昭和2年）
『日本考古学年報』17（昭和39年度）
12. 佐々木古代文化研究室記録2『馬山古墳群』（昭和37年）
『経藏文化財要覧』3 文化財保護委員会（昭和37年）
13. 「鳥取県史跡勝地調査報告」第2冊
『鳥古市史』（昭和31年）
14. 合歡考古館研究報告 第1冊『金蔵山古墳』（昭和34年）
15. 「月の輪古墳」月の輪古墳刊行会（昭和35年）
16. 「岡山市史」古代編（昭和37年）
17. 「日本古文化研究所報告」第9冊
18. 岡山文庫4『岡山の古墳』鎌木義昌（昭和39年）
19. 「高松市茶臼山古墳調査概報」（プリント）
20. 京都帝国大学文学部考古学研究報告 第12冊『石清尾山石塚の研究』（昭和8年）
21. 香川県史蹟名勝天然記念物調査報告 第5輯『岩崎山古墳』
22. 香川県史蹟名勝天然記念物調査報告 第15輯『快天山古墳発掘調査報告』松浦正一 和田正夫（昭和26年）
23. 「古代学研究」52（昭和43年）
24. 日本古墳文化資料総観 第3分冊『主要遺物件名表』蒼藤忠編（昭和31年）
25. 徳島県文化財調査報告書 第5集別刷『石井』（昭和37年）
『考古学雑誌』10巻7号「阿波国屋河内の古墳」（大正9年）
26. 「石井」「利包及び内谷組合式石棺の研究」三木文雄 昭和37年
27. 「兵庫県史蹟名勝天然記念物調査報告」第2冊（大正14年）
28. 「日本古文化研究所報告」第4冊（昭和12年）
29. 「城の山・池田古墳」和田山町教育委員会（昭和47年）
30. 「兵庫県史蹟名勝天然記念物調査報告」第5冊「会下山二本松古墳」辰馬悦藏他

65. 京都府史蹟名勝天然記念物調査報告 第3冊『朝倉村平尾の古墳』（大正11年）
66. 「考古学雑誌」6巻9号「山城郡高野町白山古墳と其発掘物」（大正5年）
67. 京都府史蹟名勝天然記念物調査報告 第14冊『桑飼村蛭子山・作り山古墳の調査（下）』（昭和8年）
68. 「史林」54巻6号「京都向日丘陵の前期古墳の調査」
69. 京都府史蹟名勝天然記念物調査報告 第2冊『川間村岡の古墳』（大正9年）
70. „ 第1冊『八幡町西車塚古墳』（大正8年）
71. 「先史学研究」4「西山第2・5号墳発掘調査概報」（昭和37年）
72. 京都府史蹟名勝天然記念物調査報告 第1冊『物集女の群集墳』（大正8年）
„ 第4冊『向日町長野の墳墓』（大正12年）
73. 「北谷古墳群発掘調査概報」
74. 「滋賀県史蹟調査報告」第12冊（昭和36年）
75. 「滋賀県史蹟調査報告」第7冊『安土村瓢箪山古墳』（昭和13年）
76. 「日本考古学年報」3「三重県名賀郡石山古墳」（昭和30年）
『日本考古学年報』8回総会研究発表要旨『三重県石山古墳調査略報』（昭和26年）
77. 「三重考古図録」（昭和29年）
78. 「考古学雑誌」14巻3号「伊勢一志郡豈地村の二古式墳」（大正12年）
79. 「足羽山の古墳」（昭和35年）
80. 「日本考古学年報」17（昭和39年度）
81. 「加賀片山津玉造遺跡の研究」（昭和38年）
82. 「富山県史」
『越中史』27「桜谷古墳群出土の新史料」
『富山県史蹟調査報告』13（昭和14年）
83. 「考古学雑誌」19巻6・7・9号「岐阜県不破郡吉森村字欠道長塚古墳」（昭和4年）
84. 岐阜市文化財調査報告書 第1輯『岐阜市長良龍門寺古墳』（昭和37年）
85. 「愛知県史蹟調査報告」第8輯
86. 「春日井市史」（昭和40年）
87. 「静岡県史」第1巻（昭和47年）
88. 「松林山古墳発掘調査報告」（昭和14年）
89. 「吉原市の古墳」（昭和33年）
90. 「考古学雑誌」45巻3号「遠江国磐田市藤上原古墳出土石剣」（昭和34年）
91. 「三池平古墳」（昭和36年）
92. 「川柳村将军塚の研究」（昭和18年）
93. 「考古学雑誌」45巻1号「長野県須坂市鎧冢古墳の調査」（昭和34年）
94. 「考古学雑誌」52巻3号「東信濃島羽山洞穴における古代祭祀遺跡」（昭和41年）
95. 「文部省史蹟調査報告」第5冊
96. 「考古学雑誌」41巻3号「武藏国川田谷熊野神社境内所在の古墳」（昭和31年）
97. 「考古学雑誌」1巻8号「彦根島王御塚と称する古墳及発掘品」（明治44年）
98. 群馬県史蹟名勝天然記念物調査報告 第3輯『多野郡平井村白石稻荷山古墳』（昭和11年）。

99. 「東京人類学会雑誌」16巻178号「車輪石の一種」（明治34年）
　　〃 20巻233号「上野武藏の古墳及び先史遺跡」（明治38年）
100. 国学院大学考古学研究報告 第1冊「常陸篇」（昭和31年）
101. 「歴史」第7輯（東北史学会）「宮城県伊具郡金山町台町古墳群調査概報」（昭和29年）
102. 「考古学雑誌」14巻13号「藤山古墳実査報告」（大正13年）
103. 遠藤元男博士還暦日本古代史論叢「周辺地域における古墳時代形成期の様相」吉岡康輔（昭和45年）
104. 「岐阜県報告」
105. 「郷土研究資料」第2号「稻葉郡古墳調査」小川栄一
106. 「岐阜県報告」
107. 日本考古学大系 第1巻「漢式編」高橋健白 後藤守一（大正15年）
108. 京都大学文学部博物館「考古学資料目録」第1部（昭和35年）
109. 日本古墳文化資料館覽 第3分冊「主要遺物件名表」森藤忠（昭和31年）
110. 福井県史蹟勝跡調査報告 第1冊「西谷山上の古墳」
111. 「日本の考古学」V 古墳時代上（昭和41年）
112. 「東京国立博物館収蔵品目録〔考古・民俗・法隆寺献納宝物〕」（昭和31年）
113. 「潮江内海研究」8号（昭和34年）
114. 「考古学研究」18巻4号「関東地方の方形周溝墓」金井塙良一（昭和47年）
115. 「考古学ジャーナル」1972年10月号
116. 「古代玉作の研究」寺村光晴 他（昭和41年）
117. 「考古学雑誌」19巻9号「尾張高蔵寺付近発見の遺跡遺物」小栗鉄太郎（昭和4年）
118. 「日本考古学年報」II 昭和33年度
119. 「高槻市史」第6巻考古編 高槻市史編さん委員会（昭和46年）
120. 奈良県史蹟名勝天然記念物調査報告第28冊「磐余池の内古墳群」奈良県教育委員会（昭和48年）
121. 「那須八幡塚」三木文雄（昭和32年）
122. 東京国立博物館紀要 第8号 昭和47年度「琴柱形石製品考」龜井正道（昭和48年）
123. 考古学雑誌第28巻6号「琴柱形石製品の新例」鳥本一（昭和13年）
124. 「谷塙古墳」奈良県宇陀郡藤原町教育委員会（昭和49年）

考察Ⅱ 大師山古墳出土石鉈の材質とその製法

亀井清

1. 石鉈の材質について

古墳時代の石製腕飾類、すなわち鍔形石・車輪石および石鉈などの石質については、多くの報告書には殆んど碧玉製と記載されており、ただ滑石を材料とした場合に区別して、その材質が明記されている。しかし、これらの石製腕飾類は、明らかにその材料が碧玉ではなく緑色凝灰岩である場合が多い。

石製腕飾類の石質について高橋健白は、「質は多少分解した碧玉岩から出来て居る。」「車輪石と鍔形石とは、石鉈と同じく大概碧玉岩で作られて……」と記述し、また大正10年9月の「考古学上より觀たる耶馬台國」⁽¹⁾と題する講演では、「さて実用石製品は大概碧玉岩の分解したやうな材料で出来て居るが……」と述べ、緑色凝灰岩を碧玉の変質したものと解している。

寺村光晴は、「碧玉は主として弥生、古墳時代の管玉・勾玉および石鉈・車輪石・鍔形石などの製作に用いられている。しかしこれらの遺物は必ずしも真正の碧玉ではなく、緑色を呈し、碧玉類似のものであれば、凝灰質岩であれ、珪質質岩であれ、区別することなく碧玉と同様に使用されている。したがって、ここでは真正の碧玉のみでなく碧玉類似岩についても一応碧玉として取扱うこととした。」「玉類・石製品に使用された石材は碧玉質石材（緑色凝灰質珪質質岩）が主であるが……」と述べ、石製腕飾類の材料としては、碧玉と緑色凝灰岩とを区別しながらも碧玉類似岩という名称を用いている。

下出積与は、加賀片山津玉造跡出土の石製品および未完成について、「発見された遺物は凝灰質岩製を中心とする」と述べ、さらに註記に、「石製品の原石は一見、碧玉岩に酷似しているので、從来の考古学上の見地から碧玉製品としたが、専門家の調査によって全部凝灰質岩に属することを知った。しかし古代人は恐らく碧玉製品と同様に考えていたであろうと思う。」とされている。

大場磐雄は、同じく片山津玉作遺跡出土の石製品について、「ここでの遺跡では管玉と同時に石製品の一部が製作されたことは、ほん疑いがない。なおそれ等の石材が肉眼では一見碧玉製品の中に含まれることは論を俟たない。ここで注意すべきことは、從米碧玉質石製品といわれたものの中に、緑色凝灰質岩製が相当含まれていることである。故にこの處從来発見の碧玉製品の石材を再検討して、碧玉か凝灰岩かの明瞭な区別を立てる必要を痛感するものである。」と述べ石製腕飾類の材料についての明確な区別の必要性を強調している。

さらに柏野義夫は、同じく玉造跡出土の原石の特徴と、玉造跡付近の大聖寺川上流に分布している凝灰質岩との特徴を比較考察して、その著しい類似性を示すことから原材料の採

取地を推定している。

物を対象とする考古学においては、その物の材質を明確にする必要があり、材質を明確にすることから新しい知見が得られ、新しい解釈が生まれる。そこで本稿では石剣の主な材料である碧玉と緑色凝灰岩との区別を説明し、河内長野市大師山古墳および他の二、三の古墳より出土した石剣の比重測定結果および観察結果について記述する。

2. 碧玉と緑色凝灰岩

碧玉は玉髓・瑪瑙などと同じく、その主成分は珪酸 (SiO_2) であり、玉髓は石英の微小結晶が網目状に集合し、超微鏡的な極微の孔のある珪酸の緻密な集合体で、不純物の種類および量などによって、その色と組織が異っている。玉髓は色がほぼ均質で、瑪瑙は色と透明度の異った綺状あるいは雲状の層をなし、不透明な暗色または黒色のものはチャートあるいはフリントと呼ばれている。

碧玉は主に酸化鉄からなる不純物を20%程度まで含み、不純物の種類によって、赤・黄・緑・青等の様々な色を呈する緻密な玉髓である。温泉や上昇水中からの沈澱物が岩石の割目を充填したもので、比重は2.55～2.64で、断口は貝殻状を呈する。

凝灰岩は直径4mm以下の火山灰が固結した火碎岩を総称し、この凝灰岩が変質して緑色となった岩石を緑色凝灰岩（グリーンタフ）と呼んでいる。比重は碧玉と比較するとかなり軽く、明らかに区別できるが、粗鬆のもの、浮石の小片の混在したものなどがあり、また固結の度合の差により、かなり比重の差が大きい。

3. 石剣の比重測定

上記のように碧玉と緑色凝灰岩は、その成因が異なり、一見して区別されるが、もっとも簡便でしかも試料を損傷しないで、明確にその区別をするためには比重測定による方法がよい。

ここに河内長野市大師山古墳出土上の石剣および他の二、三の古墳出土の石剣の破片の比重の測定値を示し、さらに比較のため、福井県および福島県の新生界第三系の緑色凝灰岩ならびに栃木県鹿沼市大谷の軽石凝灰岩の比重の測定値を示す。

明らかに肉眼で凝灰岩製と判定される石剣およびその破片の比重測定値1.27～2.76は、碧玉の比重2.55～2.64と比較するとかなり小さく、比重を測定することによって碧玉と明らかに区別することができる。

次頁の表に示した凝灰岩の比重は、1.18～2.25で比重の測定値のバラツキはかなり大きい。これは先述のように凝灰岩は火山噴出物が固結されて生成したものであるため、粗鬆なもの含有量の多少により、また固結の程度の差によって比重の値の幅が大きいためである。なおここにあげた表に示す測定値は見掛けの比重であり真比重ではないので、その測定値のバラツキは当然大きくなってしまい、一方碧玉の比重は2.55～2.64でその幅はかなりせまい。

4. 石剣の製作工程

谷畠古墳の遺物の観察および形状の実測によって、その製作工程をある程度推察し得たの

第8表 古墳出土石剣の比重測定結果

出 土 地	比 重	出 土 地	比 重	出 土 地	比 重
大師山 № 14	1.73	大師山 № 45	1.33	城陽町尼塚	1.58
" № 16	1.84	" № 46	1.30	"	1.96
" № 34	2.07	" № 59	1.49	奈良県橿山	1.68
" № 35	1.25	" № 60	1.37	"	2.26
" № 36	1.42	" № 62	1.27	"	1.94
" № 39	1.97	" № 64	1.46	"	1.69
" № 40	1.37	" № 67	1.29		
" № 42	1.42	" № 68	1.19		

試 料 番 号	比 重	重 さ g	体 積 cm ³
奈良県宇陀郡 № 1	1.71	50.1	29.3
谷 烟 古 墓 № 2	1.62	26.3	16.3

第9表 凝灰岩の比重測定値

産 地	比 重	産 地	比 重	産 地	比 重
福井県	2.25	福井県	2.30	福島県	1.82
"	1.18	"	1.32	橋木県	1.53

で、実験的に証明するため準備を進めたが、石剣の製作工程については、中口裕が加賀片山津玉造遺跡出土の未完成等の観察および実測等からその製作工程を推察し、なおその上に実験的に証明されていることを知り、実験的研究は中止したが、予備的な実験によっても中口裕の実験的研究に裏付けられた石剣製作工程の正しさが確認された。

中口裕による石剣の製作工程はつぎのごとくである。

第1工程 材料の荒割

第2工程 形削

第3工程 側面打製

第4工程 表裏二面を研磨

第5工程 穿孔……ロクロに未完成を接着し、管状穿孔具によって穿孔を行なうが、材料の上部中心に木製円板を接着して、穿孔具のブレを防止する。

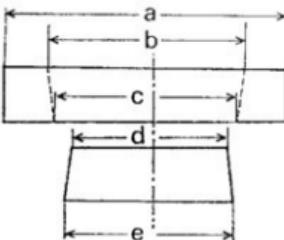
第6工程仕上

中口裕の石剣の実験的製作法と同様の方法で、耐火煉瓦を材料として穿孔実験を行った場合の代表例を次に示す。

第107表 穿孔試験による試料の寸法

	直 径 (mm)	直 径 (mm)
a	60	60
b	46.5	45.5
c	43	45
d	35	35
e	38	38

第107図 穿孔試験による試料寸法模式図



(穿孔工具の直径 内径39mm 外径41mm)

穿孔開始面側は下面より孔の径がやや大きくなり、穿孔によってできる円板状のものは、上面の径が下面に比べ小さくなっている。これは穿孔の際に円筒状穿孔具と穿孔面との間隙に研磨材料および研磨によって生じた粉末が存在するため、上面側の方が下面側より長く研磨されるためである。

穿孔後円板状のものの外周部および試料の穿孔された環状のものの内面には管状工具の擦痕が明瞭に認められる。

試料No.2は破碎されているため、内外周が同心円をなしているかどうかは明確ではないが、内面には僅かに斜行した管状穿孔具によると判断される擦痕が認められ、上面の内径53.4～53.6mm、下面の内径55～56mmで下面の内径の方がやや大きい。

試料No.1では内面の下側が外方に抜けられ平滑に研磨されているが、内面上部には穿孔工具による擦痕と判断される線条が認められ、この擦痕が認められる部分では試料上面より下方の直径の方がやや大きくなっている。

試料No.1およびNo.2とも穿孔の際は試料の下面側より穿孔されたものと判断される。

試料No.1の精密な形状の測定結果では、内外周は同心円よりなっており、これは被加工物が回転台に固定され、穿孔工具も固定して製作されたものであることを示しており、中口裕による石剣製作工程の第5工程の正しさを立証している。

- 〔註〕
- 高橋健自「考古学」(大正2年)
 - 高橋健自「考古学上より観たる耶馬台田」『日本考古学選集』9 高橋健自 上 P.248 (昭和46年)
 - 寺村光晴「玉」「新版考古学講座」9 特論中 嶋山閣 P.288 (昭和46年)
 - 寺村光晴「玉生産」「日本の考古学」V 古墳時代 P.102 (昭和41年)
 - 下出横与『加賀片山津玉造遺跡の研究』加賀市教育委員会 P.160 (昭和38年)

- 大場磐雄 同上 P.144
- 柏野義夫 同上 P.108
- 中口 裕 同上 P. 99

〔註記〕

本稿は河内長野市大師山古墳と奈良県宇陀郡谷畠古墳出土の石剣についての材質調査を依頼されたものの報告であり、既に『谷畠古墳』(昭和49年)に発表したが、共通する点が多いのでここにも収録した。

考察Ⅲ 畿内第V様式の編年細分と大師山遺跡出土土器の占める位置

森 岡 秀 人

1. はじめに	和泉の一括資料	大和の一括資料
2. 畿内における後期弥生式土器細分の諸作業と最近の動向	山城の一括資料	畿内第V様式の編年細分と地域性
3. 畿内第V様式細別に関する二・三の方論	後期前半I期	後期前半II期
4. 西ノ辻諸型式の再検討	後期後半I期	後期後半II期
5. 各地域の一括資料とその前後・併行關係	後期後半III期	小結
6. 大師山遺跡出土土器の様相と占める位置		
7. 結語		
撰序の一括資料		
河内の一括資料		

1. はじめに

第3章第5節で詳述されているように、本遺跡からは多数の弥生式土器が出土しており、その量は遺構の実体に比して夥しい。このうち図示することのできたものは総数345点を数え、時期的には大部分が畿内第V様式に属している。これらの土器は、報告されている遺構の在り方からみて漠然と後期の全般に比定し得るものとは考え難く、むしろ集落内で短期間使用され、その後遺棄された大量の土器と解する方がより事実に即している。また、これらの資料の一部には、型式的にみて古墳時代前期前半に属する土器（いわゆる古式土器）に近い形態をとることが含まれているが、ここでは畿内全域の高地性集落が古墳時代までは残らず、少なくとも弥生時代の最末期、実年代で言うと3世紀中葉以降のあまり時を経ない一時点には消滅しているであろうという筆者の年代観に基づき、出土土器のすべてを弥生式土器として扱いたい。

したがって、報告編第3章第5節でまとめられている、本遺跡出土弥生式土器の時期的把握との間に少なからず矛盾をひき起こす可能性は否めないけれど、各所の出土状態からみて層位学的には捉え難いこと、南河内最奥部という辺境地における高地性集落經營の時間的問題なども念頭において、本遺跡出土土器を概ね同時期の所産とみなす立場から論を発展させようと思う。

本稿では、以上あげた二、三のことを前提とし、報告編第3章第5節での型式分類・土器観察の諸結果を踏まえた上で、畿内後期弥生式土器の編年細分作業と関連して大師山遺跡出土土器の占める位置を検討・考察してみたい。

2. 藏内における後期弥生式土器細分の諸作業と最近の動向

言うまでもなく、弥生式土器の中で最も多くの資料を提供しているのが後期の土器であり、
藏内では第V様式がこれに相当する。この時期の土器は、プロポーションはもとより文様や成形・調整技法が単調であり、一般的には齊一性に富んだものという見方から、從来より地域性の研究が遅れてきたが、その細分に関しては、古墳出現の前代、階級関係の伸張時期、邪馬台國の時代というう観点から、⁽¹⁵⁾ 時をみてはその機会を得ており、第I・第III様式とはまた異なった視座からその作業が行なわれてきた。しかし、その必要性にも増して後期という短期間の土器変遷を扱う限界から、⁽¹⁶⁾ その試みは必ずしも容易であるとは言い難いのが現状であり、その足跡には多くの苦心が払われている。

ここでは、それを藏内に限って研究抄史として概観してみることにしよう。

かつて近畿地方における後期の弥生式土器は、前期の遠賀川式、中期の梅日式に対して、「穗横式」の名でもって呼ばれていた。1935年当時の大阪府豊中市穂積遺跡の出土資料を土器様式とした呼称であるが、⁽¹⁷⁾ 藏内の後期弥生式土器全般を指すものとして広く使用された。

1943年の『大和唐古弥生式遺跡の研究』において、小林行雄氏はこれを唐古第V様式と呼び慣らし、時を前後して大阪府西ノ辻遺跡の調査・研究で、同遺跡の第V様式が発掘地点によってかなり異なった様相をもつという重要な事実に着目し、今日慣用されているごとく、西ノ辻I地点式・E地点式・D地点（上脣）式の順に後期弥生式土器の変遷過程を考えた。⁽¹⁸⁾

1962年、坪井清足氏は上記した3型式区分に後続する唐古第V様式第1亜式を加えることによって、⁽¹⁹⁾ 藏内第V様式を都合4段階に細分した。その頃、藏内第V様式に直結する古式土師器の研究も着々と進められ、田中琢氏によって庄内式が新たに提唱され、原口正三氏はこれをさらに純粹な発掘資料でもって捉えることに成功している。⁽²⁰⁾

1968年、佐原真氏は坪井立案の4型式編年をほぼ承認し、さらに唐古45号（下層）式の位置づけを行ない、それに準拠して第V様式内での新古関係をある程度追究するとともに資料不足の現状を卒直に指摘して、その「変遷をくわしくたどるためにには、なお、将来の研究をまたなければならない。」と結んだ。⁽²¹⁾

その後、近年検出例の増加した3世紀に比定される高地性集落について論じた石野博信氏は、その展開の基礎前提として土器様式と実年代との考定を行なった。氏は藏内第V様式細分の不十分さをはっきり認めつつも、「藏内の弥生時代後期の高地性集落から出土する土器が同一時期とは認めがたく、ある年代幅をもっているらしいところ」に注目して、後期高地性遺跡の「実年代は、A.D.248年頃の卑弥呼没年から267年の巻与による晉への遣使の間の18年間に求める方がより適切」とし、その時期を「卑弥呼治世後半のもの（後期2）と卑弥呼治世後巻与確立にいたる時期（後期3）の二つに分けうるもの」と考えている。

この見解は、その前に（後期1）、後に（後期4）という1小期をおいて弥生後期を4分し

た点で、前述した坪井清足氏の編年観と何ら変わることはないが、坪井氏のそれが小林氏以来の土器型式学によったものに対し、石野氏のそれは弥生後期の高地性集落のもつ歴史的必然性を文献（中国史書）上の史実に符合させ、その意義を見出した点においてかなり理論的であると言えよう。すなわち、両者の細分案は、方法論の上でも、また実際の土器型式においても必ずしも一致しておらず、比較・検討すべき材料を提供していない石野案の弱さは否めない。また、後述される結論とも関連して、「唐古45号窓穴上層式の土器は、高地性遺跡から出土せず、平地に多いという事実」と後期4（志与治世の期間）を比較的安定した時期と認めた見解に対しては少なからぬ疑義を残す。

最近、都出比呂志氏はこうした状況下、「いま最も必要なことは、小地域単位の編年を細かく進めつつ、地域編年相互の横の関係を覚えることである」と強調し、第V様式のもつ地域性を考慮に入れて、中・南河内地域における土器変遷について図式を示した。⁽¹⁸⁾ それは第V様式の古相についてほほ小林説を踏襲するものであるが、この地域の新しい相の土器になって顕著にみられる土器成形原理（氏の言う「連續ラセンタキ手法」など）に着目して、形態のみならず製作技法の側面からも細分されうる可能性を説いている点は高く評価されねばならない。

それによると、中・南河内地域における弥生式土器から土師器への移行過程は、（西ノ辻I式）→（西ノ辻E〔D〕式）→（上六刀寺式）→（北鳥池下層式）→（上田町1式）→（上田町2式）→（小若江北式）となり、庄内式をより広義に捉えて、上田町1・2両型式を含めて考え、これを畿内第6様式と呼んで弥生式土器の範疇で理解している点が注目される。また、畿内第V様式を大別する場合は、西ノ辻I式を（古）に、西ノ辻E〔D〕式・上六刀寺式を（中）に、北鳥池下層式を（新）の段階にそれぞれ比定して、他地域との併行関係を比較するための指標としている。氏の編年試案はまだ完成された域に達したものではないけれど、分析の対象とした中・南河内地域が後期特有の叩き目技法の技術革新の点で他地域よりもたえずリーダーシップを持っていたという見通しが当を得たものであるならば、今後畿内全域の編年を組立てて其上で有効な材料となるだろう。とりわけ、南河内の地域に位置する大師山遺跡出土資料の相対時期を見究める際には最も依拠すべき編年示準と考えられる。

以上、第V様式土器細分研究の歩みを概観してきたが、研究の進展状況と各研究者の見解の相違を集約すると、第108図のとおりになる。

都出論文発表後に至っての畿内第V様式細分に関する作業・試論は、寡聞にして知らないが、その実情はさほど変わっていないように思われる。それは、後期弥生式土器内での先後関係把握に際して、今だに西ノ辻の諸式を引用している各地の調査報告書の記述をみれば明らかであり、しいて後期の中での相対位置を明確にしないむきからも容易に推察することができる。

しかし、資料の欠如が原因しているとはいは、畿内在住の多くの研究者が暗中模索して第V

唐古以前 小林行雄 小林行雄 坪井清足 佐原 真 石野博信 都出比呂志
 (1935) (1943) (1958) (1962) (1968) (1973) (1974)

中 期	梯 目 式	唐 古 第 IV 様 式	N 西 ノ 辻 地 点 式	N 西 ノ 辻 地 点 式	N 西 ノ 辻 地 点 式	中期 4		西 N 式 辻
						後	期	
	A.D.200		I 西 ノ 辻 地 点 式	I 西 ノ 辻 地 点 式	I 西 ノ 辻 地 点 式			西 I 式 辻
後 期		穗 積 式	唐 古 第 V 様 式	西 E ノ 辻 地 点 式	西 E ノ 辻 地 点 式	西 E ノ 辻 地 点 式	古	西 E (D) ノ 辻
	A.D.300		唐 古 第 VI 亞 様 式	西 D ノ 辻 地 点 式	西 D ノ 辻 地 点 式	西 D ノ 辻 地 点 式	新	萬 上 六 寺 式
古 墳 時 代		土 師 器	土 師 器	土 師 器	小 北 若 江 式	庄 内 式	鐵 I 式 町	小 北 若 江 式
						布 留 式	鐵 II 式 町	布 留 式

第 108 図 錫内後期弥生式土器編年表分の歩み

様式細分について懸念に努力しているであろうことは想像に難くなく、筆者もまたその例にもれない。いざれにせよ、畿内第V様式の編年細分は、近畿地方における弥生後期のただならぬ動向を究明するための不可欠な研究課題であると認識され、その強い要望にもかかわらず未だ解決されぬまま現在に至っているのである。

3. 猥内第V様式細別に関する二、三の方法論

土器編年に最も効力を發揮する方法が層位学的発掘であることは多言を要すまでもない。最近の低湿地・泥沼地の遺跡の調査では、弥生後期の単純包含層を便宜的に分層発掘し、その変遷の駆別を試みている。⁽¹⁴⁾おそらく、こうした調査例が増加・集積されることによって初めて現段階での型式編年の妥当性が検討され、是正され、そして再評価がなされるのであろう。しかし、現状ではそうした実績も未だ報告されておらず、検討不充分であり、やはり旧来の型式学的研究にたよらざるを得ない面を多分にもっている。

こうした意味では、住居址の切合いなど遺構の重複関係も土器を細分するためには大切な視点である。かつて今里幾次氏は、播磨の大中遺跡を例示して、そこで検出された第I土器群とその下部弥生住居址、第II土器群とその下層の第5号弥生住居址、第III土器群とその下層弥生住居址、第7号住居址におけるA・B・C3住居の重複関係などに注目し、後期弥生式土器細分の可能性を脱き、既刊報告書の努力の足りなさを批判している。⁽¹⁵⁾住居の明確な切合い関係が把握される例として大阪府の和泉市觀音寺山遺跡や南河内郡河南町東山遺跡などもあげられるが、東山ではそういう観点からの土器の細分が行なわれていると聞く。現状では最も有効な細分の方法としてその成果が期待されよう。

上述したような方法によって一遺跡内での土器細分が現実としてできない時、いきおいクローズアップされるのが各地で検出される一括資料とその相互比較である。貯蔵穴に収納された土器群、住居址床面に廻棄された土器群、溝底に投棄された土器群等々、その在り方は多様であるが、いざれも土器廻絶の同時性が認められる点で重要な編年資料と言える。ただし、唐古45号堅穴下層の土器群をみて明らかのように、貯蔵穴風の土壤で検出される一括資料は器種に乏しく、とりわけ壺が偏在する傾向があり、また、溝内堆積層中の土器群は流動の可能性も考慮しなければならないので、慎重に扱う必要がある。その点、住居址床面の残存土器は、壺・甕・鉢・高杯などその日常性がゆえにセッタ關係で捉えられることが多く、一器種では限定されがちな地域編年相互の併行關係を見究める上でまさに重要視しなければならない。しかし、その反面、土壤や溝内堆積層の一括資料では分層の余地を残すものもままあり、短時間内での型式変化を層位的に検証することも可能である。これは、ある土壤の上層出土土器とある土壤の下層出土土器とが型式学的に同一であることを根拠に、それを鍵層として一遺跡内での土器細分をかなり円滑に進めることができ、古くは唐古遺跡で、最近では奈良県經向遺跡の調査・研究で大いに成果をあげている。

畿内第V様式は過去において、かなり齊一性の強い器形として認識され、それはとりも直さず政治的統合のみられた畿内弥生後期の具体相と考えられてきた。しかし、その解釈の進んだ今日では、齊一性の陰にひそむ根強い地域性も看取されており、從来のごとく唐古や西ノ辻の諸型式のみに依存した形での編年観では、細部にわたっての議論も不可能となっている。都出比呂志氏も最近指摘しているとおり、⁽¹⁸⁾ 畿内第V様式の細分は、その齊一要素の中に潜む地域性を明確に捉え、各小地域単位での細分編年を樹立すべきであると考える。その方法は、くり返し述べてきたように、現段階ではほぼ型式学的編年にとどまることが多いと思われるが、最も重要なことは、こうして確立をみた各地域での型式編年を隣接地域同士で互いに検証し合い、層位的事実を可能な限り援用して確実な併行関係の把握に努めることである。その際、畿内の広範な地域に共通する器形、一小地域内で完結する地域性を有した器形、その遺跡独自の器形などを追究する一方、ある時期に限られた器形、換言すれば器種の消長などにも目を向けなければならない。器台・手焙などはそういう視点から検討すべき器種と思われる。

また、後期の細別は土器の型式論だけでなく、各種の土器に伴出する石器や鉄器、その他遺物や遺跡そのものの様相が如何に変化していったかという相互関係の理解が案外なされていないようと思われる。田辺船三氏も近年行なわれたシンポジウムの中で、第V様式土器細分の不完全さを指摘し、「形式の細分と併行して問題になってくるのは、それに伴う土器以外の遺物との関係」であると強調しているが、まさに当を得た発言であろう。最近、石野博信氏が全国的・時代別に住居址平面プランの推移を分析されたが、近畿地方では円形プランから方形プランへの転化が概ね弥生後期にあるようなので、小地域ごとの変遷が正しく把握されるなら、こうした観点に立っても後期細別の一要素とすることができよう。

4. 西ノ辻諸型式の再検討

1958年、小林行雄氏によって提唱された西ノ辻の諸式が、今日なお畿内弥生後期の土器様式細分の骨子として存命を保っていることは既に述べたとおりである。おそらく今後の後期弥生式土器研究もこれをベースとして進められるであろうし、西ノ辻遺跡出土資料抜きにしての畿内第V様式細分の諸作業はあり得ないであろう。しかし、1遺跡の出土資料によっての型式編年が畿内全域にあてはまる確証はきわめて乏しく、おのずと限界が横たわっていることも認めねばなるまい。したがって、無批判に西ノ辻の諸式を容認する現行の姿勢には半信半疑の意を表すことができない。⁽¹⁹⁾ 本項目では、そういう観点に立脚し、とりあえず西ノ辻の諸型式を再検討しておきたい。

まず、後期初頭に位置づけされる西ノ辻I地点式についてであるが、約40個体にのぼる完形土器の個体数と約60cm幅の青黒色泥土層中に埋没していたという出土状態から考えて、当遺跡では最も良好な一括資料と思われる。小林氏は「若干新しい様式の土器が混在している疑い」を保留して「比較的の短期間に製作されたものの集合」と認め、「從来知られている土器様式の

なかでは、もっとも磨古第V様式」に近いことを考慮に入れて、「第V様式に先行する段階」を想定している。壺・甕・鉢・高杯など各器種の数量も豊富であり、器種内での器形の分化があまりみられないことも、当資料が安定したものであることを如実に物語っている。

この西ノ辻I式で小林氏の懸念された新しい様相をもった土器とは、おそらく(P1.12-21・25)のような土器を指したことと思われるが、都出氏の指摘のごとく、「底部輪台技法の登場や、分割成形技法の顕著となる点」と「タタキメを丁寧に消すこと」は大きな共通色といえる。

しかし、西ノ辻I式がこうしたセットでもって他地域で見出された例はほとんどなく、限られた器種・器形のみを認めることが多い。この西ノ辻遺跡に近接する東大阪市鬼塚遺跡では、最近報告された資料に当該型式の甕・甕が良好な形で認められ、ともにすべての器形が満たされている。また、同市岩滝山遺跡でも壺・甕の両器種と高杯が存在することから、中河内地域においては比較的純粹な型式として捉えることができる。

これに対して、中河内を除く他の地域では、一器種あるいは一器形のみが断片的に知られるにすぎず、西ノ辻I式が本来の組成で製作された地域はないようである。その散見される資料を器種別にみてみると、I式壺の典型ともいえる口縁部端面に数条の凹線をめぐらし、竹管文を抑捺した円形浮文を貼付ける装飾法は、その変異形も含めるならば、かなり広域に分布していることがわかる。すなわち、中河内地域を分布の核としながら、北河内(枚方市ごんぼう山遺跡等)・北摂(高槻市安瀬遺跡・同紅葉山遺跡等)・和泉(岸和田市春木八幡山遺跡等)の隣接諸地域はもちろんのこと、西摂(芦屋市会下山遺跡等)・山城(綾瀬郡田辺町三山木遺跡等)・大和(瀬戸市土橋遺跡等)など周辺、さらには播磨(龍野市門前遺跡・加古郡播磨町大中遺跡・同常全遺跡等)・紀伊(和歌山市滝ヶ峯遺跡・同大谷川遺跡・同井辺遺跡・橿原市北締遺跡等)・近江(滋賀県野洲町富波遺跡)など畿内外縁地域の多くの遺跡にまで及んでいる。

このように、西ノ辻I式の広口壺は畿内全域とその周辺部に普遍的に分布しており、凹線文のみのもの(「土器集成」V様式一壺A)や無文の口縁部のもの(P1.12-3)にも注意を向けると、その出土遺跡はかなり増えるものと思われる。しかし、前述したとおり、同じI式に属する甕や鉢・高杯を伴出することは極めて稀で、長頸甕を伴うことすらほとんどない。また、中河内以外の地域では、同器形の土器がまとまった量出土することは少なく、通常は1~2点散見される程度である。これはこの型式に比定される長頸甕や甕・高杯など他の器種にも共通して言えることであり、この点が第一に検討されねばならない。つまり、河内以外の地域で当型式の土器群が一括資料として検出される可能性は極めて薄いと言わざるを得ないのである。

壺も他地域での良好な資料に乏しく、とくに口縁部が内彎ぎみで受口状を呈する甕(P1.12-31・33・34)は分布の範囲が狭いようである。分割成形技法の痕跡を顕著に残し、外面を刷毛目で仕上げる甕(P1.12-26~30)は、断片では先行する第IV様式の甕との鑑別が困難だが、

完形品としては唐古遺跡第70号地点堅穴出土品に類例があり、尼崎市田能遺跡IA調査区出土資料や茨本市東奈良遺跡出土品中にも好例が確認されている。⁽¹⁶⁾

ほぼ垂直に立上った杯部を指標とすることのできる高杯は、畿内全域で点々と見出されるが、各遺跡での出土量は僅少で、出土しないところも多い。比較的多く認められる摂津の会下山遺跡で、西ノ式E式のもの⁽¹⁷⁾に対して1件う割合でしかない。西ノ辻I式に出現することより、後期の古い高杯とされてきたが、器形上、畿内第IV様式からの連絡はなく、杯部立上りの外反度よりその変遷の初源とする以外に根拠をあげることはできない。本来、このタイプの高杯が時期差を表わしているのか、地域差を反映しているのかについては、さらに検討を要しよう。

有孔平底で直口の鉢（P1.12-22～24）は、他地域はもとより近隣の諸遺跡でも類品に乏しい形態で、西ノ辻遺跡個有の器形である可能性が強い。同様なことは、台付無頸壺についても既に指摘されている。ちなみに、佐原真氏は畿内第IV様式終末に位置づけられる西ノ辻N地点式の土器を取上げ、「四線文はもちろんのこと、ほとんど文様をもたない」点を強調し、「この土器が様式として存在するのは、中河内の山麓や高所にかぎられており、その使用者たちが平地の人々とは異なる生活をいとんでいたこと」を考え、「中期終わりの畿内の土器が一体化の傾向をしめしたなかにあって、特異な存在」であることを指摘しているが、これは限られた器種だけでなく、一括セットそのものが西ノ辻の個性として認識されたのであろう。したがって、これに後続していく第V様式に帰属できる西ノ辻諸式の土器にも、遺跡個有の器種や器形が含まれていたとしても、それは当然であり、西ノ辻I式においては先に述べたように、鉢の大半と台付無頸壺にその傾向が看取されよう。

次に、西ノ辻I式の相対時期に関してであるが、色調（茶褐色ないし淡褐色）・胎土（砂粒を含む）と作風（分割成形技法）からみて一つのまとまりがあり、これらの資料は当遺跡自体として製作の同時性に近い要素を充分認めることができる。しかし、一旦セットから離脱した各器種・各器形の相対時期比定については、やや慎重に吟味する必要があると考える。

たとえば、前述した加飾豊かな口縁部をもつ壺は、当型式において壺の優勢種となっており、從来のことより、即このタイプの壺を「第V様式としては古い性質をとどめる形態」とみてきたが、最近の発掘資料によってその年代観のは是正を余儀なくされつつある。二、三の資料を指摘すると、和歌山市井辻遺跡岡崎団地A地点出土の土器には、この特徴的な西ノ辻I式壺が相当数みられるが、併出した他の土器片は弥生後期でも比較的新しい様相を帯びたものばかりである。兵庫県龍野市門前遺跡D地区下層（10層）出土土器にも、明確にそれとわかる壺の口縁部が認められるが、共存の資料はやはり後期の新しい段階のもので占められている。同県加古郡播磨町大中遺跡第1土器群や大阪府高槻市紅葉山遺跡第10号住居址、やや古い資料になるが、奈良県橿原市土橋遺跡出土資料などにも実例をみながら、併出土器の実態は先に指摘したとおりである。

これらの諸資料は純然たる一括資料ではないけれど、独特の口縁菱彫法をとる西ノ辻I式壺が後期初頭の一時期に限らず、かなり新しい時期にまで残ってゆく可能性を示唆している。現在、整理の進められている高槻市安瀬遺跡では、昭和47年調査の高塙町272番地で検出された第11号方形周溝壺の周溝内に多量の後期弥生式土器が供獻されていたが、後期後半に属するとみられるこの一括資料中にも実例があり、第V様式古相のメルクマールにし難いことが濃厚となつた。⁽⁴¹⁾ こうした事実が畿外のみならず、大和や攝津でも認められる以上、西ノ辻I式壺の年代的位置づけは再検の余地を多分に残しており、さらに大師山遺跡出土土器の分析を通じて後論することにしたい。

ついで、西ノ辻E地点式・同D地点式に関してみると、あらゆる器種が揃っているにもかかわらず、各々の個体数が不足しており、西ノ辻I式に比して同時一括のものとして捉え難い点が第一に指摘できる。都出比呂志氏はこの点を踏まえて、高杯部口縁のI式→E式→D式という一元的変遷に疑念を抱くなど、「D式により新しい要素が含まれていることは認めつつも、E・D2式をもって河内地方の二小期に分離することについては保留」されている。⁽¹⁸⁾

西ノ辻E式においてもっともオーソドックスな器種は高杯の「器形（P1.13B-12）と菱形土器（P1.13B-21・22）であり、ともに畿内全体に広く分布していて、ほとんど地域差をみない。しかし、その絶対量が極めて膨大であり、とても細分小期を画するものとも思えない。西ノ辻I地点式期の高杯・菱の僅少性を考慮するならば、各地でこれを補完し、概ね後期前半に盛行をみた器形として捉える方がより妥当性に富むようである。

楕形杯部を有する高杯（P1.13B-11）は土器集成—畿内第V様式高杯形土器A₁に相当し、その形態変遷についてはまだ不明な点が多いが、後期前半の時期には西ノ辻E式を含む高杯A₂⁽¹¹⁾に微量伴うことが明らかにされている。⁽³⁷⁾

西ノ辻D地点式は、再び叩き目技法の認められない1群の土器として認識できるが、新しい様相をもった土器（P1.13B-4・17・18・20）とともに、当遺跡個有のものとおぼしき土器がたくさん含まれていて（P1.13B-8・13・14・15），後期後半のどの時期にもってゆけるかを困難なものにしている。杯部の曲折点が丸味を帯びる高杯（P1.13B-13・14）は同型式が2点存在する上、他遺跡においても稀に見ることができるので、あるいは微妙な時期差を反映しているのかもしれないが、絶対数の少なさから地方差も検討すべきであろう。都出氏は編年試案上、これに後続する北鳥池下層式高杯への型式的連鎖に無理をきたす点を指摘し、「E式内の変異形」ともみれることを説いているが、やはりこの時期の土器集成高杯A₂の形態を変遷過程に即して見出さねばならぬと考える。また、P1.13B-17の高杯杯部はいわゆる庄内式（「土器集成」高杯C）の祖形を考える上に重要と思われる。

以上、I地点式を中心、E・D両地点など、後期に比定される西ノ辻の諸型式を検討してきたが、当遺跡があくまで生駒山地の西麓という特殊な地理的条件のもとに立地していること、得られた編年自体がすべて型式学的な方法論でもってなされている点は否めない。すなわ

ち、西ノ辻遺跡の中期以降の土器全体には強い閉鎖性が看取されるのであり、型式として捉えるよりもむしろ個体差の表象とみるべき器形が含まれていることも確かである。この点を踏まえて、畿内第V様式の時期細分の示準・指標にお西ノ辻の諸型式を生かすならば、セットとしての有効性を他遺跡の一括資料で検証してゆく方向と脱落階梯の補完を今後期する必要がある。

5. 各地域の一括資料とその前後・併行関係

第V様式の土器はどこを掘っても出てくるというのが発掘調査での実感であろう。それだけに個体数としての資料は豊富である。にもかかわらず、その編年細分が立遅れているのは、いわゆる一括資料に乏しい実情によるところが大きい。しかし、ここ数年来、調査の進展によって、各地でそうした一括資料がなお少ないとはいえ蓄積されつつあるので、第V様式の大まかな流れはある程度把握することが可能となってきている。

本項では、まず管見に触れた一括出土土器を各小地域ごとに摘要し、その地域内での前後関係について見通しを述べる。つづいて大師山遺跡出土資料の相対時期を見究めるための前提作業として、各地域間の併行関係に関して根拠を示し、畿内における第V様式の相対的な変遷をたどることにしたい（付表1・2参照）。

摂津の一括資料 摂津は地域的には千里丘陵を大きな境として、西摂と北摂に分けられる。西摂地域は比較的良好な資料に恵まれており、〔会下山住居床面〕→〔田能6Y調査区第2溝〕→〔中ノ田第1・2溝〕の変遷が考えられる。

芦屋市会下山遺跡では、数棟の住居址が検出されており、各々中期様式の土器を混在させて後期の土器を数多く出土しているが、うち床面直上に第V様式の一括土器群を残すものとして、F地区住居址とL地区住居址とがあげられる。⁽⁴⁵⁾ F住居出土土器には鉢と高杯が3個体ずつ含まれており、鉢がとくに器形分化している。L住居の床面資料は2群に分割でき、一つの群は長大な柱状片刃石斧を併出する。両者には若干の時差があるものと思われるが、会下山集落の廃絶が一齊にあったことを前提にするならば、ほぼ同時期のものを示すとみてよい。

尼崎市田能遺跡6Y調査区第2溝は、当該区の北端で検出された東西方向に走る大きな溝で、幅3.0m、深さ1.1mを測り、後期に属する多数の完形土器・木製品が概ね溝底から出土した。器台を欠くが、壺・長頸壺・甕・鉢・高杯の各器種を豊富に揃えており、二重口縁を有した壺が目立った存在となっている。

尼崎市中ノ田遺跡では、弥生後期の土器を出土する2本の溝状遺構が検出されている。⁽⁴⁶⁾ その一つは、幅1.0m、深さ0.6mの比較的大きなもの（第1溝）で、いま一つは幅0.6m、深さ0.3m（第2溝）でやや小さく、ともに発掘区域内でゆるやかな弧状を描いている。壺・長頸壺・甕・鉢・高杯・器台など器種に富み、一括セットとして把握できる。報告書では、これら2条の溝の出土資料を分離して記述していないが、明確に分けると、第1溝出土土器には、細頸壺⁽⁴⁷⁾

・台付壺が認められ、第2溝出土土器には台付長頸壺・器台が含まれる等、器種構成と形態にかなりの相違が看取され、時期差の存在することも十分予想される。

田能・中ノ田両遺跡における一括資料の様相の違いは一見して明瞭である。両者が近接距離にある以上、その差違は明らかに地域の差としてではなく、それぞれのセットの遺棄・廃絶の時間差として捉えるのが妥当であろう。中ノ田遺跡は、最近の発掘によってさらに第V様式の資料が増加していることであり、また、これらの土器群に直続する型式の良好な資料が尼崎市東園田遺跡の調査でもたらされている。⁽⁶⁸⁾

一方、淀川右岸の北摂の地域では、変遷を追究するまでの資料が公にされるまでに至っていない。

高槻市鳴上郡衙跡38-K地区の方形周溝墓No.2では、東辺周溝の上層部でかなりの数とともに完形品に近い壺や高杯・壺・器台・手鏡・瓶などが堆積していたが、概報では弥生時代最終末～庄内式頃に比定されている。⁽⁶⁹⁾ 方形周溝溝底には歳内第II様式の土器が検出されているので、これら上層の土器群は築造当初の供獻土器でないことは明瞭である。同様な現象で把握できる一括資料は、安満遺跡高垣町272番地の第II号方形周溝墓でも認められ、築墓年代は第II様式期でありながら、周溝上層には大量の第V様式後半に属する土器が遺存しており、その数は完形品にして30を上回るものとみられる。⁽⁷⁰⁾

最近、茨木市東奈良遺跡では、溝状遺構より西ノ辻I式に比定できる一括資料が検出されたというから、この地域でも近い将来、後期初頭から終末に至るまでの型式編年が確立されるものと思われる。

河内の一括資料 この地域のとくに中河内における第V様式細分は、前述した都出試案によ⁽⁷¹⁾ってほぼ完成に近いものとなっているため、重複は避けたいが、最近、上六万寺遺跡の資料が公表されたので若干説明を加えておきたい。

東大阪市上六万寺遺跡で多量の弥生式上器が検出されたのは、主として第3トレンチの地山直上の二次堆積層で、東方より流れ込んできたものと推定されている。壺・長剣柄・壺・鉢・高杯・器台のあらゆる器種を網羅しており、壺・鉢の2器種の口縁部成形には独特的のテクニックが看取され、大部分の土器は同時存在したものと考えられる。ただし、前述した出土状態からみて、土壙や住居址床面、溝底の一括資料に比べ若干の夾雜物を含んでいる可能性は認めねばなるまい。しかし、先に検討をみた西ノ辻E・D式に比べより安定したものと思われる。

他に河内では、最近、大阪市平野区長原遺跡のS-B02住居址で床面付近より30～50個体に達する土器が出土している。⁽⁷²⁾ 整理完了のため、すべての資料が公表されていないが、一部紹介されたものをみると、都出編年の西ノ辻E〔D〕式にほぼ併行するものと推定される。

和泉の一括資料 本地域は第V様式のまとまった資料が數少ない。その中にあって、もっとも良好な資料を提供しているのは、和泉市池上遺跡J地区で検出された井戸群の土器である。⁽⁷³⁾

JU64地点上にあるJ-2号井戸（径1.1m、深さ1.9m）では、最下層に当たる黒色陶植土

層中から畿内第V様式に属する壺8個を中心にはほぼ完形な土器が出土し、「その構成が3個の穿孔土器をはじめ、原始絵画を有するもの2個、記号を有するもの3個」と際立った特色がみられる。また、J-065地点に位置するJ-3号井戸（径1.2m、深さ1.4m）では、同じく最下層より壺を主体とし、甕・鉢・高杯などの土器が検出されている。

これらJ-2・3号井戸内の出土資料について、報告者は概ね「第V様式の中頃」とみ、「3号井戸の土器の方が古い」と述べているが、後述するように、2号→3号という変遷に逆転する可能性が高い。⁽⁵⁵⁾

大和の一括資料 大和では、戦前の唐古遺跡の調査が現在なお高い意義をもっている。とくに45号地点堅穴の上・下層で見出された土器群の個々は、層位的に分離されたものだけに、その型式差は時期的変遷を知る上で有力な指標となる。⁽⁵⁶⁾

ただし、45号堅穴下層の土器群（以下、「45号式」と呼称する）は、先にも指摘したように、壺形土器に限られており、他の器種の態様が知り得ないという難点を残す。しかし、複合口縁を有する壺の存在は、その出現の時期と他地域との併行関係を捉える上に貴重であり、その中にあっては最古の形態をとどめている。

45号式より後出の45号上層式には、壺・長頸壺・甕・鉢・高杯などの器種がみられ、長頸甕・甕の脚台付加や鉢の上げ底化など、各器種底部の形態変化が著しい。器体の小型化・粗雑化も全体に指摘しうる傾向である。とくに器台は認められないが、『報告書』⁽⁵⁷⁾593の土器が全形を推して該当するかもしれない。

45号式に先行するものとして70号地点出土の一括上器があげられる。長頸甕・短頸甕・甕・鉢・高杯の器種がみられるが、各々の数は少ない。しかし、その出土状態からみて、同時性の高い資料と考える。

唐古遺跡に近接する天理市岩室・平等坊遺跡では、1970年の発掘で4D-G21区の円形ピットに良好な共存資料が確認された。壺・長頸甕・甕・高杯が遺存しているが、壺・甕の口縁部のつくりには一つのクセが看取される。また、甕には東海地方の影響を受けたとみられるもの（『調査概要』⁽⁵⁸⁾実測図6）が含まれている。成形・調整技法よりみると、叩き目手法を用いつつもその上を刷毛で調整する点が目立つが、型式的にみてそれほど古いものではなく、唐古45号堅穴上層式に併行ないしは若干先行するものとみておきたい。

奈良盆地東辺に所在する天理市布留遺跡でも、最近調査の行なわれた山口池地点A-B区において、第V様式土器が層位的に捉えられている。⁽⁵⁹⁾

第三層より上層においても第V様式の様相を帯びた土器が少なからず検出されているが、ほぼ純粹な形で第V様式土器が検出されたのは最下層に相当する第四層のみである。数量は乏しいが、甕・甕・鉢・高杯・器台の一とおりの器種を揃えており、甕の器形は中・小型のもので占められ、比較的安定している。

調査を担当された畠田雅昭氏は、この層位に属する1群の土器を「第V様式の新しい段階」

に位置づけているが、もう少し時期を誤定するならば、唐古45号堅穴上層式に近似するもの⁽⁵⁷⁾ようである。

第V様式から庄内式への遷移は、樋原市曲川遺跡で古く見出された資料⁽⁵⁸⁾によって跡づけられる。石野博信氏は「出土状態が不明確なため一括資料として扱うのに不安がある」と述べつつも、「唐古第45号堅穴上層の土器よりは新しく、いわゆる庄内式土器よりは古い段階の要素を備えている」とし、「曲川式」と呼んでいる。⁽⁵⁹⁾壺・甕・高杯があり、量的に多い壺の態様が本型式のメルクマールになるものと思われる。

大和では、この他近年に至る調査・研究の成果として、第V様式一括資料を出土したいくつかの遺跡が知られている。1971~1972年の調査で、古式土師器が大量に出土して注目をあびた桜井市經向遺跡では、完形土器を含む水路と多数の土壙に、第V様式土器が認められており、辻・東田地区水路の下層出土土器（經向1式）は、前述した曲川遺跡出土土器や大阪府松原市上田町遺跡第1層の土器に対応するという。⁽⁶⁰⁾

1970年実施された樋原市新沢一・中曾司両遺跡の調査でも後期の溝などがみつかっており、分層発掘されているので、その成果が期待される。中曾司遺跡7EC16グリッドで検出をみた大きな凹みには、後期弥生式土器40個体分以上が遺存しており、概ね後期前半に比定できる。⁽⁶¹⁾新沢一遺跡前段地区では、幅3m余、深さ1m、長さ10m以上の後期溝がほぼ東西方向に認められ、最下層において壺形土器をはじめ多くの完形品が出土した他、さらにこれを切る後期の溝も存在し、少なくとも第V様式の新しい段階が二つに細分し得る資料を提出している。⁽⁶²⁾これら両遺跡出土資料の整理が進めば、大和盆地南部、とくに曾我川水系におけるより小さな地域での第V様式編年が細かくたどれるかもしれない。

最近、知見にふれたものでは、盆地東南部の桜井市大福遺跡や藤原宮跡西南隅下層の樋原市四分遺跡で、やはり溝や土壙・井戸などに第V様式の良好な資料が見出されている。一部紹介された大福の溝出土品は唐古45号上層式や岩室・平等坊4D-G21区円形ピット出土資料・布留山口池4-B区第IV層出土資料に近い時期のものと考えられる。

以上、大和におけるいくつかの第V様式一括資料を概観したが、現在の時点では、[唐古70号式]→[同・45号式]→[同・45号上層式]→[曲川式-經向1式]という変遷図式でもって把握するのがもっとも妥当な見方である。ただし、唐古70号式から同・45号式への移行は甚だ飛躍的であり、今後この地域では後期前半の詳細な分析が必要であろう。

山城の一括資料 山城においては、前述した4地域の資料に匹敵するだけの一括資料に乏しい。これはまとまった発掘調査があまりなされていないことにもよるが、最近では京都市中臣遺跡など大規模な調査も行なわれており、第V様式の遺構・遺物も増加しつつあるようである。

この地域では、東に隣接する近江地方の土器が数多く流入しているので、第V様式の細分に関しては、近江での編年と矛盾をきたすことなく進める必要がある。櫛先列点文と櫛描直線文

の構成で飾られる受口状口縁の近江在来の壺形土器は、その搬入率と遠隔地への移動が著しいため、こうした作業を行なう上で有効な手順になるかもしれない。⁽⁶⁴⁾

畿内第V様式の編年細分と地域性

これら畿内に属する五つの地域の第V様式一括土器を細分小期ごとに1列に並べ、その併行関係と前後関係を明確にした作業は今のところ見当らない。その最大の原因は、小地域単位での編年細分が未完成であるという点に尽るが、それにもかかわらず、山陽や東海など他地方の土器と畿内の土器とを比較することがこの時期について頻繁に行なわれる以上、少なくとも畿内での見通しを明らかにすることは急務であると考える。付図1・2はその意味において、無謀を承知の上、一試案を提示したものである。

編年試案表に使用した一括資料は、先述した各地域ごとに抽出された良好な示準資料のうち、まとまった数の実測図が既に公にされているものに限った。その際、相対時期設定の目安となるような完形品を主として選び、特別な器形の土器や夾雜物要素の強い個体は極力その対象から除外するようにした。

また、時期細分にあたっては、弥生時代後期を概ね前半・後半の2時期に分け、さらに後期前半を2小期に、後期後半を3小期に分けて、その変遷を追究してみた。各地域間の併行関係は5小期内の個々で捉えているが、編年表の性格上、2小期以上にまたがるような資料についても、その主体を置く時期に焦点をあて位置づけを計っている。

各資料の併行・前後関係と相対時期別の器形・製作技法の諸変化、地域性、器種の消長などに関しては、畿内に隣接する播磨・紀伊における様相をも踏まえて以下、1小期ごとに詳述することにしたい。

後期前半Ⅰ期 この時期は後期初頭に位置づけされるが、現状では認識し難い1小期といえる。一応、従来より定見にのぼる西ノ辻Ⅰ地点式を標式とすることができるが、くり返し述べてきたように、西ノ辻Ⅰ式典型的な装飾口縁を有する壺形土器をその指標として有力視することは極めて危険である。調整法や器形に特色ある壺や高杯はその絶対数が僅少で齊一性に乏しい。

中期様式の高杯・台付鉢などに普遍的であった連続成形手法と円板充填法が西ノ辻Ⅰ式段階の高杯には残ってゆくという指摘⁽⁶⁵⁾と刷毛目調整を主体とする壺が盛行することとは、中期と接続点を見出せる唯一の現象かもしれない。

これに対して、畿内中心部を分布の中心に広範にみられる長頸壺は、その形態に一つの特徴をもつので、併行関係を捉える上でメルクマールになるのではないだろうか。佐原氏は西ノ辻Ⅰ式の長頸壺を取上げ、「器体の高さと腹径とがほぼひとしく、底がいちじるしく突出しないものは、古い段階の特徴である」としているが⁽⁶⁶⁾、それ以外に口縁部がほぼ直口を呈する点も見逃せない特色といえる。池上遺跡J地区2号井戸底の一括資料は、底部がやや突出する傾向をみ、口縁端部が外反ぎみになるものを含むなど若干新しい様相を帶びてはいるが、古い要素を

よくとどめたものといえ、他の壺形土器に分割成形技法が顕著にみられることが重要である。長頸壺の底が明確に突出する点と高杯杯部の形状を拠所に、次期に下げて考えた唐古70号地点のⅠ群の土器も、西ノ辻I式に酷似する壺形土器を含むことより、ほぼこの時期に併行するかも知れない。

この時期に比定し得る鉢や器台は不詳であるが、奈良県天理市東大寺山遺跡や同橿原市忌部山遺跡・大阪府吹田市垂水遺跡などで少數ながら出土しているヘラ彫沈線文を胸部に装飾する器台がこの時期を埋める資料と考えられる。施文位置は、先行する第IV様式の大型器台の凹線文施文部位に合致することが多く、回転台の消滅に伴う中期四線文手法の名残り・退化施文法と推測され、少なくとも後期前半Ⅱ期までは残ってゆくものと思われる。吹田市垂水例には胸部中央に長円孔がみられ、IV様式の器台に多見される大型凹形透しの残照ともいえよう。

後期前半Ⅱ期 この小期は、いわゆる畿内第V様式特有の器形・技法が様式として各地域に一的に出現する段階とみておきたい。若干の夾雜物を含むも、河内の西ノ辻E式や攝津の会下山F・L住居址床面資料、大和の唐古70号地点式などが概ねこの時期を占めるものと思われる。高杯は杯部に稜線をもって立上る形態のもの（土器集成A₂）が普遍的となり、同時に楕形杯部のもの（土器集成A₁）が少量随伴してセットをなすことが多くなる。

唐古70号地点式の高杯は、杯部の曲折点と形状が西ノ辻E式のそれに近似しているが、長頸壺と甕や鉢がより古い様相をもっており、本小期においてはもっとも遅らせることができる。

会下山F住居址床面の皿形高杯は、口縁部端面を平滑に仕上げるなど西ノ辻E式・唐古70号式の皿形高杯に共通する手法を用いているが、杯部立上りの屈曲部に擬凹線が看取され、技法的にはやや古い要素を備えている。しかし、口縁部は全体的に外反ぎみであり、その傾向はむしろ新しい段階になって顕著となるものといえる。同様な点は長頸壺にも指摘でき、体部を欠失するので明確ではないが、西ノ辻I式などにみられた直口形態は既に失われている。これは会下山L住居址の長頸壺においても明瞭に認められる事実である。

会下山F住居址床面の楕形高杯は2点ともほぼ同型品で、その形状は西ノ辻E式のそれそのものである。皿形高杯を共伴するという条件を加えれば、かなり安定した器形を呈するのでこの時期の指標とすることが可能かもしれない。

鉢は3点遺存するが、先述したように3者各様であり、口縁部の外反するもの、直口のもの、平底のもの、上げ底のものなど形態上の差違の他、叩き目技法を多用するもの、しないものの、内面に刷毛目調整をみるもの、みないものなど製作技法上の相違も著しい。これらが同一生活面より検出される以上、実態としてこの時期にかような鉢形土器の分化を認めざるを得ず、西ノ辻E式の少量の鉢をもって時期設定の様式とすることは努めて避けねばならない。

会下山L住居址床面の楕形土器は当遺跡の中でも最も完好な資料であり、外面は3段階に分けて叩き目成形が施されている。あらゆる点において西ノ辻E式に酷似しているが、口縁端部に2～3条の擬凹線が認められる点と上段部叩き目痕を刷毛でかなり消去している点が注目さ

れ、中期様式の名残りや西ノ辻I式壺の遺制と解釈して、西ノ辻E式よりやや古い要素をとどめたものとみておきたい。この1群に共存する長頸壺が直口で突出しない底部を有することも、本小期の古相を占める資料であることを傍証している。また、長頸壺に特有なヘラ記号はこの小期を中心前後の時期に多見されるようである。

器台は一括資料に乏しく、その推移について多くを語れないが、西ノ辻E式に1点含まれるものについては、口縁部を上下に肥厚させ、2条の凹線文を飾っている。

後期後半工期 後期前半から本小期への移行は漸移的である。しかし、土器にみられる地域色は強まる傾向にある。

この時期の一括資料では、大和の唐古45号(下層)式と揖津の田能6Y調査区第2溝出土品⁽⁴⁵⁾がほぼ併行するものと考える。その根拠は、唐古45号式が壺のみによって構成されるため、他の器種で証明できぬ恨みを残すが、二重口縁壺形土器の存在(唐古516・田能502)⁽⁴⁶⁾は微証となる。唐古(501)・田能(501)⁽⁴⁶⁾の壺も細部の施文技術は異なるにせよ、ほぼプロポーションは等しい。ただし、田能6Y調査区第2溝の二重口縁を有する壺は、色調茶褐色で胎土に黒雲母・金雲母の剝片を多量含み、明らかに河内地方からの搬入品であることがわかる。したがって、西揖津の田能遺跡でかかるセットをなしていた時点では、河内ではこうした二重口縁の壺が既に製作されていたものとみなければならぬ。

しかし、この時期に相当する河内の一括資料中の実例は寡聞にして知らない。二重口縁壺形土器は布留式期に至ると、茶臼山式壺として定形化するが、その祖形が畿内で自生したものであるか否かは、この時期に出現した最古型のものの分布をさらに分析する必要があろう。⁽⁷⁰⁾ その系譜は「壺Cの口縁部の上に、さらに口縁部を付加することによって成立したもの」とみる佐原真氏の見解が現在のところ妥当のようである。⁽¹¹⁾

長頸壺は器形の変化とともに、いくつかに分化する兆しが認められる。唐古45号式には2個あって、一つは大型化し、いま一つは頸部がやや短かく、口頸部がかなり外反している。大型のものは全体として鈍重なつくりではあるが、西ノ辻D地点式にも存在する。⁽⁷¹⁾ 池上J地区3号井戸には4個の長頸壺がみられるが、やはり口頸部に外反の傾向が看取される。⁽⁶⁵⁾ ただし、唐古45号式の一例(520)⁽⁴⁶⁾に比べ、まだ口頸部が長く、また外反部が口縁部のみにとどまっている点が注意され、唐古45号式に先行するものと考えたい。また、池上J—2号井戸の類品や西ノ辻I式と比較すると、長頸壺の口頸部は明らかに発達しているので、この外反度は後出の要素としてあげうる。

田能6Y調査区第2溝にみられる長頸壺は、算盤玉形の器体に細くしまった頸部をとりつけたもので、欠損している(506)の頸部はかなり細長くなるものと推測される。同様な態様の長頸壺は上六万寺遺跡出土品⁽⁶²⁾にも散見され、この時期になって顕在した長頸壺分化の一翼を担うものといえる。

壺形土器は、田能6Y調査区第2溝の資料をみると、後期前半のものと大差ない。稀に

みる叩き目をもたぬ壺(田能526・西ノ辻D地点23)⁽⁴⁸⁾は、本小期の特色というよりも最終調整の段階でナデによって消し去った例とみた方がよい。上六万寺遺跡出土の壺形土器は、口縁部付近が一、二度角度を変えて立上る特徴的なテクニックが濃厚に認められる。この技法に関しては、「すでに西之辻I式からの変化をたどることができ、I式の口端部が面をなすものがE式では端部が尖るようになり、上六万寺式～北鳥池式では口縁部外面のヨコナデが強調されて二段に外反する口縁形態となる。そして、この種の口縁は北鳥池式以後、退化しながらも上田町II式の丸底で内面へラ削りを行なう壺にまで存続する。」⁽⁴⁹⁾という指摘もあり、その系譜が第V様式初頭から庄内式に至るまでの時間的連鎖の下、捉えられることが明らかにされている。同巧な口縁部を有する壺は、和泉の池上J-3号井戸の土器群にも存在し、畿内南部に属する地域では比較的早い時期から登場する技法とみられ、時期が下るにつれ、畿内北部や周辺諸地域でも多見されるようになる。

鉢形土器は、西ノ辻D地点式・田能6Y調査区第2溝出土品など平底が支配的であり、叩き目成形痕をみないものが多い。上六万寺式には上げ底状のものを含み、やや新しい様相を帯びる。

高杯形土器は田能6Y調査区第2溝例を本小期の標式にことができる。杯部は西ノ辻E地点式に比べ、外反し、立上りの屈曲部には綫い稜線が走る。上六万寺式にも同様な傾向が認められ、外反度の差が西ノ辻E式からの時差を反映しているのかもしれない。

器台形土器は、一括資料中に良好な資料をみないが、西ノ辻D式の1例⁽⁵⁰⁾には明らかに退潮の兆しがあらわれている。拡張した口縁部端面に凹線文をみる上六万寺例は古色を保つものの新しい例と言えよう。

以上あげた地域を異にする一括資料が同時性をもつか否かという問題は、この時期についてとくに難しい。ここでは池上J-3号井戸の資料がもっとも古く、上六万寺式がもっとも新しい時期を占める可能性のみ指摘しておきたい。

後期後半Ⅱ期 畿内第V様式の器種組成・形態・製作技術の変遷で、各地域一齊に著しい変化をみるのが本小期である。この時期では、大和の唐古45号窪穴上層式と浜津の中ノ田第1・2溝の一括資料に明瞭な併行関係が確認できる。中ノ田遺跡の壺の土器は、先述したようにそれぞれ独立した資料として分離することが可能であり、両者の器種構成・器形にも明らかに違いが認められる。しかし、唐古45号窪穴上層式との対応関係を考慮に入れた場合、二つのセットを大勢としては同時期とみなしてよいものと思われる。

唐古と中ノ田の一括資料には多くの共通点を見出せるが、器種の組成では、台付長頸瓶・台付壺の出現が特筆される。それと相まって鉢形土器の上げ底化も著しく、外面には指圧痕を有するものが支配的である。各器種が脚台をつけるようになる傾向は、本小期における大きな変化といえ、複数の器種にわたってみられる場合は一つの指標となろう。

その他、壺や甕、高杯や瓶にも同じタイプやプロポーションのものをみ、両セットの同時性

を広範に立証できる。唐古45号窓穴上層式にはないが、中ノ田1溝に存する細頸壺も、本小期を中心に各地で普遍化してゆく器形で、その分布は広い地域にわたる。西摂津では尼崎市田能⁽⁴⁵⁾・芦屋市芦屋庵寺下層などで、北摂では茨木市安威土壙墓・高槻市鳴上郡街跡など、河内では枚方市鷹塚山・東大阪市上六万寺など、大和では橿原市土橋・新沢一・桜井市安信寺跡などの諸遺跡で散見され、後期通有の長頸壺の分布圏外にある山城の地域でも南部には稀にみることができる（向日市中海道遺跡・京都市岡崎遺跡）。また、播磨（佐用郡佐用町吉福遺跡・姫路市梅原遺跡・加古郡播磨町大中遺跡）・丹波（氷上郡山南町井原至山遺跡）など畿外西辺の地域でも流行をみた器形で、畿内南部に特徴的な長頸壺とは異なり、かなり辺境の地にまで及んでいる点が注目される。

上記した諸例のうち、田能・上六万寺の2遺跡の資料は、先述したように長頸壺として後期後半Ⅰ期に比定したが、これら細頸壺の先行形態とみるべきものであろう。芦屋庵寺下層・新沢一や梅原第1類の各例もおそらくこれに併行する時期のものと考えられ、口縁部が外反するものが多い。

他方、中ノ田遺跡第1溝の実例のごとく口縁部が直口タイプのものや内彎する手のものは、外反する手に比べ後出のものが多く、吉福遺跡土壙N4出土例や島上郡街跡38-K地区方形周溝墓N2溝内上層土器群に含まれる1点及び大中遺跡第8号住居址床面資料などはこれに該当する。この3例はさらに新しい階級のものであり、庄内式期の古い段階まで下降するものと思われる。

従来より、こうしたタイプの細頸壺は、畿内南部特有の長頸壺に対し、畿内周辺地域、とくに西摂津の地域色を表徴した器種とみられてきたが、概観したように、本小期ではその分布も広く、また、ある程度の時間的系譜をもつことが判明した。すなわち、この種の細頸壺が一貫的に登場する時期は後期後半Ⅱ期であるが、摂津ではその前後の時期のものも認められ、僅少例なれど庄内式古期までは確実に残ってゆく器形と考えられる。庄内式に比定される細頸壺形土器は、現在のところ、大和や河内なく、換言すれば摂津においてのみ古相のものから連続的に系譜がたどれることが指摘でき、この壺の出自と消長に関して一つの手懃りを与えているものと考える。もっとも新しい段階の細頸壺が土壙墓の副葬・供獻土器になっている点も見逃せない事実である（吉福例・安威例）。

壺形土器には、都出比呂志氏の指摘した「口縁叩き出し手法」が顕著に認められるようになり、また、「逆統ラセンタキ手法」の先駆的なものが看取される。前者の手法は中ノ田1・2溝の資料に、後者の手法は唐古45号窓穴上層式により顕著に認められる。ただし、唐古45号上層式のそれは「やろうと努力はしている（傍点森岡改変）が、非常に下手で」あるという觀察どおり、技術的には完成された域に到達していない稚拙さを披露している。

この時期の壺形土器の器形変化では、さらに目立った特色として、小型土器の急増があげられよう。後期一般の壺形土器は、口径15cm前後、器高25cm内外を測るものが多く、古

い段階ではそれを上回る大きさのものもかなりの比重を占めている。この傾向は、各遺跡の資料を通して後期後半Ⅰ期頃までは存続するけれど、本小期に至ってはこれに口径15cm未満、器高20cm未満の小型化した甕が新たに加わり、量的には占める割合を高めている。中ノ田遺跡第1・2溝の一括資料やこれに併行すると考えられる布留山口池地点4—B区第IV層出土土器などには比較的濃厚に認められ、台付甕の出現とともに甕形土器の機能分化が想定されるが、この小型甕には、叩き目の変化点が1か所のものが圧倒的に多いという以外に、際立った製作技術の違いは見当らない。

鉢形土器は前述したように、後期前半Ⅱ期より出現する直口の小型上け底鉢が激増し、製作当初より明らかに鉢を目指した型式として定形化する。畿内第V様式の甕と鉢は、通常、平底底部が出土しただけでは、識別することが甚だ困難であるけれども、この段階のものは両者を断片でもかなり容易に判別することが可能である。鉢にはこの他、口縁部を外反させる大型鉢⁽⁸²⁾が微量伴うようである（唐古45号堅穴上層式・中ノ田第2溝・布留山口池地点4—B区第IV層）。

高杯形土器もメルクマールに抜擢できるだけの安定した器形を有する。III形杯部の形態変遷は後期前半Ⅱ期の西ノ辻E式の発展の延長線上に位置づけられるが、口径がかなり縮小することと、脚部がシャープさを失い鈍重なつくりになることが指摘でき、円孔を穿たない例も増えまる。杯部立上りの外反度は一層顕著となり、曲接部は凸帯を周縁させたかのごとく稜線が際立つようになる。しかし、微妙な地域差はあるようで、唐古45号上層式の類例（587・588・589・591）と中ノ田1溝出土品⁽¹⁵⁾にはその違いがわずかながら看取される。

椀形杯部を有する高杯もこの時期まで明らかに伴出し、その形態は後期前半以来のものをさほど変えていないようである。

器台形土器は、鼓腹を呈するものが激減し、一・二の特徴的な形態（中ノ田2溝・45）を除いて、主たる器種組成から欠落するようになる。その中にあって、布留山口池地点4—B区第IV層の資料にみられる完形品⁽¹⁰⁾を代表とする口縁加飾の器台は、本小期を画する指標となり得る点で注意しなければならない。この種の器台形土器は、他に完形品としては高槻市紅葉山遺跡第3号住居址出土資料や枚方市鷹取山出土土器などがあげられ、口縁部にヘラ描沈線もしくは乱れた凹線文を施し、その上に竹管文を押捺した円形浮文を貼付ける装飾と上半部で曲折して外反する口縁部をもつことを常とする。したがって、口縁部の断片のみでは壺や高杯のそれと見紛う可能性もあり、事実、唐古45号堅穴上層式の類品（『唐古』報告書593）は、他型式の高杯形土器として報告されている。しかし、筆者はこれをこの時期に特有の器台の残欠と考える。

平窓房・岩室遺跡4D—G2I区円形ビットの資料に関しては、かなりクセのある土器を含んでいるがため、あまり併行関係を見究める材料とはしなかったが、小型の瓦頭甕や甕の一部はかなり新しい様相をもっており、一応唐古45号上層式併行と考えている。

後期後半Ⅲ期　畿内第V様式の最終末の時期として設定する。この時期の一括資料はまとまつたものが数少なく、河内の北島池下層式と大和の曲川式をあげるに止まる。

北島池下層式は、先に後期後半として紹介された一部の資料では、器種の構成など詳細な点が不明瞭であったが、その後の報告によって全容が明らかにされている。都出比呂志氏は、この一群の土器を上六万寺式と上田町I式との間に位置づけ、その「移行過程を示す好資料」とみなしたが、筆者もこの見解に準じ、中河内における弥生最末期の土器とみておきたい。⁽¹⁸⁾

一方、大和の曲川式遺跡出土品は、石野博信氏によって、氏の編年による繩向I式に対応するものと理解されている。⁽¹⁹⁾ 石野氏は同時にこの資料の相対時期を上田町遺跡の第I層出土土器に對比しうるものと考えているが、全く併行関係をもつものとはみなし難い。中河内地域の編年⁽²⁰⁾と照應させるならば、むしろ先にあげた北島池下層式により親縁性が求められよう。

北島池下層式と曲川式の併行要素は大型壺形土器の態様・製作手法に顕著である。すなわち、両者には胴部球形を呈し、安定した連続ラセンタキ手法の駆使された壺がみられ、叩き日 자체も凹凸の幅が非常にきめ細かくなる。したがって、腹径が口径を凌駕するものが圧倒的に多くなり、「口径が腹径をしのぐ形態は、より新しい特徴である」ともかぎらない。このことは、小型化した壺の多くに言い得ることであって、大型・中型のそれには必ずしもあてはまらないようである。同様な対応は庄内式期に至っても指摘できるので、口径と腹径との比較によって壺の相対時期を定めることは、きわめて危険な方法であるといえよう。

大型壺に小型壺が伴う後期後半Ⅲ期の傾向は本小期においても継承され、小型壺の方には目立った変化がほとんどみられない。北島池下層式には、ほぼ同数の大小の壺が共存しており、機能的にも明らかに相違がある。各地の資料を瞥見するかぎり、同伴関係から小型の壺は庄内式期の新しい段階までは残存するものと思われる。

他の器種についてみると、壺は飾られるものが増える。北島池下層式には頸部に刻目凸帯を有する複合口縁のものが、曲川式には口縁部端面に円形浮文を点列するものや頸部に柳描直線文・同波状文を加飾する例が認められる。また、底部には丸底化の兆しがあらわれ、尖底を呈するものが散見されるようになる。

鉢形土器は曲川式ではなく、北島池下層式では、後期前半Ⅲ期以降の各期のものを残した形でみられ、古い様相を帯びたものが多い。この種の鉢のうち、新しい階梯のものは小型壺同様、さらに庄内式期まで残るようであり、畿内第V様式の鉢の特性として他器種には稀な伝統維持・保守性が看取される。

高杯形土器は、北島池下層式の2例が指標となる。杯部立上りは長く延び、その外反度は極限に達する。これは後期後半Ⅲ期から十分系譜のたどれるものである。曲川式のそれは器形を異にし、いわゆる庄内式に近似する。

これら二つの一括資料には、共通して器台形土器がみられない。この現象については、僅少な資料による制約も考慮しなければならないが、本小期では主要器種構成から器台が欠落する

ことが普遍化していったものとして捉えたい。他方、北烏池下層式に手縫形土器の存在することが注意をひく。第V様式の一括資料中に手縫をもつことは非常に稀であるが、後期後半Ⅱ期以降の器台の衰退と無関係ではないと考える。手縫の出現時期に関しては、明確な材料をもないが、少なくとも北烏池下層式以前に新器種として加わったものと推定したい。その場合、大阪府東山遺跡などに実例をみる凸縫を有する鉢形土器がその祖形となった可能性があり、北烏池下層式の一例は底部が欠損しているが、おそらく平底をもつものとみられる。

この時期に比定される縫向I式には、大和盆地東南部に位置する関係から、東海地方特有のS字状口縫台付甕が少量併出するという。同じ現象は同地域の布留遺跡山口池地点4—B区第III層にも認められ、これは北烏池下層式や曲川式とも一部共有時間をもつようである。

また、都出氏の言う「タタキ平底手法」も本小期に併行する土器まで遡りうる実例が増えつつある。タタキ平底の類例は第V様式の前半まで遡上してもみられるので、今後は本質的な技法として吟味する必要があろう。

この時期の併行資料は、枚方市法院・京都市南日吉・崎崎・高槻市紅葉山・交野市南山・天理市検見・奈良市窟之庄・和歌山県笠島の各遺跡で出土しており、さらに船橋V—IIや川島20溝出土資料とも時間的共有関係があるようである。一方、この時期には、石器類がほぼ完全に消滅する。北烏池遺跡では石器が1点も出土しておらず、紅葉山遺跡などでは、これに替って鉄鏃・鉗などが検出されている。

なお、近畿圏の高地性集落は本小期をもってくまなく終焉をとげるものと考える。

小結 以上、畿内第V様式の変遷を前・後2時期に大別し、さらにそれをタイプロジーに基づき5小期に細分して試論を展開したが、ここでは遺跡の文化相そのものの遷移から編年試案にもう少し考察を加えておきたい。

数少ない一括資料によって細分された個々の小期は、層位的関係が良好な状態でとらえられたことによって設定されたものではなく、地域を異にする遺跡の違った条件のFund(Fund)を無理を承知の上、時間的な継続の系列に組み入れたものである。したがって、地域間相互の併行関係については各所で疑義を残しており、編年上の断絶も当然あることと思われる。5小期の細分を試みた理由はとくにないけれど、現段階における畿内第V様式類別の一つの境界と考える。これだけの細分を必要としない場合は、前半・後半の2期大別でこと足りるであろう。

畿内における弥生後期の遺跡を検討すると、先に細分した1小期の土器のみを単純に出土する遺跡はほとんどない。遺跡の様相としては2小期以上にまたがる例が普通である。また、遺跡範囲などが明確に捉えられる低地性遺跡は意外と少なく、むしろ標高50m以上の高所にある遺跡の様相の方がわかりやすい傾向にある。この点についても弥生後期という時期に内在する問題から解き明さねばならないが、高地性集落に関してみると、中期から継続・発展する遺跡(これを筆者は「中・後期継続型高地性集落」と呼ぶ)は、概ね後期前半Ⅱ期の時期をもって終焉する傾向がある。兵庫県の播磨男鹿島に所在する大山神社遺跡や六甲山系の荒神山・会下

山・城山・五ヶ山の各遺跡、枚方丘陵上の田ノ口山・藤田山遺跡などはその好例といえる。
_{(100) (101) (102)}
_{(103) (104)}

他方、後期単純の高地性遺跡には後期後半Ⅰ期以降の新しい段階になってから始まるものが多い。とくに、淀川水系の諸地域においてはそのことが指摘されている。つまり、畿内の高地性集落の消長は後期の前半と後半において一つの時期を経ているのである。このことは、石部・石野・森氏らによって主張されている中期・後期高地性集落2段階出現説の再検討を促すとともに、都出氏の考えるような中・後期一貫存続説にも同調し難いことを教えている。すなわち、畿内の高地性集落は弥生中期で中断するとみるよりは、後期の中頃に大きな転換があったとする方がより事実に即しているのである。

後期前半と後半とを画する文化現象の急変はなにも高地性集落の消長にかぎられることではない。石器の消滅などもよく分析してみると、石鎚・石槍・石錐などの主要武器・利器が後期前半Ⅱ期までは予想以上に残って使用されていることが知られる。播磨の神戸市養田遺跡、攝津の芦原市会下山遺跡、和泉の和泉市惣ノ池遺跡、河内の東大阪市岩滝山遺跡などの住居址に関連する資料を瞥見すると、意外にも上述したような石製利器類が数多く検出されている。中期末をもってすべての石器が消滅したとみる過去の見解も、今後は小地域ごとに再検討する必要があるのではなかろうか。私は石鎚・石槍などの石器生産については、後期に入ってしまお依然として作り続けられたものと考えており、その消滅の時期を一応後期後半Ⅰ期と推測する。ただし、出土例は中期末の大型化の極限に達したものではなく、石鎚などは粗製品が多くみられることより、製作技術的にはかなり稚拙なものであったろうことが考えられる。それは技術そのものの後退というより、鉄器の漸進的な普及が帰因しての生産性の從属化現象として捉えられるのではあるまい。

これに対して、後期後半期に入って顕著になった事象を考察してみると、先にも指摘したように、後期後半Ⅰ期には新器種・新器形の出現があげられる。二重口縁の壺形土器・細頸壺・手焙祖形鉢の登場はその代表的なものであり、皿形高杯や長頸壺の形態変化も顕著となっている。それとともに、この時期以降には土器生産における大量生産化が強調でき、畿内第V様式土器全体での後半期土器の占める割合は前半期のそれを完全に圧倒している。この現象は単に人口の急増のみによって説明することではなく、主要石器の消滅・高地性集落の消長とも関連した社会構造の急速な変化に対応するものであろう。後期後半Ⅱ期以降、小型の高杯・鉢・壺が増大することも決して無関係ではなく、食體形態の在り方が、大幅に変わったためとみることもできる。畿内において円形プラン住居が急激に減り、これに替って隅円方形プランの住居址が普遍化してゆくのもちょうどこの頃である。河内の東山遺跡や和泉の観音寺山遺跡は円形→方形の形態変遷が十分認識され、後期後半Ⅰ期を中心に比較的長期にわたって継続した集落址とみられる。

このように、土器様式上の変化からは第IV様式と第V様式との間に大きな画期があるけれど、生活様式のあらゆる要素が激変するのは、意外にも後期後半Ⅰ期頃からではないかと推測

することも一考に値するのではなかろうか。

(111)

6. 大師山遺跡出土土器の様相と占める位置

前述してきた畿内第V様式の編年細分作業と関連して、大師山遺跡出土土器の相対年代を検討する。本遺跡出土土器のタイピングについては、第3章第5節で記述したとおりであるが、出土資料のうちから典型的なものを抽出・改変して器種ごとにまとめると、第109・110図のようにになる。ただし、この表では底部についても型式分類を試みており、底部の形態にも器種差以外に時期的特徴を反映していると考えた。また、土器型式をA・B・C…、I・II、I・2のよごとく細分したが、必ずしも同符号のものが各器種間で関連し合う型式とはかぎらない。

さて、各器種ごとに出土土器の様相をみてみよう。

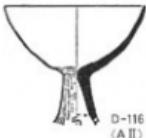
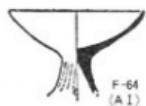
壺形土器はA～Dに4分類したが、口縁部を下方へ拡張する壺Aはもっとも古い要素をもつものであり、端面には凹線文・擬凹線が施されている。型式的には中期後半にまで遡るものである。

口縁端部を肥厚させ、そこに装飾をみる壺Bも、B Iには西ノ辻I式の特徴をもつもの（D-I・A-I）を含むなど型的には古い様相を帯びている。

しかし、これら壺A・壺Bが大師山出土の壺形土器全体の中で占める割合は非常に低く、また、他器種にはこれらとセットをなすべき型式のものをみないので、こうした土器が必ずしも遺跡形成の上眼を示しているとは断言できない。ここでは古い様相をもった少数の壺形土器が大師山の主体時期まで残って使用されたものと考えておきたい。ただし、胴部の破片（A-2・3）は同一個体であり、飾描直線文と同扇形文の文様構成から中期に属する土器とみられ、この2点の存在にはなお疑義を残している。壺Cは本遺跡の壺形土器の主流を占めるだけではなく、畿内第V様式の中でも主要な型式をなすものであるが、他遺跡の分析から時期的に限定されるものではなく、壺C Iは唐古45号竪穴上層式まで、壺C II-I・2は唐古45号式の時期までは確実に残る。したがって、壺Cを相対時期決定の拠所にすることはできないが、今後、壺全体の中占める割合の多寡によってはある程度の見通し立てができるかもしれない。ただし、1号住居址床面検出の壺C I（第54図）はかなり新しい様相を示すものである。二重口縁を有する壺Dは、壺形土器の中ではもっとも時期把握の指標となりうる型式であり、口縁部の曲折部に稜をもつ壺D Iは前述した編年試案においては後期後半I期になってから出現する器種である。大師山には唐古45号竪穴出土例や田能6Y調査区第2湧出土例に近似するもの（D-16）もみられるが、それより型的に後出のもの（C-28・C-30）もあり、新しい様相をもつものの方が多い。

屈曲部に稜の入らない壺D IIは、土器集成では壺Eに分類されている型式で、量的には壺D Iの倍ほど存在する。河内地域の他遺跡ではまとまって出土することが稀な器形で、大師山で特徴的な壺と言えよう。

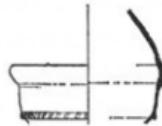
高杯形土器



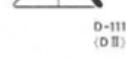
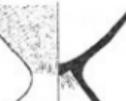
鉢形土器



手焙形土器

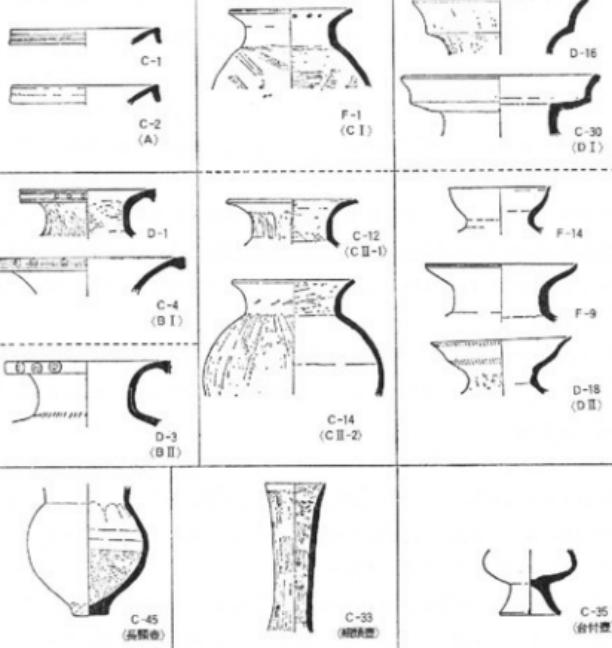


底部

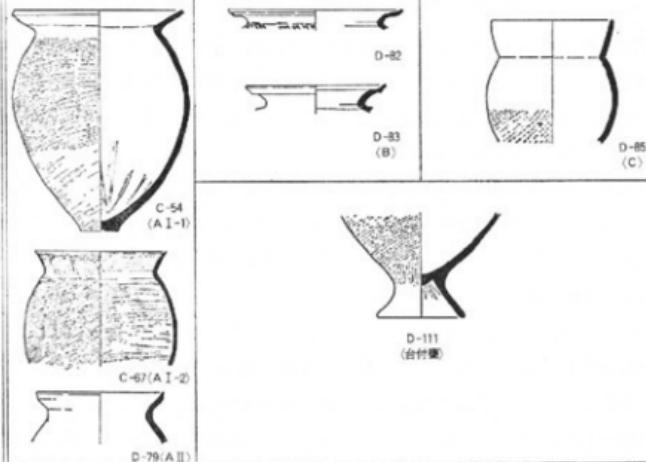


第109図 大師山遺跡出土土器の型式分類(1)

壺形土器



甕形土器



第110図 大師山遺跡出土土器の型式分類（2）

長頸壺形土器は僅少であり、他方、細頸壺形土器は数多い。また、台付長頸壺が1点含まれていることも特筆せねばならない。細頸壺が出現するのは編年試表では後期後半Ⅰ期に特徴的な現象で、本遺跡出土例の多くは口縁部が全体に外反し（C-31・C-33・C-34・D-20）、このタイプの壺では古い要素をよくとどめている。隣接地域では中河内の上六万寺遺跡出土例に酷似し、ほぼ同時期に比定できる。ただし、C地区の斜面出土資料においては台付長頸壺と共に存するのでもう少し年代を下げて考えるべきかもしれない。

（長頸壺＝細頸壺）という出土数多寡の関係は、南河内の地域色とみるよりも、本遺跡の時期的様相を反映していると考える。つまり、長頸壺が激減し、替って細頸壺が主要器種として成立する過渡期と捉え、壺D I・壺D IIなどが目立ってくることと軌を一にした現象として理解しておきたい。

壺形土器はA～Cの3タイプに分類でき、これに脚台のつく形態のものが加わる。このうち壺Cは僅か1点しかなく（D-85）、形態的には壺に分類すべきものであるが、煤が付着しているので壺と考えた。

壺Aは後期通有の口縁部が「く」の字状に外反するものを一括したが、口縁部の微妙な成形差によりA I・A IIに大別でき、前者は口縁端部の端面の存否によってさらにA I-1・A I-2に細分できる。壺Aの出土数は大量で、壺形土器全体の9割近くを占めているが、中でもA Iタイプのものが他を圧倒的に凌駕している。

壺A I-1と壺A I-2の比率はほぼ同数であるが、前者の完形品（C-54）と後者の完形品（F-50・C-63・D-73・D-113）を比べると、時期的な差を看取ることができる。すなわち、壺A I-1は後期前半の技法で製作されたものが多く、（C-54）などは西ノ辻E式に形式近似している。これに対し、壺A I-2には、都山氏の言う「口縁叩き出し手法」と「連続ラセンタキ手法」の不完全なものが認められ、後期後半を指向するものが大多数を占めている。口縁端部に明確な端面をもたないこととつくりが粗雑なことは、口縁叩き出し手法によるところが大きいものと思われる。

壺A IIと典型的な受口状口縁をもつ壺Bとの形態的な違いは、必ずしも明確でないが、壺A IIの口縁部の変化は壺D IIのテクニックに相通するものがあり、壺Bは上六万寺式に特徴的な技法そのものを採用したものといえる。両者は壺A Iに比して少量であるけれども、相対時期を見究める際にはメルクマールとなる型式と思われる。

台付壺は図示した中には1点存在するだけで（D-111）、過大評価はできないが、編年的に後期後半Ⅱ期以降に登場する器形で、その態様と脚台接続法はいわゆる東海系のS字状口縁台付壺とも異なる。形状は唐古45号堅穴上層式に相似たものようである。

高杯形土器も比較的出土しており、壺・壺などより時期を假定しやすい型式群を構成しているので注意する必要があろう。

椀形杯部を有するものを高杯A、皿形杯部を有するものを高杯Bとしたが、両者の割合は図

化していないものを含めてほぼ 1 : 5 である。この比率は摂津の会下山遺跡など後期前半に中心をもつ遺跡の実態と変らず、先に述べたように、後期高杯形土器の型式分化とその組成の趨勢を反映したものといえよう。

高杯 A は例外的に深い杯部をもつもの（高杯 A II・D-116）が存在するが、概ね A I タイプのもので安定している。また、高杯 A II の中には西ノ辻 D 地点式に含まれる 1 点（P1.13B-15）に酷似するもの（D-118）がある。

高杯 B は、B I・B II・B III に細別したが、いずれも後期前半期の形態から器形分化が進んでいる。量的には B I が圧倒的に多く、B II・B III は少量伴う程度である。

高杯 B I は、B II・B III に比して口径の大きいものが主体をなし、唐古 70 号地点式や西ノ辻 E 地点式の器径をほほ保っているが、口縁立上りの外反度は強まり、口径と比較すると延びてゆく傾向にある。（D-124）はその極限に達したものといえ、本型式の高杯にあってはもっとも新しい位置を占めるものと思われる。同様な形態の高杯の発展型式は、摂津の神戸市荒神山遺跡の M ライン 26 の石組状列石付近より出土した特殊土器にもみられる。⁽¹⁰⁾

完形品の（F-51）・（C-90）・（C-91）などは、上六万寺式に併行、ないしは北烏池下層式とも一部時間を共有するかもしれない。同じく完形の（C-92）は中ノ田第 1 潟に類品があり、後期後半 II 期に比定できる。口径に比べ立上りの低い（F-59）・（D-130）は田能 6 Y 調査区第 2 潟出土例に近く、後期後半ではやや古い位置を占めるが、実例は少ない。

このように、大師山遺跡出土の高杯 B I は、概ね後期後半の I 期～II 期の時期に考定でき、主体は II 期にあるようである。

器種が小さく、杯部立上りの反りの少ない高杯 B II は、大きさから言えば高杯 A と大差なく、また畿内の他遺跡でも実例僅少の型式である。後期前半で終焉する芦屋市会下山遺跡では 1 点認められる程度にすぎず（Q 地区 50）、後期後半に入つてから確立をみた型式と考える。中ノ田第 1 潟の 1 例（実測図 17）⁽⁴⁶⁾ は杯部の稜を失つてはいるが、この範囲で捉えることが可能である。

高杯 B III は、杯部立上りの曲折部外面に特徴のある型式で、細分はしなかつたが、軽く凸帯のつくような感じで稜が強調されるもの（D-132・D-133）と有段でもって形成されるもの（D-134・D-135）とがある。前者は、同じ河内の枚方市渚院、摂津の尼崎市中ノ田第 1 潟・高槻市紅葉山、大和の唐古 45 号墳穴上層・下明寺、播磨の川島 20 潟・大中第 1・3 土器群・兼田 B 地区などの遺跡に分布し、その盛行時期を後期後半 II 期に求めることができる。これに対し、後者も坂出・門前（下層 -10 層）・井原至山・龟井や川島 20 潟・大中第 1・3 土器群・紅葉山など重複する遺跡をもちつつ、より西の地域で広くみられ、遠く大分県安国寺遺跡にも類品を認める。流行の中心はやはり後期後半 II 期であり、高杯 B III は総じてこの時期のメルクマールになる器形といえよう。

脚部に関してはとくにふれなかつたが、B I 型式の杯部に装着するとみられるものがもっと

も多いように思われる。

鉢形土器は全容を知り得るもののが微量であり、時期把握の目安には成り難いが、完形に近い大型鉢B（F-75・F-76）は口縁部の調整テクニックが上六万寺遺跡出土の諸例と同巧で、ほぼ後期後半Ⅰ期頃に比定できる。

体部中央に刻目凸帯をめぐらせる鉢B（F-78）は、手培形土器から戻を取り除いた形態をとるやや特殊な土器である。類品は隣接地の河南町東山遺跡などでも出土しており、手培の先行形態を考える上に重要な器形と思われる。口縁部の造作は上六万寺式の鉢に共通しており、手培の祖形が上六万寺式期に出現したことを想定させる。鉢の中でもっとも新しい形態をとるものは、底部を穿孔する鉢Cで、（F-73）はその典型である。

底部残穴にも鉢形土器に該当するものが数多く含まれていると思われる所以、その検討は後論する。

器台形土器はこれだけの土器が出土しているにもかかわらず、破片すら1点もない。器台の器種欠落は大師山出土土器の相対時期を示唆するものと思われるが、一方では手培形土器が何点か認められることは注意しなければならない。

底部はA（純然たる平底）・B（各種上げ底）・C（丸底ないしはその兆しのみえるもの）・D（脚台を有するもの）などに大別でき、それぞれ次のように細別される。

底部Aは、突出するものをA I、なめらかに移行するものをA II、底部末端が外へ若干張り出すものをA II-2、そうでないものをA II-1に細分した。底部Aは壺・甕の2器種にみられるが、壺形土器の残穴がもっとも多い。大師山の時期では鉢がこの形態をとるのは稀である（F-76・F-77）。

底部Bは、中央にかけて軽く凹むもの（B I）、中央のみがドーナツ状に凹むもの（B II）、指頭成形によって上げ底状になるもの（B III）、高台状のものが付設されるもの（B IV）に分類される。B II型式の底部形態は都出比呂志氏が「底部輪台技法」と呼んだものに相当し、甕形土器の底部に限って認められる点に特色がある。ただし、都出氏の説明するような「粘土組を巻いて直径2~3cmの小さいドーナツ状の輪（輪台）をつくり、輪の内部は充填しないまま、これを基礎にしてその上に粘土組を引き上げ、鉢形の逆円錐台をつくる」作業工程に関しては、少なからず疑義があるので、その問題については製作技術的検討を踏まえて次章であらためて考察したい。結論のみ言うならば、この種の底部形態をとるものは輪状粘土組添加による「底部再成形技法」と称すべきものと考える。なお、B Iタイプのものにも底面中央凹部の微調整によってB IIが変形したと解釈できるものがいくつか含まれている。

（D-104）を典型とするB IIIタイプの底部は、指先によってひねり出され形の上げ底を呈しているが、その先端は尖るように成形されることが通常で、同時に外面には顕著な指頭圧痕を残すことが一つの特徴となっている。この種の底部は（C-84）・（D-102）・（D-105）・（D-106）・（F-49）など、先に甕形土器に分類したもので占められているが、後期後半Ⅱ

期に編年した中ノ田遺跡第1溝出土土器や唐古45号窓穴上層式では直口口縁の鉢形土器（「土器集成」鉢A）に限られており、大師山出土品の多くも鉢とみられる。報告編では鉢の僅少性を説いているが、実のところ底部をみるとかぎり、鉢形土器も比較的の出土している。

B IV型式は外觀的には前述したB III型式に近似するが、明らかに高台を造作している点に差違を見出すことができる。大師山での実数は少なく、B III型式の並式として捉えてよいものと思われる。

底部Cは、いわゆる丸底に近いものを一括した。実例は少ない。かろうじて底部を残すもの（C I）とほぼ丸底になっているもの（C II）とがある。C Iの（D-32）は壺、C IIの（D-110）は甕に比定した。

底部Dは、脚台を有するものを取上げた。D Iとした内部中実の脚台の付される（D-109）は、非常に特異な形態で、他遺跡でも類品に乏しい。脚台中空の（D-111）のような典型的な台付壺（D II）もこれ一例のみで、製作技法的には連続成形手法がとられ、円板充填法によって底部を完結させている。技法的には検討を経ていないが、唐古45号上層式や中ノ田第1溝の諸例に近く、後期後半II期頃に比定してよい。

以上、壺・甕・鉢・高杯・底部の順に個々の土器を型式化し、その構成要素と多寡を概観してきたが、大師山遺跡出土の土器型式群は決して安定しているとはいえない。しかし、先に見通しを披露した畿内第V様式の偏年試表と照應させ、さらに各器種の主要型式を摘要するならば、比較的短期間の時期を中心としたものであることが知られる。

相対時期の限定できる主要型式とは、壺D I・壺D II・細頸壺・甕A I-2・甕A II・甕B・高杯B I-1・高杯B II・高杯B III・大型鉢Bなどで、これらの型式の多くは遡源がいずれも後期後半I期にあり、型式群として各器種が揃い、定形化するのは後半II期の階梯になってからであるので、大師山遺跡の中心もこの時期に比定できる。台付長頸壺や台付甕、高杯B I-2などが微量存在することも上記した年代考定と何ら矛盾しない。底部B IIIが目立つようになるのもちょうどこの頃からである。

既に指摘したとおり、甕Cの一群、甕A I-1の一群、高杯A Iなどは弥生後期の全期間を通じて普遍的にみられる型式であり、後期後半I・II期にも当然あってよい。

これに対して、壺A・壺B I・壺B IIは從来より第V様式でも古い様相をもつものと理解されてきた型式であるけれども、先に西ノ辻I式裝飾壺の伝統制を強調したように、本遺跡でも少なくとも後期後半I期に併行する段階までは残ることを示している。

また、器台形土器が1点も存在しないことと手捨形土器が比較的見出されることも、後期後半II期という時期を考える上で示唆を与えているものと思う。

さらに、甕形土器の一部には北烏池下層式特有の連続ラセン叩き手法が看取されるので、もっとも新しい段階の土器は後期後半III期とも若干共有の時間をもつことが考えられる。

これだけ大量の弥生式土器を出土しながら石器が僅少なこと（2点のみ）、鐵器が出土してい

ることも本遺跡の占める時期を見定める上に重要である。

以上の時期的様相を隣接地域の遺跡と比較すると、北河内の鷹塚山・ごんぼう山の各遺跡には併行し、中河内の上六万寺遺跡よりは後出の要素をもっている。また、枚方市諸院遺跡や高槻市紅葉山遺跡などが形成された時期よりは若干先行するものようである。

いずれにせよ、出土土器からみるかぎり、大師山遺跡は畿内南部においてはもっとも新しい時期を占める高地性集落であり、比較的短期間の経年年代をもつ点に大きな特色があるといえよう。

7. 結 論

近畿地方における弥生時代後期という一文化小期が大きな歴史的意義を内包し、きわめてシグニフィカントな時代であったことは、今さら多言を要さないであろう。田辺昭三・佐原真尚氏は、「大和政権は、突然に出現したのではない。」という大前提を柱に、その成立に関しては、「国家権力をうみだした諸条件の歴史的発展が、畿内という地域のなかで説明」される必要があるとし、その視点に立脚して近畿地方における弥生時代後期の重要性を強調した。⁽¹¹⁰⁾それは近畿政権の前史として、また女王卑弥呼の登場を招来せしめた時代として、さらに⁽¹¹¹⁾は邪馬台国の成立をめぐる諸問題との連関と相まって、弥生時代においてもっとも政治性の具現化され、反映をみた時期とみなすことができる。加えて我が国における階級社会形成の一画期点にも相当し、各地域に蟠據した農業共同体が生産性の優劣関係を土台に、さらに広範な地域にわたって政治的地域集団を編成する動きとなつてあらわれており、決してゆるがせにはできない歴史的因素を多分にもっているからにはかならない。

畿内弥生後期社会の諸様相は、それだけに複雑なものであったろうし、かつその実体の解明にも当然様々な困難が伴うに相違ない。そういう意味では、「波乱万丈の（弥生……森岡註）中期を終えると、静かな後期をむかえる。」という見方も表面的な把握であるような気がしてならず、矛盾を感じる一面が存することも確かである。⁽¹¹²⁾

本小稿によってその一端が明らかにされたように、この時期に比定される畿内第V様式土器は從來考えられてきたほど単純ではなさそうである。時期的な変貌はもちろんのこと、器種・器形によってはかなりの地域色も介在する。以前、今里幾次氏は播磨地域の弥生式七器の動態を精彩に論じたが、後期弥生式土器を取り上げた中で、「弥生後期の細分が、なぜに決定的なものとならないのであろうか」という誰しもが遭遇する疑問を提出し、「とくに関係資料が質的にも量的にも恵まれているはずの畿内地方においてさえ」と強調した。⁽¹¹³⁾そして、その主たる原因として、「弥生後期の期間が、それ以前の前期・中期に比して、時間的に短かったこと、後期弥生式土器が一般に無文化・粗製化・定型化することによって、変化の状態や、特徴の把握を看取するに困難であること、初期土器との分離についても明確さを欠いていること、など」をあげられたが、筆者もまた同感である。

だが、前述したように、近年の資料の累積はこうした研究上の難点をいくつかの部分において克服しつつあり、打開の方向へと導かれていることも確かであろう。たとえば、最近畿内第Ⅶ様式土器としての認識が提唱された庄内式土器についても、それが弥生式土器であるのか、土師器であるのかといった議論をおし進めるよりも、そういう性格の土器は土器として卒直に認め、むしろ両者の要素がいかなる所にどのような形で交錯し合っているのかという点を明らかにしなければならないと思う。つまり、一線を引くことを急がず、その接点の不明確さを各地方・各地域で改めて検討し、より精度の高い併行関係を把握する必要があると考える。どの型式の土器をもって土師器=古墳時代につくられた土器とするかはそうした作業が完璧なものになってからでも遅くはないと思うのは果して誤った考え方なのであろうか。

土器の形態変遷を考古学的にもっとも正しく捉える方法は、とりも直さず層位的発掘の成果であることはあらゆるところで説かれているとおりである。⁽¹³⁾ 層位は型式に優先する⁽¹⁴⁾ という方法論の大きな鉄則、この基本的な作業をぬきにしてはいかなる土器の編年も語れはしない。しかし、こと畿内地方の後期弥生式土器を問題にした場合、話は別である。佐原氏や今里氏、筆者も含めて多くの研究者が既に認知しているように、畿内弥生後期の存続期間は常識的にみて短かい。したがって、その遺物包含層もかなり単純なものであろうことは十分推測でき、事実、第V様式の包含層は、多量の土器片をぎっしりと含みながらも明確に分層することはむずかしいとよく言われる。地質学的にみても、弥生時代後期は自然環境や気候条件が比較的安定していたとみえ、弥生前期末～中期初頭、中期末に近畿地方のかなり広範な地域を襲ったらしい洪水もほとんどなかったようである。その結果、V様式の土器包含層をいくつかに隔壁するような顕著な砂層・砂疊層の堆積現象もありみられない。従来より発掘現場で「後期単純」として一まとめに取上げられた所以である。

こうした見方は、承前として述べてきたような途上しつつある層位的追究を止揚させてしまうことにもなりかねないが、本小論のごとき土器細分の極限に近いところを今ある資料のみで問題にするときには、たえず現実を振り返る立場も忘れてはなるまい。すなわち、同じ一括資料であっても、そこには「製作の同時性」に非常に近いものから、単に「廃絶の同時性」にすぎないものまで種々多様な資料の性格があるのであり、今回用いた資料の多くは大方後者に属している。大師山遺跡出土土器はその典型的な産物である。そのことはタイムスケールとしての土器型式の厳然性を細分が徹底されているがために薄いものにしてしまっており、将来、「廃絶の同時性」の中から抽出された「製作の同時性」を持った型式を、再び他の「廃絶の同時性」によって律せられた資料の中で検討する、という操作⁽¹⁵⁾を検証という形で蓄積し、その補正を期さねばならない。

以上、時期尚早と知りながら、また大師山遺跡の形成時期を検討せんがためとはいえ、畿内第V様式土器の細分論を長々と展開し、入りすぎの感がなきにしもあらずだが、その究極の目的は短絡的な土器編年論を脱却して、より高次元の社会構造の変革を捉えるところにある。

そうした点では、弥生時代後期後半の始まりには新しい社会への兆しが感じられる。

〔註〕

1. 大郡山遺跡の尾根上で検出されている2基の住居址内から出土した弥生式土器は各々微量であり、床面直上に埋棄された資料で完好なものは、1号住居址出土の壺形土器2点にすぎない。また、両住居址には何回にもわたった増・改築の痕跡は認められず、比較的単純な生活面を残している。
- これらのことを前提に集落廃絶後の土器の搬出と近接する斜面・谷間にへの投棄を考えた。地域と立地を異にするけれど、兵庫県尼崎市田能遺跡第1B調査区では、沼沢推定地の傾斜面から底に至る幅4m、長さ12mの範囲に、後期に属する大量の土器がころげ落ちた状態で密集していた事実があり、その背景には様々な事情を類推することができる。
- 全国的に齊一性に富んだ前方後円墳が出現する段階には、畿内では高地性集落が營まれなかつたであろうという見通しであり、あくまでも高地性集落を弥生時代社会の産物として理解する立場をとる。なお、高地性集落と前期古墳との関連について、同様な時間的経過を説く森浩一氏の意見もある（森 浩一「前期古墳と高地性集落の関連」「古墳」＜カラーブックス212＞1970年・『シンポジウム 古墳時代の考古学』「発生期の高冢古墳の問題」1970年におけるP213・214・225・226の森氏の発言内容）。
- 「大和政権の成立については、国家権力をうみだした諸条件の歴史的発展が、畿内という地域のなかで説明されなければならない」という視点から、「この時期における畿内の編年を確立すること」が急がれている（田辺昭三・佐原 真「弥生文化の発展と地域性—近畿」『日本の考古学』Ⅱ 弥生時代 1966年）。
- 近畿地方における弥生時代後期は、その実年代がA.D. 180年前後にあったと推定される倭國大乱を経た頃から古墳の発生をみる3世紀末頃までのおよそ1世紀間に比定され、この見当は一応の定説になっている。また、弥生時代を紀元前200年頃に始まるものとし、前期を150年間、中期を250年間、後期を100年間に割振る想定もあって（佐原 真「大和川と淀川」「古代の日本」5近畿 1970年）、いずれも短期間に捉えている。
5. 森本六爾・小林行雄「弥生式文化末期の研究」「考古学」第6巻第3号 1935年
6. 末永雅雄・小林行雄・藤間謙二郎「大和磨古弥生式遺跡の研究」〈京都帝國大学文学部考古学研究報告 第16冊〉 1943年
7. 小林行雄「大阪府枚方市鶴田町西ノ辻遺跡 I 地点の土器」同「大阪府枚方市鶴田町西ノ辻遺跡 E・F・D・H地点の土器」「弥生式土器集成」資料編 1958年
8. 坪井清足「穗積式土器」「日本考古学辞典」1962年
9. 四中琢「布留式以前」「考古学研究」第12巻第2号 1965年
10. 原口正三「大阪府松原市上田町 遺跡の調査」「大阪府立島上高等学校研究紀要」復刊第3号 1968年
11. 佐原 真「畿内地方」「弥生式土器集成」本編2 1968年
12. 石野博信「3世紀の高城と水城」「古代学研究」第68号 1973年
13. 都出比呂志「古墳出現前夜の集団関係——淀川水系を中心——」「考古学研究」第20巻第4号 1974年
14. 筆者の発掘経験では、大和盆地低窪部に所在する奈良県橿原市中曾司遺跡の調査において、黒色粘土の厚い後期包含層を5cmぐらいずつ機械的に分層発掘している（1970年7月、奈良県立橿原考古学研究所調査）。
15. 今里幾次「攝都弥生式土器の動態2」「考古学研究」第16巻第1号 1969年
16. 『シンポジウム 弥生時代の考古学』 1973年 学生社
17. 石野博信「集落の問題をめぐって」「古代学研究」第61号＜シンポジウム 弥生式文化研究の諸問題＞ 1971年
石野博信「考古学から見た古代日本の住居」「日本古代文化の探求 家」 1975年
社会思想社
18. その一端は、考古学研究会第30回総会の席上、研究報告をめぐる討議の中で述べたことがある（「古墳出現前夜の集団関係」都出報

- 告>をめぐる附録』P25の森岡発言。「考古学研究』第21巻第1号 1974年)
19. ここで言う「西ノ辻諸型式」とは、畿内第V様式と直接関連する西ノ辻I地点式・E地点式・D地点式及びそれらに付随して関係のある西ノ辻N地点式の都合4型式を指し、これらを包括した呼称として用いている。したがって、小林行雄氏が西ノ辻I地点に限定して「西ノ辻式」という名称を使用すること(前掲書 註7文献)とは全く別である。
 20. 李本隆裕「鬼塚遺跡」『東大阪市遺跡保護調査会年報』I 1975年 東大阪市遺跡保護調査会
 21. 「岩瀬山遺跡」<埋蔵文化財泡蔵地調査概報5> 1971年 東大阪市教育委員会
 22. 斎藤和夫・山田良三『ごんぼう山弥生式遺跡発掘調査報告』1970年 放方既製服団地調査委員会
 23. 原口正三 他「高槻市史」第6巻(考古編) 1973年 高槻市役所
 24. 堅田直「岸和田市春木八幡山遺跡の研究」<帝塚山大学考古学研究報告 第1輯> 1965年 帝塚山大学考古学研究室
 25. 村川行弘・石野博信「会下山遺跡」<芦屋市文化財調査報告 第3集> 1964年 芦屋市教育委員会
 26. 山田良三『三山木弥生式遺跡発掘調査報告』 1968年 京都府田辺町郷土史会・京都府立城南高等学校
 27. 横干善教「権現山土墳弥生式遺跡」「奈良県史跡名勝天然記念物調査抄録』9 1956年
 28. 上田哲也 他「山陽新幹線建設地内兵庫県埋蔵文化財調査報告書」 1971年 兵庫県教育委員会・龍野市教育委員会
 29. 「播磨大中」 1965年 播磨町教育委員会
 30. 磯崎正彦 他「兵庫県太子町常全遺跡調査概要」「山陽新幹線建設地内兵庫県埋蔵文化財調査報告書」<兵庫県文化財調査報告書 第4集> 1971年 兵庫県教育委員会
 31. 笠井保夫・森浩一「鹿ヶ峯遺跡発掘調査報告」 1972年 和歌山県教育委員会
 32. 森浩一・白石太一郎「大谷川遺跡」「紀淡・鳴門海峡地帶における考古学調査報告」<同志社大学文学部考古学調査報告 第2冊> 1968年 同志社大学文学部文化学科
 33. 「井辺弥生式遺跡発掘調査報告」<社会教
- 育資料(24)> 1965年 和歌山市教育委員会
34. 笠井保夫「播磨市隅田町血縁遺跡緊急発掘調査報告書」 1973年 和歌山県教育委員会・播磨本市教育委員会
 35. 「昭和48年度宮波遺跡調査報告」 1975年 野洲町教育委員会。
 36. 尼崎市立田能賀科館学芸員・福井英治氏、東奈良遺跡調査会・山口安代氏のご教示による。いずれも最近の整備の進捗に伴って確認されたものである。
 37. 最近の森岡の分析による。詳細については近く公表される予定である(村川行弘・森岡秀人「弥生時代」「新修芦屋市史(資料篇)」第1巻 1976年 芦屋市役所)。
 38. 実例は少ないが、皿形高杯の杯部外面に数条の四線文をもつ高杯こそ、その間を埋めることのできる資料と考る。完形品で確かめたわけではないけれど、柱状の中筋の様相をもった脚部が装着するものと思われる。
 39. 佐原真「大和川と淀川」「古代の日本』5近畿 1970年
 40. 大野嶽夫「和歌山市井辺遺跡の岡崎団地より出土の後期弥生式土器」「古代学研究』第51号 1968年
 41. 高槻市埋蔵文化財資料館彌託・西口陽一氏のご原意により資料の一部を実見させていただいた。
 42. この変遷の見通しのうち、「会下山住居跡床面」の資料を後期前半に、田能6Y調査区第2構の一括資料を後期後半に比定する考えは既に石野博信氏によって出されている(前掲書 註12文献)。
 43. 村川・石野(1964・註25文献)及び村川・森洞(1976・註37文献)に詳しい。
 44. 筆者は、「会下山F住居跡床面」→「会下山L住居跡床面」という見通しを立てている。
 45. 「田能遺跡概報」<尼崎市文化財調査報告第5集> 1967年 尼崎市田能遺跡発掘調査委員会・尼崎市教育委員会
 46. 正広庄・岸岡弘・橋爪康至「尼崎市中ノ田遺跡」<尼崎市文化財調査報告第6集> 1971年 山陽新幹線大阪工事局・兵庫県教育委員会・尼崎市教育委員会
 47. 尼崎市教育委員会技師・橋爪康至氏より、報告書(註46文献)の図版6の土器実測図は

- 第1溝出土品、図版7の土器実測図は第2溝出土品であることと、図版7上段掲載の石器類は第1溝の土器群に伴出したこと、第1溝出土七資料のうち、図版6-10の土器は上層において検出されたもので夾雜物要素が強いことなどの指摘とご教示を受けた。これらのこととは報告書では説明されていない事実でもあり、この場をかりて公表しておきたい。
48. 橋爪氏のご教示による。
49. 「島上郡跡発掘調査概要Ⅱ」<大阪府文化財調査概要1972-1> 1973年 大阪府教育委員会
50. 「安濃遺跡発掘調査概要」(パンフレット) 1972年 大阪府教育委員会・高槻市教育委員会
なお、第II号方形周溝墓の築造時期が第II様式まで遡りうることは、最近の出土土器整理によって判明した事実である(近畿地区埋蔵文化財技師の会 昭和50年度12月例会〔テーマ“方形周溝墓”〕における高槻市教委・森田技師の説明による)。
51. 京都大学考古学研究室・都出比呂志氏のご教示による。
52. 福永信雄「上六万寺遺跡」『東大阪市遺跡保護調査年報』I 1975年 東大阪市遺跡保護調査会
53. 長山雅一 他 『大阪市平野区内 長原遺跡発掘調査中間報告——I』 1975年 長原遺跡調査会
54. 神戸市立考古館の第7回特別展“生活用具の歴史展——石器時代から現代まで——”にて18点の完形資料が公表された(『生活用具の歴史展』出品目録 1975年)。
55. 「池上遺跡の調査——J地区における遺構群・J地区井戸群発見の土器」『昭和45年度第2版和田道内遺跡発掘調査報告書3』 1971年 第2版和田道内遺跡調査会
56. 白石太一郎「天理市平等坊・岩室遺跡発掘調査概要」 1970年 奈良県教育委員会
57. 蓬田雅昭「大和における古式土器の実態——天理市布留遺跡出土資料——」『古代文化』Vol. 26 1974年 国立古今学術院
58. 細干善教「大和曲川遺跡出土の弥生式土器について」『古代学研究』第26号 1960年
59. 石野博信「大和の弥生時代」『橿原考古学研究所紀要 考古学論叢』第2冊 1973年
60. 石野博信「奈良県御向遺跡の調査——三輪山麓における古墳時代前期集落の問題——」『古代学研究』第65号 1972年
61. 石野博信・河上邦彦「橿原市中曾司遺跡予察調査の概要」『青陵』No.17 奈良県教育委員会 橿原考古学研究所叢報 1971年
62. 石野博信・前川実知雄「橿原市一町遺跡前殿地区的調査概要」『青陵』No.17 1971年
63. 泉森政・龜田博・島田隆昌「大福遺跡——発掘調査概要——」 1975年 奈良県立橿原考古学研究所
64. 近江系の受口状口縁変形土器の形態変遷や時期細分がどの程度まで進んでいるかは、この地方の土器に疎い私には不詳と言わざるを得ないが、東海地方西部における秀生後期から土師器にかけての銅年分類(大參義一「弥生式土器から土師器へ——東海地方西部の場合——」『名古屋大学文学部研究論集』47 1968年)と対比させる試みもみられ、山中期→矢山期→元里期との併行関係が考定されている(円勝寺発掘調査団「円勝寺の発掘調査く上く」『仏教藝術』第82号 1971年)。
- また、この種の変形土器の他地域への移動現象と時期の問題についても最近、分析が深められつつある(藤原 学・森鶴秀人「結語」「垂水遺跡第1次発掘調査報告」 1975年 吹田市史編纂室・関西大学考古学研究室)。
65. 奈良国立文化財研究所技官・佐原 真氏からお聞きしたことがある。
66. 奈良県立橿原考古学研究所1969年発掘調査資料。(山田良三「東大寺山古墳群の調査」『青陵』No.15 1970年)
67. 龍谷大学考古学資料室1970年発掘調査資料。(網干善教「橿原市古川町御部山保原処理場用地内の遺跡確認調査概報」 1970年)
68. 藤原 学・森鶴秀人「大阪府吹田市垂水弥生遺跡出土資料I」 1973年 吹田市史編纂室・関西大学考古学研究室
『垂水遺跡第1次発掘調査概報』 1975年 吹田市史編纂室・関西大学考古学研究室
69. 田能資料館宇喜多・植井英治氏のご厚意により資料を実見して確認。肉眼観察のため明言はできぬが、生駒山地西麓でも平野部の土器とみられる。
70. 橿原 健「二重口縁をもつ土器の系譜と性

- 格』『考古学研究』第15卷第1号 1968年
71. 芦屋市教育委員会・郷土史料室所蔵資料。
72. 免山 雄「長津安威の土壤遺跡」
『古代学研究』第12号1971年
73. 江谷 寛・瀬川芳則「大阪府枚方市鷺塚山
弥生遺跡調査概要報告」1968年 鷺塚山遺
跡発掘調査団
74. 岡崎晋明「弥生時代」『大和考古資料目録』
3 1975年 奈良県立考古博物館
75. 都山比呂志氏の教示による(向日市立向
陽第2小学校所蔵資料)。
76. 円勝寺発掘調査団「円勝寺の発掘調査(上)」
『仏教藝術』82号 1971年
- 本例(実測図番号40)は、舞盤玉形の彌彌
形頭部の最大径部に2条の細い粘土鉢を貼付
け、さらにその間に棒状浮文によっていくつ
かに区画するなど、特異な施文がなされている。
同巧な文様帶を有する実例は芦屋市金下
山遺跡(註25文献)などにもみられ、時期的
にはやや遅れるかもしない。
77. 石野博信・村上敏揚・松下勝「播磨・吉
福遺跡—古墳時代前期集団墓の発見—」
『兵庫県埋蔵文化財調査報告書』第2集 1974
年 兵庫県社会文化協会
78. 「播磨・櫛現遺跡—兵庫県姫路市櫛現遺
跡調査概報—」『兵庫県文化財調査報告書
第6号』 1972年 兵庫県社会文化協会
79. 藤井祐介 他「井原至山遺跡」1975年
水上郡山南町
80. 尼崎市田能・中ノ田岡遺跡のものがとくに
目立ったのであろう。
81. 「研究報告をめぐる討議」の都出発言。
『考古学研究』第21卷第1号 1974年
82. 新しい様式の土器における彌彌形土器の複合
法を掲げ、「堺から肩部分形を除いて鉢形
に近い器も出来るなら、底部分形のみにても
一つの鉢に使えるであろう。」という指摘も
あり(小林行雄「土器の製作と他種の問題」
『考古学評論』第1卷第1号 1934年)、鉢と
壺の区別は製作当初より意識されることが少
ないと考えられがちであるが、上げ底鉢は一
つの創意のもとに作られたと考える。
83. 藤井直正・都山比呂志・河内歴史研究グル
ープ「原始・古代の枚岡」第1部(各説)
1966年
84. 「河内古代遺跡の研究」1970年 大阪府立
- 花園高校地歴部
85. 弥生時代の器台がもっと早く出現する
が畿内地方であり(唐古第IV様式)、もっと
早く姿を消すのも畿内であるところに歴史
的意義を見出さなければならない。
86. 手彌形土器出現の時期が弥生時代の終末期
に集中することは既に説かれたところであり
(江谷 寛『手彌形土器の再検討』『古代学
研究』第59号 1971年)、ここではその上限
をやや限制し得たにすぎない。
87. 香原正明 他「河南町東山弥生集落跡発
掘調査概報」1970年 大阪府教育委員会
88. 平川清文「猪尻遺跡調査概要報告」1972
年 枚方史料刊行会
89. 『京都大学文学部博物館考古学資料目録』
第1部 1960年 京都大学文学部
90. 片山長三「弥生時代」『枚方市史』第1巻
1967年 枚方市役所
91. 稲干善教「天理市塩池町弥生式遺跡」『奈
良県文化財報告』3 1960年 奈良県教育委
員会
92. 伊達宗泰「庭之庄遺跡」『奈良県抄報』14
1961年 奈良県教育委員会
93. 県内式期以前の資料とみられる。なお、当
遺跡からも、西ノ辺の古い様相のもの(Ⅰ式)
が併存していることは前論と関係して注目
する必要があろう(安井良三 他「南紀串本
笠鳩遺跡—発掘調査報告—」1969年
笠鳩遺跡発掘調査報告書刊行会)。
94. 田辺昭三・原口正三・田中 球・佐原 真
『船橋II』 1962年 平安学園考古学クラブ
95. 石野博信「川島・20滴の土師器群」「川島
・立岡遺跡(本文編)」 1971年 太子町教
育委員会
96. 首頭で述べた筆者の年代観と関連する。
97. 中でも、中期様式の土器を微量伴って後期
に盛行するタイプの高地性集落を、中期單純
のもの(「開発型高地性集落」)に対して「先
發展型高地性集落」と呼称してもよい(森岡秀
人「会下山弥生遺跡緊急調査報告」『芦屋市
文化財調査報告』第8集 1974年 芦屋市教
育委員会)。
98. 武藤 誠・石野博信「弥生文化—大山神
社遺跡—」『家島群島』 1962年
99. 阿久津 久 他「荒神山遺跡調査概報」
1970年 兵庫県教育委員会

100. 村川・石野・森興 前掲書(註25・97文献)
101. 村川行弘「芦屋城山遺跡調査概報」『芦屋市文化財調査報告』第1集 1959年 芦屋市教育委員会
102. 村川行弘「西宮市五ヶ山遺跡」『芦屋市文化財調査報告』第1集 1959年 芦屋市教育委員会
武庫 誠「考古学よりみた古代の西宮地方」『西宮市史』第1巻 1959年 西宮市役所
石野博信「兵庫県西宮市仁川五ヶ山弥生遺跡探査の男根状石製品」『古代学研究』第37号 1962年
- 石野博信「小立壁と貯藏室をもつ弥生住居址」『関西学院史学』II 1967年
- 折井千枝子 他『仁川五ヶ山弥生遺跡——No.4地点の調査報告——』 1975年 西宮市教育委員会
103. 入江洋・平川清戈『田口山弥生時代遺跡調査概要報告』<枚方市文化財調査報告第2集> 1970年 枚方市教育委員会・田口山遺跡発掘調査団
104. 江谷 寛・瀬川芳則 他『藤田山遺跡調査概要報告』 1971年 藤田山遺跡調査団
105. 石部正志「畿内弥生文化の成立と發展に関する若干の問題提起」『考古学研究』第15巻第4号 1969年
石野前掲書(註12・59文献)
- 森 清一 他『大阪府和泉市觀音寺山弥生集落調査概報』 1968年 觀音寺山遺跡調査団
106. 弥生時代後期のE地区円形住居址内より石鏃5~6点、スクレーパー3点、サヌカイト片数点、叩き石2個、すり石1個が検出され、またE地区第2溝からは畿内第V様式の高杯・壇台・長頸壺・台付壺・壺・鉢など数十個体分の土器と共に打製石泡丁・スクレーパー・磨製石斧が出土している(浅岡俊夫『養田遺跡調査概報』<神戸市文化財調査報告16> 1972年 神戸市教育委員会)。
107. 後期に主体を置くS・F・E・Cの各地区住居址床面より石鏃・石錐・不定形刀器・サヌカイト片など数多く出土している(註25文献)。
108. 畿内第V様式に属する第1号堅穴住居から石鏃3点が出土している(石部正志 他『越山地区信太山遺跡<その2>調査概報』 1970年 和泉市教育委員会)。
109. B地点の第2号住居址(第V様式期)付近の包含層中に長さ10cmを測る長大なサヌカイト製打製石槍が見出されている(註21文献)。
110. 田辺・佐原前掲書(註3文献)。
111. この時期を接点とするあらゆる文化現象の変容の背景をより考察するならば、究極的には共同体なり社会機構の構造そのものの遷移にも目を向けねばならない。弥生中期に西日本の先進諸地域を中心に形成された農業共同体が一度解体し、新たに再編成されるのが後期後半期に入ってからと考えられ、政治的地域集団が各地で顕在化することとも無関係ではないようである。
- たとえば西日本域の平野部の弥生遺跡の動向を通観してみると、中期の第Ⅲ様式あたりに盛行をみる集落の実数は意外と少ないことがわかる。猪名川流域一帯では下流より田能・勝部・中ノ田・猪名寺庵寺下履・宮ノ前・加茂など、武庫川流域では分流の庄下川沿岸に栗山・武庫莊・常松などの諸遺跡が分布するが、その数は10に満たない。これらはそのすべてがⅣ様式期まで継続し、大型集落としてそれぞれ微地形の中で核をなしている。一方これに対し、次のV様式期を迎えると、人口増加の下で既に生産諸力が飽和状態を招いたとみえ、その限界が幾多の小集落を生み出すことを促進し、中期より続いていた大集落を解体に至らしめるようになる。猪名川および武庫川流域にこの時期になって成立する遺跡の数は実に60近くにも及び、その大半は後期でも後半期に移行してからの所産である。
- このように、中期から後期前半にかけて、西日本域の諸遺跡の動向には急速な変革が認められ、小数の大規模集落が個々広大なテリトリーを占有して盛行をきわめた段階から、それらが一旦解消し、新たに等質規模の小集落が各水系を縦横として數多く再編成されてゆく段階へと発展してゆくのである。表六甲にかろじて残った高地性集落が、山を捨て平地へと戻ってゆく時間もちょうどこの頃であり、集落再編成の過程で不必要となつた古・中段階の御陣がそれと入れ替わるような形で山間部に埋納されたと推測するのも一

劣に値しよう。村の統合によって銅鐸の集積埋納が行なわれたという通説も認めねばなるまいが、大集落の分解・離散によっても銅鐸祭祀の終焉導因になり得たことを推測するものである（森岡秀人「銅鐸と高地性集落」『芦の芽』第27号 1975年 芦の芽グループ）。

こうした現象は、撰津のみならず和泉の地においても看取でき、やはり「分村化が拠点的大集落を解消する方向」で進行している。石部氏はこれを「農業共同体の二次的編成」として捉え、便団動乱の絆結とともに始まった単位集団ごとの分村を想定し、さらに広域にわたる地域的政治集団間の連合関係の形成を説いている（石部正志「古墳文化論—群集小古墳の展開を中心に—」『日本史を学ぶ』I<原始・古代> 1975年）。高地城について共通して言えることは、次代の古墳時代・古代を通じて政治権力の集中化が緩慢にしか進まなかった情況にあること、つまり大和・河内の畿内中枢部に比べればやはり後進地域であったこと、上記したような農業共同体の再編が第V様式の中頃～庄内式期にかけて一齊に行なわれていること、等々である。

これらの事象は、從来言われてきた世帯共同体—農業共同体—政治的地域集団という弥生時代の集団組成の3単位が併して一律な關係でもって後代へと存続しなかったことを物語るものと言えるが、他方、集落の構造形式と余剰生産物の所有・管理主体の在り方にも歴史的変貌を読みとくことができる。たとえば、枚方地方における瀬川氏の最近の分析によると、（大型住居1棟）+（数棟の一般住居）=（単位集団）の様相の変化が弥生中期後半→後期→後期終末の段階でもって捉えられており、田ノ口山→長尾西→ごんぼう山の変遷にあてて整理が試みられるという（瀬川芳則「弥生時代の淀川左岸地方遺跡の検討」『古代国家の形成と展開』<大阪歴史学会25周年記念> 1976年 吉川弘文館）。

その中で、家長世帯居住の場と目される大

型住居が、田ノ口山A単位集団の直径11mからごんぼう山の一辺8.5mへの縮小が認められ、瀬川氏はこうした現象を「村落共同体での、家長権とでもよぶべきものが、村落共同体の首長権の拡大とうらはらに、縮小されたため」とみている。また、その背景として「家長居の中から成長してきた首長層のなかば私的な所有」という収奪強化の過程が描かれており、領地に値する。同様な事実が他地方・隣接諸地域でも系統的に実証されていない現在、共同体のかのような質的転換の時期を假定することはできないが、早い地域では後期後半Ⅰ期に起り得たものと考える。中期末～後期前半の集落址である岡山県沼遺跡や芦屋市会下山遺跡の大型住居が依然大きく規模化していないことはその徵徴となる。

先に本文中において、大型土器の激減と小型土器の増加が後期後半Ⅰ期を中心としきる傾向を指摘したが、上述したような余剰生産物の所有・管理主体の移行とそれに伴う共同体・家族構成の変質、ひいては貯蔵形態・食膳様式の根本的転換という各事象に密接不可分な関係を想定することも甚だ示唆的ではあるまいか。

從来より弥生中期末が社会情勢の一つの変化点として捉えられ、後期社会の内情があまり問題にされなかったが、その変動は弥生時代全期間を通してみてても大きいものがあると言えよう。

112. 考古学研究会『新しい日本の歴史』編集委員会『古代国家への道』<考古学研究 第18巻別冊> 1972年
113. 森岡秀人「西浜赤生社会の地域的展開(上)——初期農業共同体の形成とその再編をめぐって——」『武陽史学』No.15 1976年
114. 田代克己「まとめ」『瓜生堂遺跡II』 1973年 瓜生堂遺跡調査会
115. 鈴木公雄「土器型式における時間の問題」『上代文化』第36輯 1969年

考 察 IV 弥生遺跡に伴なう焼土壙について

——大師山遺跡 I ~ 4 号焼土壙のもつ意義——

藤原 学・森岡 秀人

- | | |
|--------------------|------------------|
| 1. はじめに | 4. 弥生式土器焼成に関する実験 |
| 2. 弥生式土器製作・焼成実験の経過 | 5. 結語 |
| 3. 弥生式土器製作に関する実験 | |

1. はじめに

弥生時代はわが国における水稻耕作の開始期であり、同時に最初の金属文化期でもあるところから、次の古墳時代にも増して、新たな労働編成と社会的分業の急速度の進歩がみられる。

最近の弥生時代研究も当然こうした角度より進められているが、土器をはじめとする石器・青銅器・鉄器・木製品などの遺物研究もさることながら、住居址・溝・墓址・祭祀址などの遺構研究も重要な価値をもっている。とくに較後いち早く行なわれた静岡県登呂遺跡の発掘調査では、整然とした水田畦畔が検出され、弥生時代の遺構の上から、彼らの生産活動の痕跡を如実に証明したものとして研究の飛躍的な進歩をもたらしたことは広く周知のことである。その他、墓址・住居址・溝状遺構に関する調査・研究の進展も著しいものがあるが、たとえば溝状遺構についても、水田址と関連したただ単なる農耕遺構としてではなく、集落範囲・墓域などを画し得るような、あるいはその集落の性格を左右するような重要な所見が得られている。

このように、弥生時代における遺構のあり方は、最近の調査例の増加や開発事業に伴う調査の大規模化などによって、多角的な考察が行なわれるようになってきたが、趨勢においては認識されつつも、見逃されがちな一面が存することも事実である。それはすなわち、実際の遺跡調査にあたっては、用途不明ということで性格さえも論及されるに至らず、考察の対象から除外されてきた、不整形ピット・土壙などの小遺構群が検出されることが多々認められるのである。しかも、これらの小遺構群は、各地の調査例からみて意外にも多く検出されており、各集落の構造や性格を物語るに重要な要素をなしえないともかぎらない。

しかし、こうした遺構は、その数にもかかわらず、発掘面積の制約や問題意識の欠如からその究明が時として怠慢になりやすい傾向があり、文化の反映を示さない遺構として無視されるきらいさえ見受けられる。

したがって、本論で強いて言及したいのは、そのような性格不明遺構に対しての取組み方であり、単に現地における調査所見のみにとどまらず、他に何らかの方法を用いて積極的な性格究明を志すべきであるということである。近時の調査例は、その解明の必要性をより明らかに

しており、その一つの方向として自然科学的な検証法を用いることも一定の成果が期待されるものである。この点については、たとえば、兵庫県芦屋市所在の会下山遺跡において検出された焼土壙群に関して、その堆積土の化学分析によって、ソトクドと断定した事例があり、調査者としての、遺跡解説に対する一つの積極性を物語るものとして評価されてよい。

さて、大師山遺跡の場合、検出された遺構によって、彼らの生産活動の一端を知り得るもの、2棟の住居址と、尾根と直交して掘込まれた1条の溝状遺構、及び6基の焼土壙、斜面3箇所において検出された、集中的な土器投棄を物語る遺物包含層があり、焼土壙以外について他の章において考察されたとおりである。

このように、大師山遺跡は検出された住居址の複数も少なく、他の遺構からみて遺跡の実態を復元しうる豊富な遺構に恵まれたとはいえない。この意味において、斜面、あるいは尾根上において検出された6基の焼土壙は、本遺跡の性格を考える上で機能不明としてのみ放置できない重要性を有しているといえる。

このうち2基（5・6号）に関しては、第3章で報告したとおり後世のものと考えられ、構造上から判断しても性格を異にするので、次の考察Vにおいて別途論述する。したがって本論の考察は、一応弥生時代のものと断定した第1～4号焼土壙に対するものである。

1～4号焼土壙の機能については、調査中において、調査員の討議によって、(1)ソトクド（野外の炊さんに供する火焚場）(2)土器焼成窯(3)狼煙場（烽台）など様々な意見が出されたが、いずれにおいても現地において判断しうる確定的な根拠はなく、第3章においても用途不明の焼土壙として一括してきた由縁である。

第11表 焼土壙の形状一覧表

焼土壙名	形 状	規 模(長径×短径×深さm)	立 地(尾根からの高さ)
1号焼土壙	稍円形?	? × ? × 0.72	北斜面(-8m)
2号焼土壙	圓丸長方形?	1.42 × 1.05 × ?	北斜面(-15m)
3号焼土壙	方形	1.16 × 0.8 × 0.3	北斜面(-13.5m)
4号焼土壙	不整椭円形	1.27 × 0.9 × 0.25	尾根上・南斜面側(-1m?)

さて、これらの遺構に対して考察を進める上において、もっとも困難な点は、これらの焼土壙がどのような方法で使用されたかが具体的に復元できることである。

一般的に焼土壙といつても、実例を検討するかぎりにおいて、果してその場所で火が使用されたのか、それとも他の場所で火を受け、焼土・灰・炭などが上壙内に投棄・堆積したのかでさえ明確でない場合が多い。

幸い1～4号焼土壙については、いずれも遺構自体に焼土（赤色酸化鉄）が残存し、その所で火を使用したことが明らかではあるが、それにしてもどの程度の熱を受けたものかできれば明白な根拠はない。したがって今回はその基本的なデータを取得するためにも、実験的作業に

よって復元的考察を試みようとしたのである。そしてこの焼土壤に対する実験的復元作業を土器焼成という方法を用いて行なったのは、用途について先にあげたうち、(2)の「土器焼成窯」としての考え方が調査のうちに強くあり、なおかつ、弥生式土器焼成の過程が從来の土器研究の分野で大きな課題とされながらも、遺構（土器焼成窯）が實際の遺跡において、ほとんど検出された例がなく、実験的研究の必要性を痛感するに至ったからである。さらに加うるに、その復元的研究によって、土器焼成に止まらず、土器製作（粘土の採取から成形・調整に至るまで）の過程においても、多くの課題や問題点が提示できると確認したからに他ならない。

これから述べる焼土壤に対する実験的研究の目的は、第一義的には焼土壤の性格（機能と用途）を究明することにあるが、それにとどまらず派生的に土器の製作・焼成の實際の問題にも論及することにしたい。

2. 弥生式土器製作・焼成実験の経過

このようにして、本考古学研究室では弥生式土器の製作・焼成実験の計画が立案され実行に移されたわけであるが、なにぶん土器製作や土器焼きについてほとんど素人であるわれわれにとって、試行錯誤的な方法にたよらざるを得ず、現段階ではまとまっていない問題も多いので、その全容を記述することはできない。したがって、土器製作に関する若干の問題、焼成の概要報告の2点を重点的にまとめてみた。一応、その実験経過を抄述すると、

- 1970年3月 大師山弥生遺跡の調査において焼土・灰を伴う焼土遺構を検出する。
- 1970年10月 土器製作・焼成の実験を計画する。
- 1970年11月3日～5日 弥生式土器の製作を行なう。(兵庫県多紀郡今田町笠屋、藤原学・秋枝芳・赤松秀貴・関川尚功・森岡秀人の5名参加)
- 1970年11月16日 実験焼土壤を本学工学部東側の空地に構築。
- 1970年11月17日 弥生式土器を焼成（第1次焼成実験）
- 1970年11月18日 第1次焼成実験窯を再発掘。平面プラン・断面を実測する。
- 1970年12月19日 一連のデーターを整理し、速報として『弥生式土器製作に関する報告』(B5孔版47頁)を刊行。第1次実験を終了する。
- 1971年3月 第1次実験の成果を受け、第2次焼成実験を計画。
- 1971年4月20日 彩色予備実験のための粘土・酸化鉄採取を千里丘陵にて行なう。
- 1971年4月21日 奈良県宇陀郡大和水銀鉱山の見学。硫化水銀の資料を収集する。
- 1971年4月27日 予備実験用バケルを作成する。
- 1971年6月8日 本学工学部の電気炉にて彩色予備焼成実験を行なう。
- 1971年6月15日 第2次弥生式土器製作実験を開始する。千里丘陵を数度踏査して露頭粘土の採取を行なう。直ちに弥生式土器の製作に着手。(計20点をつくる。)
- 1971年7月6日 弥生式土器焼成窯を構築(平窯+基、傾斜窯+基)

1971年7月8日 第2次弥生式土器焼成実験を行なう。

1971年7月9日 第2次焼成窯を再発掘。平面・断面図を作成してデーターの処理を終える。

1971年9月 実験成果をまとめ、2次実験を終了する。

このように、本学考古学研究室では昭和45年～46年にかけて、約2年間を費やし、二度にわたる製作・焼成実験により、大師山跡遺跡検出焼土壙の実験的復元を行ない、併せて弥生式土器の製作・焼成に至る経過を記録したわけである。なお、今回の実験では、土器焼成に関するわれわれの主観的な観察にとどまらず、焼成温度の変化を詳細なデーターにして記録した。また、第1次焼成実験の結果、土器の彩色・発色に関する実験の必要性を痛感し、この面での実験も併せ行なった。

1971年4月に行なった奈良県宇陀郡大和水銀鉱山の見学や、千里丘陵を酸化鉄の素材を求めて何處か踏査したのはそのためであった。この件については目下、「古代における赤色顔料の研究」に取組んでいた東永津子が主として担当し、本学工学部における電気炉での予備実験や第2次焼成実験での発色実験を行なった。これより土器の発色・彩色についてはきわめて微細な顔料の変化や、焼成条件が関与することが想定されたため、まとまった結果を得るために複数回の焼成実験が必要であることがわかり、今回の報告にはそのごく一端しか触れることができなかった。

このように今回の実験は、土器製作・焼成という通常の調査・研究に従事するわれわれにとって、ほとんど経験したことのない分野を多く含み、そのため多くの人達のご協力・ご尽力をお願いした。

土器製作・焼成については兵庫県多紀郡今田町笠屋の生田和孝氏のご教示によるところが多く、第1次土器製作に関しては同氏の工房を使用させていただいた。また、焼成温度の測定については、本学工学部非鉄金属材料研究室（亀井 清主任教授）に依頼し、杉本隆史助手をはじめ、多くの学生諸氏からは測定計器類の搬出・設置から、測定作業・データーの解説に至るまで大変なご尽力を得た。また、彩色については武庫川女子大学美術学部の安田博幸教授からご教示をいただいたことが多い。あらためて深く謝意を表したい。

3. 弥生式土器の製作に関する実験

土器製作に関する実験は二度にわたって行なわれたが、各々その目的を異にする。昭和45年11月3～5日、兵庫県多紀郡今田町生田和孝氏の工房にて行なわれた第1次実験で目的としたことは日頃、調査・整理・研究などを通じて土器と接する機会の多いわれわれ自身に実際、土器なるものを作ることができるのかという素朴な疑問に対する体験的解答を求めてであった。また、これは言うまでもなく、次に控える焼成実験準備の第一段階でもある。

製作した「実験土器」は、大師山跡遺跡検出遺構の出土資料を考慮したため、弥生時代後期の

土器を対象とした。畿内第V様式土器は、周知のとおり、器体の小型化、回転台の消滅、成形・調整技法の粗雑化、文様の衰退などの諸現象がみられ、こうした制約は初めての製作を経験する我々にとって、ある意味では好都合であったといえる。

三日間実施された作業により製作された土器は、畿内第V様式を模倣した壺形土器1、長頸壺形土器2、壺形土器1、鉢形土器1、高杯形土器3、壺形土器1の合計9個体で、他に予備実験用の土製紡錘車・土錐・球型土製品なども製作した。製作には藤原学・秋枝芳・赤松秀貴・関川尚功・森岡秀人が従事した。

昭和46年6月に行なわれた第2次製作実験では、土器製作の場を本学考古学研究室の地下収蔵庫に移し、新たに、土器の発色・彩色・黒斑の問題をも取上げるとともに、前期・中期に属する大型土器を回転台を用いて製作してみた。また、連作実験を試み、土器製作の時間的問題も考えてみた。製作には主として関川尚功・森岡秀人があつた。

以下、土器製作に際して使用した器具（いわゆる原体）・各器種別土器の製作工程にふれ、畿内第V様式土器の製作技術に関する若干考察してみたい。

(1) 土器製作に用いた器具と使用原体

土器の製作にあたっては、材料とも言うべき粘土がまず必要であるが、他にその過程において適宜使用した用具類がある。ここでは今回の製作実験にあたって使用したもの順次あげ、簡単に説明しておきたい。初めての実験でもあり、原体などに關しても十分な検討がなされなかつたが、これを機会に今後改良を重ねていこうと考えている。

回転台 弥生時代は一般にロクロの前段階的機能を有する「回転台」なるものが土器つくりに駆使された時代である。しかし、それは時期的にも地域的にも限られたものであるとともに、遺跡から実際に出土することもなく、その実体は現在のところ不明と言わざるを得ない。ただ、最近になって「回転台形土製品」として報告される土器が増え、その有力候補と考えられているが、出土分布と所属時期が今後問題となってくるものと思われる。

さて、通説では畿内弥生後期は、「回転台の消滅をはじめとして土器の製作技法は一変」すると、その放棄が説かれてきたが、從来の既成概念にとらわれることなく、また初めての土器製作に挑むわれわれの回転運動に対する経験的理解を深める意味で、今回の実験ではそれに類するものを用いてみた。

第1次の実験では、ご厚意に甘んじて生田和孝氏の作業場に取付けられている人動式ロクロを使用し、2次実験では金属製の回転台を主に使った。人動式ロクロは、直徑50cm未満の木製で全体構造のしっかりしたいわゆる陶芸用のものであり、金属製回転台は直徑24cm、高さ19cm



第III図 土器製作風景（兵庫県多紀郡今田町）

の軸受け構造の簡単な小型のものである。

作業はすべてロクロ台上で行なったが、ロクロ本来の機能を利用する「挽く」ことによる土器つくりは一切行なわず、単にゆるやかな回転運動によって粗づくりに用いたにすぎない。したがってこの場合、ロクロと言ってもその機能はいわゆる回転台と大差ないものといえる。

粘土 土器の母胎とも言うべき粘土の選別と素地土の製作は、土器製作上もっとも基本的な作業であるが、1次実験では成形・調整過程の記録に重点をおいたため、生田氏工房にて用いられている立杭焼締製粘土を提供していただいた。そういう意味では単に粘土と呼ぶより素地と言った方がより適切であるかもしれない。

製作にあたっては胎土に混和材を何ら加えることなく、実験参加者個々による練り上げ作業の相違以外は、素地そのもののもつ性格を何ら変えることはなかった。製作時の色調は黄褐色を呈し、乾燥してゆくにつれ黄白色味を帯びてくる。粘質性はきわめて良好で、石粒・砂粒の含有物もほとんどなく、キメは非常に細かい。したがって可塑性も十分あったが、弥生式土器の胎土としては少なからず問題を残すこととなった。

2次実験では、1次実験における胎土の問題を解消するため、露頭粘土の採取より作業を開始した。先ず、彩色実験に用いるために、大学近くの千里丘陵を踏査し、吹田市千里山西の崖状地形で、大阪層群第四紀洪積層に属する海成粘土を探集した。色調は褐色を呈し、赤味が強く、酸化鉄を含有していることが予想され、外観的な純度も高いものである。また、粘土化作用の分類に即せば、その作用を受けた場所に残留した一次粘土の範疇に属している。

この粘土は、自然現象による風化が著しく進んでおり、その粒子も均等化が成っているので乾燥して粉砕するといった人工的風化を経ずして、直接練りの作業に入れる条件を具備している。ただし、一次粘土の特性として、粘りが強く可塑性に欠ける、収縮が著しく乾燥しにくいうなど、土器製作作業に困難を生じる性質があるため、適当な混和材（混合物）を必要とする。（この場合、花崗岩土壤の砂礫を適量混和している。）なお、採集から練りに至るまではビニール袋に入れて脱水を防止した。

第2次焼成実験に供する弥生式土器を製作するために、粘土の採集場所として選んだのは、関西大学より西北方の造成地で、造成のため地表に露現している粘土を探集した。当地は、地質学的には前期洪積層からなる良質な粘土・砂礫層が存在するところでもあり、したがって粘土の採集には全く不便は感じなかった。粘土採集地一帯はいわゆる千里須恵器窯跡群の所在するところで、古墳時代においてはこの地の自然粘土が当然利用されていたものと思われる。また採集地点の西方丘陵上には、弥生時代の高地性集落として知られる重水遺跡が存在し、弥生時代における土器生産も当地における良質な粘土が使用されていることが明らかでもある以上、この地域で採土した材料によって、弥生式土器を製作することは当然であろうと考えられる。

ただ、採集に際しては、次の点に留意した。採土にあたっては、われわれは通常のスコップ

を持参したのであるが、弥生時代における鉄製刃を装着した木製農耕具類の在り方からして、粘土のために大きく丘陵を削平することはなかったであろうから、採土作業はできるかぎり地表に近い部分から行なった。したがって採集した粘土は1次粘土ではなく、1次粘土が雨水によって風化・流出したものが再堆積した、いわゆる2次粘土である。土器製作についてはこの粘土をよく練り、さらに混和材（つなぎ）として、砂藻を混入して使用した。この粘土は先に述べた粘土板作成に用いた粘土よりも可塑性があり、土器製作により適したものであった。

ヘラ 土器の成形、器面の調整などに多用されるものであるが、新たに製作することではなく、ごく一般に市販されている工作用の竹べらを用いた。

刷毛目の原体 弥生式土器に残されている刷毛目を観察すると、使用されている原体は、今日用いられている「刷毛」ではなく、一種の櫛状工具であることがうかがえる。だが、畿内第V様式土器に限ってみれば、使用痕として残された刷毛目はきわめて弱いため、施文を目的とした櫛とは明らかに異なる用途をもっていることが想像される。したがって刷毛目の原体を作るにあたっては、これらのこと念頭において製作した。

まず、手近にある竹を長辺3cm、短辺1cmほどの長方形に切り取り、それを扁平に非常に薄く削り上げる。次にその短辺の一方にナイフで2mm弱の間隔をおいた刻み目を施す。この場合の刻み目は、弥生式土器の刷毛目にみられる凹凸から考えて、さほど深くないものと思われ、深さはせいぜい1～2mmほどにして切り込んだ。

こうして一応でき上った刷毛を二、三度使用して、原体の腰の柔軟性をテストする。刷毛の構と異なる最大の特徴は、実はこの柔軟性にあり、腰のしなやかさの有無が、器面に接触される原体の軌跡の良し悪しを決定するようである。櫛目原体の材質に関しては、過去に植物性繊維という説もあるが、竹を薄くしたものなどは手頃な柔軟度が当初より備わっており、原体としては有効である。またこのような柔軟性は原体を使っているうちに生じてくるものであり、いくつかの土器製作を経たのちでは、その柔らかみも幾分増している。

おな、今回製作した原体は、刷毛としては通有のものより幅がやや狭いものとなった。

叩き目の原体 畿内第V様式土器に普遍的にみられる叩き目に関しては、最近、笊型説も提唱されているようであり、手法としてどう捉えるかについてはなお検討を要するが、ここでは通説にしたがって敲打法を想定し、菓子箱側板のような扁平で縱方向に柾目(?)の走っているものを叩き板原体として用いてみた。幅5cm、長さ18cmほどの大きさのものである。

まず、大師山遺跡出土土器の実物資料の中から、叩き目のみられるものをよく観察し、器面の保存良好なものを選択、代表として抽出する。（この場合は断片であってもよい。）また、同一土器としてコピー復原を試みる場合には、試作モデルの土器に用いられている叩き目から比較的明瞭なものを任意選択し、今回の実験では「D地区包含層出土」のものをその対象にした。

このように抽出・選択した箇所を拓本にとり、原体製作の際の基本資料にする。拓本資料に

おいては、叩き目凸部が黒く表わされるが、その凸部の間隔に留意して凹形溝を彫刻刀（三角刀）によって彫り構成した。

その際、特筆しておくべきことは、拓本資料の中において、叩き目の選択をさらに行なうことと、換言すれば、叩き目の微妙な重複関係を適確によみとることであり、一単位としての叩き目を把握する必要がある。また、原体となる板切の木日の方向にも十分注意を払い、今回の実験では木目に平行して木目間に凹形溝を掘削した。その間隔決定には拓影や粘土の乾燥・焼成による伸縮性を考慮する必要があることは言うまでもない。

あて型 器表面を叩き目成形する際、内面にはそれと対応してあて型をあてがう。今回は叩き板をもっていない片方の手を主として用いた他、直径4cm大の扁球形の河原石をあてがった。その効用に関しては、叩き目技法を考察する際述べる。

(2) 各器種別土器の製作工程

2回の製作実験で製作した土器は、弥生前期の壺1点、甕1点、弥生中期の甕3点、水差1点、弥生後期の壺2点、長頸甕2点、甕3点、鉢1点、高杯2点、その他土製品若干数の合計20個体である。実験過程では、弥生前・中期の土器製作技術についても様々な所見を得たが、本稿では大師山遺跡出土土器との関連もあって、畿内第V様式土器の工程を器種別に報告したい。

壺形土器 土器を製作する際、用いる粘土は硬すぎると粘土紐が十分密着しなかったり、折れたりすることが考えられ、また柔らかすぎると、製作途上において土器自体の重圧により器体そのものが変形する恐れがある。そのため、土器製作には十分こね上げた幾分柔らかめの粘土を使用した。

最初に十分こね上った粘土より適当な大きさの粘土塊を取り、これを押し広げて径3cm、厚さ1cmの粘土円盤を作る。次にその周縁を引き延ばして底部とし、この底部の周縁より径1cmほどの粘土紐を右手の親指と人差し指で内側の方向にわずかにひねり、指頭圧を加えて密着させながら巻き上げてゆく。また、同時に右手のひねりを加えながらの密着により、ごくゆるやかに回転してゆく粘土紐をそれにつれて左手で支えながら少しづつ回してゆく。この時の粘土紐の巻き上げ方向は左回り（逆時計回り）になる。こうすることによって粘土紐同志の密着面が広がるとともに、連続的な粘土紐巻き上げ作業が可能となり、よって、土器製作が非常に能率化する。以下、粘土紐巻き上げの基本的な方法はすべてこのやり方で行なう。（第112図）

こうして底部より粘土紐を巻き上げてゆくのだが、土器を完成させるまでの間、土器の自重による変形も考慮しなければならない。そのために、底部の巻き上げには太い粘土紐を用いたり、また底部・胴部下半・胴部上半の3段階で時間をおいて幾分乾燥させ、次の段階で巻き上げてゆく粘土紐の重圧に耐えうるようにする。とくに土器全体の重さがかかる胴部下半の乾燥は不可欠で、この乾燥にはもっとも長時間要した。（第113・114図）

胴部下半の乾燥が進んだ状態になってから、1本の太めの粘土紐を輪積みにし、上より力を加えて下の粘土帯（捩口縁）に、内外面両側より包みこむようにして接合させ、また続けて前

述した要領で上へ巻き上げてゆく。第一段階乾燥後の巻き上げにこの方法を用いたのは、下の粘土帯が乾燥しているため、ひねりを加えた粘土紐の密着ができないからである。

壺は口縁部が小さいため、粘土紐の巻き上げがすべて完了してからでは土器内面の整形ができないため、各段階ごとの巻き上げのたびにヘラ磨き以外の整形を行なう。

整形は、刷毛と指頭のナデの併用によるもので、これにより粘土紐の巻き上げ痕を消し去り土器の器面を平滑にできる。指頭によるナデは最も簡便な整形法として多くこれを用いた。

製作中、粘土紐の太さのムラ、あるいは粘土紐に指頭圧を加えて押しつぶす際の力のかかり具合などの理由により、どうしても器体にゆがみが生じてくるため、絶えず回転台上で土器を回して、ゆがんでいないかどうかを確かめながら製作する。このゆがみを直す方法として、ある箇所にふくらみをもたせるには、この部分の粘土帶を押しつぶし、細めにする時は、両手で器体を持ち、締めつけを行なって形を整える。また、とくに肩部上半近くで巻き上げてゆく粘土紐が先述した原因により、しばしば回転台の中軸を中心とする円としてではなく、楕円を描いて巻き上げられてくる。こうなると口縁部の接合ができなくなるばかりでなく、器体そのものにも変形が生じてくるため、必要に応じて粘土紐を足したり、不用な粘土をヘラで削り、ほぼ正円に近い状態で巻き上げられるように工夫する。

製作途上に様々な原因で生じる器体のゆがみは、気がつくたびに直しておかぬと、粘土が乾燥しすぎたり、また次の段階まで粘土紐を巻き上げてしまってからでは、器体の押しつぶしや



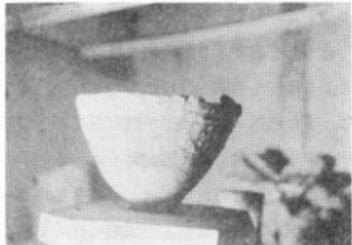
第112図 壺形土器の製作工程Ⅰ



第113図 壺形土器の製作工程Ⅱ



第114図 壺形土器の製作工程Ⅲ



第115図 壺形土器の製作工程Ⅳ



第116図 壺形土器の製作工程V

締めつけができない。一たびこの状態になると、後に叩きによる打圧手法を用いぬかぎり、器体のゆがみを正すことは不可能となる。

以上、列挙した諸点に注意しながら胴部上半まではほぼ完成させてから、また1本の太い粘土紐を輪積みにし、そこから粘土紐を外反ぎみに巻き上げ、口縁部の製作にとりかかる。このとき付加した太い粘土紐はこの土器の頭部を形成する。

口縁部は土器製作技術の良否がもっとも端的に表わるところであり、かつ鑑賞的にも洗練さが要求される部位である。それゆえに、とくにその製作には注意を払った。そのため上からみた口縁の端部及び内側が正円に近いかどうか、あるいはまた端部の厚みが均一かどうかなどを細かく確かめながら、竹べらで口縁の余分な粘土を削り落して焼形し、次に濡れた指頭による横方向のナデを行なう。この作業を回転台の上で行なうと、口縁部の器面にロクロ目(近い痕跡)を残す。

このようにして、ほぼ出来上がってから少し時間をおいて乾燥させ、濡れたヘラで口縁部・胴部などの各段階ごとに継のヘラ磨きを加えて完成させる。

製作完了後の壺形土器は口径10.0cm、腹径16.3cm、底径4.2cm、器高15.3cm、重量844gを測る。(第116図)

長頸壺形土器 長頸壺の製作技法も、基本的には壺の場合と全く異なるところはない。とくに体部に関しては同じ要領で製作した。(第117図)

底部は径3cm弱の小さな粘土円板をつくり、そこからひねりを加えた指頭圧により粘土紐を巻き上げてゆき、各段階に応じて崩毛とナデによる整形を行なう。長頸壺の体部は壺と比較して小型であるため、乾燥及び整形の回数は少なく、体部においては胴部と底部の2回である。底部内面に手が届くような段階に、そこにクモの巣状崩毛目を施し、それを最終調整とする。

口頸部は器高全体の2分の1以上を占めるにもかかわらず、内外の傾きがゆるやかで、わずかに外開きする程度であるので、体部が乾燥しているかぎり、乾燥時間をおかず一挙に粘土紐を巻き上げても重圧で変形することはない。頸部全体が比較的容易に短時間で積み上げられた。

巻き上げが完了してから粗い整形を行ない、ヘラで粘土紐の厚さの不均一を整えたのち、継のヘラ磨きを加えて完成させた。整形が不良だったため、壺に比べ粗雑なつくりとなった。

なお、こうしてできた壺1、長頸壺2の計3個の土器は、製作段階に応じて常に併行して作業を進めた。1人で土器づくりを行なう際、経済的には3個がローテーションの限界といえる。

壺形土器 モデルにした大師山遺跡出土資料は、通常の壺(実測図C-54)と小型壺(実測図D-73)の2点である。前者は口径18.1cm、腹径18.7cm、底径4.1cm、器高23.7cmを測り、器体

は高く、内面に稜を形成して外反する口縁を有する壺で、腹径が口径をわずかに凌ぐ。外面には3段の叩き目がみられ、それと対応して内面のナデ、横ナデの状態も変化しており、刷毛目はほとんど認められない。実験土器は実物資料に即して忠実に復原製作することを目標にしたが、製作された壺は内面に刷毛目手法を用いるなど若干の違いが生じた。

製作に際しては前述した壺と異なり、基本的に粘土紐輪積みの方法を一貫して用い、いわゆる複合法による器体成形は行なわなかった。壺形土器の製作工程は、時間的空隙をおくことによって次のごとく明確に段階づけることができる。以下、その段階を追ってその工程を再現してみることにしよう。

〔製作第1段階——底部の製作工程〕

調整なった粘土塊から球状のものをつくり、打圧によって厚さ1cm強の扁平な粘土円板を整形し、その直上円周に直径1cm内外の太い粘土紐を輪状に置き、強固な密着・接合を行なう。その間、底部粘土円板はやや薄くなり広がって直径を増す。

〔製作第2段階——胴部下半の製作工程〕

粘土紐の直径を漸次小さくしながら、1本積むごとにひねりを加え、確実に密着させる輪積みの作業を繰り返す。内面には指先による継のナデ、外面には器体逆転状態での叩き目手法を施す。

叩き板を右手で握り、底部付近より叩き始める。

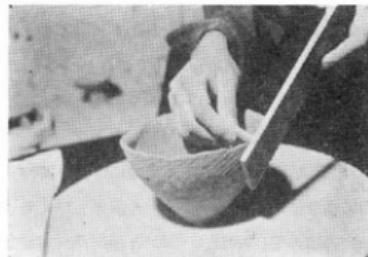
粘土紐のひねりは右手の親指と人差し指とを用いるが、この段階にあっては、親指に人差し指を擦らせるようにして器体の内側にひねり込む。器体逆転状態とは製作途上の器体を回転台上でそのまま裏返し、うつ伏せになった状態を指す。このような状態での打圧成形は、この段階までになっていた擴口縁を損ねるとともに、底部を製作当初のそれより一まわり以上小さいもの

としてしまう。そこで底部周縁に新たな粘土紐1本を輪状にして加え、その再成形を行なった。この成形により底部外周縁の叩き目は突然的に消え、底面はあたかもドーナツを押しつけたときになる。実物資料に関しても底部はドーナツ状の上げ底であり、観察結果とも合致するので、かかる製作技法を想定してみた。

この後、土器を正位置の状態に戻す。叩き目手法によって外面の整形はほぼ完了するが、内



第117図 長頸壺形土器の製作工程



第118図 壺形土器の製作工程Ⅰ

面はこの打圧によって器壁が非常に分厚くなる。この余分な粘土を上へと延ばし、再び腰口線を形成する。（第118図）

〔製作第3段階——最大胴部の製作工程〕

外へ広がる器体を直立状態へ、さらには内彎させてゆき、それにともなって内面には横方向の刷毛目手法・外面には器体正位置での叩き目手法を施す。この段階では平行叩き目がもっともやりよい。作業は内面が先行し、この段階からの打圧成形にはあて石を用いた。

この段階の作業を終えると、一段落作業工程の峰を越したことになる。

〔製作第4段階——胴部上半の製作工程〕

この工程に先立って十分な乾燥を必要とする。乾燥を経ないで粘土紐を上に積むと、粘土紐の自重による下の粘土帯の崩壊を招くからである。

この段階に至っては、直径5mm前後の細い粘土紐数本を一挙に積むことによって素形をつくる輪積み法に改め、内面に縦方向の刷毛目手法、外面には右上りの斜方向叩き目を施す。この工程では惰性によって短時間のうちに多くの粘土紐を輪積みすることができる。が、粘土紐のつぶし・密着を入念にやっておくことが肝要であり、打圧成形にあて石を用いることによって、粘土帯を相当ひき延ばすことが可能である。言い換えれば叩き目手法がもっとも効力を発する工程ともいえる。（第119図）

〔製作第5段階——頸部の製作工程〕

直径をやや大きくした粘土紐1本によって頸部を形成、この部分の調整・仕上げは口縁部と同時に行なう。

〔製作第6段階——口縁部の製作工程〕

太い粘土紐に若干手を加えて、いわゆる粘土帯の状態で頸部に接合し、一挙に手びねりで広く薄く均一に口縁部を形づくる。粘土紐幾本かの積み上げによる口縁の製作を試みたものの、その物理的状態から個々の粘土紐の自重に耐えきれず、頸部付近からの崩壊を招くことが多かった。

内面、端部の調整には横ナデを用い、外面はほぼ未調整にしたので、口縁部全体には起伏が生じ、平面的にも立体的にも波うちが認められた。

〔製作第7段階——総仕上げの工程〕

以上、第1段階から第6段階まで土器の各部位に主眼をおいて変形土器の製作工程をみてきたが、この工程ではその不十分な箇所を点検し総仕上げするとともに、最大張出し部付近に再度叩き目を加え、全体のプロポーションを整え、スタイルの完成をみる。



第119図 変形土器の製作工程Ⅱ

このようにして製作された変形土器は、口径13.7cm、底径4.0cm、器高21.0cm、重量978gを測り、モデルにした実物資料に比して一まわり小さいものとなつたが、腹径が口径を凌いだことや、叩き目の外観的特徴（3段に分かれるなど）、外反する口縁部を有するなどの諸点において一致をみた。ただし、製作第2段階と第3段階、第4段階と第5段階の各工程間には、乾燥のため一夜放置するという非常に長い時間的空間をおいた事実は特記を要する。

小型の変形土器は、2回目の製作実験においてD地区出土の土器（D-73）をモデルにして、試作した。製作第3段階が全く欠落している以外は、前述した臺と何ら変わることはない。ただし、この土器に関しては同じ土器を2個製作してみた。第1の実験土器は製作所要時間4時間50分、第2のそれは4時間15分で、二度目の製作は時間が若干短縮されるようである。

鉢形土器 変形土器同様、製作に際しては大崩山遺跡出土資料をモデルにした。モデルはF地区出土土器（F-77）で、口径15.0cm、底径4.1cm、器高10.1cmを測り、口縁部は外反するも内面には明確な稜を形成しない。これは弥生式土器集成にいう鉢形土器Bの傾向を有するものである。

実物資料の底部形態は変形土器と異なり、いわゆる平底であり、これを中心に叩き目が螺旋状にとり巻いている。内面は不規則な刷毛目が認められ、粘土紐接合痕痕が粘土帯として明瞭に観察されるが、巻き上げ・輪積みのいずれかは判然としない。

端的に言って鉢形土器の製作工程は、長頸壺の製作工程が単なる臺のそれと大差なかったように、前述した臺の製作第2段階までの工程と本質的には変わりない。これは「変形土器の製作があらかじめ別々に作られてある二、三の部分形の組合せによって行なわれるようになったこの時には、同じ部分形を用いて別な器形に組立てることもできた筈である。………（中略）………臺から肩部分形を除いて鉢形に近い器もできるなら、底部分形のみにても一つの鉢に使えるであらう。」という古くからの指摘⁽⁶⁾に合致している。このことをもって直ちに複合法に賛意を表するわけではないが、畿内第V様式の鉢と臺の間には製作過程上の連関性をうかがうことができる。

製作の完了した実験土器は、口径16.1cm、底径4.0cm、器高7.6cmを計測する。モデルの実物資料と比べると、底部の大きさはほぼ同じで、器高はかなり不足し、口径は1cmばかり上回る結果となつた。

また、製作に要した時間は臺より4工程少ないと、長時間を要する作業階梯がなかつたため、他の器種に比してはるかに短かかったことを付言しておきたい。

高杯形土器 高杯も製作に困難を覚えた器種の一つである。製作の方法は、胸部・杯部を別々に製作し、後に両者を貼り合わせて1個体とするいわゆる組合せ成形手法を用いた。

杯部はその底部の広がりが大きいため、縁部の造形に際して作業がはかどらず、ついに作り得なかつたためやむを得ず、杯部のみは紐づくりによらず、ロクロによる挽き上げによって製

作した。したがって杯の底部は糸切りになり、この部分に脚を接着するわけである。

脚部は天地を転倒し、杯部との接合部分から粘土紐輪積みによって製作した。粘土紐は径1cmほどのものを使用し、これを直徑3~4cmほどに巻き上げる。このとき粘土紐の内径と外径の差から外面に著しい亀裂が生じ、これを防ぐためにも巻く方向に上から下へかなり強い力を押圧して巻き、同様に2段・3段……と積み上げてゆく。粘土紐巻き上げに際して起こるこうした現象は、高杯の脚柱部のみならず、細頸壺口頸部や水差し形土器の把手などの製作においても生じ、直徑の小さい部位に顕著である。これらは原理的には脚柱内面に認められる絞り目とは異なるものであるが、絞りの作業を行なった場合には呼応して現われることが多い。

5段ほど積み上げると序々に粘土紐の巻き幅を広めてゆき、脚裾部の製作にかかる。この段階での製作は壺形土器の胴部を製作するのと同じ要領である。

このようにして大体の形が整うと、水で指頭をぬらして器表をナデることによって、輪積みの際の凹凸を消し、器面を平滑にして最後の仕立てをする。このナデは脚の上半は縦方向に、下半（裾部）は主として斜めまたは横方向に施した。脚内面の仕上げは上部に生じた絞り目の処置を除けば未調整のままでもよい。

杯部と脚部の接合には前もって接合部に水を含ませておく、両者の乾燥度を同じくし、さらに接合時にはヘドロ状の粘土を塗付し、両部を密着させた上、外から粘土帶をあてがって補強し、外面をナデ、さらに部分的にヘラ磨きを施して完成する。通し孔は最終段階で施した。

穿孔はすべての調整が終了したのち、若干の時間を経てからであって、器壁が乾燥し始めたころである。

4. 弥生式土器焼成に関する実験

1. 第1次焼成実験

(A) 窯の構築 窯を構築した場所は、本学工学部本館東側の造成地で、東に向ってゆるやかに傾斜し、南へ開ける地形をなし、北東方に高さ数mの崖が存在する。地質は砂が多いながらも比較的硬い粘土質である。土器焼成に際して風向き及び風力も重要な要因と考えられたため、窯の立地も本来ならば山塊の尾根上に選定せねばならないが、実験場所が大学構内で、かつ火災の危険性のない場所に限られたため、このような空地を使わざるを得なかつた。

土器焼成窯としては長径1.2m、短径0.95m、深さ0.25mの楕円形に近い浅い凹部を掘込んだ。これは大師山遺跡のE地区で地山に掘込んで構築されていた4号焼土壙をモデルにしたものである。窯の構築面は造作によって一旦削平され、さらに盛土でもって平坦に整地されたものであり、現状では黄色粘質土を埴し、盛土とはいきわめて堅く叩きしめられている。

さて、窯の構築法であるがまず先述した大師山4号焼土壙の資料をもとに、長軸をあわせ、N-11°-Wにトランシットを設定、これを主軸として窯体プランを決定した。外形が定まる

と、窯の基底を中央部より縁辺へと造作した。

窯の構築作業はこれで終了するわけであるが、外観的には楕円形に近い穴を掘りくぼめたのみであり、きわめて簡素なものである。当然のことであるが、煙道・焚口などに相当する施設は付設しない。窯の構築に費した時間は、簡単な整地、プランの設定、それに応じての掘削などを総計すると1時間40分であるが、単に掘込みのみに要した時間はわずか40分にすぎない。

(B) 空焚き 窯の構築が完了すると直ちに空焚きを行なった。これは、窯が素掘りであるため、地中からの湿気が焼成中の土器に悪影響を与えるという配慮からである。⁽¹⁰⁾ この時、窯は外壁が幅く煤化された程度である。(第124図)

(C) 燃料について 現代陶器の燃料には松が使用されていることが多いが、これは松材としての燃焼性からとくに選ばれたものであろう。しかし、弥生式土器のように焼成温度・焼成時間とも低位であること、あるいは弥生時代における生産性からみても、あえて特定材の選定が行われていたことは考えられず、今回の実験でクヌギ材あるいは雜木と呼ばれている市販材を使用した。焼成に準備した薪は、1束平均5kgのものを50束、総計250kgを使用した。その内訳を記すと、雜木16束、クヌギ17束、サクラ17束である。また、この他に着火時にワラや枝木を若干用意した。

(D) 窯詰め 翌11月17日、午前8時研究室に全員集合し、第1次焼成実験を開始した。準備された土器を焼成する前に、昨日の空焚きに続いて再度空焚きを行なった。これは窯の湿気をぬくためと、窯入れ、点火の際にあらかじめ窯体温度をいくらかでも上げておいて、着火時の急激な温度上昇をできるかぎり防ぐためである。⁽¹¹⁾ なお、この際に使用した燃料は25.5kgであり、約1時間を要した。この時点で窯の側壁は赤変し、ボロボロになった。この間、製作された土器は、現時点での器面觀察が入念に行なわれた。

窯焚きが終了し、土壤内に残存した灰を一部分取り除き、土器を搬入した。準備された土器は壺2点(広口壺、長頸壺各1)、高杯2点、鉢1点、蓋1点、甕1点、その他1点で、土製品としては土錘2点、有孔円板1点である。その他、土器が窯底に密着することによる火回りの悪さを防ぐため、焼台として径3cm程度の球形土製品を若干用意し、土器の底にしいたが、結果的には実質的な焼台としての用をなしていない。搬入した土器は原則としては、正立させてセットしたが、蓋形土器は天地転倒して、甕形土器は器高が高いため、横転してセットした。窯内における土器の配置は、比較的大型の壺1点を中心へ、他の器種をその周囲に置くようにしたが、焼成土器が窯体の面積に比べ少數であったため、窯床全体には広がらず、むしろ中央にまとまってしまった。(第125図)

多い場合は、土器を2段・3段に積み上げることも一考されよう。

(E) 焼成温度測定装置の設置と計測 今回の実験においては、土器焼成温度を正確に測定するため、熱電対測定装置を使用した。熱電対は2種類の金属を加熱することによって発生する熱起電力を増幅して温度の変化に表わしたもので、今回の実験ではアルメル・クロメル熱電対

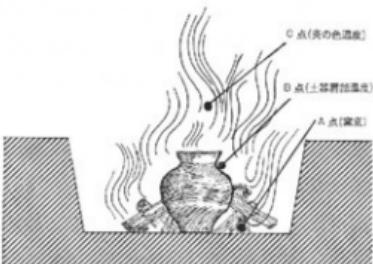
を使用した。これによる温度測定範囲は $0^{\circ}\sim 1,200^{\circ}\text{C}$ であり、今回のような露天窯では $1,000^{\circ}\text{C}$ を越えないと想定していたため、本装置の採用となった。測定精度は摂氏 1°C 以下というきわめて信頼度の高いものである。

今回の報告では記録計に記されたグラフの読みは、プラス・マイナス 5°C の誤差を無視して読み取り記述した。今回の実験の主旨より、この程度の誤差は許容範囲とみなされたからである。熱電対は外部からの衝撃による破損を防ぐため、硝子管に入れて保護し、各々の測定位置にセットした。また、アイスピットを準備し、熱電対の一端を常時 0°C に維持し、外気温の上昇による測定温度の誤差をなくすようにした。

測定温度の記録の方法としては、2ペン式日立QPD73型卓上記録計を使用した。これによって焼成温度の変化が時間の経過に伴って、自動的に記録されることになる。

また、焼成温度の測定は2点で行ない、1点は窯底温度を測定するため、窯床の中央部（壺形土器底部付近）に熱電対をセットした。（以下、これをA点と呼ぶ。）他の1点は、できるかぎり実際的な焼成温度を測定するため、中央に設置された広口壺の口縁部に直接、測定単子をセットした。（以下、これをB点と呼ぶ。）B点は土器に加わる温度をA点より忠実に反映するものと考えられる。温度測定はこの2点の他、随時、光高温度計（オプチカルメーター）によって測定した。これは炎の色温度を計測する器具で、土器の焼成温度というより炎の温度や炭の温度を測定するため、実際的な焼成温度よりかなり高温度が測定されている。（以下、これをC点と呼ぶ。）焼成装置模式図と測定点との位置関係は、第120図の模式図に示したとおりである。

(F) 焼成の過程 空焚き・土器の搬入・焼成測定装置の設置が終了すると、直ちにワラを土器の周囲に置き、10時41分、四方より着火した。着火前のA点が 100°C を示すのは、空焚きの余熱である。点火するとワラは勢いよく燃えあがり、B点はまたたく間に 400°C にまで上昇し、点火後2分、にぶい爆発音が連続し、この時点で既にかなりの土器が破損したようである。ワラは温度の上昇が激しく、焼成時間が短いため、次々と投入したのであるが、グラフに示すごとく、 450°C を最大値として 400°C を前後する程度までしか温度を保てない。火が一とおり全体を回り、ワラの手持ちがなくなったため、10時58分、薪の投入を開始した。薪への火移りが不調だったため、B点は一時 150°C まで下がったが、薪が勢いよく燃え出すと、温度は急ピッチに上昇し、 700°C をオーバーした。以後、順次、薪を追加し温度を 700°C ラインに保つようにした。



第120図 土器焼成模式図

一方、A点（窓底温度）は、ワラに着火すると同時に温度は一時的に下降をはじめ、次いでゆるやかに上昇を始めた。B点の温度上昇に比べ、A点はきわめて緩慢な温度変化しかみせず、このような小規模な焼土壙にあって、これほども温度差があらわれるとは全く予想外の事実であった。

この時の土器の状況は、窓の口縁部の一部がやや赤化している程度で、他はすべて煤のために黒色を呈していた。

再びB点温度に目を移すと、薪の投入と燃焼の関係によって上下の差はあるが温度は700℃を維持していたが、11時40分～12時かけて一段と温度は上昇し、11時50分すぎには瞬間に最高温度934℃を記録した。これほど高温度が記録されることは全く予想外であった。

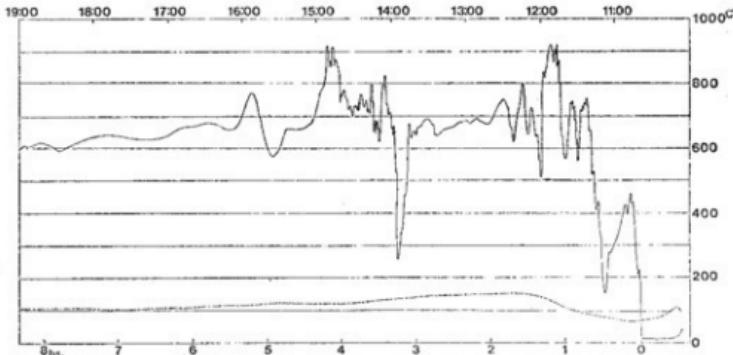
この後、A点も最高温度を示し、150℃を測定したが、A点はこれ以後どんなに薪を投入しても、温度の上昇はなく、徐々にではあるが下降に向った。

さて、これ以後どんどん薪を投入してゆくのであるが、B点温度はほとんど650℃～700℃を前後するのみで、点火から4時間経た14時45分～15時ごろに、再度温度のピークがあり、14時50分ごろ920℃に達したが、これ以後温度の変化はきわめてゆるやかになり、しかも温度上昇はみられない。(14時前にB点温度の急下降を見るのは土器周辺の灰を若干除去したため。)

この頃になると、多量に投入した薪のために、焼土壙内にはかなりの灰が堆積し、土器の約半分を覆ってしまう結果となった。

したがってこの上に新たな薪を投入しても、燃焼点が土壤内の上位であるため、B点の温度上昇にまで火熱が十分に伝わっていないようで、この後、17時05分に至るまで断続的に薪を投入したのであるが、グラフに表わされたとおり、温度はほとんど変化なく、これらの燃焼も600℃の温度を維持することくらいしか用をなしていないようである。

薪の投入が終わると、すぐに土器を取り出すことをせず、そのまま放置しておいて、すべて



第121図 焼成温度の変化(実線はB点、破綻はA点)

の作業を明日に持越した。

17時48分には炎は全くおさまり、外観的には、いわゆる残り火程度であるが、B点温度はまだ650°Cを持続しており、余熱は燃料投下を停止した後にもかなり残ることが判明した。

なお、焼成中の光高温度によるC点温度は遂時記されなかったが、盛んに燃焼している時の黄白色の炎の温度は1,200°Cを測り、燃焼している赤黄色の木材の色温度は950°Cである。

鎮火後のB点温度は、19時の時点でもまだ600°Cを示していた。

炎が消えてから、この時点までの温度下降は平均すると毎分0.5°Cというきわめてゆっくりしたスピードである。

火焰が消えてからは、土器のほとんどが黒色灰に覆われ、壺と広口壺の一部を除き、全くみえなかった。しかし、時間がたつにつれ、黒色灰は徐々に表層から白色灰に変化し、また灰層が沈下してきたため、広口壺口縁部や、壺胴部が比較的よく観察されるようになった。

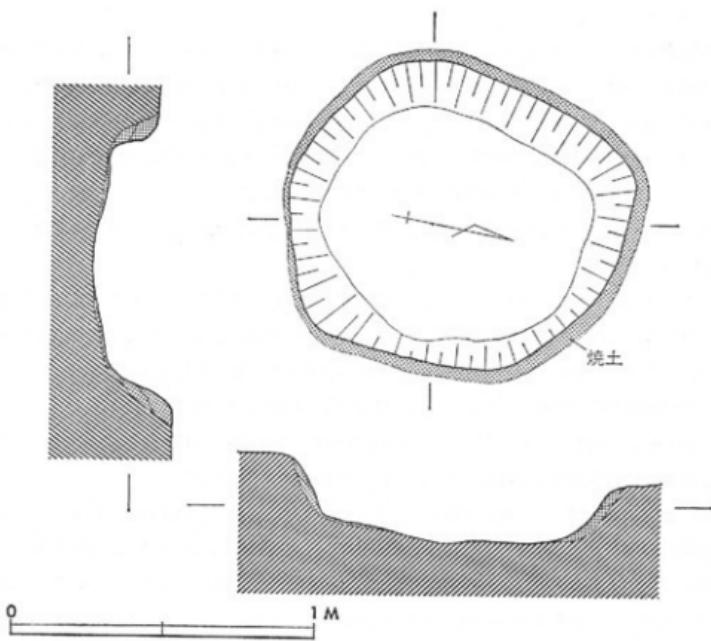
21時には温度測定を終了した。この時のB点温度は550°C、A点温度は100°Cである。グラフは19時までしか記していないが、それ以後もきわめてなめらかな温度変化を示したのみである。22時には炭火を残してほは鎮火し、17日の作業をすべて終了した。

(G) 土器の取上げ 焼成後の土器は、できるだけ自然に温度を下げるため、取上げ作業は鎮火後約13時間を経過した18日午前10時30分より開始した。この時の窯には一面に灰が堆積しており、その中より壺・壺の一部が顔を出していた。窯体内に堆積した灰は、上から2~3cmが白く(上層)、その下は黒い灰およびワラ灰であった(下層)。灰を注意深く除去し、土器を観察すると(第129図参照)、土器の焼き上がりは、灰より上に露出していた部分、及び灰の上層にあたる部分は淡黄色、下層にあたる部分は、黒色~灰黒色に焼け、器表に付着したススを追い出せなかった。また各土器が接近する箇所においては黒色煤化の傾向が強いことが、取上げ時の観察で判明した。この現象については後論する。

(H) 窯体の変化 焼成土器を搬出し、窯体内的灰を除去すると、窯を長軸・短軸の十字に切断して再発掘し、窯壁断面を観察した。(第122・132図)

これによると、まず窯体側上端(肩)の外へ向って黒色煤化の現象がみられた。この煤化現象は深層まで及ぶものではなく、きわめて表面的なものである。この浅い煤化層下は鮮紅色に焼けており、側壁上端より5~10cmがこれにあたる。側壁の中位より窯床面にかけては、黒色酸化層に、さらに床中央付近は淡い肌色に焼けている。この黒色酸化層は、厚く堆積した灰層の影響によるものと思われる。赤色焼上層以外は、層として捉えられる焼土はみられないが、床・側壁とともにきわめて硬く焼け上がっており、随所に小さなヒビ割れがみとめられる。このように、一度の焼成で焼土壌自体がどう変化するかが確かめられた。

(I) 焼成土器の状態 第一次実験では焼成において破損した遺物が多く、焼き上がりの状態で全容を残しているものは、小型の土製品を除くと、壺形土器1点と壺形土器1点の計2点のみである。このうち壺形土器は、焼成後の整理作業において調査者の不注意から転倒させ、粉



第122図 第1次実験焼土壇

みじんに破壊してしまったため、完形品としての記録は取れなかった。次に各器種別に焼成土器を観察してみる。

壺形土器は口縁の一部にヒビ割れを生じたのみで、全く完全に焼成された。焼上がりの色調は口縁端部、胴部肩（上半）、胴部中央、胴部下半、底部において著しく異なる。まず、口縁端部は淡い黄色に焼け、口縁の全周においてきわめて齐一的な色調を呈している。通常有の弥生式土器にみられる赤化ではなく、さらに微視的に部分をみれば、黄白色～淡い灰色を呈する部分もある。硬度は非常に硬く、爪で搔いても容易に傷がつかない。また器壁の薄い箇所においては軽く叩くと金属音を発する。

口頸部は、体部との接合面に近いくびれ部はこの黄色度が落ち、淡く灰黒色を呈するようになる。黒斑とはいえないが、よわく黒色煤化しているといえる。ヒビ割れの部分から口縁部・頸部の断面をみると、断面は全体的に黄白色を呈し、器表口端部分の色調と何ら変化はない。口頸部の煤化部分は器表にのみみられるもので、器内の深層に至っていない。

胴部上半は、口縁端部と同色の淡黄色を呈するが、黄色味は口縁部より弱く、やや肌色に近い色調である。胴部上半でも胴中腹に近い部分は弱く煤火し、濃灰色ともいえる色調を呈す

る。この部分は、ちょうど帶状のワラの痕跡が各所にみられ、備前焼にみられる火だすきのように観察される箇所がある。これは着火時に用いたワラのなせるわざとみられる。

次に胸部下半は、上半とは対照的に完全に黒色煤化され、他の部分でみられるような黄色は全くみられない。この黒色の煤化が器表のみであるか、あるいは器肉の深層に達するものであるのかは、この部分の破損が全くみられないので明確ではない。他の状況から類推して、深層内部に達するものではないようである。

底部に至ると、この黒色煤化部分は再び明白となり、やや淡い赤褐色を呈する。この部分に至ると器壁の硬度はかなりおり、爪でかくと容易に傷がつくほど軟質になる。

次に内面であるが、内面は外面に表われた変化ほど複雑な著しい変化はみられないが、口縁部～頸部にかけての部分と胸部においてはやや色調が異なる。

口縁部～頸部の内面にかけては、口縁端部の淡黄色と全く同一に焼上がっている。器質も硬い。胸部内面は一様な淡い赤褐色を呈しているが、底部に近い部分は、黒灰煤化の傾向を見せる。この部分は外面の胸部下半にみられた黒灰色煤化部分ほど顕著なものではなく、色調も真黒ではない。

長頸壺は、窯の中央よりややはずれた場所に正位置の状態で焼成した。

しかし、焼成中に口頸部が破損し、この部分は観察にたえない。

色調は壺の場合と同様で、外部の底部周辺は淡灰褐色・胸部下半は灰黒色・胸部上半は淡黄色を呈している。胸部下半にみられる灰黒色は他の上器に接する、内側に多く広がりをみていている。

また、壺形土器で述べたいわゆる火だすきは、窯の外側に面した肩部に散見されるにすぎない。焼成は堅緻であるが、精良な陶土を使用したためか、実際の弥生式土器に比してややもろさを感じる。

壺形土器は窯床の縁辺部に横転させた状態で焼成された。土器各部計測値はわずかながら減じ、重量も910gとかなり軽くなっている。

胎土はなめらかであるが、よくみると器面全般に微細孔がみられる。

色調は土器のいわゆる地色に対し、黒斑が窯詰めに際して下方になった部分に重点的にみられる。

口縁部は、窯詰めの下方になった約半分は灰黒色を呈し、他はかなり明るい黄色ぎみた肌色を呈す。それでも同部外面は内面に比して、黒色煤化の範囲が広く全般的に暗い。

胸部外面は横転させて窯床に接した下半は暗色に、上半は明色にわかる。すなわち、壺を正立させると左右で継に明・暗色が区別される。また、暗色部には火だすきがみられるが、とくに明色部との境界に著しい。

暗色部の色調は単調でなく、窯床に接した部分はやや赤みをおびた黒色を呈し、やや灰色ぎみた黒色、さらには漆黒色にと変化してゆく。

明色部の色調は口縁部の明色部に類似するが、焼成時に最上部となった胴張りあたりはむしろ灰色みを強くおびる。

胴部内面は外面ほど変化はなく、全体的に淡く煤化しているが、外面の灰色部に対応する部分はやや赤みがかっている。この点、壺内面と類似した焼け方を示す。

口縁欠損部により器肉深層をみると單調な淡い暗赤色を呈し、外面の色調は器肉深層にまで達していない。よって器壁の層状を呈する芯もみとめえず、俗にいう「サンドウイッチ」はみられなかった。

全体の焼成はきわめて良好で、硬質感があり、叩くと鋭い金属音を出す。断面は多孔質である。外面の叩き目は概して凹凸部著しくなく、とくに胴部下半は判然としない。これに反して刷毛目は凹凸部きわだち、使用痕や消耗がないため、感触甚しく荒々しい。

頸部～口縁部にかけての破損部では、粘土帶間にには空洞がみられたり、明瞭な段のつくこともある。これを仮に擬口縁（false-rim）と呼んでおこう。また粘土紐輪積みにそった焼成時の亀裂は胴部上半に、また外面に多く生じている。

鉢形土器も硬質に焼き上がり、金属音を発する。色調も明色部・暗色部に大別される点など他とかわらないが、内面に比して外面が全体として暗い色調をおびる。ただ、内面には外面にみられた漆黒色を呈する部分がない。

焼成時に生じた破損としては底部内外面に生じた剥落があり、特記される。この損傷は明らかに、製作技術自体が原因として焼成時にあらわれたものであり、とくに底部に、しかも内外面ともに対照的に破損したことは、既に述べた「底部再成形」に対応したものと思われる。この点については、結語においても再述する。

高杯形土器は2個体が窯の周縁部で正立して焼かれた。杯部全体は淡い肌色に近く（明色部）、脚部は黒色煤化している。

明色部分をよくみると口縁端は赤っぽい。杯部内面はやや白味をおび、ところによって還元状態での焼成を思わせるような灰色部分が散見される。

杯底部はやや煤化し、やはり火だしきがみられる。脚部大半は黒色化し、それも脚柱部から裾部にかけて著しい。脚内面は淡く煤化し外面に比べて單調である。

(J) 焼成結果のまとめ 以上の所見より、第1次焼成による鉢形土器の呈色状況を例にとって、焼成時の諸条件に照らし合わせて考えると、次のようになる。まず、外面において口縁部から胴部上半の黄色部分と同下半の黒色煤火部分に区分されるが、これはちょうど窯体内に堆積した燃料の灰が窯の口縁部以下をすっぽり覆ってしまったことに符合する。

口縁～胴部上半は常に火炎が直接あたり、外気からの酸素の供給を十分受け、火熱も強く、そのためこのような淡黄色・硬質に焼成されたと考えられる。

それとは逆に、胴部下半が黒色煤化していることは、窯体内に沈積した燃料の灰によって、火熱や酸素の供給が十分でなく、器表に吸着した炭素を追い払うことができなかつたからに他

ならない。底部（A点）は常に100°C～150°Cのゆるやかな温度変化しかなく、したがってこの温度では素地に対して化学変化をおこさせるのは無理であろうと思われる。ちなみに100°C～200°Cでは、素地は粘土内に含まれる吸着水の脱出がおこる段階で止まり、粘土鉱物の化学変化は温度上昇が500°C～700°Cに至る必要があるとされている。⁽¹²⁾

したがって底部付近が他の部分に比べて軟質であるのは、やはりこの温度差に帰因したものと思われる。ただ、それでも淡い赤褐色に焼上がっているのは、底部が火焰によって直接的に被熱したと考えるよりも、他の強熱部からの伝導熱による被熱を考慮した方がより合理的である。つまり、口縁部側より胴部上半へ、胴部上半から下半へ、さらに底部へと器壁を伝って熱が降下したといえる。

このようにしてみると、今回の実験において焼成された土器は、通常に検出される弥生式土器とはかなり異質なものが焼き上がったのである。この結果からみれば、土器の色調に関して重大な鍵をにぎるのは、やはり焼成の方法であり、次回の実験において焼成技法に対して、何らかの工夫を必要とすることが明らかにされたのである。

具体的には、焼土壤内の燃料灰の沈積を防ぐことであり、そのためには、燃焼中の効果的な灰の掻き出しを行なう必要がある。つまり灰の掻き出しのための施設を造作した土壤を構築する必要があるので、その結果、下辺が欠失したもの、あるいは下辺の一部を開口した土壤を掘らねばならないはずである。

次に第1次焼成実験の経過を以下において、写真をおって簡単にふりかえってみる。

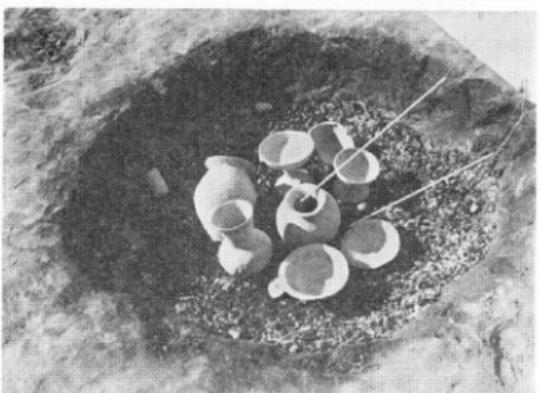


第123図

第1次焼成実験 I 第1
次焼成実験のモデルにした
大師山弥生遺跡検出の第4
号焼土壤。



第124図
第一次焼成実験Ⅱ 実験
土壤を掘り、空焚きが終了
した状態。(11月16日)



第125図
第一次焼成実験Ⅲ 再度
空焚きを行ない、土壤内に
残った灰の上に土器をお
き、温度測定点に熱電対を
セットした。土器上にのっ
ているのがB点である。
(11月17日、以下同日)



第126図
第一次焼成実験Ⅳ 土器
の周囲、上方にワラを置
い、着火直前の状態。



第127図
第1次焼成実験V 焼成
中の実験焼上焼



第128図
第1次焼成実験VI 焼成
を終了した段階。土器の一部
が顔をみせている。



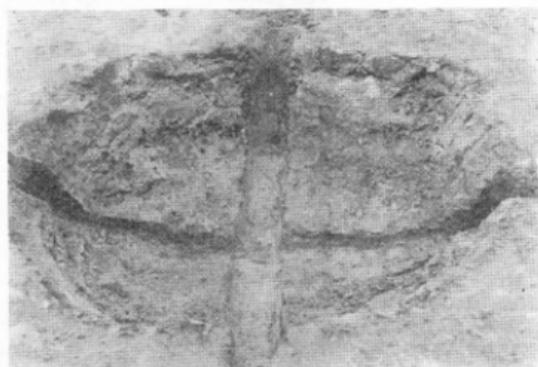
第129図
第1次焼成実験VII 沈着
した灰の一部を除去してい
る段階。壺形土層の黒斑と
灰の関係がよくわかる。
(11月18日, 以下同日)



第130図
第1次焼成実験Ⅳ 沈着した灰を除去し、土器を取り出す直前の段階。



第131図
第1次焼成実験Ⅴ 土器を取り出し、焼土塊を精査した段階。



第132図
第1次焼成実験Ⅹ 燃土塊を十字に断ち割って再発掘し、土壤の被熱状況を調査。大師山検出例との比較資料にした。

2. 第2次焼成実験

(A) 第2次焼成実験の目的 第1次焼成実験では、大師山遺跡検出焼土壙の被熱状況を再現することができた。また、七器が焼成されたことにより、その用途として考えられていた土器窯としての可能性も、強く是認されることとなった。

第2次焼成実験は、この2点の成果を踏まえ、さらに次の点に留意した。先ず第1次焼成実験で焼成された弥生式土器は、通常の弥生式土器と比べ、色調を異にしたのであるが、今回はあらゆる面において、普通一般にみられる弥生式七器と酷似したもの燒上げることを目標においた。そのためには焼成の方法を改める必要があった。

したがって今回は、大師山遺跡検出の焼土壙のうち、とくに形態上に特色をもつ斜面に掘抜かれた焼土壙を再現し、その焼成過程を分析し、併せて、土器を焼成してみることにした。

このため、焼土壙は構造上、第1次焼成実験と同様に第4号焼土壙をモデルにした平地に掘りくほんだものと、第3号焼土壙をモデルにした、ゆるやかな傾斜地に方形に掘りくほんだものの2基を構築し、2基を同様な焼成法によって同時に焼成して比較することにした。本報告では、前者を平窯、後者を傾斜窯と仮称する。

(B) 窯の構築 第2次焼成実験は、前回と同様の地点を使用した。平窯は前回とほとんど同じ場所を、傾斜窯はその北側約5m隔てたゆるやかな傾斜面に構築した。

平窯は、やはり第4号焼土壙をモデルとすることから、前回とほとんど相違はない。ただ、灰の撒き出しを行なうという実験の主旨にそって、東側には側壁の一部を掘り、幅約0.3mの側口を設けた。

傾斜窯は、長さ1.2m、幅1.0m、深さ0.5m~0.2mの方形に近い上壙を掘り込み、底部を平滑に整え、下端部を幅25cmにわたって切って、側口をつけ、灰の撒き出し口とした。床面の傾斜は箇所によって異なるが、ほぼ 4° ~ 10° となり平均 6° の傾斜窯をつくることができた。

奥壁側（後方）は深く、前方は浅い方形土壙に下方の一端が開口したものである。

(C) 燃料 燃料は第1次焼成実験と同様の市販材を使用した。準備した薪は80束400kgである。

(D) 測定計器類の設置 今回は前回と同じ測定法を採用した。すなわち、漸進的な温度変化は、アクメル・クロメル熱電対測定装置を、またその都度の炎の色温度は、高光度計を使用した。熱電対は、傾斜窯に2点、平窯に1点の計3点の測定端子を設置したが、図表には傾斜窯の2点のみ図化した。いずれも、焼成土器の肩部の温度を測定するようにセットし、前回行ったような窯底温度は今回の実験においては記録しなかった。

傾斜窯にあっては、手前の焚口に近いところに1点、後方奥壁に近いところに1点を設置し、傾斜窯の各部の温度の差をよみとれるようにした。

(E) 土器の搬入 平窯には、中央に大形の変形土器を、周間には小形の変形土器、高杯形

土器、蓋形土器、甑形土器等9点を配置した。前回の実験に比較すると焼成土器が大型であるため、壇内をいくぶんか満たすことができた。壺形土器の中には、彩色実験を行なうため、各部に様々な条件の赤色顔料を塗布したものが1点含まれている。

傾斜窯は、壺形土器・壺形土器を主体にして9点を搬入した。平窯に比べ、やや容積が大きく、したがって前期の大形壺形土器、中期の壺形土器などの大型の器形を搬入したが、とくに前者は器高が約50cmもあり、窯の中に直立させて置いたが、口縁部は大きく窯からつき出るような状態であった。

(Ⅳ) 焼成の過程 7月8日、朝より空焚きをすませ、七器の搬入、温度測定装置のセットを完了し、ワラを置いて着火の準備が整ったのは12時であった。

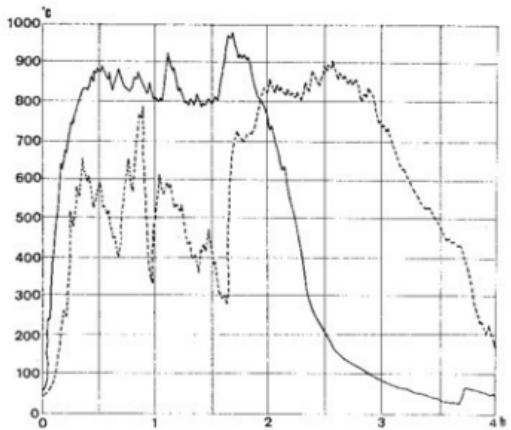
第1次焼成実験は、ワラへの着火から燃え上がるまでの急激な温度上昇によって、多くの土器の破損を生じた経験から、できるかぎり徐々に燃やそうと努力したが、ワラをあまり燃やすず、薪の投入をスムーズに行なったため、結果的にはグラフ(第133図)のごとく、約10分で600°Cの段階に達してしまった。しかし、第1次実験のように、爆発音をたてて土器が損壊するようなことはなかった。

グラフによると、焼成の経過をみると、(実線は奥壁に近い部分、A点とする。破線は焚口に近い部分、B点とする) A点は非常にスムーズな温度の上昇を示しているが、これはワラから薪への着火が良好であったわけで、それに比べ、B点は当初、温度変化が激しく、かつ、A点より低温度であるのは、ワラから薪への着火が悪く、なおかつ、燃焼がスムーズに行なわれなかつたことを示しているものと考えられる。このグラフの前半の動きでも明らかのように、このような小さな土壤でも、火のつき方次第では各部の温度差が著しいのである。

傾斜窯の場合、奥壁側が高く、さらに前方を焚口としたため、火炎は常に奥壁に向って流れ、手前の燃焼は良好には進まない。(この現象は通常の焚火でも体験することである。) このような状況では、自然の燃焼にまかすと、焼成不良や破損を招く恐れが感じられたため、できるかぎり、手前側へ火の中心を移すように努めた結果、手前側の燃焼がスムーズに高温度を維持するようになったのは、着火後1時間30分を過ぎてからであった。とくに2時間を経過するあたりから、焼成の前半におけるA点のような高温度を維持することができた。ただ、後半においては、A点(奥壁に近い部分)側は、外から土器をみてもわかるくらいに明色に焼け上がっていったため、焼成の中心をB点側に集中したので、後半のA点はB点とは正反対に温度が急激に低下している。

さて、今回は前回における経験から、土器に付着する煤を追い出すことを一つの目標としたため、2基の窯に設置した下方への灰の掻き出しをフルに使って、絶えず火炎を上器壁に直接あてるよう努力した。

そのためには、常に火の近くにおらねばならず、木の棒で薪をつついたり、灰を掻き出したりするのであるが、時期的に真夏のことでもあり、実に大変な労働を伴った。10名以上のもの



第133図 第2次焼成実験温度変化表（実線はA点、破線はB点）

生式土器に近い土器を焼成することができたのである。

ここで、グラフ全体を通してみて、焼成過程を振り返ってみる。先ず、A点をみても明らかのように、今回の方が温度上昇が早く、スムーズであることがわかる。次に焼成温度は、今回の実験では、灰の撒き出しと薪を絶やさず投入することによって、800°C～900°Cという高温度を維持できたことがあげられる。最高温度は、着火後1時間45分で計測した970°Cであり、これも第1次実験の最高温度を上回った。1,000°C近い温度が、このような露天窯で得られることは実験にあたったわれわれにとっても予想外のことであった。

このようにして、焼成を続け、約3時間を過ぎたころには、用意した大半の薪を消費し、かつ、外見からでも明らかなくなり、土器の色調が良好に観察され、十分に焼き上りが予想できため、薪の投入を終了し、自然の鎮火にまかせた。

土器焼成に使用した薪は、2基の合計で70束(350kg)であり、平窯は約150kg、傾斜窯は約200kgである。両窯の焼成時間はほとんど同時で、約3時間30分である。

(G) 土器の取上げ 3時間30分におよぶ焼成の後、自然鎮火をまっていたところ、ちょうど火爐もほとんど見えなくなり、燃えつくした薪が白く灰化してきた頃、上空の雲行きが急速に怪しくなり、まもなく激しい夕立ちに見舞われた。

このまま放置すると、焼けた土器は急激に温度が低下し、損壊を招くと判断し、雨中を全員が軍手をはめ、棒切れなどを使用して急いで土器を窯から取出し、雨を避けるため、現場付近に放置されていた口径70cm程度のコンクリート製ヒューム管の中に避難させ、事なきを得た。この時、土器の余熱のため、雨に濡れたヒューム管からはもうもうと白い水蒸気が上り、一同感嘆深くそれを見つめていたものであった。

が2基の窯の土器焼成にかかりっきりとなり、それでも諸作業に追いまくられる有様で、前回行なったような、分割みの詳細な記録をノートに記すことすら十分にはできなかった。

しかし、このような作業をくり返した結果、燃焼の途中で一旦は真黒に煤化した土器も、焼成が進むにつれて、次第に赤色化し、一部に黒斑や淡い煤化部分を残したもの、きわめて弥

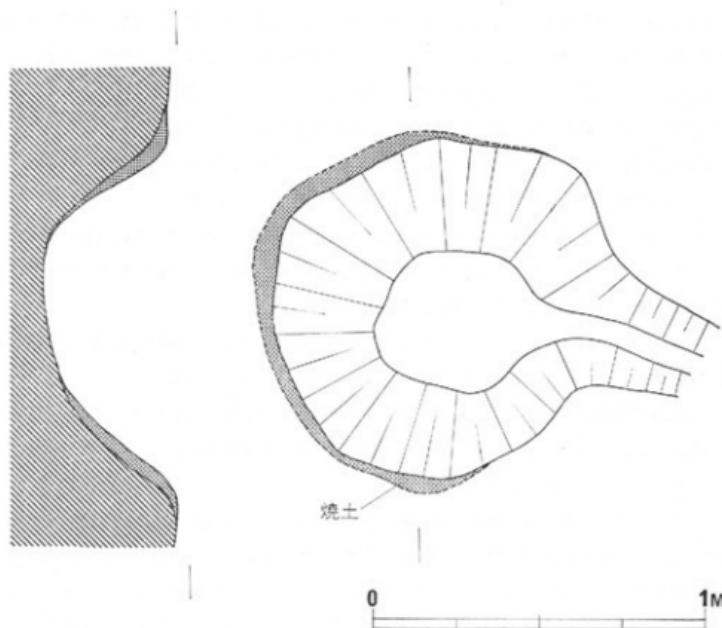
このように、今回の実験では、夕立ちというハブニングのため、土器を自然に冷やすという土器焼成の鉄則を守れなかったので、焼上った土器がこれによってどの程度の破損を受けたのかは不詳である。その後回収した土器をみると、中には底部にヒビの入ったものもあるが、取出しの際は土器を避難させるのが精いっぱいで、土器を十分に観察する余裕もなく、それがこの処置のためかどうかは判断がつかない。雨が通りすぎた後、窯内の灰に残り火があつてはいけないので、双方の窯とともに掘き出し口（焚口）より灰を撒き出した。

今回は焼成中を通じて常に灰の撒き出しを行ったため、黒色灰として窯内に堆積したものが多く、また窯内でも大半は灰化して、炭としての痕跡を残しているものが少なかった点は注意される。そのため、撒き出された黒色灰は、1m四方以下に薄く広がった程度であった。

この後、窯は木を組んでシートをかぶせ、翌日の再発掘に備えた。

④ 窯体の変化 焼成後、第1次実験と同様に、十字トレンチによって断ち割り、窯壁の変化を観察した。

平窯は、第1次実験窯と規模・構造はほとんど同じで、焼成後の窯体も同様な変化を示した。

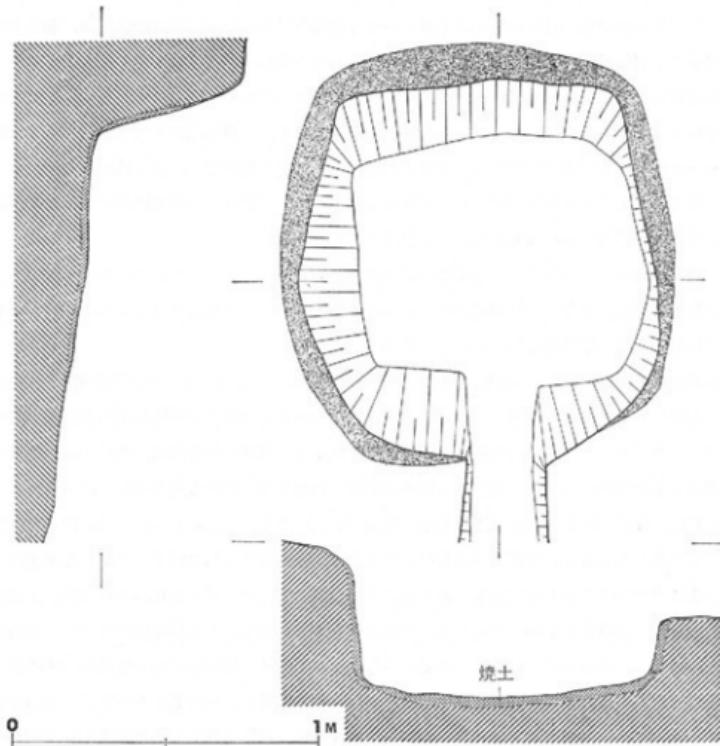


第134図 第2次焼成実験窯(平窯)

まず、赤色に酸化した層は（今回では赤色というより灰白色に近い色を呈したが）、窯体側壁の部分に限られ、しかも側壁上端（肩部）に近づくにつれて厚く酸化層を残した。ただ、前回の実験に比べ、全体的に焼成温度が高かったのと、窯体内に灰を残さないようにして、焼成点を下げたためか、酸化層はより厚く、最大10cmを計るところもある（第134図）。また、側壁上端は淡く黒色炭化した部分を残したが、これはちょうど灰の掻き出しに使用した側口と反対側に付き、掻き出し口（焚口）から奥壁に向って、火焰の流れがあったことを示している。これは実験中に観察された炎の状況とも一致する。

傾斜窯は平窯と同様な焼き方をしたにもかかわらず、若干の差異を示した。平窯にみられる赤色酸化層は、主として側口部分にみられ、その厚さは5cm程度で他と大差はない。

しかし、第1次・第2次のいずれの平窯においてもみられなかつた窯床部の赤色焼土が、焚口（掻き出し口）付近を除く大半の部分に、厚さ1～3cmにわたってみられ、一部は肌色に近



第135図 第2次焼成実験窯(傾斜窯)

い状態にまで焼き上っているのである。このように窯体の酸化層でみるとかぎり、平窯よりも傾斜窯の方が、窯底に至るまでの熱効率が良好なことを示している。

また、側壁部の黒色煤化部分は、灰の掻き出し口（前方）よりも奥側壁（後方）の方が大きく、焰の流れが、掻き出し口→奥壁へ、と上方へ流れていったことを証明している。この点については平窯と同様である。当初、火のまわりは奥壁側の高い方へ高い方へと走り、掻き出し口側へは後半になってやっと火を導くことができたということもそれを裏付けていよう。

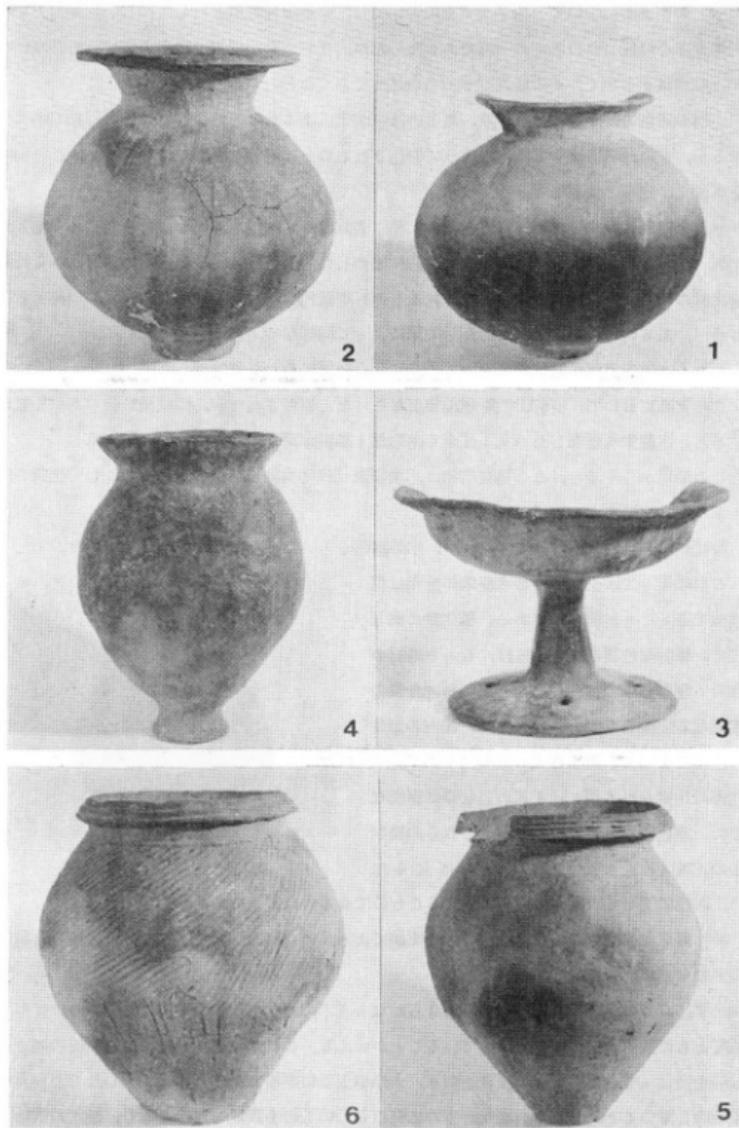
(II) 焼成土器の観察 今回の実験において焼成された土器は18点で、そのうちもっとも大型の壺形土器が著しく破損した以外は第1次実験に比べて損壊率は少なく、良好な資料が提供された。また、平窯と登り窯の2基を同時焼成したのであって、報告も双方を区別して行うべきであるが、両者の焼上がりは全く変わらず、したがって一括して報告することにする。

第2次実験では第1次の場合とは全く異なる方法で焼成を行なったが、その結果、全く異質な焼上がりを示した。色調はすべて赤褐色を呈し、黒色の円形黒斑、あるいは灰色の不整形な黒斑などが各所にでき、通例の弥生式土器と同様な色調を呈している。黒斑の位置は、胴部上半の肩部分・胴部中央・胴部下半～底部にかけて隨所にみられ、赤褐色の器色も各土器を通じて一定で安定した呈色を示している。これは、焼成中において盛んに灰の掻き出しや、燃焼を促進されるような工夫を行なったため、火熱がどの器体にも、どの部位にも均等に行き渡った結果であることを如実に示している。器表・器肉の色調は全く変化なく、よく内部まで焼上がりしているといえよう。また各部位とも非常に硬く焼きしまっており、一部で底部に若干の軟質部分を残すものが認められるものの、その差はきわめて少ない。

土器の内面についてみると、赤褐色の順当な焼上がりを示しているものの、概して器表に比べて暗色を示し、器表より相対的に焼上がりは悪いといえる。これは大きさの大小を問わずすべての器種について共通していることである。

黒斑は器体の随所にみられ、その形状も径2～3cmの比較的小型のものや、径10cmクラスの大型のものもある。黒斑の色調をみると、真黒ではないが雲形のように不定形を示す灰色の煤化部分は非常に多い。この黒色煤化部分を注意してみると、高杯の杯部内面、鉢の内面、あるいは壺形土器の内面などラッパ状に開く個所に広範（内面全面にわたる例が多い）にみられる。

これは、薪木の灰がこの部分に堆積し、焼成中の灰の掻き出しにもかかわらず、排出されなかつたためと考えられ、煤化部分は燃料の灰や炭に大きく影響された結果によることうを裏付けている。壺や壺の内面には黒斑等はきわめて少ないが、底部付近に顕著にみられる例、あるいは胴の一部分にみられる例などもある。これは正立させた土器、あるいは横転させた土器の内部に口縁部より灰が入り、堆積した結果といふことができる。黒斑の形態・色調が各所によつて多様であるのは、燃料中の灰と窑壁との微細な変化で黒斑が現われることを暗示しているようである。また、外面の黒斑は、第1次焼成実験と同様、隣接土器の密着点に集中して認められるが、これは円形の黒斑の成因を考究する上で注意すべき所見といえる。



第136図 焼成された甕生式土器（1は1次実験のもの、他は2次実験で焼成）

(J) 彩色実験について 第2次実験においては、彩色実験をも並行して行ない、平窯で彩色壺形土器を焼成したのもその一環であったのだが、まだ十分な成果を論ずるに至っていないので、結論はともかく、その経過を一・二点述べておくこととする。

土器の彩色は、一般には酸化鉄、あるいは水銀朱によるものであることは既に周知の事実であるが、どの顔料によって、どのように彩色されるのかの過程を明らかにするため、この両者を準備し、塗布・焼成を行なってみた。

水銀朱は奈良県宇陀郡菟田野町所在の大和水銀鉱山にて試料を入手し、あらかじめ準備した土製パネル（10cm四方のタイル状のもの）に塗布した。酸化鉄は、千里丘陵の露頭にみられる酸化鉄の沈着層（俗に「鬼板」と呼ばれるもの）を数種採集し、乳鉢で粉碎して、加熱・赤化させて、あるいはそのまま水に溶かして筆によって同様なパネルに塗布した。

これを本学工学部の電気炉において750℃、5時間にわたって焼成した。

この実験において、375℃で発煙現象がおこったと報告されたが、焼成後に各パネルを観察すると、水銀朱を塗布したパネルは全く跡形なく顔料が消え去っていたわけである。

この結果からみると、この発煙現象は、水銀朱（硫化水銀）が化学変化を起こして色調を失った結果と判断できる。

酸化鉄の方は、鮮明な赤ではないが、赤茶褐色ともいえるような色調を残していた。

これによつて、土器面への水銀朱の塗布は焼成後であることが明らかである。酸化鉄に関しても、鮮明な色調を呈するには、もっと素材の選択・塗布方法の改良が必要と思われ、今後の度重なる実験を必要とする。また、畿内の弥生式土器において、第I様式の壺胴部や第V様式初頭に比定される四ノ辻I式の装飾壺口縁部などに、赤色彩文の実例があるが、これらの資料との比較・検討も十分進めてゆかねばならない。彩色に関して、現在の段階で論ずることのできるのは以上である。

(K) 第2次焼成実験のまとめ 今回の実験によって得られた知見をもとに、先に行った第1次実験などの成果を比較してみたい。

まず、双方の温度変化表をみてもあきらかなように、第2次実験の最高温度、あるいは平均温度とともに、第1次実験を上回っていることがいえる。これは、今回の実験は常に灰の掻き出し等を行なつて土壤内の灰の沈着を防ぎ、火焰が土器に直接あたるように工夫したことが大きく原因していると思われる。また、下方に焚口らしいものを設定したことより、酸素の供給が順当に行なわれ、燃焼を効率よく進行させたことも、このような高温度を維持せしめたといえる。この2点をみても、短期間で硬質な土器を焼成せしめた要因とみることができる。しかし、



第137図 彩色実験の壺

たとえば頬窓の場合、3時間30分で200kgの燃料を消費したことになり、実に燃料消費が激しい。そればかりか、灰の掻き出し、高い焼成温度の維持等のために常に多くの労働を投下せねばならなかったことを考えると實に不経済な焼成をしたことになる。また、焼成された土器の色調をみても、第2次の実験は弥生式土器に近いものを焼成したのは成功であるが、その理由は先にあげた焼成方法上の2点に原因することは明らかである。

ただ、今回は千里丘陵で採土した粘土を使用していることがこの色調の変化に関係したことともいえる。この件については、もっと異なる条件で焼成実験を繰り返さないかぎり証明できないが、現在の丹波焼きの素焼き段階のものをみるとかぎりにおいては赤化したものもある。このことからすると粘土が原因したというより、むしろ焼成方法上の相違による色調の変化をより重視すべきであると現在の段階では想定している。

5. 結 語

1. 弥生式土器製作実験をふまえて

底部再成形技法とドーナツ状上げ底に関して　壺形土器及び鉢形土器の胴部下半における叩き目手法は、前述したとおり、土器を逆転させて行った。そのときの実験的観察から判明した事実を列挙すると、

I. 底部底面ぎりぎりまで叩き目を施すことが可能（正立状態では土器を手で携えていかかげり底部周縁に叩き目を施すことはできない）。

II. その結果、底部は叩き板の打圧成形によって変形を被り、製作当初のものよりいびつになる。

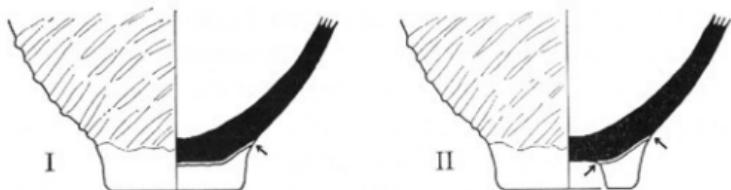
III. IIのごとく底部の形状に大きな変化が生じなくとも、すなわち正円形を呈していても、その周縁は全円周均一に破碎されており、直徑が当初のものに比べ、一周よりも二周よりも小さいものとなる。

結果的には、器体は必然的に不安定なものにならざるを得ず、これに対処するための成形技法が勘案された。実験では、器体逆転状態における叩き目手法終了直後に、底部の該当箇所を再び成形し直すことを想定し、次の2方法を用いてみた。

鉢形土器の場合——中実粘土円板を新たに貼付け、底部底面の表面積を拡大させる（第138図I）。

壺形土器の場合——ドーナツ形粘土紐1本を新たに貼付け、底部周縁に安定感を与える（第138図II）。

この結果、いずれの方法をとっても、外輪上底部は突出することになり、その構造は二重になる。また、底面ぎりぎりまで施された叩き目は、この成形範囲において消失する。したがって、この部分の叩き目を精査すれば、二重目の底部（以下「2次底部」と呼ぶ）の成形残痕周辺



第138図 底部再成形様式図

で、それに喰い込むように突発的になくなっている。

そこで、I・II両者の方法を比較考察してみると、次のようなことが理解される。

①Iの方がIIに比べ、1次底部と2次底部の接合面積が大であるにもかかわらず、指頭による密着点はIIの方が多い(第138図矢印の部分)。

②その結果、Iの場合、1次底部と2次底部の確実な接合は周縁のみに限られ、底部中央面での接合がゆきとどかないのに対し、IIの場合はその接合が比較的容易である。

③したがって、Iでは1次底部と、それを覆う2次の底部との空間にかなりの空気を包含することになり、乾燥段階や焼成時に亀裂、ひいては貼付け状態のまま、きれいに剥落する結果を招く(第1次実験の鉢形土器の焼成状態参照)。

つまり、実験的には2次底部の製作=底部再成形において、Iの方法よりIIの方法を用いる方がより合理的であるといえる。

ところで、畿内第V様式土器の底部には、その特徴として、しばしば上げ底になっているものが認められる。中でもドーナツ状を呈するものが注意をひき、とくに壺形土器に多くみられ、壺や鉢の器種にあっても稀に認めることがある(第139図参照)。最近、都出比呂志氏はこのような後期弥生式土器の底部の特色を一つの技法として捉え、「底部輪台技法」と呼んでいる。⁽¹⁴⁾すなわち、「粘土紐を巻いて直径2~3cmの小さいドーナツ状の輪(輪台)をつくり、輪の内部は充填しないまま、これを基礎にしてその上に粘土紐を巻き上げ、鉢形の逆円錐台をつくる」製作過程を想定し、「この作業の後、輪台の孔に粘土を充填するか、内壁の粘土を指で伸ばして埋める」段階を考えて、「充填粘土が輪台下面に達しない時」にできる「小さな上げ底」として説明する。また、輪台技法の特性として、叩き目手法に際しての末だ充填されていない輪台孔が指ささえに有効な役割を果すことあげている。

都出氏の論じた技法は、弥生式土器の製作を考える場合、意表をつくものであり、ユニークな発想としては非常に興味深い。しかし、実際の弥生式土器を観察するかぎり、その製作原理は容易には認めがたく、いくつかの疑義が指摘できる。

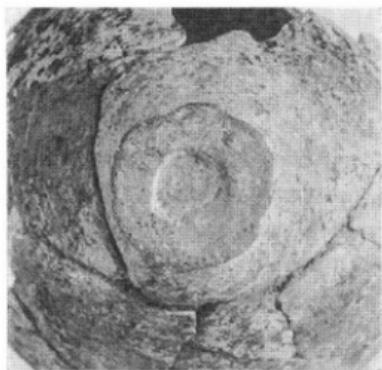
まず第一に、粘土が展性をそのまま残している粘土紐巻き上げの段階に、まだ粘土紐同志の接合が不完全な器体を手で支え、叩き目手法を駆使することが果してできたのかという問題が

あげられる。都出氏は輪台の孔に左手をさし入れ、内部を支えることを強調されたが、輪台そのものが柔軟性をもっている以上、想像するほどの支えは期待できないであろう。また、粘土紐の接ぎ目は少なくとも外面向に消しておく段階でないと、叩き目手法はかえって器体の崩壊を誘因するものと思われる。

第二に、叩き目手法によって輪台はもちろんのこと、器体全体の広がりとゆがみがもたらされるが、輪台の直径増加と底部の厚肉部の減退という両面を考慮すれば、輪台の孔に「内壁の粘土を指で押さえて埋める」操作がいかに無理なものであるかが指摘されよう。この作業工程がたとえ「輪台の孔に粘土を充填する」方法であったとしても、輪台の直径を当初より小さいものにしておかぬかぎり、その閉塞はけっして容易ではあるまい。

第三に、かのような成形技法を肯定する場合、頂部に空洞を有する逆円錐台の底部や粘土円板（充填のためのもの）が実例として検出される筈であり、その具体的な提示がなされねばならない。筆者らは専門にしてか、その実例を知らず、逆に粘土円紐一本で構成される輪台部の実存やその剥落痕を確認している。都出氏の考定する技法によるかぎり、こうした現象は説明不可能と言わざるを得ないのである。

一方、畿内第V様式土器の実例概察をさらに進めると、ドーナツ状上げ底を有する土器で叩



第139図 底部再成形写真

き目の施されている土器は必ずと言っていいほど、底部周縁付近でそれが突如として消えている。このことは実験結果を踏まえるかぎり、輪台部の貼付け技法を示唆しよう。氏の言う技法であるならば、底面ぎりぎりまで叩き目が明瞭に残るものと推測される。

筆者らは以上のような論点に立って、都出氏の提唱する底部輪台技法は普遍的にはあり得ぬものと考える。

外見ドーナツ状を呈する底部は、逆転状態による固定叩きの結果、焼小化した1次底部を、あくまで器体の安定を目的として再成形

するために新たに貼付けられた粘土紐一本（2次底部）であり、ドーナツ形態は実験で裏づけられたように、その接合を合理化するために考案された手法と想定したい。

畿内第V様式に散見され、その特色の一つにも数えられるドーナツ状上げ底が、器種を限ってみられることと、第V様式的叩き目手法との密接な関連で把握できることは、論をまたないところであるが、その地域性と出現・消滅の時期的問題が今後、製作技法の側面から検討されねばならない。とくに消滅の現象については、底部の尖底化・丸底化の段階的進行に対応してゆくことに注目しておきたい。

擬口縁の成立と粘土帯接合面の内傾・外傾について 土器の復原作業において、1個体の土器を構成する無数の破片の破面には、ある一定の規則性が見出される場合がある。今回の焼成実験でもその一端が看取され、乾燥中に亀裂したり、あるいは焼成中に損壊した実験土器は、多くの先学者の指摘どおり、粘土帯の合せ目の部分で割れている。

この粘土帯の合せ目のうち、下の粘土帯の上端のことを false-rim (擬口縁) と呼んでいることは、周知のことと思うが、縄文式土器や弥生式土器にみられるものについては、かつて佐原 真氏が取り上げ、土器成形上の問題としてその視点を論じている。⁽¹⁵⁾

佐原氏は、京都府長岡京市の雲ノ宮遺跡の第I様式土器の破片を詳細に観察し、「粘土帯の端がななめになつてはがれたものがいくつかある」とことに注目され、「粘土帯上端を斜面につくれば、つぎの粘土帯との接着面が広くなる」と理論的に考えている。そして、この粘土帯端の斜面のあり方を、土器の外面側に高く内面側に低いものと、逆に内面側に高く外面側に低いものとに分け、前者を「内傾」、後者を「外傾」と呼んでいる。さらに、雲ノ宮遺跡や東大阪市瓜生堂遺跡出土例の検討から、畿内第I様式土器の成形方法は外傾の擬口縁でもって粘土帯の積み上げが連続的に行なわれていることを明らかにした。

土器片の精細な断面観察の結果から導き出されたとみられる擬口縁のこうした形状については、佐原氏がいくつか紹介したように、外国の研究者も古くから関心をよせており、土器づくりの順序や方法の違い、さらには地方・風土差も反映しているらしい。しかし、擬口縁の形成過程をめぐる佐原氏の見解に対して、全くの疑問がないわけではない。ここでは今回の実験を通して得られたわれわれの見解を述べておきたい。

先に壺形土器の製作工程において詳述したとおり、曲面を有する粘土紐をただ内外から押ししつすだけでは、上下のそれを十分密着させることはできない。その場合の有効な方法として、器壁の内と外より親指と人指し指でわずかにひねりを加えながらつぶしてゆくことを強調しておいたが、粘土帯接合面の外傾・内傾の現象は、実のところこうした作業の結果にはならないと考える。つまり、第140図のごとく、親指をひきおろすように、人指し指をひきあげるように、粘土紐にひねりの力を加えると、下の粘土帯との密着面は器体の内側に傾く(内傾)他方、これと逆の動作、換言すれば、親指をひきあげ、人指し指をひきおろす具合に力を及ぼせば、粘土帯同士の接合面は当然器体の外側へ傾くことになる(外傾)。したがって、前期弥生式土器に外傾の粘土帯接合法がみられるのは、上述したうち後者の方法が連続的に採られたと言うことができる。

このような粘土紐にひねりを加えながらの巻き上げ作業は、そうしない場合に比べ、巻き上げ速度を早めると同時に、1本の長い粘土紐を間断なく密着させ、持続性もはるかにまさっていることが指摘される。それゆえ、こうした粘土帯の接合面を割れ目になることが多いからといって、即「擬口縁」と呼ぶことはふさわしくないと思う。擬口縁と呼称するかぎり、ある一定時間、口縁部のごとく放置されてしかるべきと考えるからである。



第140図 内傾・外傾・擬口縁の成立過程模式図

それでは、擬口縁を如何に定義づけるかという問題に直面するが、既に壺や長頸壺の製作工程において述べたように、先にあげた巻き上げ法も粘土紐の自重による限界が当然のこととして存在し、一定の段階でその作業を中断せざるを得ない。ところで、乾燥後、新たな粘土紐を巻き上げる際、下にくる粘土帯は乾いているため、もはやひねりを加えての密着が不可能となっている。この場合には、やや太めの粘土紐を乾いた粘土帯へ内外ともに上から指頭によって力を加え、包みこむようにして密着させたが（第140図III 参照）、このような接合部の下にくる粘土帯上端こそ真に擬口縁と呼ぶべき状況ではないだろうか。

このようにみると、粘土帯接合面の内傾・外傾現象と擬口縁の成立とは全く異なる技法として整理することができる。

後期高杯形土器における組合せ成形手法の実際 弥生中期の高杯形土器が脚台部と杯部とを連続して成形し、粘土円板を充填して仕上げる「連続成形手法」によって製作されるのに対し、後期のそれがいわゆる「組合せ成形手法」によってつくられていることが明らかにされてから既に久しい。前者が近畿の第IV様式をもって放棄をみたことは、器形の変化や器種の統合と決して無関係ではないが、それにも増して第V様式期における土器の量産、就中高杯の急増を背景としてより合理的な製作技法が求められての結果と思われる。

ところで、こうした後期高杯形土器にみられる組合せ成形手法の実際については、如何に理解されているのであろうか。佐原真氏は「別つくりの脚台部と杯部とを組み合わせてつくる」と説明され、「脚台部をつくり、その乾燥がすすんだ段階で杯部を上につぎたす方法も、組み合わせ成形手法にふくめて、連続成形手法と区別しておく」旨を述べている。このように高杯の組み合わせ成形手法に関して、明らかに二通りの解釈が可能であるが、畿内第V様式につい

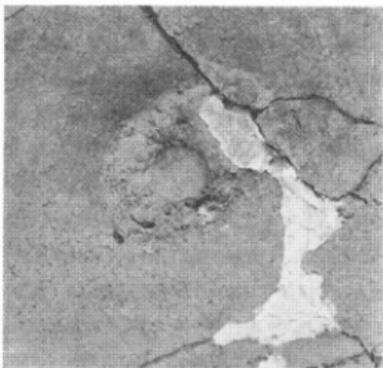
てみれば、一般的には前者の方法が想定されているようである。

その根拠はいくつかあげられるが、とくに土器集成高杯 A₂ の器形の杯底部外面にしばしば認められる突起状の粘土の瘤に求められ、杯部と脚部との接合を強固にするために意識的に造作されたものと考えられており、徒来より「柄」あるいは「臍」などの呼称が与えられている。杯部と脚部が確実に分離して破損する実例の多いことも、これを裏づける現象として把握されている。

今回の実験でも上記したことを考慮に入れ、第1次の製作実験では、高杯の杯部と脚部を個別につくり、杯底部にはさらに柄をつくり出し、接合の工夫を施してみたが、結果的には予想したほどのメリットは得られなかった。

一方、大師山遺跡出土の高杯形土器を詳細に観察してみると、杯底部に柄の痕跡が認められる個体が意外と多く、A₂ (皿形杯部) を主に、A₁ (楕円形杯部) にも及んでいることが知られた。さらに指摘できる事実は、こうした柄を有する杯部と接合する脚部のはほとんどは中空のものであって、中実の形態をとるものはなく、明らかに脚部の状況との間に相関関係が認められる点である。また、柄に相当する部分を精細に観察すると、突起の頂端部は低く丸く終わっているものが大部分であって、かつその箇所が指頭などによって成形・調整のなされたような形跡は、全くみられない。しかも、多くはその周囲に幅数mmから1cmぐらいの深い溝を同心円状に伴い、さらにその周りには薄い粘土の隆起帯がめぐることを常とする(第141図参照)。

以上、列挙した現象を客観的にみるかぎり、これらの柄は、本来「柄」としてではなく、ある行為の結果、このような形状を呈するに至ったと捉える方がより事実に即している。つまりこうした粘土の瘤は、杯・脚両部の接合を容易にするために意識的につくり出したものではなく、脚台部の製作が完了した時点で新たに杯底部をついたす手法で成形を行なった際、必然的に生まれた粘土の脚部内面へのズレ落ちと考えられないであろうか。瘤自体に人の手が加わっていないことは当然のこととして理解され、同心円状の深い溝は脚柱部上端の接合面のネガティヴとして、またその外側をとり巻く隆起帯の存在は杯部よりのナデ調整時の粘土の流れ落ちとして解釈することにも何ら抵触を覚えない。低く丸い粘土の瘤があたかも連続成形手法における円板充填法の粘土円板の凸面に酷似していることもこうした想定を傍証するものといえよう。大師山遺跡出土資料中には、かくの



第141図 高杯々部底部外面の粘土瘤

ごとき粘土瘤を有する杯部が中空の脚部と確実に接合できるものが何例かあり、それらについてみれば、この柄と呼ばれる瘤と脚部上端の内壁との接合面には全く空隙が認められず、きっちり組合うことが観察される。また、このような粘土の瘤が確認できない例でも、ヘラ状工具もしくは指頭によって取り去ることを考慮に入れれば、不可思議ではなく、おそらく、器面に撫でつけたり、つき上げて瘤を凹ませたりしていることを否定することはできないであろう。

以上のように判断した結果、第2次製作実験では後者、つまり脚部の乾燥後、杯部を上につきたず組合せ成形手法を採用したわけであるが、これは一応成功をみたといえる。組合せ成形手法における2方法は一見して相違なくみられるがちであるけれど、実のところ、杯・脚両部の別つくり法では杯部成形、とくに杯底部の製作が困難

であって、そこに量産を想定することは経験的にみて
きわめてむずかしいと言わざるを得ない。

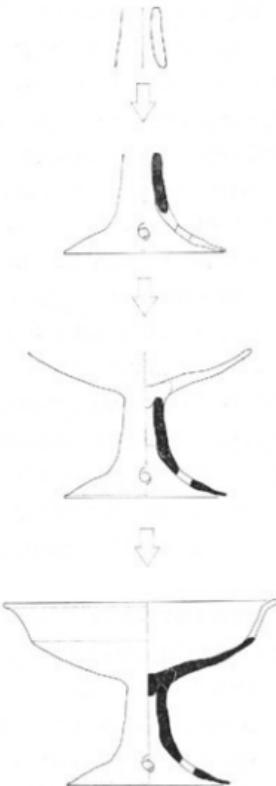
したがって、現在のところ、われわれは大師山高杯
B I (P198 参照)の製作技法を第142図のように理
解している。

この図はいわゆる成形過程を模式的に分解したもの
であるが、その第Ⅲ段階にこれまで説明してきた粘土
瘤の生成が、自然に無意識的に行なわれたものと考え
る。

かような高杯製作技法が畿内弥生後期の他地域でも
広く採用されたか否かについては、他遺跡における分析
が徹底していない現在、検証不可能と言わざるを得
ないが、少なくとも大師山遺跡にあってはこうした手
法が普遍的であったようである。

ただし、4段階組合せ手法とも呼ぶべきこの技法
が、時期と地方を異にする信濃の和泉式高杯形土器A
・ aとして確認できることは注意されてよい。
(17)

いずれにせよ、こうした組み合せ成形手法は、本来
意図されてきた「組み合せ」—杯部と脚部の個体完全
接合とは認識的に異なり、技法的には連続成形手法に
近い点でやや変則的な用語法ということができる。



第142図 高杯成形過程模式図

2. 弥生式土器焼成実験をふまえて

焼成温度の測定について 温度の測定については、「窯や炉における一定条件下の熱を測定する熱電対、オブチカル・メーター、センゲール・コーンなどは、露天の場合、まったく用をなさない。」ともいわれている。⁽¹⁸⁾

確かに、土器の焼成温度と言っても、それは開放窯の場合、土器にあたる火炎の温度なのか、あるいは窯の各部の温度なのかによって、非常に大きな差異の生ずることが今回の実験によって明確に証明されたわけである（たとえば第1次焼成実験によるA・B両点の温度差）。第一、本当の意味において、土器が熱せられる温度を測定しようとすれば、熱電対の測定端子を焼成しようとする土器の胎土の中へ埋め込まなければならないはずである。⁽¹⁹⁾

したがって、記録した二つの線グラフに表わされた温度は、実際の意味において、焼成温度を表現していないかもしれないが、第121図のA点(窯底温度)をのぞく各点は、いずれも焼成土器の肩部に設置された測定端子が感知した温度といえるから、グラフの繊細な上下点がある程度無視してゆるやかな曲線におきかえれば、近似値として焼成温度を読みとることができるのではないだろうか。たとえば第1次実験の場合、焼成温度は600～800℃の範囲、すなわち平均で700℃を前後する温度が土器の被熱温度ということができる。

また、第2次実験の場合は、第1次実験の場合よりも比較的の高温度が記録され、傾斜窯の場合、800～900℃、平均で850℃前後ということができる。

すなわち、これらの結果をみても、從来から漠然といわれてきた弥生式土器の焼成温度とも決して大きくくい違うことでもないわけであり、熱電対による温度測定は、露天窯の場合は用をなさないとする新井氏の所見には必ずしも賛同できないのである。そればかりか、先に述べたように、空焚きの窯の余熱から着火点での温度の上昇、焚の投入に際する温度の微細な変化、灰の掻き出しの際の温度変化、さらには鉛火後の温度下降の状態に至るまで、時間の経過に伴って、手にとるように記録されたのであり、この方法による温度測定は実験したわれわれにとって、非常に大きな成果を与えてくれたのである。

黒斑の成因をめぐって 黒斑は土器の器表に沈着する黒色炭化部分で、縄文式土器、弥生式土器、あるいは土師器に至るまで広く認められており、今回の1・2次焼成実験においても、多様なあり方が観察された。

その成因については、すでに「紫雲出」において詳細に考察されているが、佐原真氏はとくに器壁の深層にまで黒くならないということから、赤く焼かれた後の段階で、その後に黒斑がつくことを想定された。これについては今回の焼成実験の成果とも一致しており、妥当な指摘であると評価できる。

次に黒斑のつく位置について、決まった部位が多い点、さらに2箇所1対となってあらわれ

る例が多い点を指摘され、火まわりの不足であれば規則的にあらわれるはずがないという視点から、「土器を取り出す時に木の棒ではさんで取り出すときの木がくすぶって土器表面に黒斑がのこる。」と結論づけられた。

しかし、今回の実験の経過からみても、黒斑のつく最大の原因是、焼成中において、土器の器面につく黒色灰を追い払うことができなかったことに起因すると理解するのがもっとも合理的であり、これに原因を求めるべきであると思われる。これについては、第1次実験と第2次実験の比較からみても明らかである。また、第2次実験のように、たとえ黒色煤化を防ぐためにたえず灰の搔き出し等の工夫を行なっても、窯内の土器と土器の接着面（点）や底部付近などは、焼成中の破損の危険性を考えればあまり外からの力を加えることができず、どうしても灰の残りやすい個所ができ、これが黒斑となって残ると考えるわけである。また、佐原氏の指摘された黒斑の位置についてであるが、今回の実験の際には対象土器が少なくて実験できなかつたが、当時においては下から上へと2段・3段にも積み上げて焼成したと考えられるから、胴部中央につく黒斑は隣り同士の土器の接点として、また、胴肩部や胴下半につく黒斑は上下段に積んだ土器同士の接点として理解すると合理的な解釈ができるのではないだろうか。もちろん黒斑のあり方は、佐原氏の指摘されたとおり、明確に輪郭の認められるものや、漸進的に移行しているものもあり、必ずしも同一の原因、同じ状況下でのみ黒斑が成立したとは考えられないが、黒斑の最大の原因是やはり焼成中における黒色灰の残留があげられるのではないか。したがって、黒斑は焼成後の窯出しの問題としてではなく、あくまで焼成技術、焼成方法の問題として捉えるべきであり、それは究極の問題としては窯構造の問題に帰結すべきではなかろうか。これについては後でも言及するつもりである。

大師山1～4号焼土塙は土器窯か 実験焼土塙を再発掘した結果、その断面図を見てもあきらかなように、大師山検出の1～4号焼土塙に酷似していることから、同様な露天の状態によって、実験窯と同様な火熱をうけていたことが実証できたわけである。それでは第3章3節で述べたように、傾斜面、あるいは尾根であっても傾斜面向に向って構築され、何回かの一定時間まとまった焼成を行い、あるいは下方へ灰を搔き出す作業をともなった焼成作業とはいいったい何であろうか。

やはり他の遺跡で想定されているごとく、廻芥捨場、屋外の炊さん場、烽場、土器窯などの可能性を考えてみなければならない。

先ず、検出状況からして土壙内の遺物のきわめて少ないとから、廻芥捨場ではない。また



第143図 実験における黒斑の状況

屋外の炊さん場とすれば、1～3号焼土壙で明らかなように、尾根に構えられた住居からこれほど離れた傾斜面に、日常生活に密着した炊さん場をなぜ求めなければならないかという疑問が生ずる。焼場は（後の軍防令で定めるように）伝達、通信機能を重視せねばならず、これも尾根からかなり下った傾斜面に構築された焼土壙はきわめて不合理であるし、一定のところではなく、斜面に点在することもやはり不合理である。

したがって、残された可能性として、土器焼成窯としての機能を強く意識せざるをえないものである。今回の二度にわたる焼成実験の結果をふまえ、1～4号焼土壙を土器窯と想定した場合、次のような解釈が成り立つ。

まず、赤化した後期弥生式土器を焼成しようとすれば、焼成温度はともかく、その焼成過程において酸素の供給を十分にし、薪材の炭化灰が、土器を覆わないように工夫する必要があり（第2次実験の諸作業）したがって浅い土壙と、下方に灰を掘き出した痕跡は全くこの作業に符合するわけである。また、検出された1～4号焼土壙のあり方からして、土壙全体はかなりの加熱をうけていることが推定されるにもかかわらず、残された灰は土壙内や下方へ流失した量をみてもきわめて少量なのである。すなわち、焼成の過程で黒色灰が残らないように、酸素の供給を十分にして、燃料を効率よく燃焼させているのではないかと考えられるふしがあり、実はこれはわれわれが焼成実験という実体験をふまえてはじめて強く考え出されるに至ったのである。

また、土器焼成に多量の燃料（おそらくソトクド等とは比較にならない量の薪材）が必要とされるはずであるが、その薪は傾斜面に植生する材を使用するにしても、わざわざ尾根上の住居域まで持ち上げる労働力を考えると、薪を集めやすい傾斜面で、点々と場所をかえて焼いたほうがより都合がいいとするのも一つの解釈であろう。

このように様々な要素を想定しても、この焼土壙は、土器焼成の痕跡と解釈することは不合理ではない。ただここで弥生時代の土器窯は必ずしも大師山検出例と同一とはかぎらないということを言っておかなければならぬ。

最近の各地では、弥生式土器焼成実験が行なわれていることが多いが、その方法は必ずしも定型としたものでないこともよく知られている。たとえば、尼崎市立田能遺跡資料館では、実験にあたられた福井英二氏によると、当初は、大師山と全く同じような土壙を掘って焼成し、のちには土壙を掘らず、平坦地に上器をおいて周囲から薪を燃やして徐々に火を中心にして集める方法（平地焼成）をとったところ、後者のほうが土器は良好な焼け上がりを示したということである。重要なことは、この方法であると、地面には焼上面や灰の面が若干のこされるが、人が踏みつけたり、また風雨などによってしばらくするとこれらの痕跡は全く消失するということである。つまりこの方法は、窯の痕跡を残すことなく、従来の遺跡調査によても窯跡の発見されない一つの理由として、非常に説得力があるということになる。ただ大師山のような浅い土壙であれ、平地式であれ、焼成技術自体に大きな差異はなく、土壙の有無はそれほど問題

にすべきこととはいえない。だが、大師山のような斜面で土器を焼こうとすれば、土器の安定からみて、必然的に土壌を掘らざるを得ないということがいえる。

以上、実験的成果をふまえて、1～4号焼土壌を、土器窯としての可能性について述べたが、もちろん、復元的にいかに忠実な弥生式土器のコピーを焼成できたからといって、この1～4号焼土壌を、即土器焼成窯と断定してしまうわけにはゆかない。それはすなわち中口裕氏もいわれるよう、実験考古学はあくまで-（マイナス）の要因を発見することが目的であって、+（プラス）の要因を発見するのは目的でもなんでもないからである。^(註)したがって今回の場合、検出された焼土壌と同一のものによって土器が焼けなければ、土器焼成窯でないことが断定できても（-の要因の発見）、焼成に成功したからといってこれは土器焼成窯であると断定する（+の要因の発見）ことができないからである。

したがって1～4号焼土壌については、土器焼成窯とは断定を避けたいし、その結論のみが今回の実験目的のすべてでもないわけである。ただ、様々な成果からして、土器窯としての可能性を調査者として現在もっとも強く持つており、さらに今後の課題として実験等によって深化された問題意識をさらに土器焼成技術の探究の上に発展させたいのである。

3. 弥生時代の焼土壌

広義の「焼土壌」とは、焼土や灰を伴う土壌一般を指している。住居址などのものは数少なく、また柱穴ピットほど小さくはない。その状況は、弥生時代のものに限定しても、土壌の底面が十分焼けてしまっているものから、壇内に焼土や灰・木炭などが堆積しているだけのものまで多種多様である。狭義の焼土壌とは前者を指し、後者の場合は、その場において堆積したのか、あるいは人為的な運搬によるのかが重要な問題となる。

このような遺構は、従来より集落遺跡内に検出されており、その存在は決して、特異なものではない。しかし、これら焼土壌の成立要件を考える場合、立地・形態・規模や状況が機能という側面と如何なる関係を有するかが興味深い課題となってくるのである。

以下では、管見の若干の資料を中心に検討を進め、大師山遺跡検山の1～4号焼土壌より析出された問題点に留意して、二、三の論点を提起してみたい。

まず、「焼土壌」の認識条件についてであるが、焼土壌とはあくまで屋外土壌の一類型であって、住居址内における炉に相当する遺構は除外しなければならない。その理由は、これらの炉は保温、採光、煮炊を機能とし、縄文時代より普遍的な生活様式として定着したものであり、かつまた集落の機能そのものの中で占める意義が必ずしも高くはないからである。

「焼土壌」は、前述したように遺構の性格として二つに大別することができる。すなわち、発掘状況そのものが、本来の機能を正確に示していると解釈できる積極的意義を有する例と、何らかの作用によって2次的に、換言すれば、元來の形態や使用目的を既に失なった消極的な

状況を表現する例がある。両者は壇内で火が発生したという一点で共通するけれど、意識的に火を使用したか否かにおいて相違をみるとことになる。

後者の例として住居などの構築物が火災をおこして倒壊した場合まで広く含めるならば、その例は膨大なものになる。この典型は、高知県西見当遺跡の小窓穴にみることができる⁽²⁵⁾。それは長さ184cm×145cm、深さ55cmの楕円形小窓穴で、「十数個分にあたる弥生式土器が灰や木炭を交えた有機土の中にぎっしりつまり、あたかも土器を積み重ねておしつぶしたように存在していた」という。この報告者は炊事場説を保留しつつ「貯蔵のための小窓穴とし、木炭片・灰の存在はこの小窓穴の火事による壊滅」と考えている。なお、同遺跡は弥生前期である。

ところで、本稿が意図するところの「焼土壙」は、前者の性格をもつものであることは言うまでもない。その類例は多く、様相も複雑である。低地・高地の遺跡の両性を問わず、集落の内、あるいは隣接して存在し、一見して機能不明の遺構が大多数を占める。

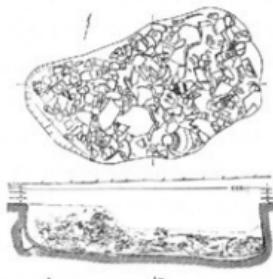
低温微高地立地の奈良県唐古遺跡では、かなり多くの堅穴が調査されているが、前期（第I様式）の堅穴においては火の使用が顕著にみられるのに対し、後期（第V様式）になると、堅穴内に火の使用がなくなるという興味深い事実が指摘されている⁽²⁶⁾。

唐古遺跡でのこうした状況を他遺跡で検証することはむずかしいが、北部九州の諸遺跡では同様に焼土や灰を伴うところがある。福岡県夜臼遺跡では壇内に灰層が幾重にも堆積し、土器片を含むことから塵芥捨場と考えられている。また、同県比恵遺跡においても、「住居とは思えない円形の皿状の凹みを持った堅穴」が発掘され、「炭灰のかたまたるものや火を受けて焦土となつたもの」がみられ、炊さんの場と推定されている。なお、同県弥永原遺跡では壇内より赤色顔料が見出されて注目をひく。

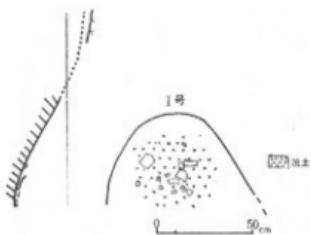
このように、積極的な意義をもつ焼土や灰を伴う遺構においても、性格・様相には相違がみられ、大局的には夜臼例のごとく塵芥捨場として説明されるか、あるいは比恵例のように炊さんの場としての解釈がなされるようである。

塵芥捨場とされている例は、他に宮崎県下那珂遺跡や兵庫県尼崎市田能遺跡などでみられ、田能では土器片以外に鹿や猪などの残骨が出土したのに対し、下那珂では若干の石器類を除いては底から上まで土器のみがぎっしり堆積しており、土器捨場の可能性が強い。また、兵庫県大中遺跡では壇内に焼土塊が散在し、大量の土器に対して完形になるものが皆無であるとされ、やはり廻棄場と理解される。このような状態は、和歌山県宇田森遺跡でも認められ、土器片と共に多量のサスカイト石屑が存在した。

以上あげた塵芥捨場と推定しうる諸遺構には



第144図 東溝遺跡焼土壙



第145図 会下山遺跡1号焼土壙
みに復原可能な土器のある事実に基づいて、貯蔵穴として使用した後、土器捨場とした可能性を指摘し、壙底を焼くことを水はけと関連させ、また盛土を水の流入に関係づけ、堤防の役目を果したと解釈している。

一方、炊さんの場としての例は、兵庫県芦屋市会下山遺跡を代表にあげることができる。¹¹³ 集落の南端を限った形で3基検出されており、調査者は野外の火焚場での動物調理を推測し、煮沸用の焼土壙——ソトクドと考えている。高地性の会下山集落では、このようなソトクドを一般住居帶員で共用し、住居内に屋内炉を付設することは稀らしい。

この3基の焼土壙（第145・146図）は、それぞれ切合っており、規模はいずれも定かでないが、I号焼土壙は長径4.7m×短径2.4mの長円形土壙と推測されている。出土土器の中には明らかに2次焼成を受けたものもあり、器種組成は壺・甕が多く、鉢形土器が欠落している。これらの傾向はII号焼土壙についてもほぼ共通し、焼土壙の性格を考える上で重要である。

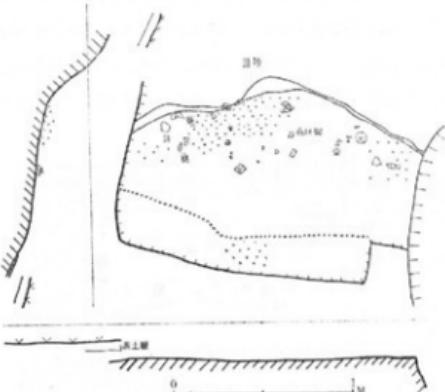
一方、最南端に立地するIII号焼土壙は、かなり趣を異にし、山腹斜面に直交して4m余地山を掘下げ、内1.5mの平坦面をつくり、一方（西側）は斜面で土壁をつくり、一方（東側）は自然傾斜のまま落ちるという。床

面は南北がほぼ水平につくられるほかは、とくに加工されず堆積層も水平でなく、角礫も存在していない。また、壙底には焼土面がなく、土壁下に部分的な焼土面が認められるにすぎない。かような状況は大師山1～4号焼土壙に近く、群在した会下山焼土壙の様相が少なくとも二つに大別できることを示唆する。

同遺跡は山頂尾根部に立地した純然たる高地性集落であるが、最

いわゆる「焼土壙」の範疇に含まれないものもあるが、焼土・灰の有無をぬきにするならば、大よそその傾向を同じくする。しかるに、兵庫県加古川市東溝遺跡例（第144図）は若干越を異なる。壙内第Ⅲ（古）様式の時期に属する土壙には完全な盛土が施され、その壙底は焼け、30個体分に及ぶ土器と共にベニガラ、サヌカイト藻、石織、骨片などの遺存が報告されている。¹¹⁴ 報告者は下層の

片などの遺存が報告されている。¹¹⁵ 報告者は下層の



第146図 会下山遺跡2号焼土壙

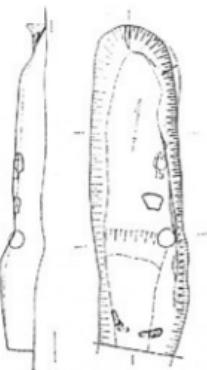
近、こうした高地性遺跡で焼土壙検出の実例が増加しており、低地遺跡とは異なった焼土壙の解釈が要請されるであろう。

昭和47年～48年に調査が実施された大阪府高槻市の芝谷遺跡は、標高102mの丘陵上にある高地性集落で、第IV様式頃の33基にのぼる住居址が検出されているが、その西側斜面中腹に焼土面が確認されている。幅2.8m、長さ2.9mの規模で赤く焼けており、このすぐ南側で多量の土器片が出土したという。また、南に続く斜面では粘土を採取するため、斜面を削り込んだ箇所が約10mにわたって認められている。調査者はこれらの諸事実を踏えた上で、土器焼成の窯という見方を強めている。⁽³²⁾

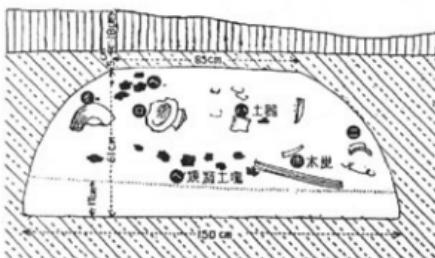
同じく北摂地域に属する吹田市重水遺跡では、昭和48年の発掘調査で明確なる焼土壙1基が検出されている。立地は標高54mの低丘陵の南縁部で、約1.5mの近接距離に住居址が検出された。南斜面へ流れるため完掘されていないが、調査範囲内において長さ3m、幅0.7m、深さ約0.2～0.3mを測り、長方形プランを呈している。側壁は強熱によって赤変し、赤色焼土幅は15cmにも達している。境内には黒色灰・焼土が一面に充満し、第V様式前半に比定できる多量の弥生式土器と砥石2点が遺存していた。調査概報では、ソトクド説を保留しつつ、土器窯の可能性を強調したが、形状は会下山・大師山・芝谷各遺跡例とも異なる。しかし、斜面に近い集落の縁辺部に所在する立地条件は高地性集落で見出される焼土壙の普遍的な姿のようである。この他、大阪湾沿岸地域での類例を追補すると、神戸市重水区西神ニュータウン第52地点では丘陵上で第IV様式に属する3基の焼土壙があり、いずれも底まで焼けている。⁽³³⁾また、同第48地点(Ⅲ様式新)の最近の調査でも1基が検出され、近隣の住居址には炉がみられないと聞く。⁽³⁴⁾

近年の高地性遺跡研究は、防衛的・軍事的集落説を補強する立場から伝達機能が重視され始めているが、こうした動向の中で、当然、高地性集落に存する焼土壙の性格が問題にされてよい。田辺昭三氏はかつて会下山遺跡の焼土壙を「のろし台」と規定したが、そうした観点からの分析も今後必要と思われる。

すなわち、古代の軍事的緊張時に出現したのろし台が関係して想起されるので、その立地と高地性集落で見出される焼土壙の在り方が再検討されねばならない。こうした場合集落内におけるのろし台の位置はもう少し限定されてよい(例えば最高所)のではないだろうか。



第147図 重水遺跡検出焼土壙



第148図 宗像高等女学校校庭発見の土器窯(考古学4-9)

さて、土器窯として報告されているものも既に過去において僅かではあるがなされている。

昭和初年に報じられた富士山麓の弥生式窯址や福岡県宗像高等女学校校庭発見の窯址に関しては、「弥生窯」であるか否かについて戦前のことでもあり疑問

の余地を残すが、「上り窯ではない」、「アガリガマに異って」という認識は興味深い。ただし、富士山麓河口湖畔の船津村字上之段例は今日の炭焼窯に非常に酷似しており、構造上の問題を残す。宗像高等女学校例は、底径 150 cm、上径 85 cm、高さ 61 cm の逆輪状の土壇が地表下 20 cm ぐらいのところから見出されており(第148図)、窯址と推断する理由として、窯蓋状をなしていること、甚しく焼け焦げていること、夥しい土器片とともに、粘土塊が散見され、木・炭灰を著しく包含していることなどが指摘されている。

最近の調査例で注目されるのは、富米隆氏が調査した大分県大分市の雄城台(弥生中期)および羽田(同後期)両遺跡の土器窯 3基であろう。雄城台遺跡は №1・2 のうち №2 は覆屋の存在が予想されているほか、側壁は円錐や土器片等を塗り込んで固めてあるというから、非常に整った施設を有しているといえる。羽田遺跡例(№3)は規模も大きく、焚口・天井の存在などから構造的にかなり発達したものが想定され、調査者は各々 №1 → №2 → №3 へと構造上の発達過程を素描している。

その他、明確に窯として報告された遺跡として、山口県郷台地遺跡の焼土壇も重要な意義をもつてゐると思われる。

以上、筆者の管見にふれた資料を断片的に分析し、弥生時代の焼土壇(焼土・灰及び土器を伴う広義の「焼土壇」)の実体を垣間見てきたが、ここにおいて調査時機能を明らかにし得なかった焼土壇の存在が重要な視点となってくる。

従来、このような構造については推断することを留保されてきたのであるが、筆者らは一つの考え方として弥生式土器を焼くための窯の存在を指摘した。これは焼土壇のみに固執する問題ではなく、各遺跡で不明状況の下、なおざりにされている焼土面などについてもいえることであるが、今後、一層慎重に分析・検討の手を加えてみる必要があるのではなかろうか。

このような観点に立脚するならば、その把え方次第では、塵芥捨場という消費の場もいきおい弥生人の生活をかけた土器生産の場としての地位を獲得する。住居や墓とは異なり、文化のパターンを鋭敏に反映しないと考えられがちな溝や不整形ピット、そして本稿で問題にしてき

た焼土壙など、一見して無関心さを表してきた遺構の存在意義を改めて認識しなおさなくてはならない。

4. 一弥生式土器窯研究の今後へむけて—

大師山1～4号焼土壙の性格については、先述したとおりの結論しか導き出しえなかつたが、製作・焼成実験等をふまえた中で、一、二のきわめて興味ある問題も提示されたのも事実であつて、これらは今後の弥生式土器焼成技術の解明にとって決して無にすべきことではない。したがつて本項では一応「土器窯であれば」との仮定のもとで、この問題をまとめてみたい。

弥生式土器窯について具体的に論及したものは少ないが、かゝつて吉田光邦氏は、弥生式土器を「京都の幡枝、伊勢の有源などの例のように、円筒形の窯が使われていたのだろう。或いは野天に積み上げて燃料で覆い、火を放つて焼いていた。」と想定したことがある。⁽⁴¹⁾

「京都幡枝の窯」は円筒形の煉瓦製の地上窯で、窯体は格子状の施設で、焼成室と燃焼室に区別され、窯の下部には一方に焚口をあけてある。火は下部から格子（ロストル）を通つて焼成室中の土器へ吹き上げる構造のいわゆる典型的な「昇炎式窯」である。このような窯が弥生時代に使用されていたとすれば、非常に発達した窯業技術を保有していたことになる。

ここで注意されるのは、先に弥生遺跡の焼土壙を紹介した中で述べた大分県雄城台・羽田両遺跡で検出された土器窯である。⁽⁴²⁾ 円筒形の窯体、粘土等を塗りこんだ土窯、一方につくられた焚口の存在などをみると、幡枝窯に類似した窯であるといえる。ただ、燃焼室と焼成室を隔するロストルの存在が確認されていないから、内部構造においては、未発達であるといえよう。

坂詰氏は、「壺棺使用土器のごときも、かかる窯に近似する構造の窯において焼成されたのではあるまいか」と述べたが、⁽⁴³⁾ はたしてこれだけ発達した窯が、普遍的に存在したというには他に検出資料もなく、現在の段階ではこれは特徴的な例としかいえないと思われる。

ずっと後世のことになるが、田中琢氏は、内外両面を炭素で吸着させた黒色土器B類の出現をもって、「從来にない新しい構築的な窯の存在が前提になる。」とし、（10世紀の段階が）「新しく窯の出現をともなったことが象徴するように、土師器生産史上の最大の変換点と評価できる。」と断言した。⁽⁴⁴⁾ すなわち、羽田遺跡例のような構築窯が出現するのは古代末期であるとし、それまでは「窯の名に値する構築物の存在は考えられない。」と推測したわけであるが、事実、遺跡で検証するかぎりにおいては、また土師器自体の技術的な系譜を考えるかぎりにおいては、そうとしか考えられなかつたわけである。

このような大勢にあつては、もし雄城台・羽田例は、弥生時代のもので間違いないとすれば、後世にその技術を発展せしめなかつた特殊な例としか言いようがないであろう。

このように発掘調査において認められる遺構・遺物に関するかぎりにおいては、やはり吉田光邦氏の想定したうちの後者、すなわち窯天窯としか予想できない。つまり、窯があったのか否かのみ争点を求むれば、調査資料の限界されることもあって、このような結論にしか達し得

ないことが明らかである。しかし、もっと視点を変えることによってこれ以上に問題を深化させることはできないであろうか。

ここであらためて認識しなければならないことは、縄文式土器の焼成実験を続けてこられた故新井司郎氏の「露天窯であれば炎自身の温度は自然に950℃まであがってしまう。」という指摘である。⁽¹⁸⁾つまり露天窯であるかぎり、縄文式土器であれ、弥生式土器・土師器であっても、このわが国の原始・古代の一連の土器変遷史は器形・器種の変貌、あるいは土器製作技術の変革に対応するだけの焼成技術の革新をもたなかつたということであり、常に最高温度950℃という最大公約数のみが焼成技術の上に安住していくことになる。

したがって、この体制において土器焼成を変革せしめたのは、その土器にもっとも要求される焼成方法を一定の経済性・生産性の上で、いかにして求めたかという点であり、換言すればいかにして炎をコントロールしたかという問題に置きかえられる。この炎の制御にあてられた人間の知力や、労働が、その時期の土器文化の一端を如実に証明するものに相違ない。

そして、ここで具体的にこの問題を資料の上に投影しうるもの一つとして、本稿でもその成因を検討した黒斑の問題をあげたい。

先述したように、黒斑は窯体内での土器と土器の接触点をはじめとして、黒色灰が焼成中に除去されなかった部分に関連して発生する黒色炭化部分であるとした。そうすると、黒斑を消去するには燃料の灰が土器を覆わないようにする工夫が必要であり、完全に消去しようとなれば、燃料の燃焼位置と土器とを分離する必要があり、先の「幡枝の窯」を例にとると、この役目をはたしていたのが、窯内に設けられた格子状のロストルであったわけである。

つまり黒斑を全く消去しようとなれば、構造窯を必要とする。換言すれば、露天窯の段階では、黒斑の完全消去は技術的に不可能ということである。そうすると弥生時代における土器焼成は露天窯であるとの認識に立つ以上、黒斑の消去は原則的には不可能なのであるが、ここで「原則的に」と述べたのは、その原則を打破るための努力がなされていることも否定できない事実であるからである。

弥生式土器の器種をみて容易に気付かれる事実であるが、高杯等の供献土器は壺・壺等の貯蔵・煮沸土器に比して黒斑は少ないとあげられる。これは煮沸土器が2次焼成による炭化を受けることを考慮にいれてもなお土器の焼成に際してこのような器種による作為が土器生産者の手によって行なわれていると思われるのである。すなわち、供献土器等は黒斑による暗色化を防ぐためにも露天窯であっても、たとえば最上部の黒色灰が沈着しない部位で焼成するとか、作戦的に灰がかからないようにして焼き上げられたと考えている。この程度であれば露天窯の範囲で克服しうる技術上の問題だからである。

次に、焼成技術の変移を知る方法として、土器全体の中の黒斑の消失の過程を時期を追ってたどれないかという点である。これについては土器の形態・製作技法の変遷に停まらず、焼上がりの状態、とくに黒斑の状態を仔細に検討する必要があるわけだが、近年、大量に古式土師

器を検出した奈良県桜井市纏向遺跡出土資料を筆者らが実測図面で検討した結果によると、布留式期に編年される纏向IV式に至って急速に黒斑現象が減少している事実が認められた。⁽⁴⁴⁾

つまり、減少するが消失しないという事実により、いまだ構築窯が完成されていないことは予想できても、その減少は何らかの窯構造の進展があったためか、露天窯での焼成方法上の工夫によるのかは判断がつかない。しかし、焼成上の何らかの進展は認めるべきであろう。ただ、本遺跡についてこのような検討ができたのは、調査者が遺物における黒斑をすべて図化し、表現するという基本方針を貫いたためであって、今後は、各地方・各時期にわたる資料の総合的な検証が必要であろう。その意味では、土器実測における黒斑の表記の重要性を指摘するに十分な成果を得たといえよう。

このような黒斑の消失に関する問題をさらに生産者側からみると次のようにいえる。

まず、露天窯式の方法では、黒斑の消失は、生産者としての必要以上の技術が要求され、たとえば、われわれが第2次焼成実験で行なったように、採薪にあたる労働量、土器焼きに投下される労働量からみると実に不経済な焼成作業を要求されることになる。この点は実際の焼成技術の詳細が解明されていない現在の考古学的成果からみると、確実なことはいえないにしても、今後十分に問題にすべきことであるように思える。弥生時代をふり返ってみても、いたずらに土器焼成技術が進展しない、また生産が拡大しない理由の一つとして、土器焼成に投下される労働に一つの限界を想定せしめるわけで、その限界は露天窯という原始的な形態のまま、焼成段階の一工程の技法上の工夫にのみ、改良の余地を残していたという実態にあるべきではないかと思われる。さらに、現在論じられている土器の可搬性の問題も、このような観点にたてば、その生産者としての限界を一定の地域生産者がつき破った結果として、別な意味で積極的な評価を行なうこともできるであろう。

最後に社会的分業としての弥生式土器の生産の在り方について、筆者らの見通しを述べてしめくくりとしたい。過去に都出比呂志氏は弥生時代中・後期における分業の進展を論ずる中で、土器生産を農業労働・紡織・木製農具・石器製作などと同列視し、いわゆる共同体内分業の一環として位置づけた。⁽⁴⁵⁾ 土器は日常必需品であり、原料の入手が共同体内で十分可能なこと、生産に full-time-specialist の存在が不要なことなど共同体内分業の成立要件を完全に満たしており、農業共同体内ではもちろんのこと、世帯共同体（単位集団）単位でも自己完結的に行なわれた可能性は氏の指摘どおりと考える。

さて、弥生最末期と考えられる大師山集落における土器生産を考える場合、その立地条件からして、集落経営と生産消費活動の単位は世帯共同体以上のものを想定することはできないので、堅穴単位の個別労働をも肯定することは可能である。検出された4基の燒土壙を土器焼成窯と仮定するかぎり、このような小規模な平面形をもち、斜面に点在する方からみて、その焼成は、土器の不足を補う程度の世帯共同体単位の比較的おだやかな生産活動しか想定できない。すなわち、住居址数が少ないわりに、傾面から多量に検出された弥生式土器は実は土器生産の

態様をみる限り、小規模な生産を度々必要時に応じて生産を行なっていたということを想定するためである。

つまり、弥生時代の高地性集落は、趨勢として非生産的な立地条件を占めているがゆえに、土器生産では、逆に、小さな集団規模での自己完結性をしいられるわけである。

一方、都出氏の述べたような生産体制がいつまで存続するかという点が重要な問題となってくるが、最近、酒井龍一氏は和泉における資料分析を主に、いわゆる庄内式期に畿内各地に広く搬出される上田町II式壺の性格を「統率化された土器製作の專業集団が製作した土器」として捉え、中南河内という地域の限界と機能及び使用法の限界、さらには「單一器種の大量供給を目的とした生産」を想定し社会的段階に入った土器製作技術の高揚を論じている。換言すれば、土器の商品化とそれを前提とする共同体間分業の成立を説くものであり、土師器製作を弥生時代の土器生産の延長線上に位置づけるのではなく、全く新しい集団関係の中において理解しようとする試みといえる。

一方、布留式期にまで至ると、時期的にみても、石母田正、浅香年木岡氏の高論が示すとおり、手工業部としての土師器生産者との関連をも想定せねばならない。しかし、石母田氏もいわれるよう、要は「それが考古学的資料といいかに結びつか」である。⁽⁴⁷⁾

文献史学から追求される両氏にとって土師器生産者が、依然として農業共同体とは不分離であったとするのが基本的態度であって、その中の限られた一部の集団のみが、特殊需要のために王權のもとに直結されていったとされている現状においては、古墳時代のきわめて初頭において、それも一般の日常生活手段に使用される煮沸器の生産が、先駆的な態様として、どうしてそれほどの社会的段階に至らねばならないのかは全く不可解である。つまり最近の緻密な考古学的調査の資料を援用してもなお、この文献史学の成果と考古学の成果の空白が大きいわけで、この空白を埋めることは、今後の時期的な、地域的な、そして文献、考古両分野の研究の進展をまつ以外方法はなさそうである。

〔註〕

1. 村川行弘・石野博信『会下山遺跡』<芦屋市文化財調査報告第3集> 1964年 芦屋市教育委員会
2. 試験的に我々の手でもって製作した土器は「模擬土器」「模造土器」「模倣土器」「写し土器」など様々な呼称が与えられるが、言うまでもなく研究を目的にしたものであって、人を欺いたり、作成の修業を目指したものではないので、これらの用語は適切でない。研究を主眼におく意味で、「実験土器」なる語を以下用いてゆきたい。
3. 大阪府豊中市勝部遺跡例によって提唱された「勝部遺跡」1972年 豊中市教育委員会・北摂(高槻市郡家川西・茨木市東奈良)・西摂(池田市宮ノ前・川西市加茂・芦屋市金下山)・河内(東大阪市鬼鹿川)・大和(福原市新沢)・山城(京都市上久世)・紀伊(和歌山市太田黒田)・播磨(姫路市播但道八幡・千代田・今宿・深田・梅見・窪野市尾崎・赤穂市野田)など畿内及び畿内周辺部で普遍的に出土しており、今後さらに類例は増加

- するものと思われる（森岡秀人「会下山弥生遺跡緊急調査報告」『芦屋市文化財調査報告』第8集 1974年 芦屋市教育委員会）。
- なお、船路市域の出土例に関しては、近く船路市教育委員会によって公表される予定である。
4. 錦島敏也・藤原洋『千里古窯跡群』 1974年
 5. 鎌口清之「大和雜報(4)」「考古学雑誌』第17巻第8号 1927年、小林行雄「弥生式土器に於ける櫛目式文様の研究」『考古学』第1巻第5・6号 1930年
 6. 大野嶺夫「いわゆる叩き目技法の再検討—和歌山市太田・黒田遺跡の調査から—」『古代研究』55 1969年
 7. 叩き目手法の原体（叩き板）に関しては、長らく想像にまかせてきたが、ごく最近、外縁部式鋸歯の砂岩製鋸形が出土して著名になった大阪府茨木市東奈良良遺跡において、偶然にも出土をみ、その実体について貴重な資料を提供するに至った（1974年）。幅5.7cm、長さ26.5cmを測り、羽子板の形状をもつもので、手の握りが考慮されている点などは、多くの研究者が推測してきたことと合致している。ただし、凹凸部の造作法に相違をみ、土器面のネガティヴを仔細に観察する作業によって、さらに普遍的な原体の具体像が解明されよう。時期は弥生後期に属するという（工業美術社『製作技術』「弥生式土器」<日本の美術44> 1975年 小学館）
 8. 佐原 真「畿内地方」「弥生式土器集成」本編2 1968年
 9. 小林行雄「土器の製作と轉輪の問題」『考古学評論』第1巻第1号 1934年
 10. 生田和孝氏の御教示による。
 11. 堀野半十郎「私の土器づくり」『月刊考古学ジャーナル』No48 1970年でも、灰の残り火の使用を充分に考慮している。
 12. 井上晃夫「縄文土器の製作」『考古学ノート』第6号 1976年
 13. 都出比呂志「古墳出現前夜の集団関係——淀川水系を中心に——」『考古学研究』第20巻第4号 1974年
 14. その一端については、考古学研究会第20回総会の席上、研究報告をめぐる討議の中で述べた（「古墳出現前夜の集団関係<都出報告>をめぐる討議」P25の森岡発言）。『考古学研究』第21巻第1号 1974年)。
 15. 佐原 真「山城における弥生式文化の成立——畿内第I様式の細別と雲ノ宮遺跡出土土器の占める位置——」『史林』第50巻第5号 1967年
 16. 佐原 真「土器製作技術の変遷」『柴田出』1964年 芦屋町文化財保護委員会
 17. 笹沢 浩「信濃における鬼高式土器の開拓」『信濃』第20巻第3号 1968年：和泉式の高杯形土器には、この他、連續成形手法による齊杯A・Bが存在しており、この場合にも脚部内面の上端には、流入した突起状の粘土の瘤ができるという。
 18. 新井司郎「繩文土器の技術」 1973年
 19. 註18文献によると、新井司郎氏は、土器面に傷をつけ、そこへ三種類の釉薬を塗付して焼成し、あらかじめ諸々の条件で焼成しておいた各種試験板との対照によって焼成温度を測定した。
 20. 佐原 真「弥生式土器の製作技術」前掲書（註16文献）
 21. 中口 智「実験考古学」 1975年
 22. 岡本健児「高知県長岡郡西見当遺跡調査報告書」 1957年 高知県教育委員会 岡本健児「高知県の考古学」 1966年 吉川弘文館
 23. 宋永雅雄・小林行雄・藤岡謙二郎「大和磨古弥生式遺跡の研究」<京都帝国大学文学部考古学研究報告第16冊> 1943年 京都大学
 24. 森 貞次郎「福岡県夜白遺跡」「日本農耕文化の生成」 1961年
 25. 鏡山 雄「北九州の古代遺跡」 1956年
 26. 「福岡県弥永原遺跡調査概報」 1965年 福岡県教育委員会
 27. 石川恒太郎「宮崎県の考古学」 1968年
 28. 尼崎市田能遺跡調査委員会編「田能遺跡概報」 1967年
 29. 上田哲也「播磨大中」 1965年 播磨町教育委員会
 30. 「和歌山市宇田森遺跡発掘調査概報」 1968年 和歌山県教育委員会
 31. 「播磨・東播弥生遺跡」 1969年 兵庫県教育委員会
 32. 「艺谷遺跡発掘調査資料」<現況パンフレット> 1973年 高槻市教育委員会
 33. 「垂水遺跡第1次発掘調査概報」 1975年 吹田市史編さん室・関西大学考古学研究室

34. 神戸古代史研究会・真野修氏の御教示による。
35. 田辺昭三『庭の女王卑弥呼』 1968年
36. 高橋富雄「古代の跡とその遺跡」『日本考古学・古代史論集』<伊藤信雄教授還暦記念会編> 1974年
37. 仁科義男「弥生式土器窯址の新発見」『考古学』第3巻第3号 1932年
38. 田中幸夫「弥生式有紋土器の新遺跡と窯址」『考古学』第4巻第9号 1933年
39. 富永 隆「弥生式土器窯址について(予報)」『考古学雑誌』第50巻第3号 1964年
40. 国分直一「下関市鏡島木郷台地遺跡」『月刊考古学ジャーナル』9 1967年
41. 吉田光邦『やきもの』<NHKブックス18 2> 1966年
42. 手塚秀一「日本古代窯業概観」『歴史考古学研究第一』 1969年
43. 田中 雄「(4) 繩内——窯業」『日本の考古学』VI 1967年
44. 横須賀考古学研究所の石野博信氏の御厚意により、未公表資料の土器実測図を実見する機会を得た。
45. 都出比呂志「考古学からみた分業の問題」『考古学研究』第15巻第2号 1968年
46. 酒井龍一「和泉に於ける“伝統的第V様式”に関する覚え書——豊中遺跡出土遺物の整理をして——」『豊中・古池遺跡発掘調査報告』そのⅢ 1976年 豊中・古池遺跡調査会
47. 石母田 正「古代社会と物質文化」『古代末期政治史序説』 1968年
48. 浅香年木「倭奴權と手工業生産」『日本古代手工業史の研究』 1971年

考察 V 木炭窯をめぐって

——大師山遺跡検出の5・6号焼土壙に関する考察——

藤原 学

- | | |
|--------------------|----------------------------|
| 1. はじめに | 6. 周辺地域で検出された小型平窯・窯状遺構について |
| 2. 5・6号窯跡の性格 | 7. まととめ |
| 3. 調査の設定 | 8. 今後の課題 |
| 4. 木炭の焼成過程からみた木炭窯 | |
| 5. 文献に記された河内和泉の木炭窯 | |

1. はじめに

大師山弥生遺跡において、6基の焼土壙（1～6号焼土壙）を検出した。このうち、1～4号焼土壙については、明らかに弥生時代のもので、その性格に関しては、先に述べた如くである。5～6号焼土壙については、層位的にも弥生時代以降のものであり、また形態的にも、天井ドームを架構している点などから後出の様相をもち、後世のものであるとして述べてきた。しかし、5・6号焼土壙については、遺構内より灰・焼土以外の遺物は全く検出されず、遺構の実年代を決めることが不可能である。そこで、これら2焼土壙については、実年代の決定は一応保留として、遺構の形態的な諸要素のみでもって、性格を考えねばならなかったが、今日までの文献、あるいは考古学的調査の結果、以下のようないい成果を得た。なお、5・6号焼土壙は、遺物こそ検出しなかったものの、あきらかに「窯」としての構造をもつものあり、ここでは「窯跡」、「窯体」等の名称を使用する。これにあわせ、5・6号焼土壙は、本論では各々5・6号窯跡と記すこととする。

2. 5・6号窯跡の性格

あらためて、5・6号窯跡の概要を記述しておく。

5号窯跡は、東西に走る尾根稜線から、やや北傾斜面に偏した個所で検出した。遺構は長さ2.5m、幅1.1m、高さ0.7mをはかる稍円形に近い形状を呈し、南側方に、焚口状の施設を構える。北側は、側壁の中ほどに比較的大きな孔を穿ち、ここから大量の焼土、黒色灰が窯体外へ流出している。

天井は完全ではないが、一部が遺存しており、それによると厚さ10cmの粘土で構築したドーム状のものを想定できる。

6号窯跡は、5号窯跡の東南方25mで検出された。ブルドーザーが窯体を半壊したため検出したもので、十分な調査ができなかったが、残存部位では、長さ1.8m、幅（最大）0.8mを計

り、一方に石を使用した焚口状の構造をもつ。天井部はみられなかったが、遺構の被熱状況からみても、天井部が存在したと考えられる。

細部形状においては、この5・6号窯跡は相違がみられるものの、いずれも次のような特徴を見ることができる。

- ① 一方に狹まった焚口状のものを持ち、明らかに窯としての構造を有する。
- ② 窯体は地山を掘り込み、天井を架構した構造のもので、露天窯ではない。
- ③ 窯壁の被熱状況の観察により、小形ではあるが、著しく強熱されており、弥生式土器・土師器のような酸化炎低火度焼成土器の比ではない。
- ④ 窯体のみが検出され、とくに、それに付属する施設をもたない。
- ⑤ 出土遺物はとくなく、窯体内外とも、黒色灰・炭を検出するのみである。

これらの諸点より、5・6号窯跡はおそらく同一の性格を有するものであるとして考察をすめたい。

さて、このような特徴をもつ窯は、いったい、どのような用途に使用されたものであろうか。まず、土器窯としての可能性であるが、1点の土器も出土していないということより、その可能性は少ないと思われる。先述したように、窯体の被熱状況からみても、土師器窯とはいえないし、もし土器窯とすれば須恵器に相当する土器が焼成されているはずであろうが、從来各地で調査されている須恵器窯跡の例からみても、決して須恵器窯の変形でないことがうかがえる。

次に、高火度によって焼成されていることより、製鉄炉などの金属炉を予想できるが、鉄炉に関しては、從来の調査例からみても、やはり類似のものを見出すことはできない。しかも、調査において、1点の金属炉も検出していないことより、金属炉としての可能性も少ない。⁽¹⁾ そうすると、最後にもっとも可能性のあるものとして、「木炭窯」ということができる。

ここでは以下において本窯跡を「木炭窯」と仮定し、その窯体構造、あるいは歴史的な環境をふまえ、この小さな窯跡の史的意義を考えてみたい。

3. 問題の設定

木炭は、つい先年までわれわれの日常暖房の手段として、もっとも身近なものであった。戦後の急速なエネルギー革命によって、今はや都会の生活の中には、ほとんど見出すことができなくなってしまった。原始・古代から戦後に至るまでは、エネルギー源として、また脱臭・脱湿・研磨剤などの工業用材として多用途に使われ、世界的にみても、とくに我が国は木炭は品質最も最良のものと認められていた。

この木炭を焼成した木炭窯については、原始・古代・中世を通じて、考古学的な調査例もほとんどない。炭窯による良質な木炭製造がいつの時期に始められるかについては、不明な点も多い。しかし、弥生時代には、金属器の製造技術が大陸から伝播され、鉄器、青銅器を国内で鋳造する工程では、木炭が不可欠な燃料として使用されたはずであり、かなり品質のよい木炭

が製造されていたと考えられる。

古墳時代になると、古墳の主体部に使用された木炭は、明らかに竈焼の堅炭であるとされ、⁽¹⁾ 遺物の面からみると、古墳時代にはすでに木炭窯が存在したことになろう。そうすると、木炭窯が土中に痕跡を遺すものである以上、必ず考古学の調査・研究の対象となるはずであるが、現在の時点でそのような研究があまりみられない。これは深い山中にあるために、検出例がほとんどのなかったことにもよるかも知れないが、たとえ調査されていても木炭窯として認められずに、性格不明の窯としか扱われなかつたのでは、とも思われる。

このようにみると、「木炭窯跡」の考古学的調査というものは、これから解明されるべく新しい分野ということができよう。したがって、現在の時点では明確な方法論をもたないが、本論において、次の3点をとくに注目してみたい。

先ず第1点は、炭焼という特殊な工程から導かれる構造上の特徴を把握すること。第2点は、文献上の史料により生産の実体を追求することである。そして、もう1点は從来の発掘調査によって、明らかにされている遺構による考証である。

4. 木炭の焼成過程からみた木炭窯

木炭窯は土器窯と同様に石・土・粘土等で構造される。しかし、木炭の原材料は材木であり、原料が即燃料でもある。したがって陶業などのように窯業ではなく、「林業」の範疇に含まれる。

つまり、木炭窯の場合、考古学的には窯跡を対象とするにもかかわらず、窯業遺跡とはいえない、(なんとなく違和感を覚える言葉であるが)「林業遺跡」としか言いようがない。

それではこのような木炭窯はいったいどのようなものであろうか。考古学的に炭窯跡として調査されたものとしては、管見にふれるとところでは群馬県芦ノ沢遺跡がある。これは、製鉄⁽²⁾ の燃料として使用する木炭を焼成するために構築されたもので、いわば製鉄遺跡に付随した施設であった。おそらく金属加工に要する松炭窯であろう。このような金属炉に付随する炭窯跡であれば若干の調査例はあるかもしれないが、一般的な燃料用炭として大量に生産されていた木炭の窯跡として調査された例は知られておらず、具体的な窯構造は不明な点が多い。しかし、具体的な調査例はなくても、木炭焼成の特殊な工程を知ることによって、構造上有る程度の予測は可能である。

まず明らかなことは、先述したように、原料が燃料であるから、窯室と燃焼室(あるいは焼成部と燃焼部)の区別がないということである。土師器・埴輪・須恵器窯・瓦窯あれ、陶磁窯であろうとも、明らかに燃焼する部位は、障壁や分炎柱、あるいは施設はなくとも、段や床の傾斜によって区別されており、この点は木炭窯とは明白に区別されるはずである。

次に木炭の製造工程をみると、おおむね次のように図示することができる。

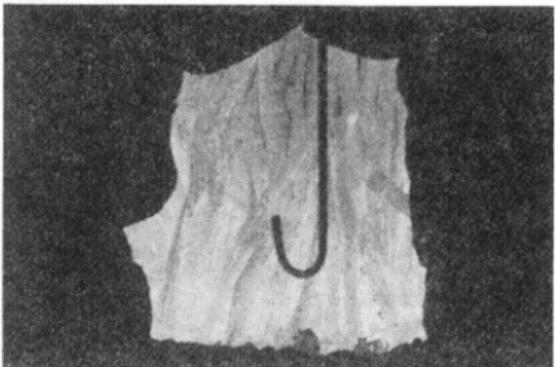
黒炭	窯詰点火→炭化→精錬→窯内消火→窯出
白炭	窯詰点火→炭化→精錬→窯外掘出・消火

黒炭と白炭の製法については、各所に相違点があるが、黒炭では、用材の詰込みののち点火・炭化を行い、最終段階で高温度で精錬したのち、焚口・煙道を閉塞して密封し、自然消火を待って窯出しをするが、白炭では、精錬ののち、焚口をあけて、赤熱した木炭を搔き出し、灰（土）をかけて急激に消火するのである。

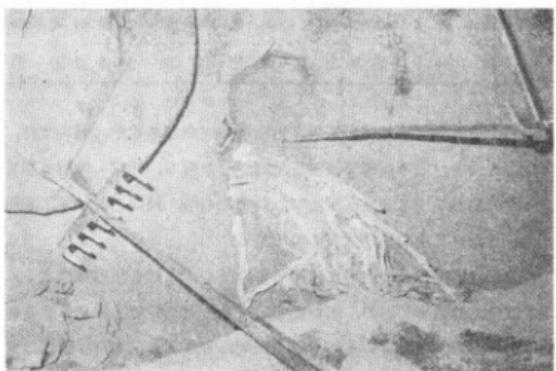
このように両者の消火方法は異っていても、木材を窯内で点火し、むし焼きにすることについては全く共通しており、木材焼成の一定段階で燃焼を停止させるのである。このため、火が焚口から煙道へと走ることによって燃焼しすぎると、木材は灰化しすぎるため、炭とはならず採炭できない。したがって構造上は必然的に焚口は小型化し、煙道は窯壁の底（下位）から上



第150図 炭焼の景観
和歌山県田辺市上秋津川にて



第151図 木炭焼成過程Ⅰ
窯口よりみた燃焼中の木炭、手前のJ字形の金具は、窯出しの際に「エブリ」を引っかけるもの。



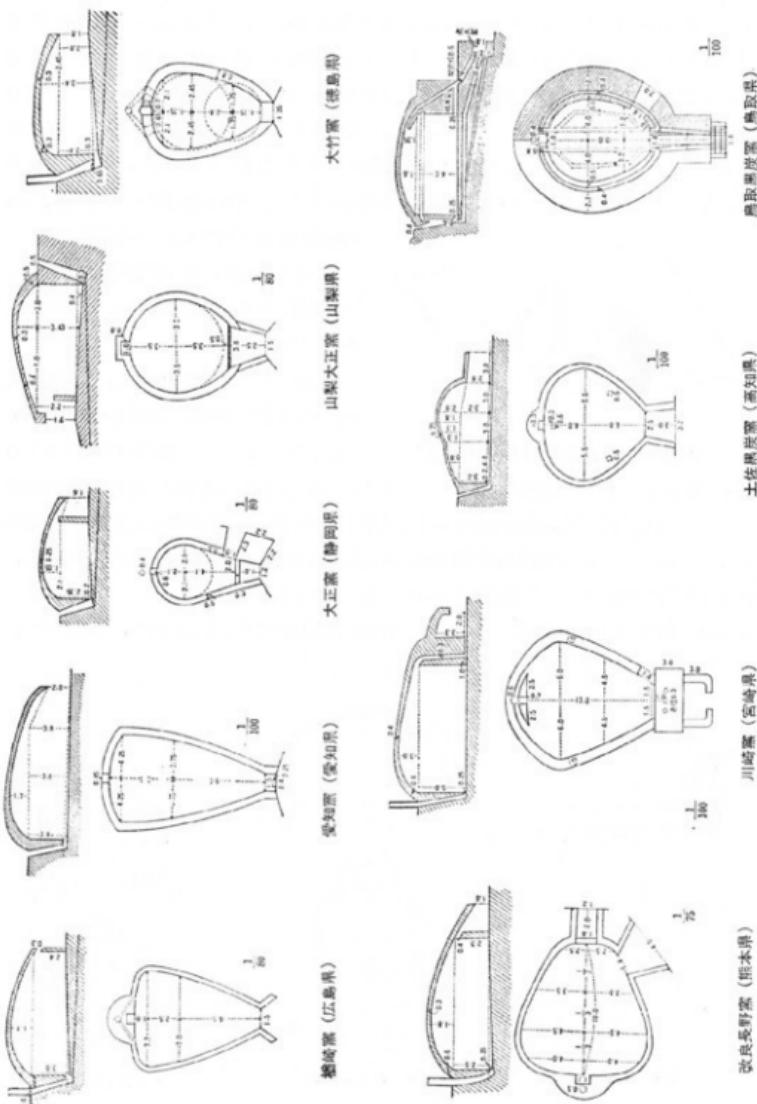
第152図 木炭焼成過程Ⅱ
窓口よりひき出された赤熱した木炭



第153図 木炭焼成過程Ⅲ
赤熱した木炭を窓口の側方へ一箇所にまとまる

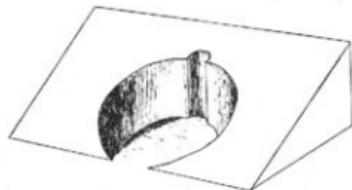


第154図 木炭焼成過程Ⅳ
灰（土）をかけて消火する



へむけて通じていなければならない。この2点は木炭窯の構造上の大きな特徴である。

次に、窯の形態をさらに詳細に知ろうとすれば、近世～現代に至るまでの窯の構造から、古来の形態を想定することもできる。幸いにも木炭に関しては「日本の窯のごとく、土や石で築いて一定の大きさの用材を充積し、火をつけてむし焼きにする技術には限界のあることを示し、窯用材や炭化過程・炭化技術の基本に改良がないかぎりは相変らず、原始的なものに停滞することを示している」といわれておおり、近世～現代に至るまでの記録された木炭窯の構造を考慮するならば、古代～中世における窯構造をも比較的容易に想定できるのではないだろうか。このような見地から、近・現代における木炭窯をみると、円形・楕円形・逆三角形などの形態をみることができる。（第155図）



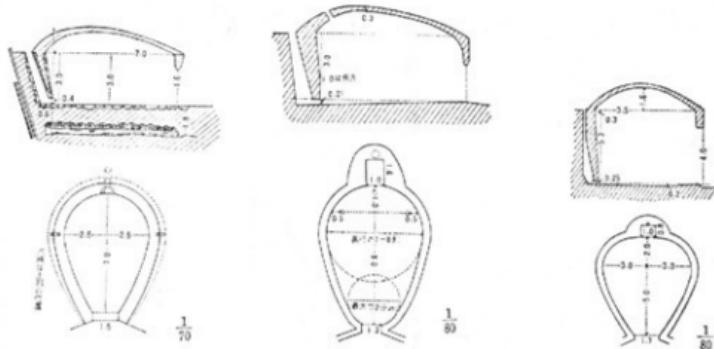
第156図 木炭窯横断面の基本構造模式図

これらの形態は、考古学上明らかにされている通有の土器窯跡からみると、特異な形状をなしていることがわかる。

とくにここにあげたうちでも、大竹窯・大正窯・愛知窯・橘崎窯・川崎窯・改良長野窯

（以上黒炭）、および備長窯・室窯・八名白

炭窯（以上白炭）などの諸窯は正確にいえばイチジク形ともいえるような「逆三角形」を基本形とし、きわめて奇怪な形態を呈している。実はこれが窯の最大の特色なのである。焼成の過程からみると、木炭は焚口に近い部分は、外気に触れるため原材は常に灰化現象が進行し、良質の木炭は窯内の半ばより奥にできるのである。つまり良質の木炭を効率よく焼成しようとすれば、奥壁に近い部分を幅広くして、焚口に近い部分は狭くすることになり、したがって、逆三角形の平面形をもった窯ができるのである。



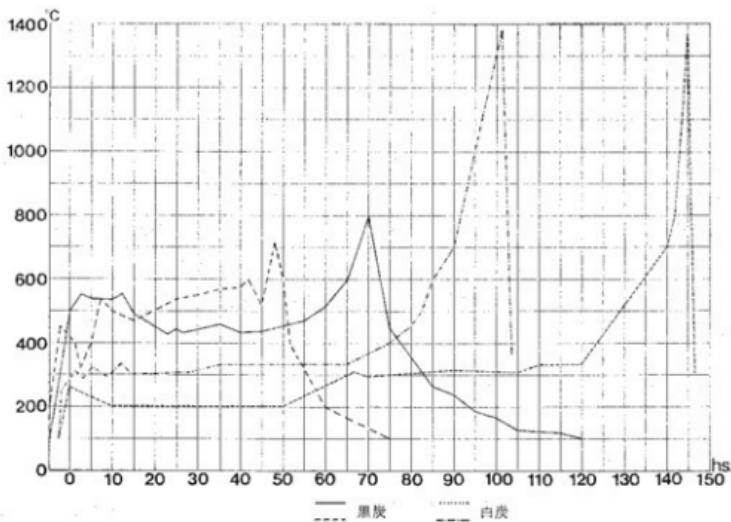
八名窯（愛知県）

室窯（兵庫県）

備長窯（和歌山県）

第157図 木炭窯（白炭）

（日本木炭史経済篇より）



第158図 焼成温度および焼成時間（「木炭の科学と常識」より）

また、これらの窯をみると、側壁に孔があげられているものがある。（大正窯・鳥取黒炭窯・改良黒炭窯など）これは窓口であり、窯詰め・窯出しに使用するが、土器窯にはこのような側壁に窓口をあけた例は登窯（大型の階段式の連房窯のようなもの）に初めて見出され、それより古いものにはみられない。

次に、焼成温度及び焼成時間であるが、現在の一般の製炭窯の場合、黒炭の場合は大体500°Cで炭化し、800°Cまで精錬を行い、焼成時間は70～120時間、白炭の場合は約300°Cで炭化を続け、精錬時には最大1,400°Cまで温度が上昇するといわれ、焼成時間も黒炭より長く100～150時間に達するという。ちなみに、わが国で最良品といわれる和歌山県下の備長炭は6日昼夜（約150時間）をかけて焼上げるという。（第158図）

このような温度、焼成時間は、まさに高火度の硬質陶器なみともいえ、少くとも弥生式土器・土師器の焼成温度・時間の比ではない。したがって、窯体は、少くとも須恵器窯跡に劣らないほどの焼土を残すはずである。

以上、やや細かく述べてきたがこれをまとめると、

- ① 焼成窯・燃焼室(部)の区別がないこと。
- ② 煙道・焚口に構造上の特徴がみられる。
- ③ 平面形（円・椭円・逆三角形など）が特異であること。
- ④ 窯体の焼土が著しく、須恵器窯なみである。

⑤ 側壁に窓口をあけるものもある。

などに炭窯獨特の構造を見出すことができる。

これらの諸点を考慮して、5・6号窯跡に対比させると、5号窯跡については①・②・③・④・⑤のいずれについても認められる。ただ煙道については移築する関係上、十分な調査をしていないので、今後の調査を待ちたい。6号窯跡については①・②・③・④のいずれにも該当すると思われるが、一部が破壊されており、平面形にても狭い焚口からラッパ状に開くことから、逆三角形になる可能性がつよい。煙道については不明であるが、窯壁の内側が灰色に塗装しており、還元炎焼成（むし焼き一精錬）の行われたことと一致する。

このように5・6号窯跡は、木炭窯の構造と対比した場合、諸点において木炭窯としての構造を具備していることが明らかにされた。

5. 文献に記された河内和泉の木炭窯

文献に記された木炭では、神武即位前紀に国見山の戦いにおいて八十条師が「墨坂置燒炭」して皇軍の侵入を防いだとある。^{やまとひがし}

「炭窯」については、延喜式齊宮の諸司春祭条に「炭窯」がみえる。先の古墳出土例とともに、わが国においては原始・古代からかなり高品質の木炭が炭窯によって焼成されていたことを示した1例であろう。

平安朝には、「大原炭」「小野炭」など平安京近郊の炭窯の煙が、冬の風物詩として歌に詠まれることもたびたびであった。

河内・和泉などの大師山遺跡周辺地域をみると、和泉横山谷に産する横山炭が鎌倉時代には既に知られていたらしく、藤原光俊は『新撰六帖』⁽⁶⁾に「いかにして何とやけんか和泉なる横山炭のしろく成るらん」と詠んだ。この歌によって和泉横山が白炭の産地であったことが明らかである。横山は大師山遺跡の西方8kmにあたり、天野山金剛寺から楓尾街道を和泉国へぬけたところ、現在の和泉市北田巾から父鬼川をさかのぼった父奥村が中心地であったという。

白炭についてもう少しあかのほると、建久元年(1190年)の『国司廳宣案』に天野山金剛寺領について「早限永代、免除後四至内田地山野等所當已下國役臨時雜事」とあるが、この四至とは高向・日野・和泉國境・小山田、すなわち金剛寺を中心とした小山田丘陵～楓尾山東麓一帯であり、この中に「白炭免田伍町」が存在したとある。この「白炭」が地名とは明言できないが、いずれにせよ、当地が白炭の産地であったことはこれにより明白である。なお、この「白炭免田伍町」については、建久元年の序宣以降において金剛寺文書に散見される。

白炭免田伍町は金剛寺より刑部大輔入道仲国(蓮性)が一期に限って恩給に預かったもので、蓮性の死後においても姫娘の鈞局など家人が「有繼父之譲狀」と称して金剛寺へ返しなかったらしく、これに乗じてか、「大輔阿闍梨梨丹下冠者類降等諸人」が淫行したとみえる。

これに対して、大秦禪尼御下文が貞応元年(1223)8月に「白炭免五町停止人給可充寺用由

事」と命じたのをはじめ、金剛寺は九条殿、御室(仁和寺)、幕府などへとさかんに提訴していくことがわかり、白炭免田に関する記録は正安四年(1302)まで盛んにみえる。

白炭免田について詳細を記すのは本論の目的ではないので述べないが、金剛寺における初期の寺領関係の一端を知る上での興味あるものであろう。

一方、興国元年5月28日の「金剛寺寺務置文写」⁽¹¹⁵⁾によると、「炭山高瀬所當米」とみえ、「高瀬」が「炭山」であったことがわかる。「白炭免田」については明確な場所が不明といわれるが、高瀬については金剛寺の南約0.8kmの山中に、現在もその地名を残しており、場所が明らかである。

これらにより、金剛寺周辺の山中で炭が生産されていることが明らかになったといえよう。

一方、大師山遺跡の東方にある古刹觀心寺については、正平16年(1361)12月の『觀心寺庄領家年貢算用状案』⁽¹¹⁶⁾に「坪炭二荷内」とみえ、さらにずっと後になるが天文21年(1552)3月の『觀心寺郷巾上物注文案』⁽¹¹⁷⁾に「觀心寺郷中より上物之指出」として「□□□けの炭五荷」、永禄4年(1561)正月の『觀心寺郷巾上物注文案』⁽¹¹⁸⁾に「さし出」として「とりあけのすみ五荷」などがみえる。これらは「おおうめ」「くり」「さんせう」などの山の莘とともに列挙され、觀心寺郷中の山中より産出していたことがわかる。しかも炭に関しては、「十二月ニあけ申候」、「極月ニ上申候」と註記されていることから、年末に寺へ上納されたことがわかり、これにより炭が主として冬期に生産されていたこと、あるいは、寺では炭が冬期の暖房の手段として使用されていたことなどを推定することができよう。

觀心寺・金剛寺の例ではないが、大乗院寺社雜事記の文明元年(1469)12月26日条に「河内太子より家門ニ御炭二荷、巻數進之、毎年儀也……」⁽¹¹⁹⁾とあり、河内太子より大乗院へ毎年炭を進上していたことがわかり、これもやはり12月である。

觀心寺文書にもどるが、管領畠山持国は觀心寺へあてた書状の中に「巻數一合賜候、目出候、仍白炭三荷到来候、喜入候」⁽¹²⁰⁾と記し、觀心寺より持国へ白炭が献上されたことがみえる。これも12月である。

このように、河内の各地の産地から京洛へ進上された炭も多いとみられる。

觀心寺・金剛寺などが寺領や周辺より産出する白炭を、どう把握したのかは興味あるところであるが、それについて詳細に論ずるまでの準備も十分でない。ただ、このように寺家の冬期暖房の要や、あるいは京へ献上される以外に、永享7年(1435)3月吉日の『觀心寺七郷炭壳文書目録案』⁽¹²¹⁾がみえるように、売買の対象とされたのも当然であったと思われる。

さて、近世に至ると暖房炭としての普及のみならず、茶用炭としての需要が急増し、木炭産地は全国的に活況を呈するようになるという。とくに、品質の陶汰とともに良質の木炭は生産地名を冠して「○○炭」と呼称されるようになり、その産地が明瞭に把握できる。

樋口清之氏の「日本木炭史(經濟篇)」にそれについて詳細に記載されているので、一応、河内・和泉の周辺地域について伝承を含め、まとめてみたのが第12表である。

第 12 表 河内・和泉における木炭生産の記録（日本木炭史経済篇より）

書名	著作者	刊行時期	記載の内容
		慶安元年(1648)	光流の純本畠村の炭焼六右衛門が京都北山鹿苑寺(金閣寺)の長老臨林承宗の招きで上洛し、裏山に炭窯を築いて白炭を焼いた。
毛吹草	松江重頼	寛永15年(1638)	和泉鐵治炭・横山炭・光流白炭
河内鑑名所記	三田淨久	延宝7年(1679)	炭をかついでいる村の男の仕事姿
茶譜	馬場北冥 江染山鹿庵	元禄7年(1694)	白炭ハ和泉國光流云所ヨリ焼出デ ……サヤマト云所ヨリ焼出スヲ光ノ 隠炭トモ云脱モ有……
泉州志	石橋新右衛門	元禄13年(1700)	横山炭出父鬼村……沿河内国香施炭 亦出此山東北。……今は山あせ良き 木無之候故、今は父鬼の奥河州光之 麓と申題にて白炭焼申候
和漢三才図鑑	寺島良安	正徳2年(1712)	白炭ハ泉州横山、同横尾山中出之、
和漢茶誌	三谷良林	享保3年(1718)	出於泉州番鹿者……
河内志	関祖衡編	享保20年(1735)	斯闇炭、瀬戸山以山製闇……
和泉名所図鑑	秋里籠島撰	寛政8年(1796)	名産横山炭・河内香施炭
茶窓聞話	近松茂矩	享和4年(1804)	河内千劍波……同園(河内国)光流 寺の谷よりも白炭が焼出せり。

これで明らかなるように、近世期に至っては地誌・茶誌等に多くの河内国・和泉国における炭焼の実体を示す資料がみられる。とくに茶誌に多く引用されるのは、当方の木炭が茶用白炭として、品質・形状とともに華麗なものが産出し、とくに喜ばれたためであった。

ここに述べられている横山については既に述べた。光流は南河内郡高向村大字滝畠(現河内長野市)であり、河内・和泉両国を界する横尾山東麓の山中に位置し、石川の上流域の狭い渓谷で、金剛寺の南5km、大師山遺跡の南西8kmの位置にあたる。

滝畠の西之村のおお山中、深入った所に欽明天皇の勅願所で行滿上人の開祖になると伝える護國天山光流寺があり、その一角に不動堂とよばれる二間四方の桧皮葺の小さな堂がある。その中に小さな不動尊が祀られているが、村の人は昔から炭焼不動といつて、炭焼きの守護仏としてあつく信仰されているという。⁽²¹⁾ このように滝畠は炭焼と関連の深い村なのである。

「千劍波」は「千早」であり、現在の南河内郡千早赤阪村に属する。おそらくこの山中において木炭が焼かれたのであろう。

「サヤマ」は南河内郡狭山町とみてよいから、狭山町南西方の泉北丘陵一帯の山中で炭が焼かれたはずである。大師山遺跡の東方一帯である。

このようにみると、河内長野市を中心として和泉市・狭山町・千早赤阪村に至る泉北丘陵か



第159図 光 魁 寺 (右の写真は不動堂)

ら和泉山地北麓・金剛山地西麓一帯の山間地は、近世において茶用白炭の一大生産地帯であったといえる。さらに、これらの木炭生産はたとえば光滝炭が昭和17・8年ごろまで生産が続けられたように、各地の産地でも生産が継続されていたことが十分に考えられよう。

(28)

以上、やや仔細にわたって中世～近世を通じて大師山地区周辺の木炭窯の展開を文献上の記載によって述べてきたが、これにより本遺跡周辺にはおびただしい炭窯群が埋蔵されているはずであり、大師山遺跡検出の5・6号窯跡も先述したように炭窯としての性格を十分に具備している以上、木炭窯と判断するのが妥当と思われる。

6. 周辺地域で検出された小型平窯、窯状遺構について

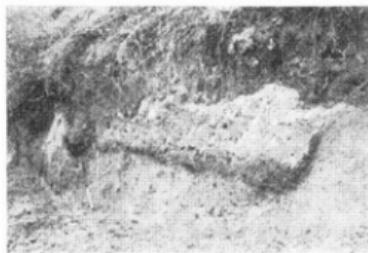
これまで、文献からみる限り、泉北丘陵～千里赤阪村～河内長野市～和泉市の山間には多数の木炭窯跡が埋没していることを明らかにした。

次に、この周辺地域において近年調査された性格不明の窯状遺構について言及してみる。

ここで問題にするのは河内長野市内小山田丘陵で調査された長池窯跡と、市内の泉北丘陵で須恵器窯跡の発掘調査に際して偶然に検出された性格不明の小型窯状遺構についてである。

長池窯跡群は河内長野市小山田町4023番地字長池原などで検出されたもので、昭和46年2月7日～4月7日の発掘調査で5地点から計12基の小型平窯と2基の焼土遺構が検出された。

これらは標高140～160mの二つの支尾根に展開するもので、1・2・4・5地点は斜面削部に立地しているが、第3地点は尾根縫線の鞍部から頂部にかけて7基の小型平窯、2基の焼土



第160図 大師山周辺で露出した黒色炭層

遺構が折り重なるように、密集して検出された。

これら各小型平窯の概要を表にまとめたのが第13表である。

各窯体内外からは原則として遺物が検出されていないが、第2地点の平窯より土師器壺口縁部細片が1点、第3地点第3号平窯からも土師器壺口縁部が1点、また同地点で土師

第13表 小山田丘陵長池原検出の小型平窯群一覧表

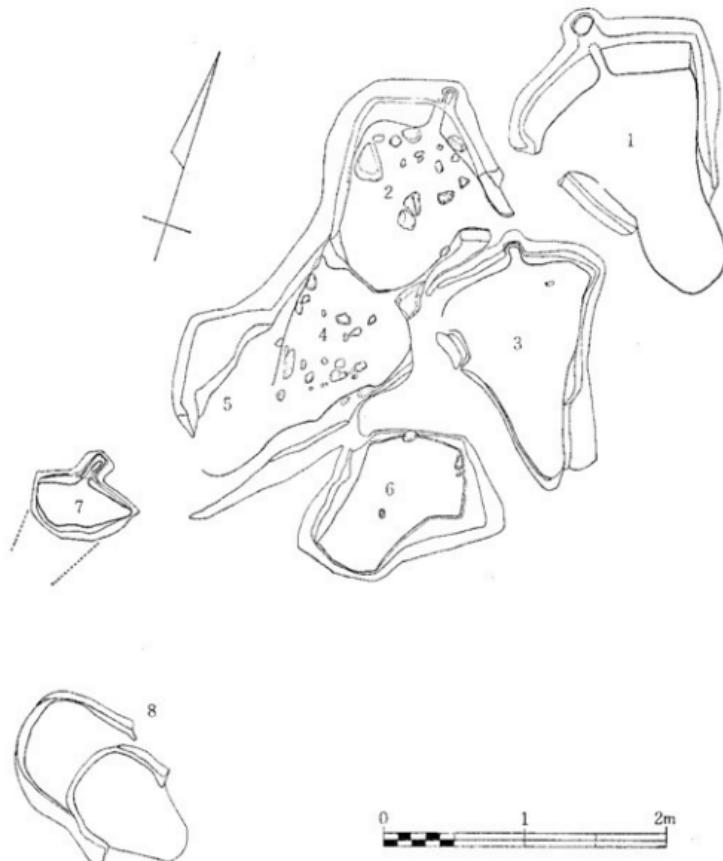
名 称	窯 の 形 態	規 模 (長×幅×高 m)	そ の 他 の 所 見	遺 物	備 考
第1地点	半地下式小形平窯		煙道は河原石4個を使用 炭・灰を検出	なし	残留磁気 A.D.1,000±50
第2地点	半地下式小形平窯 イチジク形か?	2.03×1.1×0.9	床は中央がやや低い。煙道に土師器断片、窯体内木炭片が遺存	土師器壺 口縁部 1	A.D.1,150±50
第3地点 平窯№1	半地下式平窯 イチジク形	1.83×1.2×0.6	窯壁は粘土を貼る。側壁に窓口	なし	A.D.1,150±50
同 平窯№2	半地下式平窯 イチジク形	1.35×0.85×0.65	床面に河原石	なし	A.D.1,150±50
同 平窯№3	半地下式平窯 イチジク形	1.6×1.05	窯底のみ検出	土師器壺 口縁部 1	A.D.1,150±50
同 平窯№4	半地下式平窯 イチジク形?	幅 0.9	窯底のみ検出、床面に河原石	なし	A.D.1,150±50
同 平窯№5	半地下式平窯 イチジク形		大半が破壊	なし	A.D.1,150±50
同 平窯№6			大半が破壊	なし	A.D.1,150±50
同 平窯№7			大半が破壊	なし	A.D.650±30
第4地点 №1	半地下式平窯 イチジク形	0.65×0.65×0.75	№2と重複	なし	A.D.950±50
同 №2	半地下式平窯 イチジク形?	1.45×0.7×0.5		なし	A.D.950±50
第5地点	半地下式平窯 イチジク形?	0.9×0.7×0.65	窯壁に石を塗り込む	なし	A.D.900±50

器細片や瓦器細片を若干検出したと報告されている。いずれにしてもきわめて微量である。小型平窯の時期としては出土土器より12世紀代の一時期があてられており、また熱残留磁気の測定結果とも一致しており、大半は古代末期に操業されたものであることがわかった。そして、その用途としては、検出された土器より土器焼成窯と判断されている。⁽²⁴⁾

泉北丘陵で検出された小型窯状遺構は、同丘陵に展開する須恵器窯跡の発掘調査で検出されたもので、現在のところ十数基の発見があったといわれている。⁽²⁵⁾

これらの遺構は須恵器窯跡の調査に際して偶然検出されることが多く、調査者は、小規模ながら窯としての構造を持っていることから、「窯状遺構」と報告しているものであり、本文についても似たこの言葉を使用した。

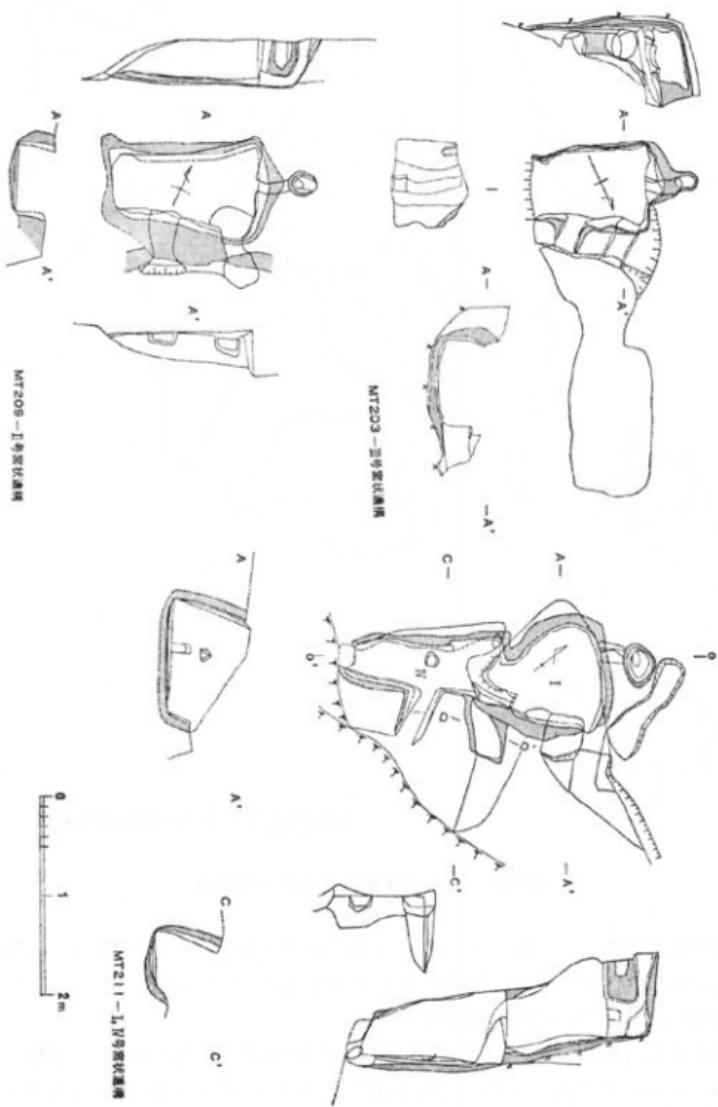
これらの窯状遺構について初めて注目されたのは、泉北丘陵の須恵器窯跡の調査に多年にわたってあたってこられた中村浩氏である。この成果は「陶邑一勝市泉北ニュータウン内埋藏文



第161図 長池第3地点検出の小型平窯

化財発掘調査概要一」（1970年刊）において、新たに一章を設けて報告されており、それによると高藏地区で4箇所（6基）、陶器山地区で15箇所（16基）が明らかにされている。一応その概要を表にまとめてみたのが第14表である。

報告者によると、これらの窯に共通した点は全長1.5m程度、最大幅1m内外で、奥壁に煙道をとりつけ、その対面するところに焚口を有していること、及び、左右の別はあってもいずれも側壁に差し木口を設け、窯内の温度の低下を防ぐ配慮がみられる点などがあげられているといわれている。窯体内に炭・灰の堆積をみると、遺物は原則的に認められないという。



第一六一圖 海器山地區墓狀漢器 (〔圖色〕大阪府文化財調査課標記相より)

第14表 高藏地区陶器山地区における窯状遺構一覧表

高 藏 地 区 (TK)

名 称	窯の形態	規 模 (長×幅×高m)	その他の所見	遺 物	備 考
TK320-II	半地下式平窯	1.1×0.93×0.91 (現存部)	側壁に粘土貼付、奥壁の下から上へ傾斜	なし	TK 320と同時期?
TK60-I	半地下式平窯?	1.2×1.1×0.5	差し木口外に2m×5mの範囲で灰・焼土が広がる(差し木口幅34cm)		TK60-IIと重複
TK60-II	半地下式平窯?	1.2×0.7×0.7	左側に差し木口(幅31cm)		
TK322	半地下式平窯	1.4×0.85×0.76 (現存部)	須恵器の窯端片を床に散く、差し木口幅25cm、火口は礫と粘土で閉塞		
TK243			大半が流出		

陶 器 山 地 区 (MT)

MT203-I	半地下式平窯	1.25×0.85×0.55 (現存部)	側壁2ヶ所に孔(幅各30cm)	なし	
MT203-II	半地下式平窯	1.8×0.9×0.7	側壁に貼土なし。差し木孔2ヶ所、須恵器細片を塗り込む。		MT203-Iと同時期またはそれ以後
MT203-III	半地下式平窯	1.1×0.85×0.6 (現存部)	窓体に須恵器を塗り込む。 差し木孔2ヶ所(幅20cm)		
M+209-II	半地下式平窯 長方形プラン	1.5m?×1.0	側壁に2個の小孔	須恵器小皿片1	
MT211-I	半地下式平窯 扇形プラン	1.3×1.0×0.8	還元焼成をうける、側孔1	土師質皿1 須恵器鉢片1 土師質細片数片	
MT211-IV	半地下式平窯 長方形プラン	2.44×0.6	還元焼成をうける、2枚の床瓦をもつ。炭化した木が側孔に入った状況で検出		MT 211と重複
MT211-II	半地下式平窯 万形に近い稍円形	1.2×1.0×1.0	側孔1ヶ所、円筒状経道		
MT211-III	半地下式平窯 長方形プラン	1.3×1.0×0.8	経道を須恵器裏片で覆う	須恵器裏片1	
MT94-I	平 窯	1.0×0.9×0.2	貼り壁はなし、残存度は悪い		
MT94-II	平 窯	2.1×0.8×?	床面のみ遺存、1.3mの範囲に灰が土師器1点堆积	土師器1点	
MT218	半地下式平窯	0.5×0.7	粘土の貼り壁		
MT219	平窯、稍円形?		詳細は不明		
MT220-I	半地下式平窯	0.9×1.5×0.75	側孔は2ヶ所、床は3枚。		
MT220-II	半地下式平窯 扇形プラン	1.3×0.9×1.15	側孔は2ヶ所?		
MT220-III	平 窯	1.0×0.8×?	側孔は2ヶ所?		
MT221			詳細は不明		

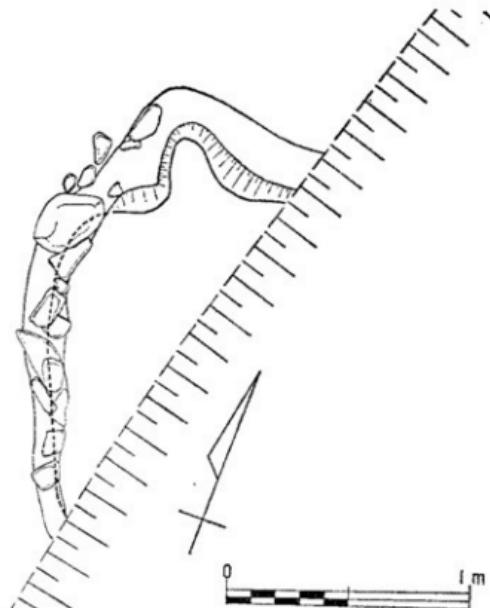
このように、長池窯跡群、泉北丘陵中における窯状遺構群を概観してみると、次のようにその性格をまとめることができる。

- ① 全長1.5m前後、幅1m前後の小型窯で、若干の差はあるが一応平窯といえる。
- ③ 奥壁部に窯底から上へのびる煙道を有する。
- ③ 奥壁の対面に焚口を有する。
- ④ 片側壁に窯口がある。（泉北丘陵の場合は「きし木口」と称している。）
- ⑤ 著しく強熱されてい
る。還元焼成されたものが多い。
- ⑥ 丘陵を利用した半地下構造、天井は粘土で架構している。
- ⑦ 遺物は原則として認められず、炭、灰の堆積を見る。
- ⑧ 群集していたり、また重複していることもある。

これらの諸点を考慮すると、この長池窯跡群と泉北丘陵中の小型窯状遺構はきわめて性格が一致し、同一の生産目的にかなったものと解することができよう。

さて、これらの窯跡群の用途であるが、長池窯の場合は報告者は土師器等の出土をみたことより土師器の焼成窯と判断し、泉北丘陵の場合は、性格については調査者の中でも意見の一致をみず、不詳であるとの前提に立ちながらも、温度の低い土師器の生産に供せられた可能性が高いとされている。いずれも土師器窯としての判断が強いように思える。泉北丘陵の場合は、その他の用途として、その可能性としての見解とことわりながらも、

- ④ 施釉に先立って、あらかじめ素焼をするためのもの
 - ⑤ 須恵器の生産規模の縮少に伴う素焼き窯
 - ⑥ 炭焼き窯
- の3点を提示されている。



第163図 窯体に石を混えた小型平窯（小山田地区長池原）

⑧の施釉時の一次焼成窯であるとの解釈は、泉北の須恵器焼成窯が東海においてみられるような灰釉陶や綠釉陶を大規模に焼成した痕跡は現在において認められない以上、その可能性は否定されるべきである。

⑨については生産の縮少に伴うものであったにせよ、これほど極端に窯の構造を変えなければならない理由を見出すことができないし、はたしてこのような構造で須恵器が焼成できるかという疑問が残る。しかも窯体内外ではほとんど土器が検出されないということより、土師器であれ、須恵器であれ、土器窯としての性格は全面的に否定されるべきであろうかと思われる。

そうすると⑩において指摘された点、すなわちこれら的小型平窯群は土器窯でなく木炭窯と理解することによって始めて矛盾のない解釈が得られるのである。さらにもう一度、先に掲げた8点の共通点のいずれをみても、これら的小形平窯は木炭窯としての性格を備えたものといえ、とくに②、④、⑤、⑦の諸点はこれまで述べてきた炭窯構造の特殊性から考えて決定的な根拠はあるまい。

この点をなお仔細にみると、泉北丘陵で検出された窯状遺構の平面プランは扇形、椿円形、長方形などがあるが、これらはいずれも木炭窯の形態としても合致するし、扇形プランはすなわち、とくに炭窯独特の形態として先に述べたイチジク形に符合する。

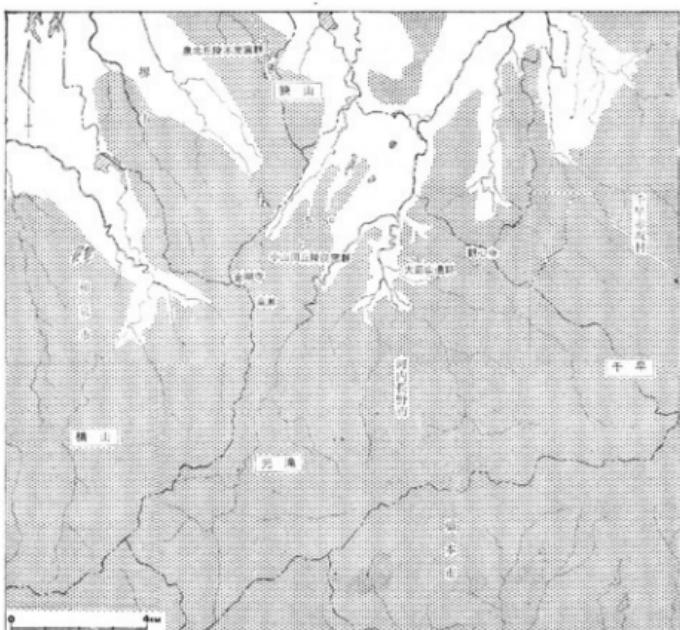
また、これら窯状遺構の側壁には幅30cm程度の孔が1～2箇所開けられており、調査者はこれを「差し木口」と呼称しているが、通常の土器窯の差し木口としては大きすぎる感があり、差し木口とはいえないものであろう。この側孔から灰がきき出された痕跡があり、なお外方へむけて焼けていること（第162図MT211-IV, MT209-II, MT203-I）を考慮すれば、ちょうど白炭の製法の最終段階の赤熱した木炭を窓外へ搔き出し、窓外で灰をかけて消火する作業に使用された窓口であることを想定すれば、これらの調孔の遺存状況をも説明することができる。また、白炭窯は伝統的に小形窯であるとされており、この点においても白炭窯である可能性が高い。⁽²⁶⁾

このように、泉北丘陵に多数遺存すると思われる窯状遺構は、おそらくすべてが木炭窯であろうことが明らかにされた。

したがって、長池窯跡であれ泉北丘陵に検出される窯状遺構であれ、調査者は「小形平窯」あるいは「窯状遺構」、「燒土壤」などの名称を使用しているが、「木炭窯跡」に統一すべきではないかと考える。また、木炭焼成過程に、燃料を投入する工程はないから、「差し木口」との名称も不適当であり、「窓口」とすべきであろう。

7. ま と め

以上のようなことから、大師山遺跡で検出された5・6号窯跡、及び当遺跡周辺で近年多く検出をみている「小形平窯」あるいは「窯状遺構」等は、その構造からみても木炭窯を考えるのが妥当であり、また、文献資料によると当地域は中・近世から現代に至るまで白炭の産地



第164図 大師山遺跡と周辺の炭窯群と中・近世の木炭生産地の位置

であったことが明白となった。すなわち、従来性格不詳として扱われてきたこれらの小遺構は、当地方の木炭生産の実体を考古学的に証明するものとして、今後重視されるべきであろう。

本考察の結論はこの点に帰するのであるが、なお、本稿をまとめるにあたって、2・3の点を補追しておきたい。

このような遺構が従来から調査の対象にされてきたにもかかわらず、木炭窯として結論づけられることのできなかった理由の一つに、微量ではあるが、土師器等が検出されていたことがあげられよう。小山田・泉北丘陵の窯状遺構が調査者として土器窯としての可能性をもっとも強く意識していたことからそれがうかがえる。しかし、土器の出土例がこのようにごく微量であり、しかも1点の土器も検出されない窯跡が多いことを考えても、土器窯とはいえないものである。

それでは、このような微量の土器はどのように理解すべきであろうか。

大川清氏は唐沢山ゴルフ場埴輪窯から検出された土師器を「ハニワ工人達が使用していたと思われる。一工人達の日用容器であったと想定」したが、木炭窯検出の土師器・瓦器等もこの

ようなものを想定できるのではないか。すなわち、廃窯に際して、生産者の使用していた土器が混入したものか、窯内へ投棄されたものと解したい。木炭生産者は、焼成中は一定期間を山で生活するわけで、最低限度の生活資材は持って入山せねばならないだろうから、その一部がこのような形で残されたのではないだろうか。

ただ、木炭窯の場合は窯体の形態や出土木炭から操業時期を想定するのが困難であろうから、窓内外から検出されたこのような土器は、少量であろうとも、その実年代を想定しうる唯一の資料として貴重なものである。長池窯の場合は、出土遺物より窓跡の時期を比定したその一例といえる。

次に、長池窯、あるいは泉北丘陵中の木炭窯の構造について若干の考察を加えてみたい。

長池窯は出土した瓦器、土師器片より、12世紀代の一時期に操業されたといわれる。とくに第7地点では熱残留磁気による測定からも同様な時期が測定されている。平安末期といえば、先に述べたように金剛寺文書の中の「白炭免田伍町」をめぐらて争論のおきている時期に近く、この寺領内と思われる小山田丘陵の一角で白炭窯と考えることのできる木炭窯群が検出されていて、文献の記載とも一致するものとして興味深い。今後、小山田丘陵及びその周辺に展開する木炭窯の全容が明らかにされなければなるまい。

泉北丘陵で検出された窓状遺構群は、調査者は性格不明とことわりながらも、同地域に展開する須恵器窓跡との関連について問題を提示している。
(27)

まず、窓の構造が陶邑古窓跡群の末期にあらわれる特異な窓形態である平窓と類似することである。従来の須恵器窓が登り窓の形式をとっていたにもかかわらず、この平窓はとくに大窓専用の焼成窯として奈良期に出現するもので、KM38-II₍₂₈₎で注目されたほか、TK36-I, K-T32I, TK237などにもあり、最近は調査例が増加しているという。

構造的には、平窓であるという点と、煙道が奥壁の下位から上へ穿たれることなど窓に類する点があり、この窓の盛行期がこれら窓状遺構の出現期と規を一にするところから、両者の技術上の関連が想定されるのではないかとのことである。

また、須恵器生産者との関連については、須恵器窓跡に接近して構築されている場合が多く、とくにMT209-I窓状遺構がMT209(須恵器窓)の余熱の利用も考えられるほど接近しているという事実、あるいは窓に須恵器の破片を塗り込んだり、煙道の閉塞に甕の破片を使用していることなどが明らかにされており、「須恵器を生産していた人が少くとも本遺構の使用に当って関与していた」と想定されている。
(29)

木炭生産にとっても須恵器生産にとっても、築窓・採薪という作業を必要とする以上、須恵器工人が木炭生産を兼業していたり、副業としていたとすれば、いかにも合理的な解釈が成立つのであるが、私自身は次のような点において、須恵器生産者と木炭生産者の関係を(資料的にも)厳密なる判断のできない現在では全く否定するものではないが)積極的に評価することには疑問をもっているのである。

その理由の一つは、泉北丘陵に展開する木炭窯が操業時期・窯跡数においてかなりの規模に達すると思われ、たとえ燃焼材の相違はあっても、漠大な燃料を必要とする須恵器生産と木炭生産が、例えば三代実錄貞觀元年夏四月条にみえる「河内和泉両国相争燒陶伐薪之山」⁽¹⁾という状況のもとで、はたして本質的に調立したかどうかという点である。このような採薪事情からみて、古代末の横山炭の成立を泉北丘陵から隔った地に求めたという意見もある。⁽²⁾

また、発掘調査では木炭窯の窯壁に須恵器片が焼り込んでいたり、煙道の閉塞に須恵大甕の破片を使用した遺例も報告されているが、これらは炭窯の構築や生産の過程において、出土・採集した須恵器を転用した結果であろうとも考えられ、そのこと自体に須恵器窯との直接的関連をみとめられない、と考えることはできないだろうか。

次に、先述した須恵器焼成を行った平窯との関連であるが、平窯の初現については、奈良県橿原市歌垣町日高山瓦窯が藤原宮供給瓦窯として7世紀末葉に成立したといわれ、奈良期になって陶邑窯で出現する平窯は、このような瓦窯の影響をもうけたものと理解される。⁽³⁾しかし、木炭窯とは窯体規模や焼成工程に大きな差異があり、直接的な影響を考慮すること自体無理ではなかろうか。

このような点については木炭窯の成立・盛行期と、陶邑窯の衰退期との関係も今後の調査例によってさらに詳細に論及されるべきであろう。古代・中世窯業を通じて、木炭生産者と窯業生産者が表裏一帯の関係をなした事実もおそらくみとめられていないから、このような両者を結びつける歴史的必然性もないのではなかろうか。泉北丘陵については、我が国最古・最大規模を有する須恵器生産地帯として近年めざましい研究成果をあげつつあるが、木炭生産地としての位置づけも今後の多様な研究成果によって明らかにされるべきであろう。例えば、堺市の美木多に「灰掛」の字名を遺す地があり、この灰掛はまさしく、白炭焼成の最終段階の窯外焼火作業である「灰掛（この作業に使用するスコップ状の道具をハイカケと呼んでいる。）」とみることもでき、白炭生産の名残りと考えられるように、習俗・地名などの身近なところに、木炭生産の痕跡を見出せるかもしれません。今後、考古学と合わせ、研究が進展されることであろう。

8. 今後の課題

これまで述べてきたことより、大師山遺跡検出の木炭窯をはじめ、周辺に展開する木炭窯についての認識を少なからず新たにすることができた。ここで、本論を終るにあたり、若干の点について補足し、今後の課題としたい。

まず、木炭窯の構造についてであるが、現在の木炭窯は江戸期において完成されたものが、それ以後各地で種々改良されたものであろうが、現在に至るまでの炭窯構造の変遷について、今後の資料の増加によってその技術的系譜、地方的な系譜が究明されなければならない。長池窯が12世紀代のものであることは、調査によっては誤りがないと判断できる以上、すでに古代末期にはこのように型式化し、かつ現在の木炭窯に近似した構造を呈する製炭技術が存在し

たのであり、その技術的系譜は實に興味ある問題である。

炭窯構造の微細な部分をとりあげると、たとえば、側壁に穿たれる窓口の問題であるが、現在の炭窯では側壁の窓口は主として黒炭窯に取入れられており、それに比して、小山田・泉北両丘陵の炭窯は痕跡からみて白炭窯と想定できるにもかかわらず、側面の窓口を持つ。

また、現在の炭窯では、石窯は白炭窯、土窯は黒炭窯と2種に大別されるが、これについても調査例では石を有するもの、有しないものが混然としており、構造などでは明白な相違をみせない。このような築窯技術は、永年にわたる生産者の経験によって創出されたものであろうが、今後の調査によってこのような細かな技術的経緯も明らかにされよう。

次に遺跡保存の立場からである。長池窯でみられるように、平安末期において既にこのような集中生産の痕跡を残していることからみると、このような集中生産が近・現代に至るまで継続されたとすれば、周辺地区に膨大な量の木炭窯が埋蔵しているはずである。いうまでもなく、周辺地域は泉北ニュータウンをはじめ、大阪近郊のベッドタウンとして開発行為が激化している。前述のごとく、河内長野市ではそれによって木炭窯跡に対する調査も開始されているのであるが、考古学の対象として学界の注意を喚起するに至っておらず、遺跡としての史的価値については十分な検討がなされていない。これについては今後の調査成果を待つ以外に具体策はないが、大都市近郊におけるこのような開発状況からみても、また、遺構が発見されにくい山中に埋蔵されている点からも、緊急を要する問題である。

また、このような木炭窯跡としての遺跡保存の問題としてだけではなく、現実の伝統技術の保存に関しても同様なことがいえる。木炭生産は、常に副業、あるいは兼業として続けられてきたのであり、また、専業者であっても山間奥地での長期に渡る過酷な労働条件のもとで生産が行われてきた。

生産労働の実体からしても、「短期間に、集材・点火・調整など雑多な作業が行われ、投下労働量と生産量は農業に比して相関が大きくなり、しかも2人一組で働く方が能率が上がる場合が多い。」⁽⁸⁴⁾とされるほど、本質的に組織化できない体质がある。これを歴史的にみた場合、農業を主幹産業としてきたわが国において、木炭生産者は常に少者の立場を甘受せざるをえないわけで、このような歴史的な立場にあった上に、戦後における急激なエネルギー革命や、(とくに年少者の)労働意識の急変により、生産は激減し、技術保存は危急の事態を呈したわけである。

わが国の白炭としても最高品質を有するといわれる備長炭においても、たとえば、紀伊田辺市上秋津川地区における現在の従事者数はわずか14人（うち黒炭生産者は5人）といい、その年令層からして、あと十数年をもって操業は終止されるであろうとのことである。

このような事情は、他の産地においても大同小異であろうから、高度な伝統技術を保存する意味においても、緊急に積極的な保存施策が講じられるべきである。

このような点からしても、木炭史解明の現実的意義が強調されるべきであり、そのためには文献史学・考古学・民俗学等の成果が緊密に交換されるべきである。幸い、最近では製炭従事

者からの聞き取り調査が実施された例などもあり、このような作業も今後各地で早急に進められるべきである。^(註6)

本論をまとめるにあたって、木炭窯という特殊な分野でもあり、必ずしもまとめた結論を引き出せなかつたが、考古学からの問題提示ということで了解していただきたい。従来の研究としては、通史的な見地で記されたものが少ないのであって、樋口清之氏編著による「日本木炭史経済篇」（昭和35年刊）は高く評価されるべきものである。遂に明らかにしなかつたが、本編を進めるにあたっても本書に負うところが非常に大きい。

また、製炭技術については、和歌山県西牟婁郡県事務所の林業指導課、田辺市紀南農協、同秋津川支所をはじめ、田辺市上秋津川在住の木下位吉・宮本義兵衛・宮本進の各氏のご教示を得た。文末であるが深謝の意を表して論を閉じたい。

〔註〕

1. 土地によっては木炭窯と非常にまちがいやすいとする意見もある。庭田龍郎『鉄の考古学』176頁 1973年
しかし、本論においては、1点の鉄滓らしい遺物も検出していない。
2. 近藤義郎「先史文化論」「日本歴史」第1巻
3. 樋口清之『日本木炭史（経済篇）』日本木炭史編纂委員会 1960年
4. 穴沢義助「製鉄遺跡」（学界展望3）『考古学ジャーナル』105号 1974年
5. 三浦伊八郎『木炭の科学と常識』 1942年
6. 和歌山県田辺氏秋津川在住の木炭研究家木下位吉氏のご教示による。
7. 日本書紀神武天皇即位前紀戊午年九月。
8. 延喜式卷五齊官諸司春祭条
9. 寛元2年、垂原光院、為永ら編
10. 大日本古文書 金剛寺文書 第20号文書
11. 大日本古文書 金剛寺文書 拾遺第8号文書
12. 大日本古文書 金剛寺文書 第99号文書
13. 大日本古文書 金剛寺文書 拾遺第9号文書
14. 河内長野市史編纂室玉木強氏のご教示による。
15. 大日本古文書 鏡心寺文書 第356号文書
16. 大日本古文書 鏡心寺文書 第385号文書
17. 大日本古文書 鏡心寺文書 第388号文書
18. 大乘院寺社雜事記 文明元年12月26日条
19. 大日本古文書 鏡心寺文書 第253号文書
20. 大日本古文書 鏡心寺文書 第201号文書
21. 樋橋利光「窯烟の生業」「河内窯烟の民俗」大阪府文化財調査報告書 第24輯 1973年
22. 吉田東伍「大日本地名辞書」（上）1907年
23. 訂21 90ページ
24. 河内長野市教育委員会「長池窯跡発掘調査概報」 1971年
25. 大阪府教育委員会「鷹山——堺市泉北ニュータウン内埋蔵文化財発掘調査概要——」1970年
26. 樋橋利光「古代・中世の横山谷」「和泉横山谷の民俗」大阪府文化財調査報告 第26輯 1975年
27. 訂25 89ページ
28. 大阪府教育委員会「和泉光明池地区窯跡発掘調査概報」 1967年
29. 訂25 90ページ
30. 三代実録 貞観元年夏4月条
31. 訂26 11ページ
32. 横平善教「福原市飛弾町日高山瓦窯跡」「奈良県文化財報告五五」 1962年
33. 藤沢一夫「造瓦技術の進展」「日本の考古学」VI 1967年
34. 皇后 別「炭焼物語」 1971年
35. たとえば「木曾谷における山惣習俗調査中間報告」木曾教育会郷土館（1974年）がある。

考 察 VI 高地性遺跡についての二、三の問題

一河内長野大師山遺跡に関連して—

網 干 善 教

(1)

河内長野市大師山遺跡の発掘調査において、報告編で記述した如く僅か2棟であったが、弥生時代後期に編年される住居跡を検出した。集落構成の規模の大小はともかく、弥生時代後期という時期、その位置・立地・あるいは濠跡の存在などの条件を考えるならば、明らかに高地性遺跡―住居群としての特徴を具備していると考える。表題に敢て高地性遺跡とした理由は、大師山遺跡の場合、確かに住居跡群であるが、総じてこの遺跡は単に住居跡群のみでなく、その構成要素に多様性をもっているゆえに、ここでは高地性遺跡という用語を使用したが、本来は住居跡群を主体とした遺跡であることはいうまでもない。

高地性遺跡に関する研究は、近年の発掘調査での遺構検出の増加により、地域的にも、時代的にも拡大され、構造的にも、包含遺物についても多様性があり、その機能について多くの見解が呈示されている。それにつけて高地性遺跡の成立の歴史的背景などの諸問題についても忌憚のない所見が述べられてきた。

しかし、何分高地性遺跡に対する本格的な研究はまだ浅日の感はまぬがれないであろう。瀬戸内海沿岸の地域の一部について確証された段階での所見は、その後数年間の発掘調査によって、畿内でも高地性遺跡であることの事例が増加し、さらに関東にも及ぶという事実の確認によって、遺跡の形成や機能についての解釈も大きく変化した。たとえば高地性遺跡は弥生中期にのみ存在するという最初の頃の理解が、畿内では弥生時代後期にまで及ぶことが知られるようになったのも、短期間であったといえる。

ところで、高地性遺跡の機能から、その成立の歴史的背景を倭国大乱に関連させて捉えようとする見解もあるが、『後漢書』にみえる倭国大乱が一体如何なるものであったのかという検討を経ずして、これと結びつけることは、その可能性はないとはいえないが、他面、何かと結びつけなければならないという短絡さや、安易さもあると思われる。

本報告に記載した河内長野市大師山遺跡の場合においても、執筆者の一人である笠井保夫氏と森岡秀人氏との間においても土器の型式の分類、そしてその結果もたらされる高地性遺跡の時期についても微妙な見解の相違がみられる。この場合、いずれを是とするかは至難な問題であり、この相違がまた現時点における高地性遺跡と対する基本的な問題点であろう。本書はそれぞれの視点をそのまま転載したのは、現在における課題であり、将来の研究に俟つべきも

のであろうと考えたからである。

同時に大師山遺跡・奈良県橿原市忌部山遺跡、そして現在調査中であるが、吹田市垂水遺跡、和歌山市橋谷遺跡など、いわゆる高地性遺跡の概念に包括される遺跡の発掘調査に直接関与する機会に恵まれた。その間に高地性遺跡についてなお検討を要する課題があろうと考える、二、三の問題点を指摘し、今後の視点としたいと思う。以下先学の見解を参考しながら高地性遺跡に対する研究の成果をふりかえり見解を整理し、併せて理解を深めていきたい。

(2)

第3章大師山遺跡の総括の項で、若干ふれたごとく、高地性遺跡について崎矢は昭和8年に発表された森本六爾氏の著目から出発する。森本氏は「低地性遺跡と農業」と題する文中で、大和の弥生式遺跡について述べ、「やはり地形的制約をうけまして、より低い平野部にあります遺跡と、より高い山岳丘陵部にあります遺跡とに区別されるのであります。この区別によりまして、前者を低地性遺跡、後者を高地性遺跡と仮称しようと思うのであります。その低地性あるいは高地性という言葉は、白に対する黒、黒に対する白のごとき相対的な意味であって、何m以上が高地性遺跡、何m以下が低地性遺跡と初めから厳重に規定されるものではないということ……」と述べた。これが恐らく「高地性遺跡」という用語の最初の例かと思われる。そして高地性遺跡（〔註〕宮滝・三輪・竹之内）から出土する弥生式土器は繩文土器とともにいるが、低地性遺跡より出土する土器と比較するとむしろ形式化していく、遅れるとも古いことはないし、「高地の弥生式土器は低地の弥生式土器より、時間的には遅れていると認められるのであります。すなわち弥生式文化は大和に関するかぎり、より高い所から低い所に下ったのではなく、平野から山岳及び丘陵地方へ及んだのであります」という指摘を行った。¹¹

このような森本氏の高地性集落に対する見解は、その後本格的に取上げられることはなかった。戦後になって小野氏によって新しい事実の確認と解釈が行われた。¹²こうしたなかで画期的な成果を挙げられたのは、昭和30年より32年に至る3か年の継続調査によって検出された香川県三豊郡詫間町紫雲出山弥生式遺跡であった。昭和39年刊行された同遺跡の報告書において小林行雄氏は次のごとき問題点を指摘している。

「弥生式時代は、日本で稻作農業のはじまった時代であるから、猪頭大の耕地も見のがさなかつたのであろうか。しかし、じつは、これらの島々（〔註〕瀬戸内海）の弥生式時代の遺跡は、海岸に近い平地ではなく、高い山頂にあることを特徴としている。島々ばかりでなく、内海に面した本土の山頂にも、おなじような弥生式時代の遺跡が発見されている」として、問題提起として「このような瀬戸内海地域の弥生式中期の遺跡には、なぜ高地にあるものが多いのか。これは考古学者のみでなく、日本の歴史家にとっても、きわめて興味ある問題であろう」と述べている。

紫雲出遺跡の発掘調査はこうした意識をもってすすめられたが、その結果として、次のよう

な見解を述べている。

「石製武器が畿内で爆発的に発達したと時を同じくして、瀬戸内海沿岸・大阪湾沿岸およびその周辺で顕著な存在となっているのは高地性遺跡である」とし、これらの地域での石器の出土量が顕著であって、他の石器の存在も目立っていることを挙げ、小野氏が島田川流域の高地性遺跡について行った倭國大亂に因る防衛的性格であるとする見解にふまえて「もちろん高地性遺跡のすべてについて、防衛的性格をおしつけるのでないが、大阪湾沿岸、同周辺、中部瀬戸内海域における高地性遺跡には防衛としての役割をはたしたものがあるとしてよいであろう。」とした。またこうした前提に立脚して、弥生中期の石器の発達は、「政治的にまとまっている地域集団が、征服・連合というかたちで、より大きな政治的単位に統合されていく過程で必要とされた武力の一部」と想定し、畿内地方と中部瀬戸内に共通する石製武器のあり方から、「政治的統合への対立、抗争の焦点にたったのが、ほんならぬ畿内であって、中部瀬戸内は、おくれてその抗争の渦中にまきこまれた地域」とも推論した。

また、畿内の弥生中期後半の遺跡に反映される生活相が中期の末にいたるまで本質的な変化をみなかつたとし、後期に入ると「この時期にはじまる集落の存在が目立つてゐる。しかもその多くは、立地をかえて、低地に占居している。ことさら不便な高い場所に住む必要性がなかつたのである」と考へ、この紫雲出遺跡を「内海航路を監視し、掌握するための重要な拠点であった可能性まで考えてよいであろう」と論述されている。

紫雲出遺跡の調査と時をほぼ同じ昭和31年3月、芦屋市会下山遺跡の発掘調査が開始され、36年8月まで約6か年にわたって実施された。⁽⁴⁾その成果は昭和30年刊行されたが、遺跡は標高176mから130mの間で検出された「弥生後期、山頂式高地性集落地」とされる。

遺跡の特徴については「純然たる山頂式高地性遺跡という非生産的立地条件をもつてゐる」とし、この種の山頂尾根部の集落は僅少である点、軍事的・政治的・山村的要素あるいは災害よりの避難要素を考えてみる必要があるという問題意識のなかで、「眺望のよい交通上の要衝であることは軍事的要素としての好適な条件であるが、集落内出土の遺物には石製投擲ぐらいしか武器的なものではなく、刃器の多いのが特色であるが、石器にしても、軍事拠点を思わせるほどの量はなく、遺物面での証明は困難である」と指摘している。この場合前述の紫雲出遺跡とはやや性格を異とする点があることは否めない。また政治的要素については「弥生中期から後期にかけて倭政権の誕生に伴う倭国争乱の時代であったとしても、周辺低地に数多くの中期・後期遺跡が遺存しているので、殊更この遺跡だけをその必要から出現させたと考えるほどの理由はないし、交通上の要衝であったとしても、山頂部に生活の場を拓く理由はなく、より生産の場に適した斜面を抜けばよい筈である」と徒米の高地性遺跡の性格を政治的に据えることに疑問を述べている。さらに石廻丁の出土ではなく、むしろ石鍛が出土していることから「焼畑農耕を主とした狩猟農民」という理解も、この場合不適当とし、災害からの避難の品とする考え方に対しても否定的な意見を述べている。そしてむしろ、会下山遺跡の存続が比較的

短期間とはいながら、土塁墓や祭祠場の遺構があることから、本格的な集落の形成であったと捉え、「倭政権治期における大阪湾海上支配権と密接な結びつきを想定される非生産階級の住居址」と推定されている。これは小野氏の見解以来、紫雲出遺跡によって提唱されてきた軍事的機能をもった防禦的集落跡とするのに對して、同じ倭國大乱の時代を想定しながら、そのような性格は考え難いという見解を述べている点注目された。しかし、その後においても高地性遺跡に対する理解は、倭國大乱に関連する政治的・軍事的性格をもつものというのが、今日でも支配的である。これは早急に結論づけることはできないが、高地性集落をどう考えるかという点での一つの大きな課題というべきであろう。

(3)

昭和30年代のはじめに実施された紫雲出、会下山遺跡の画期的な発掘調査とその報告書の刊行によって、高地性遺跡に対する問題意識が明確になってきた。以後今日にいたるまで約10年間、各地での発掘調査によって、高地性遺跡の資料の検出があった。現在遺跡の分布が瀬戸内海沿岸から東海・関東地方にまで及んでいる現状と、将来類似の遺跡がかなり検出・確認されることが予想される。これらは山頂・尾根乃至は丘陵に構築され、時には周濠をめぐらしたなかに住居跡が存在する集落構成を示す場合が多い。こうした一般高地性集落遺跡と呼ばれる遺構に対して、特殊な状況のみられるものもある。たとえば宇都市北迫遺跡にみられるような貝塚を伴う高地性集落のようなものである。同遺跡の報告書では、貝塚と集落遺跡との関連について⁽¹⁶⁾発掘調査の結果について述べたあと、第一の問題は、「貝の採取や日常の居住に不適当な場所に住みながら、なぜ多量の貝を捕食したのであろうか」とした。第2の問題点として、「水稻栽培が時代の趨勢となっていた弥生時代にかわらず、どうして水田經營に不適当な場所に住まねばならなかったのか」という問題を提起している。そして、「山口県下の弥生貝塚は周防灘の北岸地帯や島嶼にみられ、鈎貝塚を除くと、すべて丘陵の頂上に近い高地性貝塚である」とする。しかも、北迫貝塚は山口県下最大の弥生貝塚であり、その実態は「住居址から漁具や石器など漁撈や狩猟を示唆するような遺物が全く見出せず、むしろ農耕の存在を実施する石磨丁を出し、貝塚を築成した住民の生産様式が農耕であったことを暗示している」と述べられる。そしてこうした弥生時代の高地性貝塚について立地が多様になり、一般に規模が小さく同じ場所での居住期間が短かいものが多いためか貝殻や文化遺物が少ないという点が指摘されて注目された。

また北迫遺跡が農耕民の村落であり、生活上の不便さをまぬがれない立地に貝塚を形成した理由としての第3に、「広島湾岸、ことに岩国近辺に多く分布する有史時代の台地性貝塚も同様漁具がなく、しかもこの地方では明治以後でも漁船の際には煙作民が山を越えて海岸に貝を探りに来ていたという事例」を挙げている。

このように高地性遺跡の性格について、政治的・軍事的機能以外に造成される可能性のあ

たことを指摘している。そして高地性集落出現の原因について、「自然環境の側にあるのか、人間的条件に起因するのか」といったきわめて重要な提言を行ない、問題追求の方法として、「高地性集落の出現とその後の消長過程の中に解明を見出すことができそうである」と提言されたのである。

小野氏は高地性集落への視点として、沖積低地での水田可耕地の飽和と人口増加から、高所開発の必要性と、鉄製工具の出現による山地開墾の容易化と木製耕具の量産という見解と同時に、防衛上の政治的・軍事的要因を挙げながら、それは集落を高地に押し上げた原因の一部であるが、「高所に現われっぱなしではなく、出現と消滅を繰返している」のであって、この現象の中には、集落立地の垂直的遷移と水平的移動による回帰的居住の可能性とが考えられるし、二つの場合を仮定し、その真否を検討しなければならない、と新しい見解により今後への指向を示されている。

このような高地性貝塚集落の存在があることは、高地性遺跡そのものが单一の目的と機能をもった遺跡であるとする決定的な判断をするには、なお十分な検討を要するであろう。

(4)

田辺昭三、佐原真嗣氏は、高地性集落の年代及びその機能として、成立年代と存続期間を検討した結果、第2様式・第4様式からはじまるものもあるが、主流をなすものは第3様式の時期から出現するものが多く、第4様式まで存続する。また第2様式からはじまるものでも、規模が拡大するのは第3様式からで、終焉の時期は第5様式まで存続するものもあるが、多数のものは第4様式で終わるもの、あるいはさびれる傾向があるとし、高地性集落の問題は、第3様式から第4様式の時期における畿内を中心とした歴史のうねりのなかで考えなければならない、と述べられたことがある。そして、その性格については、「畿内における中期の石製武器は、量的にも質的にも、軍事的性格を積極的に論ずるにたる十分な存在となっている」とし、「高地性遺跡のなかには、防砦・見張台・烽台などの特殊遺跡も含まれているだろう」とされた。

その直後の昭和43年、森浩一・鈴木博司氏らによって調査された、大阪府和泉市觀音寺山遺跡では二つの丘陵上に173戸の窓穴住居址群を検出し、また中央の丘陵には2本のV字形の溝(幅3m以上・深さ約2m、幅約6m・深さ約2m)が集落をめぐっていることがわかった。これについて森浩一氏は、遺跡の立地と大溝と住居址・出土遺物や同じ時期の高地性集落との対比から、3世紀の倭國大乱がもたらした防禦的機能をもつ高地性集落であるとの見解を述べられた。山田良三氏らによる奈良県天理市東大寺山遺跡において、周濠をもつ弥生後期の高地性遺跡の発掘調査が実施されるに及んで、大和地方におけるこの時期の事例が認められるようになつた。なかでも觀音寺山遺跡のその機能と性格について、顕著な防禦的構造などの実態より、2世紀の大乱の相関性を想定し、昭和44年には石部正志氏はこれをうけて所見を述べら

れたことがある。⁽¹⁰⁾

翌昭和45年には瀬川芳則氏は、北河内地方における鷹塚山遺跡・星ヶ丘遺跡などの調査成果をもとに、「当地域における丘陵性の高地性集落出現の理由のひとつに、居住性の問題をあげておきたい」として、田ノ口山出土の炭化豆種実の出土例をもとに、「すでに畑作を知っている人々であり、同時に丘陵直下の低湿地が、丘陵上の集落の経営権・占有権に属する耕作地であったであろうことも指摘しておきたい」と述べている。

このように、昭和43年から45年の間に、畿内地方における弥生後期の高地性遺跡の遺存が確認されるようになった。こうした過程をふまえて石野博信氏は昭和48年、先きに発表された田辺・佐原両氏の論考に対して、畿内地方における弥生後期の高地性集落が数多く検出された段階ではその説が成立し難いとし、森・石部両氏によって提起された高地性集落の意義を、「弥生時代の動乱を2時期に分けて、時期別にとらえようとする方向は、当然のことながら正しい」と評価した。⁽¹¹⁾

その後においても高地性遺跡の検出が続き、新しい課題が呈示された。これについて石野氏は弥生時代の高地性集落が、遺跡の立地と機能（軍事性）の認識から「高城」という用語で表現した。⁽¹²⁾そして弥生前期の北九州にみられる板付遺跡や、兵庫県尼崎市田能遺跡など低地の農耕集落でも周濠は存在し、播磨吉田遺跡や片山遺跡などの丘陵上の立地にある場合でも、周濠をもたないということを挙げ、これらの周濠は、「農耕地の排水を主目的とした施設である」と考え、弥生中期にいたって典型的な『高城』が出現するとする。瀬戸内における中期の高地性集落は高城ではあるが、内容的には、「日常生活は平時の生産活動を行ない得る集落、言いかえれば、生産によって自活できる集落」であるとする。それに対して、後期に出現する高地性集落は、その分布範囲が狭まり、旧畿内とその周辺に限定され、「微量の中期弥生式土器をともなうことはあるが、遺構のすべては弥生時代後期のものであり、おおむね後期前半に属する」と把握し、「古墳時代前期の高城は再び拡散する」ということを指摘した。

こうした理解に基づいて、その歴史的意味を三つの段階にまとめ、第1段階を弥生中期（第3様式（新）～第4様式）とし、関東以西を包みこんだ2世紀代の汎日本的な争乱（倭國大乱）、第2段階を弥生時代後期（第5様式の前半～中頃）と比定し、畿内を中心とする政権形成にかかる3世紀の争乱、第3段階を古墳時代前期（庄内式と布留I式）を4世紀の政権による全國平定の過程にみる抗争を反映するものであるとされた。

このあとをうけて都出比呂志氏は昭和49年3月に、畿内第5様式及びそれ以後の土器の細分と地域性・成形原理・土器の移動等に新しい見解を述べたあと、淀川水系における政治的同盟の問題の一つとして高地性集落とその機能について論述された。その中で淀川水系の高地性集落にはA・B二つの類型に分れるとして、Bタイプの遺跡が眺望の立地にあることから洪水を避けるといったことは言い切れないし、また分村や畑作説・祭祀遺跡説が成立し難いことを指摘して「中国の史書が伝える倭國大乱とを結びつけてA軍事的緊張との関係を考える説はもっと

も蓋然性が高い」とされる。濠や土堤は高・低地性の集落にも防禦施設として有したものであり、高地性固有のものと考る必要がないことにふまえて、高地性集落の固有なものは高い、見通しのきく立地ということから『見張る』という機能をもつものであり、同時にそれによって得た情報を伝えるという機能がともなわなければならないと考えられた。

そして、森・石部・石野氏らによって提起された倭國大乱の記録が2回記録されていることから、高地性集落を中期と後期に分離する考え方に対して、淀川水系の遺跡の土器形式による年代を示して、「弥生時代の高地性集落の盛行時期を2段階に明確に分離することはむずかしい」とし、「ただ淀川水系では第5様式（中）と（新）に新しく現われる高地性集落が多いことに注意しておいてよい」と述べられている。そして「高地性集落は、いつかの時点で中断するを考えるよりも、（先述のように）一貫して存続していたのではないか。それが時には吉備などの地域単位に限る通信手段になったのであろう」とされる。

(5)

ところで、ここ1～2年の間にも、高地性遺跡についての論考や解説が発表されており、要約して次に挙げてみることとする。

小野忠熙氏は『日本考古学の現状と課題』（昭和49年刊）の中で高地集落（高位集落）を「高山集落」と「高地性集落」とに分け、さらに後者を「山地性集落」と「高位台地性集落」とに分け、これらの遺跡は水田經營と低地居住という弥生時代の趨勢に反し、通則を否定する異状な集落の跡ととらえ、長く高地に営まれたもの、短期間に出現して間もなく姿を消したもの、高地の同じ場所に2回にわたって間欠的に居住したものなどがあるとし、また垂直的遷移傾向型としてとらえ、その出現の文化小期を、第Ⅰ期耕作に閃連をもつ縄文晩期、第Ⅱ（Ⅰ期は耕植？）期弥生前中期、第Ⅲ期を弥生中期ないし中期末・後期初頭、第Ⅳ期を弥生後中期・土師器初頭の4回とする。さらに「敵対的集団の見張所や山寨などの軍事的集落もあったであろうことが考えられる」とし、高地性貝塚が多く、石庭丁・石礫の出土は「軍事的機能に従事する駐屯者たちの補食的行為程度の漁りや畑作や狩りが行なわれていた証拠とみてよいであろう」とする。またその規模については「防衛や施肥依存の落村遺跡にみられる高地性集落跡は規模が小さい」とほぼ一般的な論述を行っている。

佐原真・金闇恕氏は『古代史発掘①』（昭和50年1月刊）で「中期後半には、瀬戸内海沿岸地方に標高100mをこえる高地性集落が出現している。當時鐵器の普及と人口の増加によって、飛躍的にすすめられた耕地の拡大は当然ながら、土地の獲得や水利をめぐる争いを激化させた。集団の間では、集落間で、あるいはまた地域間で対立・抗争が激しくなり、軍事的な緊張が高まった。その時、生活の不便をしのんでまでも、眺望のひらけた居住地が必要となったのである」。

「瀬戸内海沿岸地方に、軍事的性格をおびた高地性集落が発達したのは、西日本東部の広大

な地域が、統合へむかう争いの禍中に入ったことを物語っている。石の武器は、中期末〔後期初〕になると姿を消し、代って後期〔後期中頃〕には鉄器が普及する。そして、高地性集落の大多数はこの頃姿を消しており（〔注〕後期につづく高地性集落も若干はあるが、一方、後期に新たに成立する高地性集落もある）後期〔後期中頃〕に始まる集落の多くは、再び低地に立地している。だが、統合への争いは終ったわけではない。石器の消滅は中期末～後期初〔後期初～中頃〕が統合への過程で一つの画期をなしたこと意味している」と主張される。

工楽普通氏も同書で高地性集落の問題にふれ「中期後半の高地落集落のあり方は低地のものとあまり変わりないが、見張台として絶好であり、また戸外の炉は烽に使ったとみられることから海上交通の要衝を見張る軍事的性格をもった城塞と考えられている。……そしてそのほとんどは後期に継続することなく中期をもって終っている。このほか畿内の淀川水系を中心とした各地には中期終りから後期にかけてつづく高地性集落がある。いずれも見通のきく場所にあり、烽をあげて連絡をとりあう集落という見方がある」と述べている。

かつて倭国大乱との関係を主張され、後に防禦と農耕を主張された小野氏は「見張りや山寨」とし、高地性貝塚遺跡については「駐屯者の補食的行為程度」とかなり主張を変えている。また佐原氏は紫雲山遺跡について弥生中期の石製武器と対比して、「政治的にまとまっている地域集団が、征服・連合というかたちでより大きい政治的単位に統合されていく過程での対立・抗争の禍中の地域」との論述に対して、後には「土地の獲得や水利をめぐる争い」とか、「軍事的緊張」といった表現を用いている。また工楽氏所説は都出氏の所見をそのまま紹介されているに過ぎない。

これに対して石野博信氏は『歴史公論2』（昭和51年2月刊）で「3世紀の高城と水城」の所説を都出氏の批判にもかかわらず大体保持しながらも、前編第3章総括に紹介した如く、倭国大乱から統一国家への過程にみられる2・3世紀の動乱、そして4世紀の統一政権の出現としてとらえている。

(6)

高地性遺跡に対する見解が、その発生の時期・目的・機能、あるいは弥生後期における目的・機能について多くの研究者が論考を試みられた。戦後小野忠應氏らを中心に展開された高地性遺跡が、倭国大乱と関連させたことによって、大きな関心がもたらされたといえる。それ以来今日に至るまで約20余年、高地性集落に関する画期的な紫雲山遺跡や会下山遺跡の報告書が刊行されて以後僅か10余年の間に弥生中期のみでなく、後期から古墳時代に至るまでの遺跡が確認され、この課題はますます深化した。ここに挙げた如くその間の論考を通して、高地性集落の機能が防禦的・軍事的機能をもち、倭国大乱、邪馬台國すなわち卑弥呼から垂与の時代、さらに大和政権の確立まで、その歴史的背景のなかで発生し、消滅していったとする見解が、やはり主流を占めているものと考えられる。

ところで、「後漢書」倭伝の、「桓・靈の間、倭国大いに乱れ、こもごも相攻伐し歴年主なし」と見える「倭国大乱」とは、一体如何なるものであったのだろう。恐らくこの倭国大乱の内容は明らかにすることはできないであろう。またこの「倭国」というのはどのような範囲であるのかということも不明である。倭国の範囲、大乱の様相、その乱がどの程度の規模のものであったかを検討しないで高地性集落をすべてこれと結びつけることにはいささかの危惧をまぬがれないであろう。

石野氏の設定した高地性集落の第1段階⁽¹⁾⁽²⁾、すなわち弥生時代中期中葉にはじまり、中期末に終る時期で、その分布が本州西端から関東にかけて分布する。そしてこの時期の高地性集落の成立が、「倭国大乱に当たることが可能である」とされる。そしてこの動乱が「関東以西の地域をまき込み、そのなかから女王卑弥呼が擁立されたとしても」と推定される。しかし、この大乱の規模が、「山口県から神奈川県にいたる地域が渾中にまき込まれた」と断定されるが果して関東以西、本州西端までの広範囲に等しく展開されたかどうかは定かでない。加えて「この整理が仮に事実に近いものとしても、各動乱の主体者は誰かという問題は残されている」とされるが、それよりも「この動乱の中心地はどこか」という問題意識こそ高地性集落のあり方にかかわってくるものと考える。倭國の動乱というものを一瞬にして広範囲を戰火にまき込む近代戦的な感覚でとらえることにも問題があると思われる。

また第2段階の動乱を弥生後期中頃とし、その分布は近畿地方に限られるという事実を是認し、これが「卑弥呼の没後、壱与が登場するまでの動乱に対応するものと考えられる」と設定した場合、それはあくまで畿内の動乱と限定されることになり一分布は近畿地方に限られるのであるから一、その場合邪馬台国⁽³⁾の所在とどのようにかわってくるのかという問題に対しての観点を明確にしなければならない。若し仮に邪馬台国九州説の立場をとるのであれば、邪馬台国は九州にあって、その動乱は畿内でのみ起ったという矛盾が生じるからである。そのためにはやはり邪馬台国畿内説の根拠を明示しなければこの論法は成立しないことになる。

したがって弥生後期における高地性集落を3世紀の動乱と結びつけるならば、弥生後期の高地性集落が、畿内とその周辺にのみ分布するという事実との関連を明確にした上で論をすすめなければならない。単に防衛的機能ということのみから、安易に大乱と結びつけてはいけないと思う（森浩一氏は慎重に「倭國の大乱的」という用語を使用されている）。換言すればときにみられる見解のなかで、邪馬台国九州説を述べながら、一方において畿内にみられる弥生後期の高地性集落の発生を、卑弥呼とそれ以後の動乱に結びつけることは矛盾することになるし、また九州にも畿内にも少なくない弥生中期の高地性集落を直接倭国大乱と結びつけることにも矛盾がある。大乱候渦の中心であったところに高地性集落がほとんどみられないという事実をどう解釈するかということになる。

ひるがえて大師山遺跡をみると、その立地からみて、一般的概念で理解できる高地性集落を考えることは必ず間違いない。そうするとその時期は、弥生後期の中頃の時期を中心として

考えなければならないであろう。しかしながら発掘調査によって確め得た住居址はわずか2棟だけである。

大師山遺跡の地形的条件を観察するならば大集落の営まれた可能性は少ない。そして同時に会下山遺跡で指摘されたような「倭政権誕生の胎動期における大阪湾沿岸の海上支配権と何らかの関係のある首長層」ということは全く考えられない。この見解は大師山遺跡のみならず、海に面しない奈良県下の高地性集落一たとえば天理市東大寺山遺跡や橿原市忌部山遺跡など一にも共通することである。したがって、会下山遺跡での解釈はその遺跡と同じ海に面する遺跡である場合にはそうした可能性はあるとしても、それでは理解できない遺跡もあることは、普遍的な解釈ではないということになる。

また郡山氏や工業氏が指摘する如く、淀川流域における見張台及至は烽的性格をこの大師山遺跡にあてることはやはり無理かとも思われる。図示された遺跡相互間の通信的機能の仮定は、今のところ大師山遺跡にも該当させることはできない。

小野氏のいう防禦の目的をもち同時に烽烟的な集落を考えることのできる可能性はあるにしても、それを具体的に示す資料は皆無といえる。したがって肯定することもできなければ否定することもできない。

以上みてきた如く、高地性集落の形成の目的なり、その機能はなお多くの確定できない問題を含むものであって、早急に結論づけることは不可能であろう。敢てそれを解釈しようとすれば、それは推論としては一般的の閃心を呼びかも知れないが、多分に推理・想像的な要素をもつものであるとしか言えない。早急な結論を求めるよりも、やはり今後の資料の増加を期待するほかないであろう。

〔註〕

1. 森本六爾「低地性遺跡と農業」（大和の高地遺跡と低地遺跡の類）『日本原始農業』昭和8年『日本農耕文化の起源』所収
2. 小野忠應『鳥田川』山口大学島田川遺跡学術調査団 昭和28年
小野忠應「山口県における弥生高位性集落とその機能」『山口地理学年報』2 昭和33年
小野忠應「瀬戸内地方における弥生式高塗性集落とその機能」『考古学研究』第6卷第2号 昭和34年
3. 小林行蔵・佐原 真「紫雲出」説明町文化財保護委員会 昭和39年
4. 村川行弘・石野博信「会下山遺跡」兵庫県芦城市教育委員会 昭和39年
5. 小野忠應外「北迫遺跡」「宇部の遺跡」宇部市域遺跡群学術調査研究報告 昭和43年
6. 田辺昭三・佐原真「弥生文化の発展と地域性—近畿」『日本の考古学』昭和41年
7. 森浩一・鈴木博司「觀音寺山遺跡調査報告」觀音寺山遺跡調査団 昭和43年
森浩一「觀音寺山遺跡」『日本古代遺跡便覧』昭和48年
8. 山田良三「東大寺山古墳群東部地区の調査」『奈良県観光』昭和44年
9. 石部正志「近畿弥生文化の成立と発展に関する若干の問題提起」『考古学研究』第15巻4号 昭和44年
10. 濑川芳則「高地性集落をめぐる二・三の考察」『古代学研究』58 昭和45年
11. 石野博信「3世紀の高城と水城」『古代学研究』68 昭和48年

12. 都出比昌志「古墳出現前夜の集団関係」
『考古学研究』第20巻4号 昭和49年
13. 小野忠熙「集落跡」『日本考古学の現状と
課題』昭和49年
14. 佐原真・金岡怒「住居と集落」「統合への
争い」『古代史発掘④』 昭和50年
15. 工楽善通「住居の形と施設」『古代史発掘
①』 昭和50年
16. 石野博信「高地性集落のもつ意味」『歴史
公論2』昭和51年

THE EXCAVATIONS OF THE DAISHIYAMA KOFUN ANCIENT TOMB AND DAISHIYAMA RELAINS

(1) THE DAISHIYAMA KOFUN ANCIENT TOMB

I. A brief Report on the Progress of the Investigations

The Daishiyama Kofun is located on a hill, popularly called Daishiyama, at Mikkai-cho, Kawachi-Nagano-shi, Osaka Prefecture.

Formerly there was a temple building in a pine grove on Daishiyama Hill, and in the 5th year of Showa (1930), when the temple precincts were expanded, a 'Kofun' (an ancient sepulchral mound) was accidentally discovered, and some burial accessories were excavated. Hence the place was named the Daishiyama Kofun. Many of those remains unearthed at the time were such stone-made articles as 'ishigushiro' (stone armlets), 'sharinseki' (wheel-shaped stone bracelets), and so on. Thus the tomb, as one of the typical old-style tomb, has become the object of public attention in academic circles.

The 'mound' (covering earth laid on the mound), however, had already been scraped off and the place itself showed nothing of its former shape as an ancient tomb. Thus after the completion of the investigation, a monument was erected at the point where the main part of the tomb was supposed to have been, and by means of this, the site of the ancient tomb had been marked. It was only to such an extent that the site of the Kofun had been generally known. Quite recently, however, the wooded land close to the tomb was purchased by the Nissei Real Estate Company Limited and later the neighboring land was proposed as the site for the integrated junior high school of Kawachi-Nagano City.

The Social Education Section of the Kawachi-Nagano City Board of Education, which is in charge of the administration of cultural properties, was worried, irresolute as to whether the land in question should be preserved or developed. They continued negotiations with the real estate company asking them to take care so that the site might not be destroyed without any consideration. On the other hand, the Social Education Section discussed the matter with the authorities concerned such as the Agency for Cultural Affairs, the Osaka Prefecture Board of Education. As a result, it was decided for the remaining land to be excavated and surveyed. Thus the investigation was carried out with the cooperation of the Archaeology Seminar of the Faculty of Letters of Kansai University. The result was that some matters which had so far been indistinct became clear at last. We believe we have been able to contribute our small efforts to academic circles. We would like to make a summarized report of the investigations here.

2. The Geographical Position

The Daishiyama Kofun is located on a hill about 200 meters above sea level. The hill branches off to the west from the Kongo Mountain Range and is about 500 meters to the east of Mikkai-cho Station on the 'Nankai Railways' Koya Line.

The western side of this hill is steep, sloping down to the right bank of the Ishikawa River. The north western side of the hilltop commands a fine view of the valley of the Ishikawa River and on fine days the distant view of the Rokko Range and Awajishima Island can

obtained beyond Osaka Bay. Thus the prospect from the hill is superb.

The Ishikawa River, which follows a winding course at the foot of the hill, joins the Iwami, Amami, Kagata, and Takamuku Rivers and flows to the north through the City of Tondabayashi emptying into the Yamato River in the end.

These rivers are badly washed out by the water and they form ravines everywhere to the south of Mikkaichi-cho. The ravines are V-shaped and present a topography characteristic of the so-called "Prime of Life" mountain district.

The Daishiyama Kofun is located on one of the hills facing the Ishikawa River.

3. The Historical Surroundings

As notable prehistoric relics in the valley of the Ishikawa River, such relics as Kowu, Nishigori, Kishi and so on may be mentioned. In the middle of the Kofun period (Tumulus Age), the Furuichi Kofun Group was constructed with the largest Ojin Mausoleum as the central figure, and around the group was constructed the Tamateyama Kofun Group, which belongs to the beginning of the Tumulus Age and consists of more than 18 mounds. And the Takeyama Kofun Group was built on a hilly district to the northeast of the aforesaid Tamateyama Kofun.

In the upriver district of the Ishikawa River, the following 'kofun' are located: the Nabezuka Kofun, from which were excavated stone-made imitations as well as 'tanko' (shorter-sized armors), Kawanishi Kofun, and Mansi Kofun, which is located on the other side of the Nabezuka Kofun across the Ishikawa River. Two bronze mirrors were excavated from the Mansi Kofun. In addition to these mounds, there is a unique 'soen-fun' (a double circular mound) called Kanayama Kofun. The Daishiyama Kofun is in the upriver region of the Ishikawa River apart from those 'kofun' groups.

Judging from its surrounding relics and 'kofun' groups, the Ishikawa Valley should be regarded as a noteworthy region in ancient history, and particularly the Daishiyama Kofun, with its many stone articles as well as many bronze mirrors unearthed at the time of the aforesaid construction work, has an important meaning from an archaeological point of view.

4. The Results of the Investigation in 1930

In the 5th year of Showa (1930), quite a few burial accessories were discovered at the commonly called Daishiyama Kofun and an investigation into part of the tomb was conducted.

According to the report of the survey made at that time, the shape of the mound was supposed to have been an 'empun' (a hemi-spherical mound), and the main burial part to have been made up of 'nendo kaku' (a box of clay encasing a coffin). Some fragments of wooden coffins were unearthed from the 'kaku.' The following are the list of the remains excavated at the time.

A Bosei Naiko Kamon Kyo (bronze mirror)	1 Unit (15.5cm in diameter)
Jasper-made Hollowed Beads	8 Units
Jasper-made Kuwagata-ishi (hoe-shaped stone)	1 Unit
Jasper-made Sharin-seki (wheel-shaped stone bracelets)	16 Units
Jasper-made Ishigushiro	13 Units

(stone armlets)	
Jasper-made Spindle-shaped Wheels	4 Units
Iron Swords	10 Fragments (equal to 3 units)
Chokuto	1 Fragment
(straight sword)	
Fragments of Wooden Coffins	

The above-mentioned relics are at present preserved in the Tokyo National Museum.

Owing to the fact that the excavation of the 'kofun' and burial accessories was, as it were, made accidentally there still remain a lot of obscure points concerning the excavation conducted in the past. However, the discovery of such a large number of stone articles was unprecedented. About 20 articles of 'sharinseki' and 'ishigusiro', and fragments of wooden coffins were encased in a concrete box. Then the box was buried about the middle of the rear part of the circular mound and then was covered with concrete, which walled pieces of rocks.

A monument was erected above the place.

5. The Present Investigation

(A) The Shape of the Mound

It is said that about 100 years ago the very top of the Daishiyama Kofun was leveled by local inhabitants to make a pleasure ground for cherry blossom viewing and for dancing entertainment. The earth scraped off at that time was dumped towards the skirts of the mound and then again about 10 years later, it is said, readjustment of the land was carried out. Again in the 5th year of Showa (1930), a piece of construction work was done, resulting in the excavation of the articles similar to the above mentioned relics. At least the mound was leveled more than three times. For that reason the top of the mound became level, which made the external form the more indistinct.

However, the present actual survey of the external form showed great possibilities of the mound having been a 'zempo koen fun' (keyhole-shaped mound), although the site itself has come to look quite different from what it used to be.

The present survey was begun with a close investigation of the black soil of organic quality which showed itself at the trench walls made at the time of a confirmation survey conducted by the Board of Education of Osaka Prefecture. This survey disclosed the fact that the strata above the black soil consisted of both the piled earth which had been dumped when the mound was scraped off the top and the original earth and that the black stratum was the surface of the former mound. And as a result of measuring the black stratum which was revealed in quite a few trenches it was made clear that the mound was better shaped 'zempo koen fun' than that which the survey map drawn by measuring showed before the present investigation. On the assumption that the original form of the Daishiyama Kofun had been a keyhole-shaped mound, the fact remains that after the several pieces of construction work the earth laid around the narrow part of the mound toward the southern slope of the central part of the rear part of the round mound, became thinner. In addition to that, on the back side of the round mound, that is on the western side of this mound, the earth laid on it was very little. As a result, it is reasonable to assume that the Daishiyama Kofun was a keyhole-shaped mound having the principal axis approximately from east to west with a total length of about 60 meters.

(B) The Structure of the Main Body

Judging from the fact that the stone articles as well as 'nendo kaku' (a clay coffin casing) and red pigments have been unearthed from the earth laid on the southern slope of the rear round mound, in addition to the fragments of wooden coffins unearthed in 1930, it seems very probable that the center of the rear round mound with the clay coffin casing in it was the main body for burial.

(C) The Unearthed Relics

The relics unearthed in the present excavation survey are as follows.

- (a) Inside the concrete coffer in the center of the rear round mound. (Those buried again in 1930.)

Ishigushiro	6 Fragments
(stone armlets)	(more than 3 units)
Sharinseki	16 Fragments
(wheel-shaped stone bracelets)	(more than 5 units)

Fragments of Wooden Coffins

- (b) From the heap made of the piled earth on the southern slope of the rear round mound.

Ishigushiro	20 Fragments
Sharinseki	5 Fragments
Kudatama	1 Unit
(hollowed beads)	
Haniwa	Several Fragments
(clay images)	
Red Pigments	

(Mainly from the site where stone articles were unearthed, and from several places on its borders.)

- (c) From the heap made of the piled earth on the northern slope of the rear round mound.

Haniwa	Several Fragments
--------	-------------------

(II) THE DAISHIYAMA REMAINS

1. The Progress of the Investigation

During the investigation of the Daishiyama Kofun conducted since October, 1969, Yayoi-type earthen vessels were unearthed from the foot of the tentatively named J site. Also some Yayoi-type earthen vessels were donated by local people who had collected them before. Based on these facts it was supposed that Yayoi-type relics might also be found on the top of the Daishiyama Hills, but no remains of the Yayoi Period were found.

But in February, in the 45th year of Showa (1970), when the survey of the distribution of relics around the Daishiyama Hills was performed a cropping out of the stratum containing Yayoi-type earthen vessels was ascertained at several spots on the roads made for construction work and so after consulting with the Board of Education of Kawachi-Nagano City and Nissei Fudosan Real Estate Co. Ltd., an excavation survey was conducted from March 2nd for about two months.

The area surveyed then was the hill which extends from east to west including the Daishi-yama Kofun and J site. A trench was dug especially at the J site where many strata containing Yayoi-type vessels were found extending to the E Site. As a result, from the northwestern foot of the J site and E Site, a 'tateana-shiki jukyo' (dugout) of the later Yayoi-type was found and from the C and D Site three kilns were detected. However, no other relics were found on the hill as the surface had been scraped off to construct a road. On the other hand, when a trench was dug on the slope from where relics were supposed to issue a lot of Yayoi-type earthen vessels were unearthed from the discharged earth and at the same time peculiar remains resembling kilns were detected from the C and D Sites.

2. The Remaining Structure

(A) The Ancient Housing Sites

The № 1 Housing Site

The site is located on the level ground of the ridge lying from east to west and is supposed to have been a circular 'tateana-shiki jukyo' (dugout) (about 9 meters in diameter). Only one quarter of the site has remained to this day, having been destroyed by a road built for construction work on the north and by a ditch-like structure on the east side. This quarter having been kitchen gardens until quite recently, top part of the ancient housing site was scraped off, and the side walls peculiar to 'tateana-shiki jukyo' (dugout) were not discovered, and only by means of the surrounding ditches (about 15 centimeters in width and about 10 centimeters in depth), its structure was disclosed. There were eleven pits within the ancient housing site. A pit with a pile of ashes was discovered at the spot supposed to be the central part of the site. Also on the southern side, part of the burnt ground was discovered. Two 'Kame' (earthenware jars) which are supposed to be Kinai Yayoi-type Pottery of No. 5 Style have been unearthed from the ancient housing site. This fact probably shows that the № 1 Housing Site belonged the above-mentioned period.

On the eastern side U-shaped ditch-like remains, about 2 meters in width and about 40 centimeters in depth, extend from north to south and from the ditch one flint arrowhead of Yayoi-type and a few fragments of earthenware have been unearthed.

The № 2 Housing Site

The № 2 Housing Site was also scraped off on the surface to a great extent chiefly as a result of cultivation. Also large holes which are supposed to have been made in later days, were bored. This made it impossible to grasp the site as a whole. Especially on the north western side, even pits could not be detected.

The side walls of the ancient housing site were discovered on the southern side. They rather looked like round walls and the site is supposed to have been a square 'tateana.shiki jukyo' (dugouts) (about 9.5 meters in diameter). Part of the ditch-like remains were discovered from under the side walls. Whether the ditch-like site was part of the surrounding ditches which encircled the houses or the remaining old site of the houses when they were enlarged or reconstructed, is now under investigation. Although their organic combination is hard to be ascertained, pits were found and they remained quite close to each other, which fact shows that the the houses were rebuilt and repaired repeatedly. A few fragments which

are regarded as Yayoi-type earthenware were unearthed.

Although the time of building the ancient houses is not clear, considering all the circumstances it may be proper to think that it belongs to the period of the Kinsai No. 5 style.

(B) The Peculiar Kiln-like Ancient Sites

The sites were detected on the northern slope of the front square part of the same kofun, on the northeastern slope of C Site, on the hill of the D Site, and on the eastern slope of the same site. Excepting the fact that the site on the northeastern slope of the D Site was square, all the others were round or oval, all of which having a diameter of about one meter and a depth of 30 to 50 centimeters, and the surrounding walls all looked reddish brown after having been burnt. Inside were piled layers of ashes but no relics or burnt soil was ascertained on the bottom. The characters are not clear.

(C) The Sites of Kilns

One from the western foot of the remaining hill at the D Site and two from the eastern foot of the same site, were detected. All of them are semi-underground flat kilns with a length of two to three meters and a width of about one meter. Funnels were also found, but no ash piles remained. No relics were unearthed from inside the kilns, either. For these reasons, the time of their construction are not clear. But, their characters might have been charcoal kilns. In addition to these, three kilns were detected from the place facing the valley on the northern tip of the Daishiyama Mountain Mass. However, as the construction work for housing lots was then under way, no further investigations were made other than taking some pictures.

(D) The Unearthed Relics

Yayoi earthen vessels such as 'tsubo' (pots), 'kame' (jars) were unearthed from the № 1 Housing Site and an iron arrowhead. 'tataki-ishi' (stone implements to crush things), concave stones, and also Yayoi ware such as 'tsubo' (pots), 'kame' (jars), and so on, were unearthed from the № 2 Housing Site. However, the surface having been scraped off, most of the ware was supposed to have disappeared and so those remained were small in quantity. However, lots of Yayoi ware such as pots, jars, long-necked pots, 'takatsuki' (small one-legged tables), 'teabu-rigata dokiri' (hand-warmer-like earthenware), and so forth were unearthed from among the piled earth on the slopes of the C and D Sites. Most of those earthen vessels are of the Karako № 5 Type. Fragments of 'sueki' (earthen vessels), 'gaki' (unglazed pottery), 'haji' (unglazed plates), and so on, have been unearthed from the J Site.

(III) SUMMARY

The existence of the Daishiyama Kofun has widely been known since the excavation of its 'miko kamon kyo' (bronze mirrors), 'sharin-seki' (wheel-shaped stone bracelets), 'ishigushiro'

(stone armlets), and so on in the 5th year of Showa (1930), but most of the piled earth had been already scraped off at that time. The present survey was carried out before the scheduled construction work and as a result it was almost confirmed through the trench survey that this ancient mound which had been regarded as a round mound so far, was a 'zempo koen fun' (keyhole-shaped mound) constructed on a hill. And the number of the stone-made burial accessories has increased greatly with an addition of these newly excavated articles. Besides, Yayoi type earthenware vessels were scattered on the hills around the Daishiyama Kofun, and by excavating those parts ancient sites such as housing lots and part of the ditches and kilns and so on were detected, although their remains were very few. These excavated relics are Kinai No.5 Type Yayoi earthenware. Great importance has been attached recently to the forms of upland villages and their backgrounds. The Daishiyama Relics, judging from its conditions of location, assumes the aspect of an upland village and can be said that they have presented new materials as a result of the present excavation. Such matters have to be studied in future referring to an increasing number of similar materials. Furthermore, the connection between the old mounds which are supposed to have been constructed in the fourth century and the ancient housing sites of the later Yayoi Period, is a new subject to be studied.

図 版

図版第一 大師山古墳・大師山遺跡 景観(航空写真)



上空からみた河内長野市三日市町附近 中央が石川



同 上(拡大)

図版第二 大師山古墳・大師山遺跡 景観



大師山古墳・大師山遺跡

西方よりみた大師山古墳・大師山遺跡

図版第三 大師山古墳 調査前の状態



東方よりみた古墳



墳頂の古墳表示

図版第四 大師山古墳 古墳表示内の木棺



木棺片の保存状況



同上

図版第五 大師山古墳 景観（航空写真）



上空よりみた調査中の古墳（上が東）

図版第六 大師山古墳



J地区よりみた調査中の古墳



東よりみた前方部調査状況



左くびれ部の調査状況



後円部に設定したトレンチNo.5

図版第八

大師山古墳 墳丘土層断面



墳丘上の土砂堆積状況 上・下後円部 中・南側くびれ部

圖版第九 大師山古墳 遺物出土狀態



埴輪出土狀態



石鉗出土狀態

図版第一〇 大師山遺跡 J 地区

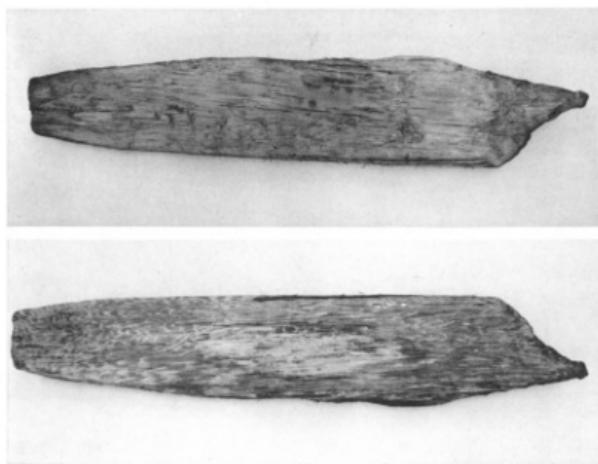


東よりみた J 地区

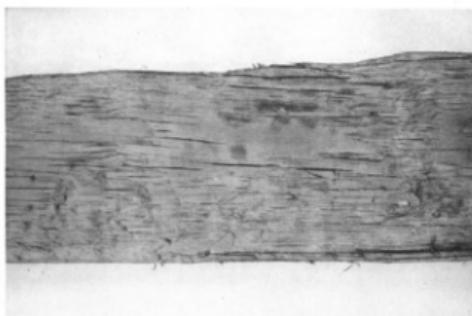


調査中の J 地区

図版第一一 大師山古墳 出土木棺



出土木棺 上が凹面、下が凸面

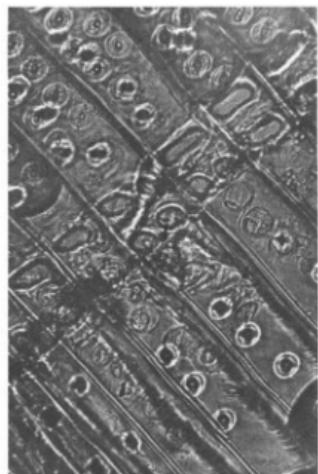


同上細部

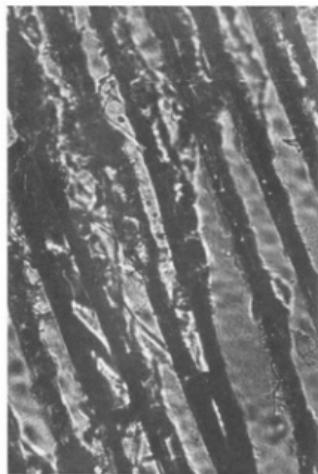
圖版第一二 大師山古墳 出土木棺顯微鏡寫真



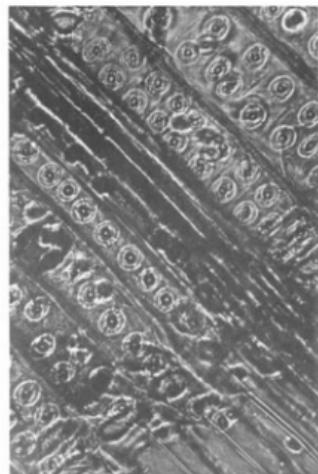
横断面切片 $\times 240$



板目切片 $\times 240$



板目切片 $\times 240$

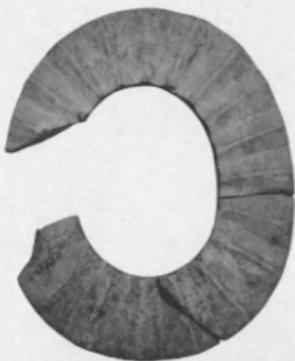


板目切片 $\times 240$

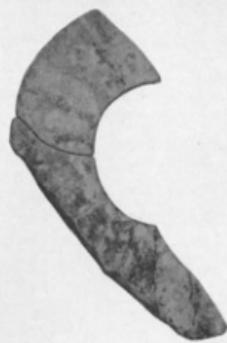
圖版第一三 大師山古墳 出土石製品



1



2



3



4

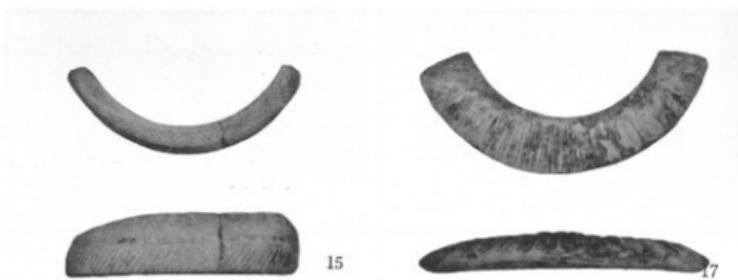
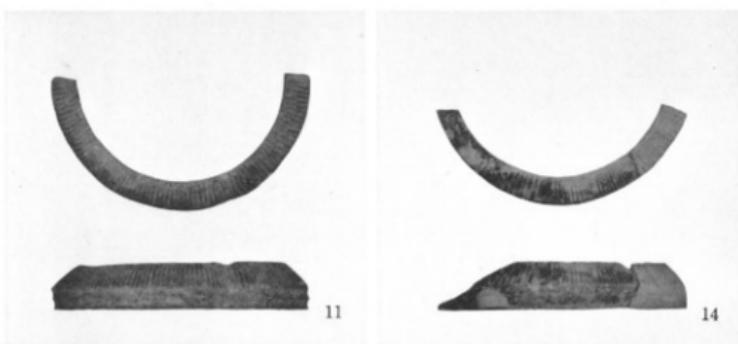
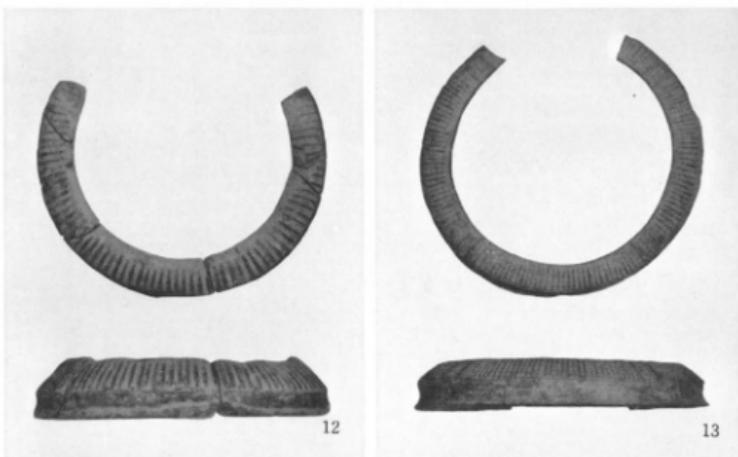


5



10

圖版第一四 大師山古墳 出土石製品



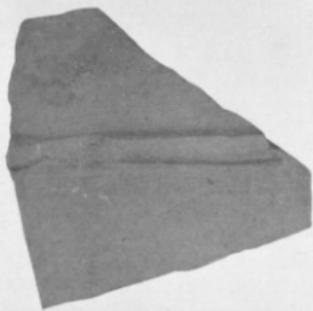
圖版第一五 大師山古墳 出土石製品・埴輪



18



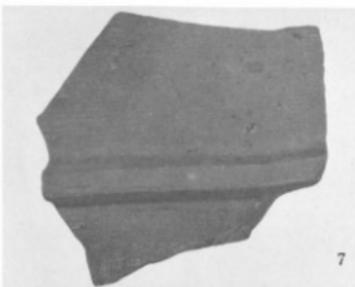
19



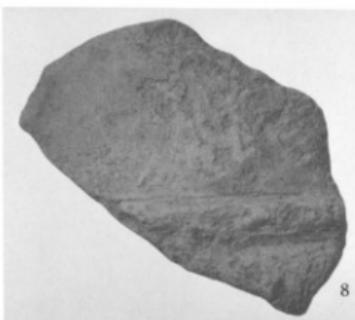
6



9



7



8



10

圖版第一六 大師山古墳 出土鏡・石製品（東京国立博物館藏）



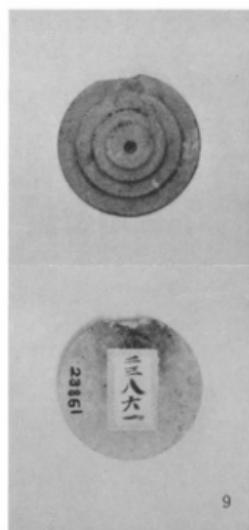
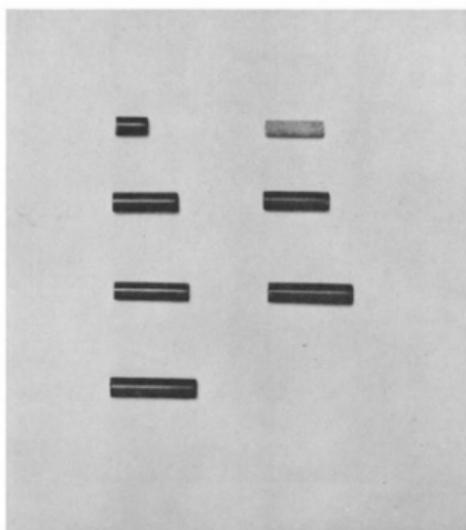
内行花纹鏡



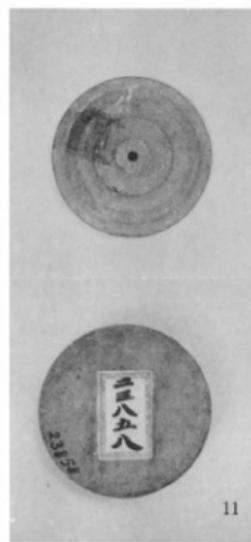
鏡形石

圖版第一七 大師山古墳
出土石製品（東京國立博物館藏）

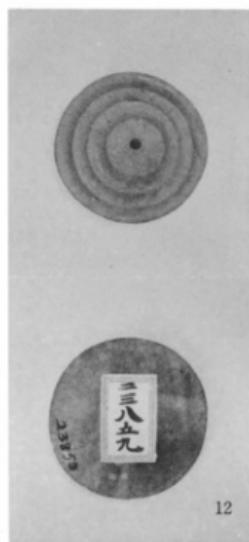
9



10

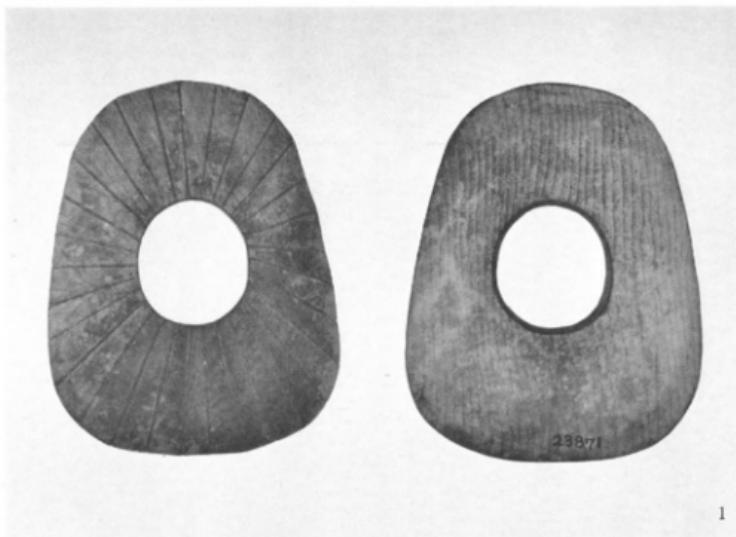


11

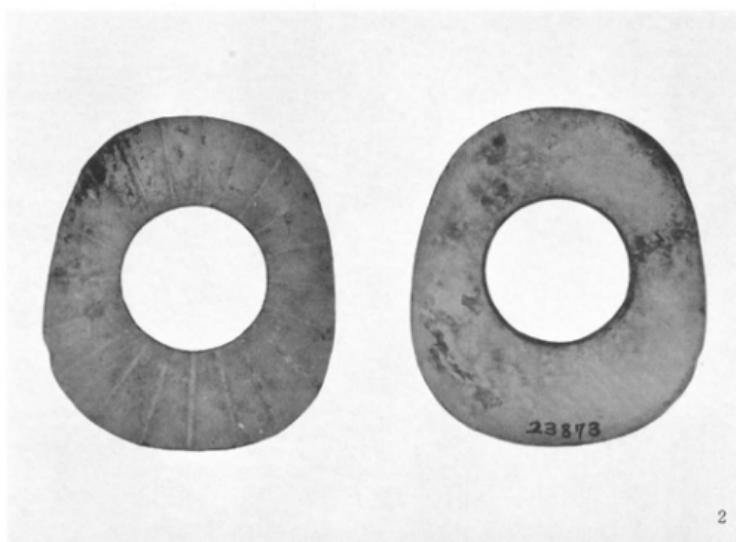


12

圖版第一八 大師山古墳 出土石製器（東京国立博物館藏）

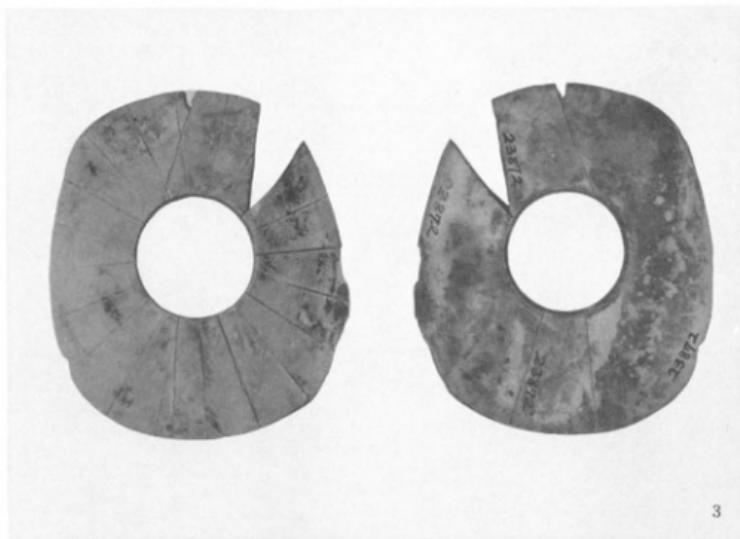


1



2

圖版第一九 大師山古墳 出土石製品（東京國立博物館藏）

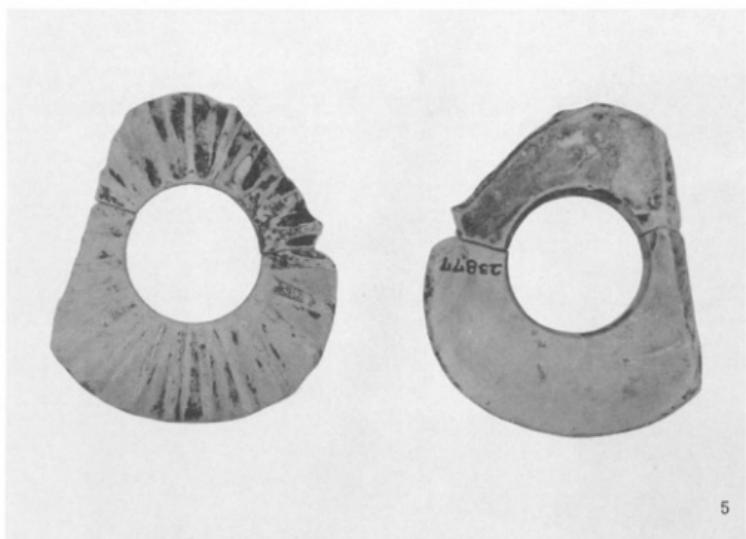


3

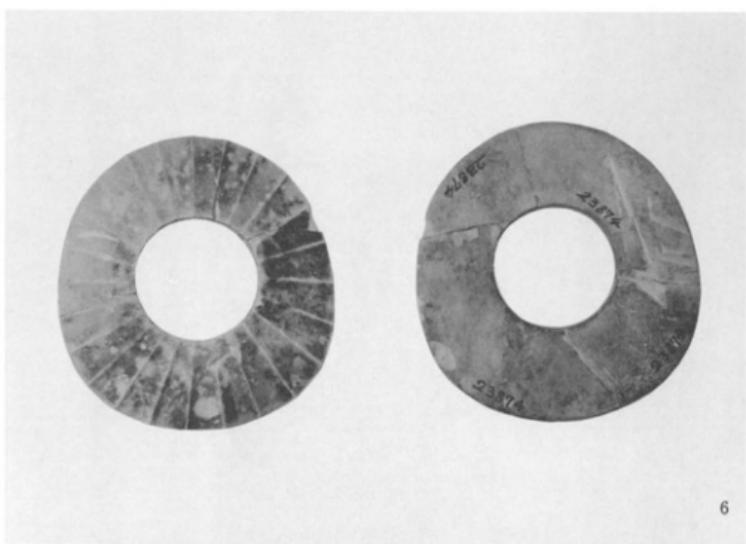


4

図版第二〇 大師山古墳 出土石製品（東京国立博物館藏）



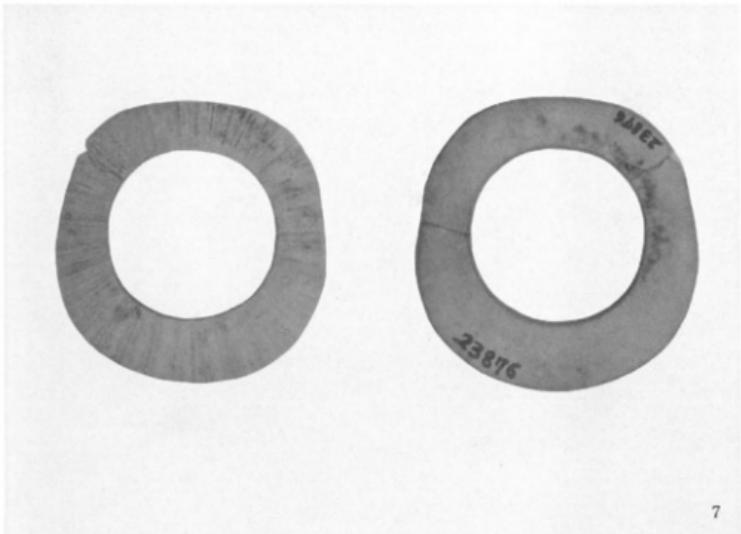
5



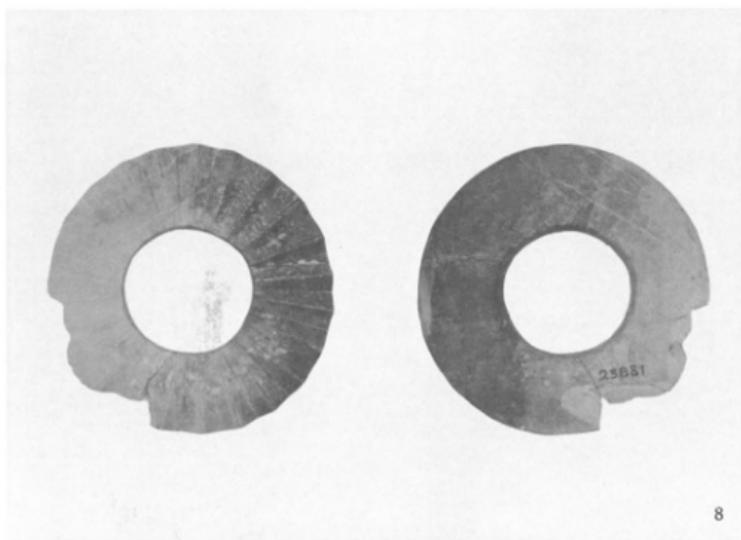
6

圖版第二一 大師山古墳 出土石製品（東京國立博物館藏）

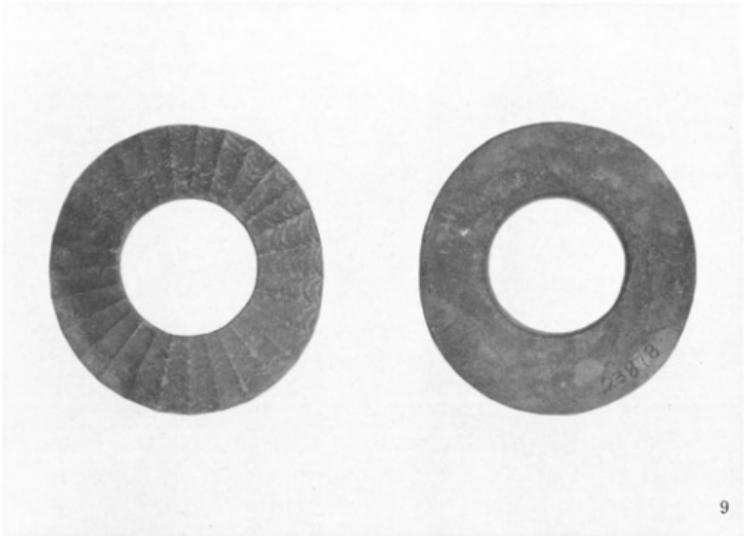
7



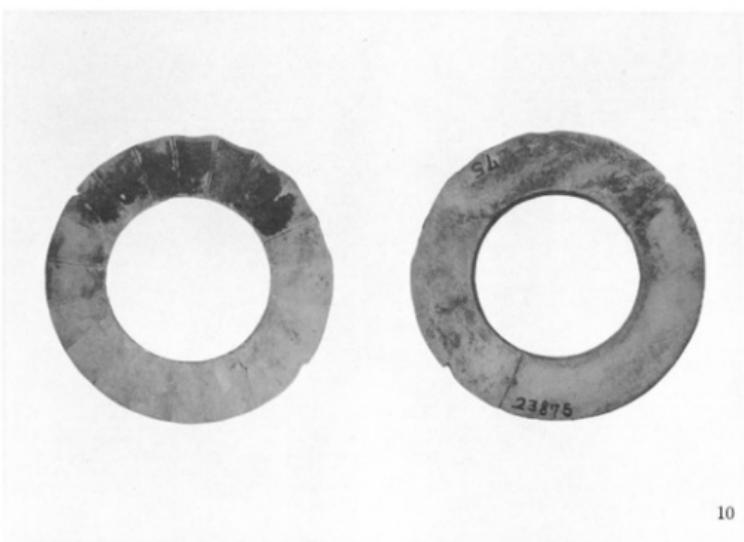
8



圖版第二二 大師山古墳 出土石製品（東京國立博物館藏）

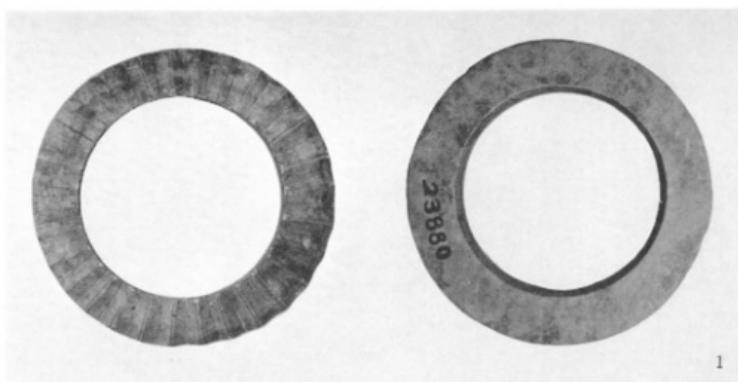


9

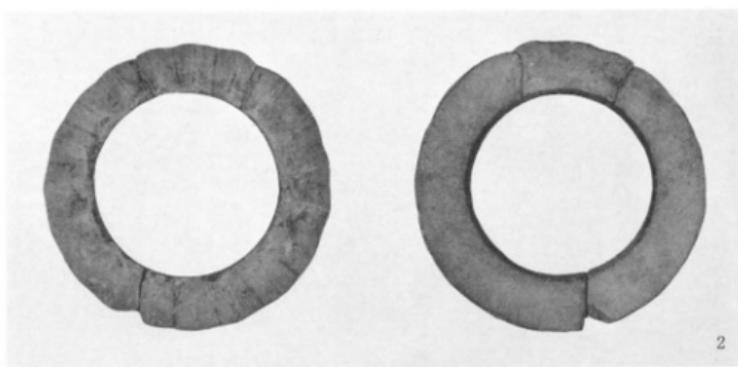


10

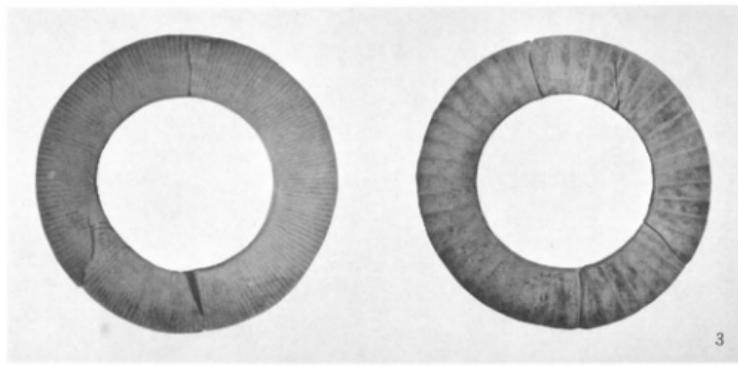
圖版第二三 大師山古墳 出土石製品（東京國立博物館藏）



1

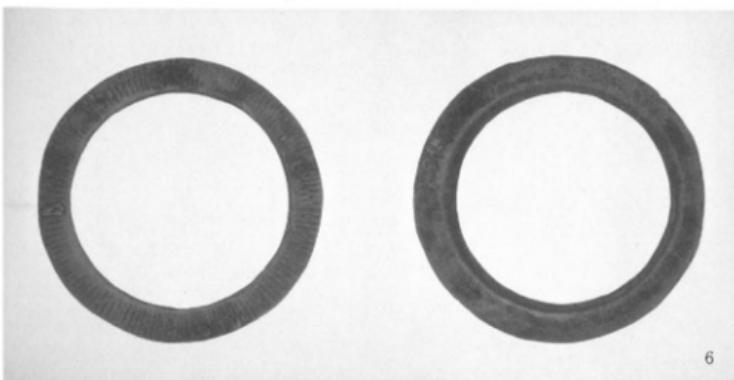
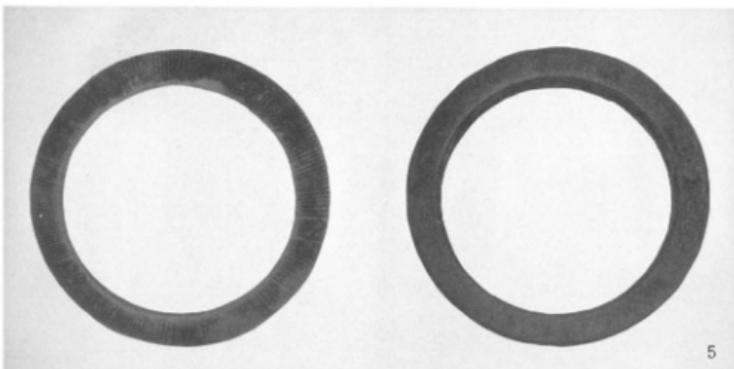
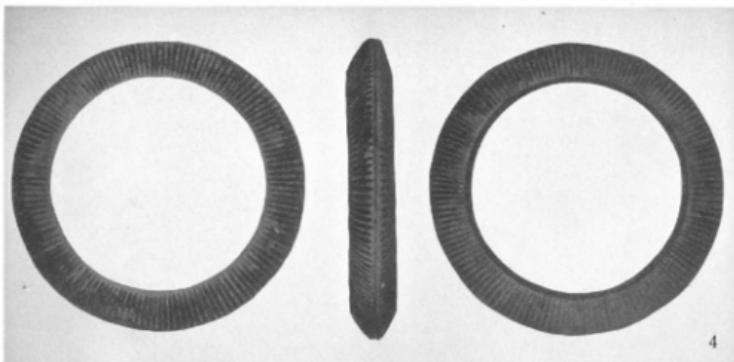


2

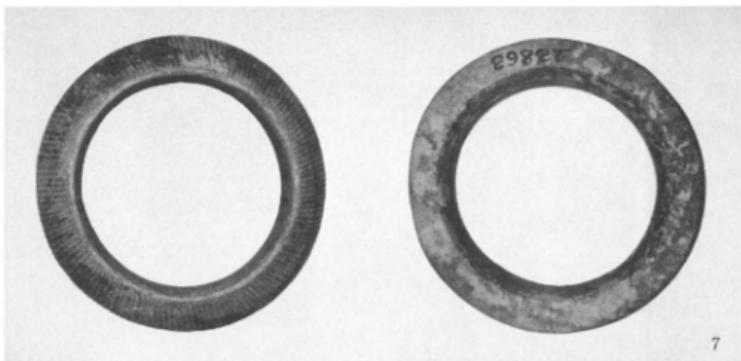


3

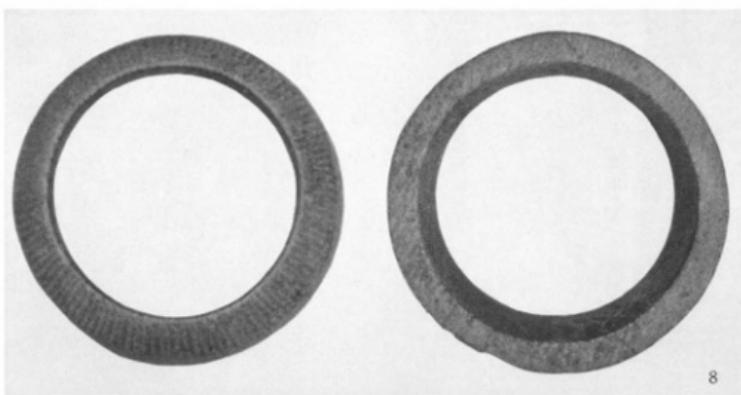
圖版第二四 大師山古墳 出土石製品（東京國立博物館藏）



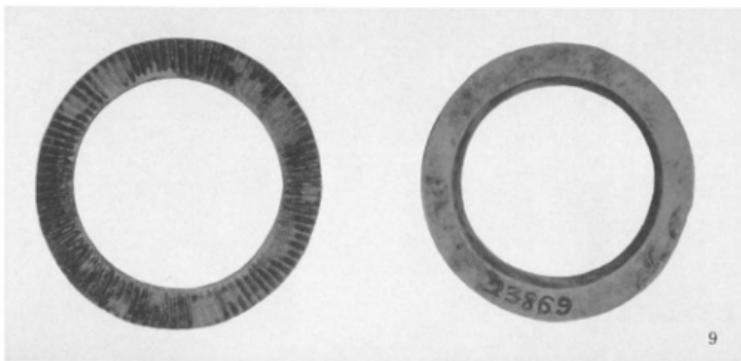
圖版第二五 大師山古墳 出土石製品（東京国立博物館藏）



7



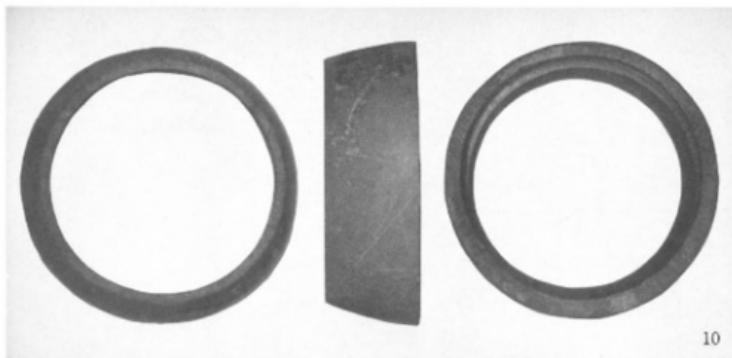
8



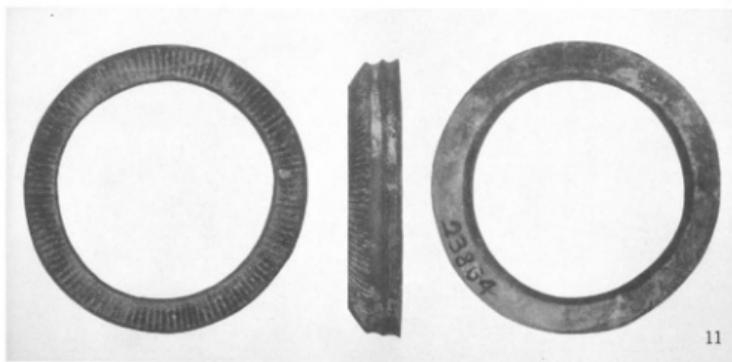
9

圖版第二六 大師山古墳

出土石製品（東京國立博物館藏）・J 地区出土土器

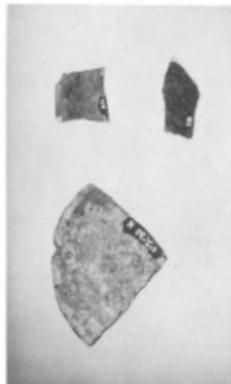


10



11

J 地区



瓦器・土器



弥生式土器

圖版第二七 大師山遺跡 一號住居址



1号住居址断面(調査前)



東よりみた1号住居址



1号住居址と溝状遺構



西よりみた1号住居址

圖版第二九 大師山遺跡 一號住居址



壺形土器出土狀態



壺形土器出土狀態

図版第三〇 大師山遺跡 溝状遺構



溝内堆積土の状況



南よりみた完堀された溝状遺構

図版第三一 大師山遺跡 二号住居址



西よりみた2号住居址



床面と柱穴群

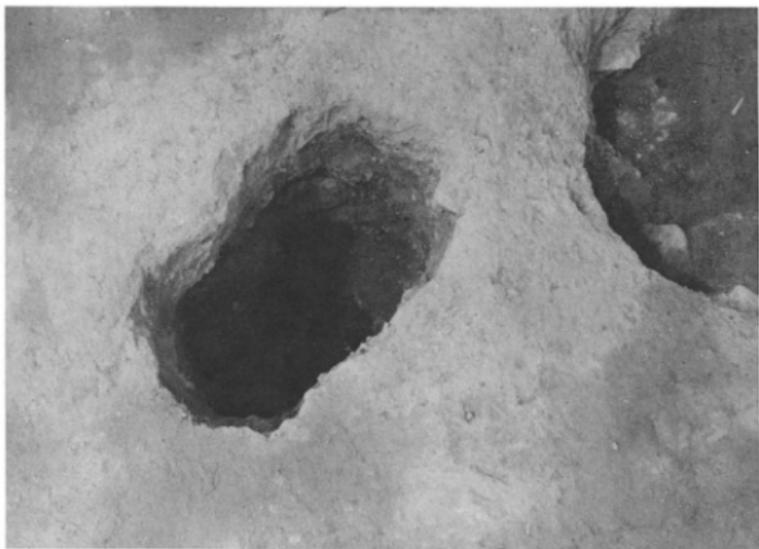
図版第三二 大師山遺跡 二号住居址



住居址のコーナー



遺構の重複状況



柱 穴



柱 穴



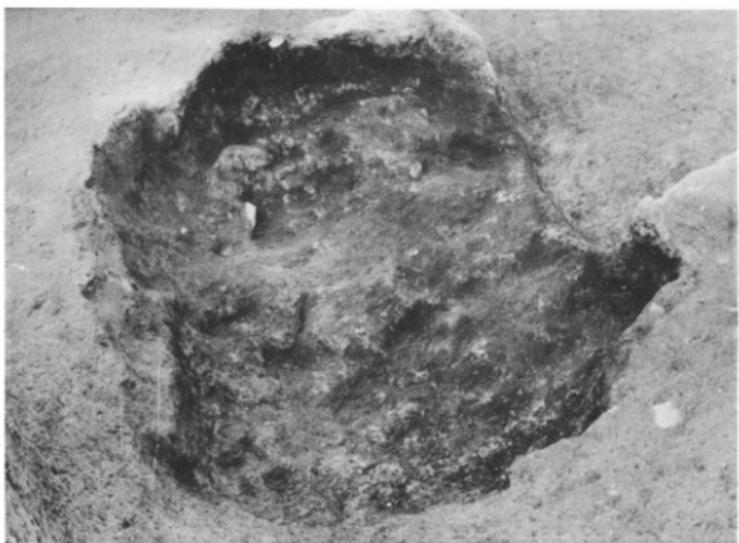
露出した1号焼土壙



上からみた1号焼土壙



西よりみた 2号焼土壙



東よりみた 2号焼土壙

図版第三六 大師山遺跡 三号焼土壙



東よりみた三号焼土壙



南よりみた3号焼土壙

図版第三七 大師山遺跡 四号焼土壙



検出中の4号焼土壙 土壙内に灰層がみえる



完掘された4号焼土壙

図版第三八 大師山遺跡 五号焼土壙



西よりみた5号焼土壙



検出中の5号焼土壙

図版第三九 大師山遺跡 五号焼土壙



椚出された焼土壙北半分



同 上

圖版第四〇 大師山遺跡 五号焼土壙



土壙内における焼土の堆積状況



天井部の遺存状況

図版第四一 大師山遺跡 六号焼土壙



北よりみた 6号焼土壙



東よりみた 6号焼土壙

図版第四二 大師山遺跡 E地区



東よりみたE地区



小溝状遺構の検出状況

図版第四三 大師山遺跡 D 地区



上からみた遺物出土状況



遺物出土状態



東よりみたD地区 中央右よりの方形土壙は3号焼土壙

圖版第四五 大師山遺跡 D 地區



土器出土狀態



土器出土狀態

図版第四六 大師山遺跡 D 地区



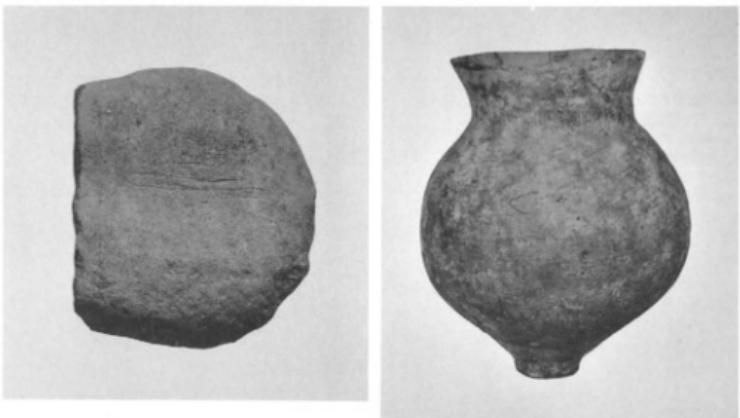
土器出土状態



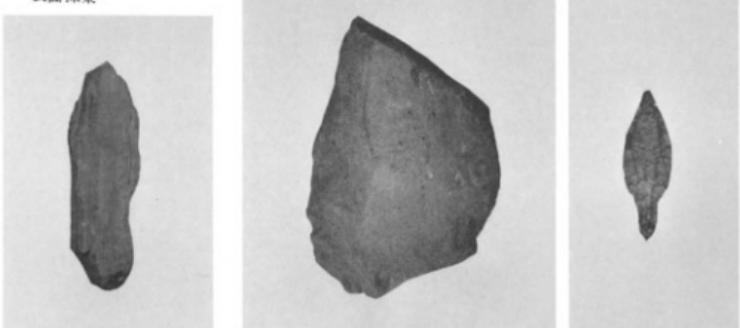
土器出土状態

図版第四七 大師山遺跡 出土土器・石器・鐵器

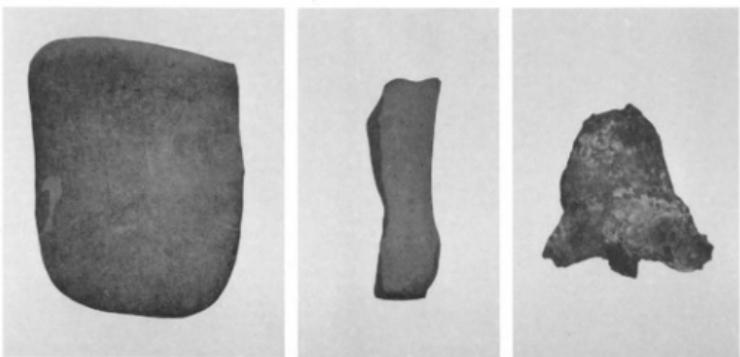
1号住居址



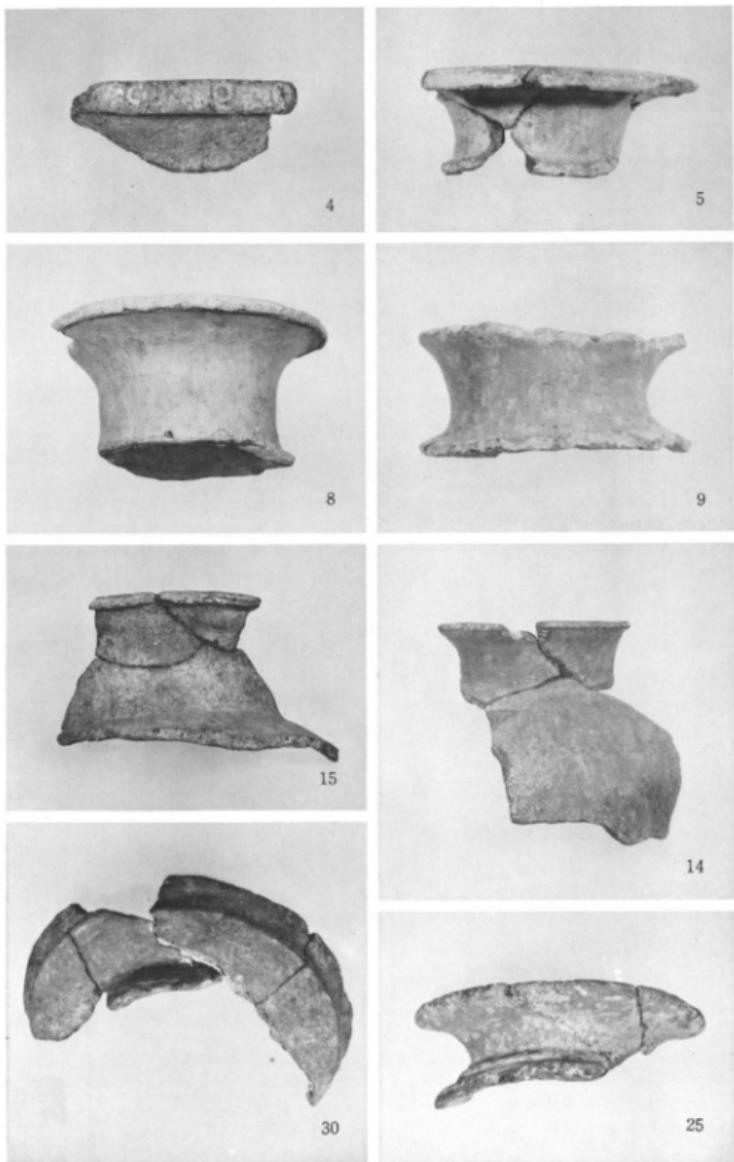
表面採集



2号住居址



圖版第四八 大師山遺跡 出土土器



C 地 区



35



33



35



54



45



78



49

圖版第五〇 大師山遺跡 出土土器

C 地 区



85



9



90



96

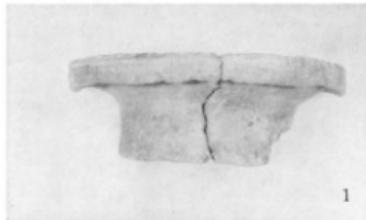


92



99

D 地 区



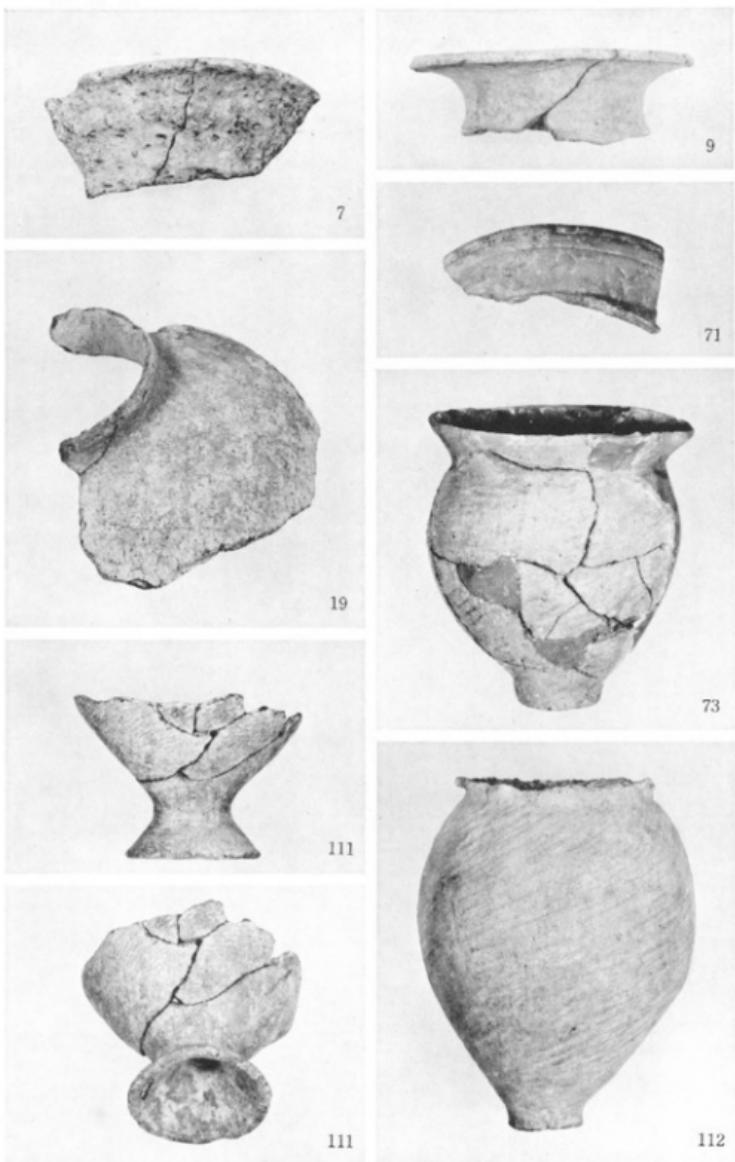
1



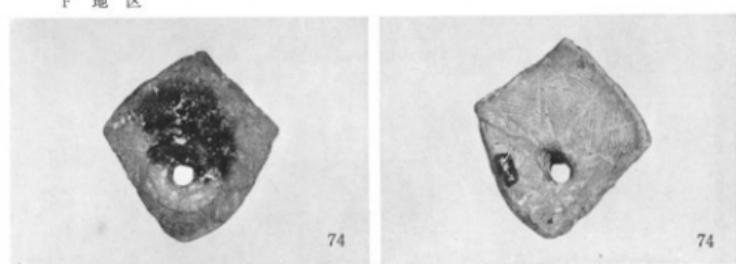
3

圖版第五一
大師山遺跡
出土土器

D 地区



図版第五二
大師山遺跡
出土土器



F 地区



F 地 区



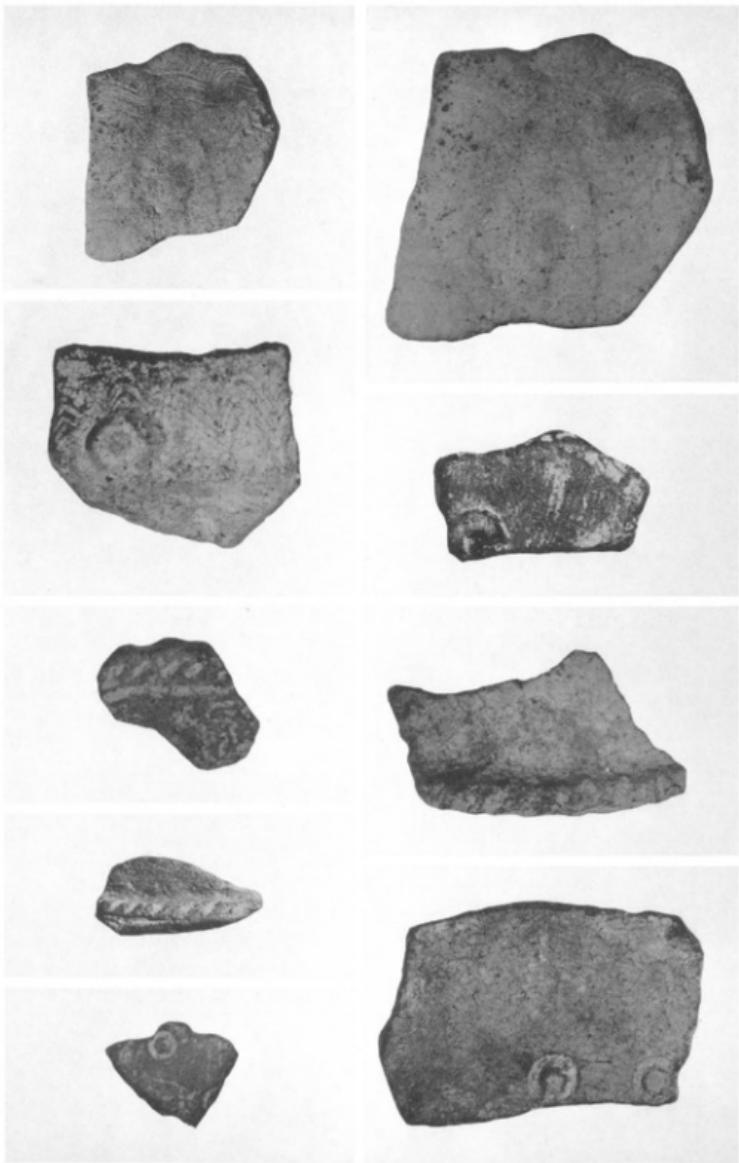
73

80

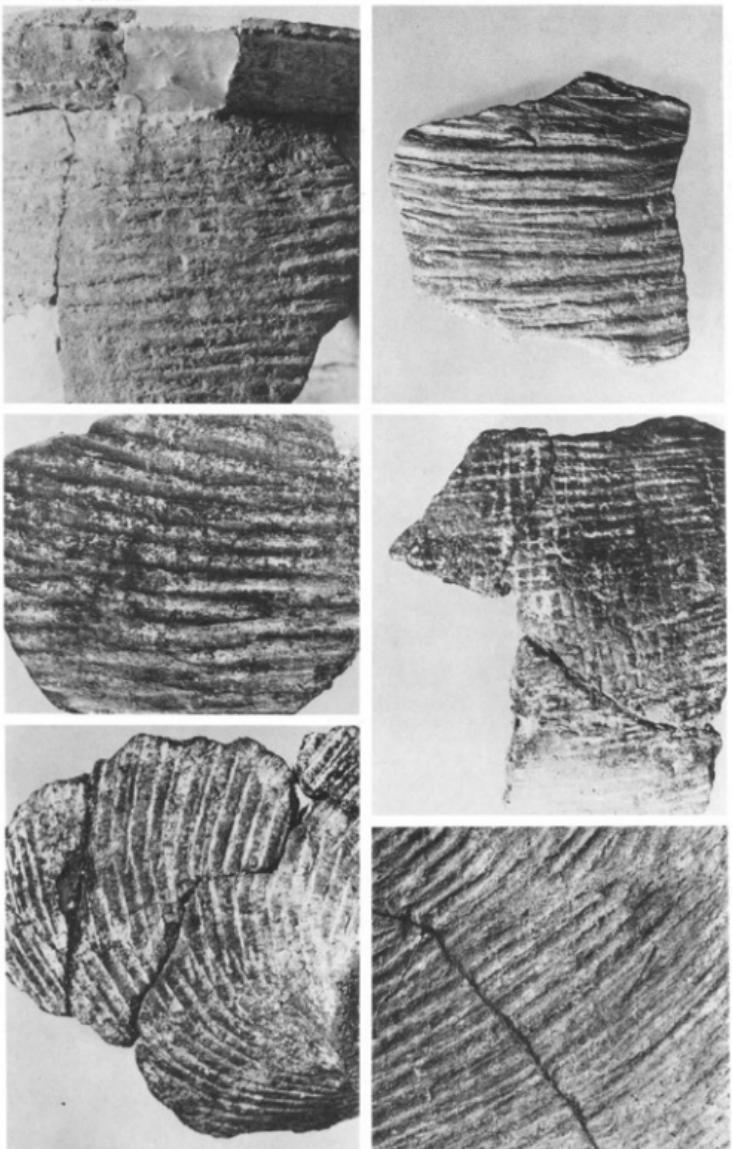
線刻記号文



文様細部

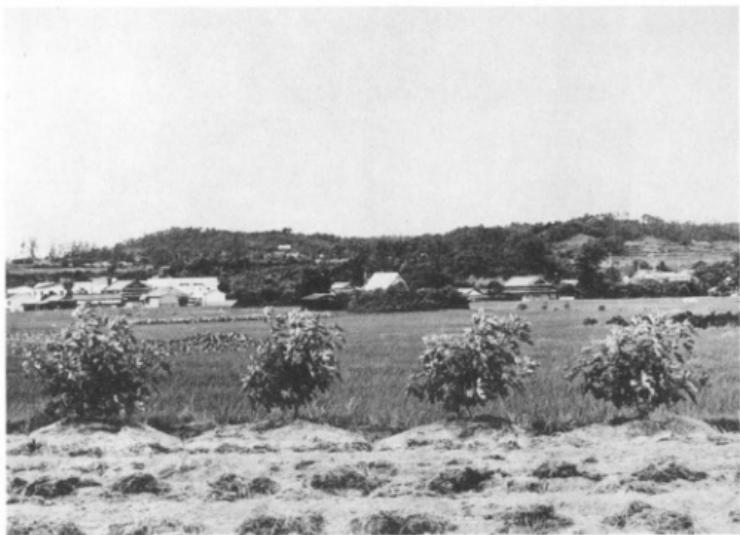


叩き目調整



刷毛目調整





東よりみた古墳群



古墳の分布状況（南より）



2号墳



1号墳



1号墳 奥壁を見る



同上 葬道を見る

関西大学文学部考古学研究 第3冊

河内長野大師山

昭和52年3月31日

編著者 関西大学文学部考古学研究室

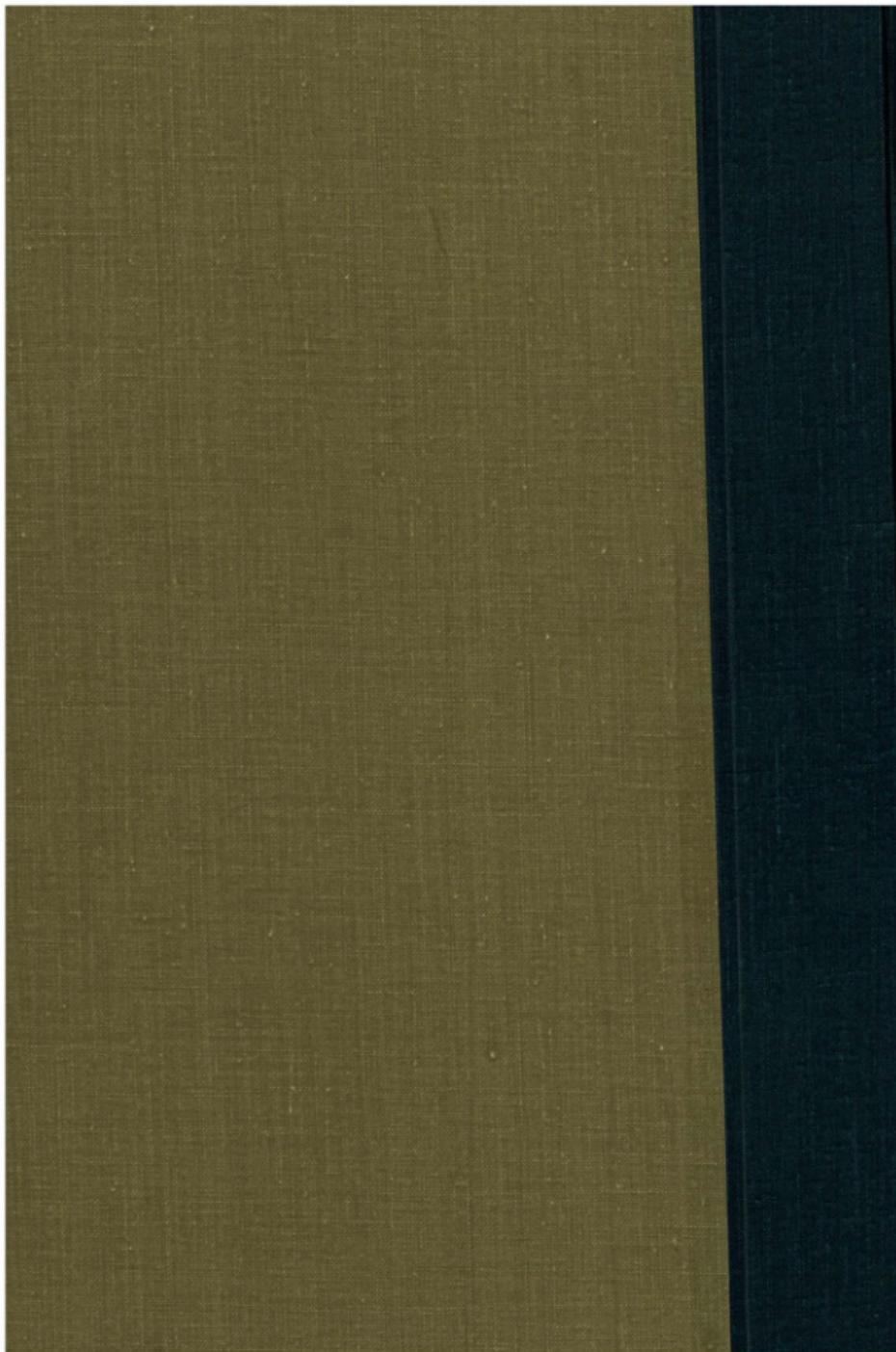
代表 綱千善教

発行所 関西大学

吹田市山手町3丁目3番35号

印刷所 提印 刷 所

大津市松本1丁目8番17号



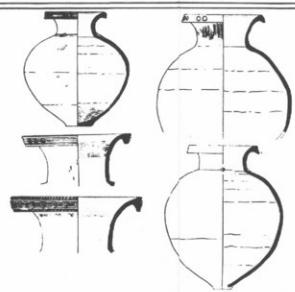
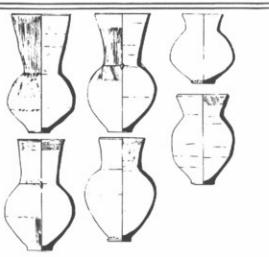
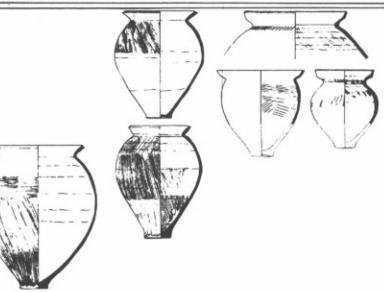
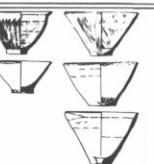
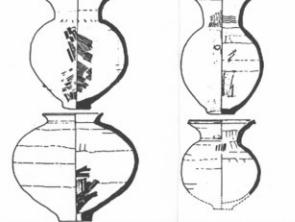
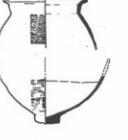
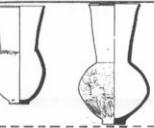
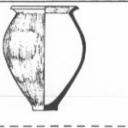
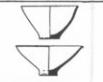
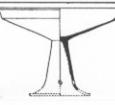
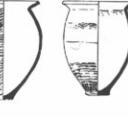
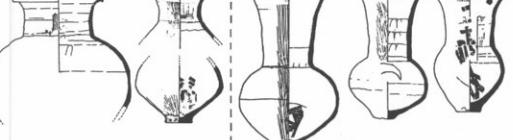
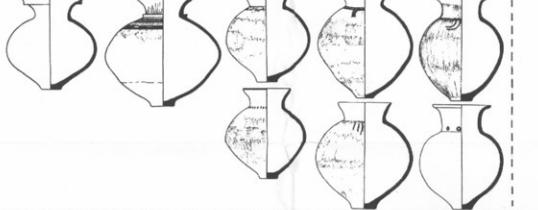
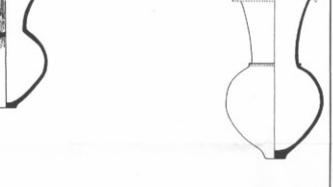
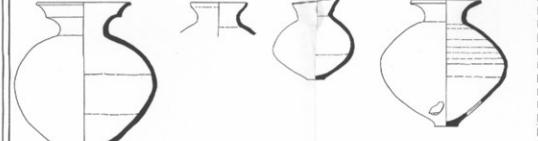
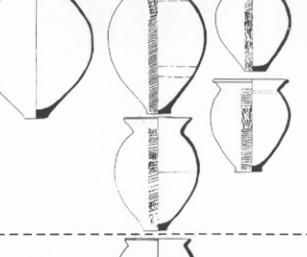
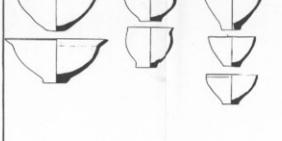
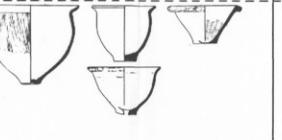
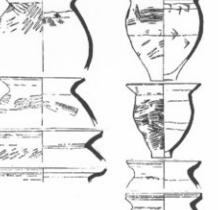
河内長野 大師山 (付表)

畿内第Ⅴ様式細分編年表(試案) No.1

畿内第Ⅴ様式細分編年表(試案) No.2

森岡秀人作図

付表1 畿内第V様式細分編年表（試案）No.1

時相 期對	器種 一括資料	壺	甕	鉢	高杯	器台
後期前半I期	西ノ辻 I 地点式 (河内)					
	池上 J-2号井戸 (和泉)					
後期前半II期	唐古 70号堅穴式 (大和)					
	会下山 F住居跡床面 (摂津)					
後期後半I期	会下山 L住居跡床面 (摂津)					
	西ノ辻 E地点式 (河内)					
後期	池上 J-3号井戸 (和泉)					
	唐古 45号堅穴 下層式 (大和)					
I期	田能 6Y調査区 第2溝 (摂津)					
	西ノ辻 D地点(上層)式 (河内)					
	上六万寺式 (河内)					

付表2 畿内第V様式細分編年表(試案) No.2

時相 期	器種 一括資料	壺	甕	鉢	高杯	器台・手焙
後期 後半 II 期	中ノ田 第2溝 (摂津)					
	平等坊・岩室 4D-G21区 円形ピット (大和)					
	中ノ田 第1溝 (摂津)					
	唐古 45号堅穴 上層式 (大和)					
	布留 山口池地点 4-B区第IV層 (大和)					
	北島池 下層式 (河内)					
後期 後半 III 期	曲川式 (大和)					
	上田町 I式 (河内)					
古墳時代 前期 前半 I 期	上田町 II式 (河内)					